
魔幻の鐘 第二章

水島佳頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔幻の鐘 第二章

【Nコード】

N7662A

【作者名】

水島佳頼

【あらすじ】

十七歳になつたクライドは、夏休みを迎えていた。平和な町が戻ってきたけれど、クライドにはまだ思い残すことがあつて……？ 旅はまだ終わることが出来ない。彼を助けるまでは、まだ。やり残したことを全て片付けるために、クライドは再び旅に出る。『魔幻の鐘 第一章』に続く、ファンタジーの王道要素たっぷりの物語。

第一話 魔幻の町

気だるい午後だった。とにかく蒸し暑い。

部活を終えて、手に持ったネットに入れたサッカーボールを膝で蹴り上げながら、クライドは田舎道を歩いていた。天気は快晴。清々しすぎて恨みたくなってくる。

着ているユニフォームは激しいゲームの末に砂まみれになっていて、白かったはずの靴下はいまや真っ黒になっていた。

ぼうつとした目で前を見る。砂利の敷き詰められた道の上に、陽炎がたちのぼっているのがみえた。腕にしているデジタル式の腕時計を見ると、ぼうつとして現実味がなくなってきた頭に少しだけ現実味が戻ってくる。現在、七月二十四日の二時三十七分。それを確認して、大きくあくびをした。何だか眠い。

帝王との戦いから、既に一年と三ヶ月が経過しようとしている。クライドはもう既に十七歳になっていた。随分前に計った時の身長である百六十七センチから六センチも伸びて、現在では身長が百七十三センチ。それなりに、体つきも成長したと思う。だが、未だに心の中にはハビやレイチエルがいた。

レイチエルの言うとおりにハビを救いに行きたいと思っていたが、ノエルの腕が万全ではなかった。それを理由に、今日まで旅は見送ってきたのだ。

だが。

「あー、今日から夏休みか……」

そうなのだ。今日から、アンシエント学園は長期休暇に入る。仲間たちと話し合った結果、どうせなら夏休みまではここにしようという話になったのだ。そうして、旅立ちをずるずると先延ばしにしてきた。無論、現在のノエルはとくに腕の調子を取り戻している。ボールをけりながら歩き、やがて足を止めた。もう自宅に着いたのだ。泥だらけになったサッカーボールを玄関の隅の方に置いて、

クライドは家に上がった。

「おかえり、クライド。また泥んこになってきたな。シャワー浴びて来い」

半袖のシャツのボタンを上から三つくらい開けながら、父が言った。やはり涼しそうな顔をしている父でも熱いのだろう、当然か。

クライドも挨拶を返し、シャワーを浴びに行く。どうせ浴びるなら、暖かいお湯よりも冷たい水がいい。

ユニフォームをぞんざいに脱ぎ捨てて、クライドは冷水の蛇口をひねった。頭から冷たい水をかぶって、体中についた砂を落とす。

膝やひじをすりむいたが、この町の中なら血の魔力が暴走する心配をしなくていい。それに、傷が治る想像をしたところで傷は治ってくれないのだ。なぜなら、ウォルがこの町に結界をかけて守ってくれているから。この街の中では、魔力は動かない。

しばらくシャワーに打たれてから、バスルームから出る。そして、用意されているタオルを腰に巻きつけて居間に出た。

「やせっぽちなお前は」

苦笑気味に言う父は、この家に来たときに比べたら少しは顔色が良くなったが、まだかなり痩せている。

もう少し太らないとそのうち栄養失調で病院送りになるのではないかと本気で心配になるほど、父は痩せていた。肌蹴た胸元にはくつきりと鎖骨が浮き出ている。鎖骨の下にも、胸骨に当たる部分なのだろうが、そういう骨がくつきり浮き出ている。

骸骨を連想してしまい、少しくらつとした。父は色白だから、そんな連想が怖いくらいに当てはまるのだ。

「父さんに言われたくない。もっとちゃんと食べよ」

「親の心配より自分の心配をしなさい。俺は明日仕事だけど、どうしてもやらなきゃならない用事ってあるか？」

父に向かって言えば、穏やかに笑いながらそんな返事が返ってくる。おまけに質問つきだ。

町に戻ってきてすぐ、父はアンシエントタウンの役場で事務の仕

事をするようになった。町長の厚意により、働かせてもらえることになったのだ。母が家にいる時間が少し増えたが、クライドはこの時期になると部活が忙しいので家に帰ってくるのが遅く、実質的には母に会っている時間は通常とそんなに変わらないように思う。

父はエルフである証の尖った耳を、長めに切り残しておいた髪で隠していた。幸い父はあまり走ったりしない人だから、それだけで一応屋内にいるときは隠し通せているようだ。

町役場ではアンソニーの父が働いている。年齢はクライドの父と同じだと行っていたが、今はクライドの父の方が後輩として色々世話になっているという。

「あ…… ううん、ない。でも、明日旅に出るかも」

返事をすることを今更思い出して、さらりとそういうと、父はうんと悩むような仕草を見せた。それから申し訳なさそうにこっちを見て、苦笑する。

「明後日に出来ないか？」

父のその言葉に頷いて、クライドは笑った。できることならまだここから発ちたくない。また死にかけるような思いをするのなら、少しはしり込みしたくもなるのが当然だろう。

「じゃあ、明日は準備期間ってことで色々買出しに行きたい」

「そうか、じゃあ明日の夜は奮発してちよつと豪華にしようか」

笑いながらいうクライドに、父は笑顔でそう答えてくれた。再会してからというもの、父は何かにつけてクライドの世話を焼きたがる。多分、父は世話を焼かせる盛りだった幼少時代にいなかったから、今になってしまったが父親らしいことをしたいと考えているのだろう。

「いいよそんな。でも、ありがとう父さん」

ありがとう。そんな一言で、父はとても幸せそうな笑みを浮かべるのだ。クライドにとってそれは、些細な喜びだった。また父と別れてしまうのは寂しい気もしたが、大切な仲間がクライドについてきてくれる。

だから、また歩みださなければならぬ。今度は世界平和なんかに関係なく、ただ一人の男を助けるために。ただ一人の少女の願いを聞き入れるために。そして何より、自分が行きたいと願ったから。「何かあったらいつでも呼べよ、クライド。お前には、いつだって父さんがついてるんだ。大事な一人息子だからな」

「やめろよ父さん、もう子供じゃないんだ。よっぽどのことがない限り呼ばないから」

心配性な父に笑顔でそう返し、クライドは二階へ向かう。

帝王との戦いが終わったことをイノセントに告げるため、冬の休暇に一度港町へ向かったことがあった。彼がジャスパーやジェイコブと共にクライドたちから奪った漁船と荷物は、このときに返してもらった。サラやブリジットとも再会し、賑やかな雰囲気や皆で共有したことはまだ記憶に新しい。

その頃はまだグレンもイノセントも肩の怪我が治っていなかった。クライドはブリジットの魔力を借りながら彼らの肩の傷を治してやった。

グレンはアンシエントタウンに戻ってきてから冬になるまで、バスケの試合では必ずといって良いほど卑劣な手を使われていた。いつも彼の肩は体当たりをかまされたりボールを当てられたりして、傷ついてきたのだ。そんな状況をもうクライドは見えていられなかったし、グレンの前では気丈なシェリーが密かに泣いているのを知っていた。

それに、もし彼の腕が動かなくなった場合はピアノやギターが弾けなくなるだろうから、グレンは大好きな音楽もできなくなってしまうのだ。

やはり兄弟だからか、二人とも無茶して傷ついた肩を酷使していたようだった。しかしグレンもイノセントも今はそれほど痛みを訴えるでもなく普通に生活している。ただ、イノセントの肩の傷はかなり酷く抉れていた。傷跡が少し残ってしまった。

「あつたあつた、これだ」

クローゼットから適当に出してきた服をきた後、部屋の奥を引つ掻き回して去年の旅に使ったバッグを探し出す。バッグを見て少し迷つてから、もう少し大きい物を探すことにした。小さくて物が入らないのは困るが、大きい分には問題ないだろう。

昨年の旅では荷物が少なかったせいで色々困ることもあつた。今年には父が働いてくれるのおかげで大分小遣いも溜まったが、それでも無駄に使うわけにはいかないだろう。燃料費もかなりかかることが解つたし、四人分の食費についても考えなければならぬ。それになおかつ、今回は旅のメンバーが一人増えるのだ。

「クライド、友達が来ているぞ！」

旅について思案していると、階段の方から父によばれた。部屋を出て階段を降りると、居間で父と話している少女の姿が見えた。シエリーだ。

シエリーは、人間界では目立ちすぎる鮮やかな赤毛をくすんだ赤に染めていた。染めたのは他でもないクライドで、冬に漁師町に行つたときに彼女に頼まれたため魔法を使って染めたのだ。

シエリーは今、クライドの家からそう遠くない場所にある空き家に一人で住んでいる。あまり他人と関わらない性格だった彼女も、近頃ではやっと近所の人になじんで自宅でお茶会などをやっているらしいと隣の家の人から聞いた。

まさか彼女は、嫌味なおばさん方から何か小言でも言われたのだろうか。クライドはそう思つて、シエリーを覗き込んでみる。

「シエリー、どうしたんだ？」

「っ、クライド」

声をかけると、シエリーはいきなり目を潤ませた。理由がわからないが、何となく脳裏にグレンの顔が浮かんでくる。まさか、シエリーはグレンと喧嘩したのだろうか？

とりあえず、彼女を二階の自分の部屋に連れ込んだ。そして、ベッドに座らせて訳を尋ねてみる。

「どうしたんだよ」

訊ねてみたたん、シェリーは堰を切ったように泣き始めた。クライドは少し逡巡して、クローゼットの隅に重ねて置いてあったハンカチの中から一枚選んで持ってきてシェリーに渡してやった。

「グレンが…… 女連れで」

ハンカチで涙を拭きながら、シェリーはそんなことを言った。相当ショックだったのだろう、シェリーは嗚咽を堪えながら俯いた。

「はあ、あいつが？ 何やってんだグレン」

信じられない。あの一途なグレンが、他の女とつるんでいるなんて。グレンは旅から帰ってきてから、口を開けばシェリーのことばかり言っていた。シェリーの家に足を運んで何度も自作の歌を聴かせては、彼女の喜ぶ顔を見て一番嬉しそうにしていたのは彼だった。それが、何故。

何だか腹立たしい。彼女を振り回すのもいい加減にしろと言ってやりたくなった。酷い環境で育ったせいで元々人間不信になりやすい彼女なのに、よりもよって一番信頼していて一番好きであろうグレンに裏切られたなどといったら、この先クライドたちはシェリーに口をきいてもらえなくなってしまうという可能性だってあるのだ。

机に常備してある電話の子機をとって、メモリーを呼び出した。

微かなノイズが聞こえた後、すぐに呼び出し音がなり始める。三回鳴らすと誰かが出た。電話口に立っているのがグレンの父親でないことを祈る。

「もしもし」

どうやら、本人のようだ。クライドは一瞬何と言おうか迷ったけれど、大きく息を吸い込んでから普通に話し始めた。

「俺だよグレン。ちよつと訊きたいことがあって」

そう言つと、グレンは焦ったように切り返してくる。

「ああ奇遇だな、俺もだ。シェリーのことなんだけどさ」

「……何だ？」

もしかすると、自分を通じて別れ話でもするつもりなのだろうか。それは絶対に嫌だ。誰かの間に板ばさみになって別れ話の取次ぎなんてしたくないし、なおかつ親友の二人に挟まれてそんな話なんて余計にしたくない。

「家に行っても留守なんだよ。お前知らないか？」

困ったような声で、グレンは言った。クライドは拍子抜けして、ちらりとシェリーを見る。シェリーはこちらを見て、また泣き出しそうな顔をした。

「シェリー、泣いてたけど」

「何っ、すぐ行く！ 場所は」

クライドが発した言葉にはまだ続きがあつたのに、グレンは即座に返してくる。かなり心配なのだろう、直接顔を見ていないのに彼が今どんな表情で受話器を握り締めているか解る気がする。だが、彼はシェリーに会って何をいうつもりなのだろう。確認してみることにした。

「その前にグレン、お前何したんだよ」

「俺が？ 何もしてねえよ」

「女と一緒にだつたって聞いたけど」

言ってみれば、グレンはしばし沈黙した。クライドは黙って沈黙に耳を傾けていた。多分、グレンは必死に記憶を手繰って誰と一緒にいたのか思い出そうとしているのだろう。

やがて、彼は口を開いた。

「待てよ？ ううんと、それってもしかしてシヨッキングピンクのことか？」

「シヨッキングピンク？」

それは、学校に行けばグレンの隣をいつも占領している女子のあだ名だった。このあだ名は、いつも彼女がつけている髪かざりの色に由来する。彼女はそれなりに可愛い顔をしているし、もしかするとグレンの好みかもしれない。少ししつこくて、調子の良すぎるところを除けばの話だが。

「あだ名だよ。あいついつもショッキングピンクの髪飾りつけてるし」

「そんなこと知ってる。問題は何であいつと一緒にいたのかだ」

「何でって…… 恋愛相談、だけど」

グレンは別に悪びれた様子もなくそういったが、おそらくショッキングピンクの方としては泣きたい位のことなのだろう。好きな人に恋愛相談をされるなんて、誰だって哀しいと思う。クライドだったら、別の人に相談してくれと相手に頼む。

一口に恋愛相談といっても、色々ある。クライドも少し興味があったので、質問してみることにした。

「具体的には？」

「一ヶ月も遅れたけど誕生日プレゼント渡す場合は、どうしたら一番喜んでもらえるのかとか」

「要するに、惚気か」

「まあそんなところだな。あと、好きな色がわからない場合どうしたらいいかとか、どんなこと言えば喜ぶのかとか」

惚気かと訊ねればあっさりと納得し、なおも話を続けるグレン。

このままだとグレンは延々とショッキングピンクにした相談（お惚気）をリピートしそうなので、一旦話をきることにした。続きはここでしてもらえばいい。というか、惚気られても困るのだが。

「三分以内に俺の家だ、わかったな」

有無を言わず電話を切って、シェリーを見て笑う。するとシェリーはきょとんとしたようにこちらを見てから、電話をちらりと一瞥する。

「グレンは、お前のこと嫌いになったりしたんじゃないからな。安心しろ、すぐに来るはずだ」

二分が経った。流石に三分以内はきつかったかと思始めた頃、一階で父が大笑いしだして驚いた。もしかすると、もう来たのだからか。父に尋ねようとすると、父は笑いながらこう叫んだ。

「おいクライド、グレンだ。なあグレン、髪ボサボサだぜおい。芸

術的だ」

「うわ、本当にもう来たのかよ！」

少し唾然とする。だが、とりあえずグレンに上ってくるように声をかけようとした。しかしグレンが猛スピードで階段を駆け上がったので、結局何もいえないまま彼に道をあけることとなった。

父が言ったとおり、グレンの髪型は芸術的なまでに乱れていた。グレンはそれを直そうともせずに、シエリーと向き合う。

「何、泣いてんだよお前。心配したんだからな」

荒くなった呼吸を整えながら彼が言ったその言葉に、シエリーは顔を上げてまた泣きそうな顔をした。しかし彼女はもう泣かずに、黙って彼の顔を見上げていた。

「あたしだって心配した、グレンが」

そこから先は続けずに、シエリーは顔を伏せた。何と言おうとしたのかは、何となく察することができる。グレンがショッキングピクとくっついてしまったらどうしようとか、そういうことをシエリーは思ったのだろう。

グレンは小さな子供をあやすようにシエリーの頭に手を乗せて、にこりと笑った。

「安心しろ。あれ、ただのクラスメイトだから」

「でも、凄く仲良さそうだった」

「信じるよ、俺を。お前のことどうでもいいと思ってたら、こんな全速力で走ってきたりできない」

完全にクライドをそっちのけで二人の世界に入り始めたグレンとシエリーを見て、安堵した。この調子なら、まだ二人の熱が冷めたりすることはないだろう。

だが、何となく居心地が悪い。一人だけ除外されているように感じるのだ。まあ、まさしくそうなのだろうが。

電話をとって、二人から距離を置くために窓際に寄る。そして、またメモリーを呼び出した。単調な呼び出し音を聞き流し、出てきた誰かに声をかける。

「もしもし、クライド」カルヴァートです。トニーいますか？」
「まあクライド、久しぶりねえ。トニーならいるわよ、ちよっと待って」

アンソニーの家に電話をかければ、出たのは彼の母だった。彼の母がアンソニーを呼ぶ声が、電話の向こうで遠く聞こえる。すぐさま階段を駆け下りてくる足音がして、少し遠いところで会話が聞こえた。誰から？ クライドよ。

「もしもし、どうしたの？」

「今からこれるか？」

「うん、いいよ」

至極あっさり与会話は終了し、すぐに電話が切られた。クライドはもう一軒の家に電話をかけることにして、本日三度目になるメモリーの操作をした。呼び出し音になる前に、相手が出た。

「もしもし」

生真面目な声。一発で解るが、ノエルの声だ。少し驚いた。自分には知らないうちにテレパシーでも使っていたのだろうか。

「今から大丈夫か？」

「空いてるよ。君の家に行けばいいんだね」

「ありがとう」

「それじゃあ、仕度をしてすぐに行くから」

「待ってる」

プツツと小さなノイズを残して、電話が切れる。子機を充電器に戻して、クライドは窓の外を眺めた。暫くぼんやりと外を見ていると、自転車を飛ばす小柄な少年が見えた。それから、この暑いのにまだ長袖を着ている少年も。

アンソニーは小柄ではあるが、既にわずかながらノエルの身長を抜かしていた。確か百六十五センチあると聞いていたように思うが、彼の身長はまだまだ伸びるだろう。おそらく、将来的にはクライドも抜かれる。

ノエルはここ一年の間ずっと、長袖シャツと黒の長ズボンで過

していたような気がする。冬になれば上からコートの類をしっかり着込むし、夏になればシャツは薄手のものになるのだが。

父が何か言う前に、クライドは階段を駆け下りて玄関に向かった。丁度玄関の扉を父が開けたところで、ノエルとアンソニーがこちらに気づいて軽く笑みを浮かべてくれる。

第二話 再開

クライドはアンソニーに自転車を停める場所を指示してやってから、二人を家に上げた。

「上がってくれ。グレンとシェリーがいちゃついで俺の居場所ないんだ」

「あはは、解るよ。最早、僕らのいる場所と二人のいる場所は次元が違うよね。いいなあ、二人は熱くって」

冗談っぽく言ってみれば、ノエルは苦笑してそういった。クライドも苦笑し返してから、玄関の扉を閉めてノエルに向き直る。

「意外だな、お前が人をうらやましがるとは」

そう言ってみるとノエルは一瞬目を見開いて、それから困ったように笑った。

「そうかい？ でもグレンは、僕にないものをたくさん持っているから」

そういうノエルが何処か寂しげに見えて、クライドは何と声をかけて良いのか少しのあいだ悩んだ。

「でも、ノエルだって熱くなるんじゃないか？ あの町に行ったら」「またそういうことを…… クライド、やめてくれないかい」

いたずらっぽく笑いながら、ノエルはやんわりとそういった。その言葉の真意は見抜けないが、クライドは少なくともノエルとサラが両思いだということを確認している。

冬にアンシエントタウンを出た時も、漁師町であの二人は人目もはばからずにいちゃついていたのだ。特に、別れ際に放たれたサラの『ずっと一緒にいて』発言にクライドは度肝を抜かれた。なおかつ、その問いにノエルがにっこりと笑いながら頷いたのだ。勿論、クライドはノエルとサラ以外の全員をかきあつめてその場から撤退した。その後、二人に何があったのかは知らない。むしろ知りたくない。クライドは思っている。

「遠距離、ねえ。遠距離恋愛ってすぐ続かなくなるのが普通だって誰かにきいたことがあるんだ」

ため息をつきながら壁にもたれて自嘲めいた笑いを浮かべるノエル。クライドは啞然として、ノエルを凝視した。今までノエルがこんなに狂おしげな発言をしたことがあっただろうか？

今までのノエルは、あまり恋愛に関心がないように見えた。だが今は、真剣にサラのことを考えているように見える。

やはり去年の旅でサラと会った時に、ノエルの中で何かが少し変わったのかもしれない。虚ろな笑みを浮かべるノエルに向かい、アンソニーが口を開いた。

「ノエル、大丈夫？」

「大丈夫だよ、アンソニー。僕は平気」

「絶対大丈夫じゃなさそう。酸欠で死んじゃいそうな顔だよ？」

「あはは…… そう見えるかい？」

少し会話を交わして、彼らは居間のソファに腰掛けた。クライドもノエルの隣に腰掛けて、苦笑する。

確かに、今のノエルからは気の抜けた炭酸水のようなオーラが感じられる。ノエルらしくないのだ。

「変だよ、僕がこんな発言するなんて」

「安心しろノエル、俺もそう思う」

一体何を安心しろというのか。意味を自分でもはかりかねて、クライドはノエルと一緒に笑った。するとアンソニーがちらりと顔を上げ、階段の方を見た。

アンソニーにつられて階段のほうを見ると、寄り添いながら階段を下りてくるグレンとシェリーが見えた。全く、人騒がせなカップルである。

「クライド、悪い」

グレンは困ったように笑いながらこちらを向いて、ちゃんと彼なりに誠意を込めて謝ってきた。クライドは一瞬だけどうしようか迷った末に、少し棘のある声で言ってしまった。

「ああ、いいけどな。でも、今度から俺の部屋でいちやつくのやめる。こういうの、今回限りな」

「ごめん、わかってるって」

別に、グレンに意地悪を言って楽しいわけではない。彼やシエリーが困る顔を見たいわけではない。ただ、はつきり言って羨ましかった。そこがたとえ他人の家であろうと、関係なく手を握り合って笑える二人の関係が羨ましかった。

どうしてグレンはそこまで求めてもらえるのだろう。グレンはデリカシーがないし自分勝手な行動もするし、何より誤解を生みやすい性格だし、短気だ。

……それでも彼は、優しさや思いやりをちゃんともって誰かを大事にすることもできるし、容姿端麗で頭脳もそこそこ明晰で明るく一緒にいて楽しい人間なのだが。

ああ、そうか。シエリーは、全てを足して一つに統合したグレンが好きなのだろう。

シエリーの、寂しがりやの癖に気が強い所なんかはグレンのタイプなのかもしれない。まあ、グレンの好みなんて今のところシエリーしか思い浮かばないのだが。

クライドの恋愛運はつくづく悪いと思う。今年に入ってから、また振られた記録が更新された。春になってヴァレリーに別れを告げられた時、グレンとノエルとアンソニーは三人で家まで押しかけてきて励まそうとしてくれた。少しは元気になったが、やはり傷は深かった。今でも、時々胸の奥が疼く。いや、もっと前から引きずっている存在もあるのだが。

黒い髪に黒い眼をした、あのメイド服の少女。彼女の存在が、自分を旅に向かわせようとするのだ。まだ彼女に抱いていた感情は忘れていない。空疎でしかなかった、最初で最後のキスの感触も。

「とりあえず、僕らを呼んだってことはもう決めたんだね」

アンソニーの声で我に返り、彼を見る。旅から帰ってきてから今までの間に、彼の声はかつてのトーンから少しだけ低くなったよう

に思う。

アンソニーは思ったより男らしくなった。今では可愛い天使というより、立派な普通の少年だ。人間はほんの一年とそこらでこんなにも変わるのかと実感し、少し残念な気分になる。

可愛くて幼かったアンソニーは、凜々しくなつて少し大人に近づいてしまった。彼が気にしていた薄いそばかすは、よく見ないと気づかない程度になった。

皆、変わってしまった。グレンは以前より大人びて、髪も背も伸びた。折角背が伸びたクライドなのに、彼との身長差は今までとさほど変わらないままなのだ。むしろ今までより差が開いたかもしれない。確か、彼は百八十四センチもあると言っていた。彼の身長はもうこれ以上伸びてくれなくていい。グレンは髪はいつもと同じようにゆるく纏めて左肩に垂らしているが、その長さは既に臍の辺りまで届きそうなほどであった。

ノエルもわずかに背が伸びた。そして帝王戦で破損した眼鏡をシルバーの細いフレームの物に新調したので、旅を始めた頃の野暮ったかった印象はかなり改善された。加えて、今までよりも反射神経がよくなったように感じられる。二ヶ月間のあの旅で、散々死にそうなる目にあつてきたからなのだろうか。極め付けに彼は作り笑いが一段と上手になったから、つられてクライドも誰かの作り笑いを見抜くのが上手くなったと思う。自分は、どうなのだろうか。作り笑いを見抜く以外に、何か変わった部分はあるのだろうか？

背が伸びた。夏休み明けには最終学年になる。エルフの血を生かして運動には力を入れている。歌を歌うことも嫌いではなくなった。そして今まで以上に正義感が増したように思う。他には？

「クライド？」

不思議そうな顔でシェリーにそういわれて、はっと顔を上げると四人が全員でこちらを凝視していた。クライドは慌てて言おうと思つたことを思い出して、口にした。

「ああ、明後日ここを出ようと思うんだけど」

すると、グレンはすぐに頷いてくれた。シェリーもだ。アンソニーは一瞬だけ迷ったように悩む仕草を見せて、ノエルは相変わらず穏やかな表情のまま暫く何も言わなかった。

「うん、明後日だね。解った、仕度しとく」

「今回の旅は、どれくらいかかりそうなんだい？」

アンソニーが承諾してくれたあと、ノエルがそう訊ねてきた。クライドは少し考えてから、ノエルだけでなく全員に向けて答えを返した。

「まだ解らないけど、確実に二ヶ月以上はかかると思う。学校に行つてないノエルやシェリーは良いとして、グレンとアンソニーは新学年の始業式には確実に間に合わないって思っておいてくれ。降りるなら今だぜ」

そう言ってみると、案の定反発された。

「降りねえよ！」

「降りないよ！」

二人の声が見事に重なって、声が重なった二人は顔を見合わせて笑いあっている。高低の差はあるにしろ、同じような調子で同じような大きさを発された声だったので、今の声は聞いてて綺麗だったと感じた。

クライドも小さく笑って、ノエルを見た。

「今回も、ノエルは医務担当で頼む」

「誰かさんたちに対しての教育的な指導の方も、任せておいて」

そっぴいながら頷くノエル。視線の先には、先ほどからずっと寄り添ったままのグレンとシェリー。

今の瞬間、何故かノエルがとても悪戯っぽい笑みを漏らしたように感じた。いつもの大人びた笑みではなく、アンソニーのように子供っぽくて無邪気な笑み。クライドは、ノエルもそんな表情ができるのかと少し驚いた。

「裏っぽい情報収集が必要なら、酒場とか普通に入れそうなグレン頼む」

「了解」

クライドの容姿では、酒場になんて入る前に夜討ちに遭いそうだな。年相応かそれより一歳か二歳上に見られるクライドだが、大人に間違われたことは一度もない。おそらく、この華奢な体格が悪いのだろう。

グレンだったら演技も上手だということが去年の旅で証明されているし、頑張れば実年齢が二十歳以上に見えないこともない。それに、喧嘩に強い。

「明日、買出しに行ってくる。各自、必要なものはちゃんと揃えといてくれ」

クライドはそう告げて、各々の顔を見た。グレンは頷いて、それにあわせてシエリーも頷いたが、アンソニーは頷かなかった。

「一緒に行こう？ だって、僕また余計なもの買いそうだし」

「ああ、そうだな。じゃあ、明日うちに来いよ」

アンソニーに向かって頷いてやると、今度はノエルが声をかけてきた。

「僕も一緒に行っていいいかい？ こういうのは、仲間と重複する持ち物があったりしたら無駄だからね」

「あー、そうか。じゃあ俺も行こうかな」

彼の発言に対し、グレンも何度か頷いてクライドを見てくる。クライドは少し迷った後、笑って頷いた。このあとシエリーも混ざったので結局は全員で買出しに行くことになったのだが、それはそれで楽しそうだ。

それからクライド達は、日時を決めた。町にあるショッピングモールに、昼前に集合ということにしておいた。

そして、最初にアンソニーが帰った。シエリーが帰ると言い出したのを、グレンが送るといって二人とも帰っていった。ノエルは暫くクライドと話をして、それから笑みを残して帰っていった。

父は台所でリンゴを剥いていたし、祖母は部屋にいた。それでもクライドは、何となく独りになってしまったような寂しさを少しだ

感じていた。

第三話 明日に向けて

まだ日が登る前に目が覚めてしまった。カーテンを開けてみると、蒼くくすんだ半端な闇の中に疎らな明かりがついた家が並ぶ町並みが見える。こんな早朝から犬の散歩をしている老人がいたのも見えた。

買出しに行くのは昼前だから、まだまだ時間はたっぷりある。暇だから勉強でもしようと思うが、なかなかはかどらない。かといってこんな時間に居間に下りていったら、祖母や母を起こしてしまうかもしれない。

「まいったな」

小さく呟いて、ベッドの上に仰向けになる。折角再び寝ようとしているのに、もう眠くならない。天井に張ったポスターのロックシンガーと目が合うが、当然話し相手になってもらえないものでもない。彼は二十二歳の青年だ。昔は四人組のバンドを組んでいたのだが、二年ほど前にソロデビューした。グループでいたころも好きだったが、ソロデビューしてから彼はとにかく色々なことをやるようになった。小説を書いたり、詩集を出したり、写真展を開いたり、絵本を出版したり。アニメの声優までやるようになった。

彼のような自由な大人には、凄く憧れる。やりたい事が一つではないなら、全部やってしまおうという魂胆が好きだ。

ポスターを眺めていたら、何となく彼の歌が聞きたくなった。枕元を漁ってCDを取り出して、プレーヤーにセットする。そしてアップテンポのロックを控えめなボリュームで聞きながら、そっとその歌を口ずさむ。

と、携帯電話がなった。これは母に買ってもらったものだ。町の中から出ることはあまりないが、冬に港町に行った時は二時間に一回のペースで電話がかかってきたことを覚えている。ちなみに、着信音は天井に貼ってあるポスターのロックシンガー・カルツァーフ

ランチエスカの曲にしてある。

「もしもし、クライドかい？」

「こんな時間にどうしたんだ？」

カルツアの着信音を止めて通話ボタンを押せば、聞こえてきたのはノエルの声だった。ノエルは携帯を持っていないから、いつも自宅の電話を使ってクライドに電話をしてくる。

何かあったのだろうか。しかし、それにしても声が平常で落ち着いている。

「暇だったんだよ、何となく本にも飽きたんだ。だって、もう自分の部屋の本は大抵読み尽くしちゃったからね。こんな早朝に電話したら君の家族に迷惑がかかるかと思ったけど、よく思えば君は携帯を持っていてると思ってる」

それをきいて、まずは安堵した。何だ、何か嫌な事件が起きたわけではないのか。だが、問題はノエルがこんな時間に電話をしてきたことだ。彼らしくないといえれば彼らしくない行動だったが、意外に思ったり拍子抜けしたりする前に思ったことがある。

「俺だけを、確実に起こすつもりだったんだな？」

家族に迷惑がかかるかどうかは心配しておいたくせに、ノエルは肝心なクライドのことについて何も触れなかった。

別に起こされても良いが、ノエルが寝ている人を起こしてまで話をしたいという態度にでるのは初めてなので何となく訊ねてみたかった。

「違うよ。三回鳴らして出なかつたら切ろうと思ってたんだ。少し話さないかい？」

「ああ、俺も暇してたところ」

いつもそうなのだ。ちょっと暇になったり誰かと話したかったりすると、まるで魔法のように彼と偶然出くわしたり電話がかかってくる。この町の中では、魔法など使えないと言っているのに、いや、町の外に出たとしてもこんな魔法は使えないだろう。ノエルは、出会ってから数年たった今でも謎の部分に濃い不思議な人だ。

ノエルは、いつもどおりの穏やかな優しい声で外の様子を語り始めた。まだ日も昇らない街の、少し涼しい空気や散歩している早起きな老人の話。もしかすると、その老人は先ほどクライドが見た犬の散歩をしていた人かもしれない。

ノエルはなおも話を続ける。

「今、妹が僕の部屋で寝てるんだよ」

「へえ、ノエルってロリコンだったのか？　しかも相手は妹」

ちなみにこれは本心で言った訳ではない。ノエルにはサラがいるのだから。

ノエルも当然これを本心だと受け止めなかったようで、電話の向こうで軽く笑っている。

「あはは、何言ってるんだい？　人聞きの悪い。昨日の夜に僕の部屋で調べ物をしながら寝ちゃったんだよ」

「そうか、ノエルの部屋って図書館だもんな」

「去年君のおかげで増えた本棚には、図鑑がたくさんあったんだ。妹は植物図鑑を枕にして寝ていたよ」

ノエルの妹は今年で十三歳になる。ノエルとは四歳ほど離れていて、身長はシェリーと同じくらいだ。シェリーもこの一年で背が全く伸びなかったわけではないが、まだ百四十センチ台後半らしい。そんなシェリーと同じくらいの身長なのだから、ノエルの妹も小柄な方に入るのだろう。

クライドと出会った頃、ノエルは終始仏頂面だという印象だったが、しかしそんな仏頂面のノエルも、妹の前では自然に笑顔を見せていたことを思い出す。

やはり、ノエルもサラの兄に負けず劣らずシスコンなのだろうか。漁師町でサラに会ったとき、何故かクライドまでサラの兄に睨まれることになったので少し怖かった。

「ノエルは自分の妹、好きか？」

どんな答えが返ってくるか楽しみにしながら、訊ねてみた。するとノエルは、穏やかな声でこう答えた。

「勿論、たった一人の妹だから。だけどあの子はどうなんだろう。僕よりも彼氏に夢中だから。この年齢でもう彼氏がいるんだって、あの子。本当、目が離せないよ」

「へえ、お前はオクテなのになあ」

「からかいも含めてそういつてみる。暗に『早くサラに告白しろ』といったつもりでもあったが、ノエルがそこまでクライドの言葉を深く理解してくれたかどうかはわからない。

「余計なお世話だよ、クライド。僕だってその頃は」

「心なしか哀愁漂う声で言われて、クライドは必死に記憶を手繰って十三歳だった頃を思い出そうとした。丁度ノエルに出会った頃だ。

「……お前、大学時代に彼女なんかいたか？」

「何でもない、忘れて」

「いたんだな、彼女。そう思ったが、深くは追求しないことにした。確かにあの頃は、ノエルも何と云うか角が取れていて丸かったように思う。それから一年くらいしてから少し鋭角的になったということは、その頃彼女と別れたのかもしれない。

「そうそう、聞きたいことがあって」

「ノエルの声と一緒に、電話の向こうで紙をめくる音がした。本を開いたのだろうか？ それとも、ポスターのようなものを開いたのだろうか。」

「僕は、どういう経路で旅をするんだい？」

「話の内容からすると、ノエルは多分地図を見ながら電話して来ているのだろう。クライドは少し考えて、それから苦笑した。兎に角、漁師町のリヴェリナに向かう事だけを一心に考えていた。

「決めてないな」

「じゃあ、こうしよう。いいかい、とりあえずリヴェリナに出る。それから、そこでイノセントからもう一度ハビさんの居場所を聞いてみよう。ハビさんがいる、人工魔力をつくっている本部に辿りつけるかもしれない」

「クライドが答えると、ノエルは電話の向こうでそういった。姿は

見えないが、多分地図の上にその骨ばった指を沿わせながらそう言っているのだろう。ベッドに腰掛けて、右肩で電話の子機をはさんで、右手で地図を持って。

そして、左手の人差し指で海の上をなぞっているのかもしれない。航路を考えながら、リヴェリナ沖をぐるぐると指でなぞるノエルの姿が妙にリアルに想像できた。

冬に、イノセントから一度人工魔力の結社について訊ねてみた。けれど、彼はそれを知らないようだった。次に会うときまでに情報を仕入れておくと言っていた彼だから、もしかすると何か有力な情報を掴んでいてくれるのかもしれない。だが。

「もしも、イノセントがまだ情報を手に入れてなかったら？」

「船旅だね。また二ヶ月くらいかけてあの島まで行こう。アルカンザル・シエロ島…… だったかな」

「そうだな。そうしたらレンティーノさんに何か聞けるかもしれない。セルジさんもいるし」

何故、ノエルがいるとこんなにも簡単に全てが片付いてしまうのだろう。自分がそういうことに関しての能力を欠いているのか、はたまたノエルがそういうことに関しての能力に長けているのか。おそらく両方だ。

「じゃあ、このことはまたお昼頃に皆で話そうか。そういえばクライド、今音楽でも聞いているのかい？」

「ああ。カルツアの曲。知らないか？ 結構有名なんだけど」

不意にノエルに訊ねられ、クライドは即答した。

訊ねてみたものの、ノエルは知らないのではないかとクライドは思った。ノエルは滅多にロックなど聴かない。聴くのはおそらく、グレンの家に遊びに行ったときだけだろう。

「聞いたことないよ。今度貸してくれないかい？」

ノエルの答えに、クライドは驚いた。珍しいこともあるものだ、ノエルがロックを聴きたがるなんて。ノエルはいつでもピアノの演奏やオーケストラの曲を聴いていたイメージがあったので、少し驚

いた。

「いいよ。珍しいな、ロック好きになったか？」

「趣向が変わったんだよ、グレンに感化されて。勿論今までどおりクラシックとかジャズも好きだけどね」

電話の向こうで、ノエルはおそらくいつもどおり穏やかな笑みを浮かべているのだろう。クライドは少し笑って、ほんの少しだけCDプレイヤーの音量を上げた。

しばらくとりとめのない話をしているうちに、ノエルの部屋で少女の声が聞こえた。

おはよう、ねえ誰と話してるの？ こんな時間に何してるの？

ちゃんと寝たの、お兄ちゃん？

声の主は間違いなくノエルの妹だ。

「妹が起きたよ。そっちはどうだい？」

そういわれて、クライドも耳を澄ませてみた。すると、下の階で誰かが歩き回る足音がした。祖母ではないだろうから、父か母のどちらかだろう。父は寝起きがよくないほうで二度寝も三度寝もするから、多分この足音は母だ。

「母さんが起きたみたいだ」

「それじゃあ、そろそろ切ろうか。また後でね、クライド」

短く返事を返すと、それきり受話器は無言になった。クライドは携帯をぱたんと折たたみ、枕元に放置する。

何だかやることがない。暇つぶしに、放置した携帯をもう一度手にとって開く。待ち受け画面には、微笑む五人組の写真。自分とグレンたちだ。ちなみに、撮影したのはノエルの妹だ。

ゲームでもやろうかと思ったが、何となく気分が乗らないので携帯を開いたり閉じたりを何度も繰り返した。

ベッドに仰向けになって、天井のポスターを眺める。何を考えるでもなく、しばらくはぼうつとしていた。しばらくポスターを眺めてから、今度はうつぶせになってカルツアのCDジャケットを見る。それも飽きて、CDケースを開いて歌詞カードを取り出した。恋愛

や友情、時には世間に対する不満。そんな物事について綴られた歌詞を、隅から隅までじっくり読む。

一番最後のページには、編集者やレコード会社の社員の名前が書いてある。その中に、カルツアの個人的な友達の紹介などもあった。クライドはそれを何気なく眺め、思わずある一点を凝視した。ハビィグアルディオラ。カルツアの親友で、身長が二百八センチの超長身。アルカンザル・シエロ島で喫茶店のマスターをやっている。黒髪のナイスガイ……

このハビィグアルディオラという男は、かなりの確率であのハビィなんじゃないかと思う。身長が二メートルを超えるカフェのマスターなんて、そんなに沢山いそうにない。しかもこのカフェが、アルカンザル・シエロ島限定なのだ。

「クライド、起きてるの？」

ハビィについて色々考えていたところで階段の方から母の声がして、クライドの思考はそこで途切れた。

第四話 準備中

その日の昼前になって、クライドはノエルやグレンたちと合流した。色々な店を回り、自分の生活用品や食料を買う。保存の利く食料を、全員の割り勘で用意した。主に乾麺や米などを選んで買ったなるべく日持ちするものを選べば、それだけ食料を買う頻度が減る。それが食費の節約につながるのではないかと思ったのだ。

「他に用意するものは？」

「一通り揃ったよ！ 見て見て、今回はこれ持っていくんだ」

尋ねたクライドに返されたアンソニーの言葉は、とても嬉しそうだった。アンソニーはクライドに、去年の旅で使ったものよりまた一回り大きくなったバックパックを見せてくれた。

「重くない？」

「大丈夫！」

シェリーの言葉に、笑顔で頷くアンソニー。最近、シェリーの言葉から男っぽさが消えてきているとクライドは思う。

シェリーはバイトをして金を稼いでいたらしく、食料はそっこのけで着替えやら洗面用具やらをたくさん買っていた。やはり、女子とはそういうものなのか。

暫く歩き回って、そこらのファストフード店で適当に昼食にする。昼食はグレンが奢ってくれた。

昼食を終えるともうやることなくだったので、ノエルの家に行くことになった。ノエルの家で、今回の旅の最終的なルートを決める予定だからだ。

「隠れ家に全員集合ってのも久しぶりだな」

「そうだね」

グレンとノエルの会話をききつつ、クライドは歩いた。行く手に町立図書館が見えてくる。ノエルの家は、この近くだ。

のんびりと歩いていると、やがてノエルの家の前に着いた。ノエ

ルは玄関の扉を開けて、クライドたちを中に入れてくれる。

「あがって」

にこりと、いつもの笑顔を浮かべながらノエルが言った。こうしてみると本当に普通の穏やかな笑みなのに、時々どうしようもなく彼の笑みを怖いと感じるのは一体何故なのだろう。

「お邪魔します」

クライドはノエルの笑みについての思考を止めて、彼にそう挨拶をする。

例によってグレンは自分の家同然にノエルの家に上がりこみ、どんだん家の奥へ入っていく。アンソニーも彼と同様に、はしゃいだ声を上げつつ家の奥へと消えていく。

後に残ったのはこの家の住人であるノエルと、礼儀をちゃんとわきまえているクライド、そしてシェリーだった。

「まったく、グレンたちときたら……」

シェリーは呆れたように呟きながら、ノエルを見上げてにっこりと笑う。その表情は、出会ったときの彼女とは別人であるような気がするほどの柔らかさにあふれていた。シェリーはクライドのように、ちゃんと「お邪魔します」と挨拶をした。

ノエルは笑顔で頷きながら、小さく苦笑しながらため息をついている。

「親しき仲には礼儀ナシ、ってね。グレンに、まるで格言のように言われた言葉だよ」

古書の匂いが満ちる、ノエルの自宅。このまま廊下を進んでリビングに出て、そこを突っ切って大きな扉を開ければ、ノエルの自室であるミニ図書館に出る。

ノエルは先に行った二人を追う気がないのか、そんなに急ぐこともせずに普通のペースで歩き始めた。クライドも、ノエルに続いてゆっくりと歩いた。

「今回の旅は、山越えにヘリコプターを使ったらどうかと思うんだ」
唐突にされたその提案に、クライドは驚いた。

そうだ、ヘリコプターというものがあつたのだった。この町から外に出るために、最善の移動手段である。しかし、

「そんな金ないだろ？」

前回旅に出た時も、ちらりとヘリコプターの存在が頭を掠めたが、金がかかりすぎるので移動手段としては使えないとクライドは判断したのだった。

今回は、かなり金を節約しなければならない。船の燃料や自分たちの食料、それから宿代も考えなければならないだろうからだ。いくら何でも、都会で野宿するわけには行かないのが現実だ。

「荷物と同じ扱いだから、送料が格安だよ」

笑いながら、ノエルはそういった。

「母さんが郵便局で働き始めたんだ。だから、リヴェリナの郵便局の屋上まで手紙と一緒に乗せていってくれないかなって頼んでみた」
そうしたら、許可が出たんだよ。ノエルはそういって、足を止める。

クライドも、何事かと思つて足を止めた。ノエルはゆっくりと振り返つて、いつもの穏やかな笑みを浮かべる。

「ただ、乗り心地は保障できないって」

乗り心地が悪くても、別に良い。一ヶ月近くもかかって平原や森を越え、やっと町にたどり着いた時、クライドたちはぼろぼろだった。

おまけに、あの山にはデゼルトが出没する可能性があるのだ。シエリーを連れた状態でデゼルトと遭遇することは避けたい。

前回デゼルトに会ったときには、狙われたのはアンソニーだった。メンバーの中で一番小さくて弱そうな、アンソニーだった。今回のこの旅には、アンソニーよりさらに小さくて弱そうに見えるシエリーがいる。

帝王との戦いの時、シエリーはかなり強かった。しかし、今の彼女は魔力の消えたただの人間だ。そんなシエリーにデゼルトが向かってきた場合、太刀打ちする術がないだろう。

シェリーが万が一傷つけられるようなことがあったりした場合、グレンがデゼルトを刺してしまうことだってあり得るかもしれないとクライドは思ったのだった。

元々短気なグレンだが、帝王との戦いでシェリーを傷つけられた時の怒り様はすさまじかった。もしも今回シェリーが傷つけられたのなら、グレンは最悪の場合デゼルトと殺し合いを始める危険性だつてある。

尤も、これはシェリーに限った話ではない。傷つけられる相手が誰であろうと、グレンはきつと暴走する。

それに、シェリーは女の子だ。いくら気が強いとはいえ、恐らく彼女の体力はノエルにすら勝らないだろう。そんな彼女に延々と山や平原や森の中を歩かせたりするなんて、可哀想だとクライドは思った。

「あつ、お兄ちゃんお帰り！」

その声に、ふと思考に沈んでいた意識を持ち上げた。すると、ノエルの前に見慣れた少女が立っている。ノエルの妹だ。名前はセシリア＝ハルフオード。

彼女はノエルのような不健康な細身ではなく、痩せてはいるが痩せすぎではない。兄であるノエルに顔立ちが少し似ていて、特に目の形は彼の目にそっくりだ。白い肌に鶯色の髪、そして鮮やかな緑色の瞳。二の腕の辺りまで伸びた髪は真っ直ぐで、一本一本が細い。その整った容姿と明るい性格に惹かれる男子は多く、彼女は学校でかなり人気がある。アンソニーの友人の中にも、何人かセシリアに告白した少年がいるという。無論、彼らは全員振られたらしいのだが。

流石に、クライドの学年にはセシリアに言い寄る男はいないようだ。クライドの周りの男子には、年下より年上を好む傾向が強く見られる。クライドの知る限り、グレンは唯一の例外だ。

「ただいま、セシィ。彼はいないね？」

ノエルが発したのは、質問と言うより確認に近い調子の問い。な

おかつ、満面の笑みというおまけつきだ。それはもう、背中に冷や汗が伝うのを感じる位の極上の笑み。

クライドは思わず、その場から数歩下がった。

「い、いないよ？ もう、お兄ちゃんつてば」

クライドと同じようにノエルから数歩距離をとりながら、心なしか引きつった顔と声でセシリアは言った。そして、ノエルから満面の笑みが引くのを見てようやくほっと胸をなでおろしている。

クライドはシェリーと顔を見合わせて、咳いた。

「……ノエルの妹、大変だな」
「同感」

シェリーはひきつった笑顔でうなずく。部屋の温度が、何故だか数度下がってきたような気がしてきた。

「何か言ったかい？」

そう言いながら振り返ったノエルは、再び満面の笑みを浮かべている。

「なんでもない、なんでもない」

クライドは即座にそう返し、ノエルが前を向き直った時に軽くため息をついた。いつもそうだ。ノエルは感情を口にしないで、なおかつ笑顔で怒るから怖い。

クライドたちはセシリアと別れ、ノエルの部屋を目指した。部屋に着くと、珍しくグレンが本を読んでいるのが目に入った。読んでいる本は、カルツァ「フランチエスカの詩集である。ちなみにクライドもこの本を持っている。

カルツァは本当に色々な才能に恵まれていると思う。しかしクライドが思うに、グレンも確実にカルツァのように多才だ。もしもグレンがデビューしたら、第二のカルツァと呼ばれるようになるのだろうか。

「ノエル、この本貸してくれないか？」

ノエルに気づいたグレンは、本から顔を上げてそういった。声をかけられたノエルはにこりと笑い、頷いた。

どうしてだろう。怒っていない時のノエルの笑顔は、どうしてこんなにも普通なのだろう。さっきの笑顔も今の笑顔も、全く同じ彼の笑顔なのに。

「珍しいね、君が読書なんて」

ノエルは本棚に指を沿わせ、分厚い本を引き抜いて開く。外国語で記されているようだが、今のクライドにはこの本がどういう本なのかは解らない。町の外に出れば、たちまち読めるようになるだろう。

エルフの血は便利だと、クライドは改めて思った。

「ひとついいかい、クライド？」

ノエルは、分厚い外国語の本に視線を落としたまま言った。クライドは彼のほうを見て、それから部屋の中央においてあるテーブルに荷物を置いて椅子に腰掛けた。

「リヴェリナには何泊できるんだい？」

本から少しの間だけ視線を上げて、クライドを見ながらノエルは問いかけてきた。クライドは少し悩んだが、すぐに視線を本に戻したノエルに目を向ける。

「イノセントに情報を聞いたら早く出て行きたいけどな。でも、最低でも三泊はしていきたい」

そう言ってみると、ノエルは本から視線を上げて数回頷いた。そして、軽く微笑んでくれる。

クライドは、ノエルとサラのことを考えていた。長らく会えずにいた二人がやっと再会できるのだから、短期間ですぐに出発ということにはできない。そうしたら、去年の旅の時と同じように彼女は泣くだろう。

「それじゃあ、会議始めよう？」

アンソニーのその言葉で、全員が部屋の真ん中のテーブルに集まった。クライドはテーブルから荷物を降ろし、ノエルから地図を借りてテーブルの中央に広げる。

都会へ向かうというのは、首都へ向かうということで良いのだから

うか？ クライドはそうグレンに訊ねると、グレンは頷いてくれた。イノセントに情報を貰えなかった場合は、真っ直ぐに首都を目指すと言うことにする。

首都で情報が得られなかった場合は、あの島国へ行くと言うことで全員が合意した。島国に着いたら、まずはカフェ・ロジエッタを確認したいと思う。セルジヤレンティーノから話を聞いても良いが、まずは本人がいる確率が一番高いところへ向かうのが当然だろう。

今回の旅では、徒歩が最も有効な移動手段になる。都会へ向かうためにあの漁船を使ったら、田舎より警備が厳しい都会の港には入れないだろう。ばれて逮捕される可能性が高い。

逆にアルカンザル・シエロ島に向かうのであれば、旅客船を使わずに漁船を使った方が旅費を節約できる。

去年の冬頃にパスポートを取ったので、今回の旅では身分証を偽造しなくても国外に出ることが出来る。モルニア大陸の国境ではパスポートを提示すれば大概の国へ行くことが出来るので、ふらりと国外に出て情報収集するのだって簡単だ。しかし、大陸の外に出たらどこへ行くにも厳重なボディチェックを受けなければならず、わずらわしいのだと父から聞いた。父は、母に出会うまでよく旅行したといていた。

クライドは椅子から仰け反って大きく伸びをした。一応、これだ明日からのことは大体決まった。ノエルを見ると彼はすっと立ち上がって本棚群の奥へと消え、それからすぐに戻ってきた。

「午前十時、郵便局の屋上にいけば良いよ。昔から、町外へ出る時に郵便局のヘリコプターを使うのは裏技だったらしいんだ。局員さんたちの間で僕らのような人間のことは暗黙の了解になっているらしいから、隠れたりしなくても大丈夫だよ」

ノエルはそういって、元のように席に着いた。クライドは何度か頷き、それから旅費の確認をした。

「……体重、五十キロ以上あるよね？」

クライドは一瞬何を聞かれているか解らなかった。しかしノエル

の話によると、このヘリコプターを使う場合は郵便物と同じように重さで“送料”が決まるらしい。

「俺はある」

「俺も」

クライドとグレンはそういった。大体、身長が百七十を越しているのに体重が四十キロ台だなんていったら、体型はノエル並みのがりがりになると思う。クライドは普通に運動部だし、相変わらずの細身ではあるものの、筋肉のつき方はノエルよりしっかりしていた。そう考えると、絶対にグレンの体重が五十キロを下回っていることはありえない。彼はこのメンバーの中で一番重いだろう。身長もあるし、筋肉のつき方だってクライドよりもっとしっかりしている。

「外見で解るかもしれないけど、僕はない」

ノエルは言った。確かに彼の言うとおり、外見からして五十キロも体重がないことは解りきっている。

アンソニーを見ると、彼は少しだけ苦笑した。

「僕はだめ、ほんのちよつとオーバーしてる。これって送料グラム単位？」

「端数は切捨てで良いって。ちよつと驚いたよ、せいぜい僕と同じくらいだと思ってた」

「ノエルと同じ!？ 僕そんなスリムじゃないよ」

二人の会話を聞いてクライドも少し笑った。最近どんどん男性らしくなっているアンソニーだから、体重が五十キロ以上あるといってもクライドは驚かなかつた。彼は身長もどんどん伸びているし、体つきもより子供時代を脱してきた。

クライドは、ここにいる四人の男子の中ではいちばん体脂肪率が高そうなのはアンソニーだと思うが、それでも彼はごく普通の体型だ。貧弱な男が自分を入れて約二名いるため、必然的にこうなってしまうのだと思う。

彼も多分、将来はグレンのような長身で筋肉質な男性になるのだ

るう。クライドは恐らく、このまま小柄で標準より痩せ気味の大人になるのだと思う。ちょうど父のように。

「シェリーはあるよな？」

グレンがからかうような口調でシェリーにそういった。シェリーはみるみるうちに頬を上気させ、グレンの背中をばしばしひっぱたく。

「ないっ！ ないから！ 馬鹿グレン！」

グレンはそんなシェリーの様子を楽しんでいるのか、腹を抱えて笑った。笑いながら冗談だと連発するが、シェリーは聞く耳をもたずにグレンをひっぱたき続けている。

「五十キロに満たない場合は、体重に百をかけて。五十キロ以上ある場合は、体重から五十引いて千かけて」

ノエルがそうだったので、クライドは荷物の中からメモ用紙とペンを取り出して計算を始める。

グレンがメモ用紙を一枚欲しいといっただので、メモ帳から一枚破ってグレンにも渡してやった。彼の分のペンはノエルが用意したようだ。

「いいかい、シェリーと僕はこれが送料になる。僕らはこのままだけど、君達はさっき出した数字に五百を足して。ちなみに、単位はカルドだよ（注：一カルドは日本円にして一円程度。千カルドで一デラ）」

彼に言われたとおり、クライドは送料を計算した。単純にノエルが四十五キロ（もつと軽そうだが）だと仮定して計算すると、四百五十カルドという数字が出てくる。

しかし、問題はクライドの送料だった。クライドの体重は五十四キロなので、四デラという大金に五百カルドのおまけがついてくる信じがたい。あまり裕福ではないクライドの家庭では、誕生日プレゼントですら上限が五デラなのだ。

クライドは学校に通わなければならないし、部活もあるのでバイトは無理だ。まだ親に育ててもらっている身なのだ。だから、親に

頭を下げ、金を工面してもらおう以外に方法はない。

「うわ、何だこの金額。ノエルたちと俺達、ケタが違わないか？」

グレンはメモ帳に必死に計算をし、素っ頓狂な声を上げている。

だが、グレンは良いだろう。二ヶ月間の旅を終えて帰ってきたあと、グレンは急に毎月貰う小遣いの金額が倍になったらしいからだ。ちなみにクライドが貰う小遣いは、毎月一デラだ。グレンの家では、毎月六デラもらえるようになったと言う。

「身体が貧弱だとかこういう良いことがあるんだね」

ノエルは呑気にそっぴいながら、本を読み始める。シエリーは長い髪を首の後ろで一本にまとめて結ぼうとしていた。

アンソニーは何を思ったか財布を取り出し、テーブルの上にあけた。かなり耳障りな音をたてながら、大量の小銭が散らばる。アンソニーはその小銭を一枚一枚数え、数え終わると満面の笑みを浮かべた。

「すごい！ 全部小銭で払えるよ！」

……それはちょっと、郵便局側の人に悪いと思う。そう思ったが、口にしないでおく。

「リヴェリナにいたら、漁船で寝泊りすればいいよな？」

小銭をかき集めて財布に戻す作業をしているアンソニーを見ながら、グレンが言った。

その言葉に、ノエルとアンソニーが頷いた。クライドは頷こうとしたが、グレンの隣に座る赤毛の少女をちらりとみた。彼女はどうか？

これこそ男女差別と思われるかもしれないが、女の子を船室の硬い床で寝かすのはどうかとおもう。それに、あの地域には蚊が多い。シエリーだけでも、別の場所で睡眠を取ってもらいたいと思うのがクライドの心情だ。

「シエリー、部屋は違っても僕らと同じ船で寝るってちょっと嫌じゃないかい？ それに、あの船室は寝心地がすごく悪いんだ。

船底の倉庫は蒸し暑いしね。どっちを選ぶにしても快適さは保障で

きないよ」

クライドが気にしていたことを、ノエルが代弁してくれた。シェリーが何か答えようとしたとき、アンソニーがいきなり立ち上がる。驚いた全員の視線をばつちり独占したアンソニーは、こう言った。

「ねえノエル！ サラランチに電話して、シェリーを泊めてもらえばいいと思うよ」

「僕もそう思っていたんだ。それじゃあ、電話してみるね」

ノエルはそういって、机の方へ歩いていった。机の上には電話の子機があり、ノエルはそれを持って戻ってくる。そして、もといた場所に座ってノエルはメモリーを呼び出した。

暫く、誰も何も言わなかった。やがて、電話の向こうに懐かしい少女の声が響く。しかし、何を言っているのかは解らない。

ノエルはいつもの微笑をもっと優しげな微笑に変え、流暢なウィフト語で何か話している。

二人の会話は数分続いた。電話の向こうからは、絶えず嬉しそうな声が聞こえてきている。ノエルも終始嬉しそうにしていたが、最後に少しだけ表情を曇らせた。そこで、二人の会話は終わる。

「良いつて。サラ、君が来るのを楽しみにしているって言っていたよ」

ノエルはそう言って、子機をテーブルの上に置いた。シェリーはノエルのその言葉に、ほっとしたように微笑んだ。

「本当に？ ああ、よかった」

これで、全てが何の問題もなく進むはずだ。資金の問題は少し苦しいが、何とかなるだろう。

明日の朝までに各々仕度を済ませるということで全員の意見が一致し、クライドは全員に別れを告げて隠れ家から家に帰った。

第五話 前夜祭準備

家に帰って自室でくつろいでいると、窓からスーツ姿の金髪が見えた。父が帰ってきたのだ。何故か両手に普段の倍くらいある買い物袋を提げて、父は満面の笑みで窓辺のクライドを見上げる。クライドは笑顔を返し、すぐさま階段を降りた。

両手がふさがっている父を察じて、クライドは玄関まで父を出迎えにいった。ドアを開けてやると、父は買い物袋を重そうに持ち上げながら家の中に入ってくる。そして、キッチンまでその袋を運んでいった。袋からは、今夜の夕飯になるであろう食材がちらほらと覗いている。中でも目を引いたのは、ステーキ用の分厚い肉だ。きつと高かっただろう。

「どうしたんだよ、それ」

そうきいたところで、今夜の夕飯の材料だという答え以外は返ってこないという予測は既に出来ている。

父は案の定クライドに向かって笑みを浮かべて、楽しそうに言う。「言ったる、今日の夜は豪華にするって」

そういう父は楽しそうであったが、どこか寂しげでもあるとクライドは感じた。

きつと父はクライドを町から出したくないのだろう。それでも父がクライドを止めないのは、父なりにクライドのことを思っていてくれているからに違いない。父は、クライドの自由を尊重してくれているのだ。

「……ありがとう」

何だか急に照れくさくなり、父に聞こえないようにとこっそり呟いたその言葉。しかし父は聞き逃さなかったようで、クライドの髪をぐしゃぐしゃと撫でてきた。いつもなら抗議の声を上げるが、今はじっとしていたい気分だった。

明日、ここを発つ。だからせめてもの親孝行のつもりで、今日だ

けは父に抗わないようにしよう。これが最後になってしまいかもされないだなんて思いたくはないが、そうなる可能性も十分にあるのだ。

クライドはそう思い、父が飽きるまでずっと撫でられたままでいた。散々かき乱されたせいでクライドの髪は絡まったが、父の満足そうな笑顔を見ることが出来て少し安心する。

やはり、父のいなかったあの十数年の間は大きかった。クライドは、今更ながらにそう思ったりした。

「アリシアは？」

「母さんなら、まだ帰ってきてない」

何気なく訊ねてきながら、買い物袋の中から真っ赤に熟した大きなリンゴを取り出す父。クライドは答えながら、リビングのソファに腰掛けた。

父はリンゴの皮を器用にナイフでむきながら、随分と昔に流行したラブソングを鼻歌で奏でたりしている。

「いつ帰ってくるんだ？ アリシアじゃなくて、お前は」

鼻歌をやめた父は何を思ったのか、剥きかけのリンゴから垂れ下がる一本につながった皮を切り離れた。そのまま剥き続ければ、リンゴの皮は綺麗に一本につながったままだっただろう。だから何となく切ってしまったのは勿体無いと思った。

三分の二ほどしか剥かれていないリンゴを片手に、父はクライドを見る。

「解らない。ハビさんが見つかるまで、ずっと山の向こうにいるつもりだけど」

とはいったものの、ハビが見つかったから自分に何ができるのかは見当も付かない。多重人格というものの自体についてよく解らないのだからそれも仕方ない。ノエルならそういう精神的な問題についての分野にも長けているだろうから、彼に聞いてみるのが得策かもしれない。

「なあ父さん、俺……」

クライドは、父に全てを話した。何をしに行くのか、誰を探しに行くのか。死んだレイチエルの話だって、今まで話さないようにしていたが今日はちゃんと話した。

逃げてはいけないと思った。

現実から目を背けて逃げたまま、さらにこの町から逃げ出すような真似はしたくなかった。

父は黙って聞いていた。剥きかけのリンゴから汁が滴って、父のやせ衰えた大きな手を伝って流しに落ちていくのを見ながら、クライドは訥々と全てを伝えようとした。

「彼を放っておけない、その気持ちはよく解る。だがクライド、お前はその正義感の為に危険な目に遭うかもしれないということを解っているか？」

深くうなずいた。前回の旅だって危険の連続だった。それでも無事に帰ってくる事が出来たのは、ひとえに仲間のおかげだった。

「『ハビさんを救いたい』と言った、お前の気持ちは本物だろう。だが、その気持ちが恩とか友情とかそういうものからくるのか、助けなければならぬという義務感や正義感からくるのか。お前は、自分でそれがどちらなのか解っているか？」

一瞬言葉に詰まった。クライドが答えないことを見越していたのか、父は続けてこういった。

「お前は正義感が強いからな。通常の人には正義感だけでは動かないだろうが、お前ならそれができる。だから心配なんだ。お前は、彼を助けて何をしたい？」

彼を助けて、何をしたい？ あまり具体的に考えたことは無かった。ハビがああの人に戻ってくれたなら、それでいいと思っていた。

クライドは彼に、カフェ・ロジエッタでこの先ずっとあの穏やかな笑顔を見せ続けて欲しいと願っている。もう少し時間があれば、親しい関係になれたかもしれなかった。しかしそれは、多分今からでも遅くない。

部屋にある机の引き出しには、今も手紙と一緒にアンティークの時計が入っている。しかし壊れていた時計は、手先の器用なアンソニーによって、数週間前から再び時を刻み始めていた。クライドが貰った時計を直すためにだけにアンソニーは時計の構造を勉強し、自分の持つている時計を解体して組み立てなおしたりと苦労してくれたようだ。ありがたいと思っている。

あの時計をハビに返して、手紙の返事をしようと思う。この町ではエフリッシュ語を読解することができないが、内容はすっかり覚えていてる。

君はひとりじゃないんだ。そういつた彼は、心の中で苦しんでいたに違いない。あの手紙の、あの言葉を綴った瞬間のハビは、きっとカフェ・ロジエッタに集結した人間の中で誰よりも孤独だったのではないだろうか。

ひとりじゃないんだ。その言葉の裏には、『僕を一人にしないで』という意味があつたのかもしれない。

「今度はちゃんと信頼しあえる関係になって、ハビさんが何も考えずに笑っていられる空間を作ってあげたい」

そういうと、父は笑った。穏やかなその微笑は、何故だかクライドのことを弟だと言ったときのハビの微笑に重なって見えた。

「そうか」

父はぼつりと呟き、リンゴの皮むきを再開した。三分の一ほど残っていた皮はものの数秒でどんどんその面積を狭めていき、ついになくなった。父は剥いたリンゴを器用に手の中で半分に切り、片方をクライドに渡してくれた。

「母さんにもアリシアにも話せなかったことがあるんだ」

父はクライドの隣に座りながら、リンゴをかじる。しゃくつと美味しそうな音がする。クライドもリンゴを齧りながら、父の方を見る。甘くて美味しいリンゴだった。

視線を使って言外に話を促してみると、父は真っ直ぐ前方をみつめながら言った。

「俺は、エルフの牢獄に囚われていた。何の罪でその牢獄に入ったのかは、詳しく説明しなかったな？」

リンゴを口いっぱいにはおぼつていたので返事をする事ができず、クライドはただ頷いただけに留まった。父はそんなクライドを見て微笑し、話を続ける。

「本当は、俺は大罪人なんだ」

「なんでだよ」

すぐにリンゴを飲みこみ、クライドは父に問いかけた。この家族思いの父が、クライドや母や祖母のことを考えもせずに罪を犯すなんて考えられない。何か大きな事情があったのだろうか。

「クライド、お前がその証拠なんだ」

そういうと、父はリンゴを一口齧る。クライドは黙っていた。いや、何もいえなかったのだ。自分が証拠？ 一体、どういうことなのだろう。

「エルフの社会には『異種との交流は認めない』という法律がある。俺は法律に背き、人間界に出て行ってアリシアと恋に落ちた」

父はそう言ったが、クライドは半信半疑だった。人間界にでていったきり戻ってこなければ、罪に問われることもないだろう。ならばどうして、父は十三年もの間牢獄に囚われていたのか。

「ある日、一人のエルフがこの家に来た。そいつが『親父が病気だ』って言うから、エルフの集落へ向かった。親父は『空中庭園』と呼ばれる島にいて、その集落に向かう途中にウォルに出逢った。それが、今から十四年前のことだ」

父が失踪した、あの日。クライドはたった三歳の子供だった。クライドは父を神妙に見つめ、話の続きを待った。

「親父は本当に病気で、俺を見て嬉しそうにした。だが、集落の長がやってきて俺は取り押さえられた。そしてそのまま、牢にしょっぴかれた。」

一体どうやって人間と暮らしていることをかぎつけたのか。それを知る術はもうないと父は言った。噂によると祖父がうっかり父の

ことを役人に漏らしてしまったせいだといわれているが、問題の祖父はすでに他界しているらしい。

「人間と一緒に暮らすことの何が悪いんだろうな。未だに解らない」
父は言う。とても寂しそうな表情だった。クライドは手元に残っていたリングを口に押し込み、しゃりしゃりと租借する。人間とエルフと一緒にいてはいけないなんて、そんな理不尽な考え方はクライドにだって理解できない。

「牢獄に入ってしまったら、ちゃんと食事を貰えた。だがある時外が騒がしくなって、いつのまにか看守さえいなくなっていて……」
牢の入り口には魔法をかけてあるから、俺の血の魔法を使ってもあけることはできなかった。声を出してみたら、隣の牢の男から返事が返ってきたりしたな」

「その男と一緒に脱獄ってできなかったのか？」
「できなかった。そいつ、いつのまにか返事をくれなくなっただけだから」

死んでしまったのだろうか。クライドはそう思った。父はにこりと微笑んで、リングの汁で汚れた指をその辺りにあったタオルで適当にぬぐっている。

「空腹で死にそうだった。母さんやアリシアやお前の顔が浮かんで消え、浮かんでは消えて…… 死ぬんだったって思った。そうしたら、あいつが現れた」

父の顔に、少しの希望が見えた気がした。父にとっての救世主が、その人物なのだろう。しかし、誰なのかは解らない。だが、何となく見当は付いているような気がした。

「あいつ？」
「ウォルだ。ウォルが半透明の姿で現れた。俺はウォルに再会できたことで、少し元気を取り戻した」

話によると、その後も父は十三年間にわたりウォルに助けられ続けたらしい。冬になると平均気温がマイナスになるその集落で、ウォルに貰った紙やボロ布などを燃やして父は暮らしていたと言う。

着火には、魔力を持ったエルフの血を使ったらしい。父は血をわざと暴走させて、寒さを凌ぎ続けていたようだ。

また、あまり美味しくは無い食料も提供してもらえたという。そんなものだけで、よく十三年も命を繋いでいられたとクライドは感心した。

「暇だったから日記を書いていた。というか、日記でもつけておかないと時間の感覚を忘れるんだ。それから、冬になって燃やすものがないなくなるだろ？ 古い日記から順に燃やしていったんだが、そうすると段々自分の過去が消えていくみたいで怖かったな」

父は今でも日記を書き続けている。ほかの事に関しては割りと三日坊主である父だが、日記だけは必ず毎日つづっている。長い間しづづけてきた習慣というのは、なかなか抜けるものではないのだから。

「お前が俺を呼んでくれて、俺は魔法のかかった牢獄から抜け出すことが出来た。あの牢獄から脱獄する方法がただ一つだけあるとすんなら、それは大切な人に呼んでもらうことなんだろうな。お前が俺にそうしてくれたように」

父はにこりと柔らかく微笑んだ。クライドは微笑み返し、胸元の青い水晶を軽く握り締めた。父は席を立ってリングの欠片を口に押し込んで、手を洗いにキッチンへ向かう。

「なあ父さん、そのお守りって俺も造れるのかな」

「お前も半分エルフだから、一応出来るだろうな。ただし、ひとりのエルフが作ることが出来るお守りは一つだけだ」

たったひとつしか作ることが出来ないお守りを、父はクライドに託してくれた。それは、父がクライドに全幅の信頼を置いてくれていると言うことに他ならないだろう。誇らしく思うと同時に、少し照れくさくなった。

「頑張つてこいよ、今回の旅も。お前が選んだ道なんだ、最後まで諦めるな」

「解ってる。父さんも、母さんとはあちゃんのことしっかりサポー

トしてやってくれよ」

父と言葉を交わし、クライドもキッチンに向かった。母と祖母が留守の今だから、帰ってくるまでに夕飯を作っておくという親孝行をしてもいいと思ったのだ。明日から暫く会えなくなる。もしかすると一生会えなくなってしまうかもしれないという可能性もあるが、それは考えたくなかった。

料理は上手な方ではない。しかし、レシピどおりに作ればなんとか形になるだろう。クライドは母のエプロンをつけ、父が買ってきた材料を物色する。

母のエプロンにはレースやらフリルやらがついているので、こんなものを着ている光景は間違ってもグレンやアンソニーにだけは見せてはいけなないとクライドは思った。あの二人に見せたら、彼らは夜が明けるころまでずっと笑い続けていそうだ。ノエルに見せたら、何だか酷い勘違いをされそうで怖い。それはそれで物凄く嫌だ。

「お前、エプロン似合わないな……」

「こんなの似合うって言われたら俺、ショックで寝込むよ」

しみじみと呟く父に向かって言い返し、クライドはとりあえず肉から調理し始めることにした。電子レンジを活用すれば調理できるものもあつたが、それはあとにまわす。出来るだけ、出来立てのものを食べて欲しいからだ。父も手伝ってくれるようで、部屋から自分のエプロンを持ってきて腕をまくった。クライドと父はもう殆ど身長が変わらないので、隣に立っていて妙な感じが未だにする。

いつのまにか、自分も知らないうちに父と同じになっている。もう父の手助けが殆ど要らないぐらいに成長した。それが何だか可笑しかった。

実質的に、父と暮らし始めて一年と少ししかたっていない。幼い頃の記憶は殆ど無いから、クライドに父がいた期間は一年と少しということになる。それなのに、自分にはもう父の手があまり必要ではない。少し寂しかった。父も同じ気持ちなのだろうか。クライドは少しでも感傷に浸り、それからすぐに考え直す。

……そっか。俺は、もう子供じゃないんだ。

第六話 前夜祭本番

父に言われ、肉は後から焼くことにした。先にサラダなどの冷めでも良い物から作り始めることにする。父と話しながら料理の下ごしらえをしていると、祖母が帰ってきた。今日の祖母はやけにご機嫌で、足が悪いのに踊るようなステップを踏みながらリビングのソファに座る。

「おかえり、母さん」

「ばあちゃんおかえりー」

クライドと父が声を合わせて言うと、祖母は満面の笑みを浮かべた。何かいいことがあったのだろうか。

「ただいま、ハーヴェイ、クライド。今日はおまえたちが夕飯を作ってくれるんだね？」

「ああ、そうだよ。ばあちゃんは休んでいていいからな」

嬉々とした声で言う祖母に、クライドは笑顔でそう返した。今は穏やかでゆったりとしたイメージの祖母だが、昔はかなりやんちゃで向こう見ずな女性だったと言う。今の嬉しそうにはしゃぐ祖母を見たら、その話はやはり本当なのかとちらりと思った。

しかし、思ったことはすぐ口にし、正義感が強いいため悪は絶対に赦さず、喧嘩もよくしたらしいという祖母の姿をクライドは未だに上手く思い描けない。出会った頃のシェリーみたいな感じなのだろうかと思ったところで、何となく納得できた。もしかするとエルフの女性は、全員がこんな感じなのだろうかと思わずにはいられない。「クライド、大きさが不揃いだぞ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらクライドを見る父の手元にある材料は、すべて均等に切られている。上端と下端で大きく幅が違う根菜などをのぞいては、それがもし授業中だったら家庭科の教師が歓声を上げて周囲の生徒を呼び集めそうなほど上手に切られていた。

クライドはと言うと、所々がみじん切りになっている。改めて自

分の料理の下手さを実感した。というか、もしかしたら自分は不器用なのかもしれない。

父は切った野菜を金属製のざるに入れ、ざるごとなべに入れた。こうすると、湯きりする時に楽だと父が言う。軽くボイルした野菜を皿に盛り付けて、父は上機嫌で鼻歌を奏で始める。曲は、カルツァ「フランチエスカの名曲だ。最近のベスト盤に収録されていた曲だが、父はわざわざ最新の曲よりも少し古い曲を好んで聴いている。「クライド、スープ作ろう。グラタンも。食べたいものを気分で買ってきたから、合わない組み合わせになるかもしれないけど」

父は軽やかな動作で、骨と皮ばかりの指を使ってグラタンのパツケージを開けた。これは手軽にグラタンを作ることが出来るように売られているもので、これを使えばホワイトソースを作るところからグラタン作りを始めなくてもすむ。

クライドはスープの材料を探してくる。カルヴァート家では薄い味が好まれる傾向にあるが、クライドは濃い味のスープも好きだ。粉末のコンソメをみつけて、クライドはそれを持ってきた。スイートコーンの缶詰も開けて、父にやりかたを教わりながらスープを作ってみる。

こうして父と息子で料理をするなんて、最初で最後になるかもしれない。無事に帰ってきて、父と一緒に料理をすることなんてもう二度とないだろうとクライドは思ったのだ。不思議と、穏やかな気持ちになる。精一杯孝行して、精一杯優しくして、そして旅に出よう。

スープを完成させたクライドがグラタン作りを手伝い始めると、玄関で物音がした。母が帰ってきたようだ。クライドはエプロン姿のまま玄関へ行き、ドアを開ける。

「おかえり、かあさん。エプロン借りてるから」

「あら、クライド…… その格好、似合わないわね」

仕事から帰ってきたばかりの母は、上品なスーツに身を包んだまま笑いを浮かべる。クライドは肩をすくめ、母を家に入れてからド

アを閉めた。

「ありがと、褒めてくれてるんだろ」

「ふふ、そうよ」

母は嬉しそうに笑い、キッチンの父に歩み寄ってキスを交わす。何度見てもなれない光景だ。すっかり二人の世界に入ってしまった父と母からそっと目をそらすクライドを見て、祖母がくすくすと笑った。母はしばらく父と話したりしていたけれど、スーツを着替えるために部屋に戻った。父の頬や唇には、母の口紅がうつすらと付いている。

「愛される幸せってやつだ。お前にもじきにわかる」

口紅で汚れた口許を吊り上げ、満悦した顔で目を細めながら父は言う。クライドはため息をつき、苦笑して父の隣に戻る。時々父はこうやって、クライドをからかう。こんな風な子供っぽさをもった父は、本当は自分より年下なのではないかとクライドは思う。

「さて、料理再開だ。クライド、その塩とつてくれ」

クライドは頷いて、少し高い位置に仕舞ってあった塩を取り出した。父はレンジとガスコンロとオーブンの間をいったりきたりして、せわしなく働いている。クライドも出来る限り手伝うことにして、オーブンの中に入っているパイの焼け具合を監視したりした。

やがて全ての料理が出来た頃、母はテーブルを美しく装飾してくれた。テーブルだけ見れば、まるでテレビで見た大金持ちの家だ。あまり裕福とはいえないクライドの家では、こんなに料理を食べることは殆どない。だが、この料理は余らないだろう。クライドと父の手作りと言うことで、母も祖母も喜んで食べてくれるだろうからだ。

「ハーヴェイ、エプロンをとりなさい」

「あ。忘れていたよ」

祖母と父がそんな会話をし、父はエプロンを風呂場の近くにある洗濯機に投げ込んだ。クライドもエプロンを脱ぎ、父を真似て洗濯機に向かって投げる。見事にエプロンは洗濯層の中へ消えた。見て

いた父が、軽く拍手してくれた。

「もう、二人とも……。ものを投げるのは悪いことよ」

そういう母だが、顔は笑っている。クライドは定位置の椅子に座り、軽く謝る仕草をして見せた。いつもクライドは、テーブルの中央から見て左下の席に座る。

父は何を思ったか、酒とグラスを持ってきた。ワインボトルもあるが、ビール瓶もある。銘柄の解らない酒もあった。ワインのコルクを抜き、ビール瓶の栓を抜きながら、父は子供のように笑う。

「クライドの実り多い旅を願う、祝い酒だ！」

いいつつ、クライドに泡だったビールをよこす父。クライドがそれを受け取ると、母の厳しい目がじろりとクライドを睨む。母はクライドを睨みながらも、父に対して文句を垂れる。

「だめよあなた、クライドはまだ十七なんだから」

「いいだろ、今夜くらい」

父の柔らかい声が聞こえた。母から目をそらして父を見ると、父はどこか寂しそうな笑顔を浮かべていた。母のほうを向き直ると、彼女は震えるようなため息をついてクライドから目を逸らした。

「クライド、旅先でお酒のんだりしちゃだめよ」

「解ってる」

母の言葉に同意し、クライドは初めて酒を飲んだ。初めて飲んだビールは苦く、とても苦く、とにかくこの世のものとは思えない味がした。クライドは思わず咳き込み、それでもグラスの中身を全部飲み干した。

大人になつたらこんなに不味い飲み物を飲むようになるのだろうか。子供のうちにこれを飲んではいけないと言われているのは、きっとこれを飲むと不純に成長してしまうからなのだろう。イノセントやマーティンなどはその典型で、子供の頃にビールを大量に飲んでいたら違いない。そこまで考え、クライドは苦笑した。やっぱり、自分はまだ子供だ。空想主義の、現実を受け止める能力がまだ足りない子供なのだ。

空になったグラスをテーブルに置くと、物凄い勢いで体の血が巡るのを感じた。アルコールが身体に入るところなるのかと、クライドはぼんやりと考える。頬が火照って熱い。頭から酒を引っ掛けられたことはあるが、飲むのは初めてだ。

父が明るい声で笑い、母は心配そうにクライドを見て、祖母は負けじとビールを呷った。クライドが祖母について聞いたことは、彼女が若かった頃やんちゃで無鉄砲だったと言うことだけではない。若い頃から、異常に酒に強いということも、クライドが知る祖母についての情報だ。グラス一杯分のビールを一気に呷り、祖母は不敵な笑みを浮かべた。

「さあハーヴェイ、飲み比べでもしようじゃないか。わたしとおまえ、どちらが勝つか賭けてみよう」

「望むところだ」

父もビールの瓶を手に持ち、中身をグラスに注いだ。妙にやる気満々である。ともすれば、このままビールを瓶ごと飲み干しかねない勢いだ。母は呆れたようにこめかみをおさえ、小さくため息をついた。

「もう、おかあさんまで……」

呟いた言葉が聞こえたのか聞こえなかったのか、祖母はグラスの中身を余裕の表情で飲み干している。こんな光景なんて、クライドは一度もみたことがなかった。それに、父は酒に強いのだろうか？ それとも、弱いのだろうか。まだ、父の情報については不完全なものが多い。

「父さん、明日も仕事だろ。ほどほどにしとけよ」

「クライド、俺をなめてるな？ リヴェリナの酒場でやってた飲み比べ大会で、漁師を打ち負かして一位になったのは俺だ」

クライドの忠告を飄々とかわし、さりげなく自分の強さをアピールする父。祖母は優しく笑みながらも、どこか強い意志をもった目で父を見る。

「そこにわたしも混ぜてくれれば、わたしはおまえを負かしていた

だろうに」

「おっと、それはどうかな？ クライド、先に飯食ってる」

父と祖母の対決を見ながら、クライドは食事にする。母は苦笑しながらも、少し楽しんでいるようだった。分厚いステーキ肉を切つて口に運びながら、クライドは父と祖母を見守る。祖母は高齢だし、父はがりがりに痩せている。二人とも、酒など本当は飲んではいけない人たちだと思う。なのに、このペースは何なのか。二人とも何食わぬ顔でグラスの酒を乾しては満たし、満たしては乾していた。母の顔つきがだんだん不安を帯びてくる。しかし母の心配をよそに、祖母と父の飲み比べはだんだんヒートアップしている。

「アリシア、ビール足りなくなった。冷蔵庫に入ってるの、取ってきてくれるか？」

「もうやめたほうがいいわよ、あなた」

そう言いつつ、母はビールを取ってくる。クライドはワインを飲みながら食事を平らげる。スープの味は自分好みに仕上がっていたし、グラタンも程よくさめていて美味しかった。マカロニが少し硬かったのが惜しいところだ。初めて飲んだワインは、想像していたよりもすっぱかった。甘いぶどうジュースに慣れていたせいだろうか。

祖母と父の飲み比べは続く。意外にも最初に音をあげたのは父の方で、彼は頬をほんのりと赤くしてグラスを置いた。祖母は勝ち誇ったように笑っているが、その顔は父より赤い。多分、父より祖母のほうが血行が良いので頬が余計に赤く見えるのだろう。

「ギブアップ。これ以上飲んだら明日の仕事に響く」

「わたしの勝ちだね。でも、わたしも明日のことが心配だからやめておくよ」

これは、引き分けと取ってよいのだろうか？ デザートのフルーツをつまみながら、クライドはそう考えていた。一杯しか飲んでいないビールと三杯は軽く飲んだワインのせいで、クライドも酔っ払っている。鼓動が早くなつて、体じゅうが熱い。しかし、スポーツ

をした直後とはまた違った感じだ。

「酔っちまわらないと言えないがな、お前は俺の誇りで一番の宝だ」
少し呂律の回らなくなってきた口調で父は言った。これを言うために、父は酒を大量に飲んだのだろうか。やはり大量に飲まなければ酔えないという父の言い分は本当らしく、ビール瓶は父と祖母の合計で十本以上空になっていた。

「大事なものは手放したくないがな、大事なものが望んで『いきたい』って言うなら俺は行かせる。頑張つて来い」

潤んだ目と赤くなった頬のせいで、父は泣く寸前の少年のように見えた。クライドは一瞬呆気にとられたが、すぐに笑って父を見る。「ありがとう」

たった一言、それだけを返すのに精一杯だった。胸が詰まり、思うように言葉がでない。十三年間離れていた期間があってもなお、父はクライドを想い続けてくれている。そして父は、クライドの自由を認めてくれる。

理解が深く、知識も深く、愛情も深い父。クライドの誇るべき父親は、やつれた顔に幸せそうな笑みを浮かべていた。

母を見ると、母は目を潤ませていた。また母を泣かせてしまったことになってしまったのだろうか。クライドは少し胸が痛むのを感じて、母から目を逸らす。母から目を逸らすと、祖母と目が合った。祖母は銀色の目を細めてにっこりと笑う。

「旅人へ捧ぐ唄だよ」

そういつて、不思議な歌を歌いだす祖母。柔らかく神秘的で、この世界にいる六十歳代の者が歌っているとは到底思えない歌だ。それは朝の空気を思わすような澄んだ美しい声で、朝霧が立ち込める丘を歩き回っているような、爽快感に満ちた弾むような旋律だった。エルフ語の歌である。

「若い頃は、歌姫と呼ばれたものだよ。今じゃ、声もすっかり老いてしまった」

歌を終えた祖母は、にっこりと笑った。クライドは祖母をじっと見

て、それから頭が少し痛くなるのを感じていた。多分、酔ったせいだ。

「老いてるって、どこがだよ？ 今でも歌姫で通用するって」

「わたしの歌を聴きたくなったら、いつでも帰ってきなさい」

冗談めかした口調で祖母は言う。クライドは深く頷いた。帰ってきたら、また違う歌を歌ってもらえるのだろうか。この歌を覚えてグレンに教えたら、きっと祖母の男性バージョンのような美声で歌ってくれるだろう。旅先での楽しみがまた一つ増えた。

母は心配そうにクライドを見て、表情と比例した心配そうな声でこう言った。

「クライド、絶対帰ってくるのよ。変な人にはついていっちゃだめよ。世の中には、あなたの知らないことがまだたくさんあるわ」

「大丈夫だって、俺はもう子供じゃないんだから」

クライドは引きつった顔で笑う。子供じゃないんだから。そう自分でいったくせに、何だか胸にわだかまりを感じたのだった。クライドが子供でいられる時間は、あとほんの少しだ。もう十七歳なのだ、とつくに大人に片足を突っ込んでいる年頃である。今しかできないことを、めいっぱいやろうとクライドは思った。

「……ちよつと眠いかも」

「酔ってるのよ、クライド。明日は早いんでしょう？ もう寝なさい」

呟いた言葉に、母は律儀に反応した。そして、階段を指差す。クライドは自分が使った食器を流しに持って行って、それから父と母と祖母に向かつて笑みを浮かべた。

「母さん、父さん、ばあちゃん。おやすみ」

家族三人からおやすみという声が返ってきた。クライドは階段を登って部屋のドアを開け、ベッドに飛び込む。そして、体じゅうをまだせわしく巡っている血流を感じながら目を閉じた。シャワーは明日の朝で良い。パジャマなんて着なくても良い。身体を動かすのが億劫になるぐらい、眠いのだ。

暫くして誰かが階段を上がってくる音がしたのをクライドは聞いた。ドアが開き、頬に口付けられたりしたがクライドは目を開けなかった。だから、頬にキスをしたのが父なのか母なのかよく解らなかった。目を閉じたまま夜の静寂に耳を傾けていると、自然に意識が落ちていくのを感じた。

第七話 定形外郵便物

目覚まし時計の音で目を覚まし、クライドはベッドからのっそりと這い出した。時刻は午前六時五十分、日付は七月二十六日。十時までに郵便局にいけば良い。バッグに着替えや生活用品をつめながら、クライドは部屋を見渡す。

天井に貼ったポスターや、壁の穴をかくすポスターは違うものになった。ベッドのシーツも、水色のピンストライプだった物が青の無地になった。カーテンが薄い黄色からビビッドな青に変わり、机に飾った写真も十七歳の誕生日のものになっている。そして、机の上には携帯の充電器があった。少し性能の良いCDプレイヤーもある。

ここ一年で部屋の内装も随分と変わったが、基本的なスタイルは以前と同じだ。まだパソコンなどの高性能な機器は家がないが、それでも携帯があるおかげでクライドの家も以前と比べて随分と近代化した。充電器も持つて行くことにして、クライドはバッグの中に充電器を入れた。あとは、暇つぶしのための本を一冊いれておく。水は漁師の町で手に入れればいいので、今回は持っていかないようにする。極力荷物を削減し、身軽にしようというのが今回の旅のルールだ。

仕度を終えたクライドは、シャワーを浴びに下へ降りる。シャワーを浴び、朝食にして、それから十時に間に合うように家を出よう。階段を降りて居間を通って風呂場へ行こうとすると、父がおきてきた。寝ぼけ眼でクライドを捉えた父は、にっこりと笑った。クライドも微笑み返し、今日の最初の挨拶を父にした。

シャワーをあびて風呂から出てくると、時刻は七時半をすぎている。軽装に着替えて濡れ髪にタオルを当てながら、クライドは大きくあくびをした。昨夜飲んだ酒はもう体内ですっかり分解されたのか、クライドは二日酔いを味わうことなく今日を過ごしていた。ふ

と見ると、食卓に朝食が用意されている。食卓の上に置かれた四人分のトーストと目玉焼きは、まだ焼き立てだ。

「おはよう、クライド。良く眠れた？」

キッチンから声がしたのでそちらを向くと、母がベーコンを焼こうとしていた。クライドが頷くと、先ほど起きたくせに再び寝てしまった父を起こしてくるよう頼まれた。父の部屋に行く。

父の部屋は本当に質素で、このカルヴァート家でおそらく一番色褪せて見える部屋だ。モノトーンのシーツがかけられたベッドに寝ている父をみて、クライドは苦笑した。彼のパジャマは脱げかかっているし、布団はベッドの隅に追いやられている。まるで子供の寝相だとクライドは思った。

「父さん、起きて」

「んー、クライド。もう帰ってきたのか？ 速いな」

クライドが父を揺り起こすと、彼はにこりと笑って顔を上げた。

しかし、すぐに再びがくんと力をなくして目を閉じる。クライドは呆気にとられたが、もう一度父を揺り起こす。

「何が？ 父さん、帰ってきたって……」

「目的は達成できたのか？ 今晚は豪華にしような」

「いや、俺まだ旅にでてないんだけど」

全く、呆れなくなる。これは新手のジョークなのだろうか。違うだろう。父は完全に寝ぼけている。今の台詞からすると、父はクライドが帰ってくるまでずっと寝ているつもりなのだろうか？

クライドは笑いながら、また寝そうになった父を揺らす。

「朝飯いらない？ なら俺が食うけど」

「飯か？ ダメだ、アリシアの愛情たっぷりの手料理をこの俺が食べないわけには」

この一言で、父はむっくりと起き上がってパジャマの乱れを直した。急にスイッチが入ったように動き出す父を見て、父は母を物凄く愛しているんだとクライドは思った。

いつも思うが、これではまるで新婚夫婦だ。十三年間の空白のお

かげで、父と母はいつも傍で聞いているほうが恥ずかしくなるような甘い会話をしている。

「母さん、父さんが起きた」

言いながら父の部屋から出てくると、母はベーコンを皿に盛り付けているところだった。クライドは自分の定位置に座る。祖母はクライドが父を起こしている最中に部屋から出てきたのか、既にクライドの斜め前に座っていた。

「おはよ、ばあちゃん」

「おはようクライド、良い朝だね」

祖母はそう言いながら、珈琲を飲む。祖母の珈琲と焼けたトーストやベーコンの匂いが、カルヴァート家の朝の香り。毎朝嗅いでいる匂いだから、クライドはこの匂いがとても好きだ。この香りが漂ってくる、不思議と目がさめやすくなる。

「おはよう、あなた」

「おはようアリシア、今日も綺麗だ」

「まあ、あなたってば」

惚気始める父と母を横目に、クライドは食事を始める。この一家は無宗教だから食事の前に祈ったりはしないが、クライドは全てのものに感謝を込めていただきますと呟いた。トーストを齧ると、香ばしいバター風味がふわりと口に広がる。

食事の間、家族は終始笑顔だった。そして、テレビで見た映画がどうだったとか、ニュースで珍しい動物の特集をやっていたとか、夢で友達に会ったなどと旅とは何の関係もない話をしてくれる。

そうして優しい家族達は、クライドにかかったプレッシャーを和らげようとしてくれていているのだろうか。それとも、クライドが旅のことなど忘れてここに留まることを望んでいるのだろうか。後者は考えすぎだと思う。

食器を下げるのを手伝ったあと、クライドは洗面台で少し身支度をした。顔を洗ったり歯を磨いたりした後、跳ねた髪を撫で付けてみる。どうせすぐに元に戻ってしまうが、髪が跳ねていない時のク

ライドはかなり父に似るのだ。父を若返らせて整髪料で髪を跳ねさせれば、きつと元から華奢なクライドをもつと華奢にさせたような少年ができあがる。

「何か落ち着かないな……」

鏡に映る自分に向かって呟いてみる。髪型のせいで落ち着かないのではなく、これから旅に出るということを考えると落ち着いていられないのだ。胃の底と喉の奥をきゅっと締め付けるような嫌な感覚が、自分が現在緊張しているのだということを思い知らせてくれた。

「クライド、友達がきたわ」

洗面所に来た母は、スーツに着替えている。母と入れ替わるようにして洗面所を出て、クライドは玄関に向かう。玄関には、アンソニーがいた。去年のような大荷物を玄関先に降ろして、彼は肩を休めているようだ。アンソニーはクライドを見ると、ほっとしたように表情を和らげた。

「おはようクライド」

「どうしたんだよ、トニー？」

訊ねてみたが、何となく理由は察していた。クライドと同じように、アンソニーも少し緊張しているのだろう。アンソニーは照れたように笑い、それから想像通りのことを言った。

「ちよっと落ち着けない気分だったんだ」

「似たもの同士かもな、俺ら。待ってる」

そう言い置き、クライドは階段を上がって荷物を取ってきた。携帯を持っていくが、一応腕時計もしておく。階段を駆け下りて玄関に行くと、アンソニーは重そうな荷物を背負い上げてぎこちなく微笑む。

「もう行く？ あと一時間は軽くあるけど」

クライドは頷いて、家の中を振り返った。父も祖母も母も、クライドを優しい眼差しで見つめている。

「行ってきます」

「気をつけて」

父に言われ、母に手を振られ、祖母に微笑まれてクライドは家の外に出た。まぶしい夏の日差しが、燦々と辺りを照らしている。白い半袖のＴシャツを着た背中に、ひどく熱を感じた。もう夏なんだなど、再認識する。

「うー、暑いよクライド」

背中に大きなバックパックを背負ったアンソニーは言う。彼のこめかみの辺りには、早くも汗が浮かんでいた。クライドは苦笑し、アンソニーのために少し涼しくなることを考えてやる。

「そうだなあ、怪談でも聞かせてやるうか？」

クライドはアンソニーの方を向いてそういった。前回の旅で幽霊に免疫ができたように思われるアンソニーだが、未だに心霊現象と呼ばれる現象に弱い。例えば鐘楼にウルフガング以外の霊がいると聞けば、最低でも三日間は鐘楼に近づかないといった具合にだ。

「やめとく。クライドの話、怖い」

案の定、アンソニーはクライドの申し出を断った。クライドは笑いながら、バックグを持ち直す。これは去年グレンが使っていたようなスポーツバッグで、サッカー部の全員が同じものを持っている。多機能で大きなこのバッグは肩紐をつけたりつけなかったりできるので、肩にかけたほうが楽だが手に持っている。まだ出発まで時間があるからだ。

「怖いかな？ ノエルのほうがよっぽど怖いだよ」

アンソニーよりいくらか低い、聴いていて心地が良くなるような声。声の方を振り向けば、声の持ち主は口角を上げて楽しげに笑う。彼もクライドの家に向かってくる途中だったのか、大きなシヨルダールバッグを肩にかけていた。

黒のタンクトップから覗く少し筋肉質な彼の腕は、軽く日焼けしている。おそらくこれからもっと焼けるだろう。それにしても、グレンのスタイルは本当に羨ましい。

「それは僕が語る怪談に対しての感想かい？ それとも、僕自身に

対しての話かい？」

穏やかな声。はつきりと耳に届くその声は、何を説得しているわけでもないのに説得力のある声だ。声の主はグレンを見上げ、にっこりと微笑んでいる。彼もクライドの家に来ようとしたのだろうか。新しい大きな目のキャリーカートを引いて、ノエルは普段に比べたら動きやすそうな服に身を包んでいる。ただし、やはりいつもどおりの長袖の服だ。こんな蒸し暑い日に、よく長袖など着ていられる。

グレンはノエルを見て、にんまりと笑う。たった今話題に上っていた本人の登場に驚いていない様子のグレンは、ノエルに向かって言った。

「両方だ」

「怪談を語って怖くないって言われると、ちょっとがっかりするからね」

グレンが自信満々に言った一言にノエルは頷いて、飄々とした態度で彼から目を逸らす。そしてノエルは、クライドを見る。

「予定時刻より早いけど、郵便局でシエリーを待つかい？」

「そうだな」

四人で郵便局を目指す。夏休みが始まったばかりの今日は、真っ黒に日焼けした子供達によく出くわす。虫取り網や虫かごをもった子供達は、性別という壁を全く無視して楽しそうに遊んでいた。木に登ろうとする女の子を、男の子が支えている。虫かごに入った大きな黒い蝶を、興味深そうに眺める男女数名。その全員が、幼稚園の卒園はまだ終わっていないだろうと思われる小さな子どもたちだった。

「昆虫採集ね…… 僕は蝶の標本を作るのが好きだった。父さんが作り方を教えてくれて、僕は蝶の名前と学名を調べて、標本は二人で作ったんだ」

「ええっ、標本なんて作ったことあるんだ！ いいなあ、すごい」

「見せたいけど、作った標本は父さんの母国にいる従弟たちにあげちゃったんだ」

ノエルとアンソニーが、そんな会話をしていた。クライドは昆虫採集をしたことはあっても、標本は作ったことがなかった。捕まえた虫は全て外に逃がし、飼うこともしなかった。

グレンは呑気に歌を口ずさみながら、ちらりとこちらを見る。

「夏だな」

「まあな。お前は夏が似合う奴だと思っよ」

そういつてみると、グレンは宙を見上げてううんと唸る。そして少し考えた後、すぐに視線を戻してクライドを見る。

「ノエルは秋だな、完全に」

「でも、冬でもいけそうだ」

クライドはグレンの言葉にそう切り返し、真夏の太陽を見上げる。汗が胸元を伝い落ちる感覚が気持ち悪くて、クライドはTシャツの襟元を胸に押しつけて汗をぬぐった。

ちなみに、話題の張本人はアンソニーと昆虫採集の話から転じた星図の話で盛り上がっている。クライドとグレンは、誰に何の季節が似合うのかという話題で暫く話し続ける。

やがて郵便局に到着すると、金髪の女性が出迎えてくれた。彼女は笑いながらノエルを見て、それから彼に歩み寄って鶯色の髪をくしゃくしゃと撫でる。彼女がノエルの母親だ。何度か彼の家で会ったことがある。

「その大きな子達が、貴方のお友達ね？」

「僕が小さいんだよ、母さん。気にしてるんだから背のことは言わないで」

悪戯っぽく笑うノエルの母。ノエルは彼女の手を掴んで止めながら、やんわりと言った。ノエルの母は知的そうな女性で、フレームの無い眼鏡をかけている。彼女は典型的なラジエル人なので、彼女からノエルに遺伝した部分はおそらく白い肌のみだと思う。

クライドは彼女に軽く会釈した。

「今日はありがとうございました」

「いいのよクライド、そんなに硬くならなくても。貴方たちはノエ

ルの大事なお友達だもの」

ノエルの母は笑い、クライドはつられて笑った。彼女もノエルと同様に語学に長けている人で、ノエルの父はウィフト語を喋るといふ。ハルフォード家はこんな辺鄙な山間に住んでいるくせに、かなりグロバルな一家なのだ。かくいうカルヴァート家だって、純粋な人間は一人しかいないというかなり奇異な一家なのだが。

「どうも！へえ、ノエルの母さんってやっぱ美人なんだな」

グレンはその辺りの床に適当に荷物を降ろしながらそういい、ノエルの母を見下ろす。ノエルの母はそんなグレンを見上げて嬉しそうな笑みを浮かべる。なんとというか、知的な癖に可愛らしい女性だ。「やだ、美人だなんて。貴方のお母さんには劣るわよ、グレン？

キャロル「エクルストンはこの町で一番の美人だわ」

どうやらノエルの母はグレンのことを知っているらしい。グレンはすこし照れたように笑いながら、長く伸びた髪を胸の辺りで弄っている。

「そりゃどうも。母さん喜ぶよ」

グレンは嬉しいのだろう、自分の母親が褒められたことが。クライドだって、自分の母が褒められたら少しくすぐりたい気持ちになる。

よく、男性が理想だとする女性は自分の母親に限りなく近いと聞く。子供にとって異性の親は恋人のようなものなのだと聞いたことがある。確かにクライドの理想の女性は、母のような人だと思う。ノエルの母も、知的である上に可愛らしいところがサラに似ているような気がする。そう考えるとノエルから見たサラは、完璧に理想のタイプのだ真ん中だということになるのかもしれない。

「あと三十分かあ」

アンソニーが呟いた。クライドはつられて自分の時計を覗き込み、時刻を見る。九時三十五分。クライドの時計は五分進めてあるので、実際にはアンソニーの言うとおりあと三十分ほど時間に余裕がある。しかしそれでも郵便局員たちが、少ない郵便物をヘリコプターに乗

せ始めた。

「おい、シェリー遅くないか？」

「まだ三十分もあるんだぜ？ 心配するなよグレン」

荷物の整理を始める局員達を見て、グレンが焦ったように言った。クライドは苦笑し、心配性なグレンを諭した。シェリーのこととなると、他のどんなことよりも敏感になるグレンがとても新鮮で面白い。

「そつだ母さん、荷物の送料は別だったね。四人分でいくらになるんだい？」

ノエルが何気なく言ったこの言葉で、クライドは固まった。メンバーの中では所持金が一番少ないクライドだから、町から出るまで一カルドたりとも無駄には出来ない。本当に金銭面で困るのは、今ではなく明日からの未来なのだ。

ノエルの母は快活に笑い、ノエルのキャリーカートの取っ手をひよいともちあげる。

「いいわよ、送料は貴方達の方だけで。今日は届ける荷物も少ないしね」

颯爽と歩き、郵便局の外に出て行くノエルの母。クライドはそんな彼女を見送り、ほっと胸をなでおろした。

「あ、グレン！ シェリー来たよ？」

アンソニーが言うと同時に、グレンがクライドの隣を凄いい速さで通り抜けていった。呆気にとられて振り返ると、心持ち驚いた様子のシェリーの隣にグレンがいた。グレンはシェリーの荷物を持ってやりながら、何事かシェリーに話しかけている。

「最近のグレンってさ、シェリーばかりで僕らに構ってくれてないよね」

「……確かにそうかもな」

アンソニーの表情に不満の色が浮かぶ。確かにそれは、クライドも何となく思っていたことだった。だが、彼女がグレンにとっての初めての恋人だ。そつと見守っていてやろうと思う。

そのうちグレンも友情と愛情の両立ができるようになるだろうから、今までどおりの関係に戻れるだろう。クライドだって、初めて恋人が出来た時はグレンたちを放置して恋人と惚気ていた。

「アンソニーは、誰かと付き合ったりしないのかい？」

ノエルが言った。クライドもそれには興味があったので、アンソニーを見下ろした。アンソニーは照れたように笑って、それからクライドとノエルを順番に見た。

「クライドとね、記録が並んだんだ。失恋記録」

それをきいて、ノエルが意外そうな顔をした。クライドはというと、黙り込んだ。

失恋記録という言葉に、胸の奥が少し疼いた。失恋よりも、命を失った彼女との恋の方が何倍も何十倍も切なかった。レイチエルを含めた過去五回の失恋は、未だに癒えることの無い心の傷である。

「僕はいいんだ、恋なんかしなくても」

につこりと笑い、それきり何も無かったかのように振舞うアンソニーがどこか痛々しく見えて、クライドは少し心に棘が刺さったように感じた。強がっているアンソニーだが、本当はクライドと同じように失恋を悔やんでいるのだろう。もしかすると、彼女が離れていったことを自分のせいにしていたりするかもしれない。

「準備ができたわ。乗り込んで」

ノエルの母が戻ってきて、クライドの方を向いて言った。丁度そのときグレンとシェリーも到着したので、五人で郵便局の外に出る。ヘリポートはこの郵便局の屋上にあるので、屋外の階段を登って屋上に行くことになる。

階段を登って屋上に出ると、地平線まで青空が見えた。邪魔する建物といえば、アンシエント学園やアンシエント大学、それから鐘楼ぐらいなものだった。この星はやはり丸いんだなあと、クライドは今更そう思った。

「でっけー。近くで見ると意外と大きいんだな、ヘリって」

グレンが驚いたように言い、ノエルの母がくすくすと笑った。グ

レンと同じように驚いた表情のシェリーは、清涼感あふれるノースリーブのワンピースに身を包んでいた。華奢な体と相反するような大きなバッグを持ち、長い髪はポニーテールにしている。クライドの視線に気づき、シェリーは柔らかな笑みを浮かべる。

「何か意外だよな、この大きさ」

「まあな」

すっかり女の子らしくなった口調のシェリーに、今でも若干の違和感を覚える時がある。それでも、女の子らしいシェリーは可愛いと思う。こんなことをグレンの前で言ったら、他意はなくてもグレンに睨まれることは目に見えているのだが。

「早く乗ろう！ 何かすごいや！」

今まで船や自転車以外の乗り物に乗ったことがないというアンソニーは、早速目を輝かせている。クライドは苦笑して、ヘリコプターに近づいた。操縦席には初老の郵便局員がいて、クライドたちを優しい目で見ていた。クライドが彼に会釈すると、彼は会釈しかえしてくる。手招かれたので彼に近づくと、なんと助手席に乗せてくれた。アンソニーが羨望の目でこちらを見つめている。

「乗んな、そろそろ発つから」

そういつて、操縦士は残る四人を手招いて後ろの荷物を入れる場所に乘せた。何だか自分だけかなり良い場所をとってしまったようなので、仲間達に申し訳ないとクライドは思った。

クライドの腕時計が十時を差した。徐に、そしてだんだん大きな音を立ててプロペラが回りだす。操縦士が計器を弄り、無線でなにより言葉を交わしてハンドルを引く。とたんに、窓から見える青空の雲の配置が微妙に変わった。ヘリコプターが離陸したのだ。クライドは操縦士をそつと見た。操縦士はクライドの視線に気づき、少し欠けた歯を除かせてにつこりと笑う。

こうしてクライドにとって初めての空の旅は、少し緊張気味に始まったのだった。

第八話 懐かしき街

ヘリコプターの窓からは、緑の草原と森がよく見えた。一ヶ月近くかけて越えた草原と森は、空から見れば愕然とするほど小さかった。こんなに小さな草原や森を抜けるために、皆で何度も死にかけたのだ。

クライドは内心ため息でもつきたい気分を外を見つめていた。よくあんな無謀な旅をして生きて帰ってくることができたものだ。

「酔っちまったか」

「いえ。空を飛ぶのは初めてで」

「ほう、そうかそうか」

操縦士はこうして、時々クライドに声をかけてくれる。クライドもあまり無口ではいけないと思い、操縦士に時々話しかけた。

操縦士はアンシエントタウンで生まれてアンシエントタウンで育ち、首都の航空学校に通ってからまたアンシエントタウンに戻ってきたらしい。クライドも生い立ちを話すと、操縦士は笑った。

「んなこと、知ってらあ。お前はハーヴェイの息子だもんな」

「父さんを知ってるんですね」

「アンシエントタウンでハーヴェイが一番最初に打ち解けたのはこの俺だ」

こうして約三時間半ものあいだ、クライドは助手席で操縦士と会話していた。時折操縦士が無線でどこかの誰かと会話したが、それ以外はずっとクライドと喋っていてくれた。その間、おそらく後ろの荷物入れの中でグレンたち四人も話したり笑ったりしていたと思う。もしかすると、眠っていたりしたかもしれない。

やがてヘリコプターは懐かしい漁師町に着き、郵便局のヘリポートにゆっくりと着陸した。操縦士は計器をいじり、無線で何か言ってから降りる。クライドも、恐る恐るドアを開けて郵便局の屋上に降り立った。爽やかに吹き抜ける風からは、海の香りがした。この

屋上からはリヴェリナの町がよく見渡せる。前方に大きく広がる海の煌く波間には、白い漁船が一隻見えた。あれにスタンリーたちが乗っているのかもしれない。

「うー、ひっでえ旅だったな」

後ろで声が出たので振り返ると、グレンがもつれた髪とよれた服を直しながらこちらに向かって歩いてきていた。彼のすぐ後ろを歩くノエルの髪も乱れていて、よく見ると眼鏡のフレームが微妙に曲がっている。シェリーは少しよろけた足取りで、二人の後を追っていた。その隣に、大きなバックパックを背負ったアンソニーがいる。「同感だよ。君、かなり重いしね」

そういつて、痛そうに脇腹をさするノエル。どうやら彼らは、クライドとは違ってかなり苦労していたらしい。眠っていたのかもしれないという仮定はすぐに吹き飛んだ。

「そういうノエルだって、骨っぽいから乗られるとピンポイントで痛いんだよ？ 前に理科でやった。同じ圧力をかけるのでも、当たる面積が小さい方が痛いんだって」

アンソニーは自分の体のあちこちを見ながら、不服そうに言う。怪我をしていないかどうか確かめ終えたのか、彼は荷物を抱えてこちらに向かってくる。

グレンはクライドの隣にきて、荷物を地面に置いてからこういつた。

「あたりまえじゃん」

先ほどの、アンソニーらしからぬ発言に対しての言葉だろう。アンソニーとしては勉強の成果を出したつもりなのだろうが、実はクライドも当然だろうと言いたいのを堪えていた。

アンソニーは一瞬絶望的な顔をした後、すぐに苦笑してグレンの言葉を肯定した。前回の旅から一年以上たったのに、アンソニーが表情をこころ変えるところは以前と殆ど変わっていない。

「なあ、何があった？」

クライドが声をかけると、四人は恨めしげにクライドを見た。思

わずクライドが一步後退すると、ノエルが道中におきていた事態を説明してくれた。

荷物入れの中には少ない量だが小包や手紙の束が積んであり、四人は手紙の束に周りを囲まれながら初めのうちは談笑していたらしい。しかし、離陸と同時に荷物を固定していた道具が外れて手紙の束が降ってきたため、彼らは狭い空間を逃げ回ったという。そしてその時、機体はかなり揺れていたようだ。着陸の時も、互いにもつれ合うようにして転げまわったとノエルは言った。

「今回は成り行きでクライドが助手席だったけど、次回は絶対に話し合って決めよう！ 僕も助手席乗りたいし」

ノエルの説明が終わった後、黙りこくったクライドに向かってアンソニーが言った。クライドは頷き、四人に謝った。

「クライドが謝ることじゃないから、別に気にしないで」

柔らかな微笑を浮かべながらシエリーは言ったが、ノースリーブのワンピースから覗く華奢な白い腕には赤い打撲のあとがあった。クライドは少し項垂れたが、グレンに背中を叩かれて顔を上げる。

「気にするなって言われてるんだから、気にしなきゃいいだろ？」

そういわれても気にしてしまうのがクライドの性格である。それを解っているが、いつもグレンはクライドにあえてそういうのだ。

それはグレンなりに、クライドがこれ以上悩まないようにと気遣ってくれている証拠なのかもしれない。クライドは、軽く頷いた。

「町に出よう。夏のリヴェリナには初めて来たけど、リヴェリナには夏が似合うね」

ノエルは笑顔でそういって、キャリーカートを引き始める。嬉しいのだろう、サラに会えるのが。クライドはバッグから携帯を取り出し、ノエルに渡した。シンプルな黒のネックストラップと一緒に付けてある刺繍入りの黒いリボンは、レイチエルからもらったあのリボンだ。ノエルは不思議そうな顔をしてこちらを見上げる。

「サラに『今ついた』って電話しないのか？」

「ありがとう。借りるよ、携帯」

ノエルは片手で携帯を開いて電話をかけ始める。ノエルの一挙一動に、クライドを含む四人で注目した。電話の向こうで呼び出し音が鳴り、受話器が上げられる音がした。

「もしもし、僕だよ。うん、クライドの携帯を借りてるんだ」

ウィフト語で喋っているはずのノエルの声が、意味のある言葉に聞こえた。エルフの血があるおかげで、クライドの頭の中で全ての言語がディアダ語に変換されているのだ。何だかそれが奇妙に感じた。ここでは魔法が使えるのだということを、クライドはすっかり忘れていたのだった。

「今、郵便局の屋上に到着したところだよ。え、本当かい？ それじゃあ、一旦きるよ」

ノエルは携帯を閉じ、クライドに返してくれる。クライドは荷物を持ち上げて、郵便局の中へ向かった。そこからエレベーターを使つて、漁師町に出ようと思うのだ。

「サラ、何ていったの？」

シェリーが言った。ノエルはシェリーをちらりと見て、それからキャリーカートを引きながら答えた。

「今から家を出るって言つてたよ」

シェリーは笑顔で頷いて、嬉しそうにノエルの隣を歩いた。シェリーはもうエルフではなくなったが、殆どの言語を未だに覚えていないという。それは昔たくさんの言語でかかれた本を読み漁ったからなのだろうとシェリーは語る。

冬にこの町に来たときに、シェリーとサラはかなり仲良くなっていた。そのことで、グレンが密かにサラに嫉妬していたのをよく覚えてる。

「俺もウィフト語喋りてえなあ」

グレンは物憂げに言う。その隣で、アンソニーも力強く頷いていた。ノエルがそんな二人を見て、優しく微笑した。

「僕が教えるよ、二人とも」

ノエルのウィフト語講座を聞きながら、クライドはエレベーター

横の壁についている下向きの矢印を押した。すぐにドアが開いたので、五人で乗り込む。重たい荷物のせいで重量オーバーにならないか不安だったが、ドアは造作もなく閉じてエレベーターは下降した。やがてエレベーターから降りて郵便局を出ると、潮風の匂いを再び感じた。クライドがあたりを見回していると、こちらに向かつて必死で走ってくる少女の姿をみつけた。ノエルより少し薄い色をした鳶色の髪が、風に煽られてめちやくちゃになっている。以前に見たときよりもまた少し彼女の髪は伸びて、肩までだった髪の長さはもう胸に届くほどになっている。

「サラー！」

大声で彼女を呼びながら手を振ると、彼女はスカート裾をはためかせながら駆け寄ってくる。サラはクライドの姿を見て、嬉しそうに笑う。

「久しぶり、クライド！ 会いたかった！」

嬉しそうに彼女は言う。普段はあまり同級生と喋ることができないという悩みをもつ彼女だから、クライドが話しかけると本当に喜んでくれる。

ふと斜め後ろを振り返ると、ノエルが笑顔で立っていた。しかしサラの『会いたかった』という言葉を彼も聞いてしまったのか、少しその笑顔が曇っているように感じる。ノエルはたぶん、クライドに妬いているのだろう。

「サラ、久しぶり」

「ノエル！ 久しぶりだね、元気？」

折角彼が話しかけたのに、サラはノエルには会いたかったと言わなかった。ノエルは少しがっかりしたようだった。先ほどと同じように見える表情が、微妙に変わった。

「グレン、髪の毛伸びたね」

サラはグレンの髪をしげしげと眺めながら言う。シェリーがグレンを見上げ、それからサラを見る。シェリーは別に、サラに対して敵意をもっていたりするようではなかった。サラにはノエルがいる

ということを、ちゃんと解っているのだろう。

「えーっと、今の何ていった？」

グレンはシェリーに問う。シェリーはにっこりと笑いながら、ディアダ語の訳をグレンに伝えている。その間、ノエルは微かに寂しそうにしていた。

「トニー、また背が伸びたんだね」

サラはにっこりと笑いながら言う。忘れてしまいがちだが、サラは自分よりひとつ年下だ。そして、アンソニーより年上なのだ。もうこの年齢に達すると、正確な年齢を把握するのが難しくなってくる。しかし、シェリーは身長が低いのでこの中では一番年下に見える。本当は、アンソニーの方が数ヶ月年下なのだ。

「ねえ、どこか冷房のきいたところに遊びに行こう？」

サラは上機嫌でそう言いながら、シェリーと腕を組んだりしている。男同士ではやらないような過剰なスキンシップのとりかたも、女同士ならやっていて不自然でないのが不思議だ。グレンはシェリーを取られたことに対して、少し不満を抱いているようだった。

「シェリーさあ、俺が外で手を繋いだりしようとするとな怒るんだぜ？　なのに何でサラだったら嫌がらないんだよ」

「そりゃそうでしょ、シェリーも恥ずかしいんだよ」

無然とした顔で言うグレンに向かって、苦笑気味のアンソニーが言う。クライドはノエルをちらりと見て、声をかけた。

「ほら、置いてかれるぞ。考え事は後にしろよ」

声をかけたノエルは、いつもどおり微笑を浮かべていた。いや、いつもどおりというには少し違和感のある笑みだ。ノエルが何を思ったかはわからないが、折角サラと会えたのだからもう少し嬉しそうにしたほうが良いとクライドは思った。ノエルはキャリーカートを引いて、クライドの隣に並ぶ。

「君に聞いて欲しいことがあるんだよ。だから、後で二人だけで話そう」

小声で囁かれた言葉はエフリッシュ語で、ディアダ語でもなければ

ばウィフト語でもなかった。そのためこの言葉は、クライドとノエル以外にはシェリーにしか通じていないだろう。しかしシェリーはサラと喋りあってはしゃいでいたから、ノエルのこんな小さな声は聞いていなかったに違いない。

「珍しいな、何か悩みか？」

ノエルに倣ってエフリツシュ語で喋ると、ノエルは柔らかく微笑んだ。

「まあね。君には何も隠せないだろうから、素直に話すことにするよ」

その言葉に頷いて、クライドは歩く。とりあえず、仲間達は今夜泊まる漁船を目指しているようだ。確か、キーはアンソニーが持っていたと思う。失くしてしまったのなら、仕方ないので想像でスペアキーを作ろう。

歩き続けること十数分。クライドは、懐かしい港にきていた。去年ここで酒の洗礼を受けたことを、クライドはまだ忘れてはいない。街中の人に見送られて旅立ったことも、大切な記憶のひとつとしてクライドの中に残っている。

タラップを上がって、船室に入る。船室の隅に荷物を置いて、クライドはそこに腰を下ろした。何だか、懐かしい気分だ。

「うわあ、変わってないや」

アンソニーは船室に入ってくるなり、嬉しそうにそういう。後から続いて登ってきたグレンは、笑いながらアンソニーの背中をぽんと叩く。叩きつつ、彼は荷物をそこらに適当に放り投げた。

「変わってたら困るだろ、これは俺達の船なんだ」

クライドは船室の天井を見上げながら、笑みを浮かべる。潮の匂いが染み付いたこの船室が、とても懐かしい。ここで感じた様々なことを思い出す。

「正確に言つと、ノエルの物だけだな」

「嫌だなあクライド、これは皆の船だよ」

クライドの言葉に対して、ノエルが当然のように言った。ノエル

はキャリーカートを重そうに持ち上げて、クライドの荷物の隣にそれを置いた。

「ねえ、エディのところに行きたい！」

「エディ、もう十三だっけ？ セシリアと同じ年か。あいつ、冬に来たとき骨折してたよな」

「そうだねえ」

アンソニーとグレンがそんな会話をし、クライドを見る。そして、グレンが口を開く。

「エディんどこ行かねえか？ それとも、先にブリジットのところ行くか？」

「そうだなあ。とりあえず、船おりようか」

サラとシェリーを待たせているため、クライドはそう答えた。兎に角、さっさと船を降りたほうがいい。財布と携帯がポケットに入っていることを確認してから、クライドは船を降りた。

二人は待ちくたびれた様子もなく、ウイフト語で雑談していた。好きな男性のタイプについて二人が語っているところが、少し聞こえた。

「あたしは、いつでも傍にいて支えてくれる人がいいの。その人の傍に居たら、孤独を感じなくて済むような。外見はそんなにこだわらないよ。惚れちゃったら、その人の容姿とか身長の方が良く見えるの。まるで魔法」

「ああ、解る解る！ たとえ好みが長身でも、本当に好きになっちゃったらそんなの関係なくなるね。もうこの人全部好き！ ってなるから。でもシェリー、顔つきとか体格とかすっごく格好良い人に惚れたんじゃない？ 私はね……」

サラは好みのタイプについて語ろうとしたのだろうが、クライドとその後ろに居るノエルに気づいて話をやめた。シェリーは少しだけ残念そうにしたが、グレンを見つけて優しく微笑む。

「なあ、どこに行きたい？ エディのところと、ブリジットのところっていう二つがでてるんだけど」

クライドが言うと、シェリーは申し訳なさそうにクライドを見た。
「サラのうちに行つて、荷物置かせてもらつていいかな」

クライドが頷くと、グレンがにっこりと笑つてシェリーに手を振つた。グレンは、今はシェリーよりもアンソニーと一緒にいたいらしい。おそらく、アンソニーと二人きりになつたときに恋愛相談でもするのだろう。グレンの考えることは、大体解る。

「それじゃあ、俺らは先にどっか行つてるからな。とりあえず、夕方になつたらまたここに集まろう」

ここは、二人にしておいてやろう。グレンが相談役に自分を選んでくれなかつたのは少し悲しかったが、グレンもおそらくノエルのことを察していたのだろう。グレンも、ノエルとクライドを二人にしようとしてくれたのかもしれない。

「じゃあ俺、ブリジットのところ行つてくるな」

「俺とトニーはエディのところ寄つてくる。学校とかも行きたくない」

グレンを見ると、にっこりと笑つて片目をつぶつてくれた。やはり彼は、ノエルと話しやすいように仕向けてくれたのだ。心の中で彼に深く感謝する。

「じゃあ、私達はうちに寄つていくね」

サラとシェリーは、にっこりと笑いながら手を振ってくる。クライドも手を振り返し、町のほうへ足を向けた。

「解散！ また後でなー！」

グレンは元気よくそういつて、エディの家がある方角へ走つていった。

「グレンにも気づかれていたんだね」

ノエルはそう呟いて、苦笑する。それが何だか自嘲の笑みに見えて、クライドは少し悲しくなる。またそうやって自己嫌悪して、自分が無価値な人間なのだと思ひ込むのだろうか。ノエルは繊細な人だから、笑顔の分だけ無理していることが多い。

「で、ノエル。どうしたんだよ」

訊いてみると、ノエルは前方を見つめたまま言った。

「今日サラが僕に話しかけてくれたのは、たったの一回だったね。今までは僕が、サラにとつて唯一同じ言葉で会話できる同年代だった。だからサラは、僕と一緒にいてくれた。だけど今じゃ、君もシエリーもウィフト語を使う。特にシエリーは同性だし、僕より年下だし、話しやすいだろうし、知識だってある。共通の話題だってたくさんあるだろうね。もう、僕だけがサラの隣にいられるっていう時代は終わったんだ。サラの隣には、もう僕の居場所がない」

そこまで一気に語り、視線を落とすノエル。彼は今までどおりの微笑を浮かべているが、凄く辛そうで苦しそうだ。今日サラに会ってから今に至るまでのたった数十分間に、ノエルはここまで思いつめてしまったのである。この事実だけで、もう既にノエルがサラを友達として見る事ができないということを確認に指していると思う。

「何言ってるんだよノエル、サラの腕みたか？」

クライドが言うと、ノエルはきよんとした。

「え？」

「去年お前が買ったのと同じブレスレット、してたぞ？」

もしかして、気づいていなかったのだろうか。今まであれほど彼女を見て、ほんの少しの変化にだってすぐに気づいていた彼が、彼女の腕に気づいていないなんて。

今ノエルが左手にしているブレスレットと同じものを、サラはちゃんと持っていた。彼女はノエルの瞳に良く似た色の石を使ったブレスレットを、大事そうに身に着けているのだ。

「そんな、本当かい？ 気づかなかったよ。というか、今日の僕はサラをまともに見てないんだ」

「ちゃんと見て、気づいてやれ。勝手に希望捨てるなよ。確かにサラの友達っていうポジションにはシエリーや俺も入ってきただろうけど、まだ恋人の枠は空いてるだろ？ そこを占領してみるよ」

クライドは言った。できるかぎりエールを送ったつもりだった。

それでも、ノエルの表情は晴れやかにならない。折角の声援も空しく、ノエルは斜め下を見下ろしながら暗い目をしていた。

「怖いんだよ、クライド。もしもサラに拒絶された場合のことを考えると、怖いんだ。僕らはもう、友達には戻れなくなってしまおうから」

活気付いた午後の漁師町を歩きながら、クライドはノエルに共感していた。そうなのだ、彼女との今の関係は終わってしまう。失敗した場合は修復ができなくなってしまふのだ。クライドも、そんな辛い思いを何度かした。

それでも、言わないでいて彼女が誰かに奪われていくことの方がよほど辛かった。だからクライドは、どんなに逃げたくなくても想いはちゃんと伝えてから恋を終えた。

ノエルには、見知らぬ男にサラをとられるような悔しい思いなどして欲しくない。それにクライドは、サラも絶対にノエルのことを好いていると確信している。

「勇気出せよノエル！ 言わないで終わる方が絶対辛いつて。それにお前ら、恋人って言うより夫婦って感じだし」

「でも、僕は結婚を前提に恋をしているんだよ。だからこそ、別れを告げられるのが怖いんだ」

「えっ？」

驚いた。クライドは思わずノエルを凝視してしまう。まさか彼の口から、結婚なんて言葉がでてくるなんて。

確かにノエルは、人生の先の先まで見通して過ごしているような男だ。未来予想図もしっかり出来ていることだろう。しかしまだ十六の、しかも男が結婚を前提にして付き合う女を決めているなんて話は周囲で聞いたことがない。

「それ、十代の男の考え方か？」

思わず口にしたが、ノエルなら遊びで女性と付き合うことはないだろうとは思っていた。都合のいいときだけ恋人でいたり、付き合い合っている相手より容姿がいい人を見つけたら安易に別れて乗り換え

るような、そんな関係をノエルが好むとは思えない。

ノエルはにこりと笑って頷いた。

「僕は何事にも本気になってしまいうタイプだからね。遊びだと言って割り切れるような関係はどう頑張っても無理。本気で好きになっただ人じゃないと、一緒にいられないから」

ノエルは凄いと思う。尊敬したい。かくいうクライドもいつだって本気で好きな人と付き合っているし、自分から別れを切り出したことはない。

本気で好きな人としか付き合わないという考え方は、素晴らしいと思う。しかし彼女に振られた場合のショックも、彼女のことを本気で愛した分だけ大きくなる。付き合った彼女が『他に好きな人ができた』などといって別れを切り出してくるか、彼女がクライドの性格の一部に愛想をつかして別れを切り出してくるかのどちらかで、クライドの恋は本意に終わっていた。だから、クライドはそのことを痛感していた。

それでもノエルが遊びの恋に逃げないのは、ひとえに彼の一途さによるものなのだろう。いまだきこんな純情で一途な想いを貫く人がいるのだと思うと、クライドは素直に感心した。

「ノエルの恋愛観って凄いな。良い意味で。堅実だと思う」

「そうかい？　ありがとう」

「告白、してみるよな」

「頑張ってみるよ。振られたら、記憶を改ざんする魔法でもかけてね」

「振られないからその心配はないな」

二人で笑い合う。ひとしきり笑ってからクライドは青空を見上げて、それから小さくため息をついた。

ノエルとサラなら、上手くやっていけるだろう。ただ、もしも二人が付き合うことになったとき、ノエルがサラとともにこの町に残ってしまわないかが心配だった。これはクライドの旅であり、誰がいつ降りてもいいはずだ。それでもクライドは、彼と一緒にい

てほしいのだ。いつ降りてもいいとは言うが、本当のことを言うと誰にも離れて欲しくない。

クライドは視線を降ろす。ノエルが深い色をたたえた眼差しでクライドを見ていた。何もかも解っている、そう言いたげな視線だ。

「悩み事かい？」

「ああ。凄く幸福な悩みだよ。幸福で、贅沢で、我侷な悩みだ」

ノエルの言葉をはぐらかして、クライドは歩き続ける。彼には悩みを相談させたのに、自分は彼に悩みを相談しないなんて少しずるいかもしないと、街の喧騒をぼんやり眺めながらクライドは思った。

第九話 宴の前に

二人で歩き、商店街にたどりついた。商店街には圧倒的に学生が多く、クライドは今は夏休みなのだということを強く実感した。

「あれは、ブリジットじゃないのかい？」

ノエルに言われ、顔を上げる。すると、見知った美しい黒髪の女性が商店街の一角から出てくるのが見えた。その店は確か八百屋か花屋で、ブリジットが手から下げたバッグの中身に花がないことからするとそこは多分八百屋だ。

八百屋から出てきたブリジットはこちらに気づかずに、すたすたと歩いていってしまふ。

「本当だ」

呟いてみたものの、様子がおかしいとクライドは思った。冬に見たときには平らだった彼女の腹部が、何故だか今は妙な具合に出ているのだ。ブリジットは胸の大きい女性だから、正面から見ればその腹が極端に目立っているわけではない。しかし、横から見るときにクライドは妙な違和感を感じたのだった。そんなに急激に太るはずがないと思う。それに、腕や脚は細いままだ。

「七ヶ月、ってところかな」

ノエルが穏やかに笑みながら言う。クライドは状況を飲み込めずに、ブリジットとノエルを見比べて首を捻る。

「何が？」

「だから、彼女だよ。あと三ヶ月か四ヶ月位でグレンは叔父さんになるね」

キャリーカートを引きながら、ノエルは嬉しそうに笑う。クライドは他の店に入っていくブリジットを遠目ながらも見送りつつ、ノエルを見下ろした。

「それって、もしかして」

「気づかなかったのかい？ どう見てもあれは妊娠中だよ」

ノエルはさらりとそういって、楽しげにクライドを見上げた。

「ええっ!？」

思わず大声を上げてしまう。通行人の何人かが驚いて振り返ったので、クライドは苦笑しながら小声で謝った。

まさか、ブリジットが母になるなんて。もともと母性的な人だったが、こつも早く母親になってしまつとは思つていなかった。父親はやはり、イノセントなのだろう。イノセントには戸籍がないため結婚ができないというが、その問題にも対処法が見つかったのだろうか。

「お店には、イノセントがいるのかな」

「そうだろうな」

ノエルの言葉に反応して、クライドはすぐそこに迫つたブリジットの店を見る。しかし、ここから中の様子をうかがい知ることはできない。

「入ってみるか？」

「そうしようか」

クライドは、魔法の店の扉をあける。

内装は冬に来たときから何ら変わっていないが、何となく空気が違うような気がする。ブリジットが、アロマオイルを変えたのだろうか。

店内には古びた椅子やテーブルがあり、奥のカウンターにはノエルの予想通りイノセントが居た。

イノセントはこちらを見て、一瞬驚いたような顔をしてから微笑んだ。

「よくきたな」

以前の彼からは、絶対に聞けなかった言葉である。クライドは少し驚くのと同時に、嬉しくなった。ノエルは店内の椅子に腰掛けて、優雅に足を組んでいる。クライドもノエルの隣に座った。

「久しぶり」

「ああ。茶でも持ってきてようか」

「じゃあ、貰おうかな」

今年の六月に二十三歳になったばかりのイノセントは、初めて出会ったときよりも随分と雰囲気が若返った。それでも、実年齢より三歳は確実に上に見えるのだが。

イノセントは店の奥にある小さな冷蔵庫から、プラスチック製のポットを取り出していた。そして、グラスを探し出してそれに氷を入れていた。

「ブリジットにあつたよ、イノセント」

店の奥に向かつて、ノエルが言った。暫く返事が返ってこなかったが、やがてイノセントがぼそりと「ああ」と呟くのが聞き取れた。「買い物なら、イノセントがすればいいと思うんだけど」

ノエルは不思議そうにそう言う。多分ノエルは将来子供ができた場合、率先して家事をやるのだろう。家庭的なお父さんになることは間違いない。そして、ノエルの場合子供を溺愛すると思う。

イノセントはカウンターを離れ、二人分の冷たい緑茶をクライドとノエルが居るテーブルに置いてくれる。軽く礼を言うと、イノセントは肩をすくめた。

「当然だが、俺も行かせたくなかった。しかし、目を離していた隙に」

「なによそれ。まるで私が逃げ出したみたいない方じゃない」

声のするほうを振り返れば、不機嫌そうなブリジットが戸口に立っていた。ゆるやかにウエーブのかかった長い黒髪は、冬に会った時よりもその長さを増していて、今では彼女が真っ直ぐ立ったときの手首の位置ぐらいいまで伸びている。つける口紅を変えているせいか、ブリジットの印象は前よりも大人っぽい色気を感じるものになった。

「いらつしゃい、クライドにノエル。久しぶりね」

ブリジットは大きな荷物を持ってカウンターに歩み寄り、荷物をイノセントに渡した。イノセントは無言でそれを受け取り、中に入っていた生物を冷蔵庫にいれている。

「イノセント、何怒ってるのよ」

「お前が勝手に出て行くからだ。その身体で無理をするなど、一体何度言えば解る。お前にも子供にも負担がかかる」

クライドは、二人のやり取りを見ていて何だかほえましい気持ちになった。これはイノセントがぶつきらばうに、それでもブリジットを氣遣っているということがありありと感じられる会話だ。この男なら、きつと立派な父親になるだろうとクライドは思う。

「……ごめんなさい」

「休んでいろ。今、茶を持ってくる」

しよげたように謝るブリジットに、優しく声をかけるイノセント。ブリジットは柔らかな笑みを浮かべ、クライドに歩み寄ってくる。

「驚いたでしょ」

「ああ、物凄くな」

悪戯っぽく笑うブリジットに、クライドは笑みを返した。もうじき母になるこの人は、クライドの従姉であり姉であり、友達のような女性だった。

「触ってみる？」

ブリジットは言いながら、クライドの手首を掴んで自分の腹に沿わした。暖かな体温と、彼女の服のざらつきを感じる。と、ブリジットの腹の中で何かが動いた。

「うわ、動いたっ」

思わず声に出してしまう。自分は一人っ子だし、周りに妊婦さんもいなかったのでもこんな経験をしたのは初めてだ。そんなクライドを見て、ノエルがくすりと笑みを漏らす。

ブリジットの腹の子は、クライドの手のひらが当たっているとこるを続けて何度か蹴ったようだ。彼女の身体の中に居るまだ顔も知らない子供が、クライドに一所懸命自分の存在を伝えようとしている。

「この子、女の子なんですって」

ブリジットは微笑みながら言った。ブリジットとイノセントの子

供なら、きつと美しくて頭脳明晰な女性に成長するだろうとクライドは思う。

そうか、この子は自分の『従姉違い』になるわけだ。クライドは、自分の親戚が増えるという感覚をまだ上手く実感できていない。ブリジットの腹から手を離して、クライドは彼女をしげしげと眺めた。「名前、もう決まってるのか？」

「いいえ。イノセントとふたりで相談して決めるのよ」

ブリジットは笑う。本当に幸せそうな笑みだ。イノセントはグラスを持ってきて、ブリジットに差し出している。彼女はそれを受け取って、何口か飲んですぐにグラスを置いた。

「ねえ、私の赤ちゃん。今の人が、クライドお兄さんっていうのよ」自分の腹を撫でながら、ブリジットは言う。そんなブリジットを、イノセントが優しく穏やかな眼差しで見つめている。本当に、イノセントは随分と変わった。

「ノエルも触ってみる？」

ノエルは頷いて、ブリジットの腹を撫でる。クライドの従姉違いはノエルの手のひらを蹴ったようで、ノエルは一瞬驚いたようにびっくりと動いた。

「セシイが母さんのお腹にいたのは、僕がまだ四歳のころだったからね」

ノエルはそういって、にっこりと笑う。ブリジットは興味を持ったのか、ノエルの話をじつと聞いている。ノエルは、自分が生まれた時のことや妹が生まれた時のことをブリジットに語っていた。

少し開いた窓から、涼しい風が一筋流れ込んできた。冷房がなくとも涼しいこの店が、リヴェリナで一番の避暑地だとクライドは思う。

「そういえば、クライド。ハビさんについて、訊かなくていいのかい？」

ブリジットに身の上話をしていたノエルが、唐突にそういった。

そうだ、すっかり忘れていた。クライドはここに来た目的を思い

出し、イノセントを見上げて問いかける。

「人工魔力を作ってる場所、あれから何か解ったか？」

訊ねてみると、イノセントはううんと唸る。彼は何と答えてくれるのだろう。クライドの知りたいことを、彼は知っているだろうか。そして今、ハビは一体どうしているのだろうか。また裏の人格で暴れて、誰かを傷つけてしまっていないか。良いのだが。

「一応、解ったことはある。結社があるのは海に面した国らしい。アルカンザル・シエロ島との空路と海路がしっかりとれている、大都市だという話だ」

「どこの国？」

「エナーク。地理に関してはノエルのほうが詳しいだろう」

その国は、先進国のひとつである。ラジェルナの丁度反対側にある国で、空路も海路も整っているから行こうと思えば行ける。ただ、かなり時間がかかるらしいが。

エナークはラジェルナよりも大きく、世界でもトップレベルの経済力を誇る国だ。知っている国を挙げるといわれたら、きっとどの国の人間も母国の次にエナークを挙げるだろう。存在感がある国というと何だか変な感じだが、エナークは確実に発展途上国の羨望を集めるような国だ。

「エナークの海辺にある大都市だね、解ったよ。首都ではないのかい？」

「いいや、違うな。首都ではないが、過疎地でもない」

ノエルの言葉に、イノセントは曖昧な答えを返す。イノセントは、直接マーティンがいる場所へ向かったことはないようだ。

それどころか、何故マーティンがイノセントにだけ執拗に攻撃をしかけてくるのか、最初は彼にも解っていなかったらしい。

「俺が殺してしまったのは、あいつの弟だったらしい」

イノセントは言った。そして、少しだけ笑う。強がりの笑みにも似た、苦笑だった。

「今更何をして、犯した罪は消えない」

彼がぼそりと呟いたその一言が、なぜかクライドの心の中に軽く痛みをもたらした。

しばらく四人で談笑していたが、クライドは窓の外を見て席を立った。もうすでに、日が暮れかけている。

ブリジットに軽い食事を用意してもらったため、空腹を感じることながなかったのだ。だから、時間の感覚が少し麻痺していたのだらう。

「そろそろ行くな。待ち合わせがあるんだ」

そういうと、ブリジットは柔らかに笑ってクライドに手を振ってくれた。イノセントは玄関先まで送ってくれる。

ノエルを連れて店を出ると、夕闇の迫る商店街には主婦がたくさんいた。今晚のおかずを何にするのか、決めあぐねている人も何人か見受けられる。

二人で、待ち合わせ場所に行くと、そこにはサラとシェリーが既に来ていた。アンソニーとグレンはまだ遊んでいるようだ。

「おかえりー、楽しかった？」

シェリーが上機嫌で笑う。クライドも微笑み返し、ノエルをすつと振り返った。彼はいつもどおり穏やかな顔をして、サラを見つめていた。サラはノエルを極力見ないようにしていたが、ふとした拍子に彼を見てすぐに目を逸らした。

シェリーもその瞬間を目撃したようで、クライドと目を合わせて何か訴えかけてきた。即座に、クライドは話題を考える。

「そついえばさ、二人とも。知ってるか？ ブリジット」

「ダメだよクライド。その話は、サプライズにとっておこう」

声に出すと、ノエルがやんわりとそつたしなめてきた。確かに、本人を直接目にした方が驚くだろう。

「ブリジットが…… どうしたって？」

「私、知ってるよ？ シェリーごめんね、教え忘れてた」

どうやら、この中でブリジットが妊娠したことを知らないのはシ

エリーだけらしい。考えてみればサラはそれなりにブリジットと親密だし、商店街をよく通る人間だ。気づかないほうがおかしいと思う。

「グレンとトニーもまだ知らないよな」

クライドはそうノエルに振ってみる。ノエルはシエリーを見て、それからクライドをみて頷いた。サラは相変わらず、ノエルを見ないようにしながら話に合わせて笑っている。

「シエリー、君だけじゃないから安心して」

「何それ、教えてよ。気になる！」

ノエルの言葉に不満を返しつつ、シエリーは上目遣いにクライドを睨む。しかしクライドはその視線を軽くかわし、サラに向かって微笑みかけた。

「なあサラ、今までで一番年上だった恋人は？」

そういうと、サラはしどろもどろになりながら頬を薔薇色に染めた。そんな様子をちらりと見たノエルが、小さく息を吐いた。クライドにはそれが、極力小さくしたため息のように聞こえた。

「何でそんなこと知りたいの？」

「サラに言い寄る男、多そうだから。どういふ男と付き合ってるんだろうと思うて」

焦ったようなサラの問いに思いつきでそう答えたが、実際はサラの関心をノエルに向けようとしたということに他ならない。恋愛に関連した話題をだせば、おのずともサラはノエルを意識するようになるだろう。それでノエルがサラを誘いやすくなれば良いと思ったのだ。

ノエルはすつとクライドから離れ、ひとりで海の方へ向かって歩いていく。彼が何を感じてクライドから離れたのかは解らないが、ノエルを追いかけていったシエリーの視線は何だか非難めいていた。もしかすると、今この状況を悪化させたのは自分なのだろうか？

「私、まだ誰とも付き合ったことないよ」

ぼつりとサラはそういって、シエリーの方をちらりと見る。シエ

リーはノエルに追いつき、彼の背中をばしんと音がするぐらいに叩いていた。叩かれたノエルは、結構痛そうだった。

「好きな人とかいないのか？」

訊ねてみると、サラに軽く睨まれた。彼女は重いため息をつき、再びちらりとノエル達を見た。二人は、落ちそうなほど海に近い位置で何かを話していた。時々ノエルが悲しげに俯いたり、シェリーが両手を腰に当てたりしている。

「解ってるよね、クライド鋭いから」

「まあな。だからわざとノエルの前できいた」

物悲しげなサラに対し、クライドはそう答えた。やはりサラも、ノエルと同じ気持ちだった。もしもこれを聞いていたら、ノエルは一体どういう反応をするのだろう。

「どうしてこんなに、こじれちゃってるんだろう。前まで普通に接することができたのに」

サラは俯き加減にそういい、小さくため息をついた。クライドはそんなサラを見下ろして苦笑する。全く、不器用な二人だ。

「無理にとは言わないけどさ、時々ノエルに話しかけてみるよ」

「どうやって話しかけたらいいの？」

その言葉に、クライドは頭を抱えなくなった。彼女は以前はノエルと普通に話していた。その感覚を取り戻せば良いというだけの話だろう。そんなに難しく考える必要はないのだと、クライドはサラに伝えたい。

「話題なんか何でもいい。リヴェリナで最近あったこととか、テレビで見たニュースのこととか。何でも良いからノエルに言ってみたらどうだ？」

サラから声をかければノエルは全くいつも通りに対応するだろう。しかし、サラがいつまでもノエルを視界に入れようとしなければならぬ事態は変わるかもしれない。

「そんなことでいいの？ それで私、元に戻るのかな」

「自然体を心がければ大丈夫だ。頑張れ。ちゃんとあいつを見てや

れよ」

驚いたように言うサラをみて、クライドは軽く笑みを浮かべた。振り返れば、ノエルとシェリーがこちらに戻ってくるどころだった。シェリーが何か言いたそうにしているが、ノエルは飄々として斜め前を見つめながら歩いている。

「ありがとう、クライド。これからも色々相談していい？」

「勿論だ」

サラの声に答えつつ、クライドは二人のもとへ歩いていった。

シェリーが駆け寄ってきて、小さく耳打ちしてきた。

「彼、結構シヨック受けてるみたい」

遠く離れた島国の言語で、彼女はそう言った。ノエルのことを彼と呼んだのは、恐らく万国共通の言葉である人名によって、話の内容を推測されることを恐れたからだろう。

「大丈夫だ、彼女の方に一応アドバイスしといたから」

ノエルもまだ勉強していないという言語で、クライドはシェリーに言った。シェリーは安堵したように表情を緩ませて、サラのところに駆け寄っていった。

クライドはそのまま前進し、ノエルに向かって片手を上げた。彼は少しだけ微笑んで、クライドを軽く見上げて訊ねてくる。

「サラ、僕について何か言ってたかい？」

「ノエル、クライド！」

クライドが答えようとする前に、問題の彼女の声でクライドもノエルも固まった。サラは優しげに笑いながら、手招きしている。サラの背後に、グレンとアンソニーが見えた。

クライドは、一瞬だけ考えてにこりとした。サラは今、何気なくノエルの名を先に呼んだ。

仲間達に手を振り、クライドは歩いてきた道を引き返す。

「クライド、知ってる？ エディがね」

アンソニーは満面の笑みで話し始める。彼の話によると、エディは今年初めて漁船で遠洋漁業に出向くらしい。職業体験ということ

で、学校から出航の許可が出たのだそうだ。これで夢に一歩近づけると言って喜ぶ、満面の笑みを浮かべたエディが容易に想像できた。

「出航が明日だから、エディに会えるの今日だけなんだ。出航記念で宴会やるから皆つれて来いって、スーさんに言われたんだよ」

浮かれた様子で言う彼が、その宴会に行きたいと言外に言っているような気がするのはいのせいだろうか。いや、いのせいではないだろう。

「じゃあ、折角だし」

答えると、アンソニーはとても嬉しそうにした。エディや漁師達に会えなくなるのは寂しいが、クライドたちは本当にタイムミング良くここに来ることが出来たと思う。もしも出発が明日だったら、エディたちは既にここから旅立っていたのだから。

「兄貴とブリジットも誘いに行こうぜ？ ほら、早く。会うの久々だなあ」

楽しそうにグレンが言い、クライドの肩を叩いた。クライドはノエルと顔を見合わせて、少し笑った。あの店に行つてブリジットと会った時にグレンが発する第一声が、とても楽しみだ。

「じゃあ、行こうか」

クライドがそういうと、友人達は頷いてついてきてくれる。これからどうするか具体的なことはまだ決めていないが、後回しでいい。クライドたちは漁師に会うために、宴会場に向かった。

第九話 宴の前に（後書き）

こんにちは。

作中の「従姉違い」という表現についてですが、これは「従姉の子供」という意味です。

よく考えたら『従姉の子供』を表現する言葉が知らなかったの
で、思わず検索しました。

第十話 門出の宴

宴会場はリヴェリナの町立で、主に漁師が豊漁祭のあとで酒宴をやるときに使うところらしい。他には学生たちの歓送迎会等でも使うし、時には葬式などでも使うという。この町の宴会場は、ただ一つなのだ。

勿論、今回の宴会でも漁師達が大量の酒を飲むらしい。漁師は皆、かなりの酒好きだと思う。

「エディ、未成年なのにお酒飲んだことあるんだって。意外だよね」
歩きながら、アンソニーが言った。

「え、お前ないの？」

思わず口走った言葉は見事にグレンの声と被り、クライドはグレンを見上げて苦笑した。アンソニーは酷く取り乱した様子で、クライドとグレンを交互に見上げてあたふたと慌てる。

「無いに決まってるでしょ、法に触れるよ！二人とも何やってるのさ？ ノエルからも何か言っただけで！」

「シャンパンなら飲んだことがあるけど。君達はどうか？」

彼なら飲酒などしてないだろうと思っていたのに、意外と普通にノエルは言った。クライドは軽く拍子抜けしたが、十七歳にもなればそんなものだろうと軽く流す。

「ええっ、ノエルまで！」

一人取り残されたアンソニーを見て、三人で声を合わせて笑う。その間ずっと、サラとシェリーは後ろの方で話をしてた。どうやら、ファッシュョンについての話題らしい。クライドには、ついていけない。

「そういえばさ、ノエルの父さんってデザイナーなんだろ？」

思い出してそう訊ねてみると、ノエルはにっこりと笑って頷いた。クライドは、前に一度ノエルの父に会ったことがある。ノエルの父は、鳶色の長めの髪に無精ひげという、いかにも芸術家らしい風体

の小柄な男性だった。ノエルは父親似で顔立ちや体つきがそっくりだから、ノエルに無精ひげを生やしてみたらこうなるのかと妙な感覚に陥ったことを覚えている。ノエルの父は、ディアダ語が得意ではないらしい。

「実はこの眼鏡、父さんが作ったブランドの限定モデルなんだ。世界に二つだけしかない型で、片方は父さんが使っているんだよ」

「へえ。珍しいデザインだと思ったら、そういう理由だったんだ？」
ノエルの言葉に、アンソニーが驚いている。確かにそれは普通の眼鏡に比べると、レンズの形や大きさ、フレームの角度などが微妙に違う気がする。良く見れば、テンプルの一部に何か文字が刻まれている。

「ちなみに、どんなブランド？」

グレンが訊ねる。ファッション関連の話題には興味をひかれるらしく、シエリーとサラもノエルをじつと見ている。

ノエルは相変わらず穏やかな笑みを浮かべ、クライドたちに向かって言った。

「ファッションブランドの『HOLLEY』って聞いたことない？」

「聞いたことない人、いないと思うけど……」

グレンが引きつった顔で笑った。クライドも、一瞬何を言われているのか解らなかった。そんな、まさか。ノエルと知り合ってもう四年がたとうとしているというのに、今までそんなことも知らなかったなんて。

『HOLLEY』は、すつきりしたデザインが人気の一流ブランドだ。世界的に有名なブランドで、都会に行けば専門店もあつたりするらしい。前に、テレビのニュースで『HOLLEY』のショッパに行列ができているところを見たことがある。クラスメイトに『HOLLEY』の専属モデルになりたいという女生徒がいたことを、ちらりと思い出した。

クライドはブランド品にはあまり興味を持たないが、前にノエルから誕生日プレゼントでもらったハンカチが『HOLLEY』だった

ことがあった。しかしあの時点で『HOLLY』がノエルの父が作ったブランドだと解ることが出来ていたら、それこそ奇跡だと思う。「ノエルのお父さんが？」

頓狂な声をあげるサラは、ノエルをまじまじと見つめている。身長が近い二人だが、ノエルのほうがわずかに高いので、サラはほんの少しだけノエルを見上げていた。

「そんな凄いこと、教えてくれないなんて……」

「父さんは隠したがるんだよ。僕も、あまり人には言いたくないし残念そうに言うサラに向かって、ノエルは微笑みかける。グレンがにやにやと笑い、ノエルの肩口を小突く。小突かれたノエルはよるめき、何が何だか解らないといった表情でグレンを見上げた。

「なあんかいいい雰囲気なんじゃねえの？ おい皆、撤退だ。こいつら置いてくぞ」

言いつつ、グレンは行ってしまう。アンソニーが慌ててグレンの後を追う。クライドもグレンたちを追いかけながら、ちらりとノエルを振り返って微笑む。うまくやれよ、と視線で訴えてみる。サラは緊張したように視線をさまよわせていたが、ノエルはクライドの視線にしっかりと頷いてくれた。

宴会場までの長い道のりを、クライドたちは歩いた。後ろから来る二人のことは、あまり気にしないことにする。暫く歩いていたが、唐突にアンソニーが声を上げた。

「僕らは独り者どうし楽しくやるよ。グレン、シエリー。僕ら、先に行くね」

そういつて、ずんずん先に歩いていくアンソニー。グレンは状況が理解できない様子で、「どうした？」とか「待てよ」などとアンソニーを引きとめようとしていた。クライドはそんなグレンを制止して、心配ないと笑った。

「嫉妬してるんだよ、お前とノエルに。じゃ、先行くな。ブリジットとイノセント、呼んでおいてくれ」

実のところ、クライドも少しだけ居心地が悪いと感じていた。シ

エリーはきつとグレンにべったりくっついていたいのだろうし、グレンは手ぐらい繋ぎたいと思っっているのかもしれない。何にせよ、アンソニーと自分は明らかにグレンたちの邪魔だった。

「まあ、グレンたちは勝手にいちゃつかせとけ」

アンソニーに声をかけると、彼はぎこちなく笑う。

「ごめんね？ 独り者同士ってひとくくりにしちゃって」

「いや、正論だろ。謝るな」

独り者。別に、独りが悪いわけではない。恋人のことを考えずに過ごす時間だって、決して無意味な時ではない。それでも、目の前で惚気られると少し羨ましくもなる。正直に言つと、ほんの少しだけ苛立つ。早く気の合う恋人を作れば良いのに、そうしない自分はやっぱりまだレイチエルのことを引きずっているのだ。それでは彼女にとっても良くないと思うし、自分でも未練がましいようで嫌になる。

「あー、彼女欲しい！」

夕陽がすっかり沈み、濃紺の空に浮かぶ雲にはかすかに夕焼けの名残が見える。昼間とはすっかり表情を変えた空に向かって、アンソニーはかなり大声で叫んだ。閑散とした港沿いの道には、アンソニーの声を聞いて振り返る人間が居ない。

「なら作れよ」

呆れ気味にクライドは呟いた。するとアンソニーは目を伏せて、ため息をつく。

「だって、もう傷つきたくない」

憂わしげな声。元気がとりのえのアンソニーが、真剣に悩んでいる。クライドは何とすべきか迷った。下手なことをいって傷つけたくないし、かといって気の利いた言葉が出てきてくれるかといえばそうでもないのだ。

「思い出は思い出。過去に縛られてると、恋もつまれないと思うぞ」
半分は自分に向けてそう言ってみると、アンソニーは頷いた。それきり、二人で無言で歩き続ける。

やがて宴会場につく頃には、微妙に落ち込んでいた気分もすっかり晴れていた。宴会場の入り口で、漁師が何人か手を振っていたからだった。大きく手を振り返すと、彼らが駆け寄ってくる。

「スーさんはもう宴会を始めてるよ。早く、早く」

去年よりも随分と日焼けして、小麦色になったジャックが言った。頷く暇さえ与えられずに、クライドとアンソニーは宴会場に連れられる。ドアをくぐると、空気が異常にアルコール臭かった。もう酒を始めているのだろうか？

歌ったり踊ったり、漁師はとにかく楽しそうだった。騒がしい宴会場の中には、酔っ払って真っ赤になった漁師がちらほら居た。低いテーブルには海の幸がずらりとならび、生きたままで刺身にされた大きなエビが触覚を動かしているのが見える。一瞬ぎよっとした食べられるのだろうかと思ったのだが、その瞬間に誰かがそのエビの背中から新鮮な身を取って食べる。漠然と、凄い光景だと思った。「クライド！ トニー！ 待ってたよ、こっち！」

そう言いながら、立ち上がって手を振っているのはエディだ。一瞬、その声の低さに驚いた。この短い期間に、声変わりをしたのだろう。前に見たときよりも背が伸び、日に焼けたエディは、いくらか男らしくなっていた。それでも、少年らしい笑みは去年と全く変わっていない。クライドはエディの隣に歩み寄り、彼の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「久しぶり、元気だったか？」

「もう元気有り余っちゃって大変」

言いつつ、エディはグラスに入った液体をぐいっと飲み干す。一瞬酒かと思ったが、それはただのリンゴジュースだった。近くに、まだ中身が残っているリンゴジュースの瓶があった。

「ね、他の皆は？」

「エディ君。それは大人の事情というものだよ」

ふざけてそういつてみる。するとエディは笑い、クライドの肩口を小突いた。

「クライドたち、まだ大人じゃないじゃん」

「まあな。大人じゃないけど、子供でもないだろ。ちなみに、ノエルとグレンはそれぞれの彼女とじゃれてる」

少しの皮肉を込めて言うと、エディはぐつと後ろに仰け反ってため息をついた。アンソニーは苦笑しつつ、エディの隣に座って勝手にリンゴジュースを飲み始める。

「うわあ、ついに彼女？ 僕、まだ誰ともつきあったことないよ」

「でも、好きな人はいるんじゃないの？」

声を上げるエディに、にやにや笑いながら声をかけるアンソニー。エディはたちまち顔を真っ赤にし、斜め下に視線を泳がせた。どうやら凶星のようだ。

「あれ？ エディ、顔真っ赤だよ？ それお酒？」

けらけら笑いながら、アンソニーがエディをからかった。クライドは笑いながらそこらにあったコップを勝手に使って、テーブルにあつた炭酸飲料を飲んだ。

「煩いなあとニー！ もう、いいじゃんそんな話題。ね、食べよ！」
アンソニーの言葉を適当にはぐらかし、エディはテーブルの上にあつた酒のつまみを口いっぱい頬張った。クライドは笑いながら、スタンリーの姿を探す。すぐに彼は見つかり、クライドと目が合つて手を振ってくれる。しかし、彼にはちよつとした変化があつた。右目に、白い眼帯をつけているのだ。クライドは立ち上がり、彼の傍に行つた。

「お久しぶりです」

「おう。良く来たな」

全くいつもどおりに、スタンリーは言った。小麦色に日焼けした筋肉質の彼は、宴会場を眺め回して嬉しそうに笑っている。そんな彼に近寄ると、ちよつと酒臭かつた。

「右目、どうかしましたか？」

「ああ、これか。獲つたマグロの尾が当たったんだ。もう二度と見えないが、まだやっていける」

それを聞いて、クライドは一瞬固まる。失明？ そんな。

「それでも、漁師を続けるんですか？」

「愚問だな。当たり前だ、俺は海に生きて海に死ぬ。漁は俺の生きがいだ」

片目を失ってもなお、漁師を続けるというスタンリー。凄いと思う。そういえば、漁師の一人に片足を引きずっている人が居たのを思い出す。足が悪くても、目が見えなくなっても、漁を続ける。そんなリヴェリナの漁師が、クライドにとって素晴らしいものに思えた。自分の仕事に誇りを持ち、生きがいに思う人はそうそう居るものではないのではないだろうか。

「頑張ってください。無理をしない程度に」

言つと、スタンリーは大声で笑ってクライドの頭を撫でた。何だか父に撫でられているみたいで、クライドは苦笑した。いつだって子ども扱い。クライドだって来年からはもう学校を卒業し、社会に出て行く身だというのに。

「クライド、この魚美味しい！ 早く来ないとなくなるよ！」

アンソニーが本当に嬉しそうに笑いながら、焼き魚を食べていた。クライドは苦笑し、スタンリーを見た。スタンリーは右目の眼帯をいじりながら、クライドの背をとんと押した。

「ほら、行ってこい。今日は楽しんでいけ」

「ありがとうございます」

スタンリーに会釈し、クライドはアンソニーの隣に座った。エディの母が、リンゴジュースの瓶をテーブルに補充し、クライドににっこりと微笑みかけてくれる。微笑み返すと、エディの母は忙しそうに他のテーブルに駆けていった。

近くのテーブルで、大声を上げて歌いながら踊りだした漁師が居た。それをみて、エディが腹を抱えて笑い転げる。

「あはは！ みて、ジェシーの踊り」

確かに、見ていて笑えた。調子はずれの歌に、酔ってへろへろした動き。いつもしている赤い鉢巻は、今日に限って腹巻にされてい

る。彼は精悍な顔つきで投網を構えているイメージがあつた漁師だから、それが余計にギャップとなつて笑えた。クライドも、エディと一緒になつてげらげら笑つた。

「てめえらも酒のみな、ほら」

言われて振り返ると、口許に酒瓶を押し当てられて驚いた。押し当てている漁師はかなり酔つ払つていて、目がとろんとしていた。クライドはとりあえず、酒瓶を押し返した。栗色の髪をしたハワードは、つまらなそうに自分で酒を飲んだ。

横を見れば、アンソニーが別の漁師に酒を呑まされかけていたところを、間一髪で救われているのが目に入る。

「未成年者にお酒をすすめちゃだめよ、ハワード。クライド、飲んじゃだめ」

そんな厳しい声に振り返ると、ブリジットが座っていた。微笑むと、ブリジットも微笑み返してくれた。

「おおブリジット。相変わらず綺麗だなあ」

にやりと口の端を上げ、ブリジットに擦り寄ろうとするハワードは、完全に酔つて理性をなくしているようだった。ブリジットはハワードをやんわりと押し留めるが、ハワードはブリジットの頬に手を添えた。

「俺と」

「おい、『俺と』なんだ？ ハワード。手を離せ」

何かいいかけたハワードに、鋭い声が飛ぶ。声の主はイノセントで、彼はハワードを冷たい目で見下ろしていた。物凄く怒っている。近寄るだけで殺されそうな勢いだ。

「ちつ。なあんだ、お前いたのかよ」

ハワードはつまらなそうに言い、瓶の酒を一気に飲んだ。そして大きく息を吐いたかと思うとその場に寝転んだ。クライドは啞然として彼を見るが、イノセントは彼に構わずにブリジットの隣に腰を下ろす。

「酔つ払つた野郎には気をつけると言つたはずだ。さつき絡まれた

ばかりだろう」

「もう。だってハワード、私の大事な従弟にお酒飲まそうとしたのよ?」

イノセントは、テーブルの上にあったコップで透明な酒を飲んだ。それはこの辺りで作られた酒らしく、瓶のラベルに「リヴェリナ銘酒 ヴアルガド」と書いてあった。酒を飲むイノセントを横目でちらりと見て、ブリジットは小さくため息をつく。

「飲みすぎないでね、イノセント」

ブリジットの忠告を聞いているのかいないのか、イノセントは透明な地酒を一気飲みしている。小さくため息をついて、自分の腹を撫でるブリジット。

「あれえっ? ブリジット、何そのお腹」

驚いたような声に振り返ると、漁師達の乱闘に巻き込まれかけていたアンソニーが、ブリジットを見下ろしていた。ブリジットは微笑みながらアンソニーを見上げ、イノセントはアンソニーを微妙に睨んだ。どうやらイノセントは、アンソニーをまた酔っ払った漁師だと勘違いしたらしい。

「赤ちゃんよ」

「へえ、凄いや! 男? それとも女? 今何ヶ月? いつ産まれるの?」

物珍しげにブリジットを眺め、質問攻めにするアンソニー。何から答えて良いのか解らないようで、ブリジットは困ったように笑いながらイノセントを見た。イノセントは俺に振るなどでも言いたげに眉を顰め、軽く首をかしげている。

「女の子よ、トニー。十月の終りに産まれる予定なの」
ブリジットはにこりと微笑んだ。

「なんか、女の人って凄いな」

輝かしい笑顔のアンソニーを見て、クライドもつられて微笑んだ。まるで時間の感覚がないかのような空間で、酒宴は続く。ブリジットやイノセントは、遅くならないうちに帰っていった。妊婦が宴

会場に長時間いるべきではないと思うし、名残惜しかったがきつと明日もまた会えるのでクライドは笑顔で二人を送り出した。

クライドの隣ではしゃいでいたアンソニーは、疲れたのかテーブルに突っ伏している。良く見れば辺りには同じような状況の漁師がたくさんいて、クライドは少し笑ってしまう。これでは、まるでアンソニーが酔って寝ているおやじの仲間入りをしているようではないか。

「クライド、あたしそろそろ帰らなきゃ。サラの家の門限、厳しいから」

テーブル二つ分離れた場所から、シエリーが言う。彼女の長い髪は、なぜかゆるく編まれている。おそらく、女の子同士で髪をいじりあって遊んでいたのだろう。何だかほほえましい。

「そっか、シエリーはサラの家に泊まってくんだったよな。じゃあ、また明日会おう」

「うん、おやすみ」

シエリーは、髪をおだんごにしたサラと連れ立って宴会場を出て行った。その後姿を、グレンとノエルがじっと見送っている。だが、不意にノエルが席を立った。

「クライド。僕、二人を送ってくるよ。夜道に女の子だけじゃあ、危ないからね」

さすが、ノエルは紳士だ。クライドは、二人の姿を見てそこまで気が回らなかった。宴会場は明るくて華やかしているので、外がもう真っ暗であるということをおぼえていたせいでもあるかもしれない。

軽く頷こうとすると、グレンも席を立った。しかし、ノエルは慌ててグレンを再び座らせる。

「ああ？ あんだよ……」

「君はいいよ、酔って千鳥足だから。さっきから、呂律回ってないしね」

なるほど、グレンの周りには酒の瓶が何本も転がっている。あんなに飲んでしまって良いのだろうか？ いや、漁師が飲み散らかし

たのかもしれないが。

「……いつてらっしゃい」

苦笑気味にノエルを送り出す。ノエルはクライドに向かって微笑すると、走って二人の後を追いかけていった。

さて、後には何だか微妙に白けた雰囲気が残る。クライドは酔ったグレンと突っ伏したアンソニーを見てため息をついた。夏休みはまだ始まったばかりだが、早速こんなに疲れてしまっている。まあ、一日ぐらい羽目を外したっていいか。だが、話し相手がいないのはつまらない。

漁師達は楽しそうに飲み、食い、踊っていた。そんな中に、エディも混ざっている。宴会場にいる人間の三分の一ぐらいが、既に泥酔しているか疲れきっているかでその辺りに突っ伏したり寝転んだりしている。クライドは用意された魚料理を食べながら、一人寂しくノエルの帰りを待った。

第十一話 離別

どこか遠くから、呼ばれている感じがする。しかし、クライドはそれに応じようという気になれなかった。

「……ド、クライド！」

耳元で聞こえた声に飛び起きる。今のはグレンの声だ。

「何だよ、酔いはさめたか？」

笑い気味に言ってみれば、グレンはにやりと笑う。薄明るい宴会場は、少し前に見た時とちよつと雰囲気が違うような気がした。原因は、カーテンを閉め切った窓の外にあるようだ。カーテンの隙間から、白い光が見える。何かの照明だろうか？ 漁船の照明をテストしているのかもしれないと、寝ぼけた頭でぼんやり思う。

「お前何時だと思ってるんだよ、今」

「え？」

ポケットの携帯を取り出してみると、液晶画面には八時五分という表示がある。辺りを見回してみれば、酒瓶が沢山転がっていた。泥酔していた漁師たちは、遠洋漁業にもう出向いたらしい。周囲には、漁師ではない男性が何人が熟睡している。

「俺、寝てた？」

今更こんなことを訊くのも可笑しいが、クライドは寝ていたようだった。座ったまま寝ていたせいで足がしびれて、伸ばすのが辛い。痛みに顔をしかめていると、後ろからアンソニーが笑う声があった。

「うん、物凄く気持ち良さそうに寝てたよ。皆で起こすのためらつて、僕らはここに泊まることにしたんだ。エディたち、真夜中に海へ出て行つたよ」

振り返ってみると、寝癖で髪がぼさぼさになったアンソニーがいた。彼もおきたばかりらしく、眠い目を擦っている。グレンは立ち上がって、アンソニーの髪を手で撫で付けている。二人が兄弟に見えてきて、クライドは少し和んだ。

そうか、夜中から出航か。それは大変そうだ。エディはきつと、眠らずに船に乗ったのだろう。健康に悪いと思うが、中途半端に寝て起きられなくなるよりは良いと思う。

グレンもいる。アンソニーもいる。シェリーとサラは、サラの家にいる。……いや、おかしい。それでは、一人足りないではないか。昨日出て行った時を最後に、クライドはノエルの姿をまだ確認していない。

「ノエルはどうした？」

「熟睡中」

何だか楽しそうに、グレンはクライドの横を指さす。彼の指につられて隣を見ると、ノエルがテーブルに突っ伏していた。

ブランド品だと言っていた眼鏡は、外されてノエルの肘近くにある。興味本位でかけてみると、その意外な軽さに驚いた。薄くて度が入っていないように見える眼鏡だが、実はかなり度がきつい。視界はぼやけて見えなくなり、目の前がくらくらした。視力が悪い人は、眼鏡を外すと世界がこんな風になるのだろうか。

「お。眼鏡似合うな、クライド」

そうだろうか。グレンの意外そうな顔に、クライドは少しだけ照れた。服でも靴でもバッグでも、自分が気に入っているものを他人に似合うといわれれば自然と嬉しくなるものだ。

落とさないように注意深く眼鏡を外し、ノエルの隣においてやる。するとノエルは、手を伸ばして眼鏡をぎゅっと掴んだ。その手が自分を掴もうとしたような気がして、クライドは一瞬だけ驚いた。だが、次の瞬間。

「フランベして、皿に載せて。そう、作っておいたソースと、バジルの葉を……」

ノエルは、どこか抜けた声で言った。おそらく寝言だろう。それではなければ、寝ぼけているのか。ノエルは夢の中で、料理をしているらしい。しかも、今のはウィフト語だった。寝言まで外国語だなんて、ノエルは本当に凄い人だと思う。

「ねえクライド、今ノエルなんて言った？」

アンソニーは興味ありげにノエルを眺め、面白そうに笑っている。確かに、ノエルが訳の解らない寝言を言ったら笑いたくもなる。知的だったり完璧主義だったりするノエルが、こんな隙を見せるなんて。

「何か料理してるっぽいな、ノエル。ウィフト語でフランベとかバジルの葉とか言ってた」

笑いながら答えると、アンソニーは大きく笑い始める。グレンはアンソニーと一緒にあって笑いながら、クライドの隣に座った。よほど可笑しいのか、グレンは笑いを堪えながらノエルを見つめて、また堪えきれなくなって笑っている。

「俺はてつきり、意味不明のディアダ語を喋ってるのかと思ってたけどな」

確かに今の言葉は、理解はできたものの微妙に呂律が回っていなかった。ウィフト語でもそういう風に聞こえるということは、ディアダ語しか解らないグレンにはもっと不可解で変な言葉に聞こえただろう。

「……おはよう」

三人で笑う声が煩かったのだろうか。言いながらおきたノエルは、微笑んではいるものの微かに不機嫌そうだ。彼は、掴んでいた眼鏡を不可解そうに見下ろしている。どうやら、寝ぼけて掴んだことを忘れていたようだ。

「おう、おはよう。ノエル、お前何か料理してる夢みなかったか？」

グレンは笑いながら、ノエルの肩を軽く叩く。ノエルは小さくあくびしながら、眼鏡をかけてあたりを見回している。

「料理教室を開いている夢だったよ。生徒は君達」

「なのにウィフト語？」

鋭く突っ込んでみると、ノエルはばつが悪そうな顔で笑う。多分ノエルは、サラの夢を見ていたのではないだろうか。ウィフト語とノエルといったら、これしか心当たりがない。

「白状するよ、サラの夢だった」

仕方なさそうな笑みを浮かべながら、ノエルは前髪を手で整えている。グレンは笑いながらノエルをからかい、アンソニーは驚いたような顔をしていた。

「サラとシエリーは？」

グレンの笑いがおさまるのを待って、そう訊ねてみる。すると、これにはグレンではなくノエルが答えてくれた。

「昨日、九時に港で待ち合わせってことにしておいたけど」

「そっか。じゃあ、ちよつと早いけど行ってみるか？」

「そうしようか」

話が決まったので、クライドは立ち上がって宴会場を出た。

照りつける日差しに顔をしかめつつ向かった先の港には、サラもシエリーもいなかった。立って待っているのも何だか疲れるので、自分達の船の甲板で待つことにする。

港に泊まっている漁船は昨日より圧倒的に少なくなっていて、クライドたちの所有物である漁船は周囲から浮いて見えた。潮騒に耳を傾けながら、クライドは船の甲板に上がる。遠い海の彼方を見つめると、眩しい夏の日差しに目が眩んだ。

「なあ、今日どうする？」

グレンに問われ、振り返る。夏が似合う健康的な少年は、船室入り口のドアにもたれかかりながらこちらを見ていた。クライドが考え始めると、遠慮がちにアンソニーが口を開く。

「あまり長居すると、ここから抜け出せなくなりそう」

「確かに、それはあるな」

クライドは、彼の意見に大いに同感だった。このままい続けたら、それこそブリジットが産出するごろまでこの町で過ごしすぎてしまいうな気がする。

ここには、全てのことをやりおえたらまた戻ってくる。そのときにまた何泊かしていけば良いのだから、名残惜しい気持ちを今絶っておかなければ。このままでは夏休みが終わってしまう。

「納得できる。けど、シエリーはまだサラと一緒にいたいんだろうな。ほら、あいつ女友達少ないから」

軽く笑いながら、グレンは言う。グレンは本当に気配り上手な男だとクライドは思う。ノエルも軽く頷きながら、こちらをちらりと見た。

「向かう方面は、首都圏かい？」

まだ決まっていらないが、一応頷く。すると、アンソニーが笑った。アンソニーもグレンと同様、首都の方に興味があるらしい。

「グレン、スカウトされちゃうかもよ？」

楽しげに言うアンソニーに、クライドもつられて笑う。もしもスカウトされたら、グレンはどうするのだろう。モデルやらなにやらの仕事を引き受け、クライドたちとは別行動をするのだろうか。少し寂しい気もしたが、それはそれでグレンにとっては良いことなのかもしれない。

「グレン、『HOLLY』のモデルやらないかい？」

『HOLLY』創立者の息子であるノエルが、いつもどおり穏やかな笑みで言う。ここに残りたいか早く進みたいのか、ノエルだけがまだ意思表示をしていない。しかし、この様子からすると早く進みたいのだろう。ノエルも多分、クライドと同じ考えだ。このままサラと一緒にいたら、本当に別れが辛くなると彼は悟っているのかもしれない。

「お、早速スカウトだ」

軽い調子で言っで見ると、グレンは満面の笑みを浮かべる。しかし、答えはノーだった。ここで頷いておけば、本当にモデルになれるだろう。それなのにだ。

「遠慮しとく、俺は歌手志望だから。それに、撮影って結構時間かかるだろ？」

「そうだね、一枚撮るだけで結構かった。カメラマンが凄くこだわる人で」

ナチュラルに頷いているノエルだが、クライドは首を捻った。ま

るで自分が撮影を体験したかのような、この言い方。もしかすると、ノエルはモデルまでやっていたりするのだろうか？

「ってノエル、モデルやったことあるの？」

クライドが訊きたかったことを、アンソニーが代弁した。ノエルは苦笑しながら、軽く頷く。やはり、そうか。クライドは、ノエルのことを本気で凄いと思った。彼は、運動神経以外の殆どに恵まれている。だからこそ、完璧を目指す孤高な性格になってしまったのかもかもしれないが。

「先月、父さんに強制されて一枚撮ったんだ。でも、もう絶対にやらない」

ノエルはアンソニーに向かって、もううんざりだと言いたげな表情をおくっている。そんなに嫌な記憶だったのだろうか。写真一枚ぐらい、もう一回撮ったって良さそうなのに。

「いいじゃん、ノエル格好いいんだから」

「じゃあ君は、全世界の『HOLLY』専門店に自分の半裸をさらけだしても平気なのかい？」

残念がるアンソニーに対して、ノエルは苦笑しながら言った。なるほど、ノエルはそれで撮影が嫌になったのか。確かにノエルの骨っぽい体型は、モデルには向かないかもしれない。本人もそれがコンプレックスなのだろう。

「女じゃあるまいし、別に気にすることじゃないと思うけど」

グレンは至って普通にそういう。彼の体型なら、堂々と半裸で雑誌に載ることが出来ると思う。それにグレンなら、どんな服でもクールに着こなせそうだ。

「その写真、今はどうなってるの？ まだ専門店に飾ってあったりする？」

興味ありげに、アンソニーが問う。ノエルは一瞬固まって、それから微笑を取り繕った。この反応だけで、写真が飾ってあったり看板にされていたりするような可能性が十分に窺える。

「もうノーコメント。見つけたらこっさり火でもつけて」

「よし、じゃあ剥がして持ってきてサラにプレゼントしてやるから。ほら恥ずかしがるなって、サラ大喜びだぜ？」

「グレン、お願いだからそれはやめて。本気である構図は嫌なんだ」
ノエルとグレンの会話を聞きながら、ポケットに入れた携帯を見た。もう九時をすぎているのに、彼女達がまだこない。

何だか、急に胸騒ぎがしてきた。クライドの知る限り、シエリーは絶対に待ち合わせには遅刻しない人だった。それに二人とも、本来ならそれぞれの想い人に会いたいと思って早く来ようとするのではないだろうか？

「なあ、シエリーとサラ遅くないか？」

「確かに。どうしたんだろう、寝坊かな」

クライドの声にはアンソニーが答えてくれる。ノエルが微かに不安そうな目をして、あたりを見回した。グレンも同じように辺りを見回していたが、急にぼんと手を打った。

「あ。電話掛けてみるよ、クライド」

そうだ。サラの家に電話をしてみれば、二人がまだ家にいるかどうか解る。どうかこの胸騒ぎが気のせいであって欲しい。クライドは、そう思って携帯をポケットから取り出した。

「解った」

メモリーを呼び出して、サラの自宅に電話する。出たのはサラの母親だった。クライドは自分がサラの友達であることを告げて、待ち合わせ場所に来ない二人がまだ家にいるか確認してみる。

「サラもシエリーも、家にはいないわよ。三十分前には出たんじゃないかしら。てっきり、もうそっちに着いているものだと思っていたのに……」

サラの母親は、心配そうに言った。クライドは軽く頷いて、あたりを見回す。こうしている今にも、彼女達がここに来てくれればそれで全て解決する。しかし、彼女達の姿はどこにもみえない。

「解りました、探してみます」

答えて電話を切り、携帯をポケットにねじ込む。どんどん悪い予

感がしてきた。クライドは、仲間三人に目配せして漁船から降りた。「三十分も前にもう出たつて。探そう」

するとグレンはすぐに反応して、東に向かって走って行く。走りながら一旦止まり、こちらを向いて叫んだ。

「俺、ウォルの小屋方面を探してくる！」

その声に、クライドは頷いた。ノエルは西の方向に身体を向け、首だけでこちらを振り返る。

「じゃあ僕は反対側。アンソニー、君はブリジットの家について聞き込みをして。クライドは」

「この辺りで、人目につきにくい場所。もしかしたらつてことも考えられるから」

彼に全部言われる前に、彼が言いそうなことを口にした。

犯罪に巻き込まれる危険性。それは、平和なアンシエントタウンでは限りなくゼロに近かった。しかしここは、隣町や海から沢山のものが流れ込んでくる港町だ。サラとシェリーが誘拐されたり、殺されかけたりしているのかもしれない。クライドは走って、直感的に港の倉庫街へ向かった。

嫌な予感が当たっていないことを祈り続けながら、たくさん並んだ倉庫の間に伸びる薄暗い路地を入念に調べる。ここにはいないかもしれない。

クライドが倉庫街から退こうとすると、どこかの倉庫で何か物音がした。壁を叩くような物音だ。音のした方へ動く。

いくつかの倉庫には、鍵がかかっていたいなかった。そのうちの一つから、先ほどの物音が聞こえたのだと思う。クライドは、慎重に耳を済ませて歩く。波の音に交じって、男の音が聞こえた。足を止めて方角を特定する。

間違いない、一番海側の倉庫に誰か人がいる。確信したとたんにクライドは風を切つて走る。

「サラ、シェリー！」

倉庫の戸を開け放つて叫ぶと、中で何か動くのを捉えた気がした。

倉庫の外と中では明るさが激しく違うので、目が眩んで倉庫の中が真っ暗に見える。何か銀色のものが閃いたのを見た気がして、さつと避けるとクライドの頬を掠めて鋭利なものが飛んでいった。頬を触ってみると、血がべっとりついていていた。刃物か何かを投げつけられたらしい。

頬に生ぬるい液体が流れるのを感じ、クライドは立ちすくむ。

「クライドっ！」

シェリーの声に、はっとした。怯んでいる場合ではない、二人を助けなければ。暗闇に目が慣れてくると、倉庫の奥のほうに薄い蔦色をした髪が見えた。二人はまだちゃんと生きていて、クライドに助けを求めている。

「待ってる、すぐ行く」

駆け出すと同時に、さつと右に避ける。左で微かに何かが動くのを捉えたからだだった。反射的に構えると、相手が見知った人物であることに気づく。

「……お前」

言葉が続かなかった。まさか、こんなところでこんな人物に出会うなんて。

彼は、所々がシワになった白衣を着ていた。ぼさぼさの黒髪は相変わらずだが、白衣の下にはワイシャツを着ている。以前会ったときにもつけていた赤い額飾りは、心なしか前より汚れていた。

どう見ても、彼は山賊のデゼルトに違いなかった。忘れようにも忘れられない。彼は、去年の旅でクライドの前で人を殺してのけたあの少年だ。今はもう、少年というより立派に青年らしい風体になっているのだが。

ノエルの脅しに負け、グレンとの喧嘩に負けたデゼルトだから、そのことをまだ根に持っているのかもしれない。

「チッ」

デゼルトは舌打ちし、凄い速さでクライドの脇腹に蹴りを入れてきた。防ぎようがなかった。クライドは埃っぽい床に倒れ、何度も

咽た。二人の悲鳴が聞こえる。何とか立ち上がらなければ。立ち上がって、助けなければ。

そうだ、魔法で彼を足止めしよう。クライドは片腕を使って起き上がり、サラに向かってナイフを振りかざしている。デゼルトに向かって叫んだ。

「やめろっ！」

想像する。デゼルトが天井から落ちてきた電気の配線にナイフを当てて、感電するところを。

しかし、何故だろう。配線は落ちてきたがナイフが上手く絡まらなかった。ただ、一瞬デゼルトが天井に気をとられた隙に彼に自身を食らわせることならできた。

どうしてだろう。魔法が、いつもより弱くなってしまっている。想像の通りに魔法が働かないのだ。

「サラ、無事か」

身を竦めて座り込んでいるサラに手を差し伸べると、彼女は震えながら頷いてクライドの手を握った。ほっとして、クライドは微笑む。しかし、すぐに緊張を取り戻した。まだ、シェリーがいる。

サラに背を向けると、デゼルトの腕にシェリーが抱えられているのが目に入った。獲物を狙う鷹を思わず、デゼルトの鋭い目つきに思考が止まる。腕に抱えられたシェリーがぐったりとしているのを認識して、一瞬後に焦りが戻ってきた。デゼルトはシェリーを姫抱きにして、倉庫から出ようとする。走って追いかけるが、デゼルトは女の子を一人抱えているというのに足が早い。それでも、逃がすわけにはいかない。

「シェリーっ！ シェリー！ おい、待てよデゼルト！ ふざけんな！ おい！」

怒鳴りながら走る。埃っぽくて真っ暗な倉庫からでた所で目が眩み、一瞬足をゆるめてしまったのが命取りだった。クライドの目の前で、デゼルトはシェリーを抱いたまま軽トラックに乗り込んだのだ。啞然とした。

嘘だ。認めない。何故、シェリーが誘拐されなければならないのか。

クライドは走った。ただ、ひたすら追いつきたくて走った。走って軽トラックの荷台に飛び乗ろうとするが、陸上競技の選手でもないクライドが車に追いつけるはずも無い。頭の中は、既に焦りで支配されていた。想像など出来るはずもなかった。

クライドは、どんどん離れていく軽トラックに追い続けた。走りながらナンバーを記憶し、首都方面に向かう軽トラックを追い続ける。通行人が怪訝な目で振り返った。徐々に距離が離れていく。デゼルトと、シェリーが離れていく。やがて、デゼルトの軽トラックは交差点を左に曲がった。クライドがその交差点に着いたときには、すでに軽トラックはどこかへ消えていた。

まさか。まさか、こんなことになってしまっなんて。

クライドはがくりと膝を折り、道路の真ん中で頂垂れた。

第十二話 罪科、そして罰

うなじに日光が当たって、じりじりと熱かった。車のクラクシヨンの音で、クライドは我に返って背後を振り返る。顔を上げた拍子に、額から頬にかけて汗が流れ落ちた。自分はそんなに長時間、ここで項垂れていたのだろうか。

のろのろと立ち上がり、道路から退く。車に乗っていた中年男が、バカヤローとか死にたいのかとか叫んでいたが、クライドは虚ろに彼を一瞥しただけだった。

どうしよう。どう言えば、皆が納得する？

いや、納得してもらおうかもらえないかの問題ではないだろう。どうすればシェリーを追いかけられる？ 早く追いかけて、取り返さなければ。しかし、軽トラックはもう既にどこかへと消えうせてしまった。手がかりは彼が向かった方向と、この州で発行された四桁のナンバーだけ。

ナメクジのような緩慢さで、クライドはのろのろとサラがいた倉庫へ向かった。皆に会いたくなかった。シェリーが目の前で誘拐されたのに犯人を取り逃がしてしまった自分に、どうして誰かが微笑みかけてくれよう？

クライドは誰かに許されることを望んではいけない。けれど、それでも許して欲しかった。頑張って追ったのだ、それで逃げられてしまったのだから自分は悪くない。そういつて、逃げたかった。けれど、それが『逃げ』だと解っているから、クライドは悪いのが自分であるとひたすら思っていた。

シェリーはクライドの大事な友達で、それはノエルやサラやアンソニーにとつても同じことだ。そして、グレンにとつてシェリーは大事な恋人だった。

そんな人を、誘拐させてしまったのが自分だ。守るべき人を、大

切な人を、敵に取られてしまったのは自分。クライドのせいなのだ。俯きながら、倉庫に入る。明るさの激しい差のせいで、内部はまたしても真っ暗に見えた。小さな声で、漆黒の闇に向かってサラの名を呼んでみる。返事はなかった。

「サラ？」

少し大きい声で、もう一度呼んでみる。焦りが湧いてきた。敵が一人ではないとしたら？ シエリーを誘拐したデゼルトのように、サラを誘拐しようとしたくらむ誰かがいるのだとしたら？ 必死になつて、闇に目を凝らす。

「クライド、ここ」

だんだん目が慣れてきた頃、心細そうな声がした。振り向くと、大きな木箱の影に隠れたサラを見つけることができた。ほっとすると、膝の力がぐんと抜けた。

「シエリーは？ シエリーは、どうなったの？」

よろよるところに駆け寄ってくるサラは、蒼白な顔色でクライドを窺っていた。クライドはサラを見上げ、堪らなくなって下を向いた。サラは信じてくれていたのに違いないのだ。クライドが、サラとシエリーの両方を守ることを。

けれどクライドは、助けられなかった。シエリーをみすみすとられてしまった。白衣を着た山賊に、トラックで逃げられてしまったのだ。

「サラ、ごめん。ごめん。追いかけたよ、追いかけた。走って追いかけた。けど俺、あいつを捕まえられなかった。シエリーが、俺のせいで」

「ぐすつ……」

サラはクライドの隣にぺたんと座り込んで、泣き始めた。クライドに失望したのだろうか。クライドがシエリーをちゃんと連れ帰ると、サラは信じていてくれたのに。その期待を踏みにじったクライドを、サラは責めているのだろうか。解らない。サラがどんな気持ちで泣いているのか、解らない。

それでも、ただ一つ解ることがある。二度と許されることの無い罪を、シェリーやサラだけではなくグレンたちにもまでも、クライドが犯してしまった。それだけは確かな事実で、自分は十分責められるに値する人間だとクライドは深く深く思っていた。

放心してサラの泣き顔を見ていることしかできない自分を腹立たしく思い、あのとき魔法を使ってタイヤをパンクさせるとか、そういうことだっただけじゃなかったか？と自分に呆れ、最終的にクライドは自分に失望した。

「ごめん、シェリー。ごめん、サラ。ごめん、皆。いくら心の中で後悔しても、いくら心の中で謝っても、帰って来るものはなにもない。解っているけれど、クライドはひたすら後悔し続けた。」

「シェリー、サラっ！」

叫び声と同時に、ドアが蹴飛ばされる音がした。反射的に振り返ると、眩しい日光を背中から浴びた長身がみえた。逆光で目が眩んだが、明らかにグレンだ。クライドはよろりと立ち上がり、グレンをじっと見た。グレンはつかつかと歩み寄ってきて、泣いているサラと突っ立っているクライドを交互に見比べ、倉庫全体を見渡した。「シェリー？ クライド、シェリーは？ あいつはどこいった？」

次第にグレンが焦り始めたのが、クライドにはすぐに解った。けれどシェリーが誘拐されてしまったことをどう切り出しているか解らずに、クライドはグレンへの返事を少し遅らせてしまった。

「ごめん。ごめんな、グレン。守ってやれなかった。逃げられた。走って追いかけたけど、相手は車で」

「やっといえた言葉はひどくこちなく、訥々としていた。まるで自分の声ではないみたい。苛立たいぐらいの煩わしさを感じる。自分にも、自分のこの情けない声にも。」

「は？ ごめんって何だ？ ごめんって、どういう意味だよ。サラはここにいる。サラがここにいるなら、シェリーだってここにいる。逃げられたって、何だよ。お前、何言ってる？」

グレンは混乱しているようだった。物凄く怒っているようだった。

クライドの態度も、シェリーがここにいないことも、グレンを怒らせる要因になっっているようだ。クライドは俯き、自分の足元を見つめた。

「誘拐、されたんだ。山賊のデズルトに」

ぼつりと、履きなれたスニーカーを見つめながら呟いた。一瞬、聴覚がなくなっただのと錯覚してしまうような静寂が訪れた。しかし。

ばんっ！

耳元で聞こえた音に、心臓がびくりと跳ね上がった。その音に驚いたのもあるが、自分が固い木箱に押し付けられて胸倉をつかまれているという事態にクライドは衝撃を受けていた。一拍遅れて、木箱に押し付けられた背中に痛みを感じる。

「ふざけんなっ！ ふざけんじゃねえよっ！ いい加減にしろ！」

クライドの胸倉を掴み上げながら、グレンは真剣に怒っていた。

クライドはそんなグレンの蒼い目を見つめ、心の中で彼に深く詫びた。彼の一番大切な人を、クライドは敵にやってしまったのだ。本当は渡すつもりなんて微塵もなかったに決まっているけれど、それでもクライドがデズルトを逃がしてしまったのは事実であり、消すことの出来ない罪だ。

「誘拐？ 何言ってるの、お前？ お前さ、まさか目の前で誘拐犯に友達誘拐させた訳？」

クライドは目を伏せ、涙を堪えた。屈辱感にも耐えた。自分が悪いんだ。なのに反論したいだなんて、それは単なるエゴだ。

しばらくクライドの様子を見ていたグレンだが、急にクライドを解放した。そして、いつもどおりの陽気な笑いを浮かべる。

「……ああ。そうだよ。ははっ、冗談か！ クライドだもんな、クライドがシェリーを助けてくれない訳ないもんな。もー、変な演技すんなって。シェリーはどこだ？ その木箱ん中か？」

一瞬、グレンが壊れてしまったのかとクライドは思った。けれど、すぐに気を取り直してグレンの右肩に手を乗せる。冗談ではなく、演技でもなく、本当にシェリーは誘拐されてしまった。これはグレンが信じたくないが故にした行動かもしれないけれど、クライドは本当のことを伝えて、早くシェリーを取り戻すことを考えなければならぬと思っていた。

深呼吸し、彼の澄んだ瞳をじっと見つめる。グレンは陽気な笑いをひっこめ、急に無表情になった。クライドは一瞬ためらってから、すぐに口を開く。

「グレン、違うんだ。本当に誘拐され……」

最後まで言えずに、視界が凄い勢いで横にぶれた。直後、頬に感じる熱。グレンに殴られたのだと理解するまでに、数秒かかった。

埃っぽい床に倒れたクライドだが、起き上がるうとはしなかった。こうされて当然なのだ。自分がしてしまったことを考えたら、グレンがこんな怒るのだって当然なのだ。殴られても、文句は言えない。

クライドは頑張つてシェリーを追いかけた。追いかけたのに、相手に逃げられてしまった。もっと早く走ることができたら。もっとトラックを遅く走らせることができれば。クライドはシェリーを取り返していたはずだったのに。

けれど、それができなかった。それができなかった、その時点でクライドが全部悪いのだ。シェリーを守れなかったのは、クライドの責任だ。グレンに愛想を着かされるのも、無理のないことだった。グレンが木箱を蹴飛ばす音が聞こえた。八つ当たりだろう。おそらく、このままクライドは木箱と同じようにグレンに蹴られる。しかしクライドは、罰を受けて当然なのだ。殴られた頬がじんじんと熱を帯びて痛かったが、それ以上に心のほうが痛かったし苦しかった。自分は、何てことをしてしまったんだろう。

「認めたくねえよ！ お前がシェリーを助けてくれなかったなんて！」

その言葉に、クライドが耐えていた痛みが全て爆発した。喉を絞められるような感覚に陥り、目が熱を帯びてきて、クライドは気づいたら泣いていた。

解っている。期待されていたと、希望をもたれていたと、解っている。だからこそクライドは、期待に副えなかった自分を酷く恥ずかしく思った。あんな悪魔のような男に、あんな残酷で非道な男に、シエリーをとられてしまったのだ。それなのに、なぜ自分はこのうとサラやグレンの前に姿を現すことができたのだろう。結果、二人には深い傷を与えることになってしまったのに。

あの場所で、あの状況で、シエリーを救えたのはクライド意外にはありえなかった。だからその唯一の助っ人である自分が友人の危機を救えなかったなんて、罪以外の何でもないのだ。

「何考えてんだよ。何考えて…… デゼルト？ あいつだろ、あの黒髪の。あの人殺しの！ あんな殺人鬼にシエリー誘拐されたらどうなるかぐらい、お前馬鹿じゃないから解ってるだろ？ それとも、そんなことも解んないぐらい、馬鹿になっちまったのかよ！ クライド！」

グレンは叫び、何度も壁を殴りつけた。形の良い大きな手が、何度も何度も硬い壁を殴っているのが視界に入る。クライドは埃だらけの床から身を起こして座り込み、俯いて泣いた。無言で泣いた。どうしようもないことをしてしまったと既に気づいていたし、何度も壁を殴るグレンの姿が痛々しくて悲しかった。

もうやめてくれ、悪いのは俺だ。クライドは叫んだ。彼女を守れなかったのは、クライドのせいだ。クライドのせいで、大事な人が何人も傷つくことになったのだ。これはもう、自業自得なんて言葉では片付けられない問題だ。とられたのはモノではなく、大事な人なのだ。

グレンは震える声で、毒づいた。怒りと悲しみに満ちた声だった。「俺があいつのそばにいてやったら、ちゃんと守ってやれた。信じなきゃよかった。お前なんか、信じなきゃよかったんだ！」

言つとおりだ。反論なんてできない。クライドは黙って俯いていた。遠くなつていく乱暴な足音が聞こえ、倉庫の入り口のほうでまた壁を殴る音がした。

「あばよ」

かすれた声が聞こえ、それきり声はしなくなった。足音も聞こえなくなった。風の音と、蝉が鳴く声と、波の音が聞こえる。クライドはじつと俯き、石化したように動かなかった。というか、動けなかった。

「クライド」

控えめに声をかけられ、顔を上げるとサラが心配そうな顔をしていた。クライドは再び俯いて、服の肩口で涙をぞんざいにぬぐった。「解ってる。俺が悪いんだよ」

呟いて立ち上がると、サラはクライドの腕をぎゅっと掴んだ。本当は彼女の方なんて向きたくなかったが、仕方なくサラを見下ろす。サラは真摯な表情で、クライドを必死にここに留めようとしていた。「違うの、クライド。あなたは悪くない。でも、友達いなくなっていくの？ グレン、あの様子じゃ戻ってこないと思うよ」

友達。その言葉に、胸の奥が突き刺されたように感じた。

友達だったのに。ずっと気の合う親友でいられると思っていたのに。グレンとは、青年になっても老人になっても友人でいられるはずだったのに。それがこんな終わり方なんて、あまりにも酷い。けれど許しを請って付きまったら、グレンはクライドのことを鬱陶しいと思うだろう。

「……それは、」

「おいかけて。私、ノエルとトニーのところに行く。行って、二人をつれてくる」

今より余計に傷ついてしまうのが嫌で、踏みとどまってしまったクライド。そんなクライドに、サラは声をかけてくれた。おいかけで。

追いかけて、どうする？ グレンが二度とクライドを友人だと思

つてくれなくなるということ、もう解っている。グレンの大切な恋人を、他の男のもとに渡してしまったのはクライドなのだから。そんなことをされたら、いくら相手が親友でも腹が立つ。腹が立つどころか、許せないだろう。

折角のサラの言葉も、クライドに勇気を与えてくれなかった。目を伏せるクライドに、サラの厳しい声が飛ぶ。

「クライド、はつきりして。グレン、要らないの？」

はつとする。冷水をあびせられたように、身体がびくりとした。このままでは本当にグレンはどこかへ行ってしまう。倉庫の壁は、グレンに殴られてへこんでいた。そして、そのへこんだ位置には彼の手から流れた血がべつとりとついていて、胸が苦しくなつて、クライドはまた泣きそうになる。けれども堪えて、入り口のほうを向いた。そのまま駆け出して、倉庫の入り口を潜り抜ける。

しかし、クライドは一旦止まって倉庫の入り口からサラに向かって叫んだ。

「気をつけて街まで帰れ！　ありがとう、サラ」

大切なことを気づかせてくれてありがとう。そういう意味で言った言葉だった。言い終えた直後、走って倉庫から出る。

彼女の返事はきかなかった。一刻も早く、グレンをみつけないければ。

街に出て、大通りでグレンをみかけた。グレンは必死な顔で、通りを歩く人に片っ端から聞き込みをしていた。けれどクライドがグレンに与えた情報はあまりにも少なかつたから、通行人は怪訝そうな顔をして去っていくばかりだった。

「グレン」

「チツ。何の用だよ、俺シェリー探すのに忙しいんだけど」

上がった息を整えながら声をかけると、グレンはまだ不機嫌だった。クライドは意を決して、グレンの肩を掴む。鬱陶しそうに振り

払われたが、腕を掴んでやったらグレンは渋々こちらを見下ろした。
「デゼルトが乗ってた車は白の軽トラ。ナンバーはこの州のやつで、1801だった。あいつは、首都方面に向かった」

沈黙がながれた。グレンは一瞬いつもどおりの表情に変わったが、次の瞬間ふたたび不機嫌になった。今のタイミングで何か言えれば、グレンはいつもどおりの気楽な笑みでクライドを許してくれただろうか？ けれどももうタイミングを逃してしまったから、どうしようもない。

グレンはクライドの手を振り払って、嫌そうに目を逸らした。前にも同じように、目を合わせてくれないときがあった。大喧嘩の時、いつもグレンはクライドを見てくれなくなる。

「何でそういう大事なことを先に言わない？ 俺は早くあいつをみつきたいんだ、二度と離れないって誓ったのに」

グレンは目を逸らしたまま吐き捨てた。グレンにとってシエリーがどれほど大切な人かは、身をもってわかっていたつもりだった。だからこそ、クライドは引き下がらなかった。

「グレン、俺も探す」

「今あいつがどんな気持ちでいるか、お前解るのかよ？ 俺はひとりです。お前の力なんて必要ない。もう話しかけんな」

折角、一緒に探すと言ったのに。彼が今物凄く怒っていることは、承知していたのに。けれど、クライドは次第にグレンに対して苛立ちを覚えてしまう。クライドだって、後悔している。あの場所でシエリーを救えたのはクライドだけだったのだから。けれど、グレンが同じ状況になったらどうだ？ グレンだって、シエリーを救えたかどうか解らない。

シエリーを救いたい気持ちは、クライドだって同じだ。彼女が誘拐されてしまったのは、決して故意にやったことではないのだ。なのに、グレンは解ってくれていない。自分の感情だけで、クライドに八つ当たりをしているのだ。それがどうしようもなく腹立たしかった。

「ふざけんなよ」

低く呟いた瞬間、我慢していたものが一気にあふれだした。止められない洪水のように、グレンに対する怒りが湧いてくる。

「確かに俺が悪かったけど、俺だって全く努力しなかったわけじゃない！ お前走ってトラックに追いつけるのかよ。やってみるよ。シエリーが大事なのはわかってる。けど、それは俺だって同じだ。シエリーを助けたかったのは、俺だって同じなんだよ！」

街中で喧嘩するクライドたちを見て通行人が怪訝そうに振り返り、足早に去っていく。

感情に任せて、クライドは言いたい放題言った。短気で自分とシエリーのことしか考えていないグレンに、本当に腹が立った。

クライドだって頑張った。よく考えればクライドが全面的に悪いのではなく、誘拐したデゼルトが一番悪いのではないか。なのにそれを認めてくれず、拳句の果てに必要なとまで言うグレンは、クライドがデゼルトを追っている時に何をしていた？ 自分で突っ走っていった場所で、そんな場所にいるはずがないシエリーをただ探していただけだろう。

少なくとも、デゼルトを追っていたあの時に一番シエリーを失くしたくないと思っていたのはクライドだ。その思いまで否定されたら、ふざけるなど言いたくもなる。

グレンは自分が一番シエリーを想っていて、自分が一番シエリーを理解していると思っている。だから自分の勘が外れたことで、クライドに当たっているのだろう。

シエリーを一番思っているのは自分なのだから、勘が外れるはずがない。クライドがどうしてシエリーのいる場所へたどり着けたのか。彼の考えは、大体そんなところだろう。グレンの考えることは手に取るように解る。今までずっと、いい親友だったのだから。

「俺なんて必要ない？ あ、そう。じゃあ俺もお前なんて必要としない。お前みたいな短気な奴となんか、一緒にいるだけでストレスたまるしな。勝手に突っ走った場所にシエリーがいなかったからっ

て、俺に当たったりとか…… 勘弁してくれ。ここでさよならだ、グレン」

しまった、と思った。感情に流されすぎて、グレンに酷いことを言ってしまった。すぐに取り消そうと思った。けれど、ここでごめんなんて言ったら、グレンはまた怒る気がする。何と言おうか思案していると、グレンはそつとクライドから距離をとった。

「解ってる。じゃあな、クライド」

グレンはクライドと一度も目をあわさずに、ぼそつと言った。クライドはその場から早く逃げたくて、大通りにグレンを残したまま走り去った。

嘘だ。

信じたくない。

売り言葉に買い言葉で『必要としない』なんていってしまったが、クライドにとってグレンは親友だ。それなのに、グレンはあっさりと納得してしまった。

自分が吐いてしまった酷い言葉を、クライドはすぐにも取り消したかった。そして、時間を戻してグレンに謝りたかった。確かに腹が立つが、グレンは最高の親友だった。それを、あんなふうに拒絶してしまうなんて。自分はどうかしていた。

悔いることしかできないクライドは、港に向かった。グレンと反対方向に行ったノエルと、ブリジットの家に行ったアンソニー。今は、とにかく二人に会いたかった。

第十三話 コンフュージョン

港へ向かう途中、アンソニーに出会った。彼はなぜか、来る時に持ってきたバックパックを背負っていた。アンソニーは、その荷物を背負ったまま急いで走っていた。クライドに気づかないのか、アンソニーはそのままクライドの背後へと走り去ろうとしている。

「おい！ どうしたんだよ、トニー」

声をかけると、アンソニーは止まってクライドのほうを向く。そして、少しだけ悲しそうな目をした。この行動だけで、先ほどしたのは『気づかなかったふり』だったのだとクライドにはすぐに解った。アンソニーは、クライドを無視してどこかへいくつもりだったらしい。

気まずそうに少し沈黙した後、アンソニーはゆっくりと口を開く。クライドにとっては、その一挙一動でさえ不安をつくる元になった。これからアンソニーが何を言うのだろうか。こんな荷物を持って、彼はどこへ？ 彼は、クライドの仲間から外れるのだろうか。そうなのだろうか。

「話はグレンから聞いたよ。僕はグレンについていくから」

潮騒が遠く聴覚の隅に聞こえて、どこか遠くで子供が能天気にはしゃぐ声も聞こえる。それでも彼の呟くような声は、やけにはつきりと耳に届いた。

今、アンソニーは何と言った？ グレンを追うと、そういつたのだろうか。彼はグレンと会って、クライドよりも彼を選んだのだ。

「……トニー？」

衝撃的だった。頭を強く殴られたような気がして、クライドはくらりと眩暈を感じる。シェリーがいなくなり、グレンがいなくなり、アンソニーまでいなくなるなんて。クライドは、何と言っているのか解らなかった。彼のその言葉を、嘘だと思いたかった。

アンソニーは寂しそうに目を伏せて、本当に申し訳なさそうにしていた。ごめん、だけどグレンの方がいいんだよ。クライドにはもうついていけない……彼はそう言いたいのだろうか。自分は、アンソニーにも愛想をつかされてしまったのだろうか。もう、友達だとは思ってもらえなくなってしまったのだろうか？ 足元が崩れるような感覚に襲われる。そんな、そんな。

「クライドのこと、嫌いになったんじゃないよ。グレンをあゝの状態に放置しちゃったら大変なことになるから。クライドも、解るよね？」

真摯な目で見つめられ、クライドはたじろいだ。彼の、あどけなさを残した声。今のクライドの脳内で、その声は完全に聞きたくない方に分類されていた。

「ま、まあな？」

ようやく言葉を返すと、アンソニーは柔らかく微笑んだ。心配ないよと言いたげな、けれど不安そうな、矛盾に満ちた笑みだった。解らない。アンソニーの考えていることが、解らない。今まで、これほどまでに彼を遠く感じたことはなかった。だから、余計にクライドは焦りを感じていた。このままいかせてしまったら、アンシエントタウンに戻っても彼とはすれ違いが続くかもしれない。そんなのは、嫌だ。

これまでずっと一緒に笑い合ってきたのに。これからもずっと笑い合っていけるはずだったのに。どうしてこんな風に、何もかもが壊れていってしまうのだろうか。彼との距離を、これ以上遠く感じたくない。

「僕がグレンを説得するよ。うまくいったら戻ってくる。けど、これからずっと別行動になっちゃうかもしれない。だから先に言っておくね、ごめん」

なぜだろう。言葉がでなかった。言いたいことは沢山あった。沢山の言葉の中から、たった一言『行くな』という言葉を選んで声に出すこともできたはずだった。けれど、何もいえなかった。胸がつ

かえたように、言葉が出なくなったのだ。行くなと言いたい。言いたいのだ。

ひとり、また一人。クライドは、今日という一日で三人も仲間を失った。シェリーは誘拐され、グレンはクライドと決別する道を選び、アンソニーはそれについていってしまおう。

引き止めたかった。本当に、引き止めたかった。こんな状況になつてひどく不安になり、心細くなつたりもして、それなのに親友達が次々消えていくのは一体なぜなのだろう。これはクライドに対する罰なのだろうか。シェリーを誘拐させてしまったクライドに対する罰が、こんな形でグレンとアンソニーまで奪つていったのだろうか。

「クライドはノエルと一緒に、確実にシェリーへ向かつて。僕、グレンにあわせてがむしゃらにシェリーを追っかける。じゃあね、クライド」

彼に別れを告げられた。それなのにやはり何も言えなくて、クライドは無言でアンソニーを見返した。彼は哀しそうな微笑みを残し、そつとクライドに背を向けた。それきり振り返らずに、アンソニーは駆けていく。最初に見たときには気づかなかつたが、アンソニーのバックパックからグレンのバッグについていた肩紐が覗いているのが見えた。なぜか今頃になって、はつきりと見えた。

「トニー」

呟いた言葉に、反応するものはいない。小さくなっていくアンソニーの後姿が、交差点を曲がって消えていった。どうしようもなく悲しくて、クライドは港まで俯いて歩き続けた。

港に行くと、サラが駆け寄ってきた。クライドは俯いたまま、一言だけ呟いた。

「ごめん」

それしか言えなかった。アンソニーがグレン側に行ってしまったなんて言ったら、サラは酷くショックを受けるだろう。これ以上、彼女に哀しい思いをさせたくはない。

悶々と考え込むクライドに対して、サラはいいんだよという風に微笑む。そして、そつとクライドの腕を引いた。顔を上げると、ノエルがいつもどおりに微笑して立っていた。その姿を視界で確認した瞬間、ずきりと胸が痛んだ。ノエルは知っているのだろうか。グレンがクライドを捨て、シェリーのために飛び出してしまったということ。

気まづくなつて何もいえなくなるクライドに、歩み寄ってくるノエル。何を言われるのだろうかと身構えると、ノエルはまったくいつもどおりに言った。

「クライド、話は聞いた。グレンのことは気にしなくていいよ、彼は感情的な人だからね。君がシェリーを見つける頃には、気まづそうに謝ってくると思う」

拍子抜けした。

グレンは思いっきり敵対心を見せ付けて去って行ったし、そんなグレンを追いかけていったアンソニーもクライドに愛想を尽かしているのだと思っていた。それなのに、ノエルは怒るわけでも呆れるわけでもなく、ただ傍にいてくれる。

長いあいだ一緒にいて、クライドの性格をよく解ってくれているからだろうか。それとも、ノエルもクライドと似たような考えをしているからだろうか。自分を責めやすいところは、クライドにもノエルにもある点だ。

ノエルはサラの方を向いて、いつもどおりの穏やかな微笑を彼女に向けた。彼の骨ばった腕と、彼女のほっそりとした白い腕に、同じデザインのブレスレットがつけてあるのが見える。

「サラ、ごめんね。一刻も早くシェリーを探し出さないと」

「解ってる。夏休みが終わるまでに、帰ってきてね？」

「大丈夫だよ。そのときには、シェリーも連れて帰って来る」

二人のやりとりを聞きながら、クライドは考える。ノエルとサラは、きつともつと一緒にいたかつたはずなのだ。またクライドのせいで、大事な人が傷ついた。もうこんなのは嫌だ。だから、早くシエリーを見つけに行こう。そうすればすべて解決する。

今はハビヤ人工魔力のことよりも、シエリーを優先するべきだ。

「いつてらっしゃい、ノエル、クライド」

サラの声に振り返り、彼女に頷いてみせる。サラは小さく手を振って、こちらに背を向けた。クライドは漁船のタラップを素早く駆け上がり、一度置いた荷物を持ってきた。

船室は夏の日差しを受けていて、かなり蒸し暑かった。この船室には鍵がかけられるようになっていたが、鍵は鍵穴に差したままになっていた。アンソニーがクライドとノエルのことを考えておいていったのだろう。

ノエルの分の荷物もとってきて、船を降りるとサラの後姿が街のほうへ向かっているのがまだ見えた。ノエルはそんなサラを、無言で見送っていた。無言で、目を逸らさずに。彼は、クライドが隣に立っても反応を示さなかった。

「ブリジットに言わなくていいのかい？ 君の親戚なんですよ、クライド」

反応を示さなくても、クライドが隣にいることはちゃんと解っていたようだった。そんなノエルの態度を見ると、罪悪感に胸が苦しめられる。クライドは黙って携帯を取り出して、ブリジットの店に電話をかけた。電話に出たのはイノセントで、ブリジットはつわりが酷くて話ができない状況なのだと言った。

「どうした」

電話を通して聞くと、通常より無愛想さが目立つ彼の声。それでも、出逢った頃よりは大分やわらかくなっている。

イノセントには、一体どんな反応をされるのだろう。シエリーとイノセントにそんなに深い交流はないだろうが、弟の恋人が誘拐されたら兄は普通怒るだろう。クライドはイノセントにも怒られるの

だろうか。

「シエリー、いたる？ 誘拐されたんだ。俺、目の前にいたのに救えなかった」

声を絞り出すようにして、やっとのことでそういった。イノセントは怒るかと思っただのに、意外と冷静だった。そして、クライドを責めようとはしなかった。少しだけ救われた気になったが、すぐに思いなおす。クライドが救われてどうするんだ。本当に救われるべきなのは、敵に誘拐されてしまったシエリーなのだ。

「誘拐か。クライド、まずはシエリーが目の前で殺されなかったことを喜べ。犯人はどんな人物だ」

冷静に、そう訊ねられた。喜ぶことは出来ないが、確かに殺されていないだけでした。まだ望みはある。けれど、デゼルトのことを思い出すと胸がしめつけられたようになる。あの残忍な男のことだから、シエリーに何をするかわからない。今こうしている間に、シエリーが刺されている事だって考えられる。可能性としては考えられるが、考えたくない。

「デゼルトっていうんだ。去年、山で出会った。なのにあいつ、白衣なんか着てて。何でか知らないけど、軽トラ乗って首都の方に」

言いたいことがありすぎだし、シエリーのことを心配で、満足な答えができなかった。イノセントは静かにクライドの話に耳を傾けていたが、クライドが言葉を切ったとたんに声をかけてきた。

「落ち着け。落ち着いて考えろ。それから、グレンのことだ。あいつはお前を置いて追いかけて行ったのだろうか？ そんな気がする」
「うん」

「お前は、確実な情報だけを信用して動け。あいつのように飛び出していくと、色々なものを見落とすからな。俺のほうも、街で聞き込んでみる」

「ありがとう」

こういうところで、イノセントとの歳の差を感じた。イノセントは弟の恋人が誘拐されたというのに冷静で、クライドへの的確な指

示をしてくれる。

「俺には友達などいないから解らないが、お前にとってシエリーは大切なのだろうか？ ならば、取り返してこい」

「うん。友達いないなんて、寂しいこと言っつなよイノセント。じゃあ、ブリジットにお大事になって伝えといて」

「ああ。何かわかったらすぐに連絡する」

ぷつりと電話が切れる。イノセントの電話はいつも唐突に切れるので、何だか戸惑ってしまう。いつもといても、彼と電話で話をしたのなんて今回が二度目なのだが。戸惑いながらも携帯の切断ボタンを押して、クライドは携帯をポケットに仕舞った。

ノエルはクライドが通話を終えたのを見計らって、自分の荷物を持って歩き始めた。クライドは、そんな彼の後を追った。

「デゼルトが消えた交差点まで案内して」

「ああ」

頷きながら、交差点の方へ足を向ける。ノエルはクライドの隣を歩きながら、穏やかな声で続けた。全くいつもどおりすぎる、その声。

本当はサラと一緒にいたかたはずなのに、ノエルは自分の気持ちを殺しているのだ。そんな彼にどう接していいのか解らなくなつて、クライドは黙り込む。

「首都方面だけど、行き先が首都って決まったわけじゃないよね。聞き込みをしよう」

半ば説得するような言い方で、ノエルは言う。クライドは彼を見て、頷いた。夏が似合わないノエルは、鬱陶しそうに目を細めながら空を見上げたりしている。病弱そうな白い肌には、うっすらと汗が滲んでいた。

「暑いね」

「半袖着れば」

「持っていないんだよ」

「それ、ある意味凄いな」

折角始まった会話も、どこかぎこちなくて冷たい感じがする。クライドは居心地の悪さを感じながら、入道雲がそびえる空を見上げた。一度はシエリーのことだけ考えていたのに、やはりノエルの様子を見て心が揺れた。

隣で、ノエルの苛立たしげなため息が聞こえた。ついにクライドも愛想をつかされてしまったのか。ちらりと彼のほうを向くと、彼の知的な緑色の瞳がこちらをじっと見つめていた。

「ねえクライド、まだ悩んでいるのかい？ その気持ち、解らないけど。いい加減、前に進むことだけを考えよう。あんなに勇敢に戦っていた、去年の君はどこへ行ったんだい？」

その言葉は、クライドの心の中に確かな変化をもたらした。

去年の自分。そうだ、去年クライドは誓ったのだ。炎に包まれたリンドバーグ邸で、アンソニーが一人だけで取り残されてしまった時。あの時クライドは、何があっても諦めないと誓った。最後まであがいて、最優先に仲間を助けることを強く心に決めたはずなのだ。

「……ノエル」

大事なことを忘れていた。

後悔ならいくらでもできる。だが、後悔してかえってくるものは何も無い。解っていたのに、クライドは馬鹿みたいにうじうじ悩んでばかりいた。もう、きめた。彼が言うとおり、前に進むことだけを考えよう。

「ごめんね。ちょっと言いすぎた」

「いや、ありがと。俺、シエリーのことだけ考える」

微笑めば、ノエルもほっとしたように微笑してくれた。二人で、最後にデゼルトを見た交差点に向かう。人通りが少なかったが、椅子に座った老女が一人でぼうっと通りを眺めていた。

あの老女なら、デゼルトの行く先を見たかもしれない。クライドは、彼女に歩み寄って声をかけた。

「あの」

老女は無反応だった。聞こえていなかったのかと思いい、もう一度

声をかける。

「あの、すみません。あのー」

やはり老女は反応を見せず、ぼんやりと通りを眺めていた。クライドは首を捻りながら、辺りを見回す。若い男性と目が合った。

「やめときな。その婆さん、耳聞こえてねえ」

彼は低い声でそう言っつて、こちらに歩み寄つてきた。無精ひげの生えた、二十代前半ぐらいの男性。彼は容姿で言うなら、金髪碧眼の典型的なラジエルナ人だ。

「白い軽トラを探してるんです。額に赤い鉢巻を巻いた男と、赤毛の女の子が乗っているんですが。見ませんでしたか？ 二人を追つてるんです」

車のナンバーを伝え忘れたので付け加えようとしたら、男は不快そうに眉をしかめた。クライドが黙り込むと、男は舌打ちしてから話始めた。

「ああ、車の中で大喧嘩してたな。窓を開けっ放しにしていたからよく聞こえた。うっせえの何のつて。信号待ちで止まったんだ、この次の交差点で」

そんな。そこで止まったのなら、追いかければ追いつけたかもしれない。呆然としてみると、ノエルがクライドの腰をぼんと叩いた。そして、クライドに代わつて男に質問をした。

「二人は、何を話していたんですか？」

「降ろせとか離せとか、女の方が喚き散らしてたな。煩かったから怒鳴つてやったよ。男の方は、空港に着くまで大人しくしろとか言つてたな……」

そこですかさず、ノエルが聞き返す。クライドは男の話を真剣に聞きながら、『もしも』という思考を振り払った。考えたって仕方ないのだ。さつきそう思つたではないか。

「空港？」

ノエルが即座に聞き返した。男は頷いて、辺りを見回す。

「この辺りで一番近い空港といつたら、スウェント国際空港だな。」

違うかもしれないが、一度行ってみる。あの赤い鉢巻はかなり目立つからな。もしかしたら、見た奴がいるかもしれない」

これはかなり有力な情報だ。クライドは、男に頭を下げた。

「ありがとうございます」

「何だか知らんが、頑張れよ」

男は人の良さそうな笑みを浮かべて、クライドたちの進行方向とは逆の方へ向かっていった。クライドは彼の後姿を最後まで見送らず、スウェント方面へ向かう。地図を見なくても道は解った。時々道路の標識に、空港まで何キロあるか書いてあるのだ。

スウェントは、リヴェリナの隣だ。リヴェリナよりも首都に近い街であるスウェントは、ここ何十年かで急激に発展を遂げてきた。空港が完成したのは最近で、確か二年前ぐらいだと思った。

「スウェント国際空港……」

呟いてみると、空港で嫌々飛行機に乗らされるシエリーが目に見えかんだ。デゼルトの残忍な笑顔と、冷酷な目つき。あんな男に、シエリーを奪われてなるものか。大切な友達なのだから、クライドが彼女を守ってやらなければ。

「今からならきつと、今日じゅうに到着するんじゃないかな」

「うん。行こう」

隣で微笑するノエルに頷いて、クライドは歩いた。スウェント国際空港、そこにシエリーの足跡そくせきがある。早くシエリーを助けて、それからハビも助けて、レイチエルのことを彼に伝えて……。やることはたくさんある。だが、まずは空港に向かおう。

時刻は、正午。長い長い一日は、まだ半分しか終わっていない。

第十四話 影

まだ午前中だが、すぐに片付けなくてはならない仕事がある。しばらく生暖かい潮風に当たりながら、強い日差しを避けて店の軒下にいよいよと思った。自分が日よけとして使っているこの店の名を、マーティンは知らない。そして、知るつもりも無い。

つばつきの黒い野球帽を深く被って、マーティンは腕組をしてそこに佇んでいた。これは目立ちすぎる髪の色を隠し、容赦なく照りつける日光を遮断するために被っている。黒の半袖から覗いていた腕は日に焼け、赤くなり始めていた。この軒下に入る前は、散々歩かされた。

携帯していた日焼け止め用の軟膏を指に少しとって塗りながら、マーティンは野球帽のつばを少し上げる。交差点を乱暴に曲がっていく白い軽トラックに、同僚が乗っているのが見えた。さて、行動開始だ。

すべるように路地に入り込み、そこで自分の姿を変える。自分と全く違う姿を念じればいいのだ。閉じた目をゆっくりと開けば、視界の端をちらついていた蒼い髪が金色に変わっていることを確認できる。

結社の『作戦会議』では、あの赤毛のシェリーとか言う女を誘拐するところがスタートだったはずだ。自分としては、あんな胸の無い少女を女として数えたくはないのだが。どうせ誘拐するなら、もう一人の候補として挙がっていたジュノア人の方がまだ良いような気がする。痩せすぎのシェリーよりは、もう一人の方が女らしい体型をしているから。まあ、あの少女にしても、やはりマーティンが満足できるようないい女ではないのだが。

愛飲のタバコを唇にくわえ、金髪のラジェルナ人に姿を変えたマーティンは被っていた野球帽を脱いだ。脱いだ帽子を置く場所に困り、三秒考えてその辺りに放り捨てた。そして、ポケットのライタ

ーを取り出して石を弾く。暗い路地裏で、マーティンはクライドとその仲間が来るのを待っていた。

彼らを上手く誘導して、捕まえやすくしなければ。そう思い、マーティンにはやりと笑った。笑いながら、何度も指を動かして着火を試みる。だが、火がつかないらしいということに気づいて顔から笑みを消した。

「オイル切れか。クソッ」

ちよつとこのライター気に入ってたのに。そう思いつつ、マーティンはそこらにライターを放り捨てた。まあいい、また新しいものを用意すれば。時間も金も、たつぷりあるのだから。

今のマーティンには、愛想笑いの練習が必要だ。いつも嫌味っぽくなってしまふ笑みを、いかにして人のいい笑みに感じさせるか。それが重要なのだ。

ポケットに入れていた携帯が震えた。マーティンは練習のつもりで、『人の良さそうな』声で電話に出た。相手は誰か解っている。弟兼友人、社長兼チーフ。そんな、マーティンの『ボス』だ。前にいちどボスと呼んでみたら相手が照れたので、それから時々ボスと呼んでからかってやっている。ボスは一体、何の用で電話をくれたのだろう？

「もしもし、俺だよっ！」

あまりに気持ち悪い演技で、我ながら反吐へどが出る。電話の相手は一瞬固まった後、恐る恐るといった様子で声を発する。

「……あの、マーティン壊れちゃった？」

「いや、正常だ。クライド、カルヴァートに感づかれるなって言ったのはどいつだ？ 嫌味っぽいとか言ったのはどいつだ？ どっちもてめえだろ」

電話の向こうで相手が黙る。マーティンはくすくす笑いながら、路地地から見える風景に神経を集中させる。金髪の、華奢な少年が現れたらすぐにも歩いていこう。通りすがりの他人を装って、あの少年を罠にはめるのだ。

「マーティン、それなんだけど。もうコンタクトした？」

いきなり突飛な質問をされ、今度はマーティンの方が黙った。コンタクトなんて、聞いていない。コンタクトレンズの省略なのか、単にそのままコンタクトという単語なのか。聞き返そうとすると、相手から説明された。

「ほら、行きにあげたはずだよ？ ラジェルナン・ブルーのカラコン」

あ。思わず呟くと、電話の向こうでボスはため息をついた。小さいくせに偉そうな、彼の顔が脳裏に浮かぶ。彼は今、電話機を持っていないほうの手を額にやっているのだろう。長い付き合いだから、それがよく解った。

マーティンの目は蒼い。蒼いが、ラジェルナ人のそのような空色をしていない。例えて言うなら、濁った染料のような青。時々、こんな色のペンキに塗られた遊具が公園にあったりする。

生まれた時からこんな色だったのだが、人はこの目を見てよく不思議そうな顔をする。自分の瞳が変な色をしているのだと、マーティンはちゃんと自覚していた。

この目を見れば、クライドはマーティンの正体を即座に嗅ぎつけるだろう。忘れていた、うかつだった。

「忘れてた、今からする」

「あーあ。よかった、電話して。ちゃんとうまくやってね、マーティン！」

「まかせときな」

言いつつ、こちらから電話を切ってやる。ポケットに携帯を戻し、戻しながらポケットの中にあるもう一つのものに触れた。カラーレンズの装用は、実はまだ二回目だ。だが、手鏡も使わずにつけることができた。しばらく視界がぼやけていたが、やがて焦点は定まっ
ていつもと同じようになる。何度か瞬きしていると、目的の少年がやってくるのが見えた。何故か、二人足りないのだが。

マーティンは、喘息の薬の吸入器に似た物をポケットから取り出

した。中身はクリプトン。吸入すると、声を低くすることができるのだ。特殊な改良をしてあるので、効果は吸入から三十分後くらいまで期待できる。

身体は自由に変えられるし、目の色はカラーレンズで隠せるし、声だっていじることができる。あとは、自分の演技力次第だ。

「あの」

クライドは、老婆に話しかけている。あの老婆は、耳が聞こえていない。なぜなら、先ほどマーティンが洗脳の魔法をかけておいたからだ。あの老婆はマーティンに操られていて、マーティンが魔法を解くまで絶対に外部の音を聞き取ることができないのだ。人工魔力は役に立つが、使えば使うほど頭痛と吐き気が酷くなった。少しふらつく足元を気にしながら、マーティンはクライドに話しかける。上手くいった。彼は食いつくように、マーティンに情報を求めてきたのだ。

クライドは必死な様子で、同僚のことを説明してきた。だが、こちらはもう解っている。そういう計算だからだ。

結社に直接クライドをおびきだすための、作戦。一般的には卑怯だとされる手段だ。だがそれを使うことに抵抗はなかったし、むしろ楽しいとマーティンは思っていた。大切な人を奪われる、その気持を相手に思い知らせてやるのだ。

本当はクライドよりも、イノセントⅡエクルストンの弟であるグレンに会いたかった。あの男の、絶望に歪む顔を見たい。けれど一番のターゲットはクライドだから、我侭は言っていられない。

クライドとその仲間、至極あっさりとしたマーティンの言葉を信用した。そして、狙い通りスウェントへ向かっていった。ここまでは、完璧に計算どおりだ。

やることはやった。後は存分に遊ぼうか。グレンⅡエクルストンを、探しに行こう。マーティンにはやりと笑んで、また別の男に姿を変えた。今度は、漁師風の日焼けした男になってみたのだった。

クライドとであった交差点を、市街地に向かって進む。すると、

そこにはグレンとその仲間がいた。

邪魔そうな金髪に、健康そうな長身。彼は道行く人に、片っ端から質問をぶつけていた。マーティンは薬剤を吸入し、効果が切れそうになつていた低い声を保った。

「白の軽トラみなかったか？ 探してるんだ」

あんな無礼な聞き方で誰かが答えるはずがないと思う。まあ、マーティンの場合に見てみたところで、同じようなものなのだが。

「知りませんか？ 運転してたのは赤い鉢巻の男なんですけど」

まだ若干声が高めの少年は、去年マーティンに下らない魔法をかけて目を見えなくした最低なガキだった。思い出したらむかついてきたので、マーティンはわざと満面の笑みを浮かべて彼に歩み寄った。

「ここに来る途中にあつたがな、降りて荷物まとめてたぞ」

一応、彼らも誘導する予定だった。だからマーティンは、グレンとその仲間にもちゃんと道を教えてやるつもりでいる。しかし、ここでちょっとした遊び心が頭をもたげる。

からかってやろうか、こいつら嫌いだし。

「どこで降りたんだ」

真剣な目で訊ねてくるグレンを見て、マーティンは笑いを堪えるのに必死だった。そして、真顔で答えた。

「ホテルの近く」

心の中では一人で大笑い。真顔のマーティンをみてグレンが呆けた顔で固まり、あのくるくるした金髪の少年（名前を忘れた）は、あからさまに心配そうな顔をした。

もう無理だ、耐えられない。声を上げてグレンを笑い飛ばしたい。彼のこの呆けた顔を写真にとっておけば、マーティンは三日後にも五日後にも一人でげらげら笑っているだろう。

「ホテルだったって色々あるだろ！ リゾートホテルを知らないのか？ ん？ それとも、そういう事しか頭にないのか？ ははっ」

耐えられなくなって腹を抱えて笑っていると、グレンが怒った。

ちゃんとデータにあった、彼は短気なのだ。

「つてめえ！」

尤も、データを見る前からグレンが短気なのは知っていた。何せ、あのイノセント・エクルストンの弟なのだ。そんな男が、冷静で思慮深い男であるはずが無い。

殴りかかろうとしてくるグレン。応戦しようと身構えると、くるくるした金髪の少年が、グレンを後ろから羽交い絞めにした。

「グレン、だめ！ 抑えてっ、この人大事な情報源だよ！」

にやりと笑ってひらひらと片手を振ってやれば、グレンは渋々引き下がった。だが彼はまだ、縄張りを荒らされた野生動物のように、険悪な目つきをしている。

「で、どのホテルの近くなんですか？」

意外にこの小さい少年の方が、グレンよりもしっかりしているようだ。彼は取り乱さずに、じつとマーティンを見上げている。マーティンはまたこみ上げてきた笑いを必死に堪えながら、金髪の小さい少年を見下ろした。

先ほどのグレンは、本当に滑稽だった。よく笑わせてもらったことに、ちよつとだけ感謝する。

「カディラ・オブ・スウェントってホテルだ」

言い置いて、ひらりと身を翻す。そのホテルは実在するリゾートホテルで、空港のすぐ近くにある。直接空港だと教えてやってもよかったが、グレンをもう少し困らせてやりたかった。肩越しに振り返ると、グレンとその仲間が口論しているのが見えた。気にせず、歩み去る。

笑ったせいで薬剤の効果が切れそうだった。それに、コンタクトもあまり長い間装用してはたくない。思い出し笑いを繰り返しながら、マーティンはスウェントを目指した。靴屋の駐車場に適当に停めておいた中古車で、クライドたちの後を追う。信号待ちで止まった時、マーティンはコンタクトを外しながら『ボス』に電話をかけた。

「おう、ミンイエ恩。首尾よくはこんだ」

「よかった！ マーティン、やつぱ頼れる」

無邪気にはしゃぐ顔が、すぐ脳裏に浮かんできた。いつもミンイエ恩は、人の手柄を自分のことのように喜んでくれる。そこが子供みたいで煩わしいが、ミンイエ恩はやはり弟のような存在だ。面と向かって言いたくはないが、可愛い。

「任せな、ボス」

「もう、その呼び方やめてよ。じゃあ、あとは空港で何とかしてね。首都に誘導したら、後は」

誘導役をチエンジ。そしてそのまま、首都からエナークへ。全部解っている。だから、マーティンはスウェントである四人を導けばもうエナークへ帰ってよいのだ。

早く仕事をして、早く帰りたい。この町にしていると、イノセントはエクルストンにどうしても気が向いてしまうのだ。今はクライドの件を優先しなければならぬから、私情は押さえなければならない。「会議の内容は全部頭に入ってる。じゃあな」

「ばいばい！」

元気良く電話を切ったミンイエ恩に、半分あきれて、けれど半分は安心してため息をついた。彼がいると、どうも殺意がそげる。強烈な殺意をイノセントはエクルストンに向けていても、ミンイエ恩のあどけない声を聞くとイノセントなどどうでもよくなるのだ。

「さて…… あいつら、今日中につくか？ 仕事増やすなよ、銀目にやりと笑いながら、マーティンは大きくハンドルを切る。カーブを必要以上に大きく曲がって、乱暴な運転でマーティンはクライドたちを追った。

空港にたどり着く前に、クライドとその友達を追い越した。目的地まで残り三キロ地点だった。クライドとその友達は、予想外に足が速かった。これなら今日中に全て片付けてくれるかもしれないと

思ったが、先ほどグレンたちにわざと空港を教えなかったことを思い出す。マーティンは、結局は自分自身に面倒を吹っかけていたのだった。

舌打ちしつつ、ダッシュボードに手を沿わす。確か、安物のライターがあつたはずだ。無性にタバコを吸いたい。

「お。あつたあつた」

片手でハンドルを握り、もう片方の手でタバコを引っ張り出す。いつも吸う銘柄は必ずこれと決まっているわけではなく、他にもいくつか吸うものがある。けれど、一番気に入っているのはこれだった。唇にタバコをくわえ、ライターで火をつける。息を吸い込めば、いつもの香りが身体に染み渡る。

軽めで、独特の香りがあるタバコ。商品名は『ネイビー』といって、もとはどこかの海軍で支給されていたタバコらしい。マーティンは海が好きだから、何となく海を思わず香りがするこのタバコが好きだった。

乱暴に、しかし順調に車を走らせていると、空港についてしまった。駐車場に車を停めると、潮の匂いがしない空気が生ぬるく肌を撫でた。銃が入ったバッグを持って、すぐに車から降りる。排気ガスと熱気が立ち込める駐車場から、早く逃げたいと思った。マーティンは、そそくさと冷房の聞いたエントランスに入り込む。

空港の受付にいる女性や、旅行者などを細かくチェックする。一番変装しやすく目撃者らしくなれるのは一体誰なのか、見極めるためだ。旅行者はすぐに空港を出て行ってしまふから、空港で誰かを待っている人とか客室乗務員に変装すれば良いと思う。けれど、女に変装するのは基本的に嫌だ。

トイレに行こうとしている若いパイロットの制服に目をつけ、マーティンは彼を尾行した。旅行者も他のパイロットもない男子トイレに、マーティンが目をつけているパイロットが入り込んだ。持っていたバッグから銃を取り出し、後ろからパイロットの頭を殴りつける。がつんと鈍い音がした。パイロットは低く呻いて倒れ、気

を失う。

気を失ったパイロットから制服を剥ぎ取って着て、マーティンはパイロットの容姿を掏る。トイレの手洗い場につけてある鏡を覗けば、目の色以外は全てが今のパイロットと同じ格好になっていた。先ほどまで着ていた服のポケットからカラーレンズを取り出し、マーティンは服をバッグに詰め込んだ。カラーレンズを装着して、準備は完了した。あとはパイロットが目を覚まさないように、睡眠薬を彼の口に含ませておけば終了だ。バッグの底からカプセルを取り出し、気絶した彼の半開きになった口に放り込む。

パイロットの制服には名札がついていて、それには「レッドライオン航空 ケネス・ブラン」という名が記されていた。年齢は、自分と同じ程度だろうか。それとも、この男の方が年上なのだろうか。いずれにせよ、吸入用の薬剤を少し多目に使って声をより低くするのが良いだろう。二度も相手を騙すとすると、あらが出やすくなると思う。念入りに彼らを騙さなければ。

トイレの個室に荷物を入れて、中から鍵をした。そして鍵のかかった個室の上から外に出て、今度はとなりの個室にパイロットを入れた。中から鍵をしても良かったが、上から脱出するのが面倒になってきて、魔法を使って外から鍵をかけた。頭がふらつき、一瞬だけ視界がぼやけて見えなくなった。魔法を使えば使うほど、マーティンの身体は蝕まれていった。もともとこの力だって、望んでつけられたものではない。

携帯とカラーレンズ用のケースだけポケットに入れて、マーティンはトイレから出た。客室乗務員の女の子に挨拶されたので、微笑して手を振ってやった。ケネス・ブランの性格は全く知らないのとおりあえず気障っぽい感じを演じてみようと思ったのだった。

エントランスを歩き回って、入り口を見る。金髪と鳶色の二人組みはまだこないようで、大きな鞆を持った旅行客たちがせわしなく行き交っていた。

「間もなく三番ゲートにて、搭乗手続きが始まります。ヴァル・セ

イナ行き、二三五便に搭乗される方は、お早めに三番ゲートにお越し下さい。間もなく……」

空港のアナウンスを聞きながら、マーティンにはやりと笑う。クライドたちはまだだろつか。同僚のデゼルトは、多分何時間か前にヴァル・セイナ行きの便に乗っただろう。ヴァル・セイナは、ラジエルナ国の首都である。

随分長いこと待っていた。待っている間、ヴァル・セイナ行きの便は何度も出発していった。マーティンが変装しているケネス・ブランという男は、今日から休暇らしい。仲間らしきパイロットが、何度もすれ違いざまに「良い休暇を」などと言っていたのだ。

喉が渴いたので自販機に硬貨を入れた。紙コップに飲料を注ぐタイプの自販で、商品は清涼飲料水が殆どだった。あえて珈琲を選んでボタンを押す。本当は、珈琲はハビが淹れてくれるものが一番口に合うのだが。

「すみません、少し良いですか？」
来た！

振り返ると、あの知的そうな眼鏡の少年がいた。クライドと一緒にいた、大卒のインテリだ。マーティンは喘息の吸入薬を吸うふりをして、声を低くするクリプトンを吸入した。

「二〇九五便でしたら、今出たところですよ」

そういえば、結社にこんな喋り方をする男がいる。マーティンは、彼の物真似をするつもりでこの少年と喋ることにした。少年は微笑して、首を横に振る。

「人を探しているんです。赤毛の女の子と黒髪の男の二人組みで、男の方は額に赤い布を巻いていて、白衣を着ています。女の子は背が低くて、灰色の目をしています。心当たりはありませんか？ 何時間か前に、ここに来たと思われるんですが」

的確な特徴を挙げて、マーティンに訊ねてくるこの少年。データの中では、この少年がああ四人を率いるブレインという感じがした。

まさしくそうなのだろう、彼の喋り方や声のトーンなどはどこまでも知性的だった。

「ああ、男の方に道を聞かれましたよ。女の子は凄く悲しそうにしていますね…… 彼らはヴアル・セイナ行きの飛行機に乗っていきましました。そこから先は解りませんが、おそらく公共交通機関を当たってみれば解ると思います」

これで、作戦は半分成功したも同然だった。あとは彼らが飛行機に乗るか乗らないかで勝敗は決まる。クライドの家はあまり裕福ではないらしいから、彼は旅費がないといって徒歩で首都まで向かうかもしれない。マーティンの頭の中で、クライドはそれくらい無茶な奴なのだ。

「ありがとうございます」

きつちりとお辞儀して、ノエルは駆けていった。彼の視線の先には、クライドがいた。ノエルがなにやら説明をして、クライドは深く頷いた。そしてそのまま、まっすぐ受付に向かった。航空券を買うらしい。

後は、グレンともう一人の仲間を誘導すれば良いだけだ。それで、マーティンもケネスと同様に『休暇』を楽しむことが出来る。

にやりと人の悪い笑みを浮かべて、マーティンは持っていたカップに入っていた珈琲を飲み干した。水っぽくて、あまり美味しくない珈琲だった。カップをゴミ箱に捨てながら、ポケットの携帯で結社に連絡を入れる。

「ミンイエ、第二段階行け。グレンとエクルストンともう一匹は後で送る」

「了解！」

……楽しくなってきた。

マーティンは一人で笑いながら、グレンとアンソニーの到着を待つ。それはさながら、密やかに獲物を狙うハンターのようにだ。マーティンは思う。

睡眠薬の効果は、多く見積もって五時間。既に二時間ぐらい経過

している気がするから、あと三時間で彼らがここにつくことを祈る
うか。

勝負時は、これからだ。

第十五話 ラジェルナ国首都、ヴァル・セイナ

真夏の太陽が照りつける道を延々と歩き、汗だくになって到着した空港には人があふれかえっていたように思う。旅行鞆をもった人々がせわしなく行き交い、時々客室乗務員にぶつかったりしているのが見えた。

クライドはノエルと二手に別れ、手分けして聞き込みをすることにした。旅行者は何時間もここにどまっていけないだろうから、受付かパイロット、客室乗務員などに聞き込むことにする。

受付の女性は首を捻り、掃除のおばさんはきっぱり「見ていない」と言い、パイロットは外国から飛んできたばかりだったりした。そうだ、もう何時間も経ってしまったている。もう目撃者はいないのか。絶望的になったし、適当に行動してシエリーを失ってしまうなんて嫌だ。

俯いていると、ノエルが走ってきた。彼にしては珍しい行動で、クライドは顔を上げて彼を凝視した。

「首都だよクライド。首都行きの飛行機に乗ったって」

「本当か？」

「パイロットに聞いたんだ、彼はデザートに道を聞かれたって」

彼の背後を視線でたどれば、自販機の前でタバコを吸っているパイロットが見えた。まだ若い、ラジェルナ人らしいパイロットだった。金髪碧眼の彼は、クライドを見て甘い微笑を浮かべる。

「首都までどれくらいかかる？」

ノエルに訊ねると、彼は軽く首を捻った。そして、時計を覗き込みながら声を上げた。

「時間かい？ それとも旅費かい？」

「両方」

彼の問いに単語で答えつつ、クライドは辺りを見渡した。夏休みの始まりだから、旅行者の中には学生らしき少年や少女もたくさん

いる。家族連れも多かったが、一人で旅行している人が意外に多くて驚いた。

ここには外国人もたくさんいるようだが、銀色の瞳をしているのはクライドだけだった。

「ここからなら、首都まで三時間かな。旅費は割引を使うとして、二十デラぐらいが妥当だと思う。飛行機に空席がある場合は、半額ぐらいで乗せてくれるから」

二十デラ。財布の中にそれだけあるかどうか、怪しいところだ。確認してみると、ぎりぎりだった。行きは良いが、帰ることができなくなる。だが、今は帰りのことなど心配している余裕はないだろう。

「行こう」

ノエルに声をかけ、クライドは窓口へ向かった。飛行機はどの便も混雑していたが、キャンセルが出たので空席が二つ確保できた。

恐らく隣の席ではないだろうが、空きが出来ただけ嬉しいと思わなければ。三十分後に発つ飛行機で、クライドたちは首都へ向かう。

搭乗ゲートの番号がややこしかったが、ノエルの道案内で迷わずに飛行機に乗り込むことが出来た。やはり席は離れていて、ノエルは半分より前側に、クライドは半分より後ろ側に席があった。名残惜しかったが彼と離れて、クライドは一人で割り当てられた席に座った。

隣の人は一人旅を楽しんでいる男性らしく、気さくに話しかけてきた。彼の隣にいれば、退屈はしないだろう。金髪碧眼のラジェルナ人らしい彼は、四十代かそれ以上の中年男性だ。

シェリーが今どうしているのか、気がかりでならない。首都に着いたら手がかりはないから、また聞き込むしかない。それで見つからなかったら？

クライドは緊張感と戦い続けていたが、一人旅を楽しんでいる男と話すことによって気を紛らした。窓の外には、小さくなっていく灰色の街が見える。

ヘリコプターと違って騒音が聞こえないので、飛行中はかなり快適だった。ヘリコプターのように激しく揺れないのにちゃんと飛んでいるということは、カルチャーショックでもあった。

客室乗務員がワゴンに乗せて運んできた紅茶を飲みながら、クライドはカフェ・ロジエッタを思い出して憂愁に浸る。こうしている今も、シェリーが危険にさらされている。そして、こうしている今もハビがどこかで人を殴っているのかもしれない。けれど。

ハビとシェリーは全く別の場所にいるだろうから、まずはシェリーを優先しなくては。シェリーは確実に敵のところにいるが、ハビの場合はまだ未確認だからどうしようもないのだ。

「酔ったか？」

隣の男は、親切に話しかけてくる。クライドは彼に曖昧な微笑を返しながら、紅茶を喉へ流し込む。

「いえ。ちよつと考え事を」

「考えすぎると身体に良くないぞ。それでな、今回の旅のプランなんだが……」

男は観光を楽しみつつ、ショッピングにいそむらしい。泊まるのは空港の近くにあるリゾートホテルで、それは自分の娘が働いているところでもあると男は言った。

クライドは、泊まる場所なんて考えていなかった。まあ、眠らなければ良いだろう。眠らなければ、泊まる必要も無い。歩き続けていれば二日くらい起きていられるだろうし、とんでもなく眠くなったら恐らく公園の木の下とかで自分は寝ていることだろう。

今は、何よりもシェリーを救うことだけを考えなければ。明日の朝食も帰りの旅費も、眠ることさえも後回しだ。

「クライドといったな、君。君は、どこからきたんだ？」

「アンシエントタウンです」

残してきた家族のことを思いながら答えると、男は微笑した。

この男にも、家族がいる。娘はもう働けるほどの年齢だというから、彼は随分長いこと娘と一緒にいたのだろう。クライドと父が一

緒にくらしていた時間は、父が失踪する前を含めたとしても五年に満たない。そう考えると、十年も二十年も自分の娘と一緒に暮らしていた父親の気持ちってどうなんだろうと思う。

父はどう思っているのだろう。やはり、十年でも二十年でもクライドと一緒にいたいと思ってくれているのだろうか？ それとも、これはこれで良いと思っているのかもしれない。

ずっと、父と一緒に暮らしたいと思っていた。帝王戦を終えてそれが叶ってからのというもの、クライドは同じ家に暮らしている父のことをあまりに知らないことに気づき、驚いていた。

「アンシエントねえ。その割りに君は、田舎臭い顔してないなあ」「貴方はどこから？」

「俺か？ アンシエント生まれのリヴェリナ育ち。スウェントに越してきたのは十年前だ。昔から旅行が好きでなあ、空港の近くに住むのが夢だった」

クライドには、引越しの経験も無い。クライドは去年初めて旅に出てから、自分が物凄く無知であることを時たま思い知らされていた。

旅に出れば自分の無知を自覚するが、その分成長できるとクライドは思う。だからこの男も、旅が好きなのだろうか。そんなどうでも良いことを頭の隅でちらりと考えて、クライドは男と暫く話を続けた。

三時間がすぎるのはあつという間だった。着陸の時に空港の滑走路が見えたが、行きに見た景色とは大分違っていた。

高層ビルの立ち並ぶ都会、ラジェルナの首都。ラジェルナも先進国のひとつだから、都会には人と建物と交通機関が物凄く多い。

隣に座っていた気さくな男と別れて、クライドはノエルと一緒に飛行機を降りた。初めて行ったスウェント国際空港は、とても綺麗だったし洗練された感じがした。しかし、このヴァル・セイナ国際空港はスウェントを遥かに凌ぐスケールで、クライドは暫く圧倒さ

れていた。

透明感あふれる設計の空港は、スウェントの倍ぐらいの大きさはあると思う。中央ロビーの天井は物凄く高く、そこから多方面へ向かう通路が延びている。通路には間接照明が施してあり、何だかりゾートホテルとかそういう空間にいるようだった。クライドはそういう場所に行ったことはないが、テレビでならみたことがある。

色々な制服の客室乗務員が、様々な国の言葉で話しながらクライドとすれ違っていく。すれ違う人たちを調べて出身国を書き留めてみたら、世界にある全ての国の人がここにいるんじゃないかと思うほど、空港は込み合っていた。

一分おきにアナウンスが流れるような忙しさで、空港にいる人々の動きもめまぐるしいものだった。増して、今日はまだ夏休みの頭だ。何だかもう、ここに立っているだけで迷子になりそうな勢いだ。ちよつと眩暈がする。

「クライド、まずは受付」

ぼんやり立ちすくむクライドの腕を、ノエルが引く張る。

「そうだな」

そう答えたものの、ここで人探しをするなんて絶望的なんじゃないかとクライドは思った。けれど、シェリーは何か手がかりを残してくれるんじゃないだろうか。そんなことを想像して、クライドはなんとかくじけずに聞き込みを始めた。パイロットも客室乗務員も、すれ違った旅行客も、皆首を捻って去っていく。

受付で訊ねてみれば、一人の女性がシェリーの姿を見たと言った。シェリーとデゼルトは連れ立って、南口から出て行ったという。しかし、それだけでは情報が足りない。デゼルトとシェリーが何か言っていないかたかと訊ねてみたら、言葉が解らなかつたと返された。そういえば、クライドが喋りかけているこの女性はエフリツシュ語を喋っている。

女性にお礼を言ってノエルを探す。ノエルはパイロットを呼び止めて何か聞いていたが、暫くしてパイロットに軽くお辞儀してため

息をついてた。情報はなかったらしい。

「南口からでてったって。けど、そこから先は全くわかんない」

言ってみると、ノエルは力なく笑った。スウェントで出会ったパイロットのような、記憶力に優れた人物はいなかったようだ。ノエルの方の収穫は、ゼロだった。

「とりあえず、南口から出てみようか。そこでまた、誰かに聞いてみよう」

彼の言葉に頷いて、クライドは南口を目指した。天井から下がっている標識に、『南口』と五ヶ国語で書いてある。ちなみに一番大きく書いてあったのは、ラジェルナの公用語であるディアダ語だった。

しばらく歩くと、自動ドアがある。冷房のきいた空港から足を踏み出せば、熱風が頬を撫でる。一歩下がって空港に戻ろうかと思っただ。熱い。

ヒートアイランド現象といったか、都会では建物がありすぎるせいで熱がこもると前にテレビでやっていたような気がする。

ノエルは微笑しつつ、都会の景色を眺めている。見上げると首が痛くなるような高層ビルばかり並ぶ都会のこの風景は、知識が豊富な彼にとっても珍しいものなのだろうか。

ふと、クライドはあるビルに目を留めた。ガラス張りのビルには、センスの良い巨大なポスターが貼られている。ここから徒歩でいけそうな距離にあるそのビルを飾るのは、鳶色の髪をした少年だ。もしや。

「ノエル、あれ『HOLLY』のショップだったりする？」

彼は黙って微笑しただけだった。否と言わなかった、それが答えだとしてもよいだろう。

改めてポスターを見る。洗練された都会のビルに良く似合う、白と黒のコントラストがシックでクールだ。文字は黒、背景は白、といった感じになっている。写真のノエルは、何とというか妖艶に微笑していた。こんな写真をサラが見たら、顔を赤くするだろう。

それは、半裸でスーツにうつぶせになって、左手で眼鏡を外そうとしている構図だった。腰ぐらいまでの位置が写真に納まっている。ピントは彼の顔に合っているから、骨ばった彼の身体は少しぼやけていた。

「ちよ、クライド。やめて、注視しないで」

ノエルはビルを見ているクライドに気づいて、腕を引っ張ってきた。少しよたつきながらも、クライドはノエルを見る。

「何で？ お前モデルできるよ、あれ凄いつて」

痩せすぎてさえいなければ、ノエルはとても良いモデルになると思う。彼は微笑が武器なのだし。

「僕は医者になるんだ。モデルなんかもう二度とやらない。絶対にね。はやくあれ剥がして貰いたいよ」

ノエルがここまであからさまに嫌悪感を丸出しにすることはあまりない。よほどモデルが嫌だったのだろうと再認識するが、あの妖艶な微笑はちよつと意外だった。

ノエルは、与えられた仕事は完璧にこなす。だからこんなに嫌がっているモデルの仕事だって、たった一度とはいえ完璧にこなしていたようだ。撮影の時に、ノエルはおそらくサラのことも考えていたのだろう。でなければ、あんなに優しげな、かつセクシーな微笑は出せないと思う。

「医者か。頑張れよ」

モデルになりたくない口実として、ノエルは医者という職業を出したのかもしれない。けれど、ノエルの口から何かになりたいという言葉を聞いたことはあまりなかった。ノエルなら医者になれるだろう。それも、凄腕の。

「ありがと。さてと、シエリー探すよ」

ノエルは微笑して、キャリーカートを引きながら周囲を見渡した。クライドも辺りを見て、長時間ここに留まっていそうな人を探す。

しばらく探し回っていると、さすがに疲れてきた。汗が肌を伝う感触が気持ち悪くて、クライドはバッグから出したタオルで額を拭

いた。ノエルは何食わぬ顔をしながらも、長袖を肘近くまでまくっている。彼にしては珍しいことだ。なぜなら彼は腕まくりが嫌いで、今までは「シャツがしわになる」といって暑くても袖をそのままにしていたのだ。

「見つからないね。見当もつかないし」

げんなりした声でノエルは言う。クライドも頷きながら、コンクリートでできた都会の地面を恨んだ。蒸すような暑さと、肌を焼くようなじりじりとした暑さが同時に襲ってくる。かなり喉が渴いてきたが、水は持っていない。高いビルがあるだけで木陰の一つもないなんて、都会人はこんなところでよく生きていける。

「何かないのか？ 良い方法」

「地道に聞き込み。それが今出来る最良の手段だよ」

顔を上げて空を睨んでいるノエルを見つつ、クライドは思う。白い。色が白い。本当に、ノエルは病弱そうな肌色をしている。骨ばった手足に、肋骨が浮いた腹部。彼はいつか栄養失調で病気になると思う。

「倒れるなよ」

「君の方こそ。貧血起こしたりしたら、寝るところないからね」

お互いに苦笑しいい、それからクライドはあることに思い至る。

デゼルトに利かなかった魔法についてだ。

どうして通じなかつたのだろうか。今までなら、想像すれば簡単に何かが起こった。

「そういえばさ、デゼルト相手には魔法があまり通じなかつたんだよな。折角想像したのにすんでのところかわされたり……」

ノエルは知的な緑の瞳をこちらに向け、微笑した。いつもどおりの、何の裏も含みも無い微笑だ。

「君の魔力が弱まっているのか、デゼルトに何か特別な力があるかのどちらかだと推定されるね」

「やばいな。これで俺の魔力が弱まってるなんて言ったら、デゼルトを撃退できないんじゃないか？」

「大丈夫だよ。だって一年以上も魔法を使っていなかったんだよ？ 魔力は使わないと薄れてしまっって何かの魔道書に書いてあったから、貧血にならない程度に使うようにしていればいいんじゃないかな」

「そっか…… じゃあ涼しくなる想像」

彼の知識に納得しつつ、想像する。ひんやりとした風が肌を撫でて、このじりじりと焼けるような肌の熱を奪っていくところを頭に思い描いた。想像は上手くいったが、頭がぐらりとした。体が重くなったように感じ、クライドはついその辺りのビルに寄りかかってしまう。

「やっぱ、魔力弱まってるのかも」

「無理しないで、クライド。ちょっと休もうか」

「いや、シエリーがデゼルトに何されてるか解んないだろ。休んでるわけにはいかないんだ」

「そうは言っても、君の身体が心配だよ」

「大丈夫だって。想像しなきゃ平気なんだ」

「辛くなったら絶対言ってよ。グレンもアンソニーもいないのに、君までいなくなったら僕は困る」

そういわれて初めて、クライドはノエルが自分と同じ気持ちであることに気づいた。ノエルだって、グレンとアンソニーがいないことを勿論気にかけているのだ。考えてみれば当然だ。シエリーと出会うずっと前から、クライドたちは四人で一緒にいたのだから。

ノエルのことを考えてやれなくてすまないと思うと同時に、飛び出していった二人のことを思う。今頃彼らも、ここでシエリーを探しているのだろうか？ それとも、まだスウェントにさえたどり着けずにいるのだろうか。早くシエリーを見つけて、彼らと合流しなければ。

元はクライドについてくるといふ名目で町を出た仲間達は、今はそれぞれ全く違う目的でいるのだ。シエリーは訳もわからず連れ去られ、グレンはクライドに失望し、アンソニーはグレンをサポート

する側に回り、ノエルはいなくなつた仲間のために必死だ。

こんなことなら町を出る時に独りでくればよかつたとクライドは思う。もともと、シエリーもグレンもアンソニーも、そして隣にいるノエルでさえもこの件には関係ないのだ。

「なあ、ノエル」

声をかけた瞬間、何人かの少女がノエルに駆け寄つてきた。全員クライドたちより年下のようだが、ノエルを見て恍惚としている。

一体何事かと思ひ、クライドはノエルと少女達を見比べる。

「ねえ、もしかして貴方つてあのポスターの人？ 本物の！」

「だよ、だよ！ 凄い凄い、一緒に写真撮つてください！」

「私もお願いしまーす！」

「あ、ずるい！ 私も！」

あつという間に少女達に囲まれたノエルは、半分は驚いていたが半分は迷惑そうだった。クライドは迷つたが、ちよつと少女達から避けるために身体を離れた。

「困ります。人探しの途中なので、僕はこれで」

「いいじゃない、ちよつとくらい！」

「良くないですよ。僕は急いでるんです」

「クールなのね！ ますます素敵」

「ちよつと、勘弁してください」

ノエルの迷惑そうな声が、次第に苛立ちを含んだものになつていくのをクライドは感じ取つた。少女達は黄色い声を上げながらまだノエルを取り囲んでいる。野次馬はどんどん増していった。これは何かの陰謀なんじゃないかと、クライドは思った。

このままでは不味いので、クライドはノエルの手を取つて逃走を試みた。しかし、伸ばした手は野次馬の誰かに振り払われ、クライドは突き飛ばされて転ぶ。

「……ノエル！」

「クライド、どこだい？」

ノエルの返事は遠くから聞こえた。困つたことになつたと思ひ、

クライドは空を仰いだ。どうにかしてノエルをこの人ごみから脱出させて、早いところシェリーを探さなくては。

そう思ったのだが、人ごみはどんどん移動している。小柄なノエルは流されるように、人ごみにつられて『HOLLY』専門店の方へ向かっていた。女の子の黄色い悲鳴に交じって、ノエルがクライドを呼ぶ声も聞こえた。

「ノエル！ ああ、どうしょ。不味い、これ不味いつて」

独り言を呟きながらもとりあえず彼を追うが、途中で誰かにぶつかつた。よろけてたたらを踏めば、相手に腕をつかまれる。どうやら彼は、クライドが倒れないように腕を掴んで支えてくれたらしい。体制を立て直しつつ顔を上げると、見知った長身の男が優美な笑みを浮かべて立っていた。

第十六話 街から街へ

微笑めば、すぐにでも女性をとりこにできそうな甘い顔立ち。勿論彼には見覚えがあった。昨年会った時と、服装以外で変わっているところはない。

「こんにちは、クライド。私のことを、覚えていらっしやいますか？」

流暢なエフリッシュ語を喋る、ハビに最も近い人物。それが彼だろう。彼でなければ、あの青髪のマーティンか。

マーティンはクライドの敵だが、目の前にいる彼はそうではない。そこが二人の大きな違いだと思う。

「勿論です…… レンティーノさん」

長身の彼は頷いて、にっこりと微笑する。真夏の日差しをものともせず、彼はノエルと同様長袖でいた。流石に上着は脱いでいるが、それでも脱いだスーツを小脇に抱えているのは妙だった。こんな季節外れな人間が近くに二人もいると、可笑しいのは自分のほうかと疑いたくなってくる。

「お久しぶりです」

屈託のない笑み。再会を喜んでくれているのがすぐに解った。けれどクライドは、はっとしてノエルの方を見る。彼はどこだ？

彼は既にどこかへ拉致された後らしく、辺りに少女達の姿もなかった。しばらく呆然として街を眺めていると、レンティーノが不思議そうな声を上げる。

「どうしたのですか」

「すみません、赤毛の女の子と赤い鉢巻の男見ませんでしたか？あと、さっきの人ごみどっちに向かったのか解りますか？……俺、どうしたらいいんだろ」

訊きながら、クライドは自棄やげになっていた。最後の方は呟きは、力なく俯いて発した。話を聞いている相手がレンティーノなのだ

いうことを、束の間忘れていた。

「赤い鉢巻の方は、白衣を着ていましたか？」

しばらくして、レンティーノは言った。クライドは反射的にぱつと顔をあげ、彼を見る。彼は軽く握った拳を細い顎にあて、目を伏せていた。

「何でそれを！ 見たんですか？」

「見ましたよ。エナークへの道を聞かれましたから、首都よりもエナークに近い場所にある空港を教えました」

「エナーク…… 早く行かなきゃ」

その前にノエルを探さなくては。そして一緒にエナークへ向かう手立てを何か考えなくては。シェリーへの手がかりはこうして意外な形で入手できたから、クライドはすぐにでもノエルを探さなければならなかった。

こんな大都会にノエル一人を置き去りにして、自分だけでエナークへ旅立てるはずがない。それに、ここにくるための飛行機のせいで旅費はもう使い果たしてしまったから、クライドはそのこともノエルと相談しなければならぬのだ。

「ご一緒しませんか？ 私も今からエナークへ帰るので」

「え、あ、でも」

ノエルがまだ。それを言おうとするが、レンティーノは微笑したまま続ける。

「車があるのでですよ、私には。お一人で歩かれるより、時間の短縮になると思います」

「あの、友達が」

言い出してみれば、レンティーノは不思議そうに訊ねてくる。

「どんな方なのです？」

「名前はノエルで、鳶色の髪をした小柄の眼鏡で…… というか、

あのポスターの人です」

説明より見せた方が早いと思ってビルを指差すと、レンティーノは蜂蜜色のまつげをしばたかせてポスターを眺めた。そして、こち

らを向き直って頷いた。

「解りやすい情報、ありがとうございます。少々お待ち下さいね」
レンティーノがシャツのポケットから取り出したのは、かなり薄い携帯電話だった。クライドの携帯の半分ぐらいしか厚さが無い。いや、それよりもっと薄いかもしれない。

力をくわえたら折れてしまいそうなのその携帯電話には、邪魔な飾りが一切ない。シンプルな銀色のそれはとても近代的なデザインで、どちらかというところ古めかしく見えるレンティーノにはあまり似合わないデザインだとクライドは思った。

レンティーノは薄型の携帯電話を開くと、耳に当てた。開かれた携帯電話は、閉じていた時よりも余計に脆そうに見えて驚く。こんな薄い携帯の、どこにバッテリーやら基盤やらが入っているのだろうか。

「こんにちは。ええ、私ですよ」

「貴方に頼みたいことがあるのですが……」

「そのまさかです、よくお解かりですね。鳶色の髪に、綺麗な緑色の眼をした方ですよ。名前はノエル」

「空港から南西に向かった『HOLLY』付近です。ポスターが目印になりますよ。よろしくお願いしますね。私はこれから、その方のお友達とそちらへ向かいますから」

クライドから顔を背けて、レンティーノはディアダ語で喋る。前に聞いたエフリッシュ語とおなじぐらい流暢じゅうたうだったから、クライドは感心していた。どちらが母国語なのだろうか？

いや、その前に。彼は昨年出会ったときに、ディアダ語を使えるくせにエフリッシュ語を喋っていたのか。随分器用なことをする。

そう思うが、クライドは黙っていた。夏の日差しが照りつけるビルに身を預け、クライドは空を仰ぎ見る。入道雲と、飛行機雲。そんなものが穢れの無い青空にふわふわ浮かんでいる。

やがてレンティーノは微笑しつつ話を終え、携帯をたたんでポケットに仕舞う。そして、クライドを手招いた。

「人探し専門家と言われるぐらい、人を見つけるのが上手い方がいるのですよ。彼に貴方のお友達の情報を与えておきましたから、私達は先に行きましょう」

よいのだろうか、彼に任せて。一瞬そう思ったが、こんな救いの手は二度と伸びてこないかもしれない。クライドは、しっかりと頷いた。

「すみません、何だか」

「急ぎの用事なのですよね。協力しますよ」

レンティーノの心優しい申し出に、クライドは感激した。クライドは再び頷き、レンティーノについて歩き出した。だが。

突然のことだった。魔法も使っていないのに身体が傾ぎ、クライドはその場に膝を折ってしゃがみこむ。

「クライド！」

「大丈夫です、多分……」

答えながら理由を考える。考えてから、そういえば今日は朝から何も食べていないことを思い出した。時刻は四時半から五時ぐらいだろうか。太陽は既に西に傾き始めているが、この季節は六時ごろまでまだ明るい。だからなのか、空腹感を忘れるぐらいクライドは空腹だった。

立ち上がるうとすると、全く初めてのことであるが、腹の虫が鳴いた。少し恥ずかしくなって俯くと、レンティーノが笑う声があった。「少し早いです、夕飯にしますか」

このままではまた倒れるかもしれない。だからクライドは、レンティーノの申し出に頷いて歩き始めた。

レンティーノの車があったのは、すぐ近くの駐車場だった。クライドは数分歩いただけで、彼の車にたどり着くことが出来た。この炎天下だ、日が傾き始めたとはいえまだ暑い。けれどクライドは、何となくその車に乗りたくなかった。

なぜならそれは黒塗りの外車で、内装も革張りといったまさに高級車なのだ。こんな車に自分が乗ってよいのだろうかと悩んでいる

と、レンティーノは助手席のドアを開けてくれた。

「どうぞ」

実に優雅な手つきで、レンティーノは助手席を指した。クライドはまじまじと革張りの助手席を見下ろし、それからレンティーノを振り返る。

炎天下の街を歩き回って、クライドは汗だくになったのだ。シートを汚さないか心配だったし、何より運転するのは優雅で紳士的なレンティーノなのだ。この狭い空間に二人きりになったときに、レンティーノとどう会話すればいいのか。クライドには見当がつかない。

もしも彼に非礼を働いてしまったら、自分もノエルも困ったことになるだろう。レンティーノは柔和であり怒らない印象があるし、彼が怒っているところなんて想像も出来ないのだが。

「いいんですか、乗っても」

「何をおっしゃるんですか、クライド」

朗らかな笑い。レンティーノは全くためらうこともなく、クライドを車に乗せるつもりなのだ。

彼の好意に感謝しつつ、クライドは車に乗り込んだ。レンティーノはすぐにクライドの左側にある助手席に座り、ポケットからキーを出してエンジンをかけた。とたんに、エアコンの吹き出し口から生ぬるい風が吹いてくる。

風は暫くすると冷たくなり、クライドは心地よさを感じた。しかし、自分が座っているのは高貴な感じのする男の隣。しかもシートが革張りで高そうだという二つのことを思い出して、クライドは緩みかけた心を引き締めた。

「では、参りましょう」

レンティーノはにこやかにハンドルを握り、アクセルを踏み込む。黒塗りの高級外車は、都会の路地へと急発進した。クライドはシートベルトをしていなかったなので、思いっきりダッシュボードに突っ込んだ。

「おや。お怪我はありませんか」

優しげに言うレンティーノだが、クライドはすぐに頷けなかった。怖い。本気で恐ろしい。今の瞬間、クライドはきつと死というものに一番近い位置にいた。自動車には乗ったことがなかったクライドだから、この時点で既に『自動車は恐ろしい乗り物』という概念が頭に取り付けられた。

彼の座席のすぐ前に、速度のメーターが見えた。よく見るまでもなく、明らかに制限速度をオーバーしている。それなのに、レンティーノは悠々とハンドルを握っていた。

「すみません、クライド。私は、隣に人がいると上手に運転ができなくなってしまうのですよ。緊張してしまつて」

「そ、そうなんですか」

「レストランにはすぐに着きますから、しばらく我慢して下さいね」
夢中で頷いた。このエキサイティング（というより、デンジャラス）なドライブがすぐに終わることを本気で祈りつつ、クライドは助手席で身を固くする。

数分後、本当にすぐにレストランに着いた。レンティーノは車を停めるのは上手で、あのスピードを殆ど落とさなのまま急ブレーキで駐車場に停車した。普通そこで滑ったり突っ込んでしまつたりするのだから、レンティーノは恐ろしく正確に駐車場の白線の中に車を入れていた。

クライドがようやく緊張感から解放されると、レンティーノは微笑した。

「今日は私が奢りますよ」

「いいんですか？」

「ええ、勿論です」

考えてみれば、クライドが友達と食事をすることは滅多になかった。行ったとしてもファストフード店止まりだったから、レストランに誰かと一緒に来るのはこれが初めてなのだ。アンシエントタウンにレストランは一軒しかなく、その一軒にもクライドは行ったこ

とがなかった。

「ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ。長い間お会いしていませんでしたが、貴方は私の名前を覚えていてくださっていましたから」

そう言つとレンティーノは微笑んで、歩き始めた。クライドもその後が続く。

自動ドアをくぐると、よく喋る陽気な女性店員が営業スマイルを浮かべつつ席へ案内してくれた。あまり込んでいない時間帯だったから、二階か一階か選ぶことができた。レンティーノはクライドにどちらが良いか訊ねてきたが、クライドはどちらでも良かった。彼は微笑しながら、二階の禁煙席を選んだ。

案内された席に着けば、窓から街がよく見えた。市街の真ん中には劣るが、この辺りもアンシエントの田舎に比べれば遙かに近代的だった。

高層ビルが立ち並び、車のクラクションが響く街。クライドは、自分はこんなところには住めないだろうと強く思った。もし都会に住むのだとしたら、いつ事故に遭うか解らないという危険と背中合わせの毎日になりそうだ。全くもって恐ろしい。

メニューを取って開いてみれば、様々な料理がずらりと並んでいて驚いた。どれも値段が少し高めで、ここが都会なんだとクライドは再認識する。奢ってもらうのだから安いメニューが良いだろうが、それを探すのさえ困難な気がしてきた。

「何を召し上がられますか」

「えっと……メニュー多すぎて」

「ゆっくりで良いですよ、クライド」

そういわれてメニューをじっと眺めるが、どれもおいしそうで困った。くわえて、頭の片隅にはシェリーとノエルのことがある。二人のことが片付かなければグレンたちとも会えないし、そうしなければハビの問題も解決しない。サラに夏休みのうちに戻ってくることを約束したが、時間は足りるのだろうか？

「これにします」

問題は山積みになっているが、とりあえず目の前にある食事の問題から片付けよう。クライドは、メニューの中で一番目を引いたものを指した。ざるに盛られた真っ白な麺と、つけつゆのセットである。人気ナンバーワンと書いてあったから、とりあえずそれにしてみただった。

冷たいものが食べたい気分だったからそれにしたのだが、クライドはこの料理がどういふ名称でどんな味なのか知らない。

「お飲み物はどうなさいますか？」

「じゃあ、緑茶で」

「……足りませんか？」

「勿論です」

「解りました。では、注文いたしますね」

クライドと少し会話したレンティーノは、微笑して店員を呼んだ。若い女性の店員がこちらに来て、レンティーノからメニューを聞いてから厨房へ向かう。

レンティーノはリゾットを食べるらしい。この暑いのに、よくそんなメニューが選べるとクライドは感心した。店の中は冷房がきいているが良いが、外に出ればまだかなり蒸し暑いのだ。

「疲れた顔をしていらっしやいますよ、クライド」

そこらを巡回していた店員からグラスに入った冷水を受け取りつつ、レンティーノは言った。店員はクライドにも冷水を渡して、それから去ってゆく。

前にもこんなことを、ハビに言われた気がする。ハビもレンティーノも、どこか似た何かを持っている。何というか、二人とも一緒にいて安心できるような人だ。それに雰囲気も少し似ている。

少し考えてから、二人に共通するのが包容力なのではないかとクライドは思いついた。ハビはまるで父親か年の離れた兄のような人であるし、レンティーノもそんなハビに少し似ているのだ。

「誰かを探しているのですかね。どうしてですか？ 差し支えなけ

れば、お教え下さい」

「誘拐です。シェリー…… あ、女の子なんですけど、彼女があの赤い鉢巻に誘拐されて。それで俺、追ってるんです」

「そうだったのですか。ですが私が見たときには、女の子はお元気そうでしたよ」

彼の『元気そうだった』という言葉に安堵すると同時に、クライドは再び焦り始めた。

今こうしている間にも、既にデゼルトはエナークについていて、そこから再び進路を変更して違う場所にいるのかもしれない。デゼルトは、そこでシェリーをどうするのだろう。考えただけで怖くなってくる。

グラスに入った冷水と氷を見つめながら、クライドは深く思考の海に沈む。

「…… 白衣を着た男が行く場所といたら、どこだと思えますか？」
不意に訊かれ、クライドは海から這い上がった。白衣を着た男は、どこへいくのだろう。やはり病院だろうか。

答えようとすると、レンティーノが先に口を開いたのでクライドは黙る。

「まず、病院だと思います。そこ以外では、どこか解りますか？」
「えっと、解らないです。学校ですか？ 理科の先生だったりしたら」

料理が来るまでの間で終わるだろうが、こんな話題は普通はしないだろう。けれど話す内容は他にないし、これからのデゼルトの足取りについて何か考えることができるかもしれないから、クライドはレンティーノに真面目な答えを返していた。

「理科ですか。惜しいところまで来ていますよ」

冷水のグラスに口をつけながら、レンティーノは言う。仰向いた彼の喉はれつきとした男性のもので、「彼にも妙に男らしいところがあるんだなあ」とクライドは感心した。感心しつつ、白衣の男が行く先について考える。

「研究所、ですか」

探るように呟いてみれば、レンティーノは頷いた。そして彼は、細く長い指をテーブルの上で組みながら微笑した。

「ええ。赤い鉢巻の方の白衣には、ピンバッジがついていました。詳しくは読めませんでしたが、バッジには『ラボラトリー』という文字列がしっかり入っていましたよ。恐らく彼はどこかの研究施設にいます、私は踏んでいます」

「……凄いです、レンティーノさん」

「いえ、そんなことはありません。失礼ですが、あの方に白衣はあまりお似合いではないと思いましたので、つい見入ってしまいました」

そういわれて、思わず笑ってしまう。この礼儀正しくて紳士的な男が、白衣の似合わない男をじっと見ているところを想像してしまつたのだ。レンティーノも、そんな人並みのことをするのか。

「エナークについたら、病院付近か研究所を捜してみれば良いという事です。女の子よりも赤い鉢巻の方のほうが目立っていましたから、彼について聞き込めば見つかるかもしれませんよ」

「ありがとうございます」

レンティーノはクライドが笑つたのに気分を害した様子もなく、つられて笑つたりした。そして冷静に状況を分析し、的確に道を示してくれる。彼には国を動かす政治家の才能があるのではないかと、クライドは密かに思う。

そして、ふとあることに気づく。デゼルトの白衣についてだ。一年の間に何があつたか知らないが、彼が白衣を着ていたのには本当に驚いた。

普通、人を誘拐するのにあんな目立つ格好をするだろうか。クライドなら誰かの印象に残りやすい白衣よりも黒い衣類を選ぶし、赤い額飾りも目立つから外す。

それなのにあえてその両方を身に着けているということは、デゼルトがよほど警察に捕まりたいのか、その両方が手放せないぐらい

大切なのかのどちらかになるだろう。

いや、第三の可能性がある。彼が、クライドたちをわざと導こうとしている可能性だ。

「誘拐犯は、私服でいるのが普通ですよね」

声をかけてみれば、レンティーノは少し考えてから答えた。

「そうですね。けれど、怪しまれないように何かの衣装を着ているということも考えられます。たとえば、警察官の制服を着た犯人がいるとします。彼が、誘拐してきた人質を不良少年に見立てたらどうでしょう？ 逃げようともかく少年が、いくら自分が誘拐されていると主張しても、それは少年が警察官から逃げたがって言っている嘘のように思えませんか？」

なるほど。あえて警察官などのふりをする事によって、目撃者の先入観を利用する手も考えられる。警察官が子供を誘拐するはずがないと、誰もが思うだろう。そんな風にして、着る物を利用することも考えられる。けれど。

「じゃあ、白衣はどうなるんですか」

訊ねれば、レンティーノは困ったような顔をして首を捻る。

警察官の制服であれば、レンティーノの言ったように利用できるかもしれない。だが、白衣は用途不明だ。しかも、なぜデゼルトがシエリーを誘拐するという悪行に走ったのかも解らないのだ。

以前のデゼルトならば、クライドの目の前で迷わずシエリーを刺しただろう。けれどそうしなかったということは、やはり彼はクライドをおびき出したいのだろうか。けれど、それならクライドを直接誘拐したほうが早い気がする。ああいう男は、ちまちまとした手を使うのをいかにも嫌いそうだから。

「お待たせしました、リゾートのお客様」

男性の声で思考を打ち切ると、若い赤毛のウェイターがリゾートを持ってきていた。暖かいリゾートからは白い湯気が立ち上り、見るからに熱そうだった。レンティーノはウェイターに会釈し、片手で自分の手前を指し示している。

クライドの分の料理も、二人分の緑茶とあわせてすぐにきた。レンティーノはクライドの分が来るまで食べずに待っていてくれて、二人分のメニューが揃ったところでスプーンを取った。

食事のあいだ、会話が途切れることはなかった。彼がアンシェントタウンでの暮らしについて訊ねてきたからだった。

レンティーノはリゾートを上品な仕草で口に運んでは、微笑してクライドの話に頷いてくれる。そして、自分のアルカンザル・シエロ島での生活を話してくれた。本当に何気ない日常の話で、その中にハビの話はでてこなかった。

食事が済み、クライドは席を立った。レンティーノは車のキーをクライドに手渡して、先に車に行くように言った。

目上の人が飲食店などで勘定するときには、その場にはいはいけない。確か、これがマナーだ。クライドは素直にしたがって、レンティーノの車へ向かう。

助手席側のドアの鍵を開け、運転席側の鍵もあけておいてから大人しく座ってレンティーノを待つ。彼はゆっくり歩いてやって来て、ドアを開けた。

「お待たせしました」

そういつて優美な笑みを浮かべるレンティーノに、クライドは車のキーを返した。彼はクライドからキーを受け取ると、すぐにエンジンをかける。

「船を使えばエナークまで行けます。港へ向かいますが、よろしいですか？」

「ありがとうございます」

クライドがぺこりと小さくお辞儀した途端、車は急発進した。クライドは再びダッシュボードに頭をぶつけ、低く呻く。

「おや、失礼しました」

「……安全運転、お願いできませんか？」

飄々（ひょうひょう）と笑うレンティーノを見て、クライドは心の中でため息をつく。とりあえず、シェリーのいるエナークへ連れ

て行ってくれるのは、今のところ彼しかない。彼に縋るしかないのだ。

だがクライドは、エナークにつくまで自分の命がもつかどうか心配だった。

第十七話 進むべき道は

レンティーノは、傍目に見れば凄く真面目そうに運転している。けれど、どこをどう間違えているのか、彼は相変わらず恐ろしいぐらゐのスピードで都会の路上を突っ走っていた。

太陽が西に傾けば傾くほど、クライドの緊張感が高まった。時間の流れを否応にも感じ、シェリーのことでも頭がいっぱいになるからだった。とうとう夕陽が沈んで緊張がピークに達した時、唐突に車が止まった。

クライドは、またしてもダッシュボードに打ち付けられた。今度は危機に気づいてすばやく身をかわしたつもりだったが、やはり額を強く打って痛い。こぶになっていないか心配だ。

車が止まったのは潮風と排気ガスのおいがする港で、レンティーノは車をとめたのに降りることはしなかった。代わりに運転席の窓を開けて、係員のような人と話をしている。フェリーの乗船手続きらしい。

パスポートを見せるように言われたので、クライドは係員にパスポートを提示した。思えば、クライドがこうして正当な手続きを踏んで外国に入るのは、初めてである。

係員の誘導によって車のまま船に乗り込み、レンティーノは船内の駐車場で車を停める場所を探し始めた。クライドはフェリーに乗ったことがないので、車ごと乗れる船の存在にまずは驚いた。けれど、レンティーノが再び猛スピードで駐車場の中を走ろうとしたことでもっと驚く。

一般道に比べれば狭い船内で、あんな恐ろしいスピードを出されたら困る。そう思っつて、クライドは密かにレンティーノがアクセルを踏む力を弱めるように念じた。

見事にクライドの願いは通じて、レンティーノは今までとは比べ物にならないくらい静かな運転をしてくれた。もしかしたら、クラ

イドがうつかり魔法を使っていたのかもしれないが、仮にそうだとしても貧血の症状はない。

「降りてください、クライド」

「あ、はい」

このままこの駐車場にとどまるのかと思いきや、レンティアーノは車のドアを開けてするりと外に出た。クライドも彼に追いついて、並んで歩く。

この駐車場は、雰囲気は何となく地下道に似ているような気がする。コンクリートがむき出しになっている、灰色で無機質な空間。天井を見上げれば配管などがびっしり張り巡らされているのがみえる。暗くて排気ガス臭くて、ここはクライドにとって居心地の良い場所ではない。

けれど駐車場を出れば、いきなり華やいだ空間に出たので驚く。暖色の明かりに彩られた船室には、様々な客がいた。やはり夏休みだからだろうか？ ガラス張りになった場所から外を見れば、右舷も左舷もカッパルの溜まり場になっていた。

船室にはソファやら売店やらがならび、くつろぎやすい空間ができていく。けれどクライドには、こんなに人が多い空間でくつろぐことは思えなかった。ただ、何時間も歩き詰めだったので、猛烈に疲れてはいた。

「船の上から眺める星空は、格別に良いものですよ。周りに邪魔をする光源がありませんから、星が綺麗に見えます」

レンティアーノはクライドの視線をたどり、右舷側を見ながら言った。クライドは感心したが、あの恋人たちの中に混じって星を眺める気にはならなかった。

適当なソファに腰を下ろし、クライドはレンティアーノと話すことにした。レンティアーノはクライドの正面にあるソファに腰掛けると、胸ポケットから携帯を取り出そうとしてふと手を止めた。

「……ない、ですね」

「え、何かありました？」

「どうやらタイピンを落としてしまったようです。すぐ探してきますから、ここで待っていてください」

レンティーノはすっと軽やかにソファから立ち上がると、すたすたと歩いていってしまっただ。クライドは呆然と彼を見送り、それから少し退屈になった。

最初に見たときは袖の長さにはかり気を取られてしまったが、レンティーノは白いシャツの上からきちんとネクタイをしていた。オードックスな、無地で紺色のネクタイだ。よく考えてみれば、最初に見たときはタイピンがついていたような気もする。けれど記憶はあやふやだ。

暇なので携帯にインストールされているゲームで遊ぼうかと思う。一瞬だけサラに電話しようかという気も起きたが、この状況を一体どうやって電話するのだろうか。もしノエルとはぐれたなんていう現状を電話したら、サラに余計な心配をかけることになる。

しばらく携帯で遊んでいると、やがてレンティーノが戻ってきた。彼のネクタイは、きつちりと銀のタイピンで留められている。どうやら、ちゃんと見つかったようだ。

「すみません、クライド。ご迷惑おかけしましたね。車の運転席の下にありました」

「見つかってよかったですね」

「ええ。今年の誕生日に、友人から頂いた大切なものですから」

レンティーノは微笑すると、クライドの携帯に目を留める。

「携帯電話、持っていらしたのでですね」

「うん。メールより電話の件数が圧倒的に多いんですけどね」

気が抜けていたので、中途半端に丁寧な言葉遣いになってしまった。訂正するタイミングを逃し、クライドはレンティーノをじっと見る。彼が次に発した言葉には、ちゃんとした言葉遣いで返事をしたい。

そうしてじっと見ていると、目の前にいるレンティーノもメールより電話を使うことの方が多そうだとふと思った。彼がああ薄っぺ

らな携帯で、暇そうにメールを打っているところはあまり想像できない。

ノエルは機械系に強そうな感じがするから、きっとメールも電話も自在に使いこなすだろう。グレンはどちらも同じぐらい使いそうだが、アンソニーはどうだろう。彼は意外に几帳面なところがあったりするから、メールを出せば必ず返事がくるだろうということだけは予測がつく。

レンティーノは自分の携帯を取り出して開きながら、クライドに話しかけてきた。

「よろしければ私の番号、お教えしましょうか？ これからはくれるようなことがあったら困りますし、何か困ったことがあったらすぐに連絡していただきたいですから」

「え？ あ、どうも」

正直、レンティーノと電話することなんて恐らくないだろうとは思う。しかし万が一のことも考えて、クライドは頷いた。教えてもらって損はないだろう。そして彼に番号を教えても、彼なら個人情報を守ってくれると思う。

それにしても、彼から番号を覚えてくれるなんて。なんだか意外だ。

「じゃあ、赤外線通信で送りますね」

「はい。準備はできていますよ」

若い男と向き合って、赤外線ポートで情報のやり取りをしている。なんだか変な感じだった。アンシエントタウンで携帯電話を持っている人は極端に少なかったから、クライドが赤外線ポートを使うのはこれが初めてなのだ。

「快速ですが、やはりエナークは遠いです。ラジエルナの時間で言えば、深夜二時頃の到着になるでしょうね。エナークでは時間が半日程違いますから、現地では午後二時頃だと思います。到着までは不安でしょうが、早く着くことを祈ってください」

携帯をポケットに仕舞いつつ、長い脚を組むレンティーノ。彼は

微笑を絶やさず、船内の様子をあくまで優雅な仕草で眺めていた。

クライドは、開きっぱなしになっていた携帯の画面を見た。レントイーノの名前と電話番号、それからメールアドレスの情報が表示されていた。電話番号は二つあったが、多分その片方は、自宅か会社の電話番号だろう。

「海に出てから、目的地に着くのは早かったです。乗り物って便利ですから。けど、それまで俺は、地球の裏側まで行くのに船で一年かかると思込んでました」

しみじみと呟くと、レントイーノは頷いてくれた。昨年の旅は、この世界を全然知らないままスタートしたのがいけなかったのかもしれない。結果としてクライドは少ない荷物で旅立つことになったし、アンソニーのようにテントなどにも気が回らなかった。

アンシエントは物凄い田舎だ。そして、都会には化け物めいた速度で動く飛行機や船、自動車があるのだ。この差は何だと問いたくなるぐらい、都市部と山間部での技術の発展度が開いている。

結局はクライドも井の中の蛙で、真上にある空ばかりを信じて生きてきたのだ。外に草原が広がっていることも、切り立つ崖があることも見たことがなかったのだ。平和で何も無い、『アンシエントタウン』という名の井戸からのこのこやってきたクライドだから、知っているつもりだったことを知らずに驚いたりもする。

世界は広い。けれど、交通網がかなり発達している都会に来れば、世界は本当にちっぽけだと思えてしまうのが不思議だ。この矛盾は一体なんなのだろう。

「そうですね、世の中は本当に便利になりました。文明も、よくここまで発展したと思います」

「時々不思議になりませんか？」

「ええ、全くです」

言いながらレントイーノは、物思いにふけたようだった。クライドも会話を続けることをやめ、この先について冷静に考えることにする。世界が広いのだということ言う前に、片付けなければならな

い問題が山積みになっているのだ。

現在のクライドにとって、もつとも忌々しい男であるデゼルト。彼は白衣が似合わないワイルドな男で、放っておけばきつと獰猛な野生動物のようにシエリーを殺してしまう。彼にとってシエリーはきつと、殺すのに造作もないくらい弱い女の子なのだ。

シエリーがデゼルトから逃げられなかったという時点で、すでに二人の力の差は歴然としていた。そうでなくても、シエリーはエルフではなくなった身だ。帝王戦の時に見せたような俊敏な動きなんて、平凡な女の子になったシエリーにできるはずがなかった。

あの白く細い喉から力一杯に声を張り上げて叫び、必死に助けを求めているシエリーのすがたが頭に浮かんできた。これがありえない想像ではないという現実に、胸が痛んだ。

ノエルはどうしているだろう。寄ってくる女の子達を上手く振り切って、ちゃんと逃げる事が出来ただろうか？ そして、レンテイーノが派遣した『人探し専門家』にちゃんと見つけてもらえただろうか。

彼ならもしものことがあっても、クライドの人相だけを手がかりに追ってくる事ができそうだから良いとしよう。問題は、残る二人だった。

「大丈夫かな、皆」

独り言を呟きながら、船内の天井を見上げた。煌びやかな明かりに照らし出された天井は真っ白ではなく、淡いクリーム色をしていた。

グレンは今どこにいるのだろう。クライドには、見当もつかない。アンソニーと仲間割れを起こしていないだろうか。通行人と言いつたりしていないだろうか。

離れている時間が長くなればなるほど、クライドは心配になる。彼がひとあし先にエナークにいてくれればそれに越したことはないが、その確率は絶望的だった。

彼のことだから、一生懸命になって協力してくれるアンソニーで

さえ邪険に扱いきそう。機嫌が悪いと、グレンは必ずと言っていいほど八つ当たりをする。アンソニーが彼の八つ当たりの餌食になっていないか心配だったし、別れてまだ一日とたっていないのに、クライドは彼らと三日ぐらい会っていないような感覚に襲われていた。誰か連絡をくれてもいいのに、クライドの携帯は電源が入っていないかのように沈黙していた。電波状況をあらわすアンテナのマークは、この場が情報の受信に最適だというしるしを出しているのに、誰かが無事でこちらへ向かっているという、確かな情報が欲しかった。クライドにとっては、それがあるかないかで大きく違うのだ。敵地にたった一人で突入して、シェリーだけでなく自分の命を救えるかどうかは微妙なところだった。デゼルトに仲間がいたら、クライドにはもう成す術もない。

同時に、このまま船に揺られていけばちゃんとエナークにつくだろうかと、不安になってきた。エナークは外国だから入国審査もあつたりするのかもしれないが、人探して来たなんて言ったらラジエルナに追い返されそう。一応、観光といっておこうか。

「きやつ」

近くで小さな悲鳴が聞こえ、顔を上げるとクライドの目の前で女の子が転んでいた。見た目は四、五歳だろうか。白いワンピースを着ている。

クライドはそっと席から腰を浮かし、女の子を助け起こしてやる。床はじゅうたん張りだから、女の子は膝をすりむいたりはしていないようだった。

ソファから前かがみになった姿勢で女の子を見て、クライドは軽く首をかしげる。こうすることで視線の高さは同じぐらいになるから、クライドは女の子の透き通るような青い瞳を真っ直ぐ見つめることになる。

「どっか痛くないか？」

「う……」

訊ねると女の子は痛そうに顔をしかめて泣きそうになるが、クラ

イドを見て毅然として首を横に振った。

こんな小さな女の子でさえ、辛いのを我慢して前に進もうとしている。それなのにクライドの頭の中といったら心配ばかりで、前進のことなどまるでない。この小さくて強いレディにならって、そろそろ自分も弱音を捨てなければ。

幼い女の子は泣きそうな顔のまま、ペこりとお辞儀して走っていた。将来この女の子は、シェリーのように気が強いタイプになるのだろうか、何となく予想できた。

女の子が駆けていった先には、その両親らしい大人がいる。父親だと思われる茶髪の背が高い男性が、こちらに向かつて一度だけ小さく礼をした。クライドも彼に会釈して、それきりクライドと女の子の家族は交流を失くした。

たぶん、あの幼女の記憶にクライドが残り続けることはないだろう。クライドの方も、時がたてば忘れてしまっただろう。人間と人間の関係は、そんな希薄なものだ。

女の子が転んだ、そしてクライドがそれを助け起こした。そのほんの僅かの間にだけ、クライドとあの幼女の進む道が交差したのだ。きつとこれから、この幼女との関わりはゼロになる。どこかで運良く出会えたとしても、お互いに忘れていくだろうから。

長いあいだ一緒だった、一番古い友達のグレン。彼と並んで歩けたのは今日までで、今日からはもう二度と会えずに終わってしまう可能性だってある。今こうしてここで別れた、名も知らない女の子のように。

クライドとしては、そんなのは嫌だった。グレンに、シェリーを連れて会いに行きたい。そのためにはまず、シェリーを探すところから始めなければ。

「んん、やばいな……」

軽く唸りながら呟いて、クライドは自分の膝に額をくっつけた。今日は歩き回ったせいで、なんだか疲れたのだ。もう眠ってしまいたい。

船旅は去年散々したから慣れているが、同じ船でも漁船と客船は違う。人が多い空間にいと、やはり疲れるものだ。気づけば誰も会話していなくても、自然と周囲に気を配ってしまう自分がある。「どうかなさいましたか？」

「あの、すみません。俺、今から寝るかもです」

「疲れてしまったのですね。着いたら起こして差し上げますから、ごゆっくり」

「ありがとうございます」

「いえ。おやすみなさい、クライド」

静かな調子で語られる言葉のひとつひとつが、クライドの眠気を誘う。この調子で彼が本や詩を朗読してくれば、すぐに寝付けるのではないかと密かに思ったりした。

思ったりしたが、そんなことをしてもらえなくてもクライドは既に眠い。歩きつかれ、考え疲れ、クライドはもう何もかも投げやりになり沈みたかった。

目の前にいるレンティーノが何をしているのか考えながら、クライドは疲れた体を無理に曲げた変な体勢のまま眠りについた。

第十八話 白い密室

どれくらいたったのだろうか。クライドが目を覚ますと、船の揺れがおさまっていた。なおかつ、自分はソファではなくベッドに寝ているようなのだ。ソファでは両手両脚を存分に伸ばして寝ることなどできないはずだから。しかも、何だろう。潮風の匂いがしない。

代わりに鼻腔を満たすのは、病院の匂いだった。エタノール系の消毒薬の匂いといえば良いだろうか、この部屋にはそんな匂いがただよっていた。

何かが起きた。そう思って飛び起きるように半身を起こしてみても、クライドは自分の目を疑った。視界に白いものしか映らなかったからだった。

「な、何だこれ」

自分が寝ているベッドも、真っ白だ。枕もシーツも敷布団も、果てはベッドの脚となっているパイプまでもが真っ白なのだ。ベッドは壁際にあつたが、ベッドの隣接していない方の壁には簡素な洗面台が取り付けられていた。無論、その洗面台も真っ白だった。白くないのは鏡だけだが、鏡にも真っ白な壁が映っている。

ぞっとした。寝ている間に、色彩感覚がなくなってしまうたのかと錯覚した。けれども自分の手を見て、濃緑のＴシャツや色落ち気味のジーンズを見て、金色をした髪を見れば、自分が色の感覚を失っていないことをちゃんと確認できた。クライドに異常がないとすれば、異常なのはこの部屋にあるもの全てだった。

見渡すごとに、この部屋はどんどん怪しさを増した。床も壁も白で、異様なことにこの部屋には出口がないのである。一体自分は、どうやってここに閉じ込められたのだろうか。ベッドサイドを見れば自分の靴がちゃんと置いてあつたから、クライドはそれを履いて歩き出す。

簡素な部屋だった。真っ白な部屋だった。窓も出入り口もない、

壁に四方を囲まれた部屋だった。現実的に考えればあり得ない部屋だった。こんな窓もドアもない密室に、人が入るのは不可能である。そんなのは、考えなくても解ることだ。

大事なのは、ここが密室に見せかけた普通の部屋である可能性があるということだ。よっぽど特異なことをしないかぎり、部屋に人を入れたまま出入口をなくすなんてことはできないはずだから。クライドは、壁にべったりと指を沿わせて歩いてみた。何かの手がかりを発見できれば、窓やドアがでてくるかもしれないなんてフアンタジックなことを考えていたのだった。

指先の感覚をたよりに、部屋を一周回る。洗面台の隣が引き戸になっていて、そこがシャワールームであることを発見した。けれどその他に解ったことと叫びたら、やはり出入口がないということだけだった。ひとつだけ閃いた考えがあるとするなら、それはベッドやシャワールームが密接している壁に出入口はないだろうという仮説である。

ベッドに飛び込み、仰向けになってクライドは頭をかかえた。スプリングが軋み、薄い布団が跳ねてベッドから転がり落ちるが、気にもしなかった。

どうしてこんな所に閉じ込められているのだろう。レンティーノはどこへ消えてしまったのだろう。彼もまた、こんな空間に閉じ込められているのかもしれない。彼の安否を確かめる方法が、何かあるはずだ。

そう考えてから、クライドはレンティーノと電話番号を交換したことを思い出した。携帯と財布はクライドが最後に触った時のままポケットに収まっていて、誰にも触られた形跡はないようだったので安心した。

メモリーを呼び出してから、携帯を耳に当てる。単調な呼び出し音がしばらく響いていたが、やがて相手が出る気配があった。

「もしもし、レンティーノさん？ 今どこです？」

急ぎ込んで話しかけると、電話の向こうがしばし沈黙した。沈黙

の意味がわからず、クライドは混乱する。

レンティーノは誘拐される途中で携帯を落としたのかもしれない。それとも、今クライドが喋りかけている相手が誘拐犯なのかもしれない。電話の向こう側で、レンティーノが監禁されていたりするのかもしれない。そんなことがあつたら、どう対処すれば良いだろう？

「……やったあつ！ やっとクライドが僕のところに来てくれた！」

「え？」

電話に出たのはレンティーノではなかった。声のトーンからして、レンティーノよりいくつか年下だと思われる少年なのだ。しかも恐ろしいことに、少年はクライドの名前を知っていた。くわえて、いかにも招きたいと思っていたというような口調。

はつとした。デゼルトに絡んでいる人物が、こうしてレンティーノとクライドを誘拐したのかもしれない。やはりデゼルトは人質をつれた^{おと}罫で、罫であるデゼルトを追わせることによって、この少年はクライドをわざわざエナーク方面まで誘導したのだろう。

「てめえ、シエリーをどこへやった！」

「勘がいいね、クライドは。安心してね、彼女まだ喋れる状態だから」

少年はあどけない声で、気楽そうに言った。まるで、拷問でも与えたかのような言い方。まだ喋れる？ ということは、喋ることが出来なくなる寸前までシエリーを痛めつけたということなのか？

「……っ！ お前、シエリーに一体何をしたんだ！」

「さあ？ 僕は知らないよ。ふふ、彼女に会うの楽しみ？」

「ふざけんじゃねえ！」

少年のからかうような口調に、おのずと怒りが湧いてくる。けれど、少年は楽しそうに笑うだけだった。クライドがどんなに怒っても、どんなに怒鳴っても、少年はただ笑うだけだった。

「あんまり怒ると身体に悪いよ、クライド。君にはやってほしいことがあるんだ。だから、逃げようなんて考えないでね。僕は君を殺

したくてここに呼んだんじゃないから」

「呼んだ？ あんな姑息な方法、『呼んだ』じゃなくて『おびきだした』だろうが！ シェリーを今すぐ返せ、返せよ！」

「それはだめだよ。彼女を返したら、君は僕に協力してくれなくなっちゃう」

「誰がお前みたいな卑怯な奴に手を貸すか！ いい加減にしろ」

「いい加減にしろ、それこっちの台詞。今、彼女の命を握ってるのはこの僕なんだよ？ 偉そうにしてると、彼女喋れなくするよ。いいのかな？」

少年は随分と偉そうに、クライドの脳裏にシェリーの存在をちらつかせた。クライドがこれで動けなくなることを、解っていてやっている。それが言いようもなく悔しくて、クライドは悪態をつく。

「……畜生、汚い手使いやがって」

「そうでもしなきゃ、君は僕を助けてくれないでしょ」

「は？ 助ける？ ふざけたこと言いやがって。じゃあ何だお前、助けられる分際で、未来の恩人を監禁するのかよ。笑わせんな」

冷笑しながら、クライドは真剣に怒っていた。相手の卑怯な手口が、かなり腹立たしいのだ。何を協力させたいのかは知らないし知りたくもないが、協力云々の前に、まずは交渉が基本だろう。それをいきなり、友達を誘拐するだなんて。普通そうというのは、交渉決裂したときに使う手段だ。というか、普通は誘拐なんて汚い手は使わない。

「うわ……なんか君、思ってた以上にむかつく」

「お前に言われる筋合いはねえよ。レンティーノさんはどうした」

この電話だって、レンティーノのものだ。それを勝手に使いながら、悠々と偉そうに語るこの少年が本当に腹立たしくてクライドは壁を殴りつけたい気分になられていた。

けれど少年は泰然と、こちらの神経を逆なでするような間延びした口調で言った。それはもう、この状況を楽しんでいるとしか言いようのない嬉しそうな声だった。

「え、レンティーノ？ となりにいるよ！ 何、代わりたいの？」

一瞬、何も答えられなかった。言葉がみつからなかった。

となりにいる。それはつまり、レンティーノが少年の味方であるということ指している。言い換えれば、レンティーノが少年の手先としてクライドを操ったということだ。

それを聞いて初めて、クライドは自分の認識していた状況が随分と間違っていたことを思い知った。レンティーノは、最初からクライドをここに連れてくる目的で声をかけたのだ。その事実を思い知って、クライドは息が詰まるような思いだった。

大体、何だ。考えてみれば、事がうまく運びすぎだった。クライドはここに連れてこられるために、シェリーが誘拐されたその時から茶番につき合わされていたのだ。いや、人質がいるから茶番どころではすまなくなっているのだが。今頃気づいた自分に激しい怒りを覚え、クライドは壁を一発殴りつけた。

誘拐も、身代金目的とかそういうものではなかった。最初からクライドが目的だったのだ。なんて卑怯なんだろう。わざわざシェリーを巻き込まなくても、クライドが欲しいならクライドだけを誘拐すればいいのに。

友達が誘拐されたら、普通の人なら警察に直行するだろう。だが、そうしなかったクライドたちの行動は最初から読まれていたのだろう。彼らはクライドたちが感情的になってシェリーのために奔走すると踏んでいたようで、確かにそれは悔しいぐらいに当たっていた。「あはは！ レンティーノは僕の大切な友達だよ。君のお友達は皆どっか行っちゃってるけど、僕の隣にはいつだって友達がいるんだ。君みたいに捨てられちゃってるのを見ると、本当哀れでしょうがないよ」

「はあ？ 何だお前、訳わかんねえんだけど」

「君達がやってたのは、所詮友情ごっこでしかなかったってこと。」

本当の友達なら、はぐれずに一緒にいられるもんね。ね、レンティーノ！」

……何だこいつ。話していると、確実に彼はクライドの怒りを煽る発言をする。会話の仕方ひとつとってみても、この少年が自己中心的な性格をしているとクライドにはすぐ解った。最初、クライドは怒りのあまり彼を怒鳴りつけたくなかった。

けれど『友情ごっこ』という言葉を思い返して、反論も忘れて黙りこんでしまう。そうだ、もしかしたらクライドが皆のことを一方的に友達だと思っているだけなのかもしれない。

今まで疑いもせず一緒にいたけれど、あの帝王戦の後になってから友達がクライドに見切りをつけるというのも十分あり得ることだった。現に、グレンがそうではないか。

「あはは！ 凶星だね、クライド。どうかな、一人になっちゃった気分は」

「ここから出せ」

「だめだめ。君にこの研究所を壊されたくないんだ。大人しくそこで待っててね！ ああ、早く君に会いたいなあ」

この少年は、間違いなくこの場所を研究所といった。レストランでの会話が思い出されて、クライドは余計に苛立たしくなった。

レントイーノは全て解っていた上で、クライドにそれとなく研究所という可能性をほめかしたのだった。クライドがそれに食いついてくると解っていて、言ったのだ。優美な笑みなんて浮かべながら、最初からクライドを騙すつもりで。何て男だ。

考えながら、クライドはふとあることに思い至る。ならば、レントイーノが呼んだ仲間はノエルをどうしたのだろうか？ ノエルも一緒に、この研究所に捕まっているのだろうか。ならば助け出さなければ。

クライドを追っているということは、グレンとアンソニーも少なからずここにいる可能性がある。彼の反応を見れば、いるかいないか多分解る。

「ノエルはどこだ」

「今頃解剖されてるかもね」

「トニーもいるんだな？」

「さあ、どこでしょう。もう死んじやったかも」

「グレンは」

「ああ！ 彼なら解るよ。マーティンに遊ばれてるんじゃないかなあ？ マーティン、グレンの事大嫌いだから」

やはり、皆ここにいる。彼の態度が演技でないのなら。彼はとても正直で、声のトーンで嘘か本当か大体判別できた。

この少年は、とても隠し事が下手なタイプだろう。クライドの近くにも、そういう少年がいる。例えて言うなら、嘘のつけないアンソニーだ。

クライドは思案した。グレンを助けに行くには、そのマーティンという男をどうにかしなければならぬ。……マーティン？

「ここ、人工魔力の結社だったのか」

呟くと、少年は怒ったように言った。

「なにそれ、人を異端者かなんかみたいに言つて。確かにここは人工魔力を創ってる場所だけど、真の目的は魔力を創ることなんかじゃないよ」

何だか、怒るポイントが違うと思う。そう思ったが口には出さずにおく。そして、彼の言つた意味について考えた。

もしも魔力を創ることが目的でないのなら、何だというのだろう。だが、訊ねるのも癪しゃくに思えた。グレンたちがここにいるなら、先に彼らを見つけてからシェリーのところに乗り込んだ方が確実に彼女を助けられるだろう。だが、どうしよう？ 肝心の自分がどこにいるのかさえ、クライドには解っていない。

この少年に頼んだとしても教えてくれないだろうし、クライドとしてもこんな卑怯で利己的な少年に頼みたくはなかった。自力で何とかするしかない。自力で、この真つ白な密室から出なくてはならない。

「あ。レンティノー、クライドに何か言う？」

「ええ。貸してください、ミンイェン」

電話の向こうで二人が会話している声がした。少年の名前はミンイエンというらしかった。クライドは誰が見ているわけでもないのに身構え、レンティーノに話しかける。

「何の用だよ」

「すみません、クライド。貴方を毘にはめるようなことをしてしまったことは、謝ります。ですがきつと貴方は、そうやすやすとエナークまできて下さらなかつたでしょう」

「当然だろ。何されるか解ないんだから」

いきなり謝られて拍子抜けするが、謝るぐらいなら最初から裏切ることなんてして欲しくなかつた。だが、確かにクライドは、「きてください」と頼まれてもノーと言つただろう。彼らも騙すより他に、クライドをここに連れてくる手段がなかつたのだ。

彼らの立場にたつてみれば、そうなる。けれど、何が何だか知らないがクライドは彼らに協力してやる気なんてない。彼らは卑怯にもシェリーを誘拐し、怖い思いをさせた。協力しない理由なんて他にもまだまだたくさんあるが、クライドにとってはそれが最も大きい理由だつた。

「安心してください。私達は協力して頂きたいのであつて、貴方に死んで頂きたいわけではありません。勿論、協力していただければシェリーさんは無事にお返しします。彼女は別室で、私の友人と話していますよ。結構仲良くなつてしまつたようです」

最後の方は笑いながら、レンティーノは言う。彼はクライドに対する友好的な態度を、ここにきてても変えることはなかつた。

彼はいつから、クライドを追う立場だつたのだろう。であつた時からそうだつたのだろうか。それとも、再会するまでの間に『ミンイエン』に丸め込まれたのだろうか。

この人とも、仲良くやれたかもしれないのに。ハビが離れていつてしまった時と、同じような悲しみが胸を満たした。けれどいくら悲しんでみても残念がつてみても、結局はクライドもレンティーノも別世界の人間で、進むべき道はきつと正反対なのだ。

「……俺に、何するつもり？」

「ひみつ。ばいばい、クライド！」

訊ねればミンイエンと呼ばれた少年の声がして、一方的に電話が切られた。あの少年は、本当に馬が合わない奴だと思う。この先何が起こつても、こいつの言うことだけは聞きたくない。

それにしても、厄介なことになった。クライドは暫く携帯を見つけていたが、ふと部屋の中に自分の荷物がないことに気づく。着替えもなければ、タオルなどもない。今ある持ち物は携帯と財布、そして腕時計だけだった。この腕時計は出がけに慌ててつけてきた、本当はハビに返すはずだったアンティークの腕時計である。

とにかく、この部屋から出なくてはならない。クライドは一つでも多くこの部屋の情報を入手して、それを元に部屋から出る必要があった。

クライドはまず、部屋の広さからはかることにした。部屋は結構広い長方形をしていて、長方形でいう縦の長さは大股で五歩、横は八歩ぐらいである。学校ぐらいの広さがないと、こんな部屋はいくつも作れないと思う。建物は大規模で、なおかつ直方体をしていそうだ。そう考えると、首都で見た高層ビル群が頭に浮かんでくる。これは、高層ビルの部屋なのだろうか？

クライドはシャワールームを物色し、バスタブの栓を繋いでいるチェーンを取った。何かに使えるかもしれない。ベッドの下には細かい針金が落ちていた。用途は思いつかないが、一応持っていたほうが良さそうだ。他にも洗面台のキャビネットにあった歯磨き粉や、部屋の隅に落ちていた紙切れなどをポケットに詰め込む。ベッドと壁との隙間にボールペンが落ちていたのを見つけたから、それはポケットに入れずに片手に持ってクライドはベッドに座った。

使えそうなものを取れるだけ取ってから、クライドはこの部屋から出ることを考える。前にもクライドは密室に閉じ込められて死にそうになったことがあるが、そのときは天井を破ってそこからドアまで穴を広げた。今はそのドアが解らないから、手の打ちようがな

い。

携帯の時計を覗けば、今が七月二十八日の午前九時を少し過ぎたところだというのが解った。ここがエナークなら、まだ二十七日の午後九時なのだが。とにかくクライドは、半日ほども眠っていたのだ。とてつもなく時間を無駄にした気がする。クライドは苛々して壁を蹴りつけた。それから、ふと壁を蹴った姿勢のまま足を止める。「……そっか、壁の厚さだ」

ミンイエンという変な少年と電話していたときに殴った壁は、まさしく壁だった。けれど、今蹴った壁は何となく薄い感じがした。音の感じで、壁の厚さは大体わかる。多分、壁が一番薄いところがドアになっているか、もしくは隣の部屋に繋がっている。一番厚いところは、多分外壁になっているのだろう。

クライドは、壁を拳で叩きながら部屋を一周した。壁が薄くなっていればコンコンと軽い音がしたし、壁が厚いところになれば、手が痛くなるだけで音がしない。音がするとすれば、それは低くて鈍い音だ。

気になるところにボールペンでバツ印をつけながら一周部屋を回れば、部屋の位置がわかってきた。ここが何階かはしらないが、何となく一階ではない気がする。

拾っておいた紙に、ボールペンで四角をかいた。その中に、ベッドを意味する長方形を書く。クライドは、この状況を紙を使って分析することにしたのだった。

ベッドの頭の方は壁にぴったりとくっつけられているが、その壁はクライドの調査によると、この部屋を囲っている壁の中で最も厚い壁だった。ベッドを意味する長方形の右隣に、触れるか触れないかのぎりぎりの線を引く。線から右は斜線で塗りつぶし、シャワールームと書いておく。この図だと、ベッドの足側に立てば、左側がシャワールームになる。それを確認し、クライドは続きを書いた。

ベッドの足元からみれば見て右サイドになる、洗面台のある壁は微妙な厚さだった。しかし、ベッドの足元になる壁には薄いところ

と極端に薄いところがあった。左サイドの壁よりも、ここが怪しいとクライドはにらむ。

紙をベッドの上に放置して、ボールペンはポケットに入れた。そしてクライドは、ベッドの足もとにあたる壁まで歩いた。ひときわ大きくつけておいたバツ印が、一番壁が薄そうな場所だというしるしである。

「さて、これを…… どうするか！」

呟きながら、最後の言葉と同時に壁を力一杯蹴りつけた。壁は確かにへこむ感じがしたのだが、表面的には何も無いように見えた。

クライドは蹴っても無駄かと思い、ベッドサイドまで後退した。そこから思いっきり助走をつければ、勢いで外まで出られるかもしれない。大きく深呼吸し、走り出す。

壁に体当たりする瞬間に身体を丸め、肩から壁に突っ込んだ。勢いをつけすぎて、クライドは本当にそのまま壁ごと外に出ることが出来た。清潔感あふれるエタノールの匂いが、廊下にまで広がっている。クライドは立ち上がり、ずきずきと痛む身体を押さえながら今までいた部屋を振り返った。

「な、何これ？」

クライドは壁を破ったはずだった。現に、へこんだ壁はクライドの足の下にあり、酷くひしゃげていた。よく見ればこれは、壁といふよりドアだった。そこまで確認できたし、見間違いでは決していない。

それなのに、クライドが見た部屋には壁があった。恐る恐る近づいて、壁に手を伸ばせば、クライドの手は壁の中に飲み込まれた。「うわ」

思わず声を発し、手を引っ込める。真っ白な壁は相変わらずそこにあっただが、触れれば実体のないもののようにクライドの指を通した。何なのだろう、これは。ここは人工魔力の研究所だから、もしかしたらこれも魔法かもしれない。

研究員に見つかったら不味いと思い、クライドは壊したドアを部

屋の中に押し込んでおいた。部屋に戻って鏡を割り、その破片を武器として隠し持っておこうかとも考えたが、そうやって物音を立てたら誰かに気づかれそうで怖かった。

廊下は一面真っ白だったが、よく見れば小さな番号が一定の間隔で振ってあった。クライドのいた部屋の壁には、1096という数字が書かれている。これはもしかしたら、部屋番号なのだろうか？

廊下をずんずん歩いていくと、番号ではなく文字が書いてあるところを発見した。ディアダ語とエフリツシュ語で、『備品庫』と書いてある。手を伸ばしてみれば、壁の中に指先が入った。備品庫は空いているようだ。

中に研究員がいるのかどうかは疑問だったが、いたとしても殴り合いで勝てるだろう。研究員というからには部屋に籠りきりで、あまり喧嘩には強くなさそうだから。

そんな無謀なことを考えつつ、クライドは足音を忍ばせて白い壁を抜けた。一通り見たが、部屋の中には誰もいないようだった。安堵し、クライドはそこにあるものを物色した。

サイズの違う白衣がたくさんあり、研究に使うらしい紙やプリンタのインク、グラフ用紙などがきちんとそろえて置かれている。理科の実験で使ったようなビーカーや、得体の知れない薬品も沢山ある。クライドは手頃な大きさの白衣を勝手に羽織り、研究員に扮装することに決めた。

顔を隠すものが欲しかったが、誰かが置き忘れた眼鏡以外にはありそうもなかった。眼鏡はちゃんと度が入っている普通の眼鏡だったので、目の良いクライドがかけるとかえって足元がふらつき、危ないことになった。

この備品庫には、使えそうなものが結構あった。ステンレス製のはさみや、白いグリップのカッターナイフなどがそうだ。とりあえずそれらを白衣のポケットに入れ、クライドはその場を後にする。

無人の廊下には、人の気配がない。しかしどこかで物音を聞いた気がして、クライドは立ち止まる。壁を殴りつけているような、物

音。誰かが暴れているようだ。

物音のする方に歩いてみた。危険は承知だった。けれど、直感めいたものを感じた。音のするのはクライドがいた部屋の近くで、1068と書かれた部屋だった。

クライドがドアだと思われる壁を叩くと、中にいた人は暴れるのをやめた。防音設備がととのっているようで、その人が何か言っているとしても何も聞こえない。クライドがもう一度ドアを叩こうとした時、誰かが走ってくるような足音を床から感じ取った。

中の人々が助走している。

反射的に飛びのくと、クライドと同じ方式で誰かが飛び出してきた。

クライドはどきりとした。なぜならそれは男で、長身で、金髪だったから。それに、見覚えのある服を着ている。クライドが彼の十七歳の誕生日にプレゼントした、黒のTシャツだ。

「……ちよつとまで。お前、まさか」

予感的中した。ひしゃげたドアの上から起き上がったのは、紛れもなく友人のグレンだったのだ。

第十九話 協調性

グレンは立ち上がったがすぐにはクライドに声をかけず、暫くこちらをじっと見下ろしていた。彼は物凄く、驚いているようだった。「お前、何でこんな所にいるんだよ」

長い沈黙の末、ようやく彼が発した言葉がこれだった。クライドだって解らない。何でこんな所にいるんだろう、自分もグレンも。

「こつちが聞きたい。まあ、長い話になるだろうから一旦部屋に戻ろう」

言いながら歩けば、グレンは再び驚いたようだった。先ほどのクライドと同じように、蹴破ったはずなのに消えていない白い壁に驚いたのだろう。

「壁が再生してる。何だこれ」
「違う、これはどうやら壁じゃないみたいなんだ。ほら、抜けられる」

クライドがすつと手を出せば、それはいとも簡単に壁に飲まれた。それを見たグレンは息をのみ、目を見開いて硬直していた。クライドはそんなグレンを放置して、グレンが外したドアを足で部屋の中に押し込んだ。

部屋に入れば、クライドが連れてこられた場所と全くといっていいほど変わらない空間が広がっていた。グレンは後ろからついてきたが、その身のこなし方で、彼がこの怪しい壁をうす気味悪がっていることがよく解った。彼はなるべく、壁を触らないようにしているのだ。

クライドはベッドサイドの壁にもたれかかり、グレンを見た。グレンはクライドをじっと見ながら、ベッドに座る。

「まず、何から話せばいいんだろうな。とりあえず俺は、あの後ノエルと二人で聞き込みをした。それで、通りがかった人から空港に

行くように言われて、空港に行ったらパイロットが首都へ行けって言って、首都についたらレンティーノさんにあった」

ベッドに座ったグレンは、無言で頷きながらクライドの話を聞いていた。クライドは白衣のポケットに手を入れながら、グレンを見下ろして続ける。

「そこで俺は、ノエルとはぐれた。俺はレンティーノさんが送ってくれるって言ったから着いてきたんだけど、騙されてここに連れてこられた」

「言ってる意味が解んねえよ。騙されたって、何だよ」

グレンは言った。物凄く不機嫌そうだった。恐らくこれはクライドに対してではなく、レンティーノに対しての怒りからくるものなのだろう。グレンがまだ、クライドを仲間だと思っていてくれるのならの話だが。

「レンティーノさんは敵だ。マーティンもここにいる。おそらくはハビさんも、この研究所のどこかにいると思う。まだハビさんが、マーティンの仲間なのだとしたら」

「裏切り？ 許せないなそいつ。直接会ったことはないけど、お前の話聞いてた時にはいい人そうだと思ってたのに」

「今でも俺に敵意を持つてるわけじゃないみたいだし、だから余計に厄介なんだ」

「何だそれ。どっちだよ、はっきりしねえ男だな」

「立場的には敵だけど、レンティーノさんは俺を殺さないって言った」

グレンは真剣に、クライドの話を聞いてくれた。真剣に怒ってくれた。何だか、あまりにいつもどおりなグレンの反応に正直驚いた。シエリーのことはまだ片付いていないから、てっきりクライドはグレンにまた殴られるのだと思っていたから。

彼は流れるような金髪に指を通し、虚空を見上げながら話し始めた。心地よい低音の音が、透明な響きを持ってクライドの耳に明瞭に届いた。

「……俺はスウェントの空港で誰かに後ろから殴られて、気づいたらここにいた。悪い、クライド。俺、トニーを護ってやれなかった。あいつを、一人にした」

彼が頂垂れると、さらさらの金髪が彼の肩を滑り落ちた。彼は本当に、アンソニーから離れてしまったことを後悔しているようだった。

それなら、クライドの方はどうなるのだろう。シエリーをとられ、ノエルとはぐれ、拳銃の果てにレンティーノに騙されているのだ。比べるまでもなく、クライドの方が取り返しつかないことをしてしまっている。

「俺だつて、ノエルを取り返せなかった。『HOLLY』のビルに貼ってあったポスターを見た女の子達が、ノエルを拉致してどっか行ったんだ」

沈んだ声で告げると、グレンは顔を上げた。そして、にやりと笑んだ。いつもどおりの、悪戯っぽい笑み。彼のそんな顔を、再び見ることが出来るとは思っていなかった。

「本当にノエルのポスターあったのかよ。見せるクライド！」

「何か別人だった。ヴァル・セイナに行けば見れるけど、ノエルが本気で嫌がつてる」

本当に、旅に出る直前のようなグレンだった。シエリーのことでも怒り、クライドに殴りかかったグレンとは最早別人だった。クライドは許されたのだろうか？ けれどそれを訊ねてしまったら、グレンが怒り出しそうで嫌だ。

折角こんな風に、グレンは何もなかったように振舞ってくれているのだ。それにのるのが、クライドにできる最良のことだろう。

「しかし、大変なことになったな」

グレンは言いながら、仰向けにベッドに転がった。仰向けに転がったまま、意味を成さないうめき声を上げている。掠れたその声を聞きながら、クライドは首をかしげた。

「どつしよつか、俺ら」

「けどさ、俺らだけでも再会できてよかったな。シエリーとトニーとノエル、とつと助け出そうぜ。で、早くお前の目的を遂げて、帰ろう」

再会できてよかったなんて、彼に言ってもらえるような台詞ではなかった。あれだけ怒っていたグレンが、もう怒っていないなんてやはり、グレンもこの白い空間に閉じ込められて怖かったのだろう。出口のない空間になんて、きっと彼も今まで入ったことがないはずだ。あんな思いはもう二度としたくないと、ここに閉じ込められた誰もが思うだろう。

「……おう」

答えると、グレンはベッドから跳ね起きる。クライドは、そんな彼に歩み寄った。どちらからともなく差し伸べた手を、どちらからともなく握る。目に見える、確かな絆がそこにはあった。

これこそが、和解が成立した瞬間だった。お互いに、協力して仲間達を救出することを誓った瞬間でもあった。どちらにせよ、こうして目に見える形で仲直りを示しておくのは、双方にとって必要なことだった。これから先、お互いをより信頼するために、しておくなければならないことだった。

この状況下では、喧嘩より協力が必要なのだ。たとえまだ腹が立っていたとしても、お互いに今は唯一の仲間なのだ。それが解らないほど、クライドもグレンも馬鹿ではなかった。それに、やっと会えた嬉しさが罪悪感が潰されていたのもある。

1068と書かれた部屋を出て、クライドは真っ先にグレンを備品庫へ連れて行った。そこで彼に白衣を着せて、少し身を護るのに役立つようなものを見繕って持たせるのだ。彼は素手で何でもやってしまうが、万一相手が武術に長けていたら困る。折角再会した親友が、再びいなくなるなんて嫌だ。

「なあクライド、ここって防音設備凄いとこだよな」

「そうだな。こうやって廊下歩いてても、何の物音もしないし」

「だとすると…… 考えたくないんだけどさ、もしトニーとかシエ

リーが泣いてたとしても声が聞こえないよな？ ノエルは泣いたりしないだろうけど、あいつにしてもあんなところに閉じ込められたら叫ぶぐらいはするだろうし」

いきなり現実的な言葉を聞かされて、クライドは胸に錘をのせられたような気持ちになった。彼らがどんなに泣き喚いて苦しんでいても、クライドたちにそれを見つける術すべはない。どんなに声を囁ささかして叫んだとしても、彼らは一人で恐怖と不安に耐えなければならぬのだ。自力で脱出でもしないかぎり。

「絶対みつけてやろう」

ぼつりと呟くと、グレンは力強く頷いてくれた。

出口のないただ真っ白なだけの空間に、閉じ込められている仲間がいる。彼らを早く助けてやりたい。そして、こんな仕打ちをしたミンイエンとかいう少年を見つけ出して仕返ししてやりたい。

どうやって仲間達を見つけるか思案しながら備品庫を出ると、研究員らしき男性と出くわした。見るからにインドアで、運動の出来なそうな感じのする男だった。彼は黄色人種の中年だ。背が低く、足が短い寸胴のような体型をしている。

「いやあ、良い実験材料が手に入ったなあ。俺が担当してるのは、昨日入った茶髪のサンプルなんだがな。最初は暴れてたが、今はもうすっかり大人しくなっちゃって」

研究員は流暢じゅうちやうなエフリツシュ語で言った。隣でグレンが身を強張らせたのがクライドにはすぐに解った。彼が言う『茶髪のサンプル』は、高確率でノエルのことだと思う。

もっと話を聞きだしても良かったが、あまり長時間一緒にいると正体がばれかねない。クライドは、咄嗟とつさに曖昧な微笑を浮かべて見せた。

「そうなんですか。僕らはまだ茶髪のサンプルのみ確認していません。他はもう見たんですが」

「おう、それじゃついてこい。案内してやる」

平静を装ってみれば、研究員は上機嫌で頷いた。実験材料として

使う茶髪の人物を手懐けたことが、よほど誇らしいようだ。

先頭に立って歩く研究員の後に続きながら、グレンがクライドの肩をさりげなく叩いた。ちらりと振り返ってみれば、不安そうな目でこちらをじっと見ている彼と目が合った。クライドは大丈夫だと微笑して見せ、研究員の後を追った。

「お前らは、何の担当だ？」

「え？」

先を歩く研究員の問いに、クライドは思わず妙な反応を見せてしまった。そうだ、研究員になりすましてみても研究員が普段何をしているのかクライドは全く知らないのだ。

「ああ、まだ何も任されてません」

グレンが助け舟を出してくれたおかげで、クライドは不審がられずにすんだようだ。心の中で嘆息しつつ、クライドは白いだけの廊下をひたすら歩いた。

研究員はクライドたちに比べれば年配者だが、ここに入ってからまだ十年も経っていないという。彼は研究員になる前は、高校で科
学を教えていたらしい。

「ミンイエン様は本当に良い人だ。学校をクビにされた俺を、ここで働かせてくれるんだから」

「そうなんですか」

あんな生意気で卑劣な少年が、良い人だなんて。否定してやりたかったが、クライドは澄ました声で心の中とは正反対のことを言った。

隣を歩くグレンは、白衣のポケットに手を入れて気だるげに白いだけの廊下を眺め回していた。冷房のきいたこの建物の中では、長袖の白衣を着ていても暑くない。クライドも彼に倣ならってポケットに手をつっ込みながら、黙って研究員の後を追う。

「お前らがここに入った理由は何だ？」

「研究に携わる仕事をしてみたかったんです」

クライドが白々しい嘘をつけば、男は感心したように唸った。

「偉いぞ、君。ミンイエンの様も、喜ぶことだろう」

ひきつった微笑を浮かべつつ、クライドはふと考えた。この男は、何かにつけてミンイエンのことを美化して言う。しかも薄気味悪いことに、様をつけて呼んでいる。

相手は声からして年下だ。もしかしたらクライドよりは年上だということもあるかもしれないが、少なくともこの男よりは大分年下だろう。たとえあの少年が権力者なのだとしても、『様』ではなく『さん』をつけて呼ぶのが普通の範囲内だと思う。宗教じゃあるまいし、自分より二十も三十も年下の子供を様づけで呼ぶなんて。

ミンイエンは、よほど社員に慕われているようだ。しかし、あんな卑怯な手でしかクライドをここに呼べないような少年を、どうして慕うのだろう。というか、これは慕っているというより崇拜している感じに近い。

クライドの住む国では、王にさえ敬称をつけない人がいる。大半の人がそうだし、王室関係者や権力者たちの面前でもないかぎり、様をつける人のほうが珍しいような気もする。

けれど、宗教を信仰している人は違う。自分の崇拜する神や賢人を、例えばルクルス教なら『救世主ルクルス様』とか、レベン教なら『清らかなるレベン様』などと言った調子で、焦がれるような眼差しで呼ぶのだ。

礼拝堂に集まった人々が、神や聖人、賢人などを呼び捨てにしているのは聞いたことがない。呼び捨てにしている人がいるとしたら、それは聖書を読んでいる牧師のみだと思う。聖書には登場人物の名前に敬称がついていないから、牧師だけは神を呼び捨てにしているのだ。

クライドは、歴史が好きだが宗教は信じていない。だから、いもしない人物を崇拜し、熱烈なまでに慕う様子をはつきり言って異様に感じている。

そしてこの研究員の発言にも、異様さを感じていた。ミンイエンは神か？ いいや、ただの少年だろう。ただの、ずるがしこくて生

意気な少年だ。

「ついた、ここだ。ようし、彼が被験体1020だ」

研究員は言いながら、ポケットの中から真っ白いカードを取り出した。何をするのかと思えば、彼はそれを壁についていた溝に滑らせた。

プシュツ、と軽い音がした。空気入れを上下させた時のような音。それは、電車のドアが開閉する時にする音にも少し似ていた。

表面的には何も無いように見えたが、研究員はつかつかと白い壁に歩み寄り、その中へ消えていった。クライドは一瞬だけためらったが、彼に続いて白い壁をくぐる。

この部屋の内装も、クライドたちのいた場所と殆どほとん変わりなかった。しかし、ベッドの周りに白いカーテンが引かれているのだけは異なった点だった。

「気分はどうだ、1020」

「最悪です」

カーテンに閉ざされたベッドに向かって、研究員が声をかける。返ってきた冷たい声は、確かに聞き覚えのあるノエルの声に間違いなかった。

声からすると、ノエルは酷く疲れている。そして彼の声のトーンは、出会って間もない頃の彼よりも更に不機嫌そうだった。

「採血するから、降りて来い」

研究員は言った。そして、クライドとグレンを振り返って楽しげに微笑んだ。一瞬この男を殴って気絶させようかとも思ったが、あまりにノエルのことが気になってタイミングを見失ってしまった。

研究員は楽しげな表情を崩さないまま、ドアの方へ向かう。途中で振り返って、彼はポケットからカードを出しながら満面の笑みを浮かべた。

「採血用の道具を持ってくるから、暫く1020と遊んでやっていよ。壊さん程度に」

「はあ」

どういう意味で、遊んでやれなんていったんだろうか。恐らくそれは、痛めつけても良いとかそういう意味なのだろう。ふざけるな。怒りが湧いてきたが、まずはノエルの無事を確認しなければ。

彼が廊下へ出て行き、ドアが開閉している証である空気のような音がしたのを確認すると、クライドとグレンはすぐカーテンに閉ざされたベッドに駆け寄った。

「ノエル！」

カーテンを翻しながら叫ぶと、ベッドの柵にもたれていたノエルが顔を上げた。やつれた顔だった。彼は眼鏡をかけているのに焦点が合わない目で、暫くクライドとグレンの間辺りを見つめていた。しかし、数秒して掠れた声を上げる。

「……クライド、グレン？」

何も言わず、クライドはノエルの^{とびいろ}鳶色の髪をくしゃくしゃと撫でた。いや、正しくは何もいえなかったというべきだろう。再び再会できた喜びと、彼が衰弱しているという事実^に打ちのめされる思いとの間に、クライドは板ばさみになっていたのだ。

ノエルはきよとんとした顔でクライドを見ていたが、やがていつもどおりに微笑してくれた。その微笑があまりに懐かしくて、クライドはまた言葉を見失う。こんな短期間離れていたただだったのに、感じるこの切なさは一体何なのだろう。

「もう会えないかと思ったよ」

クライドも、そう言うノエルと同じ思いだった。

「そんなわけないだろ、今までどんな時だって一緒にいたんだ」
消極的なノエルに対し、グレンは普段どおりの楽天的な笑顔で言った。彼らのやりとりに、クライドも胸がじんとする思いだった。今までずっと一緒にいたのだ。だからこれからも、きつとずっと最高の友達でいられる。

三人で、それぞれの経過を報告しあった。クライドは先ほど言い忘れたことを、この場で言った。レンティーノと電話したことは、グレンに言っていなかったのだ。

「あの男、僕のこと男娼だんしょうだなんて言ったんだ。許せないよ、あのどこまで品のない男なんだろう」

白いベッドから抜け出ながら呟いたノエルの言葉で、ようやく彼が不機嫌だった理由を見つけた気がした。クライドは首を捻り、グレンは声を荒げた。

「理解に苦しむな。ノエルのどこが？ 言うならホストだつての」「おいおい、待てよ。男娼よりはマシかもしれないけど、ノエルはホストにも見えないから」

ちよつとずれたグレンの発言を修正しつつ、クライドはノエルを見た。ノエルは苦笑しつつも、少しだけ楽しそうだった。再会でできたことを喜んでくれているのだろう。

クライドは、彼を見つけられたことが誇らしかった。あんな少年の言ったことなど気にしてたくないと思っただけだが、やはりミンイエンが言った言葉が、まだ頭の中にきつちり残っているのだ。

友情ごっこだとか、本当の友達ならはぐれずに一緒にいられるだとか。クライドの思う本当の友達とは、ミンイエンの言うようなものではない。どんなに遠くても、はぐれてしまっても、必ず再会していつもどおりに過ごせるのが友達なのだ。

「さて、トニーたち探そう。シェリーは人質だから待遇いいかもしれないけど、トニーはきつと辛いだろうから」

言ってみれば、大切な友人達は領いてくれた。クライドはグレンとノエルと一緒に部屋を出ようとしたが、そういえば研究員が帰って来るまで部屋がロックされた状態なのだとこのことを忘れていた。どうしようか。

「また蹴破つたら今度こそまずいよな、グレン」

「ああ、まずいな。あのおっさん帰ってきたら、俺が昏倒させてやるよ」

グレンは何気なく怖いことを言う。クライドは苦笑しつつも、彼に研究員のことを委ゆたねることにした。

ほどなくして研究員は採血用の注射器などを載せたワゴンを押し

ながら現れ、ドアの傍で待機していたグレンにあっけなく気絶させられた。グレンの蹴りは鮮やかに研究員の鳩尾みそおちをとらえ、彼はその一発の蹴りで本当に気絶してしまったのだった。

クライドはグレンの手際の良さに見惚れていたが、研究員に歩み寄ることに思い至った。うつぶせに倒れた彼を仰向けに、白衣の中に忍ばせているカードを奪い取る。これが全部屋共通のものなら嬉しいと思いつながら、クライドは壁に近寄った。

彼がカードを溝に通して外側からドアを開けたように、内側からも同じ方法でドアを開けることが出来るはずだ。クライドは壁をさわり、溝を探した。溝はすぐに見つかったから、クライドはそこにカードを通した。またあの空気入れのような音がして、白い壁の向こうからエタノールの匂いがする風が流れ込んでくる。

振り返ってみると、ノエルが研究員の傍に屈みこんでいた。彼も研究員のポケットを物色していたらしい。ノエルはクライドに気づいて顔を上げると、柔らかく笑みながら紙を見せてくれた。ノエルは彼のポケットから、地図を発見したようなのだ。サイズはB5で、四つ折りにされたあとがある。

「行こう」

倒れた研究員を放置して、クライドたちは部屋を出た。そして、部屋の外からカードを使って部屋をロックした。ノエルは相変わらず長袖の私服でいたので、彼も研究員に扮装させるために備品庫に連れて行くことにした。

第二十話 知らない世界

備品庫に向かう途中の廊下で、クライドは何名かの研究員とすれ違った。彼らはクライドに会釈えしゃくしてくれたりしたが、一人か二人はクライドに気づかずどこかへ行ってしまった。この研究所では、人と人の繋がりがあまりないのかもしれないとクライドは思う。

真っ白なしんとした廊下を歩き続けると、備品庫についた。ノエルに合いそうな丈の白衣を一着とり、クライドはノエルにそれを渡す。

「どうだ？」

試着しているノエルに訊ねると、彼は微笑みながら頷いた。どうやらサイズは合っているらしい。ノエルは薬品棚に目を留め、いくつかの小瓶をポケットに忍ばせた。クライドには解らなかったが、使えそうな薬品があったらしい。

「現在地はここだね」

ノエルは備品庫にあった平台に地図、というか建物の見取り図を広げ、備品庫と書かれた地点を指差した。クライドは頷き、ポケットに入っていたボールペンを彼に渡した。ノエルはペンを左手に持ち、1020号室と備品庫を太く囲う。グレンのいた1068号室と、クライドのいた1096号室も太く囲ってもらった。この階は十階らしい。紙の隅に「十階見取り図」と書いてあった。けれど、この建物自体が何階建てなのかはまだ解らない。

クライドたち三人がいた場所は、同じ階の同じフロアだ。アンソニーも、高確率でこのフロアの中にいるとクライドは思う。カードキーが全ての部屋に使えるのなら、一部屋ずつ試していけばそのうちアンソニーにたどり着くことが出来そうだ。ただ、中に研究員がいる可能性を考えなければならぬだろうが。

「クライド、カードを貸して」

そういわれたので、クライドはノエルに白いカードを渡した。テ

レフォンカードか何かのような素材で、良く見ると片面の隅に小さな銀色の矢印が書いてある。

「何がいいかな……これにしようか」

ノエルは棚にあったプラスチック製の定規を取った。そしてそれを半分に割り、再び棚を探して薬のビンを持ち出してくる。何をすのかと見ていれば、ノエルは薬のビンの蓋をとった。ビンの蓋は鉄製で、塗装がされていないので銀色に輝いている。

「なあノエル、何やんの？」

グレンが不思議そうに問うと、ノエルはちらりと彼を見て微笑した。

「まあ見てて。いくよ」

ノエルは定規とビンの蓋を平台に置いた。そしてそれに手を被せ、軽く目を閉じて何かを念じている。彼の手の下で、定規とビンの蓋がさらさらと崩れていくのが見えた。これはノエルが使える、分解の魔法だ。

さらさらに崩れた粉末状のものから手を離し、ノエルはクライドが渡したカードキーを掌で撫でた。軽くため息をつく、彼は手についた粉末を落とす。

「ちよつと骨が折れるみたい」

曖昧な笑みを浮かべながらカードを平台の上に置いて、ノエルは再び粉末の上に手を被せた。クライドはそんな彼の背中に右手を当てて、魔力を移す想像をした。少しの血を魔力に換え、ノエルに分ける。そうしながら、クライドはじつと彼の手を見ていた。

粉末はまるで生き物のようにうごめきながら、ノエルの手の下で徐々に長方形を形作っていった。どうやらノエルは、カードをコピーしているらしい。彼の魔法には沢山の魔力が必要だから、クライドは彼の骨ばった背中に手を当てたままだった。

ノエルが作っているカードは、透明なプラスチックを原料にしているためか、妙にクリアになっていた。けれど、磁気カードにするための鉄粉を入れているために、端の方だけ黒っぽい。

彼は最後に、何か呪文らしきものを呟いてカードに加工をした。電磁力を流す魔法を使ったようだ。

「……できた」

ノエルは若干青白い顔になってはいたものの、表情は嬉々としていた。カードの出来には満足しているようだ。

「使えるか？」

「試してみよう」

グレンの問いに笑顔で答えたノエルは、白衣のポケットに手を突っ込んで颯爽と歩き始めた。クライドは二枚のカードとアンソニーの分の白衣を手に、彼の後を追う。そして、手近な部屋でカードキ―を試してみた。

見事に使うことができて、ドアから空気の軽い音がした。ノエルが嬉しそうに笑い、グレンは感心したように何度か頷いた。そして「失礼しまーす」

あろうことが、グレンが中に入っていった。クライドは止めることも追うことも出来ずその場に留まり、ノエルと顔を見合わせる。

思ってみれば、ドアが開いたのに誰も入ってこなかったら研究員が不審に思うだろう。中に研究員がいないことを祈ったが、どうやら祈りは通じなかったようだ。

「あら。新入りかしら、何の用？」

声の主は女性らしい。この研究所には、女性もいるようだ。

「昨日入ったサンプル、何号室でしたっけ」

「どれのこと？」

「あの一番若い」

グレンは、どうやら聞き込みをしているらしかった。クライドは彼がまさしく『サンプル』の内の一人であるということが、いつばれるかと思つて冷や冷やしていた。けれど研究員の声からすると、グレンは正体を疑われている様子はなかった。

「私も解らないわ。担当は茶髪の子だもの。綺麗な子よね、貴方ほどじゃないけど」

「ああ、そうですね。じゃあ一番若い奴の担当、誰なのか教えてもらえますか？」

グレンは軽い調子で、上司に命令されて嫌々アンソニーを探しているようなことを言った。研究員はその話を、丸ごと信用したようだ。

「ライナスならきつと知っているわよ。彼は1080号室にいるわ」「ありがと！ 姉ちゃん、頼りになる」

ころっとグレンの態度が変わる。ちよつと寒気がした。グレンはクライドの見た限りで、初めて女性に対して好感をアピールしたのだ。

普段のグレンは、女の子に対して変に馴れ馴れしくなかった。それに彼は、シェリーに対してもこんな風に媚を売るような声で喋りかけていたことはなかった。

このプレイボーイ気質の声色は、勿論彼の演技だろう。けれどクライドとしては、たとえ演技であろうとシェリー以外の女性に気があるような態度はとって欲しくなかった。後でシェリーが知ったら、きつと泣くだらうから。

「ふふ。いつでもここにいらっしやい」

「どうも。それじゃあ」

女性のかなりご機嫌な声が聞こえた後、グレンが白い壁の中から出てきた。クライドはすかさずカードキーを使ってドアをしめた。白い壁はもう、本当にただの壁になった。使用できることが立証されたカードキーを製作者であるノエルに渡せば、ノエルは満面の笑みを浮かべた。

「……姉ちゃんっつーよりオバサンだったけどよ」

防音なのをいいことに、グレンは言った。そして、にやりと笑う。「収穫ひとつあったぜ。壁に貼ってあった紙に書いてあったけど、この建物は二十階建てだ。最上部に、偉い奴が集結してるらしい」「へえ」

相槌を打てば、グレンは先ほど出てきた部屋の方をちらりと肩越

しに振り返る。彼女が出てこないか確認したようだった。

研究に没頭しているのか、彼女はそれきり部屋から出てこない。廊下を見渡しても研究員の姿はどこにも見えないし、足音すらもしなかった。白くて、ただ無音の空間。

このまま沈黙していたら、この白と同化してしまいそうだとクライドは思った。そう思った矢先、グレンの声がして安心する。

「とりあえず、ライナスって男捜すぞ」

ふと、首を捻る。ライナスという名前に、妙に聴き覚えがある気がするのだ。

「何か、聞いたことあるような名前なんだよな。ライナス……」

「ま、どうでもいいだろ。まずはトニーを助けなきゃ」

「そうだな。ライナスは何号室だ？」

今知りたいのは、アンソニーの居場所だ。それ以外のことを深く考え込むのもばからしく思えたので、クライドはすぐに思考を打ち切った。

「1080って言っていたね」

「そうだな。ノエル、地図貸せ」

グレンとノエルがこの階の見取り図を覗き込んで1080号室を探している間、クライドはじつとその場で耳を澄ましていた。どこかで足音がしたら、それはおそらく研究員だ。正体を探られないように、完璧な演技をしなければ。

ノエルとグレンが道を見つけ、クライドを導いてくれた。クライドはよく用心しながらも、どこまで進んでも全く変わらない白いだけの廊下を見飽きていた。

「あ、ここかな」

「そうみたいだ」

ノエルと会話していると、グレンが一步前に出てドアをノックした。返事を待ったが、防音効果のついたドアの前でそんなことをしても無意味なだけだった。

クライドはカードキーでドアを開けた。自分の立っている場所か

らドアに向かって風が流れ込む感じがしたので、ドアが開いたことが解った。

「ライナスさん」

「靴の汚れを拭え！ うわ、な、何だその頭は！ だらしない髪型をしおつて……」

先に入ったグレンが、凄い剣幕で怒鳴られた。クライドは思わず足を止め、ノエルを見やる。ノエルは呆気にとられていたが、やがてドアの向こうへと消える。

この男の声には、やはり聞き覚えがある気がする。クライドはそう思い、部屋に入るのをやめた。どこで聞いた声なのか、どんな人の声なのかは忘れてしまった。しかし、どこかで関わったような気はするのだ。

もしも彼が知り合いだったとしたら、クライドの存在がばれてしまう。これ以上、事態をややこしくしたくない。クライドは、グレンたちが出てくるのを待つことにする。

「ほう、お前は模範的だな」

「光栄です」

ノエルが褒められた。クライドは頭を捻りながら、白い壁の向こうから聞こえる会話に耳をそばだてた。

「あのくるくるした金髪のサンプル、どこだっけ？ 俺ら新しく配属されたんだけど、地図なくしちゃって」

グレンはいつものように、砕けた調子でライナスに話しかけている。クライドはそんなグレンがまたライナスを怒らせたりしないか、少し心配だった。

ライナスは怒るといふより呆れたのか、グレンに場所を説明してやっている。ノエルが相槌を打ちながら、時々詳しい場所を尋ねたりしているのも聞こえた。

「それじゃ、ありがとさん！」

「生意気な新入社員だ。貴様はもう二度ここにくるな」

「失礼します、ライナスさん」

「お前はいつでもおいで」

二人は随分と待遇のされ方が違うようだが、部屋から出てきた二人は両方とも上機嫌そうだ。

「笑いてえ、クライド。笑っていいかあれ。何だあの髪型。ぴつちり分けすぎでぜってえ可笑しい」

「グレン、抑えて。あれが彼の、ファッションセンスだよ」
「大分狂ってる」

グレンは人がいないのを確かめてから、笑いを堪えるのをやめた。げらげら笑い出すグレンを見て呆気にとられながら、クライドはノエルに訊いた。

「……それ、どんな人？」

「ぴつちり七三分けで、四角い眼鏡の奴。黒いスーツで、白い手袋なんかしてたな。少なくとも手袋にはファッション的な意味なんかないだろうよ」

笑いながら答えたグレンに、ノエルが少しつられて笑いながら頷いてくれた。七三分けにスーツ、そして手袋？ 何だか、見覚えがある気がする。クライドは必死に記憶を手繰り、やがてライナスのことを思い出した。

アルカンザル・シエロ島で出会った、潔癖症けっぺきの男。ハビとなにやら口論していた気がするが、そうではなかったような気もする。曖昧な記憶しか残っていないのは、おそらく彼がクライドにあっていた時間が少なかったからだろう。

「よかった、中入らなくて」

クライドとアンソニーは、潔癖症のライナスに会っている。アンソニーはバイト先のデパートで出会ったようだし、クライドはハビのカフェでライナスと出会った。

クライドがもし、ここでライナスに会ってしまったら。脱走がばれて、友人を全員助け出さずらかる計画の全てが水の泡だ。

いや、よく考えれば計画なんて最初から存在していない。けれど、それでもライナスにばれたらまずいことは確実だ。

「アンソニーは、丁度この部屋の裏側あたりにいるみたいだよ」
ノエルは言つて、折りたたまれた見取り図を広げた。クライドたち三人が閉じ込められていた場所から、アンソニーだけが離れている。

クライドは白衣のポケットに手を突っ込み、身を翻した。一刻も早く、彼に会わなければならない。彼が壊れてしまわないうちに。

廊下を早歩きして、アンソニーのいる部屋を探す。部屋番号は1004で、大きな研究室の隣の部屋だ。

「そろそろだ、クライド」

「ああ、近いな」

後方にいるグレンと会話しながら、クライドはドアに書かれた小さな数字をひとつひとつ確かめる。1001、1002……。

「ここだ」

静かに足を止め、クライドは1004号室の前に立った。ゆっくり後ろを振り返ると、グレンとノエルが開錠を待っていた。深呼吸し、カードキーを溝に通す。空気の音。そして、部屋の中へ風が流れ込む感覚。

はやる気持ちを抑えながら、クライドは部屋の中に駆け込んだ。そして、息をのむ。

「トニー」

見慣れた金髪の少年は、部屋のベッドに座り込んでいた。彼が座っているベッドはクライドやグレン、ノエルの部屋にあったものと同じだったが、なぜかシートがぼろぼろに引き裂かれていた。壁にはある場所だけ赤黒く汚れているところがあり、部屋に備え付けられた洗面所の鏡は粉々に割れていた。

一体、何があったのだろうか。考えながら、クライドはアンソニーの方に向かって歩み寄る。後ろでノエルがキーを使ってドアを閉めた音がした。

「トニー？」

声をかけても反応しないアンソニーは、虚ろに目を見開いて息を

荒げていた。近寄ると、彼がぼろぼろに裂かれたシーツの切れ端を抱えていることに気づく。

「おい」

さらに近寄って、彼の肩に手を置く。

「うわあああああ！」

いきなり叫ばれ、クライドは驚いて壁の方に飛びのいた。アンソニーは震えながら叫び続け、引き裂かれたシーツをまとめてベッドの上に丸くなった。その異常な行動に、後から来たノエルとグレンが固まっているのが見て取れた。

「ちよ、トニー？ トニー、大丈夫か！」

「うわああああ！ こないで、いやだっ、やめてええ！」

「トニー、俺だよ！」

恐慌状態のアンソニーを前に、クライドは声をかける他にどうすることもできなかった。けれど意を決して、丸まったアンソニーの肩に再び触る。すると彼の身体が、びくりと震えた。

「トニー、俺だ、クライドだ」

「いやだ、いやだ、いやだ、いやだ来ないで、来ないで」

嫌だ、来ないで。そればかりを延々とリピートするアンソニーに、クライドは途方にくれた。震えながら自分の身体を抱くようにして泣き叫び、クライドを認識してくれないアンソニーは、ぼろぼろになったシーツを強く強く握り締めている。

ふと見れば、彼の右手に傷があるのが見えた。右手の拳…… っ
まり、壁を殴る時に使う拳にだ。

「トニー」

思わずクライドは、アンソニーを引き起こしていた。彼とまともに目を合わせるのには、港町を出たあの時以来初めてだった。

アンソニーは涙で濡れた顔で、クライドを見てまた身を振ったよじ。けれどクライドは、そんなアンソニーにまた逃げられないように、彼を強く抱きしめた。安心させるというよりは、押さえつける意味合いの方が強い。

「怖かったな、でも大丈夫だから。もう大丈夫だから。皆いるから。お前は一人じゃないから」

何故、こんなことになってしまったんだろう。この何もない、白だけの空間に閉じ込められて、アンソニーはやはり壊れてしまった。急いだけれど間に合わなかった。友達を、また辛い目にあわせてしまった。

泣き叫ぶアンソニーを胸に閉じ込めておきながら、クライドも泣きたい気分だった。泣く代わりに、叫ぶ代わりに、アンソニーを抱きしめて頭をなでる。クライドには、そんなことしかできなかった。小さい子供を宥めるように、クライドはアンソニーの頭を撫で続けた。

「っ、げほ、げほっ」

叫びつかれたのか、アンソニーはむせる。そして、ようやく大人しくなった。けれどまだ彼の身体は小刻みに震えていたし、彼はまだ泣いているようだった。

「もう大丈夫かな」

「う…… 僕を帰して。皆のところへ帰して！」

「俺がいるだろ。グレンも、ノエルもいる」

「絶対偽物だ、誰も僕のことなんか助けに来てくれない」

どうやらクライドは、まだ彼に認識されていないようだった。ため息をつきながら、彼の背中をさすってやる。どうしようか、このままアンソニーがクライドのことを思い出してくれなかったら。

「何だよ、ひでえ奴だな。俺らそんな薄情者かよ？」

「そうだよアンソニー。君が一人で苦しい時には、僕らがいつでも助けるよ」

不満そうなグレンと、優しげなノエルの声がする。顔を上げると、二人が歩み寄ってきた。アンソニーは相変わらず震えていたが、おずおずと顔を上げた。

「お。トニー、気づいた？」

軽い調子で話しかけると、アンソニーの目が潤んだ。

「絶対、絶対本物だよな？ 僕のこと裏切って、どこか行ったりしないよね？ もう僕を、一人にしたりしないよね？」

「当然だろ、馬鹿だな全く」

泣きじゃくりながらクライドのTシャツを濡らすアンソニーに、グレンが微笑みかけた。そして、アンソニーの頭をぐしゃぐしゃとなでる。

クライドの両脇で、ノエルとグレンがアンソニーを優しく見守っていた。アンソニーはよほど不安だったのか、よほど辛かったのか、声を上げて泣き出した。

「クライドっ」

「そうだよ、トニー」

「グレン！」

「おう。何だトニー」

「ノエル？」

「僕はここにいるよ、アンソニー」

代わる代わるクライドたちの名前を呼んで、存在を確かめるようにじっと見つめて、アンソニーは涙を拭った。ようやく彼に、クライドたちの存在を認識してもらえたらしかった。

アンソニーは訥々と話を始めた。彼はなぜか、酷い仕打ちに遭^あっていたようだった。

「二度と出さないって、いわれた。壁に押し付けられて、首絞められて。意識なくなりそうになって、けど僕は生きてた。なんで死ななかつたんだろう？ って思うような酷いこと、たくさんされて」

「よかった、お前が生きてて」

グレンの言葉に、アンソニーが強く頷いて俯いた。そして、照れくさそうに呟く。

「きてくれて、ありがとう。皆、ヒーローみたいだよ。どこにいても、どんな状況でも、絶対助けてくれるから」

「今度はお前がヒーローになる番だろ。まだ、シェリーがいない」
言いながら彼に手を伸ばすと、暖かな手がクライドの手を握った。

平常にもどったアンソニーを連れて、クライドは廊下に出る。アンソニーに持っていた白衣を渡して、準備は整った。

この場所のどこかに、シェリーがいる。彼女を見つけたら一旦引き下がって、それからクライドの目的を達成したい。けれど、案外クライドの目的は早く達成できそうだ。

人工魔力の結社。上手くいけば、ここでハビに会える。けれどもまずは、シェリーを探さなくては。

「次、どこ向かおう？」

「地下か最上階ってとこだよな、人質って言ったたら」

「解らないよ、グレン。案外このフロアにいるかも」

「全然関係ない階に閉じ込めて、僕らを混乱させてるのかも！」

様々な憶測が飛び交っている状態だが、とりあえずクライドは一旦エレベーターで一階に下りることにした。

第二十一話 小さな首謀者

デスクに向かい、仕事をしている最中のことだった。パソコンのキーボードを叩く音だけが響く部屋に、血相を変えた研究員が入ってくる。ミンイエンは顔をあげて、首をかしげた。研究員は焦った様子で、ある衝撃の事実をミンイエンに伝えた。

「クライド＝カルヴァートが、いない？」

研究員は確かにそういった。信じられない。ミンイエンはあの白い空間の中で暴れに暴れたが、結局出られなかった。そういう思いを、クライドもすると思ったのに。

「ええ、ミンイエン様。困ったことになりました、脱走した模様です」

「ふざけないで！ あの生意気男、絶対捕まえるんだから。ちょっと君、何してるの？ 早く他の人に知らせに行って！」

「か、かしこまりました」

研究員を追いたて、ミンイエンは壁を蹴りつけた。脚力のないミンイエンにとって、それは自分を痛めつけるための動きでしかなかったのだが。予想外の痛みに悶え、ミンイエンは暴れだしたい衝動に駆られる。

じんじんと痛む右足を抱えて飛び跳ねながら、ミンイエンは舌打ちした。全く、どうしてこうも上手くいかないのだろう。もう少しというところで、必ず邪魔が入る。

「クライドの馬鹿。どうして？ どうして僕に協力してくれないの？ 意味わかんない！」

一人で怒り、叫ぶ。頼みの友達の仕事に熱中しているので、話しかけに行くのとはばかられる。一応携帯電話でメールを送ったが、気づいていない人が大半だろう。ミンイエンは怒りに任せて叫び散らしながら、広い研究室の中を早足で行ったり来たりした。

こんなとき、ミンイエンは痛感するのだ。クライドに対して投げ

た『友情ごっこ』という言葉が、今の自分に一番当てはまっているということ。結局は自分だって、一方的に相手を友達だと思っ
ているだけなのかもしれないから。

いつもわがままを言っただけで、友達にはたくさん迷惑をかけている。それはちゃんと自覚している。いつかきつと彼らに愛想をつかされて、自分は独りになる。それも、承知している。

けれどミンイエンには、こんな付き合い方しかできないのだ。依存してくっついて、彼らなしでは生きていけないようになるぐらいに好きになる、そんな付き合い方しかできないのだ。どうしようもない自分の性格に対しても、苛立ちがつのる。

「ああもう！ 全部クライドが悪いんだから」

そう、何もかも。あの非協力的なくせに恵まれすぎた、混血の少年が悪いのだ。グレンやらあの大卒やらは、あんな捻くれた少年のどこがよくて決死の覚悟でついていくのだろう。ミンイエンには理解できない。

彼のことをひがんで言うわけではないが、クライドはミンイエンにとって虫の好かない奴なのだ。それは多分、相手にとっても同じことだろう。けれど、どんなに虫の好かない奴でも、クライドはミンイエンにとって必要だ。いや、ミンイエンが今まで温めてきた『計画』にとって不可欠なのだ。

「ミンイエン」

「ああ！ レンティーノっ！ きてくれたんだ、よかったあ」

戸口を振り返ると、黒のスーツに身を包んだレンティーノがいる。レンティーノは黒よりも茶系のスーツが似合うが、今日は気分を変えているらしい。ミンイエンはレンティーノに駆け寄り、長身の彼を見上げた。

「どうしたのですか、急に」

「クライドが逃げた！」

言ってみれば、レンティーノは一瞬固まった。そしてゆっくりとこちらを見下ろして、優しい微笑を浮かべる。安心させてくれよう

としているのだと解ったが、ミンイエンの心の中はまだざわついている。

「……捕まえましょう、ミンイエン」

「勿論だよっ！ 意地でも協力させてやる」

何としてでも捕まえて、何としてでも協力させてやる。そして、大切な人を取り戻す。目的の達成まで、何年かかっただっていい。何年でもクライドを縛り付けて、何度でも協力を強いるから。

レンティーンと頷きあい、彼が逃げそうな経路に研究員を配置するところから始める。十階見取り図を広げて、赤のボールペンでポイントをチエツクする。

研究員はたくさんいるから、その気になればクライド一人のために百人の研究員を派遣することだってできるのだ。ただ、けが人を最小限にとどめるために、最も少ない動員数でクライドを捕まえるパターンを考えなければならない。

クライドの脱走経路について頭を働かせていると、後ろからいきなり首をつかまれた。反射的に首をすくめると、相手が後ろで笑う気配がした。振り返ると、見慣れた青髪がこちらを見下ろしていた。

「おいミンイエン。どうした、メールなんか寄こして？」

「マーティン！ クライドが逃げちゃったんだ」

「チツ。どこまでも手間がかかるガキだ」

マーティンはとたんに不機嫌になり、ポケットからタバコを取り出そうとする。そんなマーティンをレンティーンが止めて、タバコを吸う代わりに十階見取り図を見るよう促した。タバコを仕舞いながら、マーティンはじつと紙切れを見つめている。そんなマーティンに、ミンイエンは声をかける。

「ねえ、とりあえず工務班を探して？ 部屋がふたつも壊されてるんだ」

クライドもグレンも、馬鹿みたいに壁を突き破って外に出たのだ。こんなことは前代未聞で、ミンイエンは凄いと思うと同時に呆れた。きつと二人とも体力バカで、頭は悪いのだろうとミンイエンは思う。

インテリは大概あの大卒者のノエルとかいう奴みたいで、体力も運動能力もないものだ。いや、単に自分がそうであるというだけで、根拠はないのだが。

良く考えてみたら、やっぱりインテリイコール運動音痴という等式は間違っている気がする。なぜならミンイエンの友達にも、インテリのくせに体力もある人がいるのだ。例えて言うなら、ハビがそうだ。彼は力も強いし身体も大きいくせに、なぜか知的で穏やかな人だ。

「それは僕から言っておくよ、ミンイエン。ドアくらい、きつとすぐに何とかなるよ」

そう答えたのは、いつのまにか部屋にいた黒髪のセルジだった。ミンイエンは彼の顔を見て、即座に色白で綺麗な女の子の顔を思い浮かべる。

「セルジ、シェリーどうなった？」

「寝てるよ。ノーチエの部屋で、ぐっすりね」

ほっとして、ミンイエンは微笑んだ。彼女まで逃げたら、計画が丸つぶれだ。ここまで来るのに、九年もかかったのだ。あと少しで手が届く今、計画が潰れたりしたらミンイエンは困る。

そうだ。気が変わった。シェリーがいる部屋を厳重に警備して、そこ以外の警備を手薄にしてクライドたちを泳がせるのだ。そうすれば、クライドたちは絶望感に押しつぶされそうになりながら走り回るに違いない。

研究所は広い。だから体力勝負の二人も、くたくたになつてしまつたろう。彼らを大人しくさせてしまえば、たやすく捕まえられるようになるはずだ。

そうすれば、もうすぐそこに明るい未来が待っている。ミンイエンは嬉しさに微笑を浮かべ、こうしている今も研究所内を走り回っているであろうクライドを思う。早く捕まって、協力して欲しい。

「へえ……」

後ろから変な呟きが聞こえ、ミンイエンは首だけで後ろを振り返

る。こんな眩きをするとき、マーティンは絶対に卑猥なことを考えているのに違いないのだ。

長年彼にからかわれてきたミンイエンだから、マーティンが次にどんな言葉でからかってくるのかもう読める。読める自分がちょっと空しい。

「マーティン、また変なこと考えてる！ だめだよ、シェリーには一応彼氏いるじゃん」

「は、誰があんな貧乳。あれは女じゃなくてガキだろ？ それに、人の女には興味ない」

うつと言葉に詰まる。マーティンはいつだって、ミンイエンをからかって遊ぶのだ。変なことを言うか、わざと言わずに困らせてくるかのどちらかで、必ずミンイエンの反応を見てマーティンは笑う。こんな時に助けてくれるのはハビだが、ハビは今はいないのだ。

顔に熱が上がってくるのを感じながらマーティンを軽く睨んでみると、ぽんと肩を叩かれた。そちらを向くと、レンティーノが微笑していた。

「そこまで言ったら失礼ですよ。シェリーさんは年相応にお美しい方です」

「はあん、レンティーノ。お前、ロリコンか」

「そういう訳ではありませんよ。ご存知でしょう、私は色事になど興味はないのです」

今度は助け舟を出してくれたレンティーノに絡み、マーティンはやにやと笑う。人をからかうことを生きがいに行っているのかと思うほど、マーティンはしょっちゅう誰かに絡む。そして、相手の反応を見て笑うのだ。彼は本当に二十三歳の青年なのだろうか、疑いたくなってくる。

「まあまあ、マーティン。変なこと言わないの。ミンイエン、ハビが今日はこっちに泊まるって言ってたよ」

「本当に？ やったあ！」

セルジの言葉に、ミンイエンは心の底から喜んだ。マーティンに

ついで考えることは即座に忘却して、献身的な親友のことを思い浮かべて笑う。

ハビは仕事が忙しくて、毎週水曜日だけしか研究所に一日いることはない。毎朝早朝に数十分だけ現れ、あとは夜に数十分。彼には、それだけしか会えない。

彼は毎朝この研究所からデータを持って行き、毎晩ちゃんと解析したものを届けてくれる。彼は、カフェに勤めながらもちゃんと研究員としても働いてくれている偉い人だ。

だから、会って話がしたくてもなかなか会うことができない。その彼に、久々に長く会えるのだ。ミンイエンがにまにましていると、マーティンがわざとらしいため息をついた。

「はあ、解りやすい奴」

「何か言った？」

「別に」

嫌味な笑いを浮かべたマーティンを尻目に、ミンイエンは見取り図を見下ろした。クライドに気づかれないように、このフロアの中でエレベーターから一番遠い部屋を警備しなければならない。

「ノーチエは部屋で待機ね」

クライドたちにとっての『囚われの姫君』は、ノーチエの部屋にいるのだ。だから彼女は、そのままそこでシエリーを見張っていてもらおうとミンイエンは考える。シエリーはノーチエに少し打ち解けてきているようだし、この調子でどんどんノーチエと仲良くなつて欲しい。

「僕もそこにいちやだめかな」

「勿論良いよ、シエリーが寝てるならノーチエも暇してるだろうしセルジの申し出を快諾しながら、ミンイエンは心の中で微笑する。口には出さないが、セルジは一刻も早くノーチエの部屋に行きたいに違いない。

もしもクライドたちがノーチエの部屋にたどり着くことがあったら、ノーチエが乱闘に巻き込まれることもあるかもしれない。だから

らセルジは、恋人としてノーチエを案じているのだろう。彼のそんな騎士らしいところに、ノーチエは惚れているのかもしれないとミンイエンは思う。

「出入り口は早く封鎖しておかないと、外部に逃げられてしまいますね」

「そうだね。じゃあ、働きバチさんをお願いしようかな」

ミンイエンの腹心である『働きバチ』は、インテリらしくない男だ。格闘技の選手のような人で、腕力が恐ろしく強い。そのままボクサーに転職しても良いのではないかという風体の彼は、ミンイエンのために良く働く。彼に携帯で連絡を入れ、すぐに出入り口に向かってもらおう。

「セルジも、ノーチエのところに行つてあげて」

「解つた。じゃあ、後でね。健闘を祈るよ」

「お互いね！」

セルジはやわらかな微笑を残し、足早に研究室を出て行った。早く大切な人のもとへ向かいたいのだろう。

ミンイエンは携帯を手にとって、手の空いた研究員をノーチエの部屋付近に配置した。エレベーター付近に一人の研究員を置いて、クライドたちが昇ってきたらすぐに連絡を取れるようにしておく。

セルジがいなくなつたこの研究室には、マーティンとレンティエーノが残っている。二人にはずっとここにいてもらいたいというのが、ミンイエンの気持ちだ。

だが、もしクライドがここに乗り込んできたら、二人は無傷ではすまないかもしれない。それを考えると、部屋を嚴重にロックして一人で閉じこもっていた方が良い気もする。ミンイエンは考えながら、真っ白なベッドの隅に腰掛けた。

「どうかしたのですか、ミンイエン」

「え？ な、何でもない」

「何でもないって態度か？ 言いな、何を考えてた」

二人に見下ろされ、ミンイエンは身を竦める。二人に本心を話し

たら、きつと傷だらけになっても自分の傍に居てくれるという返事が返って来るだろう。彼らはそういう優しい人で、どんな時でも全てのものから護ってくれた。そんな彼らには、いつでも救われてきた。

けれど、ミンイエンとしてはそれを重荷に感じるのだ。自分のせいで、傷つかなくても良い人が傷つくのは嫌なのだ。もうこれ以上弱い自分のせいで誰かを苦しめたくない。過去に一人、ミンイエンを護ろうとして死んだ人がいるのだ。

かといって、一人では身を護ることができないし、二人を帰してしまつたら不安に押しつぶされそうになることは目に見えている。けれど、再び誰かが自分を護るために犠牲になるのだけは、耐え難いことだ。

「帰って良いよ、二人とも。仕事続けてきて？」

そう言つても、彼らがここに残るだろうということは予測できた。だからこそ、胸の奥が痛んだ。これからまた、彼らを危険にさらしてしまうのだ。誰でもない、この自分が。

「帰らねえよ。てめえみたいなガキ、放つとけるか」

口調こそ荒いが、マーティンはいつでもこうやってミンイエンのことを気遣つてくれる。聞こえるのは舌打ち交じりの言葉でも、目の前に見えるのは優しい光を湛えた瞳なのだ。

彼も過去に、大切な人を失くしている。かけがえのない人をもう失いたくないという思いは、ミンイエンと同じだ。だからといって、彼が傷ついてもいいかといったらそうではない。

俯いて白衣の裾をぎゅっと握り締めていると、その手の上に痩せた大きな手が被さつた。顔を上げれば、優雅な笑みを浮かべたレンティーノと目が合う。

「そばにいさせて下さい、ミンイエン。貴方の友として」

深く聴覚に染み入ってくるこの声は、ミンイエンにとつてかけがえのないものだ。今まで何度となく彼のこの声に救われてきたし、勇気付けられてきた。

その彼の声が、今は癒しではない。ミンイエンは再び俯いて、自分の手に重ねられたレントイーノの手を見つめた。骨ばったその手は、いつだって自分の傍にあった。いつだって、道を示してくれた。今まで何度となく彼の手に護られてきたが、そろそろ自分で自分の身を護れるようにならなくては。そうでなければ、この優しい親友を永遠に苦しめ続けることになってしまうのだ。

「だって、怪我するかもしれないだよ？ 僕のせいだ」

「それでもです。前に言ったではないですか、私はいつでも傍にいます。貴方にとって私達は、そんなに信用の置けない人間なのですか？」

そういわれて、顔を上げる。レントイーノは悲しげな目で、ミンイエンをじっと見つめていた。ミンイエンは彼にそんな顔をして欲しくなくて、けれどどうすれば良いのか解らずに途方にくれる。

もう少し、彼らを信じなければ。彼らは、どんな危険も承知のうえで、傍に居てくれると言っているのだ。それを断るのは、彼らの信頼に対して失礼なのではないだろうか？ 彼に悲しげな顔をさせるのは、これで最後にしたい。

「……ここに、いて」

小さく呟いた。彼らの優しさに、甘えたくはない。けれど、傍に居て欲しいのも事実だ。レントイーノはミンイエンを見て嬉しそうに笑って、隣に座ってくれた。微笑み返ししながら、ミンイエンは正面に立ったマーティンと隣に座るレントイーノを代わる代わる見る。

「ごめんね、二人とも」

「謝るな」

声と同時に、マーティンの大きな手が頭の上に乗った。そのまま、わしゃわしゃと頭をなでられる。心持ち身を竦めるが、ミンイエンはマーティンのそんな行動が嫌いではなかった。彼はいつもミンイエンを弟のように扱うから、こんな風に頭をなでられるのも今日が初めてではない。

こんな風に、ミンイエンの成功を心から願ってくれる友人がいる。

それはミンイエンのにとって、素直に嬉しいことだ。この先何があっても、彼らが手を差し伸べてくれればどこへだって行ける気がした。クライドにだって都合はあるのだろうが、ミンイエンは九年もの間実験の成功を信じ続けて生きてきた。その成功には、クライドの協力が不可欠なのだ。彼が協力を拒むなら、無理にでも協力させてやる。

脱走したクライドが捕まったら、すぐにでも実験に移ろう。そう考え、ミンイエンは真っ直ぐに前を見据えた。

真っ白な研究室は静かで、ただ無音だった。けれど、いつもは嫌いな静寂が、今はそれほど気にならなかった。そばで大切な仲間が見守ってくれているから。

クライドがもし、ここに乗り込んでくるようなことがあったら。そのときには見せ付けてやろう。ただ一つの夢を、一心に願い続けてきた者の底力を。そして、その隣にいつもいた仲間達との、強い強い絆を。

クライドを屈服させ、実験に協力させることができるようになるまで、長くはかからないだろう。今のミンイエンは、そんな根拠のない自信に溢れていた。

第二十二話 搜索

クライドはエレベーターに乗り込み、仲間と共に下層を目指した。このビルには地下五階まであり、屋上もあるようだった。一階行きボタンを押したのはグレンで、ドアを開閉するボタンを押したのはアンソニーだった。

「ボタン押すの、好きなんだ」

照れたようにアンソニーが笑うので、クライドもつられて笑った。こんな風に余裕を持てるようになったアンソニーは、真っ白い密室で暴れていた彼とはまるで別人のようだ。彼が元気を取り戻してきて、本当によかった。

「これは、何だろう」

ノエルの呟きが聞こえたので、クライドは彼のほうを振り返った。彼が指差しているのは、クライドも一応視界の隅で確認はしたが、特に気にも留めていなかった張り紙だ。よく見ると、それは手書きらしかった。

書いてあったのはディアダ語だが、文法がラジエルナとはほんの少しだけ異なる。くだけた言葉で書いてあるから、それがよく解った。

これは、どこの言葉だろう。どこか東洋の方にある国のクセかもしれない。

「ノエル、これってどこの言葉？」

「これはリヤンツアイ訛りだよ。同じディアダ語圏だけど、リヤンツアイとラジエルナは大分離れているからね」

ノエルがそう教えてくれた。すると、グレンがへえと感心した声を上げた。

「リヤンツアイって、あの東の発展途上国？」

彼が尋ねれば、ノエルは頷いた。頷いてから、首を捻って少し笑う。

「発展途上とは言いがたいかな。農村部や漁村は確かに発展途上だけど、首都はそれなりに発展しているよ。情報技術もだんだん先進国に遅れをとらないようになってきているし、工業の技術もここ数年で爆発的に進んできているから。現に昨年度の機械類の輸出額は、東洋一だしね」

「良く知ってるな…… 社会科の先生みたいだ」

「情報を集めるのは、半ば僕の趣味でもあるんだよ。より多くのことを知って、より多くを理解したいっていう気持ちに常に僕の中にあるから」

感心しているグレンに、ノエルは笑顔で答えた。昔からノエルは本当に知識を集めることに関しては貪欲で、世界の全てを知ったとしてもきつと足りないに違いないとクライドは思っている。

「ねえ、そういうのを知識欲っていうんだよね、ノエル！」

にっこりと笑いながら言うアンソニーに、グレンが意外そうな目を向けた。クライドとしてもアンソニーの口から知的な言葉が出るのは意外だったが、それを言ったら失礼なので声には出さずにおく。グレンは遠慮なく、意外さをあらわにするのだろうが。

「あ、何だお前。ちゃんとまともなこと言えるじゃん」

「何それ、ひどい！ 僕をバカだと思ってるの？」

「ははは、わりいわりい。そんな真剣にキレんたって」

思ったとおり何の遠慮もなく、グレンはアンソニーをからかうような発言をした。二人のやりとりを見ていると面白かったが、少しだけ胸が苦しくなった。

もう戻ってこないのかと、思ってしまったのに。それでも彼らはいつもと何ら変わらずに、こんな敵地の真ん中でも楽しくやっている。クライドは、そんな彼らを疑ってしまったのだ。彼らから自分に向けられた想いは、そんなに弱いものではないと知っていたはずなのに。

それでも、グレンと喧嘩している間はかなり憂鬱だった。グレンがクライドに見切りをつけ、二度と戻らないつもりで走り去っていく

ってしまったのだとばかり思っていた。売り言葉に買い言葉の喧嘩だったけれど、クライドも彼に対して酷いことを言ってしまった。それが自己嫌悪となって、絶えず心に押し掛かっていたのだ。

「グレン」

「何だ、クライド」

声をかけて返ってくるグレンの反応は、いつもどおり軽い調子のものだ。もう仲直りしたけれど、言葉に出した方がこの心の重圧は軽くなるような気がする。彼を見つめて口を開こうとすると、先にグレンが言った。

「ごめんな」

「え？」

クライドがきよとんとすれば、グレンは苦笑いした。

「俺、まだお前にそんな顔させてる」

「や、俺謝ろうって」

「お前が謝る必要なんかどこにある？ 勝手に突っ走って、シエリが誘拐されたのお前のせいにして……俺こそ謝らなきゃって、ずっと思ってた。本当に悪いのは、お前じゃなくてデゼルトだろ？ 馬鹿らしいっての、誘拐が誘拐犯じゃない奴のせいだなんてさあ彼の言葉で、わだかまっていたものが砂糖菓子のようにとけていった。グレンはいつもどおりの表情で、言葉を失って瞬きばかりしているクライドを見下ろしている。何か言わなくては。

「グレン」

ありがとうと言いたかった。けれど彼はクライドの言葉をさえぎり、微笑した。

「言っただろ？ 俺はずっとクライドの友達だって」

「……ありがとう」

今度こそ言えた。友達で居てくれてありがとう。許してくれてありがとう。信じてくれてありがとう。たくさんの意味を込めていた言葉だった。

一同が和やかな雰囲気になったところで、エレベーターが一階に

着いた。一階は割と普通の会社のようで、エレベーターを降りた途端に拍子抜けしてしまった。

エントランスの受付には、若い男性と女性の二人がいる。二人とも白衣ではなくスーツを着て、にこやかに立っていた。ディアダ語とエフリツシユ語で「受付」と書かれた、白地に金文字のプレートが、二人の丁度間あたりにある。クライドは彼らを観察し、声をかけられたら面倒なので彼らと目を合わせないようにしながら、他の場所も観察した。

この研究所に来て初めて、外の景色が見える場所に来た。ガラスの自動ドアからみえる景色は都会のもので、外を車がせわしく走っているのがよく見える。ドアの近くにスーツの男が一人いて、タバコを吸っているのも見つけた。

エントランスには観葉植物やスチール製のオブジェなどが飾られていて、ここだけは洗練されたスタイリッシュな空間になっている。白い無機質なだけの上層とは、まるで別の建物だ。エントランスには、ちゃんと窓もあった。四人で手分けして、何かの手がかりを捜すことにする。クライドは建物の出入り口付近でないところを捜した。

トイレや洗面台はすみずみまで掃除されていて、まるで誰も使っていないかのような感じだ。トイレの手前を横切って歩くと、廊下の突き当たりに出た。そこには事務室のような場所があり、そこではワイシャツの上にベストを着た男性が書類の処理に追われていた。

一見してこんな所にシエリーはいないだろうと解ったし、この辺りにシエリーがいた痕跡もないとすぐに解った。エレベーター前に戻ると、他の三人はもう調査を終えて戻ってきていたようだった。

「地下に降りてみるかい？ ここにはシエリーはいないだろうから」「そうしてみようか」

クライドは再びエレベーターに乗り込んだ。ドアが閉まる寸前、エレベーターの前を携帯電話を持ったスーツ姿の男が通ったのが見えた。

「変なスーツを着た男の人に声かけられたよ。灰色なんだけど、漂白剤のせいで黒い色が抜けたみたいなき色してた。その人にどこの班か訊かれたから、入ったばかりですって答えといた」

エレベーターの白い壁に凭れながら、アンソニーは言った。クライドはふと何かを疑問に思ったが、何を疑問に思ったのか忘れてしまったので黙る。すると、今度はノエルが口を開いた。

「僕もスーツの女性に声をかけられて、何処へ向かうか訊かれたよ。仲間を探しているって答えたら、彼女は立ち去った」

「俺、私服の女見たぞ？ このフロアで、白衣の奴は見えてない」

グレンもノエルも、白衣ではない人物に出会ったようだった。クライドは、疑問に思っただけ首を捻った。ここに来てから見た人間は少なかったが、クライドが見た限り全員が白衣を着ていたはずだ。

考えてみれば、研究所に受付があるのもおかしいと思う。こんな場所に、来客も何もあつたものではないだろう。

「俺は書類に埋もれてる、ベスト着た男を見た」

答えながら、この事実について考えた。一階のみ、白衣着用者がいない。他のフロアなら当然のように白衣を着て真っ白な廊下を歩いている研究員が、ひとりもない。

「会社みたいだよな、ここ」

グレンは言った。クライドもそれに同意だった。

「けど、実体は研究所だよ」

ノエルは言い、首をかしげた。すると、アンソニーが真っ白な天井を見上げ、ううんと唸る。

「もしかしたら、一階は会社のふりしてるんじゃないの？ 僕なら魔力の研究なんて、世間にあんまり知られたくないし」

確かに彼のいうことは、的を射ていると思う。彼にしてはめずらしくだ。クライドはそれが正論かもしれないと思ったが、ノエルは懐疑的だった。

「でも、会社のふりをするためだけに人件費をさけるかい？ 僕なら研究所で何をしているかはふせて、世間には食品添加物の研究と

か言っておくよ」

「その方が効率いいしな」

グレンも深く頷いて、言った。

「ところでこのエレベーター、動いてないけど？ 誰か気づけよ」
笑いながら言い、彼は地下五階行きボタンを押した。エレベーターは、途端に下降を始めた。彼を見てノエルが笑い、壁にもたれる。こうして見ていると、彼には本当に白衣が似合う。

アンソニーは深く何か考え込んでいるようだった。あどけなさの抜けてきた、けれどもまだまだ十分に童顔だといえる顔に、少しの苦渋が窺^{うかが}えた。

エレベーターを動かしてからすぐに、クライドたちは地下五階に着いた。エレベーターのドアが開くと、とたんに妙な臭いが鼻を突いた。塩素と硫黄が混ざったような匂いだった。

「う、何この臭い！」

「僕、薬品には弱いんだよね。ここ、換気してないのかな」

グレンとアンソニーが嫌そうに言って、白衣の袖で鼻と口を覆った。クライドも彼らに倣って、白衣の袖を通して呼吸をすることにした。

地下五階は相変わらず白い空間だったが、ここにはちゃんと黒のはっきりした文字で色々なことが書いてあった。地下第一研究室、地下第一実験室、地下休憩所。それから、地下第一備品庫に薬品保管庫など、見渡せば色々なところに文字があった。すべて、ディアダ語とエフリツシュ語の二通りで書かれている。

ここに充満している妙な悪臭は、おそらく実験室から流れているのだろうとクライドは思った。もしここにシエリーがいるとしたら、どうなるだろう。有害物質に蝕^{やぶ}まれて、苦しんでいるなんてことがなれば良いが。

「早くシエリーを見つけよう」

「ああ、そうだな。けどこの研究所、広すぎないか？」

「そうだな。手分けして探すか？」

三人に提案してみると、彼らも賛成してくれたようだ。クライドは、この妙な悪臭に有毒性がないかどうか心配だった。あるとすれば、ここにいる自分達は物凄く危ない。もしここにシェリーが囚われていたら、危ないどころの話ではなくなる。命があるかどうかだつて、あやしいのだ。だから早く見つけなければならぬ。

「チームはどうするんだい？ 一人だと、捕らえられる確率が高くなるよ」

「ノエルは十分強いけどな」

壁にもたれながら左手の人指し指を立てるノエルに向かってそう言うと、彼は肩をすくめて首を横に振った。

「僕は体力も魔力も少ないから、大勢を相手にしたら何も出来ないよ」

「そうか、倒れたら困るな」

それならノエルと組むのは、体力のあるグレンが良いのかもしれない。魔力はあるはずなのに、クライドは昨日は貧血を起こしてばかりいたから。

「グレンは魔法を使わなくても喧嘩で勝てるだろ？」

言ってみれば、グレンはにやりと笑って同意してくれた。彼は自分の力を理解して、理解した上でそれを存分に発揮している男だ。だから自分が喧嘩にかなり強いということなんて、誰に言われなくても気づいているのだろう。

「それ言うなら、クライドなんて無敵じゃん。グレンと互角だし、凄い魔法使うでしょ？」

「馬鹿言うなよ、最近魔力が思うとおりには操れないんだ」

アンソニーに言われて、思わず反論してしまう。彼は不思議そうにクライドを見ていたが、にっこりと笑った。何を言われるのかと思つて身構えていると、アンソニーは本当に無邪気な態度で当然のように言う。

「僕には解るよ、クライドが大丈夫だつて。去年だつてすごく無茶なことしたのに、クライドはちゃんと使命を果たしてくれたから」

その言葉に、クライドは仲間どころか自分にまで疑いを持つていたことに気付く。自分を心のそこから信用できるのは、自分しかないのだ。クライドはそう思っていた。思っていたくせに、自分を信じてやれなかった。

「……ありがとう」

大きな、とても大きなこと。それに気付かせてくれてありがとう。そんな意味もこめて言った。これからは自信を持って、自分と向き合っていかなければ。

「クライド、この際誰と組んでも強さは同じだと俺はおもうぜ。元々、全員自分の身は自分で護れるメンバーだし。敵は多いから、二人で一組。これでよくないか？」

グレンに言われて、確かにそうかもしれないと考えた。ここにシエリーがいたら、それは誰か戦闘能力の高い人を組ませなければ危ないだろう。だが、ここにいる全員が強い魔法を使えるのだ。能力差なんてきつともう殆どないのではないかと、クライドも思っている。

「そうと決まれば、コイントスだね。コインを二枚使って決めよう。僕とクライドと一緒にコインを投げて、表同士と裏同士なら僕とクライドが組む。裏が出たらグレンと、表が出たらアンソニーと組む。これでいいかい？」

「了解」

ノエルは、クライドに銀貨を手渡してくれた。クライドはそれを弾いて、手の甲に伏せた。ノエルも同じようにコインを弾き、手の甲に伏せた。二人同時に手を退けてみる。

「決まりだね、クライド。僕はアンソニーと行く」

「よし、行こうグレン」

クライドとノエルで相談し、数台あるエレベーターを有効活用することになった。ノエルたちはこの階を含む奇数階を探索し、クライドはこの上の階からスタートするのだ。

エレベーターに乗り込むと、ノエルとアンソニーは手を振ってく

れた。クライドは頷いて、自動的に閉まっていく扉の間から二人を見つめる。彼らは白衣を翻しながら、真っ直ぐにエレベーターから離れていった。

「エレベーターには換気装置ついてるんだな」

隣のグレンに言われて、顔を上げる。確かに、エレベーターの天井には四角い通気スペースのような部分があった。こういうものを地下にもつければ良いのと思いつながら、クライドはエレベーターの壁にもたれ、右手でパネルを操作して地下四階行きボタンを押した。

「この研究所の連中は頭おかしいと思うぞ。考えても見るよ、窓がない空間に一日中閉じこもってるんだぜ？ 俺には無理」

「確かに。それほど皆熱心なのか？ 研究してないと体がおかしくなる研究依存症とか」

動き出したエレベーターに少し戸惑ったが、笑いながら冗談交じりに言った。きつと笑ってくれるだろうと思つたのに、グレンは真剣な顔をして考え込む。そして、クライドを見下ろした。彼の真摯な空色の瞳が、笑みを消したクライドを捉える。

「たとえば俺がこの白い空間に閉じ込められて、ギターかピアノだけ渡されたとする。そうしたら俺、きつとずっと歌い続けると思う。だってそれしかできないんだろ？ 不安っていうのもやっぱりあるし、それを紛らわすためにはやっぱり自分の好きなことするしかないんじゃないかと思うし」

「つまり、こここの研究員は皆とじこめられてるってこと？」

今のは、グレンなりにこの状況を考えた末に出た言葉なのだろう。クライドはそれを踏まえた上で、彼からふいと目を逸らして考えた。クライドが導いた仮定には、数秒待っても返事が返ってこなかった。

ドアが開く。エレベーターは地下四階に着いた。

「そういうわけじゃないだろ。ミンイエンとかいう奴のこと、研究員が悪く思っていた様子はなかったしな」

ここでようやくクライドに咳くような返事を返して、グレンは先

にエレベーターから降りた。クライドも彼の後を追い、白衣のポケットに手を突っ込みながら歩く。

少し歩いてすぐにグレンは止まり、こちらを振り返って笑みを浮かべた。いつもの悪戯っぽい笑みでも、甘く優しい微笑でもない。大笑いしている時のすがすがしい笑顔でもない。

例えて言うなら、途方にくれて笑うしかない時のような表情。実際、グレンの喉からは微かに乾いた笑いが漏れていた。

「クライド、これをどう見る？」

質問の後には乾いた笑い声。クライドは笑う気にすらなれず、目の前に広がる光景をただ呆然と見つめた。

「どうって、史上最悪としか言いようが……」

遅れて彼への返事を返し、思わずその場から数歩下がる。できればこの場所に長居はしたくないと、クライドは強く思った。

クライドとグレンの目の前に現れたのは、夥しい数の円筒形の水槽だ。天井に届きそうなほど大きなものから、腰ぐらいまでの高さのものまでたくさんある。それが何かのオブジェのように青白い光に照らされて、フロア一面に並んでいるのだ。中には透明な液体と溶けかけた生物の残骸が静かに浸されている。それは学校の理科室で見たホルマリン漬けに似ていたが、水槽の大きさは理科室とここで大きく違っていた。理科室にあったものはもっと小さくて、もっと黄ばんでいた。

原型を留めているものもたくさんあった。肥大化したウサギ、背中からくらげのように触手を生やしたネズミ。ネズミの背中から伸びた触手の長さは、クライドの身長くらいある。他にもまだ、薄気味悪い標本はあった。無数にあった。それら全てが、無機質な青白い光に煌々と照らされていた。

「何の冗談だよ。俺、タチ悪い幻覚でも見てるのか？」

かすれた声で呟くグレンの声を聞きながら、クライドは全身に寒気が走るのを感じていた。

クライドには解っていた。グレンの視線が、最初からある一つの

水槽にだけそそがれていることを。見たら絶対に後悔すると思うから、あえてその水槽だけはみないようにしていたのだが。それでもグレンにつられて顔をあげ、真っ直ぐに前を見て……

とうとう、見てしまった。

「やべ、眩暈……」

その場に座り込むと、眩暈と一緒に吐き気もこみ上げてきた。あり得ないと思った。あれは模型か何かなのではないかと思ってみたが、あのふやけた白い皮膚や虚ろに濁った目はどうみたって模型なんかではない。

早く逃げたい。ここから出たい。こんなところにシェリーなんているはずがない。いてほしくはない。

水槽の中から無言でこちらを見ていたのは、保存液に漬けられた男の死体だったのだ。

第二十三話 悪魔の巢窟

絶対どうかしている。何が起こったなら、人間を水槽につめて放置しておけるのだろう。水槽に漬けられた男の目は、左右で違う方向を見ている。ふやけた皮膚はところどころ千切れていて、破れた皮膚の間から神経組織や白骨が見えたりした。 気持が悪い。

「ひでえ」

グレンが呟いた。クライドはこみ上げてくる吐き気に何も言えず、ただ目の前に在る死体を凝視していた。一体何を考えているのだろう。こここの連中は何を考えているのだろう。

男はクライドと同じくらいの身長だ。右腕や左の膝から下がほぼ骨だけになっていて、良く見ればふやけた皮膚には手術痕があった。目の色は、濁っているが茶色だ。短く切られた髪は、保存液のせいかそうでないかは解らないが、淡い灰色をしている。

「クライド、立てるか」

「ごめん。手、貸してくれ」

ここから早く去りたい。早く去ってどこかに逃げ込みたい。外の空気を吸い込みたい。けれどそうするためには、ここを探索してシエリー本人や彼女がいた痕跡を探し出すことが必要なのだ。

グレンの手を借りて身体を起こし、肺に溜まった空気を大きく吐き出した。こここの空気は下層の嫌なにおいではなく、また少し違った薬品のにおいだった。今度は、防虫剤と消毒液のにおいが混ざったにおいに近いかもしれない。

「この階は無いか？」

「多分そう。でも、なんだろうあれ」

クライドは、エレベーターの隣にある操作パネルのようなものに目を留めた。パネルは壁にねじでとりつけてある。何かのスイッチがたくさんついていて、殆どがオンになっていた。けれどそれが一

体何を動かすものなのか、クライドには見当もつかなかった。

「何か書いてある。……ヒセ口濃度制御装置？」

グレンは白衣のポケットに手を入れて歩き、じっとパネルを見て首を捻っている。

「濃度？」

呟くと、グレンは静かに頷く。

「とりあえず、いじらないほうがいいみたいだ」

「ああ。なあ、さっさと終わらせて次行こう」

「言われなくても、俺だってそう思ってる。大丈夫か、クライド？」
よるけたクライドはエレベーター脇の壁に身を預けるが、すぐに立ち上がって足早に歩いた。早足で歩いて、男性の死体の横を通り過ぎる。もう何も見たくないが、みなければシェリーの手がかりがわからない。

過呼吸気味になり、胸が苦しかった。けれどクライドは前を向いて、青白い光にぼんやりと照らし出された無機質な水槽を見た。

シェリーが漬けられているわけではないだろうから、別にこんなものなど見なくても良い。けれど、見ずに何かの情報を逃してしまふことがあつたら困る。どうしようもないこの状況に、クライドは心の底から嫌悪感を覚えていた。時々水槽の中で泡が浮き上がる音がして、クライドはそれが聞こえるたびに肩を震わせる。

水槽の中で息をしている人間がいたりしないだろうか。助けを求めてもがいていたらどうしようか。こちらを恨みがましい目で見つめていたりしたら？

クライドは荒い息を何とかしらずめようと努力しながら、水槽のひとつひとつを調べた。水槽には必ずアルファベットと数字四桁の番号が振ってあることが解った。大概は水槽の下の方に刻まれているが、稀に台座の部分に刻まれているものもあつた。アルファベットや番号には規則性があり、エレベーター側から奥に向かうように番号も進んでいる。

「うわっ」

少し離れたところでグレンが声を上げた。何かあったのかと思っ
て声のした方に向かってみると、グレンはひとつの水槽の前で足を
止めていた。

「……エルフ」

クライドは呟いて、水槽から少し下がった。比較的きれいな状態
で保たれている少年のエルフは、腹から内臓を飛び出させていた。
だが、それ以外に外傷はみあたらなかった。髪の毛長いエルフで、そ
の長さは彼の身長を微かに越えていた。

「異常だ、ここ」

「今に始まったことじゃないけどな」

低く呟くクライドにグレンが乾いた声で答えて、感情の籠っ
ていない笑い声を立てた。クライドはエルフの水槽に背を向け、壁伝
いに他の水槽を見て回った。

一体何の実験をしていたのだろうか。水槽の中には奇形の生物が
沢山いて、なんだか見ているだけで倫理的概念が崩れていくような
そんな気がした。完全に狂っている。この責任者は一体どういう
趣味でどういう主旨でこんなものを保存しておくのか。眩暈と頭痛
が止まらない。クライドは黙々と水槽を見て回った。

ここの研究所では、生体を奇形に変える実験をやっているとしか
思えない。それ以外で、どうやったらこんな生物が無残な形にな
っていくのか。中から破裂したような形の生物や、奇妙な触手や要
らないはずの肢体が生えている生物の様子から見ると、この生物達
はすべて内側から弄られているような気がする。だから、手術で奇
形になったわけではないのだろう。

「うわ」

首だけのエルフ。

「もう、やめてくれよ」

「……同感だ、クライド」

皮膚のない人間の死体。

「グレン、もう戻ろう」

「最後のあれ、確認してくる。お前先戻ってる」

目に映った生物たちの成れの果てを、早く忘れたいと思った。クライドはエレベーターのドアにもたれかかり、ずるずるとその場に崩れ落ちる。エレベーターに縋るような形で呼吸を荒げていると、グレンがそつと後ろから腕を掴んでくれた。

エレベーターに乗り込んで、地下二階に上がる。ドアが開くと、まず警告を表す黄色と黒の縞模様縁取られた紙が目に入る。その紙は、目の前の突き当たりにある壁に貼ってあった。

「動物実験は右フロア、その他実験は左にて。誤ると製品が有害になることがあります」

見れば、貼り紙の両サイドにドアがあった。手分けして探すなら、二手に分かれることもできる。けれど今は、一人になるのが心細かった。あんなショッキングなものを見てしまったあとだから、グレンもクライドから離れようとはしなかった。

二人で左のドアをくぐると、白衣姿の研究員が五人ほど確認できた。全員金髪で、風体はラジェルナ人に見える。二人はパソコンに向かい何らかのデータを打ち込んでいたが、残る三人は実験中のようだった。三人のうち一人は試験管を振っていて、一人は顕微鏡を覗いていて、もう一人は実験器具の後片付けをしていた。

声をかけようかと逡巡していると、片付けの最中だった研究員が持っていた実験器具を落として叫んだ。

「クライド!! カルヴァート!」

「え?」

研究員の一言で、他の四人も顔を上げてこちらを見た。クライドは半歩退いたが、グレンは一步前に出てクライドを背中側に押しやってくる。

白衣姿の研究員五人は、即座に実験やデータの入力を終えてこちらに向かってくる。

「クライド!! カルヴァート、ならびにグレン!! エクルストン……」

七三分けの研究員がぶつぶつと呟きながらこちらに駆け寄ってくる

る。

「何で俺らの名前知ってるんだよ、気持ち悪い！」

グレンは叫び、向かってくる研究員の鳩尾に拳を打ち込んだ。けれど研究員は一人ではない。グレンの脇をすりぬけて、こちらにも小柄な研究員が駆け寄ってくる。

「ちょ、勘弁してくれ！」

クライドは研究員をさっと避けたが、研究員はクライドの腕を掴んでくる。つかまれた腕を捻って逆に研究員の腕を掴み、床へとねじ伏せながらグレンを呼ぶ。

「グレン、早く」

「待つてる！」

ねじ伏せた研究員の背中に脚を乗せて、身動きをとられないようにしておく。グレンは同時に二人の研究員を相手にしていたが、そうすると一人はクライドの方に来ることになる。

「クライド!! カルヴァートを捕らえる！」

「おっと、させねえよ！」

叫びながらこちらに向かってこようとした研究員を蹴倒して、グレンは一人の研究員を昏倒させた。蹴倒した研究員が復活してこちらに向かってこようとする頃には、グレンが相手していたもう一人の研究員も昏倒していた。

復活した研究員はとっさに防御の姿勢を取ったが、グレンにはかなわなかった。クライドの目の前で、グレンは研究員を合計で四人昏倒させたのだ。その鮮やかな手際に、クライドは感心した。

「クライド、そいつ気絶させなくていいのか？」

グレンはクライドにねじ伏せられている研究員を見て言った。

「俺には無理」

「じゃ、俺に貸せ」

クライドにねじ伏せられた研究員は、身をよじって抵抗する。まだ若い研究員で、年頃は二十歳かそれくらいだろうか。

「ひい！ や、やめて、お願い！ 俺まだ死にたくない！」

「死なねえよ」

クライドが研究員を解放すると、グレンが彼の腕を掴んで立たせた。研究員はグレンの腕を振り解いて部屋の隅に逃げた。グレンはそれ以上追う気はないのか、小さく息をついてドアを開けた。

「クライド、先出る」

「ああ」

言われたとおり先に出ると、グレンは十分に研究員を警戒しながら外に出た。そして、ドアを閉めた。クライドは左のドアを見て、それからグレンを見上げた。

「なあ、グレン。こっち行く？」

「……勘弁。ここ飛ばしていくのってナシ？」

「俺はありで良いと思う」

「じゃ、エレベーター乗ろ」

意見はすぐに一致し、左の部屋にはいかないことになった。もともと、右の部屋にだって奥にドアがあった。けれど、戻ろうとはグレンも言い出さないだろう。エレベーターに乗り込んで、今度は地上の二階を目指す。エレベーターはスムーズに動き、途中で止まることはなかった。

ドアが開き、グレンが何気なく前に進もうとして立ち止まった。どうかしたのかと思って彼を覗き込もうとするが、怒鳴りつけられた。

「下がれ！」

思わず身を竦めると、グレンは一人でエレベーターから降りてしまった。冷静に彼を視線で追うと、彼の視線の先にたくさんの研究員がいるのが見えた。長身の男もいれば、太った男もいる。見える範囲に居た研究員は全て男だったが、全員がひ弱そうな体格をしていた。

「グレン！」

「お前は下がってる、奴らの狙いはお前なんだ！」

グレンはこちらに叫び返してきつつも、しっぴかり研究員達の相手

をしていた。黒縁の眼鏡をかけた研究員がグレンに投げ飛ばされて、床に叩きつけられるのが見えた。それをみて、大方の研究員は怯んだようだった。

ここにおいても、エレベーターが勝手に閉じて上に上がってしまう。クライドはエレベーターから降りて、こちらに気づいて走ってきた研究員に頭突きをかます。

「ああもう、何で出て来るんだよ」

「エレベーター勝手に上行くだろ！」

少し離れた位置だが、クライドとグレンは研究員を相手にしながら言い争っていた。

「俺の気持ち考える！」

言いながら、グレンは痩せた長身の研究員を蹴飛ばした。クライドはそんなグレンに対して舌打ちをしながら、向かってきた小柄な研究員を八つ当たり気味に殴り飛ばす。

「そんなこと言われたって！」

いらついできて、クライドは研究員の群れを見渡した。ざっと見ただけでも、四十人ぐらいの研究員が確認できた。いちいち蹴飛ばしたり殴っていたりしたのではきりが無い。

目を閉じ、想像する。研究員達が全員失神して、グレンが途方にくれている姿を。

目を開けば、想像通りの景色が広がっていた。クライドはつかつかとグレンに歩み寄って、にやりと笑ってみせる。

「俺のこと足手まといとか思ってたんだろグレン？」

「……まあな」

グレンもにやりと笑う。

「今の結構かつこよかった」

笑った顔のまま、グレンはクライドの背中を強く叩く。クライドは彼に笑みを返して、奥のフロアへと向かって歩き始めた。倒れた研究員たちの群れを通り越し、奥のドアを開ける。

沢山のデスクが置かれた部屋だった。デスクには一台ずつパソコン

ンが置かれていて、おそらく研究資料か何かが一機のプリンタから吐き出され続けていた。プリンタは見たところ、デスク二台につき一台という配分で置かれている。

「何かのマニュアルか？」

プリンタに歩み寄ったグレンが、印刷済みの紙を拾い上げる。グレンはそれを読みながら、くすりと笑みを漏らす。

「クライド、お前これからおっかけファン増えるぞ」

「いや、要らないって」

グレンの傍に歩み寄ると、彼から紙を手渡される。恐らくミンイエンが作成したと思われる文書で、タイトルからして頭を抱えたくないものだった。

「クライド捕獲大作戦…… タイトルにひねりがないな」

「突っ込みどころ違うだろ」

グレンに笑われつつ、クライドは紙を読み進めた。内容は、今後数週間のうちにクライドが逃げたらどうするか指示したものだ。実際に今の研究員達も指示通りに動いたらしい。紙には「何が何でも待ち伏せて捕まえろ」という内容のことが記されていたのだ。

「捕まえてくれたらいっぱい褒めてあげる！ だって。どう思う？」
ミンイエンの口調を真似て最後の一文を読んでもみると、グレンが吹き出した。

「かなりきてる、色んな意味で！」

二人で声を上げて笑いながら、変なマニュアルを記した紙を持っただまま部屋を移る。となりの部屋には資料らしきプリントの束がたぐさんあったし、コピー機もあった。誰かが資料をコピーしようとしたらしく、コピー機には分厚い本が挟んであった。

グレンは部屋の中を歩き回って、不意に声を上げた。

「あ。この資料、ノエルについてだ」

「グレン、お前のもここにある」

紙の束を振って見せてやれば、グレンはクライドからそれを受け取って読み始める。そして、不快そうな顔をした。

「何か気持ちわりいな。どこからこんな知ったんだろ、ミンイエ
ンとかいう奴」

「備考の欄に『シエリーという恋人がいる』って書いてあるけど？」

「最悪。趣味悪い、ミンイエ」

グレンはため息をつきながら、自分について書かれたデータを放り出す。そして、今度はノエルについて書かれたものを読み始めた。自分のデータよりも他の人のデータに興味をそられるらしい。

「すげえ、ノエルがモデルやったこともちゃんと書いてある」

「俺達でさえ知らなかったのにな、最近まで」

「旅行経験が何回あるかとかまで書いてあるぞ？ ジュノアで何泊したかとか」

「俺達でさえまだ知らないことだな」

なんだか、クライドも薄気味悪くなってきた。自分が知らない人が、自分のことを深く知っているなんて。考えるだけで恐ろしい。

ミンイエンはきつとクライドのことも深く調べつくしているのだろう。出身から家族構成まで全て。

現在見つけてあるノエルとグレンのデータには、血液型や生年月日は勿論、身長と体重まで書かれていた。しかも丁寧なことに、いつ計った時のデータなのかも書いてある。この調子で行くと、スリーサイズや好きなタイプまで書かれていそうぞで怖い。

「とりあえず、先行こうか」

言っで見ると、グレンは頷いた。そして、クライドの先に立って歩き始めた。資料室を出て、デスクが沢山あるオフィスのような場所を抜けると、エレベーター付近ではまだ白衣の群れが気を失って倒れたままだった。

クライドはそれを気にせず、エレベーターの上向き矢印を押した。グレンと二人で並び、エレベーターが上がってくるのを待った。

「先はまだまだ長いな」

グレンは呟いて、閉じたままのエレベーターのドアを見つめた。閑散としたフロアには、エレベーターが稼動する音だけが響いてい

る。相変わらず白いだけの空間だが、クライドたちが囚われていたところに比べればまだ少しは色があった。このフロアは、壁に張り紙がしてあったり廊下に絵画がかけてあったりする。

「シエリー、泣いてないといいな」

「ああ」

クライドの呟きに答えたグレンは、少し寂しそうな顔をしていた。それだけでこの寂しい空間が、余計寂しいものへと変わっていくからすごい。グレンの存在感は、やはり絶大だと思う。

エレベーターが降りてきた。クライドは中に乗っている人を確認せずに、エレベーターに乗り込んだ。中には誰も乗っていないから、研究員と鉢合わせて争うことにならずにすんだ。グレンも乗ってきたので、次は四階を目指す。

四階までの道のりは意外と遠かった。というのも、途中で止まった三階で研究員と出会ってしまったからだ。この研究員のおそらく全員が、クライドたちの脱走を既に知っている。出会ったら倒さなければ、次へ進めないのだ。

クライドとグレンは協力して、三階にいた研究員の全てを起き上がれなくした。研究員を殴るたびに湧いてくる罪悪感、徐々にミンイエンへの怒りへと変わっていった。一体何のつもりで、ミンイエンはクライドをここにとじこめたのだろう。

「四階とうちゃーく。さあクライド、追っかけファンのご登場だ。今回はお前のファン、ざっと三十人はいるみたいだぜ」

グレンの陽気な声とともに、研究員達がエレベーターめがけて走ってくる。おそらくエレベーターが動き始めた時から、ここに集まっていたのだろう。

流石のグレンでも、いきなり三十人ほどの研究員達に襲いかかられたら苦戦する。クライドはグレンの横から彼を助けるようにして、小声で呪文を呟いて雷撃を起こしたりした。久々に、ちゃんと魔法を使っている感じがする。

「片付け終り。さて、四階には何があるんだろうな」

「オフィスだな、ここも。この建物、オフィス多すぎ」

気楽に笑うグレンのとなりで、クライドも笑っていた。グレンがいれば、クライドは無敵になったように感じるのだ。襲い掛かってくる敵を難くなぎ倒し、先に進む。それを、二人で連携して行う。こんな風に、喧嘩で誰かと協力したことなんてなかった。滅多なことがない限り喧嘩はしないようにしているクライドだから、なまっていた体がほぐれていくのを感じていた。そして、エルフ特有の運動神経がこんなところにもまで役に立っていることをよく思い知らされていた。

四階にいた研究員達は、エレベーター前に集結した者が全てだったようだ。クライドとグレンは簡単に四階の探索を終えて、次のフロアへ向かった。

六階でも八階でも、エレベーターのドアが開いた瞬間に白衣の大量が襲ってきた。そして、六階にも八階にもシエリーの手がかりはなかった。無駄足を踏んだような気になる。だがそれでも探索しないと、もしも手がかりがあった場合に逃すことになってしまう。だから、無駄足になってしまっても探索をしないで飛ばすのは極力避けたい。

「はあ、流石に疲れないか？」

「休んでる暇がないってのが辛い。クライド、お前貧血になってないよな？」

「今のところは平気」

エレベーターの壁にもたれ、クライドは荒くなった呼吸を整える。グレンは平気そうな顔をしつつも、やはり疲れているようだ。時々白衣の裾で、額の汗を拭っている。

「あ、畜生。もうお呼びだぞ、クライド？」

「……勘弁」

エレベーターが止まる。ゆっくりとドアが開く。ドア越しに見える、白衣の大量。

クライドは心持ち身を低くして、グレンは拳を握りこんだ。

第二十四話 ビー・スマート

何度同じことをくりかえしたのだろう。クライドもグレンも疲れきっていて、そんな二人を載せたエレベーターの階数表示は既に十八階にさしかかろうとしていた。ここに降りれば、次は最上階に向かうのみとなる。

クライドは疲れきった体を壁に預け、別れてからまだ一度も姿をみかけていないノエル達を案じた。彼らは無事なのだろうか。敵に捕まって辛い思いをしていたりしないだろうか。

体力的には二人とも、クライドほどではない。魔力を使い続けていたら、疲労感もきつと酷いものだろう。救援に行ったほうが良いと思うが、彼らが今何階で止まっているか解らない。

「心配だな……」

「トニーたちか？ 大丈夫だろ、あいつらなら」

呟いた言葉には、いつもの楽天的な声でグレンが答えてくれた。

何の根拠もない彼の言葉だが、とりあえずは彼らが無事であることを祈りたい。ポケットの中に入れた携帯を、クライドはぎゅつとにぎりしめた。と、その時。

カルツァ＝フランチェスカの着信音が、狭いエレベーターの中に最大音量で響いた。クライドはびっくりとして、慌ててポケットから携帯を取り出した。携帯を開いてみれば、全く知らない番号が表示されている。誰からだろう。

少し迷ったが、おそらくミンイエン側の誰かだろうと思うから出てやった。

「何だよ」

なるべく不機嫌そうに聞こえるように、舌打ち交じりに言う。相手は一瞬黙り込み、それから柔らかな声で言った。

「クライド、そろそろ降参してよ」

予想は的中だ。電話の向こうから聞こえてきたのは、紛れもなくミンイエンの声だったのだ。そうするとこの知らない番号は、ミンイエンの携帯の番号だと考えて良いだろう。

「お前、俺の現在地とか全部知ってるんだろ？」

苛立ちをおさえながら、極力冷静に話しかける。ミンイエンは気を良くしたのか、楽しげな声を上げて笑った。

「もちろん！ 君の交友関係や近所さんも知ってるし、普段どこで遊ぶのかも知ってるよ！」

今のクライドは、ミンイエンが恐ろしい位に個人情報を知っていても動じなかった。苛立たしい気持ちだが、ミンイエンに対する恐怖心を既に消していた。相手は年齢不詳だがおそらく子供で、ただ偉そうに振る舞っているだけなのだ。それを怖がる必要が、一体どこにあるというのだろうか。

「そんなに俺を捕まえたいなら、お前から来いよ」

「え、どうしたの？」

電話の向こうでミンイエンがうるたえる。こちらは全員、お子様の遊びにつきあってやるほど暇ではないのだ。何故こんなにもミンイエンに振り回されなければならないのだろうか。理不尽にも程がある。

クライドは舌打ち交じりに続けた。

「親からエサ貰う雛鳥みたいにただ待つてるんじゃないやなくて、自分から来いって言うてるんだよ」

「何その言い方、偉そうに！」

「偉そうにしてるのどっちだよ」

しばし、お互いに無言になる。もしも電話でなく直接話していたなら、クライドとミンイエンは今ならみあっているだろう。

エレベーターが到着した。クライドは無言のまま携帯を耳から離して、ミンイエンの返事など待たずに通話を切った。エレベーターのドアが開くと、白衣の集団が今までどおりに現れた。今までどおり、クライドとグレンも応対してやった。

彼らを薙ぎ倒しながら、クライドとグレンは無言でフロアの奥を目指す。なんだか無性に苛々してきて、クライドは完璧に八つ当たりで研究員を殴りつけていた。吹っ飛ぶ研究員を見下ろして、クライドは悪態をつく。

「鬱陶しい！」

「じゃ、早く片付けようぜ！」

思わず叫ぶと、グレンが笑顔で言う。彼の楽しそうな笑顔を見ると、少しだけ苛々した気分もおさまった。クライドはくたくたになった身体をどうにか動かして、立ちふさがろうとする研究員を蹴飛ばした。向かってくる研究員が少しになってきたとき、後ろから声がした。

「グレン！」

「カルヴァート！」

今度は何なんだ、もうこれ以上疲れさせないでくれ。真っ先に思い浮かんできたのがこの思いだ。クライドはとりあえず、向かってきた敵を倒すことに専念する。

グレンの名は男が、クライドの苗字は女が叫んだようだった。面倒に思いながら振り向くと、そこには白衣を着た男と女が立っていた。男の方にも、女の方にも見覚えがある。

額に赤い鉢巻をつけた男。シェリーをさらった男。殺人鬼、デゼルト。それを認識した途端、グレンは猛然とデゼルトに突っ込んでいった。刹那、女の方もクライドにとびかかってくる。

短い三つ編みの、少し日に焼けた…… 海賊女。

「あれ、でも名前忘れたんだけど……」

呟くと、女はぴたりと止まる。そして、不快感をあらわにした顔でクライドを罵った。

「あんだ、あたしにあんな思いさせといて！ 絶対殺してやる、殺すんだから！ ハルフォードはどこ？ あいつも切り裂いて海にせずめてやるわ！」

「はあ…… 殺されてたまるかよ」

海賊女は甲高い声で叫び散らす。耳に響くその声に顔をしかめていると、海賊女が手に隠し持っていた短剣でクライドを切り裂こうとしてくる。彼女を避けながら、クライドは考える。

戦いに慣れていない研究員達なら、まだなんとか倒せるかもしれない。けれど目の前にいるのは、女とはいえ海賊だ。きつと十分に戦い慣れている。対するこちらは疲弊しきつていて、集中力も欠けてきているのだ。これでは、ちょっと分が悪いかもしれない。クライド側が不利だ。

辺りを観察すると、グレンとデゼルトが激しく攻防しているのが見えた。部屋の隅の方には、おそらくどう手出ししていいか解らなくなっているのであろうと思われる何人かの研究員たちが見えた。「キャプテン・リタ、短い間だったけどあたしはそう呼ばれてた。でもあんたたちを殺すために、あたしは海賊やめたのよ」

ああ、思い出した。リタだ、彼女の名は。ノエルが彼女を海に突き落として、彼女の船から燃料を奪ったのだ。それできつと、彼女のプライドはずたずたに傷つけられたのだろう。

けれど、あれだって元々は襲ってきた海賊が悪いのだ。確かに不法だったのは免許を偽造していたクライドたちも一緒だ。しかしどう考えても、何もしていない旅人とそれを襲う海賊なら、海賊の方が悪いに決まっているだろう。

「……何もそこまで恨むこと」

「何言ってるの？ 何この男っ、絶対殺す！ あんた、自分がしたこと解ってるの？ 解ってないでしょ！」

「いや、元はといえば襲い掛かってきたお前が悪いんだし」

リタは大声で叫び散らす。耳に響く甲高い声に、クライドは再び顔をしかめる。この女、じつはこの大声が武器なんじゃないのか。

短剣を使つて滅茶苦茶に切りかかってくる元海賊女を前に、クライドは若干の気だるさを覚えていた。何でこんな女の相手をしていなければならぬのか。クライドはそんなに暇ではない。

「海賊は人を襲うのよ！ 常識じゃない！」

「何だそれ滅茶苦茶だ！ 一般常識では、海賊って存在自体が悪だろ」

「だからあんたが悪いんじゃない！ あんたが悪いに決まってるでしょ？」

そんなことを言われても。クライドは疲れた頭で、とりあえずリタの攻撃を避けることにだけ集中した。けれど、リタが一方的にクライドを悪いと決め付けてきたのが何となく嫌で、口を開いた。

「意味がわからな……ッ」

何か言おうとしたことが間違いだったのだ。今更気づいても遅い。右の脇腹に鋭い痛みが走り、リタの勝ち誇った笑顔に背筋が凍る。

思わず数歩後退し、脇腹を押さえたままリタを睨みつけた。切られた脇腹から、生ぬるい粘性の液体が染み出してくる。想像で傷を治してみると、血は止まったが頭がくらりとした。こんな時に、貧血か。

「諦めるよ」

短剣を繰り出してくるリタに、そつと語りかけてみる。

「諦めない！」

リタは番犬のようなすさまじさで、クライドに切りかかってくる。疲れて動きが鈍くなってきたクライドは、攻撃をよけるだけで精一杯だ。

「やめてくれ」

「やめない！」

彼女の注意を逸らすには一体どうしたらいいのだろう。クライドはふらつきながら、リタの攻撃を辛うじて避ける。彼女の真剣そうな顔を見て、クライドはなぜか少しだけいい案をひらめいた。

例えばこの場に全く関係ない天気の話をするとか、好きなタイプを聞いてみるとか。グレンが去年デゼルトに言ったように、彼氏がいるのか聞いてみても彼女なら動揺しそうだ。

よし、ネタは決まった。

「じゃあさ、結婚してくれ」

「はあ!？」

リタの動きがぴたりと止まる。ビンゴだ、彼女は動揺した。クライドは思わず笑い、白衣の横っ腹にしみこんだ血を気にしながらリタを見た。リタは途端に頬を赤く染め、何度も瞬きをしながらクライドの顔を見つめていた。何だ、こんなことで注意をそらせるなんて。

リタに手を伸ばしてみた。勿論、剣を取り上げるためだ。固まったりリタは、クライドが取り上げる前に白い床に短剣を落としてしまっ

た。剣が床にぶつかった時の金属音と一緒に、後ろから怒鳴り声が聞こえた。

「てめえ!」

即座に振り向くと、白衣を翻しながらこちらに走ってきている男が見えた。デゼルトだ。

「え? うわっ!」

デゼルトはグレンを放置し、クライドに切りかかってくる。クライドは何が起こったのかわからないまま、とりあえず彼の攻撃を避けた。グレンがデゼルトを妨害してくれているが、デゼルトはクライドだけを睨みつけて短剣を振り上げている。

意味が解らない。デゼルトはグレンを攻撃したかったのではなかったのだろうか?

「リタあ! てめえ、そんな男と結婚しやがったら殺すからなっ」

「え、あ、大丈夫、結婚なんて、そんな」

リタは今頃になって立ち直ったのか、しどろもどろになりながらもデゼルトに返事をしている。いや、まて。

「って、冗談だから! 何本気にしてんだよ」

本気にされても困る。これはリタのペースを乱すための嘘であり、クライドには結婚する気なんてないのだ。まさか本気にされるとは思っていなかったから、クライドは拍子抜けすると同時に身体の血が冷えていくような感覚に陥った。このじゃじゃ馬と、本当に結婚

? 嫌だ。

「え?」

「えって言われても。何で戦いの最中に結婚なんて言い出すんだよ? そっからして可笑しいだろ」

「っ、この男! あたしの乙女心を踏みにじったな!」

リタの表情が、恥じらいがちな顔から殺意の滲み出た形相にかわる。

「いや、そういわれても」

「絶対殺してやるー!」

「わ、馬鹿やめろって!」

短剣を拾おうとするリタに体当たりをかまし、自分が短剣を拾う。リタは悔しそうにクライドを見ていたが、素手でこちらに立ち向かってくる。

細い拳がクライドの肩口を掠る。どうやらリタは、クライドの顔を狙って殴りかかってきているようだった。クライドは避けながら、内心でため息をつく。女を怒らせると、怖い。

「あんたみたいな男、一瞬でも良いなんて思うんじゃないっ」

「え、思っただのかよ!」

「リタあ、後で覚えとけ!」

遠くからデゼルトの声がするがそれを無視し、リタはクライドに向かって脚を振り上げる。胸板にかかと落としをされそうになるが寸での所であわし、クライドは短剣を遠くの方に放り出した。

人を切りつけるなんてできない。殺してしまうつもりはないのだ。だからクライドは、相手が殺意を持って向かってきても殺意を返そうとしなかった。

「リタ、だっけ」

「煩い! あんたなんか殺しても殺したりないくらい大嫌いなんだから!」

「ごめん、傷つけたなら謝るよ」

流石に、ここまで他人に嫌われておくのもどうかと思う。いくら

敵とはいえ相手は女の子だ。それなりに恋だつてしたりするのかもしれないし、結婚してくれと言われたらときめいてしまうのかも。それを利用してしまったのは、ちよつとまずかったかもしれないとクライドは反省する。

と、いきなりリタが攻撃をやめた。謝ったことが幸いしたのだろうか？　ちよつとほつとしながらリタを見てみると、彼女は小さな声で呟いた。

「……ミンイエン様に、殺しちゃ駄目だつて言われてたんだつた」理由はそれか。そうだ、リタが謝られたくらいで攻撃をやめるはずがないのだ、当たり前だ。クライドは自嘲の意味で小さく笑い、それからふとリタに訊ねることを思いついた。

「ちよつと聞きたいんだけどさ、ミンイエンってどういう奴？」

「どうしよう。あたし、カルヴァートに傷つけちゃつた……　ミンイエン様、ごめんなさい！」

リタは一人で狼狽し、そわそわと辺りを行ったりきたりしている。視界の隅に、激戦を繰り広げるグレンとデゼルトがちらついた。白かったはずの床に、点々と赤いものが落ちてるのが見えたのは気のせいだろうか。気のせいだと思いたい。

「ごめんなさい、ミンイエン様つ。あたし、何てことを」

「いやいや、誰に謝つてんだよ。切られたの俺んだけど」

「どど、どうしよう？　ミンイエン様に怒られちゃうー！」

「聞いてないし……」

勝手に一人で慌ててパニックに陥っているリタを見て、クライドは嘆息した。全く、何て女に絡まれてしまったのだろう。面倒だからさつさと片付けてしまいたいが、不意打ちは避けたい。相手が敵であつても、フェアでないことは嫌いだから。

「カルヴァート、おとなしく捕まれつ」

リタは再びクライドに向かつてくる。クライドは彼女を避けて、切れかけた集中力を保つために雑念を振り払う。

早いところ、ノエルとアンソニーの無事を確かめたい。こんなこ

とをしている場合ではないのだ。さつさとこのじゃじゃ馬なんだか乙女なんだかよく解らない女を黙らせなくては。

「おとなしくするのはお前の方だ！」

目を閉じ、想像を働かせる。彼女が意識をなくし、隅のほうで固まっている研究員達が次々に倒れていく想像をしてから目を開けた。「あたしには魔法なんて通用しないんだから！」

目の前に得意げな顔が見えた。とつさに右に避けると、リタの細い拳が凄く速さでクライドの耳元を掠める。一瞬送られて、身体に鳥肌がたつていくのを感じた。部屋の隅に視線をやってみれば、倒れた研究員が見える。リタにだけ、魔法の効力がないようだ。

「うわ、厄介……」

これは危険かもしれない。魔法が通じない上に、こちらは体力が既に消耗している。

前にもこんな風に、魔法が封じられたことがあった。しかも、その時も対戦相手はリタだった。クライドはこの瞬間、冗談とはいえずリタに求婚してしまった自分を心底呪った。

「それはこっちの台詞！ 魔力封じの指輪を作るのに、どれだけミンイエン様とマーティンが苦労したと思ってるの？」

ミンイエンには敬称をつけるのに、マーティンは呼び捨てなのか。クライドはまずそこで感心し、それからミンイエンが魔力封じの道具を人工的に作っているという事実には驚いた。現に今、その実用性はここで立証されたのだ。

そして、クライドはある重大なことに気づく。リタの左手には、銀色の指輪がはまっているのだ。結婚指輪をはめる位置なのだが、女というより少女のリタにはまだ夫などいないだろう。

「へえ、それが魔力封じの指輪？」

クライドの視線を追い、リタは目を見開いた。まずいと言いたげに視線を彷徨わせた後、リタはそれとみて解るほど必死に殴りかかってきた。

「ゆ、指輪じゃない！ ネックレス！ これはあたしの恋人からの

「つ」
動揺しているのだろう、リタの拳は先ほどに比べると大分威力を失っていた。クライドは彼女の腕を掴んで止め、その左手の薬指にはまった指輪をすつと抜き取る。

リタの顔色が変わった。焦ったように指輪を取り返そうとするリタを押し返しながら、クライドは指輪をしっかりと手に握りこんだ。「さあ、これで魔力封じはもうないからな」

「なっ、返しなさいよ馬鹿！」
「残念だったな」

手の中にある魔力封じの指輪を、クライドは大きく振りかぶってフロアの隅へと投げた。さあこれで大丈夫、そう思った瞬間にリタが走り出した。指輪を拾いに行ったのだ。

今がチャンス。彼女が指輪を拾いに行くまでに、倒れるところを想像すれば良い。クライドは目を閉じた。フェアでないことはしたくない。けれど、これ以上はもう戦ってられない。

卑劣なことだが仕方ない。リタがふらついて倒れるところを想像した。想像は、クライドが描いたとおりに実現した。けれど、クライドにも影響はあった。

目の前の風景が歪み、目の焦点が定まらなくなる。ぼやけた景色の中にグレンが見えたが、彼はまだデザートと戦っていた。だがクライドは、グレンよりも自分の身体について思考している。ほかの事を考えようとしても、頭の中にはただ「倒れる」「貧血」「立たなきや」の三つしかでてこないのだ。

ついには身体の力が抜け、クライドはその場に膝立ちになった。辛うじて膝立ちの姿勢を保っていたのは、傍に壁があったからだ。

「グレン……」

お前なにやってるんだよ、早くそんな奴片付けてこっちに来て手を貸してくれ。そう言いたいけれど、口が動かない。指先がだんだん感覚を失くしていく。目の前がぼやけたり正常に戻ったりを繰り返す。

返していたが、クライドは立ち上がろうとした。それが間違いだっ
た。

一気に膝の力が抜けた。束の間の浮遊感のあと、すぐに硬い床に
打ち付けられる痛みが顎や胸にくる。悠長なことは考えていられな
かった。意識を保とうと頑張っていたけれど、結局無理だったのだ。

クライドは情けないことに、敵地の真ん中で意識を失った。

第二十五話 遭遇

目が覚めると、真っ白な天井が見えた。視界は最初ぼやけていたが、すぐにクリアになる。クライドはゆっくり起き上がって、愕然とした。

床で倒れていたはずなのに。クライドは、真っ白なベッドの上に居た。しかも、何故だろう。両手が手錠でつながれている。それを理解した途端、身体じゅうから血の気が引いていくような感覚がした。丁度、手首にかけられた鉄製の手錠から、その冷たさが身体じゅうへと伝わってしまったかのように。

ベッドの傍には、疲れた顔のグレンが座り込んでいた。彼の手にも手錠がかけられていた。何が起こったのだろう、グレンに。そして、自分に。

「起きたか」

かすれた声で呟くグレンは、本当に疲れきっているようだ。クライドが気絶している間に、デゼルトと酷くやりあったのだろう。グレンは白衣を着ずに、普通に私服でいた。だが、グレンが脱いだはずの白衣は見当たらない。

「グレン、これ」

手錠を見せ、グレンの意見を求める。するとグレンは、大きくため息をついて首を横に振った。無駄だ、そう呟いた彼の声が、微かに耳に届いた。

「魔力封じの手錠だ。諦めろ、壊せるような脆いものじゃない。壊そうとするだけ時間の無駄だ」

「ここはどこなんだよ」

「知らない。気づいたらここにいた。とりあえず落ち付け、トニーモノエルも無事だ。けど今、二人とも寝てる」

そういわれて右隣を見ると、アンソニーの姿があった。よほど疲れているのか、彼は熟睡している。そしてクライドの左隣にあった

ベッドにはノエルがいて、彼は随分と不機嫌そうな顔で眠っていた。きつと、こんな敵地では寝ていられないという思想がこんな表情を生むのだろう。寝ているのに。

「よかった。四人一緒ならそれで……」

「良くないだろ、この手錠があるかぎり。これじゃ相手の思いつつばだ」

「まあ、そうだけど」

グレンは不満だろうが、これは四人別々に閉じ込められた時よりは良いといえる状況だろう。クライドは隣のベッドで寝ているアンソニーの布団をずり上げてやり、かけたままになっていたノエルの眼鏡を外してやった。

「とにかく、ここから出てシェリー探して早くずらかりたいところだけどな。でも、クライド。ポケットの中、凶器とカードの類はほぼ全て没収されてるぞ」

「え？ ……うわ」

ポケットの中は見事に空っぽだ。グレンの言うとおり、行きに手に入れたハサミなども全部なくなっていた。携帯と財布だけが辛うじて残っていたが、それでは護身に役立たないだろう。

クライドは頂垂れ、小さくため息をついた。ベッドが四つ並べられた白いだいの部屋には、アンソニーとノエルが立てる微かな寝息だけが聞こえる。この部屋は一体何の目的で作られたのだろう。ここはクライドが最初に閉じ込められたタイプの部屋ではなく、本当にただ白い四枚の壁に仕切られた空間なのだ。奇妙なほどに清潔感にあふれたこの部屋は、あまりに静かで薄気味悪い。しかも自分達の足でここに来たわけではないから、入り口がどこにあるのかもわからないのだ。

クライドは拘束された使いづらい両手で携帯を開き、着信履歴から一番新しいものを選んで電話をかけた。そんなクライドの様子をグレンがじつと見ていたが、彼はすぐに立ち上がってノエルのベッドに腰掛けた。

ノエルは寝ているように見えたが、先ほどから寝息が聞こえない。恐らく寝たふりをしているのだろう。グレンはそれに気づいていないのか、ノエルを見下ろして「よく寝てるなあ」などと呟いたりしていた。

しばらく電話が繋がるまで待っていると、何回目かの呼び出し音で相手が出た。

「もしもし！ クライド、起きたんだ？ 気分はどう？」

「お前さあ、いい加減にしてくれないかな本当。早くシエリー返せ」
開口一番に文句を言い、クライドは舌打ちした。ミンイエンは相変わらず明るい声で笑いながら、クライドの言葉にノーの返事を返してくる。

「だめだよ、僕はずっと君を待ってたんだから。苦労したよ、今日まで」

「……気持ち悪い」

ストーリーかこいつは。去年シエリーの自宅で出会った覗き少年もそうだったが、クライドは旅に出るたび変な奴に絡まれている気がする。しかも今回の場合、かなり危険等級がランクアップしているのだ。この少年を早く黙らせて、シエリーを連れてここから逃げなければ危ない。

「あ。クライド酷い！ 僕の九年間を気持ち悪いなんて言葉で片付けちゃうなんてさ！」

「お前九歳？ あー、だからこんなガキみたいなことを。ボク、お兄ちゃんをからかつちやいけないよ」

九歳にしては低い声だとは思うが、それでも少年の声は大人にしては若干高めだ。本当に九歳かもしれない、というか彼は絶対に精神的な部分が九歳だとクライドは思う。

クライドの思い描くミンイエンは、東洋系のお坊ちゃまだ。黒髪で、前髪が眉の上できっちり切りそろえられた生意気そうな子供で、部屋の外にあまり出ないだろうから青白い肌をしていそうだ。そしてきつと執事みたいな者が何人かいて、彼らがミンイエンの世話を

しているのだろう。

彼は毎日高級な食事ばかりして、おそらく偏食だろうから肉ばかり食べているに違いない。そうするとミンイエンは、ちょっと肉付きの良い九歳児なのかもしれない。

「失礼なつ、僕は十九だ！ そりゃあ童顔つてよく言われるけど！彼の言葉に、十九歳バージヨンの東洋系お坊ちやまを思い浮かべなおしてみる。背は低いだろう。やはり外に出ないだろうから日に焼けてもいないだろう。執事もおそらく健在で、人数が増えて五人くらいが常に傍にいるのかもしれない。

そうやって考えていくと、結局は前髪が眉の上で切りそろえられた意地の悪そうな顔つきの少年が再び頭に浮かんでくる。早い話、クライドはミンイエンの十九歳バージヨンを想像できないということだ。

「本当かなあ？ 九歳なんじゃないの？」

必死に否定するミンイエンにからかい気味の声を投げながら、クライドはため息をついた。こんな子供と遊んでいる暇はない。

「本当だよ！ 何なら今から会う？ 僕は君より二歳年上なんだよ？ 君のお友達のノエルとアンソニーより、僕の方が背も高いし」
むきになるミンイエンに、クライドは乾いた笑いを返した。

「来いよ。俺部屋から出れないし。何で閉じ込めるのか理解できないけどな」

「それは後から説明する！ 行くから待ってて！」

耳が痛くなるほどの大声で叫んだミンイエンはすぐに電話を切ったのだが、クライドは携帯を耳から三十センチくらい離れた姿勢で固まる。しばらくその姿勢で固まっていたが、手錠をかけられた手で同じ姿勢をとっていると腕が辛いので、携帯を膝の上に降ろす。

それを見届けたグレンがやりと笑う。クライドは、彼が言わんとしていることを大体解っているつもりでいた。おそらく、ミンイエンの年齢についてだろう。

「ミンイエンって九歳？」

ほら、大当たり。

「本人は十九つて言ってるけど絶対嘘。今から来るって」
笑いながら返すと、グレンは頷いた。そして、寝たふりをしたノエルをつつく。

「おい、来客だぜノエル」

「聞いていたよ、身長の話は勘弁して欲しいね」

「うわ、お前起きてたのかよ」

案の定、ノエルは寝たふりをしていたようだった。ノエルはグレンに向かって微笑してから、先ほどクライドが外して枕元に置いてやった眼鏡をすつと掴み取る。その仕草から、彼は眼鏡を外してやった時には既に起きていたことが解る。起きていたから、外された眼鏡がどこに置かれたのかも解ったのだろう。

ノエルは小さく伸びをして、クライドのほうを向いた。

「アンソニーは寝ているのかい？」

「見ての通り、熟睡中。グレン、起こしてやれ」

ベッドから降りつつ、目覚まし役をグレンに頼む。グレンは頷いて、アンソニーの布団を勢いよくはがす。アンソニーは寝ぼけているのか、しばらく宙を掻くように手を動かしていた。しかし、再び寝た。

「トニー、起きろよ」

声をかけてやれば、アンソニーは布団のかわりに白衣を手繰り寄せた。しわになった白衣が余計ぐしゃぐしゃになったが、アンソニーは構わず白衣を握り締めて体を丸める。手錠がかけられた手を邪魔そうに胸へと引き寄せながら、彼は不機嫌そうに唸った。

グレンはアンソニーの両肩に手をかけて揺さぶり、起こそうと躍りになっていた。よほど眠いのか、アンソニーはそれでも目を覚まそうとしない。

「起きろってトニー」

グレンが何度揺すっても、アンソニーは不機嫌そうに彼から逃げただけで目を覚まさない。そんなアンソニーを見て、ノエルが小さ

なため息と一緒に苦笑を漏らした。

「グレン、もうやめていいよ。アンソニーは魔法の使いすぎで疲れているんだと思うから。彼は何度も僕を守ってくれたからね」

言いながら、アンソニーを揺さぶり続けるグレンの手を押さえ、ノエルは小さな欠伸をした。アンソニーを気遣う姿勢を見せるノエルだが、彼も十分に疲れているのだろう。

クライドは白い壁を見つめながら、手首の違和感に苛立ちを覚える。重たい手錠は手を動かすたびに耳障りな音を立て、クライドの手首に押し掛かった。

「え、ノエルが守られてたのか？ 逆じゃなくて？」

「そうだよグレン。僕の方が守られていたんだ。僕は体力がすぐに尽きたから、へとへとだったんだよ」

「へえー、意外」

グレンは感心しながら、眠るアンソニーを見下ろした。当のアンソニーはと言うと、グレンの凝視にも気づかず熟睡している。最近になって成長してきたアンソニーだが、やはりこの無防備な寝顔のせいで実年齢よりいくつも年下に見えた。

純情で頑張り屋のアンソニーは、誰かが困っていたら手を貸さずにはいられないタイプだ。誰かに手を貸し、その末に自分が困ることになってからようやく誰かに助けを求めるのが彼なのだ。そうでない場合は、彼が意図しなくても勝手に周りが彼を助ける。それが、少しずつ変わってきているのをクライドは感じていた。

彼は確実に成長している。そして、自分の身を自分で助けることが既にできるようになっている。外見から受けるイメージで、アンソニーは守られるタイプだという固定概念を誰もが持っているだろう。けれどその考えは、もう否定せざるを得ないものになっている。「ミンイエン遅い」

呟いてみると、グレンは頷いた。ノエルは黙って部屋を見回し、それからすっと立ち上がった。何が起こったのかと訝りながらノエルを見ると、彼はクライドの視線に気づいて壁を指差した。ベッド

の足元にあたる壁だ。

「ドアはたぶん向こう。今、そっちで何か音がした」

「音？」

聞き返すと、ノエルは唇に人差し指を当てながら注意深く壁を見つめた。クライドも彼の雰囲気けふに気圧けおされて、息をひそめて壁を見る。

部屋にはアンソニーの微かな寝息だけが響いていたが、確かにノエルの言うとおり、物音が聞こえた。壁に何かをぶつけたような音だ。クライドは黙り込み、いつしか呼吸をすることすら忘れていた。音が近づく。胃の底を締め上げられるような緊張感がクライドを襲う。

「来る」

呟くと、グレンがそつとベッドから腰を浮かせた。彼の手首にはめられた手錠の鎖が、耳障りな音を立てる。

それとほぼ同時に、空気の音がした。この研究所でドアをあけるときにする音で、その音が聞こえたのはやはりノエルが指した壁の方だった。クライドは無意識に身構え、意識して壁の方を睨みつける。

「ミンイエン……」

低く呟くと、白い壁から長めの白衣を纏った腕がぬつと突き出てきた。細い腕だったが、明らかに若い男のものだ。仮にミンイエンが若い男ではないとしても、この腕が九歳児の腕でないことは確かだろう。

腕はすぐに引っ込んだ。刹那、響いた明るい笑い声にグレンの表情が強張った。ノエルは真顔で壁の方を見つめたまま、身動き一つしない。

「あはははっ！　ねっ、僕は九歳なんかじゃなかったでしょ？」

楽しそうに笑いながら、壁の向こうから少年が飛び込んできた。クライドは初めて、ミンイエンの姿を目にした。ミンイエンは想像とは大きく違った、小柄な少年だった。太ってはいないし、むしろ

がりがりに痩せていた。思わず間の抜けた声をあげ、ミンイエンを凝視してしまう。

まず目を引いたのは、その前髪の長さだった。彼の前髪は頬骨の上ぐらいまであって、目を隠している。これでは前が見えないだろう。ミンイエンは一体どうやってものを見ているのだろうか。その前髪は眉の上で切りそろえられているわけではなかった。あまりのカルチャーショックにクライドは暫く明焰に反応を返せなかった。

彼の髪は東洋人らしい漆黒で、アンソニーほどではないが癖が酷かった。そのおかげでナチュラルな髪型になっているので良いだろうが、想像していた姿とあまりにかけ離れすぎていてクライドは本当に驚く。

肌は白く、身体は華奢で、白衣は好んでそうしているのか大きめだった。長い袖から指先だけ出して、ミンイエンは楽しそうに笑っている。

彼は小柄なのだが、確かに彼自身がそう言ったとおり、ノエルやアンソニーよりは身長があった。けれど、身長の割りに小さく見える。例えば、背筋がぴんと伸びたノエルの隣にいれば、猫背気味のミンイエンは彼よりも小さく見えるのだ。

彼は金持ちと言うよりむしろ貧乏そうな風体で、雰囲気的には東洋によくいる貧窮した子どもだ。何も食べていないからこんなに小さくてがりがりなのだろうか。

本当に、この少年がクライドたちを苦しめた張本人なのだろうか？ 目の前に現れたのがあまりにひ弱そうな少年なので、クライドはミンイエンを凝視したまま首を捻った。

「……何か不満でもあるの、クライド？」

ミンイエンはそういいながら、かなり不満げな顔をしている。前髪に隠れているせいで目つきは解らなくとも、口許に浮かべる表情で感情はすぐに読めた。彼はおそらく、感情表現がかなり顔に出やすいタイプだろう。

部屋の入り口から、クライドのベッドに向かってミンイエンが歩いてくる。それを見たグレンはさっと立ち上がり、ミンイエンを睨みつけながら舌打ちする。けれどミンイエンは怯まず、ポケットから何やら注射器のようなものを取り出した。注射器の中には、薄い黄色をした液体がたつぷりと入っている。

「これは麻酔薬、即効だよ。僕ね、動物実験をよくやるんだ。あんまり煩いと、これで眠らせちゃうんだよ！」

声を上げて笑いながらそう言って、ミンイエンは注射器に針を取り付けた。そしてそれをグレンのほうに向けながら、口許に笑みを浮かべる。部屋の照明を受けた銀色の針先が、物騒に煌いた。

「これ打たれたくなかったら黙っててね、グレン！」

「なんだこのガキ、うぜえ」

「ガキじゃないよ、僕は君より二年も長く生きてるんだ」

白衣のポケットに左手を突っ込み、右手で注射器を構えたミンイエンは、クライドの数メートル手前で止まっていた。おそろくは、グレンが凄い形相で威嚇しているからだろう。注射器を持って強がっていても、ミンイエンはグレンのことが恐いらしい。顔に浮かべた笑みが、ちよつと引きつりかけている。

けれどクライドがちらりとミンイエンに目をやれば、彼はグレンのことなど頭から消してしまったかのように楽しげな笑いを浮かべた。た。

「ああ、やつと会えたよ！ やつたあ、クライドに会えた！」

真っ白い部屋のなかで、楽しそうに飛び跳ねるミンイエン。飛び跳ねた拍子に彼の前髪がめくれ上がったのだが、肝心の目は見えなかった。

この変だとしか言いようのない少年は、一体何のためにクライドを捕らえようとするのだろう。よく考えればこの少年がハビやマーティン、レンティーノを統率している人物だということになるが、それも何だか変な感じだ。この研究所の人間は全員そうだ、何故こんな子供に従い、何故こんな子供を慕うのだろう。

「気持ち悪いこと言わないでくれないかい。さっさとクライドから離れて」

ぴしゃりと飛んだ冷たい声に、クライドはびくりとした。声の主であるノエルは、不快感をあらわにした顔でミンイエンを睨みつけていた。ミンイエンは唇をとがらせ、両手を腰にやりながらノエルを見下ろす。その仕草があまりに子供っぽいせいか、グレンが笑いを堪えて肩を震わせている。

「ちよつとノエル、生意気な口きかないでよ。僕のほうが年上なんだから！」

「君に敬意を払う理由なんて、僕にはない。馴れ馴れしく名前を呼ばないで」

ノエルは冷たい笑みを浮かべながら、ミンイエンを射るように見つめる。ミンイエンは固まって、グレンは笑いを堪えてふるふる震え始めた。

初対面の人間に向かってノエルがここまで敵対心をあらわにしたことがあっただろうか？ クライドが啞然としてみると、ミンイエンはその場から一步下がった。

「うわあ…… 僕、この人嫌いっ」

今にも泣きそうな、情けない声でミンイエンは言った。グレンがとうとう吹き出して豪快に笑い始め、ノエルは冷たい目でミンイエンを見つめ続け、クライドはそんな三人の様子をまじまじと眺めていた。

「ははは！ いや、本当、マジでこいつ九歳かも！」

容赦なく笑いながら言うグレンに、ミンイエンが注射器を振り上げる。

「僕は十九だつてば！ 君も嫌い！」

グレンはそんなミンイエンを見て更に笑いながら、真っ白いシートの上に仰向けに寝て腹を抱えた。歯止めがきかなくなったのか、グレンはミンイエンが声を張り上げて静止しようとするのも構わずに笑い続けている。

「やべえ！ こいつ笑えるっ」

目じりに涙を浮かべ、グレンは遠慮なく笑う。ミンイエンがぎゅつと唇を引き結び、泣きそうな顔をして俯いている。ノエルがそれに気づいて微笑した。

「グレン、泣かせるつもりかい？」

先程とは打って変わった、優しい声だ。ミンイエンが可哀想になつてきたのだろうか。

小さい子を三人がかりでいじめるのは、感心できない行為だ。そう思い、クライドはグレンの肩を叩いて制止を試みる。

「その辺にしといてやれ。この子かわいそうだろ」

言つてやればグレンはこくこく頷いて、呼吸を正そうとしながらまた笑う。放置しておくしかないようだから、クライドはノエルと顔を見合わせて苦笑した。

勿論、ミンイエンは不機嫌を極めていた。彼はスニーカーを履いた足で、真っ白い清潔な床を蹴りつけながら喚く。ポケットに入れたままの左腕に長い白衣の裾が絡み付いていたが、ミンイエンは気にした風もなく不満げな声を上げている。

めくれ上がった白衣の下に、ミンイエンは白と黒のボーダーのTシャツを着ていた。どういうわけかミンイエンはぶかぶかの服を好むらしく、Tシャツの丈は膝上くらいまでであった。

「ひどい、皆で僕を子ども扱いして！ まだ解らないの？ 僕、十九だつてば！」

「あーはいはい。シェリーどこ？」

ミンイエンの対応に飽きたのか、殆んど面倒臭そうなニュアンスでグレンが言った。シェリーの名前を口に出した途端、グレンは再び不機嫌そうに戻つたようだ。彼はゆっくりと起き上がり、さらさらの金髪を指で梳いた。グレンのそんな態度を見たとたんに、ミンイエンは挑発的な笑みを浮かべた。

「ふふ、会わせてあげても良いよ！ けど、絶対約束して欲しいことがあるんだよね」

「何をだよ、とつととシエリーを返せ」

突っかかるグレンに注射器をちらつかせて密やかに脅し、ミンイエンは楽しそうに笑ってクライドたち四人（寝ているアンソニーもだ）をぐるりと順に見回した。何を言い出すのかと身構えていると、ミンイエンは徐に注射器を降ろす。そして、口許に笑みを浮かべたまま言った。

「僕に協力して、皆」

一体何を協力すれば、シエリーを返してくれるのだろうか。まずそう考えたが、その前に今ミンイエンが言ったことに引っ掛かりを感じる。今、ミンイエンはクライドにだけ協力を求めたのではなく、ミンイエンの狙いはクライドだったのではなかったのか？

「……皆？」

「うん。クライドが一番大事だけど、必要なのはクライドだけじゃないよ。グレンも、ノエルも、そこで寝てるトニーも。皆協力して！」

聞き返してみると、ミンイエンはあっさりと肯定した。なんだか頭が痛くなってきた。協力してなんて言われても、困るとしか言いようがない。それに、ミンイエンの態度は絶対に十歳前後だとクライドは思う。こんなわけの解らない子供に、一体何を協力すればシエリーが返ってくるのだろうか。

「ねえ、説明してくれないかい？　まずは、君がどうしてクライドにストーカー行為をするようになったのか」

ベッドに浅く腰掛けて腕組みした姿勢のまま、ノエルが言った。

「ストーカーじゃないし！　ちゃんと理由があるんだよ？」

小さく不満の声を上げたものの、説明する気になったらしいミンイエンは、アンソニーが寝ているベッドに腰掛けて嬉しそうに笑みを浮かべる。

この黒髪の東洋人が、一体何の目的でクライドをここまで誘引したのか。それが最も気になることである。クライドはノエルとグレ

ンに目配せし、ミンイエンをじっと見た。ミンイエンはクライドを見て、ふふんと得意げに笑う。

「僕ね、すつごく大事なもののために頑張ってるんだよ」

まるで幼い子供が無謀すぎる夢を語るときのように、ミンイエンは楽しげに話し始めた。

第二十六話 哀しきメモワール

大事なもののために、大好きな人のために頑張ってるんだよ。なんて殊勝なことを抜かすミンイエ恩だが、その実体はクライドにしてみればとんでもないものだった。

ミンイエ恩はにこにここと笑いながら、けれど悲しそうに話す。自分と、自分の身に起こった出来事と、それによって失ったものごとを。

「十歳の時ね。僕、リイと一緒に酒屋さんに行っただ」

ちなみのこのリイというのは、ミンイエ恩の兄らしい。彼はミンイエ恩と血が半分しか繋がっていない、父親が違う兄だという。

「リイも僕も、父親によく殴られてて。その日も急いでたんだ」

ミンイエ恩とその兄は、父親のための酒を買うために酒屋に行っただ。ミンイエ恩が十歳の時の出来事で、当時リイは十五歳だったという。ミンイエ恩は神妙に話しているが、グレンは妙に懐疑的な目でミンイエ恩を見ていた。ノエルは興味深そうに、時々頷いたりしている。

「酒屋さんの店主は僕とリイをいつも優しく保護してくれてね。怪我の手当てとかしてくれて、すごくいい人だったんだよ」

でも殺された。ミンイエ恩はそういつて、少し俯いた。よほど店主の死が衝撃的だったのだろう。俯いた彼の唇が、小刻みに震えていた。

酒場に行っただきり帰ってこないミンイエ恩たちに痺れを切らし、父親が酒場に乗り込んできた。そして、ミンイエ恩を殴ろうとした父親を止めた店主は、逆恨みされて刺し殺された。ミンイエ恩は大體そんなことを言った。

「僕ね、恐くて動けなかつたんだ」

小さく呟いた声は、微かに自分を責める色を含んでいて。思わぬことだったが、クライドは既に彼の話を真剣に聞き始めていた。

隣でグレンが相変わらず懐疑的な目をしているが、この子供がどういう経緯いきわづらひでこんな風になってしまったのかを知りたい気持ちだが、クライドの中で徐々に強くなっていった。彼がこんな捻くれた性格になっってしまったのは、今話そうとしていることに関係があるのかもしれない。

「そしたら、リイが僕を庇って」

「うん」

「刺されて、血がいっぱいでて、僕、どうしようって混乱して」

「それで？」

小さく相槌を打って話の続きを促してやると、ミンイエンはぎこちない笑みを浮かべた。

「父親がね、床にお酒をまいて火をつけたんだ。すぐ火が回って、リイが死にそうで、僕どうしたらいいか解らなかったから……」

そこで口ごもり、ちらりとクライドを見上げるミンイエン。もさもさした癖毛の前髪の間から、少しだけ彼の目が見えた。東洋人らしい茶色の目で、たとえるならそれはプリンにかけるカラメルソースのような色だった。茶色というよりは黒に近い、濃い色をしている。

クライドがミンイエンの目をじっと見つめっていると、彼は再び顔を俯けた。

「……刺しちゃったんだ」

確かに彼はそうだった。聞き取りにくい小さな声ではあったけれど、確かにそうだったのだ。

「刺した？」

思わず聞き返すと、彼はこくりと頷いた。

「うん。酷く酔っ払ってたから、簡単にやれた。死んじゃった、あの人の人」

束の間、沈黙が降りる。ミンイエンはいとも簡単に人を殺したことを告げ、それきり黙り込んだのだった。

どう反応していいかわからなかった。もしかすると、こんな話は

嘘なのかもしれない。考えあぐねていると、グレンが静かな声で沈黙を切り裂いたの。

「お前、殺人だぞそれ」

「リイだって刺されたんだ！ 僕のは正当防衛。度はすぎちゃったけど、殺したことは後悔してない」

真剣に怒りを込めたその声に、ぴくりとノエルが反応する。クライドは水を打ったようにしんとした空間に、居心地の悪さを感じた。グレンは相変わらず無言でミンイエンを見ていたが、その視線はやはり友好的とはおせじにもいえないものだった。

ベッドの軋む音が、静寂を切り裂いた。クライドは音のした方をとっさに振り向いた。音の主はノエルだったようだ。ノエルは真っ白いベッドのシーツをくしゃりと握りながら、細く骨ばった脚を組んでいた。

「間違ってるよ。命の重さは、そんなに軽いものじゃない」

ゆっくりとした、重みのある口調。将来人の命を救う医者という職業に就きたがっているからだろうか、ノエルは真剣にミンイエンの言葉に反論している。眼鏡越しに見える知的な緑の瞳は、ミンイエンを射るように見つめていた。ミンイエンはそんなノエルに歩み寄り、じつと彼を見下ろしていた。前髪で隠れて見えない目の代わりに、口許が彼の表情を語っている。物凄く、不快そうだ。

「間違ってるじゃない！」

予想外の大声に、クライドは勿論ノエルもぴくりと肩を震わせた。なぜいきなり彼が怒り出したのか、クライドには解らなかった。自分を正当化して、罪悪感を消そうとでもしているのだろうか。それとも、ただ逃げたいだけなのだろうか。

ノエルは一度は驚いていたものの、静かにミンイエンを見つめていた。クライドも、黙ってミンイエンを見つめる。これから彼が何を言うのかと、クライドはそればかり気にしていた。グレンはひとり、ミンイエンから目を逸らしたため息をついている。

「何である人は僕を作ったんだろう！ 虐待するくらいなら、母さ

んに墮ろせつて言えばよかったのに。僕は一生あいつの玩具になって生きてくなんて、絶対嫌だったんだよ？ きつと誰も解らないだろうね、僕の気持ち。僕は生まれてから、愛されたことなんて一度もないんだよ。いつも虐げられて、殴られて、邪魔だって言われて…… 要らないって言われ続けてっ」

ミンイエンは喚きちらし、腿の辺りで白衣をぎゅつとにぎりしめている。無力な、ただ無力な子供がそこにはいた。

愛されたかった。彼の望みは、きつとただそれだけのことだったのだ。だからミンイエンは、親元から逃げ出さずに暮らしていたのだろう。いつか愛してもらえとか、わかってもらえとか、そんな風に考えたのかもしれない。結局彼の父親は何も理解しなかったし、幼い兄弟を愛そうとはしなかったようだ。

ミンイエンという少年が、少し解った気がした。彼はきつと、家を失った迷子なのだ。途方にくれて、行き場所もなくしたただの子供だ。だから、友達に関するワードでクライドを攻撃しようとしたりするのだろう。迷子の彼を導くのは、きつと友達だけだから。

自分を一番理解してくれる人は友達であるという公式が頭に根付いているから、彼はわざわざ友達に關係する言葉を挑発に使ったに違いない。だんだん読めてきた。ミンイエンはやはり精神的な部分がか子供なのである。

「あ、ごめん…… つい」

「とりあえず、続き話して」

取り乱したことを謝るミンイエンに、話の続きを促す。ミンイエンは小さく頷いて、再び話し出した。

「僕はリイを背負って逃げたんだ。リイは小柄だったから、僕でも何とか運べたからね。そうして走って走って逃げて、街から出た」
「うん」

「それから研究員に殴られて、気づいたらここにいた」

親身に聞いてやれば、ミンイエンはまたもや重大な問題発言をする。研究員に殴られただって？

「……え？」

「最初は僕、実験台としてここにさらわれて来たんだ」

ならばどうして、今は研究所の人物を総動員してクライドを追いかけたりできるのだろう。クライドの見識では、ミンイエンは確実にこの研究所の最高権力者だ。もしかして違うのだろうか？

だとしたら、真の最高権力者は一体誰なのだろう。一つ解っていることがあるとするなら、その人物はミンイエンよりあらゆる意味で強いだろうということだけだ。

これ以上面倒なことは増やしたくないが、そうなりつつある状況だ。できれば最高権力者はミンイエンがいい。彼なら説得すればシエリーを返してくれるかもしれないが、彼以上に強力な敵が現れたらもう太刀打ちできない。

「実験台が指導者なのか？」

グレンが怪訝そうにミンイエンを見た。ミンイエンはぎこちない笑みを浮かべ、小さな声で「実験台……」と呟く。

「先代の最高権力者が死んじゃったから。色々あって、僕は皆を仲間にしたんだよ。僕は、最高権力者。誰も僕に逆らえないんだ」

彼の言う色々な過去には、あえて触れなかった。聞いてもどうせ、暗い過去しかでてこないのだ。精神的に子供であるミンイエンに、それを聞いてしまったらどうなるか。彼は多分、泣き出すだろう。

ミンイエンはクライドが何も訊ねなかったことを親切心からくるものなのだと思っただけ、クライドに向かって友好的な笑みを浮かべた。

「ねえ、クライドは僕のこと嫌いでしょ？ けど僕、どうしても君に手伝ってほしいんだ」

嫌いでしょ、と言われて頷けるほどクライドは非情ではない。けれど、つい何時間か前までは殴りたいとさえ思っていたほどだ。好きか嫌いかときかれたら、当然ミンイエンは嫌いの部類に入る。

けれど、話を聞いているうちにミンイエンのあまりに子供っぽい性格に気づいてしまった。そして、彼が背負っているものの大きさ

にも気づいてしまった。彼はなんだか解らないが、本気でクライドに助けを求めている。そう考えてしまうと、なんだか無下にできないのだ。つくづく、自分はお人好しだと思う。

ミンイエンは深く息を吸い込み、震えるように吐き出した。

「リイ、死んじやった。だけど僕、死んじやったリイのために色々やった。実験台にもなった。当時の最高権力者がリイの蘇生のために努力してくれるって言ったから、僕はそれを信じて頑張ってたんだ。でも、最高権力者は何にもしてくれなかった。拳句、僕やマーティンを洗脳しようとまでしたし、レントイーノは解剖されかけた」
呟くように、震える声でミンイエンは言った。そして口許にうすく笑みを浮かべて、ぞっとするほど無邪気な声で続けた。

「だから、洗脳装置を乗っとっちゃった。それが直接の原因だろうね、最高権力者は自殺したよ」

乾いた笑い声を上げるミンイエんに、グレンが明らかに敵対心の宿った目を向けた。そんなグレンの視線を真っ直ぐに受け止めて、ミンイエンは口許に微笑を浮かべる。

「僕ね、生きてるだけで色んな人を苦しめるんだ。大事な人は死んじゃうし、友達は傷だらけになる」

ミンイエンの声は、元のかすれた悲しそうな声にだんだん戻っていた。白いだけの部屋は、またしばらく無音になった。

誰も、何も言わない。出すべき声を探しあぐねているようだった。クライドだって、彼にかけるべき言葉が解らなくて途方に暮れていた。あんな、泣きそうな子供みたいな声で喋ったミンイエんに、何と声をかけるのが正解なのだろう？

「いつそ僕がいなければって思うこともあるけど、でも僕生きたいんだ。リイと一緒に、悪い父さんのいない世界で生きていたいんだよ」

そうか、わかった。

彼の目的は、きつと本当にそれだけなのだ。亡き兄と、虐待を受けることなく二人で暮らす。それだけなのだ。父親を殺して逃げ、

兄弟ふたりきりになって、なおかつその兄にまで死なれてしまった
ミンイエンはたぶん孤独を抱えている。そんな孤独に、ミンイエン
は耐えられないのだろう。

けれど、たった一つのその目的は達成できないとクライドは思う。
死人を生き返らせるなんて、現代の科学ではまだ無理だ。そして、
できるならミンイエンはそれをとくにやっっているだろう。

「だからね、僕はリイを蘇らせる」

頭の中で否定していたことをいとも簡単に言われ、クライドは唾
然とする。蘇らせるなんて常識的に考えて無理だ。どうして彼は、
兄を生き返らせることを断言できるのだろう。

ミンイエンは肩越しにこちらを振り返って、にっこりと笑った。

そして、そつとクライドの正面に立つ。彼が妙な行動をしないよう
にという意図だろうか、グレンが目を光らせていたがミンイエンは
全く気にした様子もなくクライドに顔を向けていた。

「研究して、実験して、魔力を使えば蘇生が叶うことがわかったん
だ。動物実験はもう成功してる」

「ああ、それで俺たちの魔力を使いたいと？」

なんだ、そういうことか。やつと解った。けれど、こんなことの
ためにクライドをわざわざ追いかけているなんて、ミンイエンの思
考はかなり単純だといえる。魔力を使いたいなら別にクライドのも
のでなくても良いはずだ。そう、ミンイエンの仲間にならば魔道士
はある。マーティンの魔力を使って、兄を蘇生させれば良いではな
いか。

「さすがクライド、解ってる」

「でも、何で俺なんだよ？」

「エルフのハーフだから。ハーフの魔力が一番強いんだよ、知って
た？ 他の人じゃ足りないんだ、クライドならきつと」

「それで俺が選ばれたんだ」

「そういうこと！」

だったら、さっさとその兄とやらを生き返らせて帰ってしまおう。

しかし、生き返らせることなんて本当にできるのだろうか。

「これで兄貴が生き返る保障はあるのか？」

「保証はないよ。でも、可能性ならたくさんある！ クライドが一番僕の望みに近い人なんだよ」

ミンイエンは無邪気に笑顔を浮かべてみせた。自分より年上だとは到底思えない、子供らしい笑みだった。

大きいためいきをついて、クライドは首を後ろに仰け反らす。殺風景すぎる、白一色の天井が見えた。どうしようか。

この少年が不憫に思えてきてしまった今、シエリーを強制的に奪還して帰ることなんてクライドにはきつとできないだろう。そう思う一方で、厄介なことに首を突っ込みたくないと思う自分もいる。

もしもここで協力を拒んだら、クライドは冷たい人間になるのだろうか。逆に協力してしまったら、クライドは自然の摂理に背いた罪人になるのだろうか。死人を生き返らせるということは、してはいけないことのように思う。けれど、誰かの最愛の人を生き返らせるということは、人助けになるのではないか。

いや、その『死人』自身は、生き返ることを本当に望んでいるのだろうか？

そう考えて、クライドはベッドに座ったまま目の前のミンイエンを見上げた。たとえ本当は生き返ることを望んでいなかったとしても、目の前のこんな弟を見たらリイはきつとこの世に舞い戻ったことを無駄ではないと感じるだろう。まあ、これはクライドの勝手な自己解釈なのだけれど。

「おいクライド、こいつの話に乗るのか？」

グレンが冷たい声で言った。彼は明らかに乗り気でない。むしろ、彼はミンイエンを相当憎んでいるようだった。

「わかんない、まだ考えてる。こいつが嘘言つて、俺の魔力を悪用するってことも考えられるし。人間ひとり生き返らせるって、俺には無理だと思うし……」

迷う理由ならまだある。やはりミンイエンを根底から信じるわけ

にはいかないし、魔力が絡むのでこれは自分の命に関わる相談ごとのだ。善意で引き受けてしまつて、魔力を使い果たして死んでしまふのでは元も子もない。

そつとミンイエンを見上げてみる。ミンイエンはクライドの視線に気づき、両肩をぎゅつと掴んできたのだが、グレンがさつと彼の手を払いのけた。ミンイエンは驚いたようにグレンへと顔を向け、むつとする。

「嘘なんか言つてない！ 信じてよ、僕はただリイを生き返らせただけ」

そついつて再びクライドのほうを向いて、ミンイエンはぽんと手を打った。

「そつだ！ リイに会わせてあげる、ついてきてよ」

これは名案だと言わんばかりに、ミンイエンは自分で頷いている。あまりに子供っぽいその行動に、クライドはそこですかさず、手首にかけられた銀色の重たい金属をミンイエンに差し出した。

「これ外して」

そついうと、ミンイエンはあつと小さく呟いて、唇を引き結んだ。「いいよ。僕、もう君が脱走するとは思つてないから。ごめんね、囚人みたいな扱いで」

しよげるように謝り、俯いたミンイエン。あまりにあつさりと承諾され、クライドは拍子抜けしてしまつた。その真意の見えない行動に、どう反応していいか解らなくなる。

「クライド、絶対僕に危害加えたりしないよね？ 僕だけじゃなくて、僕の友達にも」

無言で頷く。するとミンイエンも軽く頷いて、ポケットから小さな銀色の鍵を取り出してクライドの手錠を外した。そして、グレンとノエルをちらりと一瞥する。

「君達もくる？」

その問いに、ノエルはすぐ首を横に振つた。

「アンソニーがまだ寝ているから、僕はここに残るよ。グレン、君

は状況をよく見てきたほうがいい」

「そうだな。クライドを一人にはできないし」

ふたりの言葉にはさりげなく、本当にさりげなく棘とげが含まれていた。ノエルの言動にもグレンの言動にも、ミンイエンを明らかに危険視する色が見えた。

確かに安全だとは言えない。むしろ、今まで散々研究員たちに追い詰められたことを考えると、ミンイエンについていくなんて危険だ。

けれどミンイエンには、クライドを騙そうと考えている様子はない。やり方は姑息なのに、彼の訴えは極めて誠実なのだ。そんな彼の言葉を聞いていると、無視してしまう気にもなれなくなってくる。「話はまとまった？ それじゃあ、行くよ」

ミンイエンは、グレンの手錠を外さないつもりらしい。多分、手錠を外した瞬間に殴りかかってくると思って怯えているのだろう。実際、グレンはそういう事を平然とやる。

「クライド、絶対油断すんなよ。こいつらには既に一回騙されてるんだから」

わざとミンイエンに聞こえる声で言いながら、グレンはベッドから腰を上げた。そして、手錠がかかった手で器用にTシャツの袖を肩までめくり上げる。

暑いのだろうか。それとも、ミンイエンをいつでも殴り飛ばせるようにするためだろうか。どちらにしても、ミンイエンは彼のその行動に少なからず驚いているようだ。彼がミンイエンを脅すために袖をまくったのであれば、効果は十分にあっただと言える。

「……ちよっとくらい、信じてくれてもいいのになあ」

ため息をつく小柄な十九歳に連れられ、クライドはグレンと共に白い部屋から外に出た。

第二十七話 どこまでも続く白

真っ白な廊下を、ミンイエンは楽しそうに歩いていった。その後ろについていきながら、クライドはグレンをちらりと見上げる。何か言おうと口を開きかけると、グレンが先に言った。

「クライド、それ脱いだらどうだよ」

「あ、そうだな」

もう偽装の必要はない。だから、別に白衣なんて着ていなくてもいいだろう。クライドは白衣を脱いで、右脇に抱えて歩いた。

グレンは不機嫌そうにミンイエンを睨みつけながら、わざと彼に聞こえるように舌打ちをしたりしていた。そして、手錠がかかったままの両手を頭の後ろまで持っていき、だるそうに低い声で唸る。

「あー、苛々するなあ。こんな奴らにシエリーが捕まってるかと思うと、ここにいる奴ら全員片っ端から殴り飛ばしたくなってくる」

その言葉に、ミンイエンが微かにびくついたので見て取れた。グレンはそれを見て微かに意地悪く笑み、なおも続ける。

「俺が使えるのが魔法だけだと思ったら大間違いなんだよ。手錠かけられてても脚は使えるし。あー、やっぱ全員蹴倒すべきだな。訂正しとく」

彼の言動は、完全に遊びだ。本気でミンイエンを殴ったり蹴ったりするつもりはグレンにはない。顔がにやけている。おそらくこれは、ミンイエンの理不尽な対応への憂さ晴らしだろう。

クライドはグレンのそんなブラックユーモアにつられて笑いながら、ミンイエンの様子をみていた。ミンイエンはちょっと早歩きになり、グレンの脅しが入るたびに動きを固くした。それはさながら、不良に絡まれた堅気の中学生のようである。

しかしミンイエンは、やがてこちらを振り返ってグレンの方を向いた。グレンはそれを面白そうに見ながら、肩にかかった長い髪を背中の方へ払いのけてにやりと笑う。

「酷い、グレン！」

「何か言ったか？」

ミンイエンの怒りを軽くかわし、グレンは飄々とした態度で口笛を吹いたりしだした。その余裕に満ちた態度に腹を立てたのか、ミンイエンはグレンにずかずか歩み寄って彼を睨み上げた。

上を向いたおかげで前髪が分かれたので、ミンイエンの顔立ちがここにきてようやく判った。あどけない、十九歳には到底見えない顔だった。

「折角、帰りにシエリーのところ寄って行ってあげようと思ったのに、もうやめる」

ミンイエンも脅しを使うことにしたのか、勝ち誇ったような声でグレンに宣言する。真っ白い無音の廊下の一角で、立ち止まってにらみ合う金髪の長身と黒髪の子供。何だかおかしい構図だ。

「あーはいはい、勝手にどうぞ。誰がお前になんか期待するかよ。自分で探すから別にいい」

「っー！」

ミンイエンの脅しをもともせず、グレンは言い放った。半分くらい、こんな言葉が出るだろうとクライドは予想していた。けれど、ミンイエンにとっては全く予想外だったようだ。

ミンイエンは、グレンが脅しに乗って上手く言うことを聞いてくれるものだと思っていたらしい。しかし、それはありえない。グレンが大人しく敵の掌で踊っているような男でないことは、彼とたった数時間でも一緒にいれば解ることだろう。

ミンイエンは悔しそうにグレンを睨んだままで、グレンは冷たく笑いながらミンイエンを見下ろしたままだった。二人とも動かないようなら、とりあえず仲裁に入ろうか。そう考えた矢先のことだった。

白衣を纏った腕が、グレンを突き飛ばした。突き飛ばした本人は、悔しそうな、今にも泣きそうな顔でグレンをいまだに睨みつけていた。

「そつだよ。どうせ僕は誰からも期待されないよ。君に言われなくたって解ってるよ、そんなことくらい！ ご親切な指摘どうもありがとう、でも迷惑だからもうやめて」

彼の感情は、クライドが思っていたものと少し違ったようだ。脅しがきかなかったから予想外だったのではない。自分を否定される言葉に、かなりの衝撃を覚えたのだらう。

グレンは面食らって、彼の剣幕に押されているようだった。ミンイエンはグレンのＴシャツを掴み、嘲るような笑みを浮かべた。

「いいよ、やれるものならやってごらん。自分で探す暇があったら、早くシエリーに会いたいんじゃないの？ あの子の全ては僕が握ってる。あの子は今、僕のものなんだよ」

その言動とえらそうな態度に、グレンも怒りを取り戻したようだった。何より、ミンイエンがシエリーを自分のものだと発言したことに対して、グレンの理性のヒューズが飛んだのだらうとクライドは思う。

「ふざけんな！」

手錠をかけられた手で器用にミンイエンの胸倉を掴み、そのつま先が辛うじて地面を擦るくらいの高さまで引きずり上げてグレンは叫ぶ。クライドはそろそろ止めようかと思ひ、二人に歩み寄った。

「あの子を洗脳して、僕しか見えないようにしてあげてもいいんだよ？ そうしないのは、君への優しさのつもりなんだけどなあ！ よし、やっっちゃおう。そしたらシエリーは」

「やめる、ミンイエン。それ以上言ったら、俺も黙ってないからな」
そつと二人の間に入り、グレンの手を離させる。グレンは怒りに満ちた表情でクライドをも一瞬睨みつけたが、素直に手から力を抜いた。急に離されたミンイエンは、転んでしりもちをつく。

床に転がったミンイエンは上体を起こし、痛そうに口許をゆがめながら座り込んだ。そして、伸びてしまったＴシャツの胸元を整える。もともと大きめだったＴシャツの胸元は、もうずりあげても鎖骨を隠せないくらいに伸びきっていた。

「チツ」

グレンはため息をついて、ミンイエんに手を伸ばす。一体何をするつもりなのか、クライドには解らない。また何かされると思ったのだらう、ミンイエンはびくりと肩をすくめた。彼を見て、グレンは仕方なさそうに嫌々言う。

「悪かったな」

不意に告げられた言葉に身を固くし、目を丸くしてグレンを見つめるミンイエン。グレンにしては珍しい行動に、クライドも少し驚いていた。するとグレンは、クライドの方を向いて苦笑した。

「ガキを虐める趣味はないから」

ああ、と納得する。グレンはミンイエンと喧嘩をするよりも、ミンイエンをからかって遊ぶ方が楽しいと踏んだらしい。明らかに自分より弱い人間とは、グレンは喧嘩をしない。彼がするのはあくまで喧嘩であり、一方的な暴力ではないのだ。

グレンは、いとも簡単に床に倒れこんだ無力なミンイエンを見て、ちょっとだけ哀想になったのかもしれない。グレンには手錠というハンデがあったのにも関わらず、ミンイエンは反撃どころか抵抗すらできていなかったのだから。

「何その言い方！ ガキって何？ 僕は十九だって言ってるでしょ！」

憎まれ口を叩きながらも、ミンイエンは伸ばされたグレンの手を借りて床から起き上がった。そして、ぼそりと小さな声で礼を言う。グレンは小さくため息をつき、軽く頷いた。ほんの少しだけ、グレンとミンイエンの距離が縮まったように思う。

再び歩き出したミンイエンに続いて、クライドとグレンも歩いた。グレンは邪魔そうに手錠をいじっていたが、ミンイエンはまだ彼から手錠を外そうとはしなかった。やはり、心底でグレンを猛獣扱いしたままにいるらしい。

「ねえクライド、さっき言い忘れたこと言っていない？」

「何だ？」

歩きながら返事をする、ミンイエンはこちらを振り返って頼み込むように手を合わせてきた。また突拍子もないことを言い出されるんじゃないかと心配になる。勘弁してくれよと思いつながら、クライドはミンイエンを見下ろした。

「君たちの魔力の調整期間が欲しいんだ。蘇生実験室の準備もまだ万端じゃないし」

「どういう意味？」

「ここで待機して欲しいってこと。二週間くらいかな、それくらいで完了するから」

つまりは、二週間この白いだけで何も無い研究所で暮らせということか。クライドはそれを理解した瞬間、大きくため息をついた。

これではサラヤイノセントたちに心配をかけっぱなしになるではないか。今こうしている間にも、サラは不安で泣きそうになっているに違いない。電話をすれば余計に心配をかけるだろうし、何もなくても心配をかけることに変わりはない。困ったことになった。ミンイエンはクライドの態度を見て、急におろおろした。

「だ、だめ？」

「どうせ、駄目って言ってもここに留まらせるつもりだろ。二週間も？ そういうことって、普通は俺達を捕まえる前にやっておかないか？」

「だって、会社も忙しくて」

半ば八つ当たり気味に対応したクライドに、ミンイエンは言い訳をしだす。こんなところまで子供っぽいミンイエンに、クライドは少し呆れた。けれど、聞こえた単語にふと違和感を覚えて呟く。

「……会社？」

「ああ、言っただけだったね。僕は研究所だつてことを外にかくすために、製薬会社をやってるんだ。社長は僕！ 会社やると、イミテーションと研究資金の調達が一度にできて一石二鳥なんだよ」

社長と言ったところで、楽しそうな笑みと共に、ミンイエンはやや演技がかった動作で右手を胸に当てて見せる。グレンはそれを目

撃し、ぷつと小さく吹き出した。そしてそのまま豪快に笑い始める。
「うっわ、笑える」

「笑わないでよ！ 本当に社長なんだからっ」

「あーそっか！ わかった、お前社長ごっこやってんのか！」

自分で考えたことがツボにはまってしまったのか、グレンは切長の目の端に涙を浮かべて笑い転げる。笑いながら目の端の涙を指の付け根で拭い、グレンはなおも笑う。

「それにさ、そういう大事な秘密を俺に暴露していいのかよ？ クライドはともかく、俺はお前の秘密なんて守る保証はないぜ」

「あ」

グレンはもう、自分で笑いを制御できなくなっているようだ。彼は壁をばんばん叩いて、笑いに笑っていた。ミンイエンの反応がいちいち面白いようで、グレンは最早ミンイエンの方を向くことさえままならなくなっている。

本当に今更なのだが、ミンイエンはクライドたちに秘密を喋りすぎたことに気付いたらしい。グレンの大笑いを止めようとするのをやめ、ミンイエンはただ硬直して目の前の床を見下ろしていた。

「……で、でもいいんだ。リイが生き返ったらこんな秘密いらなくなるもん」

なかば自分に言い聞かせるような口調で、ミンイエンは呟いた。

クライドは笑い続けたせいで咳き込んでいるグレンの肩を叩き、ミンイエンが可哀想になってきたから笑うのはもうやめると諭してみる。

「うっわ、腹筋いてえ」

体力自慢のグレンが腹を押さえて涙目になっているところなんて、そうそうお目にかかれるものではない。クライドは止まらない笑いのせいでまだ大きく肩を震わせているグレンに、苦笑気味の一瞥をやった。ミンイエンを見やると、ミンイエンはクライドの視線に気づかずにグレンの方をじっと見ていた。

ミンイエンは震えるグレンを見て、途方にくれているようだ。ど

う反論すべきか考えあぐねているらしい。けれど彼はそれでも再びグレンを止める気になったのか、きゅつと唇を引き結んでグレンに詰め寄る。

「僕、本当に社長だよ。部屋に着いたら雑誌見せてあげる、インタビュー記事載ってるから」

「もうその話、やめねえ？ くくく……」

ミンイエンの真剣な訴えも、グレンの前には通用しなかったようだ。ミンイエンはまだ不満そうに食い下がろうとしていたが、やめた方がいいとクライドは思う。これ以上グレンの笑いを煽るようなことをしてしまったら、笑いすぎで彼が歩けなくなってしまうのではないか。

「やめとけミンイエン」

既に歩けなくなりそうなグレンを横目に見ながら、クライドは彼を軽くたしなめる。

「クライドは信じてくれるよね？」

「まず、会社やってるってことが信じられない」

彼の縋ってくるような目に若干たじろぎながら、首を捻って応じる。全く疑いなく『信じてくれるよね』なんて言われてしまったが、クライドもミンイエンが会社を経営しているなんて嘘なのではないかと思っている。こんな子供が企業をまとめて動かしていけるとは、到底思えないのだ。

クライドの反応に、ミンイエンはがっかりしたように肩を落とす。そして、そのままくるりと前を向いて歩き始める。

「ファージエ製薬って、知らない？」

「……悪いけど知らない」

残念がっているミンイエンに明るい希望を持たせてやりたいところだが、クライドは母国であるラジェルナの製薬会社しか知らない。「じゃあ見せてあげるね、雑誌。僕の会社は大企業なんだ！ 早く行こう」

「せかすなよ」

ミンイエンの表情はくるくる変わる。前髪で目が隠れてしまっても、それが容易にわかってしまうから凄い。ミンイエンの隣にアンソニーを置いたら、アンソニーの方が大人っぽく見えそうな気がする。

まだ笑いの余韻が消えないグレンと共に、白衣の小柄な背中を追う。一方的に楽しそうに喋るミンイエンに適当な相槌を打ちながら、クライドはミンイエンの言う蘇生実験のことばかり考えていた。

「……それでね、本当にリイは優しくって」

「なあ、その兄貴ってどこにいるんだよ。死んだんだろ？」

ミンイエンがした何度目かの身内自慢に、グレンが相槌ではなく質問を返した。彼の笑いは、既に止まっている。

「ちよつと眠ってるだけなんだよ。目を閉じてるだけなんだよ。それ以外、生きてる時と変わらないよ。九年間ずっとね」

曖昧に濁したミンイエンの答えに、グレンは少し黙り込む。ミンイエンはなるべく「死」という単語を避けているようだった。思うに、リイが死んだことを認めたくないのだろう。だからこんな、蘇生実験なんていう大規模な悪あがきをしているのだ。

だんだん、ミンイエンがかわいそうになってきた。兄と過ごしていた頃の手の届かない幻影を追って、彼はどこまで堕ちていくのだろう。

「……九年前の死体を、地下にあったホルマリン漬けみたいに保存してるってことか？ それとも冷凍保存か何かか？ まさか腐って白骨化してるとか言わないよな」

「言わないよ！ リイはね、僕の芸術なんだ」

グレンの質問に意味の解らないことを明るく返答しながら、ミンイエンは白衣のポケットに手をつっ込んだ。そして、白いカードを取り出す。いつのまにか、クライドたちは廊下の中ほどにある壁の前に立ち止まっていたのだった。多分、これがミンイエンの部屋だ。しかし、ドアには小さく第二研究室と書いてある。

ミンイエンは壁についていたボタンのようなものを押した。この

部屋だけはほかと違うのか、ボタンを押すと壁の一部が長方形にスライドし、液晶画面のようなものが出てきた。ミンイェンはそれに見え、指を当て、液晶画面の隣にあった溝にカードをスライドさせた。この研究所独特の、空気の入出力するような音が聞こえた。

「さ、入って」

ミンイェンは自ら白い壁に体をつ込みながら、楽しそうに笑う。こちらの反応がよほど面白いのか、ミンイェンは壁の向こうから右腕だけ出して、笑いながらクライドとグレンを手招いている。

「趣味悪い、気味悪い」

ぼそりと呟くと、グレンも大きく頷いた。ミンイェンの手はしばらくクライドたちを手招いていたが、そのうち何かを探すように辺りを動き始めた。かなり不気味な光景だ。

「うわっ」

グレンの腕が、壁から突き出たミンイェンの手に捕まった。早く来ないことにしびれを切らしたのだろう、ミンイェンはクライドとグレンを部屋の中に引きずり込むという暴挙に出るようだ。クライドは捕まってしまったグレンの様子を見て笑いながら、自分は先に部屋に入ることにした。

「グレンー、早く入ってきてよ」

ミンイェンは白い壁、もといドアの目の前に立ち、右手だけでグレンを引っ張ろうと苦戦していた。ドアの向こうからは、グレンの苛立ったような声が聞こえる。

「解ってるっての、離せクソガキ」

実はまだ、グレンはこの白い壁が怖いんじゃないだろうかとかクライドは思う。詳しくは知らないがこういう仕組みなのだろうと納得した時点で、クライドはもう恐怖を払拭はらいつくしていたのだが。彼はそうではないようだ。

ミンイェンが彼を放すと、ようやくグレンのつま先と膝が見えた。続いてさらさらした金髪が見え、黒いTシャツをめぐり上げた肩が見えた。グレンは無事に部屋に入ってきたのだが、まだ不満そうな

声を上げている。

「壁なのかそうじゃないのかはつきりしやがれ」

そうという問題か。突っ込みたくなかったが、ここは押さえて苦笑する。

「リイ！ クライドとグレンだよ、君に会いにきてくれたんだ！」

突然ミンイエンの大声が後ろで聞こえて驚き、クライドは後ろを振り向いた。ミンイエンは小さい子供がおもちゃ売り場へ走つていくときのよう、広い部屋のすみにあるキングサイズのベッドへと走っていく。

この部屋は異常に広い。学校の教室の軽く二つ分はあるような大きさだ。こんなに広い部屋は彼には必要ないだろうが、彼の持ち物には必要そうだった。無意識に一步後退する。

ミンイエンの部屋には、大小様々な円筒形の水槽が置いてあった。しかも、ミンイエンはベッドサイドにそれを集中させている。部屋の入り口付近にあるのはデスクや本棚で、中ほどにはテーブルなどがあった。

それなのに、そんな生活感のある空間の中で、部屋の奥だけは異次元だった。ミンイエンはその異次元の中で、ベッドに座った姿勢である一つの水槽に向かって楽しそうに話しかけている。寒気と吐き気が同時にした。

円筒形の水槽群。白いだけの部屋。地下にあった、エルフの死体を保存してあったものと重なって見えて眩暈がする。光の加減で水槽の中身が見えないのが唯一の救いだ、ミンイエンはこちらを振り返って満面の笑みで手招いている。行かなければならない。向こうに行かなければ。

「やっぱ、趣味悪い」

辛うじてそれだけ言つと、グレンも無言で頷いて口もとを形の良い大きな手で覆った。

「クライド、グレン！ リイだよ、彼が僕のお兄ちゃん！」

言いながら、ミンイエンはベッドから降りてこちらにむかつてく

る。クライドは彼の無邪気な笑みに恐怖さえ感じ、今度は意図して後ろに下がる。

まさか、死体を見せられるとは思っていなかった。写真を見せてくれるとか、そういうことだと思っていたのだ。

「何で怖がるの？ 僕の大切な芸術品なのに」

「芸術？ こんな薄気味悪い死体の群れが？」

グレンの掠れた声に、クライドも頷いた。どこまでも無邪気なミンイエンと、禍々しい死体の群れ。そのアンバランスさが、ひどく奇妙で残酷に見えた。

「薄気味悪い死体じゃないよ、僕が永遠の形を与えた最高の芸術品なんだ！ 生物だけが織り成せる最上級の美しさ、君達には解らないの？」

「どこが芸術でどこが美しいんだか、俺には理解できない。むしろお前の言っていることが理解できねえよ」

グレンの返答に、クライドも心底同意していた。できることなら時間を戻して、会いに行くと言った自分の言葉を訂正したい。けれどもそれは叶わぬ望みで、目の前のミンイエンは目を輝かせてクライドとグレンを引っ張るのだ。

その期待に満ちた目を、裏切ろうと思えば裏切れる。けれど、リイはミンイエンにとつて大切な人であり、クライドの命に関わる実験におけるキーパーソンだ。どうせ今見なくても、後で必ず見ることになる。後でショックを受けるくらいなら、今見ておくほうが得策のように思う。

「でもグレン、俺は見ておくよ」

「正気か？ 貧血起こしてぶっ倒れても文句言えねえぞお前」

乾いた笑いと一緒に返ってきた答えも、半分は予想していたものだ。そして、クライドがこう言えばグレンと一緒に見に行ってくれることも既に解っている。事実、クライドが彼に背を向けた途端、大きなため息と共に彼がついてくる気配もしたのだ。

クライドはミンイエンに手を引かれるままに、ベッドサイドの水

槽群へ歩み寄った。

第二十八話 対面

三人分の足音がやけに大きく聞こえたが、もともこの部屋の中は廊下と違って無音ではなかった。パソコンやクーラーの駆動音や、プリンタが紙を吐き出す音がひっきりなしに続いている。しんとした無音の空間よりも、こつやつて少しでも何らかの音があるほうがクライドとしては無駄に気を張らずにすんで良かった。

白衣のポケットから携帯と財布を出して、クライドはそれをズボンのポケットに入れた。そして、ベッドの上に白衣を放置する。もともと研究所の白衣なのだ、ミンイエンの部屋に置いておけば勝手に返しておいてくれるだろう。

「怖がることないんだよ！ リイは一番綺麗で芸術的なんだ」

ミンイエンの言う芸術とは、地下にあつた触手だらけの死体をさすのだろうか？ クライドはそう考え、微かに身震いした。

本当に、何がここまでこの少年を歪ませてしまったのだろうか？ クライドは思う。ミンイエンの兄への執着ぶりは、病的だとさえ言える。

「ほら、リイ。クライドとグレンだよ」

気付いてみれば、クライドは既に水槽群の前にいた。近くでみると、それぞれの水槽に奇怪で薄気味悪い姿になり果てた生物が浸けられている様子がはつきりと解る。中でも、熱帯のカエルのような鮮やかな色をした生物（正しくは「元」生物）が特に目を引いた。赤と緑の迷彩柄に似たまだら模様に皮膚を冒されているのはコウモリらしく、恨めしそうに口を開けてこちらを向いている。

気味の悪い死骸は、まだたくさんある。もとはどんな生物であつたのか、判別すらつかないものの方が多かつた。クライドの目線と同じくらいの高さに積まれた水槽には、ところどころに猟犬らしき面影の残る死骸が入っている。これは、最も原型をとどめている死骸のうちのひとつだつた。

しばらく当初の目的を忘れ、クライドはホルマリン漬けに見入っていた。しかしミンイエンに腕を引かれ、これから見るものが人間の死体であることを思い出す。ぞくつと背筋を悪寒が走った。

「リイはこつちだよ、クライド?」

不思議そうに言われたが、なかなか彼の方を向くことができずにクライドは黙りこんだ。

どうすべきだろう。ミンイエンがどれだけ美化して言おうとリイは既に死体であり、この世の者ではないのだ。ミンイエンは全く疑問にも思わずに兄の死体と毎日一緒にいるのだろうが、普通に考えればそもそも死体をホルマリンに浸けて保存している時点で十分おかしいと思う。

「もつすぐ一緒に暮らせるよ、待っててねリイ」

希望に満ちた明るい声。時々聞こえる微かな笑い声。顔を見れば満面の笑みを浮かべているに違いない。ミンイエンは、とても幸せそうだった。

よほど兄が好きなのだろう。だからミンイエンは、兄が死体になっってしまったもそばに置きたいと望んだのだ。もしも蘇生が失敗しても、ミンイエンは永遠に兄の死体と一緒に暮らしていくと思う。そしてミンイエンは、何度でも兄を生き返らせようとするに違いない。

「九月になったらお祝いしようか。リイ、九月でもう二十四だもんね」

ただ恍惚とした声で、ミンイエンは兄と会話をしている。いや、会話ではない。ミンイエンが一方的に喋りかけているだけだ。返事が聞こえなくても、ミンイエンの嬉しそうな声のトーンは変わらない。そのまま嬉しそうに、ミンイエンはクライドの右肩を掴んだ。

「ねえクライド、リイが君に会いたがってるよ!」

相手は死体なのに、会いたがるなんてことはないだろう。空恐ろしくなる。

グレンは既にリイの姿を見ているのか、暫く無言でいた。クライ

ドは水槽に背を向けているから、ミンイエンがどんな表情で何処を向いているのかは解らない。なるべく水槽を見ないようにしながら、肩越しにミンイエンを見てみる。ミンイエンはいきなり振り返ったクライドを見て、軽く首をかしげた。

「なあ、グレンはもう見たのか？」

「ううん、まだだよ。二人とも、何で怖がるの？ リイ、ただ眠ってるだけなのに」

ここで踏みとどまったら、未来の自分が困る。クライドは意を決し、体ごと後ろを向いた。

息をのみ、ただ目を見開いて凝視する。水槽に浸けられた、透き通るような青白い肌をした少年の死体を。

東洋系の、優しそうな顔をした少年だった。ミンイエンにはあまり似ていない印象を受けたし、リイの髪はミンイエンのそれと違って真っ直ぐだった。他の死体は全裸で放置だったのに、彼の遺体にはちゃんと服が着せられていた。ワイシャツと黒のスボンと言う、まるでどこかの学生のような格好である。まあ、他の死体は服など着せられないくらいぼろぼろになっているものが多かったのだが。

水槽に浸かった少年は、かなり不気味だった。あまりの気持ち悪さに、足元が少しふらついた。けれどクライドには、何だか死体に対する耐性ができてしまったようなのだ。死体を見たから気持ち悪かったのではなく、それがリイだったから気持ち悪かった。

リイの遺体は他の死体と違って、改造されたり分解されたりしていなかった。だからクライドは、即座に吐かずに済んだ。死体自体は綺麗で、顔色は悪いけれど確かにミンイエンの言うとおり眠っているようだったから。

けれど、もしも周りに他のホルマリン漬けが何も置かれていなかったなら、状況は違っていただろう。クライドは多分、リイを見てその場に蹲まぐさるぐらいのことをしたと思う。そして、ミンイエンの存在がなければもっと状況は違っていた。もしもミンイエンがリイの弟ではなかったら、それほどショックも大きくなかったと思う。

「兄貴なんだろ」

兄が、弟より幼い。それが酷く奇妙で、不気味だった。だからリイを見て、気持ち悪くなったのだと思う。

ミンイエンは十九歳には見えない童顔だが、リイはそのミンイエンより年下に見えた。小柄とはいえ一応ちゃんと男性に見える身長や体型のミンイエンに対し、リイの体つきは明らかに子供のようだった。いや、実際に子供なのだ。身長は百五十ちよつとくらいしかなさそうだし、そうするとただでさえ小柄なミンイエンと頭一つ分の身長差ができるのである。

「レンティーノのお父さんは、蘇生実験で復活した人だったんだ。

彼は年を取らなかった。蘇生の段階で、ちよつと不具合があつて」唐突になにを言い出すのかと思えば、ミンイエンはリイに全く関係なくレンティーノ関連の話をし始めた。

まさか、蘇生実験に成功例があるなんて。人間の蘇生が本当に可能なのだということに、クライドは衝撃を覚えた。そして、レンティーノが研究所とこんなにも深い関わりを持っていたということは何だか妙に思う。

父親が蘇生実験の実験台なら、レンティーノもきつと研究所生まれだろう。ならば必然的にレンティーノは研究所育ちだということになると思う。

彼はなんというか、最新のテクノロジーを駆使して時代の最先端を行く科学者たちとは相容れない感じがする。どちらかといえば時代を逆行し、自分のやりたいことを悠々とやっているイメージがあるからだ。

けれど、多分レンティーノは産まれた時から研究所にいた。今まで彼に対して抱いていたイメージが崩れて、レンティーノのことが今まで以上に解らなくなる。ここにきてから、全てミンイエンのペースで物事がはこんでいるような気がしてならないのはどうしてだろう。

「驚いたでしょ？ レンティーノのお父さんは僕にとっても大切な

人だったよ」

うつむいたミンイエンは自嘲気味に笑うと、リーの水槽に手をついた。そうして近づくと二人の身長差は余計に目立ったし、その奇怪さも増していく一方だった。

「リー、早く一緒に月を見よう」

若干高めの、甘えるような声でミンイエンは囁く。水槽に頬もつけて、ミンイエンは薄く微笑みを浮かべた。しかし、ミンイエンが甘えるように縋りついている相手は子供で、それがかなり奇妙でクライドは思わずミンイエンから目をそらす。

「顔色悪いぞ、クライド。倒れんなよ」

グレンの平静な声に軽く頷いて、クライドはリーの水槽をじっと見る。グレンはというと、ベッドの縁に腰かけて気だるげに長い髪をかきあげていた。クライドも彼のとなりに座り、ふらつきはじめた視界の中にミンイエンとリーの姿を捉えようと努力する。普通に物を見てもピントが合ったり合わなかったりして、視界がひどく揺れた。あまりに乱れた視界のせいで、だんだん気分が悪くなってきた。

「ミンイエン、部屋帰って休みたい」

「うん、わかった。ばいばいリー、後でまたくるからね」

ミンイエンはすっと立ち上がり、水槽の中で目を閉じているリーに軽く手を振った。無論リーが反応するわけでもないのだが、ミンイエンは一方的に嬉しそうな顔をしている。見ていて痛々しくなってきた。

「あ、部屋割りはあるでいい？ 一人の部屋が欲しいなら、空けてあげるけど」

突然顔をあげ、ミンイエンはクライドを見上げて首を傾げる。考えるまでもないことだ、部屋はそのままがいい。あんな、奇妙なほど白い部屋に一人で閉じ込められるなんて、二度とごめんだ。

「別にいい」

クライドが答えるよりも先に、グレンが答えていた。同意を求め

るようにこちらをみたグレンに深く頷いてやれば、ミンイエンは了承したようでそれ以上部屋割りの話を持ち出すことはなかった。

三人でそろって部屋を出て、ノエルとアンソニーがいる場所を目指す。道中で、ここは研究所の最上階で、クライドたちの部屋の隣にはマーティンがいるとミンイエンに聞かされた。

白い長い廊下を歩き、クライドはノエルとアンソニーのいる部屋に戻ってきた。部屋に入ると、すぐにノエルの茶髪に目が行った。真っ白い部屋の中に、唯一目についた濃い色がノエルの髪だったのだ。

ノエルはちらりとこちらを一瞥した後アンソニーのベッドの隣に座り、軽く不機嫌そうな眼差しをミンイエンに向ける。

「この部屋には本もないのかい？」

どうやら、ノエルの不機嫌の原因は何もない部屋にあるらしかった。ミンイエンは一瞬意外そうにして体の動きを止め、けれどもそれから嬉しそうに笑う。

「じゃあついてきてよ、ノエル！ 本ならいっぱいあるよ、案内してあげる」

彼らの会話を聞きながら、クライドはベッドに横たわった。疲労感と眩暈は治まる気配すらないが、ベッドにつけた背中から重力に従って、それらが少しずつ抜けていつているような錯覚におちいる。

「じゃあクライド、僕は本を借りに行くよ」

ノエルの声に頷いて、クライドは目を閉じた。考えてみれば、もう夜だ。時差が半日ほどもあるおかげでこの国では現在朝の十時なのだが、クライドの携帯の時計は午後十時をさしている。

それでなくとも十分疲れていたのに、今日はよく動いた。もう寝てしまいたい。

「眠いなら寝ろよ。お前が寝ている間、俺がちゃんと見張っとくから」

アンソニーを起こさないようにする配慮からだろうか、囁くような小さな声でグレンが言った。

「ん、ありがとう」

小さく頷いて、欠伸もして、クライドは体を脱力させた。グレンがベッドから離れる気配がすると、代わりにアンソニーが規則的に立てる小さな寝息が近くに聞こえた気がする。

うとうとし始めると、耳元で色々な声の幻聴を聞いた。グレンに呼びかけられたり、アンソニーが笑っていたり、ノエルが何かの学術的な説明をしているのが朦朧とした意識の中に聞こえるのだ。

起きている必要はなくても起きようとしてしまうので、無理矢理意識を覚醒しようとさせた末に聞こえるのが幻聴なのだろう。リタが耳元で「カルヴァート！」と叫んでいる声が聞こえた気がして、慌てて目を開けるとグレンに怪訝そうな目を向けられた。

「どうしたんだ？」

「な、何でもない」

まさか幻聴が聞こえたなんていえない。言ったらグレンは病院に行けというだろう。現に去年、鐘ドロボウのジェイコブたちに追いかけて大樹の下で寝ていたときに、彼は木の上からそう言ったではないか。

「疲れすぎだろお前」

仕方なさそうに笑って、グレンはクライドのベッドサイドに歩み寄ってくる。その両手にかけてられた手錠があまりに重々しく見えて、クライドは思わずグレンのほうから目をそむけてしまった。

「ごめん、グレンも十分疲れてるよな。それに、腕」

「腕？ ああ、これか？ 平気、気にすんな。俺はそんなにやわじやないし、疲れなんてちょっとしか感じてない」

手錠を見て軽く振ったりしながら、グレンはいつもどおりに快活な笑みを浮かべてみせる。そんなグレンにどういふ顔を向けなければいいのか解らなくて、クライドはさりげなく目を閉じた。

「ごめんな」

「お前、小さいこと気に病みすぎ。とっとと寝ろ」

「解ってる。おやすみ」

グレンにとっては小さなことももしれないが、とクライドは反論しようと思ったがやめた。クライドは猛烈に疲れているし、グレンだって疲れている。なのに口論になったりしたら、お互いに余計に疲れることになってしまっただろう。そんなことは望んでいない。

目を閉じたまま横向きになり、グレンがいるほうに背を向けた。何となく、人がいると寝づらい。

深く息を吸い込めば、微かに消毒液の清潔な匂いが嗅ぎ取れた。目を閉じて集中すれば、無音だと思っていた空間にほんの少し、本当にほんの少しだけエアコンの稼働音が聞こえた。防音といえども、壁を伝う振動は完全には抑えられないらしい。

息を吐くと同時に疲れも抜けていく気がして、その小さな安息にクライドは落ち着いた気分になる。そうしているうちに、クライドはいつのまにか寝入っていたのであった。

「……なのか？」

「うん！ 凄いでしょ」

「へえー、僕も見ろ！」

聴覚に三人分の声を捉え、クライドはゆっくりと眠りから醒めた。先ほどまでぼんやりと夢を見ていた記憶があるが、それがどんなものなのかは起きた瞬間に声に気をとられてしまったせいで忘れた。

「おはよっ」

アンソニーの声だ。ゆっくりと体を起こして長座の姿勢でベッドに座ると、アンソニーが楽しそうに笑いながらクライドに一冊の雑誌を見せてきた。

「これ！ ミンイェンだっつて」

「そうだよ！ すごいでしょ、僕の特集三ページも取ってあるんだ」
いつのまに打ち解けたのか、妙に仲が良さそうな態度でアンソニーとミンイェンが笑い合っている。クライドが啞然としてみると、グレンがやれやれとため息をついた。

窓のないこの部屋では、外の様子から時刻を察することができな

い。自分が何時間寝ていたのかは解らないが、最悪だった体調は大分回復していた。とりあえず、ベッドから降りよう。

ベッドから降りると、アンソニーが嬉々として雑誌を開いてクライドに魅せてくる。どれどれと覗き込んで見ると、確かにそれはミンイエンの記事だった。

スタイリッシュなページだ。ミンイエンの写真もプロの写真家をとったようで、ミンイエンは写真で見るとならちゃんと年相応の青年に見えた。目立つように書かれた『ハイ!!ミンイエン“大人じゃない、大人” 十八歳若社長の、奔放的ライフスタイル』という見出しがすぐに目に入る。プロの雑誌編集者の手にかかれば、ミンイエンの屁理屈も立派な格言に変わるらしい。

「不用意な奴だなー、こういうので裏の仕事ばれたらどうしようとか、考えたことなかったのかよ」

呆れるグレンに、ミンイエンは唇を尖らせて反論する。

「大丈夫だもん、口止め役ならいっぱいいるし!」

「そつという問題かよ」

思わずクライドがそつ突っ込めば、ミンイエンはにこりと笑って雑誌を指差した。

「とにかく読んでよ! 僕、自分の容姿は嫌いだけど、二枚目の写真はちよつとお気に入りになんだ」

そついわれてページをめくってみれば、ソファに腰掛けて斜め上を見上げた構図のミンイエンの写真が目飛び込んでくる。ページの半分近くを使った、大きな写真である。

細い脚を組んでシャツのボタンを二つはずし、シャツのすそをズボンにいれずにいるスタイル。何だかそれが、とてもミンイエらしいとクライドは思った。ミンイエンはだらしなない格好をしているイメージが強いのだ。

「芸能人デビューでもしたつもりか?」

「うるさいなあグレンは!」

口論を始めるグレンとミンイエンから目を外し、部屋に視線を彷徨

徨わせる。そういえばノエルの姿をまだ見ていない。一通り部屋を見てグレンとアンソニーとミンイエン以外に人は見えないので、ノエルは恐らくこの部屋を出ているのだとクライドは思う。では、だとしたらノエルはどこへ行ったのだろうか。

「ノエルは？」

「レンティーノのところにいるよ！一緒に本を読むみたい」

その答えに、クライドは少し驚いた。あんなに警戒心たつぷりに過ごしていたノエルが、クライドが眠っていた短期間のうちにレンティーノと打ち解けてしまうなんて。やはり、ノエルには順応力がある。二週間ここで過ごさなくてはならないことを考えて、ここで彼らと対立しても仕方ないとノエルは思ったのかもしれない。

「……でもさ、本って普通一人で読むものだよな」

「確かに！」

グレンの発言に軽く笑って応じながら、クライドはミンイエンを見た。多分ミンイエンはアンソニーと遊ぶだろうし、グレンはそれを茶化しながら見るのだろう。けれどクライドは、少し外に出たかった。

換気はされているし清潔な部屋なのだが、窓も無い部屋にずっといると息が詰まりそうだ。

「会いたいなら、二人は多分中庭か資料室にいるよ」

「そっか」

「クライドはどうするの？ここにいる？」

「屋上、行ってみたいんだけど」

確か、エレベーターのパネルには屋上へ続くボタンがあったはずだ。屋上がないなら中庭にでも行くのか。とにかく、この閉鎖空間から早く出たかった。このままここにいたら、白い空間と同化して終いには自分が跡形もなくなってしまうようで怖いのだ。

「勿論だよ！あ、キー渡しておくからいつでも帰ってきてね」

ミンイエンは楽しそうに笑い、アンソニーに二冊目の雑誌を渡してからこちらに歩み寄ってきた。彼はポケットに手をつ込んで、

何枚かのカードを取り出した。そして、その中から一枚選んでクライドに寄こす。

「それじゃ、行くな」

カードキーを受け取って、歩き出すと後ろからミンイエンに呼び止められた。何かと違って振り返ると、ミンイエンは得意げに話し出す。

「屋上にはね、太陽光発電パネルと風力発電機があるんだよ。研究資料の紙は全部再生紙だし、自動消灯システムもついてるし。僕の研究所は環境にも優しいんだ！」

そうなのか。感心するが、まだまだミンイエンが続けようとしていたので、適当に相槌をうって背を向けた。そしてポケットの携帯の所在を確かめてから、クライドは部屋を出る。

第二十九話 大都会の真ん中で

真っ白な廊下を無言で歩き、無意識にポケットの携帯に手をやってクライドは嘆息する。なんだって、ここはこんなに静かなのだろう。エレベーターまで向かう廊下で、クライドは研究員をひとりも見かけなかった。

そう考えて、研究員たちを静かにさせたのは自分たちだったということを思い出す。彼らには、ちよつと悪いことをしてしまったかもしれない。

「……あれ、階段？」

よくみると、エレベーターの近くに銀色の取っ手が見えた。ドアには「階段はこちら」と丁寧に書いてある。

最上階であるこのフロアは、他の階よりも殺風景さの度合いが低かった。廊下の突き当りの方に目を凝らしてみれば絵画らしきものが見えたし、エレベーター付近にもこうしてちゃんと文字が添えてある。この階だけ、扱いが特別だ。ミンイエンが主に生活しているフロアは、ここなのだろう。そうすると、ミンイエンはあまり部屋からでないのかもしれない。

「あれ、クライド？」

急に後ろから声をかけられ、勢い良く振り返る。その声はノエルやグレン、アンソニーの声ではなく、知らない青年の声だったのだ。「なっ」

知らない青年、というのは少し語弊があつたようだ。クライドの後ろに立っていたのは、紛れもなく知っている人だった。会ったのは大分前だったから、声も顔もよく思い出せなかった。けれど、見た瞬間にそれが美容師志望のセルジであるとわかった。

「久しぶり。髪伸びたね、また切ろうか？」

ちよつとの間あつていなかった友達にばったり出くわした時のような、軽い調子で対応される。クライドは面食らって、私服姿の彼

を上から下まで眺めた。

髪は前に見たときより長くなっていて、ワックスを使ってうねりをつけてある。服装は当然だが、前に見た本屋のエプロンではなかった。彼は青いピンストライプのシャツの下にグリーンのタンクトップを着て、何か文字が彫られたプレートとのネックレスを首にかけている。ズボンは黒のスキニージーンズで、前に見たときよりも若干スタイルが良く見えた。履いているのは、黒いスニーカーだ。

全体的にセルジは、とりたてどこか可笑しいところもない普通の人だった。普通と言っても、あまり目立つところがないというだけの話で、部分的に見ていけばファッションのどこにも独自のセンスが見て取れた。

「セルジさん、なんでここに」

「何でって？ この研究所で美容学校へ行く資金を溜めてたんだよ。今から休憩入るから、早めにお昼買いに行こうかなって」

セルジは少し屈んで、スニーカーの紐を結びなおし始めた。そんなセルジを見下ろして、クライドは瞬きもせずを考える。

大分前からここにいたような口ぶり。資金を溜めているという言葉。ここにいれば資金は十分に稼げるだろう。そうすると、どうだ。バイトなど、ほかにする必要はないのではないだろうか？

「じゃあ、本屋のバイトは……」

「元々、研究所のほかにファストフード店でバイトをしていたからね。ファストフード店をやめて、本屋に行ったんだ。それも研究所の仕事のひとつ」

あっさりと返ってきた答えに、クライドは絶句するよりほかなかった。研究所の仕事のひとつ？ 本屋のバイトが研究所の仕事の一つであるという理由がわからない。どうしてあんな場所でバイトをすることが、研究所の仕事になるのだろうか。

そう考えて、研究所の仕事はクライドを捕獲することだったということに思いあたる。そうだ、製薬会社と研究所は別物だ。セルジは研究所で働いていると言ったのであり、製薬会社で働いていると

いったのではない。

「って、何だよそれ。出会ったときから俺をはめてたってことか」

「はめてたわけじゃなくて」

「じゃあ何なんだよ！」

思わず怒鳴りつけると、セルジは少し困ったように笑う。その笑みですら人を見下しているようなものにみえて、クライドは神経を逆撫でされたような気分になる。険しい表情でセルジを見るが彼は意に介した風もなく、何か考え事をするように斜め上を見上げていた。

「話すと長くなっちゃうな。あ、ついておいで。社員食堂があるから、今日のお昼はそこで済まそう」

「部屋戻る」

「まあまあ、そう言わずに」

本当はセルジとなど一緒にいたくなかったのだが、腕を引つ張られたので仕方なく着いていくことにした。エレベーターに向かつて数歩だけ歩いたところでセルジの手を振り払い、クライドは深々とため息をつきながら彼の後に続く。

社員食堂は、クライドが最初につれてこられた十階にあるようだ。セルジはエレベーターに乗って、十階へ向かうボタンを押した。

最初に出会ったときは好感の持てる人だったが、セルジはもうクライドの中で敵だ。レンティーノ同様、裏切り者だから。二人は確かにいい人だったと思う。けれど、それは演技だったのだ。クライドは、二人の演じた『いい人』に騙されていたのだ。そう思うと、腹立たしくて仕方がない。無意識に、クライドはセルジから少し距離をとっていた。

エレベーターという狭い閉鎖空間の中で、裏切り者と二人きり。クライドは居心地の悪さを感じながら、壁に凭もたれる。

「僕には兄がいた。兄は成績も優秀で、容姿も抜群に良かった。それに何より、親から目一杯愛されていた。兄は僕にないものを、全部持ってたと思う」

いきなり何の話をしだすのだろう、この男は。クライドはそう思
いながら、無言で聞いていた。彼はクライドが聞いているのかいな
いのか、確認もせずに続ける。

「成績は中の上くらいで、目立たなくていつも普通だった僕は、親
から過度の義務を背負わされてね。勉強しなさい、スポーツをしな
さい。兄のようにになりなさい、兄を見習って生きなさい…… そん
なことしか言われなくて。終いには、大学教授以外の進路は許さな
いとまで言われた。兄は僕のことなんて弟だと思っていなかったか
ら、両親に責められて反論も出来ずにいる僕を笑っていたんだ」

エレベーターが止まる。セルジはクライドを肩越しに振り返り、
外に出るよう言った。クライドは彼をちらりと見て、無駄に反抗的
な態度をとりつつエレベーターを降りる。

社員食堂へは、エレベーターを降りたすぐ近くにある、前に見た
十階見取図にはなかった通路を通っていた。エレベーター正面、
右よりの壁（に見えた場所）には、本当は何もなかったのだ。その
場所には、例の白い実体のない壁があった。カードキーを使わなく
ても通行できるようになっていて、セルジはまるで壁なんて見えて
いないかのように白い壁に突っ込んでいく。慌てて、クライドも彼
の後を追った。何度通っても、この実体のない壁には完全に慣れき
ることができない。

「うちは言い方は露骨だけど、金持ちなんだ。だから、たくさんの
習い事をさせられた。結果的に、僕は学校以外であまり家からでら
れなかったんだ。忙しくて」

「ふうん……」

小さく反応を返すと、セルジはそれだけのことで少し嬉しそうに
した。クライドは少し気まづくなって、セルジとの距離をまた少し
開ける。嬉しそうにされても困るのだ、クライドにとってセルジは
裏切り者だから。

「でもね、定期的に美容室には行かせてもらえた。その時出会った
美容師さんは、すごく話が面白い人で。僕は窮屈な暮らしの中に、

ちよつとだけオアシスを見つげられた気になった。それからどんどん、美容師さんへの憧れが強くなっていった」

「それで、美容師になりたいって思ったんだ」

「そうなんだよ」

聞くつもりはあまりなかったのに、結局普通に聞いてしまった。クライドは自分自身に舌打ちしたい思いでいたが、それは結局自分を裏切ったセルジに対しての八つ当たりにも直結する行為だと悟り、ため息をつく。子供のような自分が、また少し腹立たしくなる。どうすれば正しいのか、正しい接し方はあるのか、クライドには解らない。

歩きながら、社員食堂に到着した。食堂には十数人の社員がいて、それぞれ仲よさげに談笑している。思いのほか生活感のある空間が存在していたので、クライドは少し驚いた。

「もう少しすると、もっと混むよ。早めにご飯食べちゃおうか」

セルジは楽しそうに言いながら、近くの席に座った。そして、座らないクライドを見て首をかしげる。

「どうしたの？ 座って」

周りを見れば、研究員の何人がこちらを見ていた。そして、何人かはセルジに会釈している。あまり居心地のよい空間とはいえないかったが、クライドは洪々セルジの隣に腰を落ち着けた。

「はい、メニュー。お薦めは煮込みハンバーグだよ。混んでくるとすぐなくなっちゃうから、早い者勝ちなんだ。ちよつと質素だけど、チャーハンもいける」

「え、俺も食べるの？」

差し出されたメニューを見てそう言ってみれば、セルジに何を言っているんだという顔をされた。

「基本、研究室の中には食べ物って置いてないよ。食事できるのはここだけで、ここも夜十時に閉まるから」

「それじゃあ今閉まつてるはずじゃ」

携帯を取り出しながらうっかりそう言ってしまう、セルジにまた

怪訝そうな顔をされる。そうだ、時差がある。忘れていた。

表示された二十三時五十分は、ラジェルナでの時間だ。ここはちょうど半日ほどの時差がある国だから、十一時五十分が現地時間なのだ。

「今、昼の十二時にもなっていないけど」

「うっかりしてた。時計の表示、ラジェルナのままだから」

先ほどから、つつい敬語を使わずに年上のセルジと話しているけれど、セルジは別に気にした様子もなかった。クライドも気にならないことにして、携帯を掴んでポケットに戻そうとする。すると、横からすつとセルジの手が伸びてきた。

「見せて」

言葉と同時に携帯を持っていかれた。クライドの携帯を開いて勝手にメニューを開きながら、セルジは感心したように声を上げる。

「へえ、ラジェルナではこんな携帯を売ってるんだね。僕よりも機能が多いよ。画質も良いし」

セルジは少しの間クライドの携帯で遊んでいたが、やがてクライドの視線に気付いて携帯を返してくれた。

「はい。ありがとう」

無言で受けとると、セルジは肩をすくめる。そして、再度メニューを指してきた。

「何が良い？」

「何でも良い」

「じゃ、僕が選ぶ」

セルジはにこりと笑い、メニューを閉じてからカウンターへ向かった。彼の後ろ姿を見送りながら、クライドはテーブルにあった冷水に口をつけた。食堂の調理師と三言ほど喋ったのち、セルジは愛想良く彼に手を振ってこちらに歩いてきた。

「やったね、煮込みハンバーグ丁度ふたつで終わりだったって」

言われて見てみれば、何人かの研究員が既にそれらしきものを食べていた。人気メニューなのだろう。もしもこの研究所にクーラー

がなかったら、煮込みハンバーグはこの人気メニューではないだろうとクライドは思った。

セルジの後に並んでいた研究員は、売り切れた煮込みハンバーグを求めていたらしい。がっかりした様子で、何かを注文しなおしていた。

「で、セルジさん。美容師になりたいと思った理由と、俺をはめたことってどう関係あるんだよ」

「あ。その因果関係はこれから話すよ」
「うん」

透明なグラスに手をかけて、クライドは冷水をまた一口飲む。氷を口に含んでみたが、意外に大きくて少しやり場に困った。暫く解けるのを待ってから、噛み砕く。

「僕は高卒後、家出して家族を捨てた。家にいたら美容師になんてやらせてもらえないから。家族は、僕みたいな何をやっても並みな凡人は、一家の恥だと考えてるからね。いなくていいし、むしろいいほうが良いって思ってた。だったら僕の方から、望みどおりいなくなつてやるうって思つて」

ポケットに手を入れて携帯を出しながら、セルジは言った。セルジの携帯はシンプルな四角いフォルムの携帯で、色は白と黒のツートンカラーだった。

「で、まあいろいろあつて僕はここに転がり込んできたわけだ。住むところがなかったしね。そうしたら、家族を取り戻すために奮闘しているミンイエンに出会つて」

言いながら携帯を開き、セルジはメールを読み始める。何故メールを読んでいるのか解つたのかというところ、セルジが小さく「マーティンは全く」などと呟いたりしたからだ。

「僕も家族が欲しかったんだよ。僕を道具としてしか見ていない家族じゃなくて、普通の家族がね。ミンイエンは、そういう理想的な家族を取り戻そうとしていた。求めているものは同じなんだなうって思うと、何だか急に親近感が湧いてきて…… 以来、僕はミンイエン

を弟みたいに思ってる」

クライドは、黙ってセルジの話聞いていた。セルジは時折クライドのほうを見ながら、少し荒れた手指を組み合わせる。そしてそのまま、テールに肘をついた。あまり行儀の良くない格好だが、テールの下で脚を組んでいるクライドも人のことを言えない。

「それで？」

「可愛い弟の理想は、どこまでも一緒に追ってあげたくなるものだよ。だから僕は、ミンイエンに全面的に協力したかったんだ。決して、君をはめたかったんじゃない。僕はミンイエンを手伝いたかっただけ」

「それで結局、俺をはめることになってるんだろ」

ばっさりと切り捨ててやれば、セルジは苦笑して肩をすくめた。

「君からすればそうかもしれない。でも、僕らに悪気はなかったとだけ言いたいかな。目的は君の持っている力で、君の命ではないから。報酬もちゃんと出すって、ミンイエンは言っていたけど」

「金とかどうでもいいから、早く帰せ」

こんな所に長居は無用だ。帰ってサラたちに無事を知らせることが最優先だから。

ハビのことは意図して考えないようにしていたが、いま考えてみると、ハビもクライドを最初からずっと利用していたのだ。セルジやレンティーンにそうしたように、クライドはまた敵対心を露にしていまいそうだ。だからこんな状況で、ハビに会うこともできない目的を達するのは、今は無理だ。何だか厄介なことに首を突っ込んでしまった今、一時退却よりほかに打開策はないように思う。

「実験に協力してくれる気はある？」

「しなきゃ危害加えてくるつもりだろ？ だったらとっとと協力して、とっとと帰る以外にどうするんだよ」

なるべく普通に対応するはずだったのに、明らかな苛立ちを含む声になってしまっただけでクライドはセルジから目をそらした。また子供のようなことをやってしまった。それを少し後悔しつつ再びセルジ

のほうを向いたときには、彼は既に実験の話ですっぱりと切り捨てていたようだった。

「あ。出来上がったみたいだよ、煮込みハンバーグ」

茶髪に碧眼のウエイターがやってきて、クライドとセルジの前に皿と食器を置いた。美味しそうな匂いが漂ってくる。この消毒液の匂いしかない研究所でこんな匂いを感じることも出来るのかと、クライドは妙に感心した。

「お待たせしました。午後もお仕事、頑張ってくださいね」

ウエイターはセルジに丁寧に頭を下げ、クライドに会釈して厨房に戻っていった。ごゆつくりどうぞなどと言わないところが、いかにもこの研究所らしい。

空腹感がいつのまにか押し寄せてきていた。クライドは用意されたナイフとフォークを手にとり、セルジに軽く頭を下げた。

「いただきます」

セルジは微笑し、ハンバーグにナイフを入れる。クライドも彼にならぬ、食べ始めることにする。

さすが、人気メニューというだけある。確かにこれは絶品だった。ハンバーグはふつくと柔らかで、ソースには深いこくがある。小盛のライスもついていたので、クライドはその炊き立ての白米を味わって食べた。

食事しながら、辺りを色々と観察してみることにした。ここにいる研究員の殆ど、というか全員が男性で、人種は様々だった。黒人もいれば白人もいるし、黄色人種や混血らしき人もいる。彼らは皆、白衣を脱いだ姿で食事をとっていた。

「あとでこの支払方法教えてあげる。面白いよ」

セルジはハンバーグを切りながらそう言い、微笑した。クライドはハンバーグを咀嚼している最中だったので、声は出さずに頷く。

食堂には、色も音も匂いもある。極端に生活感が欠落しているこの研究所では、こんな普通の空間が異色だった。それが奇妙に思えて、こんな空間には馴染めそうにないとクライドは思う。

セルジのほうに先に食事を終えて、食器をトレイに載せて返却口へ運んでいった。クライドも彼と入れ替わりになるぐらいのタイミングで食事を終えたので、セルジがやってきた通りに食器を下げた。席を立ったセルジは、食堂の出口に向かって歩いていった。そして、こちらを振り返って手まねく。

「さて、支払いだね。見てて」

食堂の出口には、カードリーダーが設置されていた。公衆電話のようなタイプの形で、この研究所でよく見かける、壁と同化した見つけにくいカードリーダーではない。セルジがそのカードリーダーにカードキーを通すと、小さな液晶パネルに黒い文字が浮かぶ。二ヶ国語で、ディアド語とエフリツシュ語の文字が並んで浮かぶようになっていた。

「累計、六百ウエルツ」（日本円にしておよそ二千円程度）

カードは自動的に戻ってくる仕組みなのか、数秒だけ金額を表示したあとすぐに返却された。セルジはそれを財布に入れてポケットにしまい、白い壁を抜けて廊下に出た。殺風景な空間に、戻ってくる。

「今のは？」

「この会社の社員食堂では、現金を持っていなくても食事ができるんだよ。今出た金額は、今月の利用額。カードを使えば、給料から自動的に料金が引かれる仕組みになってるんだ。自動販売機とかもそう」

「へえ、便利だな」

便利そうだが、カードを紛失したら大変なことになりそうだ。セルジはこれから仕事に向かうらしい。彼はエレベーターに乗ると、最上階へのボタンを押した。クライドは屋上行きのボタンを押さず、セルジが降りる最上階から階段を使って屋上に向かうことにする。

「君はどこに行くの？」

「屋上」

「そっか。風は涼しいんだけど、屋上は日差しが強いよ。日射病に

ならないように気をつけてね」

そんなやりとりを終えると、エレベーターは止まった。クライドはセルジに軽く手をふり、階段に続く扉を開ける。背後で「髪切りたい時はいつでも言ってるね」という声があったが、振り向いたときには既に彼は真っ白い廊下を曲がってどこかの部屋に入っていくところだった。

前を向き直れば、真っ白な階段が目の前に続いている。真夏の日差しに照らされた、まばゆい白が目には痛い。クライドはその一段目に足をかけ、後ろ手にドアを閉めた。

第三十話 シークレット・ガーデン

冷房の絶たれた空間は暑かったが、セルジの言ったとおり風は絶えず流れていた。一步一步、ゆっくりと階段を上る。階段を上りきると、ソーラーパネルがずらりと並んだ屋上に出た。風力発電の風車はソーラーパネルの間に等間隔で存在し、風を受けて上機嫌で回っていた。何故だか、平和だなと感じる。

屋上は、白く塗られた鉄柵で囲まれていた。鉄柵はクライドの胸辺りまであり、陽光をじかに受けて熱を持っている。触ってみたら熱くて、思わず手を引っ込めてしまう。鉄柵を触らないように気を付けて、クライドは街を見下ろしてみる。

「うわあ、凄いな」

ここからなら、この街の全てが見える気がした。とはいっても、隣に建ったビルはこのビルよりも高かったし、そういう高層ビルがたくさんあるのが普通のようにあったのだが。

網の目のように走る道路には、沢山の車が列を成していた。昼時だから、道路も混むのかもしれない。ここからでも通行人がたくさんいるのが見て取れたし、何かの店に人が並んでいるのだって解った。行列のできる店なんて、初めて見た。

「それにしても、やっぱり暑いな」

うなじを焼く暑い日差しが、天頂からじりじりと攻めてくる。クライドは日陰を探して辺りを見回し、あることに気づいた。

このビルの中央には吹き抜けがあり、四角い筒のような形状をしているのだ。上から覗いてみると、はるか下のほうに樹やテーブルがあり、誰かがいるのも見える。あの鶯色の髪は、多分ノエルだ。

ここから声をかけたとしてもきつと向こうが気づかないだろうか。クライドは日陰探しに戻る。ぐるりと辺りを見回してみると、階段がある場所の丁度裏側に小さな建物のようなものを見つけた。クライドは建物以外に良い表現を見つけれないが、それは倉庫の

ような、けれど倉庫にしては大きなものだった。歩いて階段の裏に回ってみる。回ってみると、それが屋上に飛び出た部屋のように見えてくる。

倉庫のような部屋の入り口には、観葉植物の鉢がいくつかつるされていた。鉢からはつる性の植物が垂れ下がっていて、真夏の日光を生き生きと吸収している。入り口のドアは白かったがガラス張りになっていて、中が見えた。

長方形の白く長いテーブルと、六つの椅子。様々な観葉植物。二つのブリキ製ジョウロと、その傍にある蛇口。そして、なぜか本棚。長方形のテーブルが部屋の奥に向かって長く伸びているが、部屋の壁際には観葉植物が沢山置いてあるので、机が部屋一杯に置かれているわけではなかった。

部屋の広さは学校の教室より少し狭いぐらいだと思う。クライドは興味をひかれて、ガラス張りのドアに手をかけた。と、蒸し暑い熱気に包まれた足元に、冷たい風がすうっと絡む。

「もしかして、ここにもクーラー？」

どうやら、そのようだった。部屋の天井を見上げてみると、クーラーが作動していた。先ほどまで誰かがここにいたのか、部屋の外にいたときには気づかなかったが、汗をかいた透明なグラスが放置されていた。中には溶けかけの氷も入っている。

六つある椅子のうち、部屋の入り口から見て一番右奥の椅子に腰掛ける。ちなみに、グラスが置いてあったのはクライドの向かいの席だ。ここはエアコンの吹き出し口のすぐ下だったから、クライドはTシャツの胸元をつまんで服の中へ風を入れたりした。

一人になりたいと願ってここに来たわけだが、実際に一人になってみるとやる事が無くて困った。携帯を充電しようかとも思ったが、そういうえば荷物というものの自体がいつのまにかどこかに消えていることに気づく。あとでミネイエンに場所を問いただそう。

クライドは席を立って、本棚に歩み寄った。中には難しそうな化学の本や、倫理学の本などがある。その中で最も簡単そうだったの

が、『初歩的光学孝』で、初歩とかビギナーとかそういう類の言葉が入っている本はこれだけだった。タイトルからして意味が解らない本なので、多分ページを開いたらもつと意味が解らない本なのだろうとクライドは思う。

読書で暇つぶしをするのは絶望的に無理そうなので、クライドはほかに何かあるのか部屋を見回してみた。あまりにもやることがないので、観葉植物でも見ようか。

良く見れば、植えてある植物にはいくつも見覚えのあるものもあった。名前は知らないが、母が趣味で庭に植えているハーブがここにもあるのだ。小さく繊細な葉はまだ若く、緑色というよりまだ白に近い黄緑色をしていた。

「……誰が育ててるんだろう」

呟いた瞬間、後ろから誰かに軽く蹴られた。

「そこで何をしてる？」

ぱつと振り返ってみると、染料のように青い髪をした青年が立っていた。嫌味な笑いも踵在していて、見ていただけで何だか腹が立つ。

「何だよ」

蹴られた背中を払いながら立ち上がると、前にあつた時よりも目の線の高さが近くなっていることに気づく。けれど染料のような淀んだ色をした青い目を直視するのは相変わらず嫌なので、クライドは彼から露骨に目をそらした。

「人のプライベート・ゾーンに勝手に踏み込んで、その態度か」
「そもそも、お前らが勝手にここにつれてきたからだろ」

大体、マーティンとは出会ったときからろくなことがないのだ。彼は人を苛立たせる発言を平気で繰り返し、拳句イノセントやブリジットを殺そうとまでした。クライドだって容姿を盗まれたりしたし、ノエルに至ってはマーティンに操られたことがあるのだ。

マーティンと対峙したとき、たった一瞬だが彼を殺したいほど憎んだことだってあつた。あまり人を嫌いだと言いたくは無いが、ク

ライドはマーティンのことが嫌いだった。

「てめえの力を使えば、ミンイエンが救われるからな」

「こっちは死ぬかもしれないってのに、お前らは気楽だな。人を殺すのも実験の内か？」

「当然だ。てめえがくたばろうがどうしようが、俺には関係ねえ。実験装置の調整が終わったら、てめえともおさらばだ」

つまり、死ぬと。マーティンはそう言いたい訳だ。それを悟り、クライドはマーティンを憮然として睨みつける。

「俺は死ぬつもりないから」

「フン、ほざいてな」

ポケットから紺色をモチーフにしたパッケージのタバコを取り出して、見るからに安そうなライターで火をつけるマーティン。タバコの煙を大きく吸い込んで、マーティンは細く長く煙を吐き出した。「そっぴや、ブリジット」スタイナー。ついに孕んだな」

「っ！」

まさか、マーティンがブリジットに何かしたのか？ クライドは思わずマーティンを睨みつけ、彼の胸倉を掴み上げていた。喉の奥でくつくつと笑いながら、マーティンはクライドを染料のような青い眼でじつと見ている。明らかに、彼はこの空気を楽しんでいた。

「イノセント」エクルストンにガキか。二週間後、てめえの実験が終わったらすぐ殺しに行つてやるよ。二人まとめてな。いや、ガキを含めて三人か」

「黙れよ」

「俺には魔力があるからな。イノセント」エクルストンを動けなくしておいて、その間に目の前でブリジット」スタイナーを」

「黙れッ！」

喉が痛くなるほど叫んでいた。何故だか右手が熱と痛みを持った。火のついたタバコが宙を舞い、白い床に落ちた。クライドはあまりの怒りに、何をどうしたか自分で状況を把握することができていなかった。とにかく、目の前の男が憎らしかった。気づけば再び右手

が痛みを発していて、頭の中には憎いという一言しか残っていないかった。

マーティンは余裕そうなああの嫌味な笑みを消していた。まだ胸倉を掴んでいるクライドの手をぎゅっと掴み、彼は腕を振り上げる。逃げようにも手をつかまれていたためにそれが出来ず、結果的にクライドは頬から顎にかけての場所をマーティンに殴られることになった。ここにきてようやく、自分がマーティンの顎を下から勢いをつけて殴り飛ばしたと思に至る。

「てめえの存在自体が気に食わねえ。消えな」

「俺も気に食わない、お前のその自己中な性格！」

一言ずつ発し、それを合図にしたように無言の殴り合いが始まる。久しぶりに一対一で喧嘩をするわけだが、昨日研究員を沢山殴ったおかげで反射神経はまともに働いてくれていた。

多分グレンとマーティンなら、マーティンの方が倒しやすいとクライドは思う。見るたび拳銃を持っている彼だ、戦う時はいつだって接近戦を避けるだろうと容易く予想がついた。

避け、殴り、一歩下がってまた踏み込む。張り詰めた緊張感の中、クライドはマーティンを殴り倒して動けなくしてやることのみを考えていた。らしくないと解っていても、止まらなかった。彼の言葉の全てが、クライドを苛立たせた。

マーティンが一瞬にやりとあの笑みを浮かべた気がして、クライドは彼の腹部を勢い良く蹴り飛ばした。床に倒れたマーティンは眉間に皺を寄せ、射殺されるかと思うほどの鋭い目つきでクライドを睨む。

クライドは咄嗟に大きく後ろに踏み込んだ。その刹那、マーティンの蹴りが中途半端に引っ込めていた膝を掠る。危ないところだった、何て男だろう。寝たまま蹴りを食らわせてくるなんて。あの蹴りが当たっていたらクライドも大きなダメージを受けていたことだろう。

「チッ」

忌々しげに舌打ちして、マーティンはゆらりと立ち上がって不敵な笑みを浮かべる。けれどその笑みにはぞつとするくらいに怒気がこめられていて、いつもの嫌味な笑みより遙かに危険な感じがした。「お前を殺すことは決定事項だ」

「実験はどうでもいいのか？」

言ってみれば、マーティンは声を上げて腹を抱えて笑った。何が可笑しいのだろう。むっとしてマーティンを睨みつけると、マーティンは腹を抱えた姿勢のまま口を開いた。

「ブリジット」スタイナーの両親とその弟はここで死んだ」

「はあ？」

いきなり何を言い出すのだろう。何の脈絡もなく言い出されて、クライドは思わずマーティンを睨みつける。

「エルフの魔力の実験だ。くくっ、ブリジット」スタイナーはこれを知らねえ。両親は通り魔に殺されて、弟は事故死したとか勝手に思っただがやる。傑作だ」

思考が停止した。ブリジットと初めて出会った日のことを思い出す。ナイフを構えたイノセントに向かって、ブリジットは言った。

両親は殺された、と。けれどその時、誰に殺されたかということまでは言っていないかった。

両親も、弟も、ここで死んだ？　つまり、クライドの従弟と伯母と伯父はここで殺されたということだ。怒りよりも先に衝撃がきた。「どういうことが解るか？　クライド」カルヴァート」

何がだよ、と言いかける。こんな事実を聞かされて、何を理解しろと言うのだろうか。

「ブリジット」スタイナーもてめえと同じ出来損ないの半エルフだと、俺はもうとっくに知ってるって事だ」

マーティンは笑う。出来損ないの半エルフ、その言葉にはっとして、クライドは目を見開いて硬直した。

「お前っ」

再び掴みかかると、マーティンはこの状況を楽しむように笑う。

耳障りな笑い声を早く止ませたくて、クライドは闇雲に彼に殴りかかる。当然ながらいとも簡単に振り払われて、クライドは彼の蹴りを腹部に食らった。そのままの勢いでクライドは床に倒れこみ、呼吸のできない苦しさにむせて悶える。

「ようやく気づいたか？ てめえをぶつ殺しても、代わりはいるんだよ」

「の、やるっ……」

マーティンはやにやと笑ったまま、嫌味な顔でクライドの胸倉を掴んで引き上げた。そして、そのまま勢いをつけて頬を殴ろうとしてくる。クライドは精一杯の力を振り絞り、それを避けて彼を蹴り飛ばした。二人の間に若干の距離ができる。クライドはまだ正常に戻らない呼吸に苦しみながらも、マーティンを睨み続けていた。

「ムカつく目。魚みたいだ。エルフの祖先は魚か？」

「煩いっ」

目の色に関してはお前も人のことを言えないだろう、などと言えるような余裕はクライドには残っていないかった。

マーティンの話を聞いて、彼のペースに乗せられて、本当は倒せるはずの相手に隙を見せてしまった。それが、クライドをこんなにも疲れさせた要因だ。マーティンが軽くとんと床を蹴って、助走をつけてこちらに向かってくる。クライドは彼を睨みつけたまま、重心を少し前に移す。

勢いをつけて殴りかかってくるマーティンに対して、クライドは即座に身を落として彼の腹部を狙う。マーティンの拳は頬を掠め、クライドの拳は急に止まった。

「え」

「何をなさって」

自分の手を掴んでいる華奢で骨ばった手を確認すると、レンティーノの声が聞こえるのと、仲裁に入ってきたレンティーノをマーティンが蹴りつけるのが同じだった。顔はみなくても、視界の端にマーティンの足やレンティーノが衝撃でよろける様子が見えたから、

マーティンが彼を蹴ったのだと解った。

レンティアーノがよろけた一秒後くらいに、「あつ？」マーティンの呆けた表情が聞こえた。

顔を上げる。レンティアーノはずれた眼鏡を直していた。マーティンはレンティアーノを蹴るつもりなどなかったのだろう、中途半端に足を上げた姿勢のままレンティアーノを見て硬直していた。

束の間の沈黙が流れる。

「っ、レンティアーノ！ てめえ、何で」

ようやく言葉を発したマーティンに、レンティアーノはクライドの手を掴んだままで柔和な笑みを浮かべる。

「置き忘れた本を取りに来たのです。ノエルはここにある本を、結構気に入ってくださっているようですよ。これで、私の話し相手になつてくださる方が増えました」

本棚を指差して、レンティアーノはやわらかく微笑した。この暑いのに、レンティアーノは真つ黒なスーツを着込んでいる。冷房の効いた屋内では外の暑さなど関係ないのだろうが、その格好は視覚的に暑い。

「邪魔しやがるな」

「忘れたのですか、マーティン。彼は私達の協力者ですよ」

突っかかるマーティンをやわらかに諭し、レンティアーノはそつとクライドの手を離れた。骨ばった華奢な手は意外に力が強くて、つかまれていた感覚が離された後も残った。

「下がりな、レンティアーノ。俺はこいつと決着をつけるまで」

「いい加減にして下さい、マーティン。ミンイエンもこんなこと、望んでいませんよ。実験に協力して頂くのは、クライドでなければならぬのですから」

ここでも出たのが、ミンイエンの存在だ。あの子供のどこがよくて、この人たちは彼のわがままに付き合うのだろう。クライドには到底理解できないが、マーティンは黙り込んだ。ミンイエンの力は絶大らしい。

レントイノはブリジットの存在を知らないから、クライドを利用するつもりでいるのだろう。だから、クライドだけだなんて言うのかもしれない。その方が、クライドとしてはありがたいと思う。

マーティンはレントイノの黒いスーツに目を留め、一瞬だけ不味そうな顔をした。何かと違って彼の視線を追ってみると、黒いスーツの左肩に砂っぽい汚れがついている。

「悪かったな」

マーティンはレントイノのスーツを手でぞんざいにはたきながら言う。レントイノはそんなマーティンの手をそつと掴んで降ろし、にこりと笑む。

「平気ですよ、わざと当たるようにしたのですから。このスーツも明日クリーニングに出す予定でいましたし」

「あ？ わざと？」

「貴方がすぐに攻撃をやめないことは解っていましたから」

このまるで正反対の性格をした二人が、普通に喋っていることが何だか妙だった。そしてマーティンの態度は、クライドやグレンに対するときよりも、かなり軟化しているのだ。それがクライドの知っているマーティンからあまりにもかけ離れすぎていて、思わずマーティンを凝視してしまう。

「おいレントイノ。ミンイェンはどこだ」

「ミンイェンなら、アンソニーと楽しそうに遊んでいますよ。私が見たときには、昼寝をしているグレンにいたずらをしかけていました」

「……そうか。慣れすぎだろ、あいつ」

「良いことだと思いますよ、私は」

くすくすと笑うレントイノと、すっかり表情を和らげていつもの嫌味な笑みに戻ったマーティン。二人を見て、クライドは部屋を出て行こうとした。すると、後ろからマーティンに声をかけられる。

「チツ。待て、クライド。カルヴァート」

「何だよ」

肩越しに振り返ると、マーティンが床に落ちたタバコ（既に火は消えていた）を拾い上げながらこちらを見てにやりと笑った。相変わらず嫌な、けれどなぜか彼という人物にぴたりと合った笑みである。

「続きだ」

「マーティン、私が止めた意味を解って……」

制止に入ったレンティーノを軽く一瞥し、マーティンはふんと鼻で笑う。

「二週間後、てめえが生きてたら相手してやる」

クライドとしてもこのままの状態でもマーティンと決着がつかないのは嫌だったし、マーティンもそれは同じだろう。

「おう。その時はちゃんと、決着つけるからな」

「つたりめーだろ。早くいきな、目障りだ」

相変わらずのマーティンだったが、レンティーノが入ってきたおかげで雰囲気は大分やわらいでいた。もしかしたら、普段からマーティンを抑制している役はレンティーノなのかもしれない。

クライドは二人に背を向けた。そして、振り返らず屋内に戻った。不発に終わった喧嘩のおかげで気分はすっきりしなかったが、とりあえずグレンが寝ているらしい部屋を目指す。

第三十一話 迷宮回廊

エレベーターを降りると真っ白な空間が広がっていて、自分は一
体どこから来たのかなどクライドはすぐに解らなくなった。そもそ
も、白い場所が壁なのか壁でないのか、壁に見える扉なのか、それ
すらも区別がつかないのだ。この研究員達は、何故ここで働いて
いられるのだろう。下手な迷路よりも、この研究室をひとつ探す
とか、そっちのほうに難しい気さえした。こんな最悪な労働条件は
きいたことがないとクライドは思う。

壁伝いに歩いていこうと、クライドは壁に手をやって歩き始めた。
天井の蛍光灯の数を数え、もといた場所の見当をつける。多分、ま
だ先だ。

壁に触ると、ひんやりと冷気が手に伝わってくる。その感触が気
持ちよくて、クライドは手のひらだけでなく肘の辺りまでつけて歩
いた。……と。

「わ
」

壁でないところに行き当たった。壁に見えるが壁ではない、紛ら
わしいあの白い扉だ。

クライドはそのまま、左から床に転げ落ちた。肘や肩をぶつけ、
痛みに顔をしかめる。

「クライド？」

女の子の声がした。顔を上げた。白いベッドが見えた。ベッドか
ら投げ出された、ヒールの高いサンダルを履いた足が見えた。

驚いて目を丸くした、シェリーがそこにはいた。

「……シェリー？」

白黒のボーダーで胸元に黒いレースがついたキャミソールの上か
ら、黒い七分袖のシンプルなカシユクールを着たスタイル。夏にこ
の格好は暑いかもしれないが、シェリーは多分冷房に弱いのだろう。
穿いているのは、ゴシック調で飾り紐をたくさんあしらったスカー

ト。そして、極めつけに黒のニーハイソックスだ。

クライドが最後に見たとき、シェリーはこんなファッションをしていなかった。というか、シェリーはこんな服を持っていなかったはずだ。

「クライド！ よかったっ、来てくれないかと思ってた！」

ベッドから飛び降り、シェリーはクライドに駆け寄ってくる。クライドは身体を起こし、シェリーを見下ろして首を捻る。シェリーは嬉しそうにクライドの腰に腕を絡め、それからすぐに放した。

こんな抱擁シーンをグレンに見られたら、何をされるか解ったものではないと思う。シェリーはちゃんと友人としてクライドをハグしたのだとしても、グレンの目にはどう映るのか想像に難くない。

「怪我とかしてないよな」

とりあえず、シェリーの身体に外傷はないように見えた。絆創膏が貼ってある形跡もなければ、傷口もない。

あまりじろじろ見てはいけないと思い、クライドはざっと見ただけでシェリーから目をそらした。シェリーは嬉しそうな表情を崩さないまま、クライドの格好を上から下まで見下ろしてため息をつく。「よかった、クライドも無事なんだ。……でも、ちよつと頬とか腫れてるのは気のせい？」

「気のせいじゃない。さっき屋上で殴りあいの喧嘩してきたからな」
「そんなんっ、大丈夫？」

とたんにシェリーは表情を変え、クライドの腕をとって外傷を調べ始めた。小さなかすり傷や打撲をみつければ、シェリーは泣きそうな顔になる。肘にまだ血が出ている擦り傷を見つけたとき、シェリーは小さく息を呑んでポケットに手を入れた。そして、ハンカチを出して結んでくれる。

「バカ。何やってんだよっ、こんな怪我して」

そうやって怒られると、出会った頃の彼女を思い出した。未だに昔の癖は抜けないらしく、シェリーは怒ったりするときに時々こうして昔の口調に戻った。

クライドは微笑して、大丈夫だと彼女に告げた。シエリーはきゅっと唇を噛み、不満げにクライドを見上げる。

「もう絶対怪我しないで。絶対だからね」

心配性な友達だ。クライドは苦笑しながら、はいはいと頷いておいた。

絶対、また怪我することになる。マーティンとの決着もそうだが、実験もきつと無傷では終わることができないという気がしている。何せ、この研究所で伯父と伯母と従兄が死んだとマーティンは言ったのだ。それが本当ならば、クライドにだって十分死の可能性はあるということになる。

「ねえ、グレンは？ グレンは大丈夫なの？」

その言葉に、クライドはグレンのところに戻るうとしていたということを思い出す。

「それがさ、はぐれたんだ。さつきまで一緒だったんだけど。今グレンのところに戻るうとして、ここに迷い込んだ」

「ってことは、この階にいるの？」

「そう」

シエリーの表情が、見る見るうちに嬉しそうなものへ変わっていく。彼女は本当に嬉しそうに笑い、クライドの手を引っ張った。

「早く会いたい！一緒に探そう、クライド」

「そうだな。けどな、まずその手を離さないと俺がグレンに殺される」

そういうと、シエリーはくすくす笑いながら手を解いた。そして、軽やかな足取りでクライドが入ってきたドアの方へ向かう。

「ノーチェが、自由に歩き回っていいって言ってたんだ。でも、外に出ても白い空間が広がってるだけで。あたし、怖かった」

ノーチェって誰だっけ。知り合いではなかったと思う。ここに来てから去年の旅で知った人間があまりにも多くて、クライドは聞いた名前を全て去年の記憶と照合させてしまう。

「俺も怖かったよ、初めてここに閉じ込められた時」

「クライドにも怖いものなんかあるんだ」

「当たり前だろ？」

何を言うのだろう、シエリーは。クライドだって魔力があるだけのただの少年なのだから、怖いものだってたくさんあるに決まっている。帝王だって怖かったし、燃え盛るリンドバーグ邸で閉じ込められていたときだって怖かった。いつだって怖かったけれど、そこに仲間がいたから乗り切ってこられたのだ。

シエリーと一緒に部屋を出る。部屋を出て、とりあえず右へ歩き始めてみることにした。

「クライドは強い人だよ」

「俺、強くなんかないよ。だからお前をデゼルトに誘拐させることに」

反論するクライドの言葉を途中で切り、シエリーが割り込む。

「そうだ！ 聞いてよクライド。あいつ、魔力封じのペンダントなんか持ってたんだよ。だからクライドの魔法、あんまりきかなかつたんだ」

「……そうだったのか」

「だからね、クライドのせいじゃない。あたしは無事だし、クライドが自分を悪く思うことなんて全然無いよ」

言葉に詰まった。皆こうして、クライドのせいではないと優しい言葉をかけてくれる。シエリーはそれきり何事も無かったかのように前を向いて、白い廊下を歩き始めた。

反論の続きはどう出したらいいか解らなくなったので、結局しないことになってしまった。けれど、別にもういいか。クライドはシエリーを見下ろして苦笑する。小さく、ありがとと呟いておく。

白い廊下はどこまでも伸びていた。研究員達の姿も見えないし、この研究所には窓も無いから風景で場所を判断することもできない。クライドとシエリーは壁に手をついて、小さく記されている部屋番号を一つ一つ見て前に進んでいた。

「ねえ、クライドは最初何号室にいたか覚えてる？」

「……あ」

「もしかして、覚えてないの？」

無言でポケットを探ると、ミンイェンに渡されたカードキーが出てきた。カードキーには良く見ると小さな銀色の文字でクライドと記されていて、その隣には四桁の番号が書いてあった。2082。

すぐ傍の壁に目を留めると、ちょうどここが2082号室だった。

「ここみただ」

「本当？ 開けてみて」

彼女の声に頷いて、クライドはカードキーを解りづらいカードリーダーに通した。プシュツと軽い音がして、白い壁からふわりとデミグラスソースの匂いが漂ってくる。誰かが食事をしたようだ。しかも、クライドが食べた昼食と同じメニューを。

「グレン」

声をかけながら入ってみると、煮込みハンバーグを食べていたグレンが顔を上げた。

「お、クライド…… シェリー？」

グレンは即座にシェリーの存在に気がついたようだった。ハンバーグの鉄板の上にフォークとナイフを適当に置いて、彼は立つてこちらに向かってくる。

その手にかけられていた手錠はもうない。いつ外されたのだろう、クライドが先ほど目を覚ました時には既になかったと思う。

「グレン」

彼を呼ぶ、彼女の声が震えていた。視界の隅に赤い髪がちらりと映った。

彼女は駆け出していた。クライドはその背中を、見守っていた。

「シェリー！」

早歩きでシェリーに駆け寄ったグレンは、シェリーのその小さな身体をぎゅっと抱きしめた。シェリーはそんなグレンの胸で泣きじやくり、最早言葉すら発することのできない状態になっている。

「大丈夫か、シェリー。怪我とかしてないよな？ おいもう泣くな

よ

グレンは泣きじゃくるシェリーを抱きとめ、彼女の華奢な背中を大きな手でさすってやっていた。嗚咽交じりに何か伝えようとするシェリーの言葉をさえぎって、グレンはうんうんと頷く。

「そうだな、怖かったよな。でも大丈夫だ、俺がいる。お前の傍に、いつもいるから。ほら、だからもう泣くな。泣くなって」

「っ、グレン……っ」

ちょっと困り始めたグレンに気づいているのか気づいていないのか、シェリーは尚もグレンの胸に縋って泣いていた。クライドは苦笑しながら、部屋の隅のベッドに歩み寄る。そこには、アンソニーがいた。彼はベッドにうつぶせになった姿勢で、熱心に何かを見つめている。

「トニー、何やってんの？」

声をかけたものの、返事はない。

「トニー？」

言いながら彼の手元を覗き込むと、誰かが手書きで作ったクロスワードがあった。もう半分ほど解いてあるが、そこで手詰まりらしい。

「おーい、トニー」

「ん？ あ、クライド。さっき何だかシェリーの声が聞こえた気がしたよ」

どこにでも売っている黒のゲルインクのボールペンを右手で器用に回しながら、アンソニーはのんびりとそういった。アンソニーは集中しすぎると、時々反応が遅かったり返ってこなくなったりすることがある。今は、その極端なパターンだ。

「気がしたんじゃないかってそこにいるんだけどさー、グレンと二人の世界に入っちゃったからどうしようもないんだよ」

「本当に？ シェリー、ちゃんと見つかったんだ！ よかったあ」

アンソニーは心からほっとしたようにそういった。しかし次の瞬間には洗面を作り、クロスワードに向かう。

「解らないんだ、この問題。どうしても解らない」

「クロスワードか？」

「うん。ミンイエンが作ったクロスワードだから、グレンでさえ解けなかったんだよ。ノエルはレンティーノとまだ読書中だから助けてもらえないし」

そうなのか、とクライドは納得する。グレンはこういう問題はむきになって解くほうだが、そんな彼でも解くのを放棄するなんてよほどレベルが高い問題なのだろう。そんな問題をミンイエンが作ったんだなんて、ちょっと信じられない。あの外見や性格だから、ミンイエンはそんなに頭は良くなさそうに見える。

けれど、彼は一応研究所のトップだ。人間一人を相手にする実験もやっている。ということは、相当頭が良いということになるだろう。

「ミンイエンって頭いいのか？」

そこまで結論がでて、やっぱりクライドはミンイエンのあの無邪気な笑みを思い出して首を捻るのだった。あの少年（本人は十九歳だと言いつけている）が本当にそんな頭脳の持ち主なのだろうか。「すつごく頭いいよ。だってね、三桁同士の掛け算の暗算が三秒でできるんだ」

聞き違いかと思った。三桁同士の掛け算なんていつたら、答えが十万の位までいく場合だってあるではないか。そんな計算を、たった三秒でできるなんて。クライドには無理だ。

「そりゃあ凄いな。ノエルとどっちが頭良いんだろう」

いくらノエルでも、そんな桁数の多い暗算はできないかもしれない。そう思うとミンイエンは凄い。にわかには信じがたいが、アンソニーが嘘をついている素振りもない。

「ミンイエンはディアダ語とエフリッシュ語を使えるよ。でもノエルは、言語で言ったらミンイエンの遙か上を行っている」

「良い勝負ってところか」

「そう。数学とかパソコンの知識は、それ専門で仕事をしてるミン

イエンの方が上だから」

ミンイエンは意外と凄い人間なのだとクライドは知った。三秒で暗算が出来る話をきいてから、何だかミンイエンを急に年上として認識できたような気もする。

感情の起伏が激しくて、子供みたいな感情表現ばかりする彼が、すごい頭脳を持っている。何だかおかしな話だ。そう思ってから、同じ年に大卒者がいることに思い至る。彼だって十分凄いではないか。

「まさかノエルが誰かに負けてるなんてな。あいつがそれを聞いたら、絶対勉強しだすぞ」

「うん、僕もそう思う。ノエルって意外と負けず嫌いなんだよね」顔を見合わせて笑い合い、アンソニーと一緒にクロスワードを考える。アンソニーは同じ紙を二枚持っていたので、一枚貰ってクライドもやることにした。ボールペンは近くのサイドテーブルに置いてあったので、それを使うことにする。

シェリーとグレンはまだ恋人同士の甘いひと時を過ごしているよ。うなので、クライドはアンソニーの隣のベッドに寝転んだ。そしてアンソニーと同じ体勢でクロスワードを解く。

「クロスワードはミンイエンの趣味なんだって。解くのも作るのも」

「あいつそんな趣味あったのか」
「凄いよね」

時々雑談をしながら、問題を考える。確かにアンソニーが言うとおり、これは結構難しかった。

「G、A、C、T。この四つに共通するものは？」

この問題は難しすぎて即座にパスした。実はこれは名前のイニシヤルで、グレン、アンソニー、クライド、トニーだから共通点は金髪であることだと言ってみたら、アンソニーは腹を抱えて笑い出した。

「面白い発想、僕の名前二回入ってるし！　じゃあクライド、こっちは解った？　千年戦争をはじめめるきっかけになった事件」

「エルミーンティ海域侵略だろ？」

「凄い！　ありがと、クライド」

ちなみに千年戦争とは、全世界が恐慌に陥った長い長い戦争のことだ。中心となっていたのはここエナークで、クライドの母国であるラジエルナはここに爆撃をしかけたりもした。歴史の授業ではちゃんと習うはずなのだが、アンソニーはあまり歴史に興味を持たないためか、忘れていたようだ。

クライドは砂漠に住むサソリの学名の問題につまづいたが、超電導に最もかわりが深いワードをリニアという単語で解決した。

「これ、頭使うな」

まだ解けない問題が五問ほど残っている。少し疲れてきたが、あと五問なのだから全て解きたい。隠されたメッセージはもう見えかけてきているが、意地悪なことに最後の五問全てに赤枠で囲まれたマスがある。そこを埋めなければ、クリアできないのだ。赤枠のマスがないどうでもいい問題だけ、ちゃんと解ける。このもどかしさに、クライドは苦笑しながら思考を働かせた。

はまってしまつと時間が経つのを忘れる。クライドもアンソニーも、同じ問題を何度も解きなおして答えを見つけようとしていた。グレンとシェリーはいつのまにか後ろにいて、クライドの後ろであだこうだと答えを探す議論をしている。ちなみにグレンは、食べかけだった煮込みハンバーグを既に食べ切った後らしい。

「そこはケナフじゃない？」

「いや、パルプだろ」

後ろでグレンとシェリーが議論しているが、クライドとしてはどちらとも違うと思う。文字数が合わないのだ。

「あれ、クライド今何時？」

言われて、携帯を取り出す。午前五時半を指していた。ここでは時差があるので、正しい時刻にするなら半日戻れば良い。

窓の無い研究所は、外の明かりで時間を判断することができないから不便だ。不便だし息苦しいし、一体何のメリットがあつて窓を

なくしたのかクライドには理解できない。

「五時半。……って、え？ もう？」

「凄いな。僕ら、クロスワードにそんなに時間かけてたんだ」

アンソニーはそういって、ベッドから身体を起こして首をこきこき鳴らした。疲れたのか、彼は欠伸をかみ殺しながら首筋を押さえる。クライドも腕を回して、大きくため息をついた。結局、このままでは五問が解けないままだ。

「いい暇つぶしだな。明日もう一枚作ってもらおう」

「僕もそうする！」

ベッドから降りて、クライドは伸びをする。少し休憩して水が飲みたくなったから、歩いてドアへ向かった。食堂に行けば水くらいあるだろう。この部屋には洗面台が見当たらないし、飲み物になるものは何もないのだ。

「どこ行くの？」

シェリーに訊ねられて、振り返ると彼女は不思議そうな顔でこちらを見ていた。グレンはアンソニーの解きかけのクロスワードを見て洗面を作っていて、アンソニーはといえばベッドで仰向けに大字になっている。

「水でも飲みに」

「自販機あるよ。白いカードが使えるから、そこで買えばいいんじゃない？」

「あ、じゃあ案内して」

シェリーを案内役として連れて行こうとすると、グレンはクロスワードをベッドの上に放置してついてきた。アンソニーは部屋で寝ているようだから、彼の分も飲み物を買ってきてやるとするか。

「俺も何か飲む」

「おう」

本当はシェリーの傍にいたいだけだろ、とはあえて言わずにおく。グレンはその意図に気づいたのか、決まり悪そうに笑った。アンソニーに一言言い置いてから部屋を出て、クライドはシェリーの後に

続く。

第三十二話 板ばさみ

白い廊下を歩きながら、クライドはどこまで歩いてても変わらない景色に少しうんざりしていた。けれどここは最上階だから、ほかに比べると少しは装飾がある。廊下に飾られた絵はその装飾の最もたるものだったが、白い空間に置かれているせいで非常に鮮やかに見えた。油彩絵の具で描かれた絵は、いきいきとした芝生と常緑の木々を描いたものだった。

となりを歩いているシエリーは、短いスカートを手で整えたりしながら時々グレンのほうを気にしていた。ニーハイソックスとスカートの間に、少し見える白い足が何だか色っぽい。彼女はこの格好に対するコメントをグレンに貰いたくて、彼のほうを気にしているのかもしれない。

ヒールの高いサンダルを履いているのに、彼女とグレンの身長差は確実に三十センチ以上あった。あらためて彼女の小ささを実感しながら、クライドは彼女に合わせてのんびりと歩く。

「そういえば、シエリー。何か誰かと仲良くなったって聞いたけど」
レンティーノが電話で言っていたその人が、シエリーにこんな服を提供したのだろうか。クライドは少し気になっていた。

「うん、結構色んな人と仲良くなったと思う。レンティーノとか、結構話合う人だよ」

その言葉に、グレンが一瞬で表情を変えた。彼は愕然として声を上げる。

「はあ？ お前、あんな姑息な奴らと仲良くなったのかよ。丸め込まれたんじゃないか？」

「落ち着けよ」

信じられないとでも思ったげなグレンを抑えて、クライドは彼をたしなめる。とはいえ、シエリーが本当にここの研究員と仲良くなっていたというのは、クライドとしても意外だった。てっきり彼女

のことだから、誰も寄せつけないで独りを通しているものだと思っ
ていたのに。

「姑息つて言えば姑息だけど。でも、皆一生懸命だよ。最初はここ
から出たくて仕方なかったけど、あたしはこの建物の中にも世界が
あることを知ったんだ。そしてその小さな、でも大切な世界を守る
ために皆が頑張ってるってことも」

シエリーは微笑しながら言っ立ち止まり、グレンを見上げた。
「でもね、あたしの世界はここにしかないよ」

グレンは何か考え込んでいるらしく、暫く無表情で黙っていた。
シエリーは前を向いて今までどおりに歩き出した。白い廊下を静寂
が包み、その中で三人分の足音だけが妙に空々しく響く。

先刻マーティンが言っていたことが頭を巡る。クライドが死んだ
としても、誰も一向に構わない。次のターゲットはもういる。だか
らお前は早く死ね。彼が言いたいのはそういうことだろう。シエリ
ーは、そんな彼とも仲良くなったのだろうか？

「フウ……」

グレンの、機嫌の悪そうなため息が聞こえた。彼を見上げると、
その青い瞳は憂わしげにシエリーを見下ろしていた。否、軽く睨み
降ろしていた。

どうしよう、何だかこんな空気は気まずい。

「お前さ、俺がどれだけお前のこと心配してるか解ってないだろ」

静かに呟いたグレンを見上げ、クライドは本気でまずいと察した。
グレンは完全に腹を立てているようだ。

「だから平気で、男と仲良くなってるんだろ」

「違、」

否定しようとするシエリーの声を最後まで聞かずに、グレンは静
かに低い声で彼女の声を掻き消した。

「何が違つんだよ。お前が独りで辛い思いしてると思ったから俺は
必死にここに来たのに、お前は呑気に敵と仲良くなってやがるんだ
ろ」

グレンの表情は明らかに苛立ちの色に染まっている。彼はもうシエリーの方を見ようともしていなかった。二人の喧嘩に巻き込まれるのは別に初めてではないが、ここまでグレンが静かに怒っていたことなど今までにはなかった。

沈黙が苦しい。シエリーは俯いて、涙を溜めた目で廊下をじっと見ていた。見ていて可哀想になってくる。

「あいつらに何かされてないかとか酷い扱いされてないかとか、心配した俺が馬鹿みたいだ。どうせお前、俺が来なくなったら普通に暮らしてたんだろ。じゃあこんなところ、来なきゃ良かった！」

吐き捨て、グレンは白い壁を勢い良く殴りつけて悪態をつく。シエリーはとうとう泣き出し、両手で顔をおおって肩を震わせている。クライドはどうすべきか迷ってから、シエリーの震える肩をそっと抱いた。

「おいグレン、泣かすなよ」

「ああ？ こいつにとっては、別に慰める相手が俺じゃなくてもいいんだろ？ 悪いなクライド、俺すげえ無意味なことでお前を殴ったんだと思う」

投げやりにそう言って、グレンはもと来た道に戻ろうとする。クライドはそんなグレンの腕を掴んで引きとめた。今の言い草はあまりに酷い。

「無意味って何だよ。お前にとってシエリーは必要なんじゃないのかよ」

「もうやめてクライド！」

思わぬ割り込みで、クライドは驚いて腕の中のシエリーを見下ろした。シエリーは相変わらず顔を覆ったまま、さらに肩を震わせている。口を開きかけた時、彼女は消えそうな声で泣きながら呟いた。「ごめ、もう、やめて。あたし、その質問の、答え…… 聞きたくない」

聞いていてクライドまで辛くなってくるような声だった。視線でグレンを責めてみるが、グレンは仏頂面を崩すことなくクライドの

腕を振り解いた。かちんときたが、シェリーが少しクライドにくっついてきたので、すかさず彼の目の前でわざと彼女を抱き寄せてやる。口の動きだけで馬鹿野郎とグレンを罵り、クライドは彼に背を向けた。グレンに対する、ちょっとした戒めのつもりである。

「うん、ごめんなシェリー。……グレン、もう行ったから」

少しの嘘を交えて言うと、シェリーは首を横に振りつけてしゃくりあげながら声を上げて泣いた。本当はまだ、グレンは後ろにいる。心配を感じる。

「もう嫌だっ、グレンの馬鹿」

「あいつは馬鹿だよ。お前がグレンのことを解ってない以前の問題で、あいつがお前の気持ちを解ってないからな」

「ど、しよ…… あたし、グレンに、嫌われたっ」

クライドのTシャツを握り締めて、シェリーは泣いている。そこで拭いていいよと言ってやれば、本当に彼女はクライドの服で涙を拭い始めた。クライドは苦笑して、シェリーの髪をくしゃくしゃとなでてやった。

後ろのグレンは、まだそこで立ち尽くしているようだ。彼が小さく、何か言いかけたのをクライドは聞き逃さなかった。そしてシェリーはというと、まるで幼い妹のようにクライドに縋りついて泣き続けている。

「グレン、こ、今度会ったら、きつと、まだ怒ってる」

震えてつつかえながらも、シェリーはそういった。胸の辺りに感じる彼女の吐息がちよっと熱い。なんだか居心地が悪いので、こちらで少し話をすすめようか。

「お前は何であいつにキレられてるか解ってるか？」

そろそろグレンも頭が冷えてきた頃だろうから、彼に聞かせるための意味でもこの話を持ち出した。

「レン、ティーノと、仲良くなった、から」

シェリーは蚊の鳴くような声で呟く。クライドは彼女の髪をなでて落ち着かせてやりながら言う。

「違うんだよな、それもそうなんだけど。あいつさあ、俺がお前を助けられなかった時に、俺を殴り飛ばして罵ったんだよ」

「え？」

「もしもシェリーに何かあったら、って。あいつの頭にはそれしかなかったんだ。あいつ、俺を置いてさっさとお前を探しに行った」

「っ、グレン……」

細い嗚咽を漏らし、シェリーはクライドのTシャツをぎゅっと握り締める。クライドは苦笑し、彼女の背中をさすってやった。

「それで、やっと会えたお前の反応があれじゃな。確かにさ、仲良くなることは悪いことじゃないけど。あいつにとっては殺したいくらい憎たらしい奴らと、命かけても守りたいお前が仲良くなってるんだもんな。グレンにとって、これほどムカつく状況はないわけだ」
これで全部代弁してやっただろ。そういう意味を込めて振り返ると、グレンは視線を斜め下に泳がせて苦しげな表情を浮かべていた。全く、どうしようもない二人だ。

「ごめ、なさい……」

「謝るなよ。でも、グレンの気持ちもちよつとは解っただろ」

駄目押しの一語を、わざと後ろの彼に聞こえるように言ってる。そしてそつとシェリーの身体を離して、手を引いてやった。シェリーは俯いたまま、クライドの成すがままになっている。

「さあてと、グレン。大好きな奴が目の前で男に抱きしめられてるのを見た感想は？」

「最ッ低だ」

不機嫌そうに唸るグレンの声で、シェリーがぱつと顔を上げてグレンを見上げた。その目が再び潤み出すのを見て、グレンは困ったような顔でシェリーを見下ろす。そして、長い金髪に指を通してくしゃくしゃとかき回しながら、彼女を見下ろして神妙な顔つきで告げた。

「あー、あのな。言い過ぎた。悪い」

「っ、馬鹿……」

震えながら泣くシエリーを見下ろして、グレンは助けを求める視線をクライドに送ってくる。クライドは肩をすくめ、にやっと笑ってみせてやる。グレンに対するお仕置きは、ちゃんと効果があったようだ。

「お前が泣かすから悪いんだろ。お前が守るはずのシエリーをお前が傷つけてどうするんだよ」

「もうわかってるっての。今の、俺も最低って意味だから」

グレンは八つ当たり気味に、けれどその割りに誠実そうに言った。彼は恐る恐るといった様子でシエリーの震える肩に手を伸ばして、それから大切そうにシエリーを胸に抱き寄せる。

「俺は邪魔かな。退散するよ」

彼らに背を向け、クライドは前に進んだ。スニーカーの底が特殊な素材で出来ているらしいつるつるした真っ白い廊下と擦れあって、少し耳障りな甲高い音を立てる。

「……ありがとう」

「次はないからな」

背後から聞こえた声には、振り返らずにそう返して。クライドは特に行くあてもないけれど、水を求めて歩き続ける。不気味なほどしんと静まり返った廊下だから、遠く離れてもシエリーとグレンの会話が聞こえたりした。二人はちゃんと仲直りできた様子なので、ちよつとほつとする。

「つたく」

人騒がせな二人だ。けれど、憎めない。クライドは引き返して二人に遭遇したらまずいと思い、真っ直ぐ進むことにするが、どこに向かおうかと悩んでいた。どうしようか。せめて自販機の場所くらい聞いておくべきだった。

ちよつと後悔しながらしばらく歩いていると、エレベーターの前についた。このままここにいても仕方が無いから、階を移動しようか。クライドはエレベーターの前に立ち、階数表示を見上げた。その瞬間、エレベーターの扉が開いて中から白衣姿の男が出てくる。

「あ！ クライド」

ミンイエ恩だった。

「あ。お前さ、俺らの荷物どうした？」

訊ねてみると、ミンイエ恩は一瞬きよんとして足を止めた。そして、ああ解ったという顔をしながら歩き始める。そしてクライドのTシャツについた涙の染みを見て一瞬だけ怪訝そうな顔をして、またすぐに前を向いて歩き始めた。

「忘れてた。僕の部屋に保管してあるよ。返してあげる！ おいで」
「相変わらず偉そうな態度だよな、お前」

悪態をつきつつ、ミンイエ恩の後を追う。静かな廊下には、二人分の足音と絶え間ないミンイエ恩の喋り声が響いた。

「クライド、さっきマーティンと喧嘩したんでしょ？ だめだよ、マーティンは僕の大事な人なんだから」

ぺちやくちやと風力発電や太陽光発電について語った後、唐突に出された話題がそれだった。クライドは大きくため息をついて、頭の後ろで手を組んだ。

「勝手なこと言いやがって。お前の大事な人だろうがそうじゃなからうが、俺はあいつを絶対好きになれないんだ」

あんな男なんて、極力かわりたくない人物のリストの一番上に乗るぐらい嫌だ。喧嘩するとか仲良くしろとか、そういうことは彼が相手であるときには絶対に言われたくない。勿論、実行するつもりもまるっきりない。

「またそんなこと言う。マーティンはいつも僕のために、身を粉にして働いてくれるっていうのに」

「俺のことは殺したがってるけどな」

「仲良くしてよ！ 僕、せつかく君のことちょっとだけ気に入ってきたところなのに。マーティンにもちゃんと言っというてあげるから」
「！」

「……あのなあ」

無理にもほどがある。第一、向こうもクライドを嫌っているのだ。

反論を返しかけたとき、クライドはミンイエンの部屋にたどり着いてしまう。反論は一時中断して、見えないドアを抜ける。清潔な消毒液の匂いがする、装飾のあまりない真っ白な部屋が眼前に広がった。

「だから、俺はあいつとまともに話すこと自体無理だから」

「失礼な！ そりゃあ確かにマーティンは時々、つていうかしょっちゅう卑猥だけど」

「いや、内容の問題じゃなくて」

こいつと話していても埒があかないと思いはじめたその時、クライドの目にホルマリン漬けの水槽群が飛び込んでくる。

「うわ」

条件反射で目をそらすと、視線の先に自分の荷物を見つけた。歩み寄って荷物の中身を確認してみるが、何かが盗られたり壊されたりした形跡は見当たらなかった。ほっと胸をなでおろす。

「……家族を失くした時の気持ち、君には解る？」

「何だよ、いきなり」

背中から声をかけられて、驚いて荷物を引っ張り上げながら立ち上がる。ミンイエンは白衣のポケットに手を突っ込みながら、クライドをじっと見上げていた。相変わらず長い前髪で目はよく見えないうが、前髪の間から少しだけこげ茶色の透き通った瞳が見えた。

いつになく真剣なその顔に、クライドはたじろぐ。そして、荷物を床に置いて彼の話の話を聞く体制に入った。何を言おうとしているのかわからないが、その真剣な態度に、聞かなければならないという意識が働いた。

「きつと現時点の君は、いくら考えたって解らないんだよ。だって、経験がないから」

「解らないって、お前」

それが解つたら何があるんだ。お前は何を言いたいんだ。そう続けようとしたが、さえぎられる。

「僕もマーティンもレンティーノも、家族を亡くしてる。生まれた

時からずつと一緒だった、あるいは相手が生まれた時からずつと見守ってきた、大切な人をね」

黙りこむクライドに、ミンイエンのもの言いたげな視線が飛ぶ。

「ハビは両親が家出したし、セルジとノーチエは実家ともう何年も連絡をとってない。ここにいる僕らは、家族っていうものを知らないに等しいんだよ」

彼が何を言いたいのか、クライドはまだ解らなかつた。家族がないことをクライドに愚痴っている、そういうわけではないだろう。いや、そうなのかもしれない。もとよりわからなかつたミンイエンのことが、ここにきてもつと解らなくなってくる。

「だからね、僕は最初は君たちが憎たらしかつた。だって君たち普通の人間でしょ？ 僕らは普通の人より何倍も何倍も努力して、そうしてようやく色々なものを築いているのに、君達は望まなくても色々なものを与えられてる。下さいって言ったわけじゃないのに、普通に家族と暮らしてる」

「それは間違ってる。第一、俺は普通の人間じゃない」

ようやく反論できた。早くもう一言くらい反論して、何が言いたいのかを問いたい。このままでは、何を言われるのか解らない。ミンイエンのペースに乗せられ、きつとんでもないことを言われる。けれどもミンイエンは、クライドにもう一言反論させる余地を与えなかつた。相変わらずじつとクライドを見上げたまま、ミンイエンはすぐに口を開く。

「だって君のお父さんは、ちゃんと戻ってきたよ。レンティーノのお父さんは死んだ。僕の父親は父親じゃない。もう死んだし。マーティンのお父さんはすっかり人格が変わっちゃったし、ハビのお父さんは行方不明のまま。でも君のお父さんはちゃんと戻ってきて、君のお父さんとして君の家にいるでしょ」

返す言葉がなかつた。何か反論しようという気も失せた。全く、ミンイエンの言うとおりだった。

クライドは人間ではないが、人間ではなくても普通の人間のよう

に、というよりは普通の人間として家族と一緒に暮らしている。普通の人間であるにも関わらず、彼にはそんな暮らしはない。この時点で、クライドが人間だとかそうではないだとかいうことは、論点からずれているのだ。

ミンイエンは小さく笑った。そして、ホルマリン漬けの水槽の一つにそつと手を押し当てた。水槽の中で、小さな泡がこぼりと音を立てる。中に何が入っているのかは、見ないことにする。

「僕らには何も無いんだ」

そう呟いた彼は、とても儚げで脆そうな少年に見えた。あと少しでも誰かが傷をつければ、それだけで崩れてしまいそうなほどか弱く見えた。

ああ、と納得する。彼のこんな一面を見て、彼を守りたいと思う人間が集まったのだ。だからミンイエンはレンティーノやマーティンたちに慕われているし、研究員を動かしているのかもしれない。しかし、そう考えたら、彼が『何も無い』というのは可笑しいよ。うな気がしてきた。

「いるだろ、仲間が」

そうだ。レンティーノやマーティンたちがいるではないか。それなのに、何も無いなんて言うてはいけないと思う。仲間は大切だと、彼も知っているだろう。ならばなおさらだ。

ミンイエンはにっこりと笑った。愛らしい笑みだった。

「よく言ったね、クライド。そうだよ、僕らには何も無いけど仲間がいる。でも、」

そこで言葉を切り、ミンイエンはクライドに大またで歩み寄ってきた。そして彼は、大きく息を吸い込んでからクライドの胸倉をぎゅっと掴み上げてくる。突然の行動にクライドは一瞬驚いた。けれどもすぐに、彼の理不尽な怒りに対しての怒りが湧いてくる。

一体俺が何をしたんだ、お前にそんな態度をとられる理由なんて見つからない。口にしようとした瞬間、ミンイエンが笑みを崩して思いつきり叫んだ。

「唯一あるもの、それが仲間なんだ！ だからその大切な仲間を殴つたりするような奴、僕は嫌いだよ！ 仲良くしてよ！ お願いだから。お願いだからもう、マーティンを傷つけるのはやめて！ これ以上、マーティンをどうするっていうの？ ねえ！」

この状態では最早何をいつても無駄だとすら思えるぐらいに、ミンイエンは泣いていた。そう、彼は泣いたのだ。前髪に隠れた目からは涙があふれ、鼻先が赤くなっている。

クライドはそっとミンイエンの手を離させた。何を言っているのか解らなかったから、無言でミンイエンの手を掴んだ。ミンイエンは大人しくクライドの胸倉を離す。マーティンと取っ組み合っつて少しよれていたTシャツは、ミンイエンのせいで余計によれた。

「もうこれ以上、僕から奪わないで」

ミンイエンは俯いて白衣の袖で目を拭いながら、ぽつりと呟いた。その震える声で、クライドは少し罪悪感を覚えた。

前にも思つたではないか。彼にはきつと親があり、もしかしたら友達だつているかもしれない。彼も当たり前前に人間なのだから、そついった人々がいるのが当たり前なのだ。そしてそついった人たちが悲しむかもしれないと、そう考えて殺意を抑えたではないか。それを、何だ。クライドは大切なことを忘れていた。

ミンイエンは俯いたまま泣き続けていた。クライドはどうしていか解らなかった。目の前で年上の、頭のいい青年（というより少年の風貌だが）が、子供のように泣いている。そんな現場になど、クライドは今まで遭遇したことがなかった。

シェリーやアンソニーだったら、頭をなでたりとか背中を叩いてやつたりして泣き止ますることができかもしれない。けれどミンイエンは一応年上だから、子ども扱いはやめたほうがいい気がする。「マーティンのこと嫌つてもいい。そしたら僕も君を嫌いになつて、それで終わる。でも、だからって、マーティンを怪我させるのだけは絶対やめて」

「解つた。解つたよ。だから泣くな、ミンイエン」

根負けして頷いてしまったが、既にマーティンとは決着をつける約束をしてある。マーティンのことだから、そのことは流石にミンイエンには黙っているだろう。ということは、クライドは本意だがマーティンと秘密を共有していることになる。目の前で泣いているこの青年を騙し、自分達はまた殴りあうのだ。

「よかった……」

だからこそ、彼のこんな一言にすら、罪悪感が重くのしかかる。マーティンも同じ思いでいるのかもしれないと思うと、何だか少しむかついた。何であんな奴と同じ思考を持たなければならぬのか。とはいえ、泣いている彼を残していくのは微妙にいけない気がする。クライドはまだミンイエンの隣にいた。

第三十三話 デイナー

ミンイエンの部屋から出る頃には、もう携帯の時計は夜の七時を指していた。クライドはミンイエンの部屋で携帯を充電したので、携帯が電池切れになる心配は今のところはしなくても良かった。

部屋を出たものの、ミンイェンはまだクライドにくつついていた。夕食を一緒にとりたらしい。断ろうかとも思ったが、自分ひとりでは部屋に戻れなくなってしまうだろうから大人しくミンイェンと一緒にいることにする。

異常なまでに仲間に対する執着心を見せ、クライドにマーティンを傷つけないよう懇願した彼だが、こういう時に一緒に夕飯をとろうとは考えないようだ。

さっきまで震えて泣いて辛そうにしていたのに、今はもういつものどりのミンイェンが、やっぱり子供のように見えて仕方ない。

「今日はね、僕のためにすごく腕の良いシェフが来てくれるんだ。いいでしょう、とでも言いたげな彼に、クライドは苦笑を返した。

「ふうん。肉料理フルコース？」

「ううん。僕、肉食べられないんだよね。匂いとかだけでもう駄目」

「意外。俺ずつとお前が肉料理ばっか食べてるガキだと思ってたから」

「変なの！ 何その先入観」

彼は始終楽しそうな笑みを崩さなかった。つい先ほどクライドのことを嫌うとまで言った彼が、何だか妙に懐いている気がする。ミンイェンは一体何を考えているのだろう。今のこの態度は、最初にした電話での意地の悪い態度とは最早別人だ。

「そういえば、ノエルとトニーは？」

訊ねてみると、ミンイェンにはっこりした。東洋系の幼い顔立ちでそんな顔をされると、彼がどんどん自分より年下に見えてくる。

「皆呼んだから、先に食堂にいると思うよ。あ、ごめん。グレンと

シエリーはセルジたちとダブルデートだった」

「何だよそれ」

「うーん、シエリーとノーチエの希望なんだよね。セルジとグレンはあんまり乗り気じゃないみたい」

「そりゃあそうだろう。特にグレンは、あんな喧嘩の後なのだ。二人きりになって、ゆっくりディナーにしたいと思っっているに違いない。」

そして言葉から察するに、あの美容師志望のセルジにはノーチエという恋人がいるのだろう。だから髪型を変えたのかもしれないと、クライドは漠然と思う。違うかもしれないが。

「僕ね、きつと一生独身だよ」

唐突に何を言い出すのだろう。クライドは一瞬訝ったが、すぐに頷いた。

「そうだろうな」

ミンイエンには、おそらくこの先彼女すらできないだろう。こんなところに閉じこもって日夜研究ばかりしているのだから、出会いもないだろうし。

「クライドもそう思う？ だって、ねえ。僕の芸術品、理解してくれる女の子ってなかなかいないよ」

「なかなかっていうか、ゼロだよ」

「万が一そんな女の子が現れたとしたら、ちょっと敬遠したいかもしれない。クライドはそう思って、ミンイエンを見下ろして苦笑した。」

「き、きつといるもん。どっかの研究所に行けば」

「世界中どこを探しても、ホルマリン漬けた芸術だとか言いだす人間はお前の他に見つからないと俺は思うけど」

「からかい口調で言いながら、クライドは食堂に足を踏み入れた。デミグラスソースをふんだんに使ったハンバーグの匂いがふわりと漂う。すると、ミンイエンがぴたりと足を止めた。」

「う」

ミンイエンは白衣の袖で口を押さえて、それきり無言になる。どうやら、この匂いにやられたようだ。彼は本当に肉料理がだめらしい。そのままミンイエンはその場で吐きそうになっているから、クライドは慌てて彼の背中をさすった。

「お、おい。吐くなよそこで」

今にも戻しそうな勢いで時々身をぐつと曲げるミンイエンに、クライドは心持ち焦りながら彼の背中をさすり続ける。

「っつ、やばい、気持ち悪い」

「おいおい、大丈夫かよ。空気清浄機とかないのか？」

「僕の指定席には、ちゃんとある」

「じゃあ案内しろ、ほら早く」

ミンイエンは黙って片手をあげ、入り口から見て一番奥を指差した。彼の指差す方向には、ノエルとアンソニーが既にいた。しかも、レントイーノとマーティンまで一緒にいる。レントイーノが不意にこちらを見て、ミンイエンとクライドの存在に気づいた。

「大丈夫ですか、ミンイエン！」

レントイーノは血相を変えて駆け寄ってくる。周りの研究員もどやどやと押しかけてこようとしたが、レントイーノは鋭く制止の声を投げかけて彼らを止めた。研究員達はその場でぴしりと動きを止め、レントイーノとミンイエンをじっと見ている。

「レントイーノっ、気持ち悪いよー」

「……匂いにやられてしまいましたね。全く、貴方は無防備すぎます。ここは食堂ですよ」

ミンイエンを近くで見て、ほっとしたように彼の背中に手をやりながら、レントイーノは微笑している。そしてクライドに目で一礼して、ミンイエンを席まで移動させる役を代わってくれた。

遅れてここに駆け寄ってきたマーティンは、まずはクライドを怒鳴りつけた。

「おい、クライド！カルヴァート！ てめえミンイエンに何を」

「肉の匂いだ、俺のせいじゃない」

「マーティン、ミンイエンのがいるのですよ。喧嘩は謹んで下さい」
「チツ」

レントイーノにたしなめられたマーティンは、不機嫌そうに舌打ちをしてクライドから目をそらした。首の後ろで括った青い長い髪が、さらりと波打つのが視界の端に映る。

クライドも彼から目をそらし、まだ気分が悪そうにしているミンイエンをちらりと見た。レントイーノは少し早歩きで、ミンイエンを空気清浄機があるという席までつれていく。

「クライド、遅かったね」

「うん、ちよつとな」

レントイーノの後をついていくと、既に席についていたノエルに声をかけられた。ノエルはテーブルの上で細く骨ばった指を組んで、少しだけ心配そうな面持ちでクライドを見ていた。

他のテーブルにはない装飾が、このテーブルにだけ施されていた。高そうなレストランで良く見る真っ白なテーブルクロスと、火のついたキャンドル。そして、必要性もないだろうに呼び鈴まで備えられている。

「うー、気持ち悪かった。油断してたよ」

席に着くなりそういつて大きく深呼吸するミンイエンのせいで、その高価なムードも台無しなのだ。ミンイエンの隣に立ったレントイーノは、苦笑しながらミンイエンの背中をさすり、彼の隣に腰を降ろした。

現在、三人ずつ向かい合う形で座ることになっている。クライドは一番奥の、ミンイエンの前の席に座った。ノエルはもとからレントイーノの前に座っていたし、アンソニーもマーティンの前に座っていたから、ここしか場所が空いていなかったのだ。他に場所が空いていたとしても、クライドはここに座ったのだろうか。

「ミンイエン、大丈夫？」

「僕ね、肉料理が駄目なんだ」

「ええっ、本当に？」

すっかり仲良くなってしまう様子のミンイエンとアンソニーは、その調子で料理の好き嫌いについて話し始めた。そんな彼らを見て微笑しながら、ノエルは組んでいた指をそつと解いた。

「聞いたよ、クライド。クロスワードをやっていたんだってね」

「ああ。難しく、残り五問解けなくて」

「アンソニーはその問題を覚えていなかったんだ。君は、問題を覚えてるかい？」

そういわれて、記憶を掘り返してみる。砂漠のサソリは正式名を忘れたので学名も答えようがないだろう。けれど、あのイニシャルの問題なら覚えている。

「G、A、C、T。この四つに共通するものは？」

「DNA塩基」

即答。クライドの言葉が終わると同時に、ノエルは答えを口にしていた。

「は？」

思わず聞き返してしまう。クライドとアンソニーが長い時間をかけてじっくりと考えた問題を、ノエルは聞いた瞬間理解して答えてしまったのだ。純粹に驚く。

ノエルはにこりと微笑して、解いた指を再びテーブルの上で組んだ。あまり行儀の良い姿勢とはいえないかもしれないが、それでも何だかノエルはしゃんとして見える。

「この四つは、DNAの塩基。つまり、DNAの構成成分だよ。アデニン、チミン、グアニン、シトシンでしょ」

明瞭な声で説明された。クライドはただ、そうなのかと驚くばかりだった。だから同意を求められても困る。

しかし、ノエルの向かいに座ったレンティーノは「ご名答です」なんて言いながら軽く手を叩いている。なんでこいつも答えを知っているんだ。何だか、ちよつと置いていかれた気になった。

しかし、ここは研究所だ。頭の良い人間ばかりが集まっていて当然なのだ。周りが皆ノエルになったと考えても、間違いではないよ

うに思う。

「じゃあ次。コランダムにチタンや鉄が混じってできた鉱石は？」
訊ねてみると、今度はノエルは即答しなかった。けれど答えを思
い出したのか、ほんの少しだけ考えてから何か言いかける。

「サファイアだろ。この国では、九月の誕生石だ」

ノエルがサファイアの最初の音を発音しかけた時に、別の声が重
なった。声の主はマーティンで、彼は空になったタバコのパツケー
ジを握りつぶしながら、吸殻を携帯灰皿に擦り付けて消している。
マーティンは新しいタバコをポケットから取り出してパツケージを
開けたが、レンティーノにそっと制止されて渋々ポケットに戻す。

自分がわからない問題を彼が解いたことが、クライドには少しだ
け不満だった。しかし、あとの殆どで意外だと感じていた。そして
ほんの少しだけ、凄いとも思う。こんな不真面目そうな彼でも、そ
うだ、ここにいるということは一応研究員なのだ。

「テッドの目と同じ、矢車草色をしてる。この色は嫌いじゃない」
長い髪を片手にひとふさ取り、毛先をいじりながらマーティンは
言う。何となくそのテッドというのが、イノセントが殺したと言っ
ていたマーティンの弟のような気がした。あくまで気がしただけだ
が、これは多分高確率でそうなんじゃないかとクライドは思う。

彼のそのまるで独り言のような呟きに、レンティーノがぴくりと
反応した。どうしたのだろう。

「マーティン」

何か言いたそうにするレンティーノに、マーティンはいつもどお
りの嫌味な笑いで応じた。マーティンはクライドの方をわざと見な
いようにしている様子だったので、クライドも仏頂面でそっぽ向く。
それきり、レンティーノとマーティンのやりとりで二人がどんな
顔をしているのかは解らなくなった。

「てめえは琥珀しか思い浮かばねえな。ミンイエンはオプシディアン黒曜石か」

「良く知ってらっしゃいますね。鉱石の勉強などなさっていたので
すか」

「いや、違う。宝石店やつてた女から昔聞いた」

ふう、と軽く息をついて、クライドはノエルを見た。彼は先ほどの問題をマーティンに先に答えられてしまったことに対して、あまりダメージを受けていないように見えた。彼はまったくいつもどおり柔らかな笑みを浮かべ、眼鏡を外して拭いたりしているのだ。クライドに比べたら、結構大人な対応だと思う。

けれど、ノエルがこういう知識面のプライドを突かれたとき、どう対処してきたかは今までの生活でよく見ている。彼はそういう時、自室からあまり出なかった。自室、それはつまり図書室。要するにノエルは、自分の知らない知識を誰かから持ち出されたとき、ちよつとだけ対抗心を見せて勉強を始めるのである。

彼は何事もないような素振りを周りに見せておきながら、実は膨大な知識を仕入れて身につける。そういう風にして、ほとんど賢くなっていく。知識面のことに関しては特に負けず嫌いな彼の性格は、実は意外と人に知られていない。いつも一緒のクライドたちだからこそ、そんな彼を知っているのだ。

「携帯、電池の残量は大丈夫かい？」

「ああ、さつき充電した」

「そう、なら良かった」

いつも通りの柔らかな笑みを浮かべつつ、ノエルは眼鏡をかけた。

少しだけ視線をそらしてテーブルを見ていたノエルだが、やがてピントが合ったのか顔を上げた。その刹那。

「お待たせしました。まずは食前酒からどうぞ」

テーブルの端の方から、低い落ち着いた声が聞こえた。体中の血がさあつと抜けていったような気がした。ここで出会うだろうとは思っていたけれど、まさかこんなタイミングで出会うとは思ってもなかった。

「ハビ、さん」

小さな銀のワゴンにグラスと高級そうな酒のボトルを乗せて運んできた彼は、クライドを見下ろして微笑した。

「久しぶり。元気そうだね」

そういうハビは、去年と全く変わらない笑顔でクライドを見ていた。クライドはまじまじとハビを見つめる。何か言おうとしても、言葉が出てこなかった。これから何を言いたいのか、何を言うべきなのか、クライドは解らなくなっていた。それほど、混乱は強かった。

黒い短髪に二メートルは超しているであろう長身、カフェ・ロジエッタの刺繍入りベスト。今日は、蝶ネクタイの色が臙脂ではなく黒だった。前から気づいていたが特に気にならなかった左耳の三つのピアスホールには、長さが違う十字架のチェーンピアスを通してある。ハビは去年出会った時と全くと言っていいほど変わらない風貌だったが、表情は何時にもまして嬉しそうだった。

「ふふ。僕のためにきてくれた、すっごく腕の良いシェフだよ。本当はカフェのマスターだけど。今日の気分は高級レストランなんだ！ あ。安心してね、このお酒、アルコール弱めだから」

ミンイエンは上機嫌で言った。その言葉が終わるか終わらないかのうちにハビを見上げ、アンソニーはしげしげと彼を眺めている。その無様な視線を笑顔で受け止め、ハビは長身を緩やかに屈めて優雅な一礼をした。なかなか様になっている。

「気分って」

気分によって、ハビが作るものやこのテーブルの様子もころころ変えられるということだろうか。だとしたら、この研究所内でのミンイエンの地位はまるで王様だ。

「時々ジャンクフード。カフェのときもあれば、普通のファミレスの気分だったりもする！ あと、お祭りの露店とか。家庭料理の気分もあるかなあ」

にこにこ笑いながら、ミンイエンは「ねっ」とハビに同意を求める。ハビは彼に笑い返ししながら、空のグラスをミンイエンの分から順に置き、ボトルのコルクを抜く。ぽこん、と良い音がして、ボトルから泡があふれ出した。手近な場所にあったマーティンのグラス

をとり、ハビはそれに綺麗な淡い黄白色の酒を注ぎ始める。

「高級料理って言っても、所詮は気分だよ。ミンイエンも時々マナーできてないし、そんなに硬くなることはないから。高そうに見える料理でも、実際にかかっているのは材料費だけだから安上がりだし」

壁際でない方のグラスから順に食前酒を注ぎながら、ハビはこりと笑った。細長いグラスに注がれた酒は、しゅわしゅわと音を立てながら煌く泡を出した。

ハビの言葉は確かに自分に向けられた言葉だったが、クライドはまだ何を話したらいいか解らないままだったので黙ったままでいた。ハビは苦笑し、ミンイエンに小さく手を振って厨房へ戻っていく。

レンティーノがグラスを取り、そっと持ち上げた。それを見て、ノエルも自分のグラスに手をかける。遅れてクライドとアンソニーもグラスを持ち、ミンイエンがあつと気づいた顔をして目線の高さまでグラスを持ち上げた。

「乾杯！」

この雰囲気にはこれはないだろうというような、元気いっぱいの声だった。クライドは苦笑しつつも、彼の乾杯の声に続いた。唯一乾杯に参加していない（けれどミンイエンにも気づかれていない）マーティンは、グラスに口をつけて一息で食前酒を呷る。優雅さの欠片も無い。

レンティーノとノエルは、二人だけ雰囲気エレガントだった。話す声のトーンやグラスを持つ角度さえ優雅で、気品にあふれている。特にレンティーノは、マーティンの隣にいるから余計に気品たっぷりに見える。何となく暇になったクライドは目の前のミンイエンと顔を見合わせ、向こうが笑ったので意味もなく笑い返した。

「これって全部飲んじゃっていいの？」

「ああ。食欲亢進効果があるらしいからな」

アンソニーとマーティンがそんな会話をしている。見れば、マーティンの表情はクライドに対するときと比べて大分やわらかくなっ

ていて、アンソニーはそんな彼と普通に接していた。

「ねえねえ、マーティンっていくつ？」

「勝手に俺の名を呼ぶな。……二十三」

「えー、十八くらいに見える」

「ははっ、てめえどんな目をしてやがるんだ？ 何だ、その微妙な数字」

どうやらアンソニーは、あのマーティンと上手く会話できているらしい。少し拍子抜けした。

視線を前に戻すと、ミンイエンが前髪を指で梳かしながら声をかけてくる。

「お酒だめなら食後酒抜くけど、どうする？」

「いや、大丈夫」

言いながら酒に口をつけると、口いっぱいには葡萄酒の香りが広がった。どうやらこれは、白葡萄酒の酒らしい。ミンイエンはぶかぶかした袖から出た指をグラスの細い脚に絡め、グラスの中身を楽しそうに眺めた。

「はやくリイと一緒にディナーしたいなあ」

うつとりと呟くミンイエンを無視するのは気がひけて、クライドはどう声をかけるべきか迷い、

「そうなるといいな」

何となく感情の抜けた声で、そう答えた。

二週間後のことを考えるとなんとなく胃が痛い。そして、現在厨房にいるハビのことを考えると更に胃が痛い。目の前にいるこの少年の企てた、無謀なほどのプロジェクトの失敗を考えると、胃だけでなく頭も痛い。

とにかく逃げ切らなければ。何とかうまくやりすごさなければ。終わったらリヴェリナに戻るのだから、頑張らなければ。クライドはそう考え、気品もへつたくれもなく食前酒を一気飲みした。

第三十四話 触れる明日

ディナーを終えたクライドたちは、ミンイエンの部屋に寄って荷物を持ってから部屋に戻った。彼らとは既に別れ、クライドはノエルとアンソニーと一緒に真っ白な廊下を歩いている。この先をあと少し歩けば、部屋に戻る事が出来るはずだ。

肉料理が嫌いなミンイエンのために、料理は前菜からメインまで全品野菜を中心にしたメニューになっていた。一つ言うとするなら量があまり多くなく、それはおそらくミンイエンが小食だからだろうとクライドは察していた。

文句なしに美味しい料理を頂いた訳だが、クライドの気持ちは晴れやかでなかった。それは当然、その料理を作るシェフがあの手だっただけだからだということに他ならない。

「クライド、あんまり喋らなかつたね」

「そうか？」

アンソニーに不思議そうに言われ、クライドは首を捻る。マートイン以外の人は、それなりに喋っていたと思うのだが。

あの早食いをすっかり封印したノエルは、落ち着いて静かに料理を食っていたが、クライドが声をかけると「紳士のたしなみだよ」と冗談めかした口調で言ってくれた。それからクライドたちは全員でクロスワードの問題を思い出して解いたり、新しい問題の候補を挙げたりしたのだから、クライドが喋らなかつたというのは少々おかしい話だ。

アンソニーは何か言おうとしてためらい、少し迷ったあとにやはり言うことにしたのか、顔を上げた。

「ハビさんと」

クライドは足を止めた。アンソニーは不安そうな顔をして俯いて、恐々とクライドの顔を窺っている。

「ごめん……でも、クライドはハビさんのために今回の旅に出た

んでしょ」

「ああ、解ってる」

「ぎこちない言い方になってしまったが、怒ったように言ってしまうよりましだ。クライドはアンソニーを見下ろして、なるべく表情を和らげるように努力しながら続けた。

「解ってるんだ。けど、まさかこんな状況でこんな風な再会をするって思ってたなくて」

嘘だ。それも確かにあるのだが、クライドはハビと話すのが怖い。こんな風に普通に暮らしているハビに、あんな人格が眠っていると見えなくなってくるのだ。クライドが声をかけることによって、あの人格が目覚ましてしまったら困る。そしてレイチエルのことを話して彼に嫌がられたら、クライドが旅に出てきた意味はなくなるのだ。それが怖かった。

白い廊下は無言の静寂に包まれ、クライドとノエルが立てる足音だけが響いた。アンソニーは立ち止まったまま、何か考え込んでいるようだった。

「早くしろよ、トニー」

振り返って言うと、白い廊下に取り残されたアンソニーは一瞬だけ何か決意したような顔をした。

「ねえクライド、あのね」

何を言われるかと身構えると、アンソニーの表情に不安がよぎった。

「……やっぱいい。何でもない」

「言えよ。気になるだろ」

途中で話を投げ出したアンソニーに、少しだけ苛立つ。というかこの感情は、多分どうしようもない自分に対しての苛立ちだ。だから、クライドはアンソニーに八つ当たりしてしまっているのだろう。そんな自分に更に苛立つ。

「クライド、アンソニー。ついたよ」

ノエルのやわらかな声に救われた。クライドはノエルに頷いて、

アンソニーを軽く手招いた。アンソニーは黙ってクライドに従い、何となく三人で無言のまま部屋に入った。部屋にグレンはいなかった。

ベッドに入って携帯をいじっていると、アンソニーとノエルもそれぞれベッドに入った。全員が無言だった。自分のせいだと考えると、どうしようと不安に思う反面、苛立ちも募った。

「クライド、ノエル。僕、もう寝るね」

「おやすみ、アンソニー」

「おやすみ」

ついに沈黙に耐え切れなくなったのか、アンソニーはクライドに背を向けて布団に包まった。ちよつと悪いことをした気分になった。ノエルの方を見ると、彼は枕元に本を開いて読みながら、アンソニーの解きかけのクロスワードを解いていた。

「できた」

「へえ、難しくなかったのか？」

「ミンイエンの出題は、僕の専門分野が多いからね」

「そっか」

会話があまり続かない。クライドは携帯を閉じ、小さくため息をついた。ノエルとは、前にもこんな風に会話が続かなくなったことがあった。しかも、あれも確かクライドのせいだった。

「ごめん。俺、もう寝る」

結局、寝るといふ逃げを使った。ノエルは多分クライドの考えを理解しているから、仕方なさそうな笑みを浮かべた。

「それじゃあ、携帯を貸してくれないかい？ サラと話したいんだ」

「国際電話のかけ方、メニューにあるから見とけ」

「解ったよ。ありがとう」

左隣のノエルに、携帯を渡す。ノエルは小さく礼を言ってクライドの携帯を受け取り、もう暗記しているのか電話番号を入れ始めた。クライドはそんな彼を見ながら枕に頭を預け、欠伸をひとつつした。ノエルが柔らかな優しい声で、サラの名前を呼ぶのを、意識の向こ

うの方で聞いた。

気づいたら、隣のノエルはもういなかった。起き上がってみると、枕元に携帯があった。開いてみると作成中のあて先がないメールが画面に出ていて、そこにはノエルからの伝言が書いてある。読んでみることにして、クライドはメール本文をスクロールした。

「サラのお兄さんに怒鳴られちゃったよ。うちの妹に手を出すな、ってね。完全に嫌われちゃってるなあ。あ、大丈夫。ちゃんと彼女と話してきたよ。絶対帰って来いって言われた。グレンとアンソニーには黙っておいて欲しいけど、ちよつと僕ら良い雰囲気になつたよ。うん…… 正直に言うとな、告白された」

そこまで読んで、自然と微笑が浮かんだ。クライドは更にスクロールして、本文を読み進める。長い伝言だった。

「ちよつと格好悪いよね、こういうのは男の方から言うべきだと僕は思うんだよ。というか、僕の場合は告白すつ飛ばしてプロポーズになつちやうけど。でも…… 怖くてね。結局、結婚前提で、とはいえなかった。サラはきつと困惑するだろうから、しばらくは黙っておくつもり」

そうか、と頷く。見ている相手もないのに頷いてしまったことにちよつと恥ずかしくなったが、幸いアンソニーは隣のベッドで寝たままで、見渡してみればいつ戻ってきたのかグレンもすつかり眠っていた。

今度ノエルに会ったら、今後どうするのか是非聞いてみたい。そう思いながら何度か画面をスクロールすると、ついにこの長い伝言にも終りが見えた。

「今度はサラから電話をくれるって。サラ、君やシエリーとも話したがっていたよ。あと、この部屋。何も無いように見えて、実は入り口から見て左の壁にカードリーダーがあるんだ。それを使うと、洗面台とかバスルームに行けるよ。僕はちよつと屋上に行くね」

メールの作成時刻は、六時三十一分。今からちよつと三十分前に

なっていた。彼がこの時間に戻ってこないということは、この先長い間戻ってこない可能性が高いとクライドは思う。大方、レントイノと読書でもしているのだろう。

携帯をたたんで枕元に放り投げ、クライドはベッドに仰向けになった。何となく暇だ。どうしようか。そう思った矢先、電話がかかってくる。大音響で響くカルツァⅡフランチェスカに、隣のアンソニーがのっそり起き上がって目を擦った。

「もしもし」

突然の電話で心持ち驚きながら、クライドは電話に出た。アンソニーが怪訝そうにこちらを見て、大きな欠伸をしている。

「おはよ、クライド！ クロスワードできたから取りに来て」

電話の相手は、朝から物凄くテンションの高いミンイェンだ。クライドは欠伸をかみ殺し、楽しそうなミンイェンに低い声を返した。「場所は」

「僕の部屋！ すぐ来て！」

それだけ言って、ミンイェンは電話を切った。クライドはベッドから降り、ノエルの伝言にしたがってカードキーをカードリーダーに通した。驚いたことに、この仕切り壁はちゃんと動いているのが見える。普通なら当たり前なのだが、この研究所にしてはかなり珍しいタイプだ。少しずつ、洗面台とバスルームが壁の向こうに出現するのが見える。

クライドはちよつと新鮮な感動を味わいつつ、洗面台で顔を洗った。何だか、普通に家にいる気分だ。顔を洗いながらふと顔を上げて洗面台にグリップが半透明の歯ブラシが四本と歯磨き粉が一本置いてあるのに注目し、クライドは驚いた。そういえばここは研究所でここに来てからこんなに生活感のある風景に出会うのは久しぶりだ。うかつだったが、クライドは頭の隅で、ここに歯ブラシがあるのは当たり前だと認識していた。

歯ブラシの色は四種類あった。グリーンは既にノエルが使ったようだった。あとは赤と青と橙の三色だったので、クライドは青を手

に取った。ミンイエンには、クライドたちの色の好みまで知られているのだからかとふと思っ。

「クライド、今の誰」

眠そうな声に、歯ブラシを口に入れたまま振り返る。アンソニーはベッドの上に長座して、寝癖のついた金髪をくしゃくしゃと掻き回していた。

「ミンエン」

口に歯ブラシを入れているせいで変な発音になったが、アンソニーは理解したらしかった。

「僕、もう一回寝るね」

「おう。おやすみ」

クライドが口をすぐ頃には、アンソニーの声がもう聞こえなくなっていた。振り返らなくても、鏡で後ろの風景がよく見える。アンソニーは、布団もかけずに大の字になって寝ていた。グレンは壁際を向いて、心持ち丸くなるような感じで寝ている。

クライドは、荷物の中から着替えを取り出してシャワーを浴びてそれからミンイエンの部屋に向かった。

部屋を出てすぐに、ノエルとばったり出くわした。

「ああ、クライド。おはよう」

「おはよう、ノエル。二人ともまだ寝てるけど」

ノエルは部屋に入るのをやめ、クライドについてくる。白い廊下を独りで歩くのには何だか抵抗があったので、クライドにとってこれは少し嬉しいことだった。

「どこへ行くんだい？」

「ミンイエンのどこ。クロスワード取りに行く」

「僕もいくよ。これからすることないしね」

「ああ。じゃあ一緒に行こう」

彼は相変わらず、長袖のシャツを着ていた。今日は彼には珍しく、色つきのシャツだ。水色のシャツに、黒のズボン。相変わらず、ネクタイでもすればビジネスマンに見えそうなスタイルである。

「昨日のこと、読んだ」

そう言ってみると、彼はちょっと幸せそうな笑みを浮かべた。

「いずれグレンたちにも言うけど、まだ黙っておいてくれないかい？」

「ああ、解ってる。良かったな、ノエル」

「うん。これからも色々相談するかもしれないけど、そのときはよろしく」

「それはお互い様だろ」

笑い合い、ミンイエンの部屋の前で立ち止まる。軽くドアをノックしようとする、ミンイエンの声の上から降ってきた。

「知ってた？ インターホンつきなんだよ、僕の部屋」

「全く知らなかったな。使い方も解らない。とにかく開けてくれ」
返事のかわりにドアが開く。空気の音とエタノールの香りがして、目の前の壁を通り抜けられるようになる。いまだにこのシステムがよく解らないが、セキュリティを確保できる代わりに使いにくい構造だとは常に思っている。

壁を抜けるとミンイエンがいた。ミンイエンは昨日とは違う緑と黒のボーダー（どうやら昨日のものとは色違いらしい）の長袖シャツを着て、白衣を椅子にかけてそこにいた。

「えっとね、クライドとトニーの分がこれね。行き詰った時用に二枚ずつ刷ってあるよ。で、ノエルのは難しい方。ノエルも二枚あげるから、出来たら見せに来て！」

ミンイエンは何の変哲も無いクリアファイルから、コピー用紙を六枚取り出した。そして、四枚をクライドに渡す。残りの二枚を受け取ったノエルは不敵な笑みを浮かべ、ミンイエンを見た。

「すぐ解くよ。ここでやっていっていいかい？」

「ヒントは三回までだよ」

「要らないよ。大丈夫、全部解ける」

にっこりと笑うノエルは、多分今のところ無敵だとクライドは思う。ノエルが微笑しているのはいつものことだが、今日はその意味

が違うのだ。とことん幸福の絶頂にいるノエルだから、クロスワードの一つやふたつ、彼が言うとおりにすぐ解けるとクライドも思う。「えーっ？　じゃあもつと難しいの作る！　それ解いてる間に作るから待ってて！」

ノエルが対抗意識を燃やしていたのは解っていたが、ミンイエンもそうだったとは。ミンイエンは言動や性格を少し見ただけでも、こんな風に対抗心が強そうだと解る。けれどクライドには、何となくこの状況が不自然に思えていた。いや、競うのがミンイエンとノエルの組み合わせだということが有り得ないと思っていたのだ。

多分、こういう直接的な対決現場が実現してしまったのが違和感のもとなのだろう。

「じゃあ俺、部屋戻るよ」

「僕はここにいるよ。お昼時にでも、また会おうね」

ノエルは楽しそうに言って、ミンイエンからボールペンを受け取って問題を解き始める。クライドもそんなノエルを見て楽しいと思いつつ、彼に片手で手を振ってミンイエンの部屋を出た。まっすぐ部屋に戻ろうと、クライドは元来た道を辿る。

部屋に帰ると、グレンが眠そうに目を擦りながら洗面台で歯を磨いているところだった。彼はこちらに気付き、歯ブラシをくわえたまま微笑する。

クライドはベッドの近くのサイドテーブルに、三枚のクロスワードを置いた。一枚は自分で持ち、ボールペンも近くに置いてあったものを取る。グレンは歯ブラシを片付けてクライドの側によって来ると、クロスワードを一枚取った。

「へえ、ミンイエンの新作？」

意味もないのに紙を裏返してみながら、彼は不敵に笑む。

「ああ。グレンもやるか？」

「やる。ペンどこだっけ」

彼は周りを見回し、アンソニーの枕元からボールペンを取り、早速何かを書き込み始める。

「昨日どうだった？ ダブルデート」

「セルジと俺が意外に盛り上がった、シェリーとノーチエが驚いた」

「へーえ、そりゃ俺としても意外」

グレンは、だろつなと笑った。クロスワードの欄外に文字を書きながら、彼は長い金髪を指に絡めて難しそうな顔をする。

「そうだ。今日、あいつに髪切ってもらおう約束してんだよな」

「そうか、あとはトニーとシェリーだけだな。俺とノエルは去年切って貰ったから」

笑いながら言ってみると、グレンもにやりとした。けれどクロスワードに目を落とした途端にまた唸り始める。

「うー、頭痛い」

そう言っただけで放棄するのかもしれない、グレンはまたすぐにボールペンを手に取って格闘する。そんな彼を見ているのは面白かったが、今日はまだ外の景色を見ていない。クライドは、屋上に行くことにした。

「俺、屋上行くよ。外の景色みたい」

「あー、俺も後で行く」

彼の『後で』はきつととんでもなくあとでになるだろうと思いつながら、クライドは再び部屋の外に出る。何となく、あの閉鎖空間に慣れてしまいたくなかった。

使うなら、エレベーターより階段の方が良いとクライドは思う。

ドアが開いたらすぐに空が見えるよりも、だんだん空に近付いていく方が良い。だからクライドは、階段に向かうことにした。

人がいない廊下を、クライドは無言で歩いた。ここを歩いていると、自分が本当にこの世に存在しているのかどうかを疑いたくなってしまうから怖い。自然と早歩きになる。

早歩きで白い廊下を抜けようとしたとき、不意に腕を捕まれた。

「うわぁあ！」

思わず情けない声で叫んでから左後方を振り返ると、左腕が壁か

ら突き出した手に捕まれているのを見てしまった。一瞬固まって身動きがとれなくなる。その一瞬の隙について、その手はクライドの腕を思いっきり引つ張った。

思考停止状態のまま、クライドは壁にぶつかりそうになる。手を出して庇おうとすると、壁はまるで存在しないかのようにクライドを通した。きよとんととして正面を見ると、クライドの腕を掴んでいたのは生身の人間だったということを理解できた。とんでもなく高い位置に顔があるので、こうして近寄ると目を見て話すのが困難である。

けれど、あえてクライドは彼の顔を見た。というか、一度目を見たらそれになくなってしまったのだ。

「そこを歩いているのが見えたからね」

悪びれた様子もなく、ハビは言った。彼が着ていたのはカフェ・ロジエッタの制服で、見渡してみるとこの部屋はシンプルではあるが生活感のある部屋だった。整えられたベッドと綺麗に片付けられた机も、真っ白いだけの部屋にあるものとは違って、ちゃんと誰かが使っているものだという感じがする。綺麗に片付けてはあるが、完璧に新品のように綺麗にされている訳ではないから、そんなことを思うのかもしれない。

「……えっと、何か用ですか」

元はといえば、クライドの方がハビに用があって旅に出てきたのに。何でこんなとんちんかんな発言をしているんだろう。一瞬後悔するが、それでもクライドはハビに本題を切り出すことを恐れていた。

「紅茶、飲んでいかない？ 今日休みをとって良いって言われたけど、何だか落ち着かなくて今からカフェに行こうかと思っていたところ」

細い黒のネクタイを締めながらハビは言い、クライドを笑顔で見下ろしていた。この男が、凶悪で非道な悪人に変貌するのだ。そう考えると、普通に会話する気もなくなってしまう。決して、ハビが

豹変するのが怖いわけではない。豹変して何かしでかした後に彼が何を考えるのか、それを想像してしまうと胸が苦しくていたたまれなくなるのである。

「クライド、どうかした？」

酷な質問だ。答えられないことを、彼も解っているだろうに。

「どうもいません」

「そう、良かった」

ハビはベストのポケットから、ちょっと角ばった黒い携帯を取り出した。レンテイナーのもの程ではなかったが、クライドの携帯よりも大分薄型である。光沢を抑えたその携帯には、ストラップの類がひとつもついていなかった。ハビは片手で携帯を開き、軽く操作してすぐに耳に当てた。

「もしもし、ミンイエーン。僕だけど」

電話の向こうからミンイエーンの嬉しそうな声が漏れてきた。ハビの頬が緩む。

「これからカフェに行くんだ。クライド借りていっていい？」

勿論だよ！ とミンイエーンが楽しそうに語るのが聞こえた。どうやら話の内容からすると、ミンイエーンはノエルと良い勝負をしているらしい。時々声が小さくなって聞こえなくなるが、ミンイエーンの声はかなりの大きさだった。

「じゃあ、切るね」

ミンイエーンの返事が聞こえ、ハビは携帯を耳から話してボタンを押した。そして、平たい長方形をした黒革の鞆を掴み、クライドを手招く。断る理由も見つけられなかったから、クライドは彼についていった。

第三十五話 忘れぬ今日

真つ白な廊下をハビの後に歩いて歩く。ハビの立てる足音は革靴の音で、聞いていて耳に心地よかった。暫くの間は無言だったが、ハビは少しすると、気を利かせてくれていいのか何度も話しかけてくれた。最初は上手く答えられなかったが、徐々に会話が成立していくようになってきた。

「酷い招き方をしちゃったね。ごめんね、クライド」

「すつごいムカつきました。早く終わらせて帰りたいです」

「はは、そう言うんじゃないかって思った」

ハビはクライドがどんな対応をしても、優しい笑みを崩さなかった。前にも感じたが、彼のその深い色をした瞳には、全てを見透かされているような気がする。クライドは無言になって、交互に踏み出している自分の足を見つめた。履き古した黒いスニーカーは、真つ白な廊下との対比で物凄く汚れて見えた。

「ミンイエーンが心配してたよ。クライドに嫌われていないかどうか」
声に顔を上げると、ハビはネクタイを少し緩めながら微笑した。

一瞬迷つて、クライドは彼から目をそらしながら答える。

「最初は本当に憎たらしかったけど、今はもう年下つて感じで」
彼はそれを聞いて、小さく笑った。

「憎めない子でしょ、あの子。いくら頭が良くてもね、内面がリイを失くしたときのまま動いていないんだ。ミンイエーンはその頃から、全然変わらずに年を重ねてる」

「へえ……」

だからあんなに子供っぽいのか。そう思うのと同時に、ミンイエーンがどれほど兄に依存していたか、少しだけ窺い知れたような気がした。そんな兄を失ったのだから、ミンイエーンは相当傷ついたのだろう。可哀想になってくる。

クライドとハビはエレベーターに乗り込み、クライドはふと疑問

に思ったことを聞いてみた。

「ハビさんは、ミンイエンとどれくらい一緒にいるんですか」

一緒にエレベーターに乗ってはいるものの、ハビとクライドの距離は、壁から壁までの距離とほぼ同等である。特に意識したわけではなかったが、気づいたらこうだった。ハビはエレベーターの操作パネルの正面にいたが、クライドはその反対側の壁にぴったりくっついていたのである。

「そうだね……　ミンイエンがこの研究所に来て数日後に出会ったのかな。もう九年間一緒だよ」

「長い付き合いなんですね」

どこか遠くを見るような目を正面に向け、ハビは頷く。そして、エレベーターの階数表示を見上げながら言った。

「ミンイエンは、たくさん哀しい思いをして生きてるんだよ。誰かの死だつていくつも経験してるし、毎晩のようになされてる。あの子は今、限りなく独りに近い」

低く響く声は穏やかだったが、少し悲しげな色を含んでいた。クライドは少し黙り、それから何か言おうと口を開いたが、結局言葉を見つけれずに再び黙り込む。

「だからこそ、僕はミンイエンの父親代理みたいに世話を焼いてしまっただけだね。僕が守らなきゃ、って思ってしまう何かを、ミンイエンは持つてる」

エレベーターが止まる。ハビはクライドの方を向いて、柔らかく微笑を浮かべる。あの手間のかかる子供のようなミンイエンと、どうやったらそんなに長い間一緒にいられるのだろうと疑問に思っていた気持ちが、なぜかその笑顔を見たとたんに氷解した。

ハビはミンイエンの世話を焼くことを、苦痛に思ってたのではないのだ。むしろ彼の世話を焼くことが、日課みたいなものになってしまっているのかもしれない。

「乗り物酔いはする？」

「いえ」

エレベーターを抜け、エントランスに出る。受付の男女がお疲れ様でしたと深い礼をし、ハビとクライドを見送ってくれる。外に出てみると、むっと熱気に包まれた。天気は快晴で、暑いことこの上ない。街は賑やかで、車も人も洪水のように溢れていた。特に、大きな交差点を渡る人の群れなどは、見ていだけで暑さが増す。

ふと視線を向かいの歩道に向けると、黒いスーツに身を包んだレンティーノが携帯を開いているところを目撃してしまった。彼は颯爽と歩きながら携帯で誰かと会話し、いつもの微笑を浮かべて電話を一度切り、再び誰かに電話をかける仕草をしている。製薬会社の仕事で、出張でもしていたのだろうか。

思った直後にカルツァ「フランチェスカ」の着信音が響く。驚いて自分の携帯の所在を確かめると、ハビはくすくすと笑った。

「同じ曲使ってるのかな」

彼は胸ポケットを指差した。鳴っているのは、どうやら自分のものでなくハビの携帯だったらしい。彼の言うとおり、クライドも彼と同じ曲を使っていた。自分の携帯が鳴っているのかと、クライドは錯覚してしまったのだ。使っている曲も、着信音に設定している部分も同じ。まさかこんな偶然が起きるとは、クライドは思っていなかった。

「これからレンティーノの暴走運転にまた付き合ってもらうことになるから、聞いておきたかったんだ。乗り物酔いのこと」

彼は言いながら携帯を取り出した。レンティーノは道路を渡ってこようとしてクライドとハビに気づいて、自分から電話を切ってこちらに手を振っている。ハビの着信音が止んだ。

「レンティーノさんの運転する車に乗っていると、酔うどころじゃないんで」

「あはは、それもそうか」

ハビは笑いながら携帯を開き、少し操作してからまた閉じてポケットに戻す。道行く人たちは、クライドとハビをちらちらと振り返りながら歩く。多分、ハビの身長に目を奪われているのだろう。

「クライドもカルツアを聞くんだね」

ハビはもう慣れていいのか、人の目は全く気にしていないようだった。クライドは一瞬答えるべきか迷ってしまったが、すぐに頷いた。何故迷ったのか解らないが、クライドはどうやらまだハビと自分の間に境界線を引いてしまっているらしい。

「CD全部あります」

「そう、僕もだよ。今のところは『破壊的衝動』が一番好き。ギターとドラム、それからサビの辺りが特に」

「ああ、カルツアはシャウトが上手ですよ」

「僕もそう思う」

クライドとハビがカルツアの話で盛り上がった後も、レンティーノはなかなかこちらにこなかった。交通量の多い道路なので、信号がなかなか変わらないのだ。しかしレンティーノは焦れた様子もなく、見るからに暑そうな格好で静かに信号の傍に佇んでいた。

レンティーノも目立つだろう、こんな真夏に上下黒のスーツだ。ビジネスマンはシャツにネクタイをしている人が殆どで、さすがにジャケットを着込んで歩いている人はどこにも見つからない。

「レンティーノさん暑くないのかな」

「彼はジャケットを脱ぐのを嫌うんだ。自分の体型が嫌いだって言ってたよ」

そうなのか。それは知らなかった新事実だ。レンティーノがスーツばかり着る理由は、ここにあるのかもしれない。

レンティーノはポケットから携帯を取り出して、時刻を確認しているようだった。なかなか変わらない信号に、クライドは大丈夫なんだろうかと考える。このままだと、十分ぐらい信号が赤のまま変わらないのではないだろうか。

「飛行機は一時間おきにでているから大丈夫だよ」

どこまでも気楽なハビに、クライドは苦笑した。レンティーノは悠然と信号機の傍に立っているが、先ほどから時計を確認するタイミングがどんどん狭まっているのだ。彼は明らかに早く横断歩道を

渡りたがっている。ハビはそんな彼を急かすでもなく、ただにこやかに待っている。

「あ、青」

信号を注視し、赤から青に変わる瞬間を目撃した時、クライドは思わず呟いていた。レンティーノはポケットに携帯を戻しながらこちらに向かって既に歩き始めている。

彼はかなり姿勢良く歩くため、それだけで何だか雰囲気は他人と違った。くわえて黒のスーツで身を固めている訳だから、レンティーノはすれ違う殆どの人にじろじろ見られていた。レンティーノもハビと同様、他人の視線には慣れているようだ。彼は誰かと目が合ったら、微笑んだりする余裕を持っていた。この二人の間に挟まれるのはちよつと厳しいとクライドは感じる。

「お待たせしました、ハビ、クライド。では、参りましょう」

にこやかに言つて、レンティーノは胸ポケットに手を入れた。彼が取り出したのは車のキーで、キーホルダーの類が一切つけられていなかった。ハビはクライドの左隣に、レンティーノはクライドの右隣にいる。長身の二人に挟まれ、クライドはそんなに極端に身長が低いわけでもないのに、自分の小ささを痛感した。

「僕が運転してもいいんだけどね。この座高で運転するのって辛いから」

「そのために私がいるのですよ、ハビ」

「君ひとりで乗るなら安全運転なのに、不思議だよ」

二人は談笑しながら研究所と隣のビルの間を通り、研究所の裏に回っていく。クライドはその後についていった。路地はアンシエンタウンやリヴェリナタウンにあるような狭いものでなく、広くて人通りもある。

研究所の一階部分は、数台分だが車が止められるようになっていた。停めてある車はどれも違う種類で、クライドが乗ったことのある高級車もそのなかにあった。

「乗って下さい、二人とも」

レンティーノは高級車の後部座席のドアを開けた。黒塗りの高級車は、洗車したばかりのようにつやを放っている。クライドはおずおずと車に乗り込んだ。ハビも反対側のドアを自分で開けて、さつさと乗り込んでいる。

レンティーノはクライドに微笑みかけ、ドアをぱたんと閉めた。あまり力を入れていないが、ドアはしつかり閉まったようだった。彼は運転席にひらりと乗り込むと、シートベルトを装着してエンジンをかける。

「行きますよ」

穏やかな声と同時に、街に急ブレーキの音が鳴り響く。

「つちよ、レンティーノさん！ アクセル踏みすぎ！」

ひやりとした。今ブレーキを踏んだのはレンティーノではなく、交差点を曲がってきた軽自動車と青いセダンだった。一歩間違えれば大惨事になっていたことは間違いない。

当人はいえれば微笑を浮かべ、のんびりとした目をしながら信号で急停車する。急ブレーキのせいで前に飛び出したが、ハビに押さえてもらったおかげでフロントガラスに突っ込まずにすんだ。

「さん、ですか。そういえば、あまりそんな風に呼ばれないですね。貴方はあの砕けた口調の方が良いと思いますよ。初めてお電話させていただいた時の」

「そんなこと言ってる暇あったら前見て運転しろ！」

青信号。覚悟はしていたが、やはり急発進で猛スピードだ。制限速度を大幅に超えた時速八十キロで、レンティーノは道路を縫うようにして走る。これだけ危なっかしい運転をしてもまだ事故を起こしていないので、それはある意味でかなり凄い。しかしこれは、類稀なるドライビングセンスだと讚えるにはあまりに乱暴すぎるのではないか。彼の中にある、最も封印して欲しい特技がこれだろう。

通行人の視線がこの車に集中しているのがすぐに解った。いずれ警察もでてくるだろうとクライドは思う。何故こんなにも呑気でいられるのだろうか、この男は。

「レンティノー、そろそろ空港だよ。徐行して」

ハビの声に窓の外を見る。ちらりと滑走路が見えた。クライドはほっと胸をなでおろしたが、また急停止されて前に吹っ飛びかける例によってハビに助けてもらい、クライドはがっくりと頂垂れた。

街の中心部に研究所があるらしく、空港までは短時間でいけるようだった。尤も、レンティノーの高速すぎる暴走運転のおかげでこんなに所要時間が短かったのかもしれないが。

「降りてください、二人とも」

「ありがとうレンティノー。帰りもお願いね」

ハビとレンティノーの和やかな会話を聞き流しながら、クライドは早々に車を降りた。ハビが車を降りてドアを閉めると、レンティノーはこちらに手を振ってから元きた道を引き返していった。黒塗りの外車は、周囲の車と同じスピードで道路を真っ直ぐに走っていた。呆気に取られる。

「いつでもあんな風に運転してくればいいのにね」

「俺に恨みでもあるんですかあの人は」

「恨みがある人が隣に乗ってれば、レンティノーは安全運転をするよ。怪我させちゃいけないと思う人が一緒に乗っていると、あんな風になっちゃう」

そういえば最初に車に乗せられたとき、レンティノーは確かに言っていた。人が乗っていると、緊張して上手く運転が出来なくなる。あれだけ穏やかというより呑気な表情でいるのに、彼は実は物凄く緊張しているのだらう。

「次の飛行機までまだ三十分あるよ。空港のお土産売り場でも見ていく？」

そう声をかけられて、クライドは少し考えてから首を横に振った。「よし、じゃあ搭乗しておこうか」

ハビに連れられ、クライドは空港の内部に向かった。ここの空港はヴァル・セイナの空港と広さはほぼ同等だと言えたが、若干こちらの方が小さかった。空港の入り口には『エルシータ国際空港』と

書かれていて、ここがエルシートシティであるとクライドは初めて知った。エルシートは確か、エナークの中でも二番目くらいに大きな都市である。社会学の授業で習うのも勿論だが、テレビでもエルシートの情報は頻繁に出てくる。

空港の内装は大都市らしい近代的なものだった。白と透明と水色がモチーフになっている、すつきりとしたデザインの空港だ。

中央は吹き抜けになっている、大画面の液晶テレビが二階の高さに設置されていた。テレビにはエナークで放映している番組が映るようになっていのか、黒髪の俳優がスーツ姿でバドミントンをしている様子が映し出されている。

周りを見れば、色々な看板が置かれたり立てられたりしていた。殆どがレストランかファストフード店で、看板の指す先を目で追ってみればどの店も繁盛しているようだった。

「クライド、航空券は買ってきたよ」

「いいんですか？」

「僕が強引に連れ出したんだしね。それに、交通費は経費から落ちるからいいんだよ」

何だか、この会社の人々は金を無尽蔵に使っている気がする。まずあの会社の大きさからして金がかかっていると思うし、壁に見える通路や白い内装にも大分金がかかっていると思う。くわえて社員も多く、ミンイエンのホルマリン漬けの巨大な水槽も沢山あった。貧乏な会社では出来ないことだと思う。そう考えると、ミンイエンの会社は一流企業なのだろう。

「ミンイエンって意外と凄腕なんですね」

「あの子は会社経営が上手だよ。専務にレンティーノがいるから、商談もスムーズだし」

「ああ……」

妙に納得する。レンティーノがいてこそそのミンイエンなのだ、きっと。ミンイエンはきつと一人ではそんなに凄くはないのだろうが、仲間がいることで何倍も力を発揮するのだろう。

「二十分前だよ。搭乗ゲートに向かおうか」

「はい」

クライドとハビはエスカレーターで二階へ向かった。五番ゲートから飛行機に乗り込み、離陸を待つ。こうして飛行機に乗ってみると、やはり新鮮な感じがした。隣にいるハビは軽く脚を開き、その両膝に肘をつけて手を組んでいる。少し前のめりの姿勢だが、身長に比例して座高も高いハビの場合、この方が天井の圧迫感がなくて楽なのだろうとクライドは解釈する。

「そういえば、ハビさん。さっき俺のこと見えたって言いましたよね。部屋の前通ったとき。あの時、どうやって俺を見たんですか」

ふと疑問に思ったことだった。クライドは白い壁から生えた手によって、部屋に引きずり込まれたはずだ。ということは、壁の向こうにいるハビにもクライドは見えていないはずだろう。どうして彼は、クライドを部屋に引き込むことができたのだろう。

「ああ、僕はあの白い壁が見えないようになってるんだよ。光の屈折率を変える眼鏡をしていたから」

彼はそういって、持っていた黒革の鞆の中から眼鏡ケースを取り出して見せた。

「光？」

「そう。あの白い壁は、特殊ライトによって作り出された光。っていうより映像？ とにかく、屈折率を変えて見てしまえばぶつかることも無くなるんだ。僕はほら、こんな身長でしょ？ 白い壁を通ろうとすると、よく天井に頭をぶつけるんだよね」

ハビはケースから眼鏡を取り出すと、かけて見せた。彼には眼鏡が似合うとクライドは思う。眼鏡を外したハビは、にっこりと笑ってクライドに眼鏡を渡してくる。何のつもりかと彼を見上げてみると、ハビは微笑を崩さずに「かけてごらん」と言った。

眼鏡をかけて外を見る。明るさや色、ものの形など、全てが違って見えた。ために自分の手を見てみると、ピントがなかなか合わずに苦労する。

「最初はコンタクトにしていたんだけど、光の屈折率を変えると日常生活が大変になるからね。眼鏡に替えたんだ。眼鏡ならすぐに外せるから楽でしょ？」

「これもこの研究所の技術ですか」

「そうそう。コンタクトを発売した人は、もう亡くなったけどね」

ハビは眼鏡をケースにしまった。離陸のアナウンスが機内に響き、ゆっくりと飛行機が動き始める。離陸後少しして客室乗務員が飲み物のワゴンを持ってきて、ハビに話しかけた。

「今日はお休みじゃなかったんですか？」

「本当はね。でも、休みだからこそ遊びに行く感覚かな」

「どうやら知り合いらしい。」

「まあ。カフェに住んでらっしゃるのに？」

「会社は第二の自宅だからね」

「お体を大切にしてくださいね。働きすぎはいけませんよ」

仲良さそうに話し、ハビにはもう定番なのか、何が欲しいかも聞かずにコーヒーを手渡した。クライドには何が飲みたいのか聞いてくれたので、コーラを貰う。客室乗務員はにっこりと笑ってから、次の乗客のところへ行く。

「毎朝あの子と会うんだ。飛行機に乗るたび会うから、いつの間にかちよつと仲良くなっちゃってね」

「へえ……」

丁度いい話題だったので、クライドはハビと客室乗務員の話が続けた。フライトの時間は約一時間程あったが、雑談が楽しかったので本当にすぐに飛行機の旅は終わってしまった。

「ってことはそれって、ストーカー？ いるんですねそういうの」「僕も驚いたよ。まさか自分が絡まれるとは思わないからね。この辺は治安があまり良くないから、君も気をつけて」

雑談しながら飛行機を降り、ここからは徒歩で店に向かった。ハビは当然といえば当然だが長袖では暑いらしく、肘の辺りまでシャツを捲り上げている。レンティーンとノエルという長袖族が周りに

いるおかげで、クライドは真夏なのに袖を捲り上げていない人に違和感を感じなくなってしまっていた。これはちよつとまずいかもしれない。

入道雲の浮かぶ空を見上げ、クライドは首筋を流れる汗を拭いた。今日はこの夏一番の暑さになるだろうと、飛行機の中でハビと雑談したことを思い出す。

ハビの話は面白く、思わず笑ってしまうようなことからそうだったのかと納得してしまうようなものまで、バラエティ豊富だった。おかげでクライドは店に着くまでの間、退屈など一秒も感ずることがなかった。

「さあ、入って」

ハビはポケットに入っていた鍵でカフェの裏口を開け、クライドを先にあげてくれた。裏口からは、ハビの自宅に上がれるようになっていいる。入ってすぐにリビングとダイニングがあった。奥には個室があるらしく、ドアもあった。見れば螺旋階段もあり、その上が寝室やバスルームに続いているんだろうとクライドは推測する。

「何も無い家だけど、のんびりしていいね。カフェの鍵開けてくるから、ちよつとそこで待ってて」

ハビはリビングのソファを指してクライドに座るよう指示すると、すぐに奥のドアを開けて出て行った。多分、カフェに繋がっているのがここなのだろう。クライドは黙って彼が戻ってくるのを待った。待っている間に周りを見渡してみると、内装が全て長身仕様であることに気づく。今座っているソファもそうだ。今まで気づかなかったが、下に平台のようなものを置いて高さを調整しているのである。コート掛けやテレビの台にも、同じ現象がみられた。あの身長だから、普通のサイズで生活していくのはきつと窮屈なのだろう。

彼はすぐに戻ってきたから、クライドもすぐにカフェに移動した。内装は去年と全く同じで、強いて言うなら電球が一つだけ妙に明るい感じがした。多分、その電球は切れたから新しいものと取り替えたのだろう。見ると、それでもその電球は明るさを抑えるために

ランプシェードの部分に加工を施してあった。

「朝ごはんまだでしょ？ メニューはそこにあるから、好きなのを選んで」

カウンターに立ったハビはにこやかにそういった。クライドはカウンター席に腰掛けて、小さなスケッチブックに書かれたメニューを見る。迷っていると、ハビはくすくすと笑い始める。

「真剣だね」

「決まらないです」

「そうだね…… 店長の今日のお薦めは、チエンザイ風スープスパゲティだよ。ひき肉とエビをごま油で炒めて、唐辛子入り海鮮スープをかけたメニュー」

「あー、じゃあそれで」

国際色豊かなカフェである。メニューには、色々な国の料理が羅列されているのだ。食べたことの無い料理もいくつかあって、ここは本当に喫茶店なのかとクライドは驚く。

「メニューいっぱいあるでしょ？ この島って国際的なエナーケの影響もあって、純血の人が少ないんだ。だからメニューもバリエーション豊富なんだよ。宗教も味の好みも全然違う人たちばかりだから、この島には自由奔放っていう言葉がよく似合うと思う」

「確かに、そんな感じですね」

にこりと笑い、ハビは料理を始めた。ごま油の良い香りが厨房を満たし、クライドの方にも漂ってくる。一気に空腹感が襲ってくる。

いいのだろうか、とふと思う。これはチャンスだ。ハビにレイチエルのことを切り出して、そして彼女の望みを彼に伝えるチャンスなのだ。けれどクライドは、何も言えずに黙る。何か言ってしまうたらこの沈黙がさらに重たいものになって、クライドが実験に協力する日までその気まずさは残っていくのではないだろうか。

「後でちよつとついてきて欲しい場所があるんだ」

「え？ あ、はい」

唐突に言われた言葉に返事をする、ハビは微笑した。

「今は料理が出来るまで、退屈しのぎに話を聞かせてよ」

そのしんみりとした声に、クライドは何も言えなくなる。けれど彼の言うとおり雑談を始めなければならぬと、とりあえず頭にあつたことを言った。

「レイチエルの墓ってどこにあるんですか」

ハビの手がぴたりと止まった。鍋の水が沸騰して湯に変わりはじめ、小さな泡の音が沈黙に色をつける。言わなければ良かったと後悔しかけたその時、ハビは静かに口を開いた。

「ついてきて欲しい場所が、そこなんだ」

息が止まる思いだった。

ハビには全て見透かされている。ここに来てからずっとクライドが言いたかったことも、クライドが旅に出てきたその理由も、きつと彼ならレイチエルを殺してしまった直後から解っていただろう。きつとクライドはまた会いに来ると、ハビは悟っていたのかもしれない。だからクライドに、あのアンティークの時計を渡したのだろうか。

時計はクライドの荷物の中にある。今日、研究所に帰ったら渡そう。

「続き、レイチエルの傍で話してもいいですか」

「勿論。いずれこんな日が来るって、そんな気はしてた」

ハビは相変わらず穏やかだったが、その柔らかな表情には少しだけ哀しい色が含まれていた。クライドは少し考えてから、口を開く。

「この辺りの学校って、変わった制服のところが多いですね」

何も関係ない話をして、彼の言うとおり、料理ができるまで退屈しのぎをしようと思う。いや、これは退屈しのぎなどではなく、沈んでしまった空気の緩和だ。ハビは何事もなかったかのように話に乗ってくれた。全てが順調に戻っていくような、そんな気がした。

第三十六話 丘の上には

料理を作りながら、ハビはたくさんのお話をしてくれた。カフェに
来た珍しい客のこと、大雨の日に大木が倒れてきたところを間一髪
で避けたこと、停電の日にミンイエンが怖がって泣き始めたこと…

…すべてが楽しい話題だった。

何でもないようなことでも、ハビが話すと面白くなるような気が
する。クライドは何気ない話で笑いながら、レイチエルのことを考
えていた。

「幽霊って信じる？」

「ええ、まあ一応」

会ったことがあるとも言えず、クライドは曖昧に笑った。クライ
ドには幽霊の友達もいるし、幽霊の想い人もいる。しかしそれを、
一般の魔力も無いただの青年であるハビに言ってしまったら、おか
しいと思われそうだ。

「うちのカフェに、幽霊のお客さんが来ることがあるんだ」

ハビは鍋の中のスープをかき混ぜながら笑う。

「え、どんな幽霊なんですか？」

カフェに来る幽霊。ぱつとレイチエルの姿が浮かんだが、レイチ
エルはいつまでも未練がましくハビに付きまとうような行為は絶対
にしないだろう。一体どういう幽霊なのか、ちょっと気になる。

「おじいさんなんだ。優しそうな、背が小さい。その人は何を注文
するわけでもなく、カウンターの一番隅の席にずっといる。最初は
幽霊だって解らなかったけど、従業員の子が『何で誰もいない席に
お冷のコップを置くのか』って訊ねてきてようやく気づいた」

ハビは苦笑して、クライドの二つ隣の席を指差す。彼の指につら
れて振り返ってみただけけれど、老人の幽霊は見えなかった。

「その人は今でも来るんですか？」

「時々ね。木曜日になると、ときたま来てくれる。どうやらそのお

じいさんは、店でかけてるジャズが好きみたいなんだ。……あれ。なんか妙に静かだと思ったら、音楽が無かったんだ」

ハビはカウンターのレジの横で何やら操作して、ジャズを流し始めた。サックスの音色が心地よく響く店内には、もう出来上がりかけた料理の匂いが漂っている。

「さあ、仕上げに山椒とトウガラシを加えて完成だよ」

ハビはスープに調味料を入れ、ゆでたパスタを皿に盛り付けた。そしてスープを上からかけて、クライドに出してくれた。

「ありがとうございます」

「ちよつと暑いね。エアコンの温度、下げてくるよ」

ハビは言いながらフォークを出してきて、紙ナプキンに添えてカウンターに置いた。クライドはハビがエアコンの温度を下げてくるまで待ち、彼が席についたところでフォークを取った。

さすがは喫茶店のマスター。これを職業としているだけあって、ハビの手料理は美味しかった。クライドはトウガラシのおかげで結構汗をかいたが、ハビは全く動じた様子もなく先に食べきっている。

「お味の方は？」

「美味しいです。……でも暑い」

「ははは、こういう時は冷水か緑茶だね」

ハビはカウンターの裏にあった冷蔵庫から、緑茶の入った容器を取り出してグラスに注ぐ。これは客に出すためではなく、従業員やハビたちが飲むためのものらしい。

冷たい緑茶を貰って飲みながら、クライドは食事を終えた。食後もハビは色々な話をしてくれて、クライドは大いに笑う。けれど、食事を終える少し前くらいからずっと、頭の中にはレイチエルのことしかなかった。クライドはハビの話に頷きながら、時々店の中を見渡したりしてみた。

あの惨劇が起こった日から、全く変わった様子の無い店内。調度品や内装に傷がついているわけでもなければ、血痕が赤黒く残っているわけでもない。何事も無かったかのように、カフェにはジャズ

が響いていた。ここでレイチエルはハビに殴られ、命を落とした。まさかここでそんなことがあったなんて、誰も思わないだろう。

「……これ終わったら行こうか」

彼はそう言つて、食器を片付けはじめた。クライドは黙って頷いて、グラスに残っていた緑茶を飲み干した。彼は食器を洗って布巾で拭いて、戸棚に仕舞いこむ。気まずい沈黙が少しだけ流れた。クライドは黙ったまま、ハビの挙動を眺めていた。

「ちょっと歩くよ。彼女の故郷のソイラでは今紛争が起こっていて、だからここにお墓を作ったんだ」

ハビはカウンターの裏からクライドを手招いて言う。今日は正面の店の玄関を使わずに、裏口のハビの自宅から出入りすることを徹底するようだ。玄関でハビはクライドを先に外に出し、それから自分が出て鍵をかけた。

「ソイラのひまわり畑が世界遺産に指定されたの、知ってる？」

「いいえ、知りませんでした。綺麗ですよ、教科書に載ってました」

ソイラはエナークの隣にある国で、綺麗な国だが宗派争いが絶えないというのが一般的な知識だ。敬虔なレベン教徒が国民の大半を占めていて、だからこそ、そのレベン教徒の間で宗派争いが起こっているのである。

クライドとハビは、カフェの横にある路地を進んだ。

「レイチエルとは長い付き合いだったんだ。彼女が帝王側の人間であることも、最初から知っていたけど気づかないふりをして接してきた」

路地を出て常緑樹の並木道を歩きながら、ハビは小さく笑う。涼しい木陰にいるのだが、ふとしたときにぬるい風が頬をなでるのが少し不快だった。クライドは黙ってハビの話に耳を傾け、小さく相槌を打つ。

「もともと、ミンイエンと帝王の間でちょっとトラブルがあったからね。それでミンイエンと親しい僕が監視されてるのかと、最初は

思ってたんだ。でも違ってた。レイチエルの狙いは君だった」

通りすがりの陽気なおばさんが、ハビに手を振る。カフェの常連客らしい。ハビは笑顔で手を振り返し、彼女とすれ違ったところで小さく息をつく。

「よく考えれば解ったことだよ、ミンイエンも帝王も同じものを欲しがっていたんだって。帝王は僕らの行動を阻止するためにレイチエルたちを送り込んで、戦うように仕向けたんだ。レイチエルは、僕をクライドから遠ざけるためにここに来た」

「そんな。帝王は、ミンイエンの仲間と戦わせるためにレイチエルをカフェに送り込んだんですか」

「そういうこと。今さらそんなことに気づいたって、遅いのにな」

帝王が心の底から憎らしく思えた。レイチエルを殺した本人であるハビよりも、そう仕向けた帝王の方が憎い。しかし、憎むべき相手も、愛すべき相手も、すでにこの世には存在しない。歯がゆい思いに眉を寄せ、クライドは両の拳を強く握り込んだ。

少し無言で歩き続けた。お互い、何も言わなかった。けれどハビはふいに立ち止まり、俯いていたクライドの肩をぽんと叩く。

「ついたよ、クライド」

顔を上げる。息を呑んだ。

そこは、一面のひまわり畑だった。

クライドは足を止め、しばしその黄色い光景に見入る。空の青と雲の白、それからどこまでも続いていると思えるような鮮やかな黄色。ここはなだらかな丘になっていて、だからこそ空と地面の境界線が黄色いひまわりだった。頂上には大きな樹が一本生えていたが、それもまた絵になっている。とにかく声も出せないぐらいに、美しい景色だった。

「この奥だから」

クライドの首の辺りまであるような背丈の大きいひまわりを、かき分けるようにしてハビは進んでいった。クライドもハビの後を追って、ひまわり畑に分け入る。時々、かきわけたひまわりの花が顔

に当たって視界がさえぎられ、すぐ目の前をあるいているはずのハビをも見失いそうになる。

「せめてもの罪滅ぼしにと思ってね」

「え？」

ひまわりの花を手で避けながら、クライドはハビの背中を追う。

「ここに来たばかりの頃、レイチエルは毎日のように夏のソイラの話をしてくれた。自宅の近くにある小高い丘に、夏になるとひまわりが満開になつて綺麗なんだって、彼女はその話ばかりして。そこが一番好きな場所なんだって、楽しそうに言つてね……」

そうか。だからハビはこの丘にレイチエルの墓を立て、ひまわりの種をまいたのだろう。レイチエルが一番好きな場所を、彼は再現した。それが何だか嬉しくて、健気に思えて、クライドは微笑する。ハビは何事も無かつたかのように暮らしているのだと、クライドは思っていた。レイチエルを殺したことも、レイチエルがいたことも忘れて、彼は普通の人として暮らしているのだとつきり思っていた。けれど違っていた。彼は自分の犯した罪をきちんと解つて、その上で贖罪しようという気にまでなっている。彼は生真面目で心の優しい人だと思う。

「ハビさんは優しいですね」

つい何も考えずに呟いてしまう。そう言ってしまった後で、彼が悲しそうにしていることに気付く。

「違うよ、ただどうしようもなかっただけなんだ」

それは謙遜ではなく否定だった。クライドは謝りかけたが、ハビの静かな声に黙らざるを得なくなる。

「こんなの、優しさじゃない。君を捕らえることがミンイエンへの優しさなら、君に優しく接して、逃がしてやろうとすることはミンイエンへの謀反だよ。レイチエルと戦わないということは君を逃がすことになつて、そうするとミンイエンが傷つくし悲しむ。誰かに優しくすれば、かならず誰かが傷付いてしまう。誰も傷付けたくないって、そう思ってるからこうなつてしまう」

ハビの心の中は、こうなっていたのか。クライドがそう悟ったのと同じタイミングで、ハビは急に足をとめた。その背中にクライドはまともなぶつかり、よろけてその場にへたりこむ。

「あ……」

ひまわり畑の真ん中、丘の頂上にいつのまにか到着していた。身体を起こして後ろを振り返ると、延々と続くひまわり畑の向こうに小さく街と海が見えた。綺麗な場所だ。何だか落ち着くというか、心が洗われる気がする。

「大丈夫？」

「平気です。凄い、こんな場所があるなんて」

レイチエルが生きているときに、ここに来られれば良かった。

自分で思い浮かべた言葉が、自分の胸を刺す。彼女はもういなくて、そのいない彼女のために作られたのがこの景色なのだ。

そつと後ろを振り返る。大きな木の下に、白い大理石の墓標が立ってあった。十字型のその墓標には、レイチエルの名前とルクルス・レベン両暦の生年月日、享年が丁寧に彫られている。

「久しぶり、レイチエル」

小さく呟いて、クライドは彼女の墓標の隣に腰を下ろした。涼しい木陰に腰を落ち着けていると、どこからか風に乗って蝉の声が聞こえ始める。

「この島で蝉が鳴いているなんて、珍しいことだよ」

ハビもそう言いながら、墓石を挟んで隣に座る。クライドに向けた言葉に聞こえたが、これは多分レイチエルにも向けられた言葉だ。シャツに黒のベストというフォーマルな格好をした長身と、ラフな格好のクライドと、白い墓石。はたから見れば、何だか結構奇妙な光景なのではないだろうか。

座ってみると、景色はまた少しだけ変わって見える。ひまわり畑に風が吹く。大輪の花が風に揺られて、ひまわり畑に黄色い波ができた。遠い目でその黄色い波を見つめて、ハビは少し曲げていた脚を完全に伸ばして長座する。

「……出逢わなければよかったなんて、哀しいことは考えたくないよね。僕と君にしても、君とレイチエルにしても、レイチエルと僕にしても」

「そうですね」

彼は真つ直ぐ前を見たままそういうので、クライドも彼に倣つて目の前のひまわり畑を見つめて答えた。クライドの視線の先では、ミツバチが大輪の花の間を行き来して蜜をあつめている。暫く見ていると、ミツバチは何処かへ飛んでいった。

「たとえ帝王の策略であつたとしても、ミンイエンの実験のためだとしても、君や彼女に出会えたことは良いことだと思つてる」

「俺もそう思います」

彼の呟きに、クライドは心から頷いた。それから、幾度目かの沈黙があつた。クライドはレイチエルの墓を見つめ、静かに息を吐いた。彼女はこうして、帝王なんかの仲間だつたのだろう。今更思つたつて仕方のないことばかり、頭の中を駆け巡る。思つたつて答えは返つてこないし、返つてくることがあるとするならそれは帝王の仲間と再び接触することに繋がる。

もう、うんざりだつた。これ以上戦つて傷つけあつて、大事な人を失いたくないという思いがクライドの中に満ちていく。レイチエルのように、また誰かが哀しい最期を迎えるのは嫌だ。

悶々と暗い思考に陥っていると、ハビの声が沈黙を破つた。

「僕は二重人格なんだ」

咄嗟に何の反応もできずに固まる。ハビはクライドの様子を見ることなく、そのまま話を続ける。

「人格が変わっている間、今ここにいる僕の記憶はない。もうひとりの僕は、きつと今この時間の記憶がないんだと思う」

ちらりとハビを見ると、ハビはやはりクライドを見ようとしていなかった。クライドもハビの方を見ずに話を聞くことにして、ひんやりとした大理石の墓標に少し身体を寄せた。

ハビの話を最後まで聞いたら、きつとクライドは話したかったこ

とを話せなくなる。『貴方を救いたい』なんて安直に言えるような状況ではないし、もしかしたらこれはずっと言えずに終わってしまうのかも知れない。

「でも、僕が彼女を殺してしまったってことはちゃんと解る。記憶はないけど、身体が覚えてるんだ。この手がしびれるぐらいに強く、ワインボトルでレイチエルを殴りつけた感触を」

下手に何かいうことも出来ず、クライドは黙り込んだ。ハビは苦笑気味に自分の両手を見つめ、ぎゅっと強く握り締める。

「ハビさん？」

声をかけると、ハビはふっと手から力を抜いた。

「ここにいる僕も、レイチエルを殺した僕も、同じ僕なんだ。記憶が無いからって、自分のしたことから逃げるつもりはないよ。時々、本当に自分が嫌になる」

「もう一人の人格を、抑えておける方法ってないんですか」

「ないかもしれない。気づくと、いつの間にか記憶が欠落してるから。記憶があつた証明を手帳につけるようにしてるけど、そこに僕の筆跡で『邪魔だよ』って書いてあるのを見つけてね……」

「もう一人のハビさんですか」

「そう。彼は僕を消したがっているんだよ」

自分の人格を他人のように呼ぶ彼に、少し疑問を感じた。けれどそれはすぐに解消される。『他人のよう』ではない、他人なのだ。ハビの中には、ハビともう一人のハビがいる。

「もしもここに居る僕が消えたら、カフエは勿論だけど研究所にもいられなくなるよ。ミンイエンを沢山傷つけることになるだろうし、仲間を殺しかねないから。彼はそういう男なんだ」

ハビは少し目を伏せて、隙間なく雑草の生えた地面を見つめた。彼の視線の先には、薄紫色の小さな花をつけた雑草があつた。名前もわからない、けれど健気に強く生きて居る雑草。「頑張っている」と、見ていてそう思えるところはハビと共通するものがある。

「俺に、何かできることはありますか」

たまりかねて口を開いた。ハビは小さく笑った。

「何もないかな」

クライドの助けなんて要らないと、彼はそう思った。恐れていたことが現実になったのだ。拒絶されるかもしれないという可能性を恐れて、クライドは声をかけられずにいた。その可能性は決して低いものではなかった、それを解っていたのに。

どうすべきかと考えあぐねるクライドの顔を見て、ハビは小さく口角を上げる。

「強いて言うなら、ひとつだけ。この先もしも『彼』が出てきたら、ミンイエンやレンティーノたちに危害を加える前に彼を止めて欲しい」

「どうすれば止められるのかは、まだハビさんも解らないですよね」
軽く頷いたハビに、クライドも頷き返す。

「やってみます」

「ありがとう。本当はこんなこと、君に頼みたくないんだ。君が怪我をする可能性だって、あるわけだからね」

言いながらハビは立ち上がり、木の幹にもたれかかって空を見上げた。クライドもつられて空を見る。入道雲の浮かぶ空は日常的なくせにどこか幻想的で、見ていて気持ちが晴れてくる。

白く冷たい大理石に肩を寄せて、クライドは小さくレイチエルの名前を呟いた。また会いたくても、彼女はもういない。幽霊となっ
て出てくることももうないだろう。クライドは携帯につけていた黒いリボンを見つめ、小さくため息をつく。

「きつとレイチエル、君が来て喜んでるよ」

「そうでしょうか。何か、あんまりそう思えません」

ここにきてもクライドはまだ不甲斐ない態度で、クライドが語るべきことをハビが言うような状況を、レイチエルは果たして喜ぶの
だろうか。俯いたクライドの手を、ハビはそつと引っ張った。顔を
上げると、ハビは何か吹っ切れた態度で笑った。

「行こう。久々にウェイターやらない？ 今日閉めてる予定だっ

たけど、たまには気まぐれもいいかなって」

「え？」

「おいで」

無理して笑うような仕草に、少し胸が痛んだ。頷くことも声を上げることできないまま、クライドはレイチエルの墓を後にした。

「またきてもいいですか」

辛うじてそれだけ言えた。ほかにいくつもかけるべき言葉はあったはずなのに。

「勿論。場所、覚えて帰ってね」

「はい」

振り返ると、ひまわり畑の黄色が眩しくて目が霞む。その黄色い幻想の中に、メイド服の黒髪の少女が見えたような錯覚を起こし、慌ててその一点を凝視したが、彼女を視覚で捕らえることはなかった。

カフェに戻って、クライドは彼の言うとおりウェイターをやることにした。特にやりたかったわけではないが、久しぶりだというものもあって頷く気になった。カフェの制服は去年から借りっぱなしのものが荷物の中に入れてあるが、荷物は研究所に置きっぱなしであると告げると彼はなんとまた同じサイズの制服を用意してくれていた。

「去年、二着用意してたんだ。一着は予備用に」

着替えている最中、ハビが水を使う音や食器を動かす音が絶え間なく聞こえていた。ハビはいつでも働いているような、そんな人だ。

「カフェのバイトもやっぱりミニエンの計画なんですか」

着替え終えて、カウンターに向かってそう言ってみる。従業員スペースから声をかけたクライドに、ハビは首だけで軽く振り返って頷いた。

「僕としては計画外だったけどね。君がいなくなつた翌日から、あの子はどこへ行ったのかって何度も訊かれたよ。このままカフェに就職するってどう？」

「いいえ、ちょっとやりたいことが思い浮かんできたところですよ」
「そう」

短い会話を終えると、早速ドアが開いて誰かが入ってきた。
「いらっしやいませ」

久々にそう言って、クライドは軽く会釈する。こうしていると、店の奥のほうでレイチェルがクライドのほうを見て微笑んでいる。光景や、食器を下げる従業員たちが脳裏に蘇ってくる。営業時間は毎日七時までだからと言って、ハビは今日七時までここにいることをクライドに告げた。

「定休は水曜。水曜は朝から夜までずっと研究所にいて、朝になったら飛行機でまたこまでくるんだ」

「それじゃあ、休みないじゃないですか」

「確かにないね。でも、毎日とても充実してる」

店内は閑散としている。ハビが事前に今日が休みであることを告げていたらしく、客はあまりこなかった。しかし、通りがかった時に偶然あいているところをみた常連客が遊びにきたりはした。

「趣味とかに没頭したくなる時ってないんですか？」

「一応、カフェでは連休をとっているんだ。年に四回、シーズンごとに一週間ずつ」

「研究所は？」

「カフェを休んでるときは、ずっと研究所にいるよ。ミンイエンが待ってるから」

徹底した仕事人間だ。クライドはそう思ってた。睡眠時間以外はずっと仕事をしている状態ではないか。こんな状態でよく頭を使う研究や人を相手にする接客ができる。

クライドが新たな質問をしようとしたところで、女の客がやってきたので接客に専念した。彼女は前にクライドがいた時に、このカフェにきたことがあるようだった。たくさんの質問をされて辟易しつつも、全部答えて微笑んでみる。

「ありがとうございます」

女性客を見送る頃にはすっかり太陽も傾いていて、カフェは店主のハビとウェイターのクライド以外は無人になっていた。

「さあ、六時四十分だよ。そろそろお店しめようか」

「あ、はい。着替えてきますね」

そそくさと着替え終えて私服で戻ってくると、ハビはテーブルの後片付けや食器洗い、それから戸締りをてきぱきと始めていた。それを見て、クライドは食器を食器棚に仕舞うのを手伝う。もともと散らかっていたわけでもないのに、カフェはすぐに綺麗になった。

また例によつて裏口であるハビの自宅から出て、一緒に空港まで歩く。日の沈んだ直後の明るく色づき始めたこの街では、車を使う人が少ないために、道路がまるで歩行者天国状態だ。

帰りの飛行機は行きより空いていて、明らかに赤字と思えるくらいに乗客が少なかった。クライドは窓の外を眺めながらフライトすることにしているが、外が暗いと機内の明かりが反射してしまつて窓の外が見えにくい。

「もしもし、レンティーノ。今どこにいるの？」

「空港です。貴方は背が高いですから、すぐ解りますよ。……もう見つけました」

エルシータ国際空港について、まず交わされたやり取りがこれだ。ハビがレンティーノを電話で呼び出し、レンティーノがハビの長身を目印にやってくる。彼らだからこそできるそんな連携プレーで、クライドは無事に研究所に帰ることが出来た。帰りの車は、レンティーノではなくハビが運転してくれたのだ。

レンティーノは後部座席で終始笑顔でいた。ハビは窮屈そうにしながらも、レンティーノとはうって変わった安全運転で研究所に向かう。やがて外見は普通のビル群に溶け込んでいるが、内装は恐ろしいことになっている研究所のビルに到着した。車を降りるとまずハビは大きく身体を反らし、伸びをした。

「遅くなっちゃったけど、夕飯にしようか。食堂行こう」

研究所に入ると、ハビとレンティーノは受付の男女に白いカード

を差し出した。受付係はそれを小型で持ち運び可能な箱型をしたカードリーダーに通し、にこりと笑む。

「出張、ご苦労様でした」

「休日出勤ですね。時間外手当が出ます」

それぞれ、レントイノーとハビに向けられた言葉だ。この白いカードは、研究所内なら本当に何にでも使えるらしい。エレベーターを使って、クライドたちは食堂へ向かった。

この後食事を済ませたクライドは、クロスソードをやり忘れていたことに気づいて部屋に戻った。部屋ではノエルが嬉しそうにクロスソードを解いていたが、良く見るとなんと三枚同時進行している。

「おかえり、クライド」

「ただいま…… 何それ」

「ミンイエンのクロスソード、最新バージョン。この一つ前のバージョン、最後に並び替えてできたメッセージが『ノエルのバカ！なんで解いちやうの？』だったんだよ。もうおかしくて。彼って本当に頭の回転が速い人だよ」

「すげえとしか言いようがないな、色々と」

「そうかい？」

彼の言葉を聞きながら、クライドはベッドに放置しておいたクロスソードを手を取った。少しずつ進めていくが、終りはなかなかみえてこない。

ノエルが眠ると言い出すまで、クライドはクロスソードを進めていた。アンソニーとグレンはその間部屋に戻ってきたりまた何処かへ行ったたりして、彼らは彼らで楽しそうだった。

「おやすみ、クライド」

「おう。おやすみ」

ノエルを見送って、クライドは汗ばんだ身体をどうにかしたくてシャワーを浴びに行った。パジャマ代わりのよれたタンクトップに着替えると、急に眠気が襲ってくる。体が温まったからだろうか。

あくびをしながらクロスソードに取り組んでいたが、結局半分も

解かないうちにクライドは眠ってしまった。

第三十七話 続く日々

それから四日間、クライドはクロスワードを解いたり本を読んだりして白いだけの空間の退屈さに耐えていた。アンソニーは退屈などあまり感じていない様子で、近頃はミンイエンの所に入り浸りになっている。どうやら、彼と波長が合うらしい。

「つまんねー」

最近、グレンの口癖がこの一つに統一されてきている気がする。

彼は一昨日からコピー用紙を沢山貰ってきて、楽譜や歌詞を書きながらくっている。もう新曲が五曲も完成してしまったようだ。

彼はセルジに頼み、腰までであったシャギーの入った長髪を肩甲骨に届くくらいの長さに切っていた。それは確か、三日前のことだった気がするが記憶が曖昧だ。兎に角、グレンにはこの髪型が一番似合うとクライドは思う。

「なあ、今日ってここにきて何日目？」

「もう時間の感覚ないよ俺。多分六日目だと思う」

「八日目だよ、クライド」

グレンの問いに答えるとノエルが横から訂正を入れてくる。彼は分厚い辞書のような本を抱え、クロスワードの束を少しずつ崩していた。本を読みながら解いているようだ。

「はあ、せめてギターでもあればな」

「ギターは無いけど、バスケならできるよ。五階の奥に使わないホールがあつて、いつもそこで社員がバスケをやってるんだ。なんでも、健康維持のためらしいね」

グレンの呟きに、ノエルは本を読みながら答えていた。グレンの表情が見る見るうちにうれしそうになる。

「本当か？ よし、クライド行くぞ」

「いつてらっしやい」

ノエルの穏やかな声に送られ、グレンに手を引っ張られてクライ

ドは部屋を後にする。

真っ白い廊下を歩き、エレベーターに向かう。もう道も覚えてしまった。この白いだけの研究所にも、長くいれば慣れてしまつらしい。こんな空間になんて、慣れなくなかったのに。

「本当退屈だよこの研究所。おっさんたち話し相手にもならないし。シェリーはノーチエのところにばっかりいるし、トニーもミンイエンのところに行つたきり帰つてこないしさあ」

エレベーターで五階まで降りる間、グレンはずっとこの調子で不満を爆発させていた。クライドは苦笑気味に頷いて、彼の話に同調する。

「ノエルに至つてはさ、絶対楽しんでるぜこの状況。難しい本に囲まれて」

「そうそう、レンティーノからプログラミング言語習い始めたっばいし。ほんと、あいつは特殊だ」

いつのまにかさん付けが取れて、クライドはハビ以外の人物を大概は呼び捨てにするようになっていた。ノエルがレンティーノと親しげに話しているのを最初に聞いたときは驚いたが、何度も話しているうちに敬語が煩わしくなつてきて、今ではクライドもレンティーノと友達のように接している。

「八日目か」

ぼつりと呟くグレン。

「あと六日だ。六日したら、実験だろ？」

そうしたら帰ることができるじゃないか。そういうニュアンスをこめて、クライドはグレンに微笑みかける。するとグレンはふと表情を曇らせて、視線を斜め下へやる。

エレベーターのドアが開いた。クライドはグレンより先にエレベーターから降りて、なかなか降りてこないグレンを手招いた。グレンは視線を上げてクライドがもうエレベーターから降りていることに気づき、慌てて降りてきた。グレンが出た直後に、エレベーターのドアが閉まる。

「……思っただけどさ、クライド以外の俺らっている意味あんのかな」

半ば独り言のような彼の言葉に、クライドは苦笑する。クライドもグレンも歩きながら、お互いの方を見ずにいた。

「ないとしたら、さっさとお前らだけ帰って欲しいんだけどな」

グレンの足がぴたっと止まる。振り返ると、グレンはまるで捨てられた犬のような目で、クライドを見つめていた。

「クライドは、俺らが要らないのか？」

「違う、お前らまで魔力枯渇で生死の境を……　なんてことにはなつてほしくないんだ」

そう答えれば、彼は安心したように口許に微笑を浮かべる。

「大丈夫、お前ほどひ弱じゃないから平気だ」

「何だよそれ」

「お前が死にそうなときは、俺がちゃんと助けてやるから安心しろつて意味」

何だよそれ、ともう一度言いそうになる。しかしそれがグレンなりの気遣いであることに気づいて、クライドは少し笑った。自分はそんなに弱くはないと思う。けれどグレンを見ると、彼ほど強くはないかもしれないと思うのが現状なのだ。一人では乗り越えられない壁があっても、グレンと一緒に楽に越えられるとクライドは思う。

雑談しながら廊下を歩く。適当に歩いて行き当たった場所にカードキーを差し込んでホールを捜すという暴挙を、グレンは先ほどから繰り返している。

「お。なんかここっばい」

「本当だ」

先ほどから部屋に入るたび徹夜明けらしい研究員に迷惑そうな目で睨まれていたので、ようやく部屋が見つかってクライドはほっとした。部屋は相変わらず真っ白い空間だったが、一つ違うのがバスケットのゴールが取り付けられているところだった。それ以外は本

当に何も無い空間で、これなら動きやすいだろうとは思ったが何だかやはり寂しい。

「そついや、俺らボール持ってないな」

「ああ、そうだった」

探しに行こうかと振り返ると、部屋の入り口にレンティーノとセルジがいた。声も出さずにずっとそこにいたらしい。思わず跳ねた肩が、相手に気づかれていなければ良いと思う。

セルジはバスケットボールを片手に、Tシャツとジーンズというラフなスタイルでいた。レンティーノは相変わらずスーツを着込んでいたが、黒ではなくこげ茶色だ。しかし、どう考えても運動できるスタイルではない。

「こんにちは、クライド」

「バスケやるなら二人じゃつままないでしょ？ 僕らも混ぜてよ」

レンティーノとセルジは、につこりと笑った。クライドは隣のグレンの意見を求めて彼を見上げた。

「僕ら、って。もしかしてレンティーノもか？」

意外そうにそう言うグレンに、レンティーノはいいえと首を横に振る。

「私は観戦ですよ」

「駄目だよ、君も入るの」

セルジはそういって、至近距離からレンティーノにボールを投げ渡した。レンティーノはそれをぱつと受け止めて、セルジに投げ返す。

てつきりレンティーノはボールを落とすものだと思っていた。何となく外見的に運動は苦手そうだし、セルジがボールを投げたのだっていきなりだったのに。レンティーノに混ぜてもらったら面白いことになりそうだ。

「よし、じゃあチームどうする？」

グレンは言って、クライドを見た。おそらく彼は、クライドと組んでしまったらセルジのチームが一点も取れないと予想したのだろ

う。クライドもそう思った。今やアンシエントタウン屈指のスポーツマンであるグレンと、エルフの血のおかげで運動神経抜群の自分二人で組んでしまったら、研究員という運動と縁がない職業についているセルジたちをあっさり負かしてしまうだろう。

「俺はお前に任せるよ」

「じゃあ、セルジは俺と組め。レンティーノはクライドと」

至極簡単にそう決められ、クライドは呆気に取られながらも頷いた。グレンのことだから少し迷ってから答えるだろうと思ったのに、もしかしたら彼は、チームをどうするか聞く段階で既にこうしたいと思っていたのかもしれない。

「よろしく願います」

スーツ姿のレンティーノが歩み寄ってきて、にこりと笑う。クライドはその長躯を上から下まで眺め、小さく息をついた。

「暑そう」

「平気ですよ、冷房がきいていますから」

ジャケットのボタンを外しながらレンティーノは微笑する。冷房がきいているとはいえ、流石にスーツで運動はできないと彼も思うようだ。ここでレンティーノがそのままバスケットボールをやるなどと言い出したらどうしようかとクライドは思っていたが、その心配は杞憂に終わった。

ジャケットを脱いでネクタイを解き、レンティーノはそれから少し悩む仕草を見せた。どうしたのかと声をかけようとすると、彼はゆっくりとシャツのボタンを外し始める。

クライドには、レンティーノがシャツを脱ぐのをためらう理由がよく解らなかつた。彼はシャツの下に半袖の白いTシャツを着ていたし、そのTシャツの柄が可笑しいというわけでもない。第一、Tシャツは白の無地だった。

「……気持ちが悪くなりませんか」

脱いだシャツをたたみながら、彼は自嘲めいた笑みを浮かべる。彼が何を指してそう言っているのか解らず、クライドは聞き返した。

「何が？」

彼は無言で右腕を腰の位置まで上げた。そういえば、彼が体型にコンプレックスを持つていることを忘れていた。レンティーノとしては、この細い骨ばった腕を人に見られるのが嫌なのだろう。クライドとしては、ノエルのほうがよっぽど痩せすぎだし気にすることはないと思うのだが。彼は左手につけたままの銀の時計を外さずに、ゲームに臨むようだ。

「おいクライド、何か賭けないか？　ただ勝負してもつまんねえし、罰ゲームつけるとか」

「いいな。じゃあ、負けたほうは勝った方の命令に従うつてのは？」

「うーん、まだ甘いな。何か面白いのいなかな」

グレンの声で、セルジが右手を挙げた。どんな案を出すのかと彼を見てみると、彼は面白そうに笑って言う。

「負けた方は勝ったほうが見てる目の前で誰かにキス」

「駄目。それはお前がノーチェにしたいだけだろ。つか、お前負ける気満々だな」

即座にグレンから却下されてしよげるセルジを、レンティーノは苦笑しながら見ていた。慰める気はないらしい。

「負けた方は、今日の午後に地下研究室の手伝いをするというのはどうでしょうか」

レンティーノの提案に、セルジはTシャツの袖を捲り上げて肩を出しながら顔をしかめた。その反応とここに来た初日に見た地下の研究室の様子を照合させれば、大体ここで何をするのが罰ゲームの内容になるのかクライドには解った。グレンも解っているだろうが、彼はあえてレンティーノに聞き返す。

「具体的には？」

「ホルマリン漬けを作ったり、投薬の結果に変死した実験動物を解剖したりするのですよ」

至って普通に言うレンティーノにグレンは少し視線を固定していたが、やがてにやりと笑みを浮かべてクライドの方を見た。グレン

もセルジと同様、半袖を捲って肩を出していた。十分に気合が入っているようだ。

「……これで決定だ。絶対負けたくなかったろ？」

「ああ、バッチリ」

クライドは頷いて、レンティーノを見た。レンティーノは動きにくいからか、革靴を脱いで靴下も脱ぎ、裸足になっていた。なるほど、裸足なら床で滑ることもない。クライドもそうすることに、スニーカーと靴下を脱いで部屋の隅に置いておいた。

「じゃあ、始めようか」

「よし。じゃあ俺たちは奥のゴール。クライドとレンティーノは入り口側でいいよな？」

「ええ、構いませんよ」

ここまで決まったところで、どうゲームを始めるか考えていないことに気付いた。誰かにホイッスルを鳴らしてもらうとかジャンプボールをやるとか、そういうことが出来ないのだ。さすがに四人では本格的にゲームをやるのは無理か。

「グレン、どうする？」

「ああ、んじゃあ…… レンティーノとセルジ、ジャンプボール。

俺とクライドは待機」

そういつてグレンは少し後ろに下がる。クライドも下がった。レンティーノとセルジは向かい合ったが、ボールはまだセルジが持っている。……と、ボールがひとりでに宙に浮いた。一瞬何かと思っってしまったが、これはグレンの見えない手だ。長いこと彼の魔法を見ていなかったせいで、忘れかけていた。

「用意いいか？」

グレンの声でセルジは膝を軽く曲げて構え、レンティーノはほんの僅かに腰を落とす。次の瞬間にバスケットボールは垂直に上がり、レンティーノとセルジがほぼ同時の、少しだけレンティーノの方が早いタイミングで地面を蹴る。

そこから先は考えるより身体が動いていた。上手くレンティーノ

のところに戻ったボールをパスしてもらい、鮮やかにゴールを決める。喜んだりしている暇はない。クライドを含め、全員が地下研究室行きにならないようにするために必死だった。一瞬の隙を突かれてグレンにボールを奪われる。彼を止めなければ。

「はい同点！」

セルジの妨害でグレンにたどり着くことができず、ゴールを決められてしまう。しかしここでレンティーノが落ちてきたボールを上手く取り、クライドに投げしてくれる。クライドは逃げるように走り、ゴールを目指す。

試合中、誰も口をきかなかった。ゴールのたびにグレンは同点だの追いついただのと言っていたのに、それすら後半ではなくなってきた。点数は同点のまま。これでは、負けてホルマリン作りという稀有な仕事をさせられることになる。何とかしなければ。

妨害しに来るセルジをかわす。高く飛んで、ゴールからは数メートル手前だがボールを投げた。ゴールの下でレンティーノとグレンがボールの奪い合いになる。外見からはあまり想像が出来ないが、レンティーノはやらせてみると意外にバスケットボールが上手かった。パスは的確だし、シュートすれば必ず決まる。

「なあクライド、これ決着どうやったら着くんだよ」

「決めてなかった！」

しかし、途中でゲームを放棄するわけにもいかない。クライドは走りながら考え、レンティーノにボールをパスしながらグレンに目をはしらせる。

「先に五十点取った方が勝ち」

「それでいこう。セルジ、あと十二点！」

ひょいと手を伸ばしてクライドに来たパスを奪って、グレンがにやりと笑う。奪い返そうと躍起になるが、ボールはセルジに渡る。セルジは狙いを定めてシュートを打つが、レンティーノが妨害したおかげで点は入れずに終わった。

段々疲れてきた頃、ついに残すところあと四点になった。グレン

のチームはあと五点、少しでもクライドの方がリードしている。このまま逃げ切れればいいのだが、状況は厳しい。

「レンティノー！ こっち」

「させないよ！ 僕はこれからデートが」

クライドチームが残り五点になった時点で、セルジの妨害が一層激しくなってきた。理由はノーチェとのティータムらしいが、クライドとしてはセルジの事情なんて知ったことではない。

「残念だったな！」

奪ったボールを投げる。ボールは綺麗な放物線を描いて、吸い込まれるようにゴールに向かった。しかし、入る直前で何かに弾かれたようにゴールから出てしまう。

こんな芸当ができる人間なんて、この空間には彼しかない。クライドはグレンを見る。

「反則だろ」

「そもそもこれ、ルールとかあんのか？ 妨害したのは俺の手だから、反則にもならないだろ」

飄々とかわされ、少しむっとする。いつものグレンなら、フェアプレーで清清しく戦ってくれるのに。よほど地下室行きが嫌なのだろう。

絶対に負けられない戦いになった。クライドは背後にグレンの見えない手の気配を感じ取り、レンティノーにボールをパスする。

「とりあえず投げる」

「解りましたっ」

グレンはレンティノーからボールを取ろうとするだろう。クライドは想像でレンティノーが真っ直ぐにボールを投げるところを思い描く。そしてそのまま、吸い込まれるようにネットの中へ……

「よし、一点」

「うっわ、お前今使ったろ？ 魔法」

小さくガッツポーズすると、グレンが非難めいた目でこちらを見た。だから返してやる。彼が言ったのと、全く同じように。

「そもそもこれ、ルールとかあんのか？」

「くっそ、もう手加減しねえ」

セルジが手を滑らせるところを想像する。零れたボールがグレンのところへ行き、それをクライドが奪って投げる。想像の力を使ってしまえば簡単にゴールに入ってしまうけれど、前はそうやってゴールしたから今回はあえて使わなかった。それなのに、グレンは見えない手でゴールを邪魔しようとしなかった。三点の差がつく。

「何、使うのやめた？」

「ああ。どうせお前の力には叶わないって」

「今投げる時は使わなかったよ、魔法」

「げっ、何だよ。使ってるかと思ってたのに。惜しいことした」

グレンはバスケットボールを見えない手でドリブルして見せた。

何だか奇妙な光景である。ボールはグレンの腰の辺りでひとりでに跳ねていて、グレンは見えている手で髪を結びなおしていた。レンティーノは面白そうに見ていたが、セルジは気味悪そうにしている。「俺ら負けそうだよな、セルジ」

「嫌だよグレン。今日を逃したら次にデートできるのは二週間後なんだ」

「俺だって地下でホルマリン漬けとデートするのは無理」

セルジとグレンは二人で苦笑しあいながら、ボールをパスしあっている。レンティーノとクライドは目を見合わせてくすりと笑う。

「罰則、厳しかったかもしれませぬ」

「そうかも。って、提案したのお前だろ」

苦笑気味に言ってやれば、レンティーノはそつとクライドに近寄ってきて、耳元で小さく囁いた。

「大丈夫です。ちゃんと考えがありますから」

「本当か？」

「ええ、試合が終わらないしかけをしています」

……試合が終わらない？ それでは、ミンイエンが実験の準備を整えたといってくるまで延々とこの試合が続くのだろうか。それは

さすがにないだろう。

「おいそこ、何の相談？」

「決まっているではないですか、戦略ですよ」

セルジの問いに笑顔で答え、レントイノは首に絡みついた髪を手で避けながら敵の動きを窺っている。

「そろそろです、クライド」

レントイノがにこりと笑い、クライドにボールをパスしてくる。ゴールに向かってボールを投げると、グレンがその放物線の軌跡上に魔法ではない実物の手を差し出してさえぎった。彼はなんと、ゴールちかくの壁を踏み台にして跳んだのである。

身長と跳躍力がなければそんなことをしてもゴールを阻止するのは無理だが、流石はアンシエントタウンのバスケット部エースだ。というか、最早これはバスケットボールの試合ではない気がする。

「セルジ、走れ！」

セルジはグレンの指示通り動いた。レントイノも負けじと走り、セルジをマークする。クライドはグレンと張り合いながら、レントイノの言った「そろそろ」の意味を考えていた。ボールを奪うチャンスができたが、考え事をしていたせいでふいにしてしまう。

「どうしたクライド、疲れたか？」

「いや、あ、うん。ちょっと疲れた」

ちよつと意味の解らない答えになりながら、クライドはグレンを追う。レントイノの唇が、何か意味のある言葉を告げるために動くのを見た。その瞬間、彼の背後から人が現れる。

すぐに動きを止める。グレンも当然、ぴたりと足を止めた。入ってきたのはノーチエだった。

「昼食できたよ」

「遅かったですね、ノーチエ。何かあったのでしょうかと心配しましたよ」

「ふふ、ちよつと頑張ってたんだ。皆疲れたでしょ？ 今日私はがつくつただけど…… 食べる？」

ああ、と納得がいった。ゲームが途中で終わるようにするために、レンティーノはあらかじめノーチェに呼びに来るように言っておいたのだ。絶対に誰も罰則を受けないことをちゃんと解っていたから、彼はあんな突飛な罰則を考え付いたのだろう。

「ノーチェっ。ありがとう、僕のために」

「いやいや、別にお前だけのためじゃないだろ」

セルジとグレンの会話を聞きながら、クライドはほっとしていた。たかがゲームで恐怖感を覚えたことなんて今まで無かったと思う。

レンティーノは着替えるといって一人で部屋に残ったので、クライドはグレンと一緒にセルジとノーチェの後を追って食堂へ向かった。

ノーチェの手料理は旬の野菜を使った、やはり肉類が控えめな料理だった。どうやら、ミンイエンだけでなくノーチェたちもあまり肉料理が好きではないようだ。

「なあ、何でみんなベジタリアンなんだ？ レンティーノはなんか外見的にそれっぽいけど」

グレンの問いに、セルジが苦笑した。

「地下研究室に一日中いてごらん。それでなおかつ解剖現場とかに立ち会つと、もう肉なんて食べられなくなるよ。ミンイエンは間近で何度もそれを経験してるから余計にそうなんだ」

「へえ。魚とかは？」

続けて質問するグレンに、今度はレンティーノが答える。

「皆さん、刺身は食べませんね。私もですが」

「すごいな」

頷いて言いながら、少し恐ろしい気もした。滅多に変わらない食べ物で趣向まで変えてしまうほど、この研究所では生々しい実験をしているということなのだろう。

今は忘れかけていた、この研究所にきて一番最初に抱いた感想を思い出す。ホルマリン漬けの水槽の前に立って吐き気を覚えたことも。

「「うちそうさま」

「足りた？」

「ああ、美味しかった。ノーチエって料理上手いんだな」

ノーチエは優しく微笑した。綺麗な人だと思う。白い肌にかかる黒髪のがなんとも言えず綺麗で、セルジがこの人に惚れた理由がわかった気がした。ノーチエは自分とそんなに年が変わらないのに、物腰も落ち着いていて優しい人だ。こんな人が、どうしてミンイエンと一緒に不気味な研究をやっているのか理解しがたい。

「花嫁修業の賜物なのですよ、クライド」

「こらっ、レンティーノ。余計なこと言わないの」

「師範は八ビなのですよね」

「もお……」

こんな風にレンティーノが人をからかって遊ぶこともあるのかと驚くと同時に、照れるノーチエの様子が何だか面白くて笑えてしまふ。

その日はそれから夕食もノーチエの手料理を貰って、布団へ入った。この研究所に残っていられるのも、残すところおよそ一週間。今のこの気楽な生活に慣れてしまったクライドは、一週間後のことが何となくまだ実感できていない。

第三十八話 決心

ついに実験当日の三日前まで来てしまった頃には、もうすっかりクライドたちは研究所の仕組みを解っていた。部屋を間違ってしまったこともなくなっていたし、小さな目立たないカードリーダーもすぐ見つけれられるようになった。慣れればこの研究所はそれなりに便利で、プライバシーも確立された環境だということに気づく。クロスワードかバスケットボールのどちらかしかできない環境の中で、クライドは暇になって研究員の仕事を手伝ってみようとした。だが、難しすぎて挫折した。

この日はアンソニーが疲れからか熱を出し、一日ベッドから起き上がらなかった。夜になってノエルが資料室から出てきて、この状態に気づいて早速診察を始めた。最近の彼は資料室に閉じこもって出てこないことが多い。研究資料やレポートなどを読んで、彼は日々豊富な知識を身につけているのだ。クライドはこのところ、考え事をするが多かった。静かな真っ白い部屋の中になると、何かを考えるより他にすることがない。

「どうだ？ トニーの容体」

訊ねてみると、ノエルは緑色の知的な瞳を細めて笑った。

「心配ないよ、ただの風邪だから。ここは製薬会社だし、薬がほしいうて言えば誰でもすぐ用意してくれると思うし。アンソニー、枕の位置を少し変えるよ」

アンソニーはぐったりしたまま頷いて、小さく咽た。そんなアンソニーをシェリーが不安そうに見つめている。ノーチェが研究所とは別の仕事でここをあけることが多くなるようになり、シェリーは最近ではグレンやクライドと行動を共にしている。

「安静にしていれば治るよ。今は辛いけど、頑張って」

「ねえ、暑いよノエル。布団いらない」

「駄目。身体を冷やすとよくないよ」

布団をはがそうとするアンソニーを優しく宥め、ノエルはグレンを手招いて何か耳打ちする。グレンは頷いて、黙って部屋を出て行った。冷房の効いた部屋の中でもタンクトップを着た彼の背中を見送りながら、クライドは小さくため息をついた。

「お前、無理しすぎなんだよ」
「だって」

反論してこようとするアンソニーの目の上に、クライドはそっと右手を被せた。驚いたのか、アンソニーは黙り込む。

「寝ろ。寝ないと直らないから」

「無理だよクライド、もう五時間も昼寝してるんだよ？ ……お腹空いたし」

「何だよ、食欲無いんじゃないのか？」

「あるけど頭痛くて起きられなかった」

柔らかな金髪をくしゃりと掴み、アンソニーはまた少し咽た。彼が体の向きを変えてクライドに背を向けたので、クライドは微笑してその背中を軽く叩いてやった。叩いてやりながら、肩越しに振り返ってノエルの方をちらりと見る。

ノエルは分厚い医学書を膝に乗せて読んでいたが、クライドの視線に気づいて顔を上げた。

「心配いらぬよ。彼は足も行動も速いからね」

その言葉から察するに、ノエルはグレンに何か調達するように頼んだのだろう。一応は安心して、出て行ったグレンが早く帰ってきてほしいとクライドは思った。

「アンソニー、大丈夫？」
「平気だよ。シェリーもそろそろ寝たら？ ここにいたら僕の風邪うつるかも」

心配そうなシェリーに向かってアンソニーはいつもの口調で言う。しかし、声に元気さは半分ほどしか残っていない。あまり病気をしないアンソニーだから、久しぶりに風邪を引いてやっぱり辛いのだろう。

「うづん、まだここにいる。そうだ、風邪治つたら一緒に屋上行こう？ レンティーノがハーブティーを淹れてくれるんだ」

「そうだね！ 前に出してもらったクッキー、本当に美味しかった」
言いながら咽るアンソニーの背中を叩いてやる。アンソニーは小さくありがとうと呟いた。

「あれ、ハビの手作りなんだよ。カフェにおいでって誘われたから、今度皆でいこっか」

「楽しみだなあ」

もぞりと彼の足が動く。このまま布団を蹴り上げそんな気配だ。

即座におさえれば、アンソニーは小さく苦笑した。

「ばれた？」

「ちゃんと布団かけてろって医者ノエルに言われたろ」

「だって暑いんだもん」

「あ、じゃあ治らなくていいんだな？」

「それはやだ！」

何だか子供みたいなアンソニーに笑える。くすくす笑いながらシエリーと顔を見合わせると、アンソニーは「笑わないで」と怒る。

二人分の笑い声とアンソニーの反論しか聞こえない部屋に、不意に足音が響いた。振り返ると、グレンが手に盆を持ってこちらに歩いてきている。盆の上には缶詰らしきものと、ガラスの器が乗っているようだ。グレンがそれをサイドテーブルに置くと、缶と器のほかにフォークと缶切りがあるのも解った。どちらも銀一色で、何だか手術用具のように見える。

「ほらトニー、食堂で桃缶貰ってきてやったぞ」

「やったあ！ ありがとうグレン！」

今までクライドに背中を向けていたくせに、グレンが声をかけたらアンソニーは飛び起きた。苦笑しながらアンソニーを見てみると、彼は缶切りを手に缶詰と格闘し始める。別に缶切りが使えないわけではないだろう。しかし、力が入らないのか手汗で滑るのか、とにかくアンソニーは缶を開けられずにいた。

「……クライド助けて」

「しょうがないな。貸してみる」

アンソニーから缶詰を受け取って、缶切りを缶の縁に引っ掛ける。割と軽い力で缶が開いたのは、缶切りが手にフィットして力が込めやすかったからだろうか。

「はい」

「ありがと！」

缶切りを盆に置いて缶の中身を器にあける。アンソニーはフォークを持って、嬉々とした顔で桃を見ていた。

「何だ、トニー桃好きだったか？」

「好きだよ。それに、ご飯食べてないから」

グレンの問いには桃をほおぼりながら答えて、アンソニーは幸せそうに笑う。そんな彼を見ているとちよつと和む。

桃を食べ終わったアンソニーは、五時間昼寝したと言った割にはすぐに眠った。そんなアンソニーを見て、グレンも自分のベッドに飛び込んで仰向けになる。

「じゃあ、あたしも寝るね。おやすみ」

「おやすみ」

既に睡眠中のアンソニー以外は、彼女を手を振って見送った。こうしてシェリーも部屋を出て行ったので、クライドももう寝ることにした。ノエルはまだ読書が続けるようだ。彼は目で字を追いながら、細く骨張った長い指でページの端を擦っていた。

ノエルがページを捲る音が耳に心地よく、気付いたら意識が遠く霞んでいた。

次の朝、クライドはアンソニーの容体を確かめてから一人で部屋を出た。レイチェルの墓に連れて行ってもらう少し前から考えていた、将来の話をハビにしたいと思ったのだった。

アンソニーは熟睡中で、額をそつと触ってみた時にはもう熱が下がっていた。これなら安心だろうと思って、グレンとアンソニーを

残してきた。ノエルは既に、資料室にいったのだろうか。姿が見当たらない。

「失礼します、ハビさん」

早朝に行かないとハビがいないことは解っていた。携帯のアラームをセットしなくても目が覚めたのは、多分緊張していたからだと思っ。

もしも一つだけもう一人のハビを止める方法があるとするなら、何なのだろう。クライドの考え事は、このところこれ一つだった。命をかけた実験のことより、このことを考えてばかりいたのだ。

実験の危険性についてはもう覚悟ができた。それに、万が一死にそうになった時には、自分で魔力を使うのを止めてしまえばいいのだし。だからクライドは実験のことよりも、ここから出たらきつと二度と会う機会がなくなってしまうであろうハビのことを考えていたかった。

「どうぞ」

声と同時に、白い壁の向こうからエタノールの匂いがふわりと漂う。ドアが開いて風が通った証拠だ。クライドは白い壁を抜けて、ハビの部屋に入る。

質素でありものがない部屋の中に、ハビが一人で座っていた。ベッドに腰掛けた彼は、靴下を履いている最中である。カフェの制服に着替えているところだったらしい。

「おはようクライド」

「おはようございます」

挨拶はした。しかしそこから何と切り出しているいか解らなくなつて、言葉が詰まる。ハビは怪訝に思ったのか、黒い靴下をつま先に引っ掛けながらクライドを見上げて小首を傾げる。

「どうしたの」

「あの……話があってきたんです」

「そつだろっね。で、何の話？」

革靴に足を入れ、座ったまま軽くつま先を床に当てるハビを見な

がら、クライドはまた黙り込んでしまふ。えっと、あの。それしか喉元に出てこない。もつと実のある言葉は出ないのか。自分を叱咤する。けれど穏やかな微笑をたたえて身支度を整えているハビを見ていると、何だか言葉は急に引っ込んでいってしまふ。

「あれから、考えました」

「うん。何を？」

「ハビさんのこと」

ハビが革靴のつま先を床にトントンと当てる音が、ぴたりと止まる。

「……男から告白されるのは趣味じゃないよクライド。悪いけど僕は」

「違いますって！ 寒気しましたよ今！」

危うく話が変わる方向に逸れるところだった。ハビもこれを冗談で言っただけで、くすくすと笑っている。クライドの緊張を取り除くために、ハビはこんな発言をしたのだろうか。気を引き締めて、もう一度本題へ進む。

「考えたんです。どうやってたらハビさんが、裏の人格に悩まされずにすむか」

「それは僕の問題だよクライド。君にどうしてもらおうとも思っていない」

一度勢いがついてしまえば、もうどんな事だって言えた。ハビが冗談を飛ばしてくれたおかげで、何とか拒絶されることへの不安感は消えた。もとよりクライドの決心は、否定されたくらいで消えるような弱いものではない。

これしかない、クライドは思ったのだった。だから拒絶される覚悟でハビに会いに来た。今言わないでどうするのか。今しか時間はないのだ。

「俺、精神科医になります」

悩んで悩んで、クライドが導き出した結果がこれだった。もう一人の彼を抑えるというのは、つまり二重人格を治すということに繋

がるのではないだろうか？ それに気づくまで長くかかりすぎた。

ハビともう一人のハビを、別人として見てしまっただろう。普通の医者には治せない、内面的な疾患を治すことができる職業。そんなものがあることをクライドは忘れかけていた。アンシエントタウンの精神科は総合病院の一角にあるけれど、そこに行っている人をクライドは見たことがないのだ。それでも、精神科がどういうところかは大体わかる。二重人格を治すとしたら、それは精神科医になって現代医学の力で何とかするしかないのではないだろうか。

「……え」

「だから、精神科で先生やります。そしたら俺がハビさんの二重人格を治せるかもしれない」

「クライド、何を」

「もともと興味がなかったわけじゃないですし。これしかないなって思いますしね」

ハビは小さくためいきをついた。馬鹿なことを、と呟きそうな雰囲気。それでもクライドはハビから視線をそらさなかった。もう決めたのだ、そう簡単にはこの進路を絶って他へ移ろうとは思わない。将来の明確な夢は定まっていなかったクライドだから、これを機に進路を確定してしまいたいとも思っていた。もうすでに医者という進路を定めたノエルや歌手になりたいグレン、時計屋になると言い出したアンソニーだが、クライドはまだ夢も目標も進路も決まっていなかった。ただ漠然と、人の役に立つことができればいいとは思っていたが、具体的に何をすればいいのか解らなかったのだ。

きっとハビに出会ったことによって、クライドの中で何かが変わり始めていたのだと思う。何も燃え盛る家から人を助け出したり、悪人をとっつかまえたり、人の身体を切って縫って薬を与えたりしなくても、人を助ける方法はちゃんとある。自分自身と戦っている世界中の人々を助ける、その一端を担うのだって立派な人助けだ。

「だからね、クライド。これは僕の問題だから、君には関係ないんだよ」

そう言われても、またレイチエルのようになってしまふ人が出るのは嫌だった。意思と関係なく人を殺して、それで広大な敷地をひまわり畑の姿を借りた墓地に変えるような哀しいこともハビにはもうしてほしくなかった。仲間達に危害を加えるかもしれないと、悩む彼を見たくなかった。

たとえそれが実験に向けた計画の一環だったとしても、ハビがクライドに向けてくれた優しさは嘘ではなかったと思う。クライドを弟みたいだなんて言って笑った彼の、その笑顔の裏に隠れた苦痛を知ってしまった今は、この穏やかで優しい父親のような男がこれ以上苦しまなくてすむ方法を是が非でも探したいし実践したい。

「お節介だと思えます、俺も。余計なお世話かもしれません。でも俺、もうあんなハビさん見たくないんです。……笑ってるくせに苦しそうな」

目を伏せたかった。けれどこらえてハビを見つめる。すると冷たい笑いが、ハビの顔に浮かぶ。

「それは君の自己満足だ。付き合いだつてこんなに浅いのに、君が僕を助けなきゃならないなんて可笑しいですよ。僕にはそれが偽善のように見えて仕方ないんだよクライド」

「そうかもしれませんが。俺ガキですから。でも、ハビさんがミンイエンたちを大事に思ってる気持ちはよく解るんで。付き合いなんて長さが全てじゃないですよ。ハビさんだつてそれをよく解ってるんじゃないですか？」

ハビはクライドを否定することをしなかった。けれど、頷いてあげがとうなどと言い出すような雰囲気は微塵もなかった。無言で口を閉ざしたハビは、ごつごつした大きな手を腿の辺りで組んで小さくため息をつく。

「今までずっと、こうやって“彼”と向き合って生きてきたんだ」

…今更、何も変えられないよ。君が精神科医になるのは大いに結構だけど、それを僕のためだと言うのはやめて。これは僕の、いや、僕と彼の問題なんだ」

その完全なる拒絶にも、クライドはまだ食い下がる。

「やってみなきや解らないじゃないですか。それに俺は、もともとハビさんを助けるためにここまでこようと思っただんですよ。レイチエルにも言われたし、それ以前に俺がしたいって思っただから。俺は、ハビさんの力になりたいんです」

また沈黙がおりた。けれど言うだけのことはもう言った。今後のハビの出方次第では、会うのを避けなければならなくなるかもしれない。それでも良かった。クライドはこの決意を、一番最初に彼に伝えたかった。

ハビはしばらく何か考えるように組んだ自分の手を見つめていたが、やがて立ち上がって革の鞆を掴んだ。そんな彼を視線で追うと、彼はいつもの笑顔で、けれど独り言のように呟いた。

「仕事、行くから」

カフェにおいては、今日は言われなかった。笑顔の彼はいつもどおりに見えるのにどこか白々しくて、だからこそクライドは心のどこかで、ああ、これで良かったんだと妙な納得をしていた。

淡い期待をしていないわけではなかった。けれどハビがクライドに好意的な返事を返さないことくらい話す前からわかっていた。それでもずっと前から告げたかったことを伝えることができたのだし、これでよかったのだ。あとは、彼に構わず自分で勝手をやればいい。仮に「じゃあ僕を治して」なんて言われたとしたら、クライドはその方法を躍起になって模索するあまりに逆に空回りしそうだ。一人でじっくり考えた方が、いい方法が見つかると思う。

レイチエルの墓参りに行った日に渡そうと思っていた時計は、渡すタイミングを見失ってまだクライドのポケットに眠っている。本当は今日渡しても良かったのだが、今日もタイミングがつかめなかった。仕方ないから実験当日に渡そう。

そつと踵をかえす。

第三十九話 実験開始

朝になって目が覚めたのは携帯のアラームのせいでも緊張のせいでもなく、ミンイエンの大声のせいだった。まだ眠いのにも、ミンイエンはクライドのベッドの枕元に手をつけてぴよんぴよん飛び跳ねている。ガキかよ、と呟いてやった。

「やったあ！ やったよっクライド、装置が完成したんだ！ あとは君達の調整が終われば、リイが生き返るんだ！ ねえこんなに嬉しいことってある？」

「……うっさい」

まだ寝かせて欲しい。けれど眠気にはやける思考が沈むたび、ミンイエンが耳元できんきん騒ぐ。煩い。

「ねえクライド起きて！ 起きてったら、クライド！ 調整しよ調整、ノエルはもう協力してくれてるよ！」

ハイテンションすぎる彼の声に苛立つ。目を擦りながら起き上がると、ミンイエンはクライドのベッドの周りを跳ね回りながら満面の笑みを浮かべている。頭をかきながら欠伸び、もう一度寝ようとする、ミンイエンはそんなクライドの腕をぎゅっと掴んで寝るのを阻止してくる。

「早く顔洗ってご飯食べて僕の部屋に来て！ 三十分で済ませてね、ばいばい！」

ミンイエンはこうして、嵐のように去っていった。気づけばアンソニーとグレンはもう朝食を食べ始めていたが、彼らもまだ眠そうだった。

いつだったか、ないと不便だからといって小さなテーブルを持ってきてもらったが、それはこの白いだけの無機質な空間に調和しつつも生活感を与えてくれる不思議なアイテムだ。そこでグレンとアンソニーが食事をしているところなんかを見てしまうと、ここが研究所であることなど思考からすぐに外れていく。

「おはよ」

「おはよどころじゃねえよクライド、今何時だと思っ？」

グレンは不機嫌そうに言い、半分くらい食べたホットドッグにケチャップをかけなおしている。その隣で、アンソニーはチョコチップの練りこまれた甘そうなパンを食べていた。

「六時？」

答えてから、携帯を見ればいいと思い立った。ベッドに戻って枕元から携帯を取ると同時に、アンソニーが面倒くさそうにため息をつく。

「正解は四時でしたー。ミンイエソってば、三時半くらいにきてずっと煩いんだから。ノエルはいつもの凝縮されたコーヒー二杯くらい飲んで、パンちよつと食べて行っちゃった」

この凝縮されたコーヒーというのは、ノエルのコーヒーにグレンがつけた名である。ノエルの淹れるコーヒーは何だこれと思うくらい苦く、それでグレンが成分を凝縮しているなどと言い出したのだ。クライドもその意見には賛成だった。一口でも飲んだら、あの味は半日くらい口の中に残りつづける。

「クライドの分もあるから、適当に食べよ」

サンドウィッチを一口齧りながら、グレンはテーブルの上に放置されたかごを寄こす。中にはメロンパンやらチーズトーストやらが入っていた。クライドは寝起きでまだものを食べる気分ではなかったけれど、仕方なくかごの中に手を伸ばした。食欲はあまりなかったから、メロンパン一つを食べきったところでクライドが再びかごに手を伸ばすことはなかった。

洗面台で身支度を整え、パジャマ代わりに着ていた服をジーンズとTシャツに着替える。そして携帯をポケットに入れて、クライドは部屋の外に出た。グレンとアンソニーも、それぞれ大あくびをしながら部屋の外に出て眠そうに目をしばたかせている。

「もう！ 遅いよ三人とも、早く来て！」

いきなり大声で叫ばれ、びくりと肩を跳ね上がらせる。眠気は一

瞬だけゼロになったが、ミンイエンが手招きながら走っているのを見ていたらまた復活した。欠伸が出てくる。グレンもアンソニーも眠そうにしながら、ミンイエンに急ぎ立てられて面倒臭そうに小走りになっていた。

ミンイエンの部屋は相変わらず『芸術品』だらけだったが、その殆どが壁際にぴたりとくっつけてある。広くとられた中央のスペースには、四人掛けのテーブルがある。この研究所らしい真っ白なテーブルには、白い箱のようなものが置いてあった。箱から伸びた四本のコードには、握りこぶし大の楕円形をした銀色の金属がついている。一体何の装置だろう。

「あれ、ノエルは」

辺りを見回しながら、グレンはミンイエンに問う。

「もう調整終えて準備中！ クライドたちが終わるまで、待機してもらってる」

ミンイエンは白衣のボタンをかけながらクライドを見てにっこりと笑う。グレンは早速椅子に座って、まだ指示もないのに実験器具を観察していた。アンソニーも普通に椅子に腰掛けて、グレンの手元を覗き込むようにして実験器具を見ている。クライドは少し迷ったが、ミンイエンが何も言っていないのでグレンの前に席をとった。「ねえ、これが蘇生用の実験道具じゃないの？」

不思議そうに声を上げたアンソニーに、ミンイエンは白衣のポケットに手を突っ込みながら首を横に振る。

「ううん、違う。これは皆の魔力の振動数を均一化する道具なんだよ。こうしておくとも魔力の相互干渉で被験体がショック死する可能性も少なくなつて、あらかじめの不具合が防げるんだ。たとえば魔力の逆流で身体的な負担を抱えて、放出を止めたとたんに心停止したりとか、逆に魔力を受ける方の肉体が魔力を受け切れなくて破損とか…… そういうことがなくなる。この装置を開発するためにマーティンが何度倒れたことか」

「言ってることよくわかんねえ」

両手を腰に当てて得意げに説明してくれたミンイェンだが、グレンに一蹴されてがっくりと頂垂れた。

「俺も」

「僕も」

続いてクライドたちが同じ意見を述べて頷いてやれば、ミンイェンは低く呻いて「うっそー」と頭を抱える。

「折角説明してあげたのに。理解してよ！」

「無理言うなよ」

「そつだよ」

必死に訴えてくるミンイェンと、頬杖をついて欠伸びながら片手をひらひらとふるグレン、そしてテーブルに突っ伏して寝そうになっているアンソニー。彼らを見ていると何だか笑えて、ここが今まさに実験が始まるうとしている研究室なのだというのが嘘のように思えた。

「とりあえず、その丸いやつあるでしょ」

丸いやつなど大雑把にと表現されても、箱かコードか金属製の楕円形をした塊しかないのだ。手に取るべきものはもう決まっているだろう。クライドは丁度携帯と同じくらいの大きさの楕円を手にとってみる。想像していたより重くて驚いたのと同時に、持った瞬間に一瞬だけ電気が走って更に驚いた。ミンイェンはそんなクライドに目もくれず、ゆっくりとテーブルの周りを歩いて一周しながら説明を続ける。

「その上に、左の手首を乗っけて。てのひらが上になるようにしてね」

指示通りに動き、クライドは手首の関節辺りを金属の上に載せた。ひやりと冷たい感触があったが、すぐに金属の温度は変わる。どうやらただの金属ではないらしく、その携帯ほどの大きさの金属はすぐにクライドの手と同じ温度になった。

「いいかな？　じゃあ、十分間外さないでね」

ミンイェンはテーブルに歩み寄り、箱の側面に手を這わせて何ら

かのボタンを押した。それがスイッチだったらしい。白一色のこの箱の中に、一体何が入っているのかクライドは気になってしまう。ミンイエンは軽々しく手馴れた動作で扱うが、きっと中身はクライドのわからない次元のもので出来ているのに違いない。

「……なあ、何も起こらないんだけど」

「これからが問題だよグレン、いま平均化が始まってるから。ちょっとずつ、ちよつとずつ変化が現れるはず」

グレンとミンイエンの会話を聞きながら、暇なのでアンソニーに声をかける。

「トニーは何か」

起こった？ そう訊く前にいきなりグレンが大声をあげて椅子から飛び上がった。すかさずミンイエンがグレンの手を押さえ、金属のかたまりから離れないようにする。

「痛っ！ なんだこれ」

グレンは左手から顔を背けるようにして、痛みを堪えているようだった。クライドには、今のところ痛みはない。ただ、何となく眩暈のような感覚はあるのだが。アンソニーはけろつとした顔でグレンを見て、首を捻っている。

「僕は何もないよ？ グレン」

「するだろ？ 血管ん中を何かの塊が通ってるみたいない気持ち悪い感覚」

「しないって！ え、そんなに気持ち悪い？」

「ああ、痛さも半端ない」

グレンだけ、何故だろう。クライドには痛みもなければ気持ち悪さもない。時々意識がふわりと浮くくらいで、それだってほんの一瞬のことである。不思議がっているのはアンソニーも勿論同じで、そんな彼を見てミンイエンがにっこりと笑みを浮かべる。楽しそうな顔だ。

「グレンは特に魔力の波形が荒いんだよ。トニーはもともと波が緩やかで均一化されやすいし、これは標準をクライドに合わせてるか

らクライドは何の問題もないし。君達に二週間待ってもらったのは、機器を作る傍ら魔力解析を行ってたのもあるんだよね。この機械便利でね、最大値と最小値の和を等しくしてから徐々に波形を正していく調整法を採用してるんだ。だから今、グレンは最大値を削られて最小値を増やされて魔力がとつても反発してる状態ってこと。暫くすればおさまるよ」

うへえ、とグレンが呟いた。今の話は半分も理解できなかったに違いないが、まだしばらく耐えなければいけないということはばかり理解したようだ。クライドはミンイエンの話にでてきた「標準」というのを詳しく知れたかったが、きつと小難しい話を延々とされることになるだろうから訊くのはやめておいた。代わりに訊ねたいことはまだあったから、一つきいてみる。

「じゃあ俺が微妙に貧血っぽいのは何で？」

「それは、クライドも機器に魔力を通してるからだよ。魔力使ってるから仕方ないんだ。魔力回復薬、エルフの薬をヒントに作ったのがあるからそれ飲んで」

こうしててきぱきと指示をしてくるミンイエンは、何だかいつもの子供のような彼とはどこかが違った。彼は始終楽しそうにしているが、その反面で仕事は完璧にこなしていた。机のパソコンから電波を飛ばして装置を動かしているようで、彼はモニターに映し出される波形をチェックして何事かをノートに書き込んでいる。

「グレンだいじょうぶ？」

「痛くはなくなってきた」

「そっか、良かった」

二人の会話をぼんやり訊いていると、グレンが器具こしにこちらをのぞきこんできた。

「クライド、お前は貧血平気か？」

「大丈夫だと思う」

答えたものの自信はなかった。いつ倒れるか解らないのが貧血だ。平気だと思っただけ、立ち上がったとたん急に倒れたりすること

だつてある。

「ミンイエンは暫くモニターを監視していたが、やがてこちらに歩み寄ってきて器具に触れた。すつと何かが左手から抜けるような感じがしたのを最後に、感覚は普通になる。貧血気味なのはおさまらなかつたが、左手の違和感はずぐにおさまる。」

「はい、クライドはこれ飲んで。グレンとアンソニーは準備室でノエルと準備してて。実験室はこの部屋の正面だから、そっちへ移動！ レンティノーがいるから、説明聞いといてね」

有無を言わせない勢いで、ミンイエンはクライドに白い紙コップを押し付けてグレンたちを外へ出した。何だか早くしなければいけないような気がして、クライドはコップの中身を一気に飲み干す。苦味もなければ甘味もない、けれど少し渋い味の水だった。ミンイエンは波形の出ていないパソコンの画面を閉じ、グラフのようなものに数値を記入してからパソコンも閉じた。腕にパソコンを抱えたミンイエンは、コップを置いたままついて来いとクライドに告げた。

「いよいよだよクライド。僕の九年間が、ようやく実を結ぶんだ！」
彼は言いながら、自室の正面にある実験室のドアをカードキーで開いた。流れてくる消毒液の匂いに、軽く息を吸い込む。真っ白いだけの壁を抜けて部屋に入れば、先に中にいた面々が一斉に振り返る。

「お待ちしていましたよ」

微笑むレンティノーが手に持っているのは半透明のコードだ。見れば先に行った三人は、部屋の奥からノエル、アンソニー、グレンの順に等間隔を保ちながら椅子に座らされていた。レンティノーはいつものスーツの上から、しわ一つない綺麗な白衣を羽織っている。「クライドも早く座って」

楽しそうなミンイエンに背中を押され、一番入り口側の空席にクライドも座った。座った途端に背後から首に黒い紐のようなものをかけられる。一瞬絞め殺されるのかと思ってしまったが、黒い紐を

かけたのがレントイノであることを知ってクライドは大人しく椅子に座ったままでいた。

「バックアップチームはセルジとノーチエ。メインは僕とレントイノ、ハビとマーティンはケアに回ってね」

ミンイエンの澄んだ声で指示が飛ぶ。部屋の隅のほうに、気づかなかったがハビとマーティンもいたようだった。二人とも白衣を着ているが、マーティンの白衣はしわだらけでハビのものは洗濯したてのように綺麗だった。

クライドのしている前で、レントイノは部屋の中央においてあった円筒形の水槽に歩み寄った。水槽の横から伸びた四本のコードを抜けないかどうかチェックしているようだ。レントイノの行動を見ていると、乱暴な手つきでマーティンにコードを渡された。どうやら、クライドを含めた四人で一本ずつコードを持っていなければならぬらしい。

「コードは手首に一周半巻きつけて。グレン、君は巻きすぎ。二周半もいらぬよ」

ハビが歩いてきて、各自の手元を確認していく。クライドのところにもきた。全くいつもどおりの彼で拍子抜けしたが、思ってみれば彼はいつだってそうだ。一年ぶりに再会した時だって彼は普通だったし、そんな彼を見ていると子供みたいな反応をする自分が何だか恥ずかしく思える。

「左で良い？ 利き手の方が魔力を操りやすいつて統計結果があるんだけど」

「あ、じゃあ変えます」

どう考えても緊張がちがちな自分と、いつもどおりの、けれどもいつもと違って白衣を着たハビ。圧倒的に優劣は決まっている。目に見えて解る。別に何かを争うわけではないけれど、あんな大胆な発言をした手前、クライドとしてはハビと対等に接していたかったけれどハビはいつだって、クライドより何段も上にいるのだ。

「準備はよろしいですか」

穏やかで柔らかいレンティーノの声に、手首から視線を離して顔を上げる。

「自動ドレイン機能の開発はできなかつたんだ。だから皆、合図があつたらちよつとずつ自分の魔力を水槽に送つて欲しい。直接的に想像働かせてもらつちやうと、魔力は余分に使われることになるから。ノエルとグレンも、直接自分の魔法を使つちやだめだよ。成分動かすのも見えない手でコード握りかえるのもだめ。トニーは問題ないかもしれないけど、予見するのはだめだからね」

一瞬、研究室は妙に間の抜けた空気に包まれた。ミンイエンがきよるきよると辺りを見回して「僕変なこといつた？」とレンティーノに訊ねている。

彼は十分変なことを言つたと思う。クライドを追っているなら、最低限クライドの使う魔法は知つていておかしくないと思う。けれど、他三人の魔法については詳しく知つていいるはずがない。

前に『影の男』としてのマーティンとであつた時には、アンソニーは視界を潰す魔法をかけただけだつた。彼が未来を予知できる魔法を使うところなんて、クライドだつて見たことがない。シェリーが少しだけなら未来を見ることが出来ると、彼に伝えたことなら知つている。けれど彼がその魔法を実際に使つたことはないはずなのだ。

グレンのこともそうだ。グレンが何か物を動かすことができると、仮に誰かが見ていたのならわかるだろう。けれど、それが手であることなんて仮に見ていたとしても解らない。ノエルの魔法にもおなじことが言える。彼の魔法だつて、見ているだけでは「ああこれ成分を動かしてるんだね」なんて納得できるものではない。

「お前いつのまにそんなこと調べたんだよ。俺たち、お前に何も言つてないだろ？ 魔法のこと」

言いたかつたことはグレンが代弁してくれた。頷きながらミンイエンをちらりと見やれば、彼はちよつと得意そうにした。クライドが知らない知識をミンイエンが口にするとき、彼はいつもこうやっ

て得意げにする。口にはしないがこの瞬間、グレンが絶対に「子供かよ」と思ったに違いない。

「君達が去年、街を出ている間。その間、僕ら研究所の捜索班を総動員して調べたんだ」

「へえー」

そんなに前から調べられていたのか。改めて恐ろしくなる。グレンも気味悪そうにしてし、アンソニーとノエルもミンイエンを横目で見ていた。

「さ、実験はじめるよ！ ああ、なんかドキドキしてきたっ」

「緊張してるのは僕らだよ、危険なのは僕らの身なんだから」

「でも生き返るのはリイなんだよ？ 早く生き返らないかな、リイ」
アンソニーと会話しながら、ミンイエンは円筒形の水槽の正面にぺたりと座る。

「ミンイエン、始めるのでしたら離れた方が良いでしょう」

声をかけたレンティーノに、ミンイエンは水槽の表面を触りながら首を横に振って見せている。

「やだ。僕、ここにいたい」

「仕方ありませんね」

まるで駄々っ子とその親か何かのようである。若干の呆れを覚えるが、呆れよりも少し哀れみが強く胸に残った。もしもリイが生きていて、ミンイエンと二人で暮らしていたら。彼ももう少し自立した大人になったのだろうか？ そう考えてしまうと、目の前の水槽に入った死体の生前を思ってしまった。気持ちが悪い。生き返らせてしまえば問題は無い。水に浸かった死体が空気を求めてもがき、ガラスの水槽を蹴倒して出てくればそれで、

「う」

ちよつとリアルすぎる想像に気持ちが悪くなった。だめだ、もう視界にあの水槽を入れてはいけない。

突然俯いたクライドの後頭部に、ミンイエンは何を思ったかいきなり触れた。振り向けばミンイエンは長い包帯をクライドの後頭部

から巻き始めようとしていて、目が合うと何も言わずにクライドの首を正面に向けた。

「クライドが僕の芸術品苦手だっけ知ってるから。グレンも欲しい？ トニーは魔力封じのアイマスク用意したけど」

視界は潰された。手首に感じるコードの固い感触や、つめたい椅子の感触が何だかりアルに伝わってくる。聴覚の隅の方で、水槽がこぼこぼと音を立てているのを捉える。あまり気にならなかった音は、今では微細に聞こえる。

「うわあー、何これすごい。透視できないや」

どうやら、アンソニーも目隠しをしてもらったらしい。グレンも隣で暑いだの髪が乱れるだのとぼやいているので、彼もおそらくそうだろう。ただ、ノエルはどうなのだろう。探究心の強い彼のことだから、リーの蘇生を目を背けずに最後まで見届けるに違いないとクライドは思う。

「じゃあマーティン、機材関連よろしく」

「ああ」

マーティンは返事して、少し離れたところへ向かって歩いていく。音しか聞こえないと、彼がどこで何をしているのが見えなくて少し不安でもある。

真後ろで拳銃を突きつけていたりしないだろうか。自分ではなくグレンに拳銃を突きつけていたらクライドの位置からではなかなか気づくことができない。

彼ならやりかねないと思うが、ミンイエンがこの場にいるから心配はないか。クライドはなるべく背後から意識をそらさないようにしながら、首を傾けて骨を鳴らした。

「では。これより、リー蘇生実験を開始します。ポジション確認、バックアップチームはセルジとノーチエ。メインは僕とレンティーノ、ハビとマーティンはケア」

いきなり慣れた口調でミンイエンはそういい、それに三人ならばらで返事が届く。

「はい」

「おう」

「うん」

声の聞こえた場所はばらばらで、クライドから少し入り口側に離れた場所からレンティーン、部屋の中央から少し奥へ行った辺りからマーティン、恐らくクライドから一番遠い壁際からハビの声が聞こえた。遠くに行くにつれて距離感はわからなくなっていくが、彼らは四人で別々の場所で待機しているようだった。

「メインスイッチ、どうぞ」

ミンイエンの声は凜と響き、どこかがかちりと音がした。

第四十話 手にしたもの

モーターの駆動音がごく静かに空気を震わせていた。クライドは手首に目を落とすが、視界は白い包帯にさえぎられているので自分の手がどうなっているのかはわからなかった。

スイッチを入れられた途端、右手は急に締めつけられた。肌コードが食い込むのがはつきり解り、コードの巻きついたところから末端への血流は一気に滞った。暫くすると収まってきたが、まだ手首をコードに締めつけられている感覚は消えない。

一応ミンイエンに言われたとおり、魔力は少しずつ流している。水槽の中からこぼりと小さく泡の音がした。知らず、肩がぴくりと跳ねる。

「安定期に入ったみたいだね」

ハビの低い声が、先ほどとは違う場所で聞こえた。方向的にミンイエンの傍にいるらしいが、レンティーノの機材の近くにいるのかもしれない。ハビはなおも続ける。

「冷氣系変形分子の存在を確認。これより第二段階へ突入。ミンイエン、入力端子を統一して」

キーボードを打つ音が聞こえる。誰かが歩く足音がして、衣擦れの音がすぐ後ろで聞こえた。聴覚だけで部屋の様子を想像するのは思いのほかつらく、すぐにクライドはこの部屋の広さを忘れた。

足音の主はクライドの背後で止まる。誰だろう、ミンイエンやハビではない。だとするとマーティンかレンティーノだろうか。

「失礼します」

レンティーノだ。そういえば、マーティンが近寄ってきた時に漂ってくるタバコの臭いがしなかったことを思い出す。視覚がない分、嗅覚も敏感になっていのだとひとり納得する。

結局何のためにつけられたのか解らないまま、背後にいたレンティーノに首の黒い紐を外された。レンティーノはちゃんと一人一人

に声をかけ、黒い紐を回収して回っているようだった。

「クライド、ぶっ倒れてねえだろうな」

「大丈夫、その心配はなさそう」

隣からグレンの声が聞こえて、何故かそれだけで少し安心した。

視界の無い世界の中で、音だけでグレンたちのことを認識するのは無理だ。彼らは誰も動かないし、呼吸の音だつて機材のモーター音に消されてしまう。

レンティーノが背後を通るのが解った。ノエルの方まで行って、戻ってくるころだろう。寄り道をしてハビやマーティンと何か接触したかもしれないが、そこまでは解らない。

「出力を二倍に拡大します」

「右端を最上に設定して」

「冷却装置をフル稼働させな、オーバーヒートしそうだ」

「マーティン、そこにいるなら念のため保護剤を用意しておいて」

「解ってる。ためえも近くにいるならそのバルブ閉めときな、前回それが失敗の原因だった」

慌しくなる背後に意識を集中させていた。しかし、正面の水槽の近くでミンイエンが小さく笑い声を漏らしたことで、クライドは再び水槽に意識を向ける。ミンイエンは時々クライドの背後にいる三人へ向けて指示を飛ばし、時々リイに話しかけていた。

「実験は中期にさしかかったよ。クライド、グレン、トニー、ノエル、本当にありがとう！ もうちょっと頑張って」

嬉しそうに彼が跳ね回る足音が聞こえた。苦笑してしまう。こんな状況でも、いや、こんな状況だからこそミンイエンは子供のようにはしゃいでいる。背後ではレンティーノとハビが専門用語を飛び交わせていて、マーティンが一人離れた場所で何か金属製のものを落として舌打ちをしていた。

「本番はここからです。気を引き締めて下さいね」

誰に言ったのか解らないが、レンティーノは恐らくクライドたちに向けてそう言ったのだろう。クライドは黙ったまま手元に目を落

とし、包帯の下でまばたきした。

何だ、意外と実験なんて簡単だ。そんなに多量に魔力を使っている感じもしないし、貧血の症状だってない。そう思っていた矢先のことだった。

椅子が転げる音がした。確かにした。同時に、誰かが床に倒れる音も。びくりと肩が跳ね上がるのを感じる。

「なあ、今の誰だ」

「俺じゃない」

「ノエルだよ！」

グレンからは否定が、アンソニーからは答えが返ってきた。目隠しの包帯を鷲掴みにして引き降ろし、左側を見る。ノエルはその細い身体を床に横たえ、ぴくりともしなかった。鳶色の髪に隠れて表情はわからないが、それが余計に不安を煽った。

アンソニーがアイマスクを額へずり上げ、グレンが椅子を蹴って立ち上がった。

「おいっ、ノエル！」

勢いよく倒れた椅子の脚が金属音を響かせる。

「落ち着いて下さいクライド。心配することなど何もありませんから」

「どうやったら心配ないって言えるんだよ！」

制止してくるレンティーノを振り切り、ノエルの傍まで走る。手のコードは巻きついたまま固まったようにほどけなかったので、外さないまま走った。コードは長かったから、ノエルの傍に到達してもまだ余りがあった。

「ノエル、大丈夫か」

声をかけてもノエルは起き上がらなかった。長い間睡眠不足を続けて、今日だってそんなに食べ物を食べずにここまできて、ずっと魔力を流し続けていることについてに限界がきてしまったのだろう。

魔法を使って起き上がらせようか。そう思ったとき、不意にミンイエンに手首をつかまれた。

「何すんだよ」

「駄目だよクライド、ノエルは平気だからリイの方に集中して。グレンもトニーも席に戻ってじっとしててよ」

「だから、何の根拠があつて平気だなんて言えるんだよ」

にらみ合いになりかけたとき、そつとコードがついているほうの手をつかまれた。見下ろせば、ノエルが弱弱しい微笑を浮かべながらクライドに向かって首を横に振っている。それ以上言い争うなという意味だろう。クライドは黙り込んだ。

ノエルはゆっくり身体を起こし、その場に座る。ずれた眼鏡を直しながらノエルは大きく息を吸つて、ため息として吐き出した。

「大丈夫だよクライド、僕はまだ生きてる。……辛うじてね。ミンイエン、僕にはこれ以上魔力は残っていないよ。外れてもいいかい？」

すぐには答えがこなかった。クライドはノエルではなくミンイエンを見て、頷けと心の中で念じる。勿論魔法は使わないように気をつけた。

「本当は最後の一滴まで欲しいんだ。でもそうすると君が死んじやうよね」

そこでミンイエンは少し考えるしぐさを見せてから、ノエルに微笑みかけた。そして彼に向かって手を出す。

ノエルはその手を借りて立ち上がり、少しふらついた。クライドは咄嗟に立ち上がってノエルの肩を支え、ミンイエンをちらりと見る。

「じゃあ、クライドが大変そうになつてきたら助けてあげて」

「わかった」

ノエルは手首に巻きついたコードを外し、椅子を立てなおして壁際に座った。最後に大丈夫かと声をかけて、ノエルが頷くのを見取つてからクライドも席に戻った。クライドの近くでマーティンが冷たい目で睨んでいるのが解つたが、無反応を心がける。

外していた目隠しをどうするか迷つた拳句、やはり再びつけるこ

とにしてぞんざいに目の上から巻きつけた。

挟まった前髪を包帯から引つ張り出しながら、常に隣から意識をそらさなかった。今度はグレンやアンソニーが倒れるかもしれない。そうならすぐの実験から外させて、彼らを休ませてやらなければ。

そう思った矢先、隣でグレンが小さく咽た。

「グレン」

呼びかけても返事が無い。ぞんざいに巻いた包帯をもう一度首まで下ろすと、グレンは自分の掌を見つめて固まっていた。

「おい、グレン」

「やべえ……」

かすれた声で呟いたグレンは、見つめていた手をぼんと膝に置いた。その掌には、真っ赤な血がこびりついている。全身の血の気が引いていくのを感じた。クライドも微動だにできなかった。放心したグレンは、自分が血を吐いたことを理解できていないようだった。

「その血、なんだよ」

「わかんない。どこも痛くない……でも、喉から血の味が消えない」

思考が徐々に白くなっていくような錯覚に囚われた。リイの水槽の中で激しく気泡が発生しているのを見ても、今はそれよりもグレンのことを考えたかった。何か出来ることはないかとポケットを探る。何も出てこない。携帯は止血の役になんて立たない。大体、どこからの出血なのかも解らない。

このままグレンが倒れたりしたら、今のクライドには何ができるだろう？ きつと、何もできないに違いない。それだけは避けたい、いや、避けなければならぬ事態だった。

「グレン、口あけて」

声に顔を上げると、ノエルがグレンの正面に立っていた。彼はポケットに手をいれ、ペンライトを取り出してグレンの口の中を覗き

込む。歯科医師のように慣れた手つきだ。呆気に取られて見ていると、ノエルはペンライトの明かりを消してミンイエンを手招いた。

「今まで、魔力の使いすぎで粘膜が痛む例はあったかい？」

「うん、それよくあるよ！ 毛細血管の破裂とか、ひどいときには胃や口腔内の出血なんかも」

「ありがとう、原因はわかった」

ノエルは小さく呟き、グレンの手に巻かれたコードを引つ張ってミンイエンに見せる。

「グレンも今すぐ魔力を止めるべきだよ。ミンイエン、彼も外してクライドも是非そうしてほしかった。けれどミンイエンは首を横に振る。どうやらまだグレンの魔力を搾り取りたいらしい。

目の前で彼が血を吐いても、ミンイエンときたらまるで他人事扱いである。原因は間違いなくミンイエンのこの実験にあるのに、彼はグレンを休ませようとは思わないようだ。

「グレンはまだ魔力を」

「君はグレンを殺したいのかい？」

静かに、冷たくさえぎったノエルの声にミンイエンは黙り、唇を噛み締めて頂垂れた。重苦しい沈黙が降りた。レンティーノたちは計器をいじったり機材を調整したりするかたわら、こちらの様子を窺っている。

誰かが何か言わなければ、グレンが腕のコードを外せない。こうしている間にもグレンの魔力は吸い取られているのだ。

「俺がちゃんとやれば問題ないだろ？ 頼むからこれ以上こいつらに無理させないでくれ」

「クライド」

責めるような声色でグレンに呼ばれるが、クライドは首を横に振った。

「いいんだグレン、お前はノエルと休んでろ」

こんなことを言っただくらいで引き下がるような男ではないと知っているが、今は黙って自分の言うことに従ってほしい。グレンはた

め息をついて反論をしかけたが、先にミンイエンから口を開いたのでグレンは黙る。

「わかった。君も僕と同じなんだもんね、クライド」

長い前髪に隠れた目元が、現在もし見えていたのなら。きっと優しく微笑しているに違いないとクライドは思った。ミンイエンにはまるで似つかわしくない、大人びたその微笑。何だか急に彼を年上に感じて、クライドは訳が解らなかった。

「どういう意味？」

何故そんな顔で笑うのか。大口をあけて無邪気に笑っているのがいつものミンイエンなのに。いつもの、なんて言えるほど長い間一緒にいたわけではないけれど、それでもこの二週間で解りすぎるくらいにミンイエンのことは解った。態度も表情もわかりやすい彼が、切なさにも似たこんな笑みを浮かべたところなんてクライドは見たことがない。

「自分で考えて！ グレン、ノエル、君達はなるべくクライドの近くにいてね」

ミンイエンは白衣の裾をはためかせ、水槽の傍に歩いていった。何の気なしに水槽の中身を見てしまい、クライドはすぐに目を伏せた。

やはり死体を生き返らせるなんて、あまりにも自然の理を無視しすぎているのだ。もうこうして死んでしまった姿を見たからには、彼が生き返った姿もクライドはきつと見ることができない。けれどこの蘇生実験はかねてからミンイエンが切望していたものであり、クライドはもう後へは引けないところまで完全に來てしまっている。終わらせるしかないのだ。

けれどクライドは、この実験が終わることが少しだけ怖かった。

「さあ、反応が進んできた…… もうちょっと、もうちょっとでリイは生き返る！ クライド、トニー、頑張つて！」

水槽の中からこぼこぼと気泡がはじける音がする。その音の感覚が狭まれば狭まるほど、背後の三人も慌しくなっていく。ミンイ

エンはただ恍惚として、円筒形の水槽に抱きつくようにしてべつたり両手と頬をつけている。

見れば、水槽の上の方はだんだん水がなくなってきていた。とりあえず一定の間隔で魔力を流す。そうしながら、まるで理科の授業で見た電気分解装置のように、内部に気体を発生させながら水分をなくしていく水槽の下のほうをみつめた。リーの足首が見える。即座に目を背けた。

このまま水槽の内部の水が干からびる時が、実験が終わる時なのだろうか。そう思った刹那のことだった。

「っ！ 皆離れて！」

ミンイエンの声があった。顔をあげて言われるがまま椅子から離れた。今のはほとんど条件反射だった。動いてから、何故動けといわれたのか考えたがすぐに放棄した。

水槽が一瞬膨張したように見えた。とつさに危険だと判断した。目を閉じて壁際まで後退する。リーの胸辺りまで水がなくなった水槽は、小刻みに揺れているようだった。ミンイェンは離れるといったくせに、自分はまだ水槽のそばにいた。

ピシ、と音が聞こえた。ひびか。ひびが入ったのか。外見からでは解らないが、どこかわかりにくい場所に亀裂が生じたに違いない。それでもミンイェンは動かない。

クライドは手首のコードをむしりとった。コードの中で、何かがぱきりと割れる音がした。

「ミンイェン、逃げなさい！」

レンティーノの鋭い声と同時に、強烈な破裂音が響いた。実験は失敗に終わったのだと、クライドは思った。思った瞬間頬や腕をガラス片がかすめ、心臓が凍りつく思いがした。顔を庇いながら走って部屋のすみへと急ぐ。身体の様々な場所に、小さな痛みを感じた。

辺りは急に静かになった。誰も何も言わなかった。顔を庇っていた腕を下ろすと、部屋の惨状が一目でわかった。真っ白い部屋は所

々が誰かの血痕で汚れ、壁にはガラス片が突き刺さり、ガラス片の散乱した床には水槽の中身の液体が放射状に飛び散っていた。

放射の原点に視線をうつす。粉々になったガラス片の上には、リイの遺骸とミンイエスが横たわっていた。もともとから死んでいるリイはともかくとして、ミンイエスもびくりともしていなかった。そんな、まさか。

部屋の隅にいたレンティーノが、息を乱しながら左腕を押さえて一歩踏み出した。よろけた彼は倒れそうになるが、それでもガラス片を踏みつけて一歩一歩確実にミンイエスに近づく。

「ミンイエ……起きて、下さいっ」

「おい、レンティーノっ」

よろけるレンティーノに手を貸そうとしたのか、マーティンは踏み出したが顔をしかめてその場に蹲った。見れば、彼の右の腿には大きなガラス片が突き刺さっている。ハビは愕然として、倒れたミンイエスを凝視していた。その身体にケガはないように見えたが、白衣の背中にはびっしりとガラス片が刺さっている。

まるで地獄だった。

グレンはその場に座り込んでいたし、アンソニーは頬から流れる血を半分なきそうになりながらごしごしと肩口で拭っていた。ノエルは黙ってその場に立っていたが、眼鏡のレンズが割れていたし、白いシャツには様々なところに血が滲んでいた。

「大丈夫か」

ようやく声を出すことに思い至った。三人は振り返り、啞然とした顔でこちらにかけよってくる。よかった、ちゃんと歩けるのならまだ大丈夫だ。

「それ僕らのセリフだよ！ クライド、血が、やだ、死なないでクライドっ！」

「落ち着けよトニー。クライド、平気か？ 目が」

半狂乱になるアンソニーの肩に手をおいてぼんぼんと叩きながら、グレンはクライドの右目を指差した。

「目？ 別に」

「見せて」

有無を言わずにノエルがクライドの髪をかきあげ、じっと目を見てきたので数回瞬きした。すると彼は安心したように微笑して、クライドから手を外した。

「まぶたの少し上、だね。びっくりしたよ、これで君が失明でもしていたらどうしようかと思った。傷口は浅いからすぐ血は止まるよ。でも魔力が暴走しないように……」

「ミンイエーンっ！！」

穏やかな声で話すノエルの言葉を、レンティーノの悲痛な叫びが切り裂いた。仲間達がちゃんと生きて、ケガをしているが大事には至っていないことを喜んでいる場合ではなかった。クライドは瀕死のミンイエーンのもとに駆け寄る。

ミンイエーンは血塗れでその場に倒れ、けれどちゃんと息はしていた。あんな至近距離で、マシンガンのように放たれたガラスの雨を浴びたのだ。重傷で当然だと思う。レンティーノは荒い息をしずめようとせず、震える手でミンイエーンの肩を掴んで揺すっていた。

「ミンイエーン、ミンイエーン、何をしていますんですか、起きて下さいっ！ ミンイエーン、私の声が聞こえていますか、ミンイエーン！」

必死で痛々しいレンティーノの姿を見て、ハビはやっと我に返ったのか凄く速さで駆け寄ってきてミンイエーン的首筋に手を当てた。脈があることを確認したのか、その焦った顔つきにほんの少しの安堵が浮かぶ。

「とりあえず起こすから」

レンティーノの手を外させて、うつぶせの彼を仰向ける。乱れた前髪の間から左目だけ見えた。彼は小さく呻き、薄く目を開けて、ハビとレンティーノの姿を捉える。

「リイは？」

クライドはさっと横目でリイの姿を捉えた。

そして、その姿勢のまま凍りついた。思考は停止した。ついでに

呼吸も停止した。瞬きすら止まった。

ミンイエンの隣に横たわっていたリィは、目を開けていた。

第四十一話 慟哭、そして終焉

何だこれは、ホラー映画の展開か。

固まったまま動けないクライドをよそに、レンティノーノが最上級に優美な笑みを浮かべて言った。

「自分で確認してみたらどうですか、ミンイエーン。実験は、成功ですよ」

その言葉に、身体力がぐたりと抜けた。その場にしりもちをつくと、ガラスが手の平に食い込んで痛かった。ハビが何気ない動作でクライドの腰を支えてくれたので、後ろに倒れたりはずすすんだ。

目の前が霞んだり歪んだりする。貧血が起こり始めたようだ。

「リイ！」

ミンイエーンは血塗れの頬を拭おうともせず、白衣についたガラスを適当に払ってからリイを覗き込んだ。見たくなかったけれど視線はそちらに向いていて、目に入ってしまったリイがこちらをみた瞬間に寒気がした。

「ごほっ、ごほ…… げふっ、君は、誰。怪我を、してる」

むせた。喋った。数分前までは死体だったはずの彼が。

腹から下はずぶ濡れだが、上半身は綺麗に乾いている。彼の声はまだ声変わりをする前のボーイソプラノで、掠れて小さかった。そんな声でも聞こえたのは、計器の類が全て機能を停止して、それを動かす人間も誰一人として口をきかなかったからだ。

「僕だよ、ミンイエーンだよ！ わかる？ 僕なんだよっ！ 怪我なんかどうだっていいよ、リイ、僕のことわかる？」

「ミンイエ……？ つ、ごほっ」

リイはミンイエーンの腕に起こされ、さらさらした前髪に指を差し入れてむせる。彼はむせながらも物珍しそうに辺りを見回し、目の当たりにした惨劇に眉をひそめていた。

「記憶、無いんだ。白衣の男に囲まれて、そこから」

「いっぱい話してあげる！ 僕ね、すっごく頑張ったんだよ。九年間も、リイを生き返らせるために」

「きゅ、ねん？ ごぼっ…… そんなに」

不安そうなりイ。対するミンイエンは、これでもかというほどはしゃいでいた。よく見ればその頬に涙が伝っているのが見えた。嬉し泣きだろっ。

レントイノが二人を見て微笑みながら、そっと左腕から手を外した。白衣の袖は真っ赤だった。微笑んでいるが、彼は痛そうに眉を顰めている。その隣で、ハビは白衣の裾を引っ張り、背中のガラスを落とすことに専念していた。マーティンの姿が見えないと思いいりを見回すと彼は足を引きずりながらミンイエンの傍に寄ろうとしていた。

リイはミンイエンの腕の中で、優しい笑みを浮かべる。ガラス片が散乱した血痕だらけの部屋で、無傷のリイは一人だけ浮いていた。「ありがと、ミンイエン。けど、凄く、身体が重いんだ。足も腕も動いてくれない。それに、喋るたびに喉が、焼かれてるみたいに、っ、痛くて」

言われて見れば、びしょぬれの半身は全く動いていないし血色も悪かった。ミンイエンはすぐに真面目な顔になり、指示を飛ばそうとして顔を上げて、今頃になってようやく怪我をした友人達のすがたに気づいたようだった。

「み、皆っ！ 大丈夫？ マーティン、あ、駄目だよ歩いちゃっ、血が！ レントイノっ、やだ、血が、ちよっと！ ハビも、背中っ、血が」

うるたえたミンイエンに不安そうな視線を向けたリイは、首だけ動かして周りを見回していた。何もかもが珍しいといった様子だったが、リイの顔も歪んでいた。喉が痛いのかもしれない。

「私は平気ですよ、ミンイエン。何をすれば良いのですか」

「僕も手伝っよ。おそらくこの中で、一番怪我が軽いのは僕だと思

う」

「いい、二人とも座って。僕がやる。レントイノ、リイをお願い」
ミンイエンは自分の首筋に刺さっていた小さなガラス片を取り除き、一番近くにいたレントイノの腕にそつとリイを預けて立ち上がった。ゆっくりとした動作で踏み出し、彼はマーティンの方へ歩いていく。

「マーティン、座って。とにかく座って」

「チツ、気にするな。こんな怪我、いつものことだろ」

「そんな、マーティンがそのまま歩けなくなっちゃったりしたら僕絶対に嫌だよ」

ミンイエンの泣きそうな気配を感じ取ったのだろう、マーティンは仕方なさそうにその場に座った。どんな状況でも、マーティンはミンイエンには逆らえないらしい。

「ねえクライド。グレンでもいいけど、怪我あんまりしてない誰か手伝って」

クライドはすぐに立ち上がってミンイエンを追った。血に染まった白衣を翻す彼は、痛みのためか時々小さくうめいた。

「大丈夫か？」

「いいんだ、こんな怪我少しすれば治るから」

いや、少しで治るような怪我ではないだろう。彼の白衣の前面は斑に真っ赤で、歩きたびに血塗れの小さなガラス片が白衣の裾を滑って落ちてちやりちやりと音を立てている。

「全然平気そうにみえない。お前がぶつ倒れたら実験はどうなるんだよ？ 何すればいい？」

ミンイエンは小さく頭垂れ、それからすぐに顔を上げて明るい笑みを浮かべた。

「その取っ手を引っ張って。ベッド出てくるから」

「お、本当だ」

言われるままベッドを出し、彼の指示に従って近くの棚からシートと枕を持ってきた。一応止血の想像はしておいたが、それでも既

に流れていた血は拭き忘れていたので、白いシーツの端の方にちよつと染みをつけてしまった。しかしその染みのすぐ傍にミンイエンが片手をついたので、すぐに気にならなくなった。彼の方がひどくシーツを汚していた。それはもう、クライドは比にならないぐらいの出血量だった。今すぐに止血するべきだと思う。

「ミンイエンストップ。そのまま動くな」

クライドは先ほど、シーツが入っていた棚にさらしのような布を見つけていた。それを持ってきて細く裂いて、ミンイエンの出血が激しい腹部や腕に巻きつけてやる。

ぞんざいな巻き方になったが、ミンイエンはにっこりと笑ってクライドに礼を言った。そして、嬉しそうに背後を振り返ってレントイーノを呼ぶ。

「レントイーノっ、立てる？」

「ええ、勿論ですよ」

リイを腕に抱いたまま立ち上がり、レントイーノはベッドまでゆつくり歩いてきた。時々がくと揺れる彼に、リイは心配そうな目を向けていた。

「大丈夫、ですか」

「ええ、すみません。ご不快でしょうが、しばらく我慢して下さいね」

妙な感じだ。これではどちらが年上か、まるで解らない。実際はレントイーノよりもリイの方が五つも年上だが、九年間死んでいた彼は一体年齢をどう数えていくべきなのだろう？

レントイーノはゆつくりとリイをベッドに降ろし、優しく微笑んだまま自己紹介を始めたりにしている。彼の長い本名にリイは戸惑い、それから微笑みながら自分も名前を名乗った。

「リウ＝リイ、シュイ。十五歳。ミンイエンと、父さんと母さんと、四人、で、港町に暮らしてっ、げほっ」

「ねえリイ、父親はもう死んだよ。母さんは闘病の末、四年前に亡くなった。僕ら、もう二人きりなんだ」

「……そっか。もう、いないんだね、父さん」

リイは憂うように目を細め、こちらを見て瞬きした。やはり慣れないため、目が合ったときにぴくりと反応してしまう。

魔力によって生を取り戻した彼。死体だった、彼。クライドは、その生命の概念に逆らった彼の存在を認めることに抵抗を感じていた。

「でね。リイは十五歳どころじゃないよ。九年プラスするからもう二十四歳なんだ」

「この、身体で？ いきなり？」

驚いたように言い、リイシュイはむせた。激しくむせて、ぎゅつと目を閉じて、彼はむせすぎて首から上を真っ赤にさせる。

「リイ、リイ大丈夫？ リイっ」

「へ、きだから」

泣きそうになるミンイエンがリイを抱き起こすと、彼は弱弱しく微笑んだままやはり何度かむせた。彼は少しの間荒い呼吸を繰り返していたが、落ち着いてきたためか、目を閉じて軽く深呼吸する。

「不完全な蘇生だけど許してね、リイ。まずは皆の手当てをして、それから僕もちよつと止血しないとふらふらしてきたから包帯とか巻いて、リイの検査するね。ね、今夜は一緒に月を見ようか。この屋上から見える月って、綺麗なんだよ」

ミンイエンは楽しそうに言った。言い続けた。

何か答えようとリイが口を開いた。刹那、彼の乾いていた咳に、ごぼつと湿った音が混じった。

「え」

小さく呟いたミンイエンは、腕の中のリイを見下ろして固まった。ミンイエンの白衣には、リイが吐いたどす黒い血がべったりとついていて。元から血塗れだったということを引きにしても、異常な汚れ具合である。

「え、やだ」

ぼつりと呟き、ミンイエンは確かめるようにリイが吐いた血の上

を指でなぞった。そしてその指に黒っぽい血が付着していることに気づき、愕然として指先を見つめている。

「ミン、イエ」

「やだよリイ、また離れ離れになっちゃうの？ そんなのやだ！」
ミンイエンは叫び、助けを求めるように辺りを見回し、リイを揺すり、最終的に彼を寝かせてクライドに掴みかかってきた。面食らったクライドは何を言うこともできず、ただ呆然と彼に揺さぶられていた。

「クライド、ねえなんとかしてよクライド！ 魔力を分けてよ、お願いっ」

がくがくと揺すられながらも、クライドは困っていた。これ以上魔力を使ったら、貧血で倒れてしまう。というか、既にミンイエンに揺すられているせいで気持ちが悪くなってきた。ぎゅっと顔をしかめたところで、背後から誰かの手がそっとミンイエンの手を掴んだ。

「無茶いうな、ミンイエン。直接、魔力、流したら…… 死ぬぞ、てめえの兄貴」

声の主はマーティンだった。肩越しに背後を振り返ると、マーティンは小さく舌打ちした。いつもどおりの反応だが、その顔色は青ざめていた。失血の量が多すぎたのかもしれない。彼に刺さっていたガラス片は、ぱっと見ただけでも深々と刺さっている感じが窺えたほどだ。もともと暗い色のズボンを履いていたから怪我の具合はよく解らなかったが、彼の周囲には血痕が大量にあった。

これでは、彼も危ないではないか。ミンイエンのことなど気にしている場合ではないのに、マーティンは何故こんなにもミンイエンを助けようと必死なのだろう。

「じゃあどうすればいいの？ やだよ僕っ、やだよ！ またリイと離れ離れになっちゃうなんて嫌！」

駄々をこねるように身をよじって掴まれた手を離させるミンイエンを、マーティンは苦しそうに見つめていた。ミンイエンはそれき

リマーティンの顔を見ることなく、リーの両肩を掴んで揺さぶる。

「リー、だいじょうぶ、リーっ」

両目からぼろぼろ涙をこぼしながら、ミンイエンは狂ったようにリーを呼び続けた。リーは困ったように笑い、すぐに表情をゆがめて咽る。白いシーツはあつというまに赤黒く染まっていた。アンソニーが小さく息を呑んで、クライドの袖を引いた。大丈夫だよと宥めてやる。ノエルとグレンはまだ壁際において、二人とも少し辛そうだった。失血しているのだろう、二人のもとに戻るべきだろうか。けれどミンイエンは目の前の現実を否定するように激しく首を横に振り、息を荒げながらリーの名を叫ぶ。誰か抑える役が必要だった。

「リーっ！ やだよ、リー、ねえリーっ」

かれはじめた彼の声を聞いて、胸がしめつけられたようになった。今まで黙っていたハビは、おもむろに目を伏せてミンイエンの肩に手をやり、そっと抱き寄せるようにしてリーを揺するミンイエンを止める。

「大丈夫だよ、ミンイエン。リー、喋れる？ ミンイエンを落ち着かせてあげて。辛いかもしれないけど、頑張ってくれるかな」

優しく言うハビに向かって少し苦しそうな顔をしながらも、リーは頷いてミンイエンの名を呼んだ。ミンイエンはしゃくりあげながらハビの腕の中で大人しくなり、やがてよろめきながらリーの傍に寄る。

「リー」

涙声で呼ばれたリーは、苦笑して少し咽た。彼の喉から血の塊が吐き出されるのをみたミンイエンは、がくがく震えながらその場に膝をついた。そして嫌だよ嫌だよと何度も繰り返しながら、今度は静かに泣き崩れる。そんなミンイエンをベッドの上から身体を動かさずに見下ろして、リーは彼を柔らかな声で呼ぶ。

「ミンイエン。話、して」

「でも、リーの身体、もう壊れかけてる。僕には解る。今まで何回

も、実験に失敗してきたんだ。いろんなエルフが、色んな人間が、僕のせいで死んだ」

それでも、リイはひるまなかった。

「聞かせて。時間がないなら、せめて、君が僕のために、してきたこと」

そこでまた大きく咳き込み、リイは目じりに咳き込みすぎて出た涙を溜めてミンイエンを見た。

「ね、ここに、いる人。皆、ともだち、なの？」

優しい声だった。震えてはいたけれど、ミンイエンが泣き叫ぶのをとどまる効果は十分にあつたようだ。ミンイエンはこくと頷いた。何度も頷いた。声を上げずに泣きながら、床に涙をばたばた落としてミンイエンは頷く。

「リイが、生き返るの、皆が待つてたんだよっ」

「うん、ありがとう」

「僕、リイがいないと生きていけないっ」

「うん。僕も、おなじだよ」

ミンイエンは顔を上げた。クライドは黙って二人の挙動を見守っていた。またミンイエンが暴れはじめたら止めてやらなければ。

決意した直後に後ろでマーティンが軽く呻いたから、振り返つたらまた舌打ちされた。彼なりに、無様な姿を見られたくないと思う気持ちのあらわれなのだろうか。それとも単に、貧血で気分が優れないために八つ当たりをしてきただけなのだろうか。

「寂しかったっ」

「うん」

「九年もこの研究所で君のことばかり考えて過ごして、でも君はいなくてっ」

「ん」

静かに相槌を打つのがやっとのリイに、ミンイエンは大きく肩を震わせて泣きながら言葉をぶつけている。床を見たまま白衣の裾をぎゅっと握った彼は、親の言うことに反発して泣きじゃくっている

子供のようだった。

「僕、ずっとずっと怖かった。ずっとずっとずっと哀しかった。寂しかった。苦しかった。泣きたかった。泣いた。リイがいなくて僕、狂いそうだったんだっ」

床を殴りつけて、ベッドにごつんと頭をぶつけて、ミンイエンはまだなき続けていた。レンティーノが黙ってミンイエンの傍に歩み寄って、彼の肩を抱き寄せた。

ベッドの上に寝たままのリイは、哀しそうに目を伏せてぽつりと呟く。

「そっか、ミン……ごめん、ね」

すつと顔を上げたミンイエンは、ゆっくり立ち上がってリイを見下ろす。レンティーノは座ったままでいた。動く気力がないように見えた。

「リイだけが僕の家族なんだよっ」

もう声も出せなくなったのか、リイは何を言われても頷くことしかしなかった。

「僕にはリイしかないんだよっ」

頷くのも辛くなってきたのか、やがてリイの動きは殆どなくなった。それでも彼はミンイエンを見つめ、必死に彼の話を聞いていた。

「リイ絶対死なないで。もう僕をひとりにしないで！」

涙で顔をぐしゃぐしゃにして、ミンイエンは叫んでいた。彼がずっと抱えていた孤独は、今ここで爆発していた。クライドは呆然と彼らを見守り、時々辺りを見回して皆の無事を確認しながら突っ立っていた。

リイは暫く黙っていたが、やがて小さく口を開いて何事かを呟いた。ミンイエンはそれを聞いてリイのそばに屈みこみ、彼の口許に耳を寄せて震える声でリイの名を呼ぶ。

「もういちど、言って」

ついに、返事はなくなった。

その事実を、ミンイエンは受け止めようとしなかった。

「ねえリイ、何て言ったの？」

リイは虚ろに目を開いたまま、動かなくなっていた。歩み寄って首筋に触れてみると、もう脈動は感じられなくなっていた。

まだほんの少し、暖かさは残っている。しかしミンイエンのたった一人の兄は、再び死んだのだ。もう二度と目を開けることはないだろう。彼の青ざめた身体は既に冷たくなり始めていたし、そんな彼を見てミンイエンは何をすることもできずに呆然と固まっていたのだから。

目を閉じたその直後に何らかの処理をくわえれば、もしかしたらまたホルマリン漬けのようにして保存しておけたのかもしれない。けれどももう、今のリイはただの死体だった。

グレンとノエルが顔を見合わせた。アンソニーがクライドの袖をぎゅっと掴み、不安げに見上げてくる。

「もう、無理だよ」

呟いた声は予想以上に響いて、この場にいるミンイエン以外の全員がクライドをじっとみつめていた。責めるような目だった。

「ミンイエン、冷凍保存の準備に入ろう」

ハビは静かにミンイエンに歩み寄った。レンティーノは立ち上がり、厳しい表情でベッドの上に横たわっているリイを見下ろしていた。マーティンは足を引きずるようにして、それでもミンイエンに歩み寄ろうとしていたが途中で崩れ落ちる。呆然と立ち尽くすミンイエンにハビの手が触れたとたん、ミンイエンは物凄い勢いで彼の手を振り払った。

「聞いてたよねリイ！」

ミンイエンは嬉しそうに満面の笑みを浮かべていた。言いながら彼はリイを抱き起こし、瞳孔を開ききったその目を見つめて幸福そうにする。

「僕の言葉、聞いてたよね！」

ずっと笑っていた。ミンイエンは壊れたように、「聞いてたよね」を繰り返して、楽しそうに笑っていた。リイが生きて、自分の言葉を

聞いてくれているのをその目に映しているかのようじ。

小さくため息をついて、ハビはミンイエンの肩に手をかけた。今度は両手がふさがっているから、ミンイエンも振りほどこうとしなかった。代わりに、今度はハビに向かって笑いかけた。無邪氣そのものの笑顔に、何故かぞつとする。

「ミンイエン、解ってるでしょ」

「ハビっ、聞いて！ リイね、僕とずっと一緒にいてくれるって言ったよ。もう僕は独りじゃないんだよ。リイとずっと一緒にいられるんだよ！」

思いつめたようなハビの声にも、ミンイエンは壊れたように笑いながらそう答えただけだった。ミンイエンはリイが死んだと思っていないのかもしれない。見ていて胸が痛くなった。

「ねえハビ、隣の部屋にベッドを用意してよ。リイのオフィスは今日からそこね！」

ハビは何も言わず、ミンイエンの手をぎゅっと掴んだ。ミンイエンは不思議そうにハビを見上げて、それからリイの顔を見てまた微笑む。

「リイ、一緒にいてくれるって」

「ミンイエン」

「たった一人の家族だもん」

ミンイエンはにこやかだった。レントイノが苦しそうに視線をそらし、マーティンはいつもの嫌味な笑みすら忘れて呆然としていた。

しんとした空気の中、ハビはミンイエンの手を掴んでリイを離させた。彼は無表情になってリイをベッドに寝かせ、ミンイエンの肩を両手で掴む。

「可能性を潰すつもり？ そのままだと腐敗が進む。蘇生しきつてない下半身から徐々に腐敗していつて、最終的には蘇生が不可能になるんだよ。君はそれを、解ってるでしょ。もともと蘇生したとき、動かなかった腕や下半身は死体のままだったってことも」

ミンイエンは答えなかった。答える代わりに微笑を消し、その場に
ずるずるとへたり込む。

「っ、うあああああああっ!!!」

ガラスの落ちた床にべったりと身体をつけて、ミンイエンは大声
で泣いた。泣きじゃくった。ハビは黙ってリイの死体を抱き上げて、
部屋を出て行った。

実験は終了した。最悪の結末で終わった。クライドはなす術もな
く、泣きじゃくるミンイエンを見下ろして立ちすくんでいた。

第四十二話 世界を失くした少年

胸が締め付けられるような、そんな息苦しい時間が永遠のように長く感じられた。ミンイエンは大声で泣き叫び、声を嗄らして否定の言葉を吐き続けていた。彼はずっとそんな調子だったのに、彼をよく知るレンティーノもマーティンも哀しげに立ち尽くしたままだった。

いや、何も言えないのが当然だと思う。九年も追い求めていた唯一の肉親が、やっと蘇ったと思いきやすぐに動かなくなってしまうなんて。一瞬の光を見せ付けられ、それを目の前で踏みにじって消されるような、そんな絶望がミンイエンを満たしているのだろう。ミンイエンと長く付き合っているからこそレンティーノたちはそれを解っていて、何も言うことができないに違いない。

誰も動かない状況に耐えかねて、クライドはそつとミンイエンに歩み寄って彼の肩を揺する。

「ミンイエン、リーの処置いいの？」

「っ、一緒にいるって言った！ まだ一緒に月だって見てない！」

リーは僕に嘘つかない！ いつだって一緒だって、言ったんだっ」

クライドの手を振り払い、ミンイエンは華奢な肩を大きく震わせで泣いていた。手の施しようがなかった。そのうち目の前から色が消えていくような錯覚に陥り、貧血がひどくなってきたことを悟る。

この研究所にきてからというものの、ミンイエンたちはずっとディアド語でクライドに接してきていた。だから言葉の面では問題は無いが、傷口に滲んだ血の暴走を止めるのが辛くなってきた。

「ミンイエン、いい加減に認めろ」

「ねえ、どうしてクライドは何もしてくれないの？ 想像できるんですよ？ リイが生き返るところ想像してよ。想像して、早く想像してよ！ 想像してっ！！」

不意に立て膝になってクライドの服を掴み、ミンイエンは叫ぶ。

枯れた擦れ声で、声が裏返るほどに力を込めて叫ぶ。あやうくクライドはガラス片だらけの床に倒れこみそうになるが、なんとか踏みとどまった。

「無理だよ」

どう頑張っても、答えはそれしかない。クライドはミンイエンの腕を掴んで服を離さる。ミンイエンは震える喉から搾り出すように声にならない声を上げて、その場に突っ伏した。彼が鼻をすする音だけが、静かな部屋に響く。

残酷なことをしてしまったような気がした。彼の最後の望みを絶つたのは確かにクライドだが、それは仕方のないことでクライドにはどうしようもないことだったのに。それでも、目の前で崩れるように突っ伏して泣いている彼に、罪悪感のようなものを覚えてしま

う。

「ミンイエン、行こう。リイのとこ」

今まで黙っていたアンソニーは、ミンイエンの細い腕をぎゅっと掴んで引き上げる。彼は立ち上がるうとはしないで、アンソニーに腕だけ持ち上げられた形でまだ泣いている。黒髪の間に見えた顎を伝って、涙が床にぽたりと落ちた。

「僕…… 九年間何やってたんだろう」

喉を壊すほど慟哭した彼の、かすれた咳きは空気を凍らせた。

「リイはまた死んだ。僕はリイを二度殺した」

「ミンイエン、それは間違っています」

ふらつきながらもミンイエンに歩み寄り、レントイノーは首を横に振る。蜂蜜色の柔らかな長髪がさらさらと揺れた。

「僕の希望は消えちゃった。僕は一生、ひとりきりなんだっ」

吐息交じりの声に、クライドは胸を押しつぶされたように感じた。レントイノーは一瞬だけ傷ついたように表情をゆがめたが、それでも説得を諦めたりはしないようだ。

「貴方には、私たちがついていきますよ。ひとりきりではありません」
「それでもリイは戻ってこないんだっ、僕のせいだ」

また声を荒げるミンイエンの背中を、レンティーノはそっとさすって微笑んだ。

「蘇生は何度でも可能ですよ、貴方が頑張ろうと思う限り」
てつきり、これを聞いたらミンイエンは落ち着くのだろうとクライドは思っていた。けれどミンイエンはわっと泣き出し、レンティーノの白衣の裾をぎゅっと掴んでまた崩れ落ちた。

「解ってるんだよ僕っ、全部、なにかも！ 冷凍保存だって通用しないよ、九年も前の身体をそのまま常温で保存するなんて、やっぱり無理があつたんだっ。僕はそれを知ってた、ハビが言ったとおり全部解つてた！ 抱き起こした時の背中とか腰の細胞が崩れてるの、僕はずつと感じてた。リイがどんどん壊れてくのを、僕は見て見ないふりをしたっ。本当は蘇生なんかできる方が可笑しいぐらい、リイは最初から壊れていたのに！」

もうだめなんだ。僕のせいなんだ。二度と戻ってこないんだ。ミンイエンは繰り返して叫び、レンティーノは哀しげに俯きながら膝をつき、力なくミンイエンの腕を掴む。ミンイエンの小さな身体は、そうして振るえて丸くなっていると余計に小さく思えた。

クライドは動くに動けず、その場に根が生えたように立ち尽くしていた。ミンイエンは泣き止む気配を見せなかったし、レンティーノも微動だにしなかった。この部屋には酸素がないのかと思うぐらいに、呼吸が苦しい。

けれどそんな中、不意に背後で誰かが倒れた。

どさ、と重たい音がした後、ガラス片が散らばる甲高い音がした。反射的に振り返ると、マーティンがその場に横倒しになって呻いているのが目に入る。

「おいっ」

「っ、来るな。てめえにだけは助けられたくねえ」

とは言われたものの、白い床は彼の両脚から出た血で汚れていた。鮮やかなまでの白と赤のコントラストに、眩暈を覚えた。

血まみれのガラス片がそこらじゅうに散らばっている様子を見て、

敵だとか味方だとか好きだとか嫌いだとか言う前に助けなければとクライドは思った。このままマーティンが死んだらミンイエンはもつと壊れていくだろう。

もともと死んでいたとはいえ、リイを見殺しにしてしまったという負い目が心のどこかにあったのかもしれない。だからもう、クライドは自分の前で誰かが死ぬのは絶対に避けたかった。

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ」
「触んなっ」

弱弱しく抵抗するマーティンにため息をつき、クライドはシーツのあった棚からミンイエンにまいてやったのと同じ布を持ってきてやった。

「圧迫止血くらいは出来るだろ？ それ以上にどう処置していいか解らないから」

不機嫌そうに布を奪い取り、マーティンは寝たままの姿勢で脚にそれを巻きつける。白い布はすぐに深紅に染まった。目を背けて眉根を寄せると、マーティンは静かに訊ねてくる。

「ミンイエンは」
「レントイノのところまでまだ泣いてる」

即答すると、マーティンは腕で身体を起こそうとした。力の入らない腕で身体を支えることにはやはり無理があつて、マーティンは失敗して床に倒れこんだ。

「チツ」

いつもどおりの舌打ち。自分の身体が上手く動かないもどかしさは、クライドもよく解っていた。貧血で動きの鈍くなった自分の身体には、苛立ちすら覚える。まして今のマーティンは、失血死しかねないぐらいの量の血を失っているのだ。嫌いな相手とはいえ、共感を覚えてしまう。

「……この脚じゃ、行ってやれねえな」

いつもの嫌味な態度は、そこにはなかった。純粹にミンイエンを思う気持ちだけが、今のマーティンを動かしているのかもしれない。

クライドとこれ以上顔を合わせていたくないのか、マーティンはごろりと身体の向きを変えてガラス片だらけの床に仰向けになる。青い長い髪の毛先辺りに、赤黒い血痕が付着しているのが見えた。

「おい、レンティーン」

呼んではいるものの、マーティンはレンティーンの方を見ずに天井を見上げたままだ。

「何ですか、マーティン」

答えたレンティーンも、暗い顔でミンイエンを見下ろしたままだった。ミンイエンは大きく肩を震わせながらまだ泣いていたが、泣き声はもう上げていなかった。代わりに時々、かすれた呻きのような声が漏れる。

マーティンは白衣の腹部をぎゅっと掴み、痛みを堪えるように小さく呻き、搾り出すような声でようやく言った。

「ミンイエン、頼んだからな」

「っ！」

弾かれたようにレンティーンがこちらを向いた。古風な丸眼鏡の奥の瞳に、絶望が広がっていく。白衣の裾に縋るミンイエンを振り払うこともできずに、かといって床に倒れて血塗れになったマーティンを助けに来ることもできずに、レンティーンは全ての動きを放棄してマーティンを見つめていた。

「や、」

掠れた吐息のような声が、レンティーンの方を振るわせ

た。
「冗談はよして下さい、マーティン」

「大丈夫、脈はあるから」

震えるように息をして、レンティーンは倒れて目を閉じたマーティンを見つと見ている。近くで見れば、ちゃんと呼吸をしている証拠に痩せ型ではあるがそれなりに筋肉のついた胸や腹部が上下しているのがわかる。それに、顔を見れば閉じた瞼の下の目が少し動いているのだから解った。レンティーンが心配するのも無理もないこ

とだと思うが、彼は死んでなどいない。

「マーティン、嫌がらせですかそれは。声が聞こえているならすぐに返事をして下さい」

大丈夫だといったはずなのに、レンティーノは必死だった。穏やかな普段の彼はどこかへ消えて、彼は焦ったような早口でマーティンを必死に呼び起こそうとしていた。マーティンは彼の声が聞こえてはいるだろうが、返事をするような気力はないようだった。

「レンティーノ？ 大丈夫だから」

彼はクライドのほうを見ようとなどしなかった。じつとマーティンから目をそらさずに、ミンイエンの手を掴んだまま彼は必死に呼びかけ続ける。

「マーティン、目を開けなさい、今すぐに」

ちゃんと声に反応しようとしているのだろうが、マーティンは目も開けなかったし声も出さなかった。代わりに、眉根がほんの少しだけ寄る。

「マーティン！」

思わずびくりと身を竦めてしまうほどに、レンティーノは大声で叫んでその場に座り込んだ。乱れた蜂蜜色の髪の間から、丸眼鏡のレンズが反射して冷たく光る。ミンイエンがそんなレンティーノにぎゅっと抱きついて、レンティーノは彼の髪をひどく優しい手つきで撫でながら肩を震わせる。

「これ以上、私から何を奪おうと言うのですか……」

悲痛な、限りなく悲痛な呟き。独りになったのはミンイエンだけではないのだ。リーの遺体を持ったままどこかへ行ってしまった八ビヤ、壊れたミンイエンや、倒れて動かなくなったマーティンを前にして、レンティーノも身を裂かれるような孤独にのたうっているに違いない。

「グレン。手伝ってくれないかい」

静寂を、今まで黙って壁にもたれていたノエルが裂いた。グレンは無言で頷き、ノエルを見て次の指示を待つ。ノエルは左のレンズ

が割れた眼鏡を、手で軽くずり上げてからグレンの方を向く。

「マーティンをこのベッドへ運んで」

リーの寝ていたベッドを整えながら、ノエルは簡潔にそう指示を飛ばす。

「何をするのですか？」

焦ったようなレントイーノの声に、ノエルは穏やかに答える。

「処置はできないかもしれないけど、一応状態を確認するんだよ。ガラスだらけの床にずっと寝かせておくわけにもいかないし」

グレンがクライドの隣にしゃがみこみ、力なく目を閉じたマーティンの背中に手を差し入れた。クライドも手伝うことにして、グレンがマーティンを抱き上げた時に、背中や髪についたガラス片を手で払ったりした。

「クライドは、さっきの布。あれをもう少しもってきて」

「解った」

「アンソニー、君はハビを呼んでくれるかい？」

「わかった！」

脇腹を押さえて床にしゃがみこんでいたアンソニーは、ノエルの一言でぱつと起き上がって外に出て行った。出て行ったのはいいが、アンソニーはハビがどこに行ったか解っているのだろうか？

「私は」

「レントイーノはミンイエンの傍にいてやれよ」

マーティンをベッドに寝かせてやりながら、グレンはそう言っただけで気さくな笑みを浮かべてみせる。レントイーノはミンイエンの髪をなでながら、軽く頷いた。

「お願いします」

誠実なその声に、ノエルは頷いてマーティンの外傷をチェックし始める。ノエルの指示で、クライドは部屋の隅の水道を使って布を濡らしてきた。ノエルはそれを使い、マーティンの頬や首筋にあった小さな傷を拭いていく。

「レントイーノも十分治療する必要があるよ」

マーティンのむき出しの腕についた傷を濡れた布でなぞりながら、ノエルはちらりとレンティーノを見る。レンティーノは首を横に振った。今はミンイエンと一緒にいたいらしい。

「後でミンイエンと一緒に処置を受けて。ふたりとも、放っておいたら大変なことになるよ」

「ええ、解りました」

つとめて冷静を装っていようと頑張っているのが良く解るような中身の無い声だった。ノエルは小さくため息をつくとき、マーティンの深い傷に刺さったままのガラスを抜いた。

「っ、おいノエル」ハルフオード」

刹那、マーティンが苦しげに声を上げたので驚いた。痛みで目を覚ましてしまったのだろうか。呼ばれたノエルは細く裂いた布を怪我より少し上の辺りから巻きつけながら返事をする。

「ベッドの右斜め上、見な」

「俺がやるよ、ノエル」

手が離せないノエルのかわりに、クライドはマーティンの言ったアバウトな場所を探す。言われた場所に手を這わせると、いきなり引き出しのようなものが飛び出してきて思わず飛びのいてしまった。

「開いたか」

「ああ」

「箱ごとノエル」ハルフオードに渡せ」

言われるがまま、真っ白な引き出しから両手で白い箱を取り出してノエルに渡した。プラスチック製の白い箱には、ガーゼやピンセットなど、応急処置に使えるようなものが沢山入っていた。消毒液や用途不明の瓶なども入っている。

「ありがとう、マーティン」

ノエルは優しくそういつて、早速ガーゼをピンセットに挟んで消毒を開始している。染みるのか、マーティンはぎゅっと眉根を寄せて歯を食いしばっている。

「脚、痛むのかい？」

「まあな」

最大の傷口である腿のガラスを取り除き、ノエルは首をかしげる。白い肌が見えるはずのズボンの破れ目からは、真っ赤に染まった傷口が見えなかった。思わず目をそらす。

「完治するまで、長い時間がかかることを覚悟して」

てきぱきとズボンの破れ目を切り開き、傷口を消毒してガーゼを当てるノエル。

「缝合した方がいいね」

とは言っても専門の道具はないし医師もいないので、それはハビが帰ってきてから相談すると言う。ハビは何をしているのだろう。アンソニーも帰ってこない。

「チツ。クライド」カルヴァート、脚が治るまで決着は延期だ」「解ってる。とつとと治せよ」

髪にこびりついて固まった血を指でそぎ落としながら、マーティン是不機嫌そうに言うて目を閉じた。それきり彼はまた殆ど動かない状態に戻る。寝ているのだろうか？

苦笑したとき、視界の端でミンイエンが動くのを捕らえた。

「おい、ミンイエン？」

呼びかけてみる。けれどミンイエンはゆらりと立ち上がって壁にもたれ、クライドの方を向こうとはしなかった。

ミンイエンも相当な失血量だっただろう。なにせ、一番近い距離から、しかも正面で飛散してくるガラスを受けたのだ。もともと動いてはいけなかったと思う。彼はたぶん、マーティン以上に重傷だ。立ち上がったミンイエンは、怪訝そうに見るレンティノーノから目をそらして、ふらふらと部屋の中央へ向かった。クライドが巻いてやった止血用の布がはらりと床に落ちたが、彼は構わず歩き続けた。何をするつもりなのだろう。とりあえず止めよう。クライドがそう思い、ベッドサイドからミンイエンのいる方に足を向けたそのときだった。

ミンイエンのその場に屈みこんだ。そこは放射の中央、つまりあの円筒形をした水槽の残骸がある場所だった。ミンイエンを中心に、ガラスがこちらに向かって飛散している。その様子が、ミンイエンがクライドたちを拒絶しているように見えてぞっとした。もっとぞっとすることは直後に起こった。

こちらに背を向けて屈んだミンイエンの、左手にきらりと光るものを見つけてしまった。

咄嗟に思考が働かなかった。うまく整理できない。ミンイエンが何をするつもりなのか全く解らない。彼が拾ったのは、ガラスの破片？

「っ、邪魔です！」

嫌な予感がしてミンイエんに軽く駆け寄ったクライドを、レントイーノが押しつけた。彼はふらつきながらも、即行でミンイエンのところに駆けつけた。

しかし、もう遅かったのだ。

血塗れの白衣の袖が翻り、吸い込まれるように真っ直ぐに腹部へと落ちる。

「っっ」

「ミンイエン！」

彼が握ったガラスの破片は、台所で使う包丁など比ではないくらいに大きいものだった。血染めで赤黒かった腹部に、さらに濃いトーンの血が滲んでいく。透明なガラスに真っ赤な液体が絡みつき、ミンイエンの白い筋っぽい手にも、いく筋もの赤がしたたっていく。飛び込んでいったレントイーノの腕に、その華奢な身体は力なくもたれた。

目の前が真っ白になった。貧血なのか精神的な打撃によるものなのか解らないが、眩暈がした。身体力が全て抜けていくような感覚に、目を閉じようとしても閉じられない。床に膝を着くのと同時に世界に色が戻ってきたが、その中でミンイエンの放つ赤はひときわ強烈だった。

硬直し、言葉をなくしたレントイノーは座り込む。ミンイエンは息を荒くしながら、腹に深々と刺さったガラスの破片を抜こうとする。レントイノーがその手を握って止めた。きつく、きつく、握る方も握られる方も血管が浮き出るぐらいにきつく握って止めた。

「なんてこと、するのですかっ！」

震えて裏返った声に、ミンイエンはくすりと笑う。レントイノーの目から大粒の涙がこぼれてミンイエンの頬に落ちた。涙は彼の頬にあった小さい傷をなぞり、薄桃色に変わってミンイエンの首筋を伝った。

「僕なんか、生きてる資格ないんだよ、九年前から」

「そんなことありませんっ、そんなこと」

「いっぱい、色んな人に、迷惑、かけちゃったなあ……」

レントイノーの腕の中で、ミンイエンがくたりと力を失うのを見た。皮膚があわだつような感覚に身震いして、クライドは立ち上がる。とりあえず彼を助けなければ。何とかしなければ。そればかりが頭の中を支配していく。一秒でも早く、ノエルのもとにミンイエンを運ばなければ。

「おいレントイノー、ミンイエン動かさないようにこっちに運べ」
殆ど彼らの方は見ずにそういつてガラス片を踏みつけながら走り、マーティンの応急処置をする手を止めてミンイエンを凝視しているノエルの隣の壁を探った。

確かさつき、マーティンの指示で引き出しをみつけたとき、もう一つベッドを引き出すための取っ手を見た気がしたのだ。どこだろう、あった。

「ミンイエンの傷、深さは解るかい」

我に返ったノエルは、クライドにまずそう尋ねた。クライドは渾身の力を込めてベッドを引き出しながら、首を横に振る。視界の端にレントイノーが見えた。彼はミンイエンのぐったりした身体を抱き上げて、真っ青な顔で目を泳がせている。

「……解んない。でもガラス大きかったし、血が凄い」

「解ったよ、とりあえず彼を寝かせよう。レントイノー、こつちへ」
引き出したベッドにシーツをかけるのを、グレンが手伝ってくれた。グレンもまさかミンイエンが自殺行為に走るとは思わなかったのか、クライドが駆け戻ってくるまで呆けた表情で信じられないとでも言いたげにミンイエンを見つめていた。

レントイノーはミンイエンを丁寧にベッドに寝かせ、ぎゅっと彼の手を握っていた。離そうとしなかった。無理に離す気にもなれないので、ノエルと目配せしあってレントイノーはそのままにしておいた。

「どうするノエル」

「動かしちゃだめ。ここにある道具じゃそんな傷は処置できないけど、どうにかしないと。借りるよミンイエン」

ノエルはミンイエンの白衣の内ポケットに手をいれ、彼の携帯を取り出した。血塗れの携帯にはガラスが刺さりかけていて、ノエルが携帯を開くと刺さりかけていたガラスは床に落ちた。あまり使ったことなどないだろうに、慣れた手つきでメモリーを呼び出してノエルはどこかへ電話をかける。

「もしもし、僕だよ。今どこにいるんだい。アンソニーは」

電話の向こうから聞こえる低い声はハビのものだろうか。ノエルは険しい表情でベッドに寝るミンイエンを見て、とりあえず血染めの白衣を脱がしながら電話の声に相槌を打つ。

「ミンイエンが割腹自殺を図ったよ」

電話の向こうが沈黙した。

「すぐ戻ってきて。一刻を争う事態だから。手術道具はあるかい？
医者は」

少し長めの返答の後、ノエルはちらりとグレンを見て目線で助けを求めた。グレンは頷いて、ミンイエンの白衣を脱がしてはさばさと払う。ガラスの欠片が飛んだ。

「解った。すぐ向かう」

電話を切り、携帯をミンイエンの枕元においてノエルは出口に向

かって走っていく。

「ノエル、何処行くんだ」

呼び止めると、彼は振り向いて早口に言った。

「ハビのところ。グレンとクライドはミンイエンの上を脱がしておいて。必要があれば破いても構わないけど、あまり動かさないようにね。戻ってきたらすぐ処置を始めるから」

それきり彼は振り向かず、行ってしまった。クライドとグレンは顔を見合わせ、血染めのボーダーシャツを着たミンイエンを見下ろす。

「レンティーノ、手を離せ」

服を脱がすのなら、手を握られていては困る。クライドはそう思っ
て、ミンイエンの手に重ねられたレンティーノの手を外そうとした。凄
い勢いで振り払われた。辟易するクライドに、レンティーノは目もくれ
ずに呟いた。

「嫌です。離しません。ミンイエンの目が覚めるまで、私はずっと
ここにいます」

どうしたものかと黙考し、クライドは仕方なくノエルが使っていた
白い箱の中からハサミを取り出した。一刻を争う事態だ、解っている。
「

とは言ったものの。

「俺こつこの無理だよ」

思わず口をついて呟きがもれる。無理だ。

人の血を見ているだけで、すでに気が遠くなっているのだ。グレン
もその点は同じようで、なるべく傷口を見ないようにしながらも
うひとつのハサミを手に取っている。

「無理とか言ったらねえよクライド、命に関わるんだから」

「解ってる。俺らしかいないし。……やるぞ、グレン」

焦点の合わない目でじつとミンイエンの顔を見つめながら座り込
んでいるレンティーノと、腹にガラス片を刺したまま意識をなくし
てぐったりしているミンイエン。この場で動けるのはクライドとグ

レンだけだ。ノエルが戻ってくるまでに、何とか準備を整えておかなければ。

ミンイエンの肌に刃を当てないように気をつけながら、クライドは彼の服を切っていった。先ほど自分で刺したところ以外にも、服には既にたくさん穴が開いていた。ミンイエンはリイとの再会を喜びながら、ずっと胸や腹にガラスが刺さっている痛みを耐えていたのだろうか。

刺さっていたガラスは、数えてみるとごく小さいものを含めて五十以上あった。恐らく腕や脚も含めたら、この数も倍以上に膨れ上がることだろう。

「とりあえずこんなところ？」

ハサミを白い箱に戻して、クライドは自分の傷口に箱の中から出した絆創膏を貼りつけた。額や目の上、それから頬、首筋、腕、脚はズボンをめくって貼るわけにもいかず、放置することになった。絆創膏は白い箱の中にたくさん入っていたから、クライドはグレンにも貼ってやった。

虫の息ではあるが、ミンイエンはまだちゃんと生きていた。けれど浅く上下する傷だらけの胸は、ほんの些細なことですぐに止まってしまうそうに見えた。

「傷口わかりやすいように、濡らした布で拭いところ。さつきノエルがマーティンにやってみたいに」

頷きあい、処置を進める。肋骨の突き出た厚みのない体にたくさん傷がついているのを見ると、痛々しくてたまらない。

ミンイエンが自分で刺したあの大きなガラス片はまだ刺さったまままだ。それが余計に痛々しかったが、抜いてしまったら出血がとまらなくなつて命に関わるので、抜くこともできない。

「……なんとかかないかな」

呟いたグレンの声にうなずいて、クライドは無言でノエルの帰りを待った。

第四十三話 オペ

ノエルがハビをつれて戻ってきたとき、二人が服を着替えていたのに一瞬だけ驚いた。ノエルもハビも、薄い緑色をした手術用の上着をきて、同じ色の帽子を被ってマスクもしていた。おまけにゴム手袋まで装備している。ということは、彼らが手術をするのだろうか？

遅れて部屋に入ってきたアンソニーも、同じように手術用の服を着ている。しかし彼はゴム手袋をつけていなかった。

彼は銀色のワゴンを押して駆け寄ってきて、ミンイエンの顔を覗き込んだ。ワゴンを放置して彼はまた出て行き、今度はモニター付きの機械と点滴を持ってきてまた出て行く。

この機械は見たことがある。あの、心電図の波形や血圧を測定する装置だ。まさか、こんな場所で本当に手術を始めるなんて。そう思ったが、よく考えてみればミンイエンは重傷だ。動かしたら生死に関わるのだから、ここでやっても仕方ないのかもしれない。

何度か往復して、アンソニーは機材を部屋に運び入れた。ワゴンは三台ぐらいになっていたし、キャスター付きの点滴も二本あった。その他に用途がわからない機材もいくつかあったが、ノエルとハビは二人で小声で何か打ち合わせをしながら既に銀のトレーに入った器具を確認していた。

「医師団の到着まで僕らが止血に入るんだ。大規模な手術になると思う。レンティーノを連れて部屋の隅に行つてて」

先ほどからばたばたと忙しく駆け回っているアンソニーは、真面目にそういった。緊張しているのか、がちがちに固まっている。

「おいトニー、もしかしてお前もやるのか？」

啞然としたグレンが訊ねると、アンソニーは首を横に振る。

「執刀はしないよ。でも機械の管理は僕がやる。点滴の交換とか、看護師さんの役割みたいなことならちよつとハビに習った。医師団

はこの研究所の研究員だから研究所にはいるんだけど、実験中の人が二人いて、すぐ中断するけど着替えとかに時間かかるって言うて

言いながらアンソニーは白い壁を探り、コンセントを探して機器を接続し始めた。レンティーノはぎゅっとミンイエンの手を握ったまま、離そうとなどしなかった。

「クライド、お願いがあるんだ」

アンソニーとレンティーノを見ていたクライドだが、背後からノエルに声をかけられて振り向いた。ノエルは割れた眼鏡を指差し、困ったように笑う。

「僕に触れずに、魔力を貸して。眼鏡を直して、それからここを無菌室にしたいから」

「難しい注文だなそれ……」

解っている。人体を切り開くのだ、もしもノエルを介してミンイエンの体内に雑菌がうつってしまったら大変なことになる。だからこそ、ノエルの魔法で原子単位で空間を清浄化して手術を行うべきなのだ。けれど、今この貧血状態でどうやって魔力を分けたいのか解らなかった。とりあえず、ノエルの背後に回って両手を彼の背中にかざした。

「上手くいかなかったらごめん、別の方法考える」

一刻を争う状況だ、はやく彼に魔力を分け与えなければ。目を閉じて、想像する。掌から少しずつ、クライドの魔力がノエルに移るところを。もやもやと陽炎のように揺らめく魔力の波が、手術服の背中に当たるところを。

「ありがとうクライド」

振り返ったノエルの眼鏡はすでに直っていた。ノエルは右手を空間にふわりと上げて、目を閉じてじつと何かを念じていた。ああ、良かった。そう思った瞬間に、意識が一瞬飛んで後ろに倒れた。床に落ちる寸前でグレンが助け起こしてくれたので平気だったが、自分で動くような気力はもうない。仕方なく、グレンの腕にもたれて

二人で壁際に行った。

クライドを壁に寄りかかせてくれたあと、グレンはレンティーノのところへ行った。背後にグレンが立ってもレンティーノは何の反応もしなかった。肩に触れられてから彼はようやく拒絶を示したが、グレンはめげずにレンティーノの腕を掴んで立ち上がらせる。

「てめえ、ミンイエン殺す気か」

「っ、貴方には解りません。解るはありますがありませんっ！ ミンイエンは、わ、私の大切なっ」

「落ち着け。解ってないのはてめえだよ、いい年して何やってんだ。それじゃ、てめえもミンイエンと同じだろ」

抵抗を続けるレンティーノにため息をつきながら、彼は嫌がる彼を引っ張って壁際まで来た。

「今は、医学でミンイエンを助ける時だから。傍に居てやりたいのも良く解るけど、ハビさんとノエルに任せよう」

目を伏せて眉根を寄せるレンティーノを見上げ、クライドはそう声をかけた。レンティーノは泣きそうな顔をしたまま、ぴくりと口角を動かした。もしかすると、笑うつもりだったのだろうか。

アンソニーがベッドの周りに透明なカーテンをかけていくのが見えた。ノエルはそのカーテンの中で、魔法をかけ続けている。彼の掌に、青緑色の光がかすかに見えた。

「処置を始めるよハビ。滅菌は完了」

手を胸くらいの高さまで下げたノエルは、アンソニーをちらりと見た。アンソニーは大きな緑色のシートのようなものをミンイエンの上からかぶせ、こくりとひとつ頷いた。

傷口のところだけ穴のあいたそのシートは、テレビドラマで見る手術のシーンでよく見るようなものだ。魔法で滅菌したとはいえ、そのまま処置を始めたら衛生的ではないと判断したのだろう。

「麻酔かけおわったね？」

ハビが言う。グレンに寄りかかったクライドからは、透明のカーテン越しにノエルがどんなことをしているのかは解らなかった。

「……四十」

「大動脈……」

「……を……へ」

断片的に聞こえる手術の様子がいまいちわからなくなってきた。貧血が一層酷くなってきた。じつと一点を見ているとその一点がぼやけたり遠近感を失くしたりする。

ずるりとへたり込みそうになったが、グレンが抑えてくれた。彼は黙って床のガラスを足で払いのけ、クライドの座るスペースを作ってくれる。

「死なないといいな、あいつ」

グレンは言いながら、自分が座る場所もつくって腰を下ろす。クライドも隣に腰を下ろし、ふらつく頭を抱える。レントイノは黙って立ち尽くしたまま、今にも駆け出しそうな具合に身体を屈めてミンイエンの手術を見ていた。

「……ああ」

「おい、無理するなよ」

グレンは言いながら、腕に刺さったガラスの破片を抜いていた。痛そうに顔をしかめながら彼は立ち上がり、あの棚から布を持ってくる。どうやらそれが、そこにあった最後の布らしかった。

「お前もどっか怪我してる？」

「あらかた想像で血は止めといた」

グレンはそうかと小さく頷いて、布を細く裂いて自分の腕に巻きつけた。その綺麗な身体に傷がついているのを見ると、何だかもつたいたいと思う。彼の腕に、傷が残らなければいい。グレンは夏になるとよくノースリーブで動き回っているから、余計にそう思う。「いてえな……」

グレンは呟いて、立てた膝に肘を乗つけて目を伏せる。

「こんな傷だけでも痛いつてのに、あいつはずっとこの何十倍つて量の傷の痛みに耐えてたんだろ。生き返った兄貴を見た途端、嬉しそうに笑っちゃってさ」

先ほど彼の服を切った時に感じたことを言っているのだと、理解するまで少しかかった。自殺目的のあの傷に比べれば随分と浅いが、範囲としては何倍も広くミンイエンの身体に広がっていた、ガラス片の刺さった痕。痛々しくて見ていられなかった。

どんな傷にも耐えられるぐらいに、ミンイエンは痛覚のない人間なのか。いいや、違う。彼なりに、リイに心配をかけたくなかったのだろう。そこまで強くリイを想っていないながら、ミンイエンは彼と月を見るという手の届きそうな夢でさえも叶えることが出来なかった。絶望するのも無理ないことだと思う。彼はこの先、立ち直ることができるのだろうか？ それも不明だ。

「たった一人の兄貴だもんな。ちっちゃい頃からずっと縋ってきた、親より理解力ある兄貴だったら尚更だろ」

深く頷く。ミンイエンがどれほどリイに依存していたかは、この数時間内でまざまざと見せ付けられた。

「あ、医者きた」

グレンの呟きに顔をあげると、手術着を纏った男が五人入ってきた。男らは四人ミンイエンの方へ行き、一人はマーティンの方へ行く。早速処置を始めたようで、マーティンが呻く声が聞こえる。

「マーティン！」

レンティーンが即座に反応し、駆け寄ろうとしたがグレンに腕をつかまれた。彼は渋々引き下がり、マーティンとミンイエンを交互に見てぎゅっと両手を握り締めていた。もともと血の気の無い手が、真っ白に変色していた。

「あいつさあ、まさか麻酔かけてもらってないのか？」

グレンの疑問を含んだ声に、クライドも同意だった。

「ありえる」

入ってきた医師たちは無表情で、マスクと帽子で顔の殆どを覆っている。人種すらよく解らなかった。背の高い黒人が一人いたが、それ以外は四人とも背が同じ位の大きさだったし体格にも差はあまりなかった。彼らは言葉をあまり発することなく、黙々とミンイエン

ンの腹部に処置を施していく。その間、ずっとマーティンの掠れた呼吸とうめき声が聞こえていた。

「っ、ミンイエンは？」

ようやくまともな意味がある言葉を喋ったマーティンに、医師は答えなかった。ただ一人の助手であるアンソニーは、手術を施されているマーティンとミンイエンのベッドの間をいつたりきたりしてせわしなく動いている。

「おい、ミンイエンはっ！」

「マーティン動いちゃダメ！　ちゃんと手術終わってからミンイエンのところに行って！」

アンソニーにぴしゃりと言われ、それきりマーティンはミンイエンを探すのを諦めたようだ。

「……無様だな、俺」

小さな呟きは、しんとした部屋によく響いた。クライドは壁に背中を預け、大きく息を吐きながら上を見上げた。格好つける必要なんてない。けれど、マーティンが自分を責めてしまうのも頷けた。

同じような状況で、腹にガラス片を刺したのがミンイエンではなく例えばアンソニーだったりしたなら、クライドはレンティーノのように何もできずに呆然とするか、動けない自分の身体を忌々しく思っただけで済む。マーティンのようになるかのどちらかだと思っただけ。間違ってもハビのように冷静ではいられないだろう。それだけは確かだ。

思考が暗く沈みかけると、隣からグレンの凜とした声が聞こえた。

「マーティン」

「馴れ馴れしく呼ぶな、グレン。エクルストン」

グレンはその場に座ったまま、苦笑してノースリーブの腕を見つめている。見たところ血は止まってきているようで、クライドはちよつと安心した。

「……ありがとな」

「はあ？　寝言は寝て言いな」

「とぼけんなよ」

グレンはくすくす笑い、ズボンをめくって小さなかすり傷をクライドに見せる。

「これだけで済んだんだ、俺は。あいつ、どさくさに紛れて俺を突き飛ばしやがって。それで、あいつ足にあんな怪我」

「つまり、マーティンがお前の盾に？」

「そういうこと」

嘘だ。あんなにイノセントやクライドを憎んで、グレンの事だつて嫌っていたマーティンが、身を挺してグレンを守るなんて。

「チツ……キズモノと張り合ったって面白くもなんともねえからな」

「言ってるよ」

それきり二人の会話は途切れた。レンティーノは複雑そうに下を向いて、握り締めた右の拳を白い壁にこつんと当てる。

「レンティーノも座れよ」

とりあえず宥める目的でそう声をかけてみると、レンティーノは眼鏡の奥の目を憎憎しげに細めて明後日の方を向く。

「いいえ、結構です」

「いいのか？ 長くかかるぞ、この手術。見てて気持ちいいもんでもないだろ。お前眼鏡していると視力いいから、鮮明に見えちまうんじゃないのか」

グレンの諭すような言葉に、しばらくレンティーノの反応はなかった。しかし、少しすると彼は高価たかそうな茶色の革靴でクライドの隣に広がっていたガラスの欠片を避けた。

「……クライド。隣、失礼します」

「ああ」

十代後半の男が壁際に座って、三人で手術を見守っているなんてなんともおかしい構図である。ふらつく頭を抱え、前髪に指を差し入れながらクライドはただ二人の無事を祈った。ミンイエンはともかく、マーティンにまでそんな感情を抱くとは。初めて嫌いな奴が無事で居て欲しいなんて思った。

「すみませんでした、二人とも」

「何だよ」

ちらりと隣を見やれば、レンティーノは抱えた膝の上に顎を乗せて息を深く吐いている。細い長身を縮こめたその姿は普段見れば滑稽だったかもしれないが、今この状態で見て笑えるようなものではなかった。

「子供なのですよ、私は。動転して感情がコントロールできなくなつて、結果的に皆さんにはいつも迷惑をかけてしまします」

「謝るなら、ハビさんとノエルに謝った方がいいんじゃないか？

俺は別に迷惑とか思つてる訳じゃないし」

可哀想と思つたりはした。冷静になれない彼に共感したりもしたけれど、迷惑だという感覚は全くなかつた。彼に言われて初めて、迷惑という言葉を思い出したほどである。

レンティーノは高価そうなスーツのジャケットを脱いで、その下の血塗れになつたシャツのボタンを外した。一瞬何故脱ぎ出したのだらうと訝つたが、彼はインナーに黒のＴシャツを着ているようだ。彼は脱いだシャツとジャケットをはたき、綺麗にたたんでその場に置く。

「先ほどのガラスのおかげで、携帯電話が壊れてしまいました」

レンティーノは苦笑しながら言つて、畳んだジャケットの内ポケットから携帯を出した。思わず呻いてしまったのは、携帯からまるでどす黒い血のように黒っぽい液体が滴っていたからだ。オイルのようにも見えるそれは、多分電池パックの中身がディスプレイの液晶の中身だと思う。

見せてもらったその薄っぺらな新機種には、ガラスの破片がもの見事に貫通している。貫通と言つてもその鋭い切っ先は一センチ程飛び出している程度のものだつたが、もしもこの携帯がなくなつたらレンティーノはガラスの破片に心臓を貫かれていたはずだつた。

「助かつたんだからよかつただろ？ ミンイエンにちゃんと生きて会えること、喜んでやらなきゃ駄目だ」

ちよつと怒つたようにグレンは言った。レンティーノは微笑し、小さく頭を下げた。

「ええ、そうですね」

ようやく平静を取り戻してきたレンティーノにちよつとほつとしながら、彼の細い腕を見る。白く細い腕にはガラスの傷がたくさんあった。

爆発が起きてから即座に逃げたクライドだが、ガラスの飛散が終わって最初に顔を上げたときに皆がいた位置を思い出す。その時の位置から考えると、レンティーノは爆発の直後に大きな機材の後ろに隠れたように見えた。けれど、隠れるまでの間に飛散したガラスを浴びたのだろう。身体の前面には沢山の傷が出来てしまっている。「クライド、顔色がすぐれませんか。貧血なのですか」

「まあ、ちよつと」

答えながら頭を抱える。顔色が悪いといわれる理由は貧血のせいということでもあるだろうが、あの惨状を思い出して気が滅入ってしまったせいでもあると思う。

「いや、本当にお前顔色真っ青だから。寝たほうがいいんじゃないかね？」

身を乗り出し、クライドの髪をかき上げてグレンが覗き込んでくる。心配そうな彼の顔に小さな傷がついているのを見て、少し胸が痛む。

「こちら側にもベッドが格納してありますよ。すぐに用意できますが」

「いいって、俺は大丈夫だ」
捕まれた腕を離させる。

ノエルだってハビだって頑張っているのだ。しかも、クライドはマーティンやミンイエンほどの大怪我をしているわけでもない。一人だけのうのうと寝ているなんておかしいだろう。

「もつと自分を大切にして下さい。貴方は数少ない」

「おい、数少ない混血児とか実験台とか言うつもりか？ 殴るぞて

めえ」

低い声でグレンが言い、レントイーノを氷河のような冷たい蒼の目で睨みつける。レントイーノは相変わらず笑顔のまま、違いますがよと柔らかい仕草で否定した。

クライドには、二人がいる場所が別世界のような気がしていた。ふらつく体は言うことをきかず、意識はふわふわと彷徨いかけている。

「クライド。貴方は数少ない、ミンイエンの友人なのですよ。ミンイエンのためにも、辛い時には無理せず休んでください」

「友人…… なのか？」

ただの実験台として連れてこられて、脅迫もされた。拳句の果てには直接顔を見たことすら無い時点で間接的に何度も殺されかけた。そんな相手は友人などと呼べるものではないだろう。

そういうあまり良くない出会い方をしながらも、彼に好意的に寄って来られるとアンソニーに接する時のように笑顔になってしまう。けれどそれは、彼が友人だからなのではなく、彼が年上のくせに子供なので無下に出来なかつたからだ。

「ミンイエンはただの実験台にクロスワードを解かせようとなんてしないのですよ。貴方たちが来てからというもの、ミンイエンはいつでも楽しそうでした」

「楽しそう？ そりゃそうだろうな」

グレンの皮肉っぽい応答にレントイーノは苦笑し、自分の腕から滴る血を綺麗にたたんであったシャツで拭った。

「貴方とミンイエンは対極的です」

言いながら、レントイーノは腕に埋まったガラスの破片をつまんで引っ張り出す。引っ張り出しながら眉根を寄せて嫌そうな顔をするので、それならやらなければいいのと思うが声には出せなかった。頭痛がしてきたのだ。

「貴方はアンシエント学園の人気者で、いつでもクラスの中心にいますね。スポーツは万能で、容姿も整っていますから女性からの人

気は圧倒的です。貴方の周りには、いつだって人が絶えない」

唐突にそういわれてグレンは面食らったようだった。

「……知ったようなこと」

「知っているのですよ。データの上では、ですけれど」

血塗れのガラス片をそこらに捨て、レンティーノは白いシャツを引き裂いて腕に巻きつけた。彼は応急処置をこんなに適当に済ませてしまっらしい。しかし考えてみると、布はもう全てグレンが使ってしまった。仕方ないのかもしれない。

「勿論ミンイエンも、学校に通っていたことがあるのですよ。この近くの学校なのですが、二人で一緒に通っていました。私に対する実験の一環として」

割れた丸眼鏡をはずし、レンティーノは髪をかき上げる。かき上げた髪の間から、細かいガラス片がちやりつと音を立てて落ちる。

「成績優秀で明るいミンイエンの周りには、ちゃんと人がいました。けれど、その中に友達はいませんでした」

「なんで？」

聞き返すグレンの方をちらりと見ると、目の前がかすんだ。彼の開き気味な胸元が滲んだようにぼやけて、強い眩暈に目の奥の方が痛くなる。

「リイシュイさんのことしか考えていなかったからです。学校が終われば人の輪の中からいち早く抜け出して、彼はリイシュイさんの傍へ行きたがりました」

「うっわ、その頃からあんな性格？ 嫌なガキだな」

グレンの正直な反応にクライドも笑う。笑ったら頭痛がしたので頭を抱える。だめだ、いつそのこと二人の会話を聞かないようによいか。そう思っても結局耳を傾けてしまう。

「友達は私や研究所の仲間がいれば良いと、ミンイエンは言っていました」

ミンイエンは昔から、閉鎖的な性格らしい。遊ぶよりプログラム言語を学ぶ方が好きで、クラスの中にいるよりもパソコンを借りて

新しいプログラムを開発する方が楽しいといつてパソコン室を占領するような子供だったというから、少しというかかなり変わり者だったに違いない。今だつて明らかに変人なのに。グレンは「ますます嫌なガキだ」と笑った。

「そんなミンイエンが、貴方達にはクロスワードを作りました。食事と呼ぶことさえありました。拳銃、自分の部屋に入れました。驚きましたよ、ミンイエンときたら本当に楽しそうに笑っていましたから」

「そうか…… 嬉しいんだか嬉しくないんだか微妙」

レンティーノは苦笑した。グレンは長い足を床に投げ出し、長座の姿勢で壁に背中を預けてそつと息を吐いた。

「祈つてあげて下さい、クライド、グレン。ミンイエンは、絶対に目を覚ましてくれるはずですから。目を覚ました世界に貴方達がいないと、彼はきつとまた絶望してしまふでしょう」

ただ黙つて頷いたグレン。ちらりと見られたクライドも、頷いた。飛びそうな意識を留めて、目を閉じる。そうすれば少しは楽になった。

まだまだ終わりそうも無い手術はだんだん慌しくなつてきている。ハビとノエルの声が飛び交う。専門用語ばかりで意味が解らなかつたから理解しようとするのをやめた。頭が痛い。

いつそのこと、意識を失いたい。そうすれば痛みも苦しみもだるさもなくなる。けれど、ここで倒れたらただでさえ大変な状況が余計に大変になる。それは避けたかつた。

膝を抱えてじつと眺める先の、透明なカーテンの向こうに手術着を赤く染めた医師がちらちら見える。早く終わって、ミンイエンが元に戻つてくれればいい。そうしてアンシエントタウンに早く帰りたい。帰つて何事も無かつたかのように、学校生活を楽しんで卒業したい。そうだ、夏休み明けから最終学年なのだから。クライドはそう思いながら、酷い頭痛に目を閉じる。

第四十四話 幻像

緊急事態が発生しているようだった。ようだったという言い方は何となく無責任な感じがするが、医学用語が解らないので仕方が無い。

「もうずっと血が止まらない。どうすればいいんだ」

低い呟きに、ノエルが手を動かしながらちらりとハビを見上げる。落ち着いてハビ。……こういうとき、クライドの想像は便利なのに」

「悪いな、ノエル」

呟いても、こんな距離では相手に声が聞こえないことは解っていた。それでも呟かずにいられなかったのは、ノエルの声に悔しさというか苛立ちというか、そんなものが混ざっていたからだ。なかなか手術が終わらないこの状況にノエルだって焦っているのだ。

「こちらは手術が終了しました」

その声に顔を上げると、マーティンの傍から手術着の男がどいた。ノエルはミンイエンの処置を続けながら彼に返答する。

「ご苦労様。じゃあこつちを手伝って」

マーティンは、ちゃんと治ったのだろうか。今までどおりに歩けるようになってきているのだろうか。もしも仮にちゃんと歩けるとしても、あんな怪我だ。凄かったあの脚力は衰えてしまっているだろう。そうなれば、決着をつけるのはずっと先になってしまう。

「……………」

こみ上げてきた吐き気に小さく呻く。目の前が霞んだ。吐き気を堪えると頭痛ができて、ちょっと涙目になる。こういう時に、この研究所で作っている貧血の薬が欲しかった。

「クライド、お前やつぱ寝ろって」

「いい、俺こうしてるから」

「駄目だ。レントイノー、ベッド用意しろ」

「解りました」

「いいってばっ」

グレンもレントイノも聞く耳を持たなかった。クライドの真横にベッドを引き出して、レントイノはクライドの腕をぐいと引っ張った。世界が歪んで吐き気がこみ上げてきた。

思わず振り払おうとするが、レントイノは腕を離してくれなかった。嫌々ながら立ち上がり、よろけて壁にもたれかかる。

「俺だけ貧血とかそういうので寝てたくないんだよ」

「でもお前、今貧血でぶっ倒れたらどうなる？ ガラスだらけの床に転がることになるんだからな。そうなる前に寝とけ」

渋々ベッドのふちに腰掛けてみると、ベッドの柔らかい触感をとらえたとたんにまた眩暈がした。グレンはほらみるといふ顔をして、レントイノは心配そうにクライドの顔を覗き込む。

「寝てるよ、ほら」

「手が空いている方に頼んで、薬のストックを確認してもらいましょう」

言いながら右手で左胸の辺りを探ろうとして、自分がTシャツ姿であることを今思い出したかのようにレントイノは固まる。スーツを着ているときの癖なのだろう。

「そういえば、携帯電話は壊れてしまったのです」

「忘れんなよそれ。マーティンのは？」

「あの辺りに残骸が散らばっていますよ。ミンイエンの携帯電話は無事ですが、手術中ですからね……」

二人の会話をききながらベッドに倒れこむ。清潔感のあるエタノールが漂ってきて、今更ながら血の臭いが鼻についた。よけいに気持ちが悪くなる。

「……手術早く終わらないかな」

「明日が来るのが怖いです。私達もミンイエンも、昨日までとは全く違った生活を強いられますから」

あるいは、誰かが欠けることにもなりうるだろう。クライドとし

ては、レントイノの不安の要因はむしろこちらの方だと思う。吐き気と戦いながら、クライドは目を閉じる。

自分を取り巻く状況を何も知らなくてすむのなら、いつその目を閉じたままにしておきたかった。けれど見なくても聞こえるし、感じるし嗅げる。目を閉じたとして、ここがガラス片だらけでかすかに血の臭いがする研究室だと否応にも解ってしまう。既に脳内に記憶されたこの状況は、恐らく死ぬまで忘れないと思う。

「……さっきミンイエンに想像しろって言われたとき、俺なにもできなかつた」

ぼつりと呟くと、壁に背を預けて座っていたグレンが立ち上がった。こちらを覗きこんでくる。

「そりゃそうだよ。あの状態で前が魔法なんか使ってたら、貧血だつてこんなじゃ済まなかつた」

グレンはベッドサイドに腰かけながら、クライドに横目を向ける。そうは言われても、クライドは考えずにいられないのだ。

「何で救ってやれないんだろうつて思ったんだ。だつてあれじゃ、ミンイエンはあまりに救われない」

砂漠をさ迷い歩き、やつと辿りついたオアシスの水は猛毒だった。疲れた体を休めようと、ようやく水を口にしたその時、捜し求めていた水はミンイエンをぼろぼろにした。ずっと捜し求めていた水。欲しくてたまらなかつた水。命をつなぐための水。

それを、飲んだ。

猛毒だと解つていても、ミンイエンは飲んだ。結果、苦しみに耐えかねてミンイエンは自ら命を絶とうとするような行爲に出た。

「俺がもし想像できてたら、ミンイエンが自殺することもなかつただろうな……」

想像で水から毒を抜いてやれば、それでよかつた。つまり、リイを生き返らせるという、たったひとつの行動でミンイエンは救われたはずだつた。

けれどそれが現実的に無理だということもわかつていた。どのみ

ちクライドに残った魔力は僅かなものだったし、死んだものを想像で生き返らせるなんて無理なのだ。

想像で目を開かせることはできても、想像で命を創造することはクライドにはできない。やる前から解っている。やったとしても、鐘を取り戻すために最初に想像した時のように、頭痛と貧血がひどくなるだけだ。

「そもそも、死んだ人間を生き返らせようなんて考えが可笑しいんだよ」

投げやりに言うグレン。そうなのだろうかと問いかけたくなるが、吐き気が襲ってきたので出来なかった。代わりに、レンティーノが口を開く。

「それをミンイエンは、ちゃんと解っていますよ。解っていないながら彼はあんなことをしたのです」

「馬鹿か。解ってるならやるな。諦めるよ」

一瞬、沈黙が訪れた。言い過ぎたと、彼も思ったに違いない。グレンは一瞬まずそんな顔をした。レンティーノが静かにグレンに歩み寄った。二人の間に沈黙が流れる。レンティーノはちらりと手術中のミンイエンのほうを見やり、ゆっくり目を伏せる。

「貴方はそう思うのかもしれませんが。ですがリイシユイさんは、ミンイエンにとっては世界にたった一人の味方だったのですよ。十歳の時点で諦めがついていたようでしたら、その時点でミンイエンは自殺を図っていたでしょう」

息をのむグレンに、レンティーノは哀しそうな目を向けた。クライドは目を閉じて枕に顔を預けた。視界は暗転したが、聴覚は今までと変わりなく上からレンティーノの声を拾う。

「どうやったら、私はリイシユイさんの代わりになることができるのでしょうか。明日からのミンイエンは、一体どうなってしまうのでしょうか……」

「そんなこと考えるより無事を祈ってるよ」

当然とでも言いたげなグレンの声が聞こえ、それきり手術の声し

か聞こえなくなる。グレンが大きいため息をついた。

敵味方も損得も可も不可も関係なく、クライドはミンイエンが無事であることを祈った。あんな軽率な行動で、死んで欲しくは無いのだ。ミンイエンには、残された人の気持ちを考えて欲しい。自分も大切な人に先立たれたことがあるのなら、彼にだってその気持ちがよく解っているはずだ。

永久に壊れないものなんて何も無い。けれど、壊れずに続いていて欲しいものは確かにいくつも存在する。そのなかのどれか一つでも壊れてしまえば、たちまち全てが崩壊するだろう。しかし、壊れたものを何度でも掻き集めて積み上げなおすことができれば、どんな問題だって乗り越えていけるはずだ。

大切なものを二度と手に入らない場所へやってしまったら、一度は奈落の底に落ちたような気になるかもしれない。それが何年も追いつけていた、自分の一部のような人間だったらなおさらだ。けれど、大切に思う人はなにも一人だけではないはずだ。ずっと傍にいてくれた仲間の存在を、ミンイエンが早く思い出すことを願う。

「……グレン。そこにいるか？」

「何だよ、どこも行かねえよ。どっか痛いのか？」

少し焦ったようなグレンの声に、思わず笑いが零れる。自分にとってグレンがそうであるように、グレンにとってもまたクライドは頼れる存在でありたい。

「ミンイエン、まだかかりそう？」

「ああ。大分長引きそうだぞ」

「寝たくないな、こんな大事なときに」

目を開けたら視界がぐるぐる回っていて気持ちが悪くなったので、すぐに目を閉じて改善を見た。予想外に貧血は酷くなっているようで、喉元まで吐き気がこみ上げてくる。意図せず、グレンに背を向けるように丸まって身体に力を込めてしまう。そんなクライドの背中をグレンが軽くさすってくれて、何だかそれで少し吐き気がおさまった気がした。

「寝とけ。手術終わったら起こすから」

「……ごめん」

何か喋ると吐きそうだった。Tシャツの肩の辺りをぎゅっと掴み、こみあげる吐き気を堪える。頭痛もめまいも治まらない。けれど背中をさするグレンの手に、だんだん眠くなってきた。

「ちよつとは治まってきたか？」

優しいグレンの声に、ついに答えることができなかった。

そうしてどれだけ眠っていたかはわからないが、クライドが次に目を開けたのは甲高い金属音を聞いたせいだった。

「ごめんなさい！」

「謝らないでアンソニー、換えはたくさんあるんだから。それより落ち着いて」

「ごめん、本当。次からもつと気をつけるっ」

何か金属製の医療器具を、アンソニーが床に落としてしまったらしい。ゆっくりと身体を起こしてみると、まだ眩暈と吐き気が残るものの、頭痛はだいぶ軽減されていた。血の臭いと消毒液の臭いと、まだ他に嗅覚に引っかかるものがあつたが、突然の吐き気で思考が遮断される。

「起きて平気なのか」

声のした方を振り返ると、白い壁に背をあずけたグレンが手術中のミンイエンの方をじつと見ているのが目に入る。その氷河の色をした瞳は少しもぶれずに、ただ一点だけを見つめていた。

「ああ、今のところは大丈夫っぽい」

「気分が悪くなりましたら、すぐに横になって下さいね」
「解ってる」

虚ろに天井を見上げ、細く息をつく。いつ手術が終わるのだろう。ノエルもハビも、真剣に何かしている。そういえばマーティンはどうなのだろう。

「マーティン？」

声をかけると、ベッドの上で白いシートがもぞりと動いた。何も

声が返ってこないということは、寝ているのだろうか。相当な失血量だったから、動けなくなってしまうのも当然かもしれない。

所どころ血で固まった金髪に指を通し、こびりついた血の塊をとった。頬や首筋についた細かいガラスの欠片を、いつの間にか誰かがかけておいてくれていた白い無地のタオルケットで軽くはたいて落とす。

「なあ、俺どれくらい寝てた？」

「三時間半つてどこ？」

「ええ、それくらいですよ」

二人が頷き合うのをみて、がっかりした。そんなに長い間、眠ってしまったていたのか。途方もなく時間を無駄にってしまった気がする。寝ていた時間はせいぜい十分ぐらいだろうだなんて、高をくくっていた自分に呆れた。

とはいえ、起きていたとしても出来ることなど何もなかった。結局のところ、クライドも平静なんて保つことが出来ずに焦っているのだ。ようやく今、それを自覚した気がする。

「まだ終わらないのか……」

思わず呟くと、レンティーノが静かに俯いた。

「さつき大量出血したとか何とかで慌しかったけど、今はちゃんと持ち直してる。そろそろ終わると思うぞ」

状況を一通り教えてくれたのは俯いたレンティーノではなくグレンで、グレンの話に頷いているとレンティーノは搾り出すような声で言った。

「ですが、まだ一度も意識が戻らないのです」

心配なのはわかる。けれど、焦ってうるたえたところで何もならない。冷静に考えればそうだが、クライドだって焦っていることは自分で解っていた。

「大丈夫だつて。焦るなよ」

それでもあえて、クライドはレンティーノを見上げて言った。頷いた彼の蜂蜜色の髪が、ふわりというよりばさりと揺れた。クライ

ドはレンティーノを見ながら、実はレンティーノの眼鏡にかすかに映っている自分に向かってこんなことを言ったのかもしれない。グレンは長い骨ばった指を髪に差し入れて揺らし、髪についた細かいガラスを落としたりしていた。その端整な顔は、いつもの樂觀的な表情を浮かべては居なかった。彼も心配なのは同じなのだろう。レンティーノよりは幾分か冷静だが、いつものグレンならここで快活な笑みを浮かべているはずだ。そして「レンティーノ泣かすなよミンイエン、早く起きろつての」なんて、軽口を叩くところなのだ。

彼がそこまで樂觀的になりきれないのは、あれほどミンイエンたちを信用しない態度でいたグレンでさえ、今はミンイエンの生命に不安を感じているということなのだろう。命の脆さをよく解っているグレンだから、余計にそうなのかもしれないとクライドは思う。

「そういえばグレン、シエリーはどうしたんだ？」

「俺たちが実験やつてることは知ってるはずだ。でも来ないってことは、どっかに閉じ込められてるのかもしれない。研究所内で迷子になったとか。でもこんな格好じゃ、行ってやれないな」

壁に背中をあずけ、宙の一点を睨んでグレンは呟くように言う。

確かにグレンの体じゅう傷だらけのその格好を見たら、シエリーが卒倒しかねない。黙って拳を強く握り締めるグレンに向かって、レンティーノがいつもの調子で穏やかに声をかけた。

「シエリーはノーチェと一緒にですよ。この実験現場にもし来てしまつたら混乱することは間違いありませんから、三日ほど国内を旅行していただくことにしています。ちなみにセルジは会社の方の仕事をしていますですよ。彼ひとりでは大変ですから、研究員の何名かが助けに入っているのですが」

言いながら、レンティーノはクライドのベッドの縁に腰を下ろす。彼の重みでベッドがぎしりと音を立てたが、身長がグレンと変わらないレンティーノも、体重は自分と変わらないのではないかとクライドは思う。それくらい、彼が乗ってへこんだ部分は少なく感じた。

「私たちはちゃんと、表向きだけでも平常を装う工夫をしておいたのですよ。こんな悪夢のようなこと、予測したくなんてありませんでしたが……」

俯く彼の髪にきらきらしたガラスの欠片がまだついていているのを見て、胸が痛くなる。傷だらけになって、ガラスの雨を浴びて、それでも明日からは普段どおり暮らしていかなければならないレントイノはどれほどつらいだろう。目の前で親友が自殺を図り、大事にしていたものの全てがあつという間に碎けてしまったのだ。思わず細くため息をついたのは、クライドだけではなかった。

「あいつが無事ならそれでいいんだ。遠ざけていてくれてありがとう。おそらくそれ、ミンイエンの指示なんだろうけど」

「その通りですよ、グレン」

小さく笑い、レントイノはクライドを見た。一瞬その瞳に苦しげなものをみたが、すぐに彼は普段どおりの微笑に戻った。

「顔色、少し良くなりましたね。安心しました」

「そうか？ 良かった」

何となく中身のないやりとりになってしまったのは、お互いに言っていることと考えていることが全く違ったからだろう。

クライドを気遣う発言をしつつ、レントイノの心はいつだってミンイエンに向いている。そして今回の場合は、クライドだってレントイノの発言よりミンイエンが気になっていた。

「縫合、宜しくお願いします」

「解りました」

ノエルが近くにいた医師と場所を代わり、透明なカーテンから出て帽子を外した。どうやら、もう手術は終りに近いらしい。

「終わったか？」

「傷口を縫合したら終わりだよ。もう手が震えて縫合どころじゃないから、代わってもらった。ちょっと僕も貧血気味でね…… 初めてオペなんかやったよ。練習なら何度だって大学でしたけど、生身の人間を、僕が」

震えるように息をつき、ノエルは座り込んでベッドの縁に背中を預けた。

「手術中に眩暈起こしてるようじゃ、まだまだ医者になんかなれっこないね」

「何言ってるんだノエル。お前、本当によく頑張ったよ。普通自分の命を優先に考えるところを、ノエルは目の前で死にかけてる人を救うっていう行動にたわけだし。それだけで既に立派だと俺は思う」
虚ろに視線を落として呟くノエルに、クライドはそう声をかけた。ノエルに落ち度はなかった。むしろ、あれほど絶望的だった空気の中でよくあんな風に動くことができたと感心しているぐらいだ。その点はグレンもレンティーノも感じていたらしく、二人はクライドの言葉にうんうんと頷いていた。

「そうだぞ、それに手術しようって考えること自体がまず凄いから」
「ミンイエンを助けてくださって、ありがとうございます。貴方の冷静な行動で、マーティンも無事に一命を取り留めたことですし」
口々に賞賛と感謝を述べる二人に、ノエルは疲れたような目を向けた。

「まだ終わったわけじゃないんだよ。彼が目を覚ましてくれなきゃ、意味がないんだ」

そういうノエルが何だか辛そうだったので、クライドはベッドから降りてノエルが手術服を脱ぐのを手伝った。クライドの貧血はだいぶ軽減されたので、今度はノエルが横になる番だと思う。

「寝とけ」

言いながらノエルの腕を引っ張って起こし、よろける彼を支えてベッドに座らせる。

「クライドはいいのか？」

「平気。ノエルのほうが大変そうだし」

枕の位置を少し変えて、ノエルを視線で寝るように促す。レンティーノがタオルケットを広げて軽くはたいて、それからちゃんと綺麗に広げてベッドに置いた。

「君はまだ寝ていたほうがいいよ。僕はまだミンイエンのところについていて、何か異常があったらすぐに対応しないとイケないし」
「でもそれでお前がぶっ倒れたら意味ないだろ」

半ば強引にノエルをベッドに寝かせ、クライドはベッドの縁に浅く腰掛けて手術を見ていた。アンソニーがいくつかの機材を外し、使用済みの点滴の袋を片付けたりしている。ハビは手袋を脱いで、銀色のトレーに投げ入れて肩を回していた。手術は終わったようだった。黙々と作業していた研究所の医師団は、何か小声でハビに色々告げていた。ハビはうんうんと頷き、天井を仰いでため息をつく。「手術は終了。ミンイエンとマーティンをただちに隣の研究室に運ぶよ。誰か手が空いてる人、手伝って」

クライドはすっと立ち上がり、ハビのもとへと歩いていった。焦る気持ちだが、何かを手伝わなければという心理のもとになっていた。透明なカーテンが取り払われたおかげで、アンソニーが手術道具をまとめてせわしなく働いているのがよく見えた。その向こうに引き出された白いベッドに横たわるミンイエンは、ぐったりと力をなくしたまま浅い呼吸を繰り返している。青ざめた頬にいつもの生き生きとした笑いが浮かぶことはなく、それが不安を煽った。

手術をしたからといってすぐに良くなるわけではない。待つ事だつて大切だ。焦っても仕方がない。自分に言い聞かせ、クライドはミンイエンから目をそらす。

「そっち押して。終わったらマーティンも運ぶから、手伝ってくれ」と嬉しい」

「解りました」

可動式のベッドは、また壁に格納できるように一定の長さを引き出すとストッパーが作動するようになっていた。だがハビは、クライドからはよく見えない位置で何かを動かしてベッドを壁から外した。キャスターのついたベッドは、つるつるした摩擦の少ない床でよく滑った。

部屋の出入り口までベッドを引っ張り、ハビはちらりと部屋の中

を見渡して眉をしかめる。足を止めると、ハビはレンティーノの方を向いて首を横に振る。

「何て格好だ。レンティーノ、君はシャワーを浴びておいで。血まみれだし、髪も絡まってるし」

慣れというのは恐ろしい。ここ数時間に渡って、クライドはレンティーノやグレンの怪我は愚か、自分の怪我でさえもほぼ見慣れていた。尤も、これは見慣れたせいもあつただろうが、周囲にもっと酷い怪我をした人物がいたせいでもあると思う。

「ノエルはどうしますか、ハビ」

言われて初めて髪を気にし始めたのか、レンティーノは蜂蜜色の髪に指を通しながら歩こうとしたハビを呼び止める。ハビは少しの間だけ迷い、レンティーノを手招く。

「ここは部下に掃除させるから。一緒に運んできて」

「その必要はないよ。歩けるから」

ノエルはきつぱりと言い、ベッドから降りて壁にもたれた。グレンが彼のベッドをしまいこみ、マーティンのベッドを壁から外そうとしているアンソニーを手伝いに行った。

「ではノエル、手を貸しますよ」

レンティーノの声を背後で聞き、クライドはミンイエンのベッドを押し外へ出た。

外に出ると、今まで居た部屋がどれだけ血の臭いに満たされていたかをよく思い知らされた。

第四十五話 回復

白い壁を抜けて、広々とした何もない部屋にミンイエンを運んだ。入り口から見て左の奥にベッドを止めて、ハビは部屋の中を何の迷いもない足取りで歩き回る。そして白い何もない（ように見える）壁の中から、折りたたみ式のテーブルを出してきたりした。クライドはハビの後について回り、ハビが隠し棚から出したものを持ってやる。

「ご苦労様。ありがとうね」

ハビはにこりと微笑むが、明らかに疲れきった顔をしていた。

「休んだ方がいいんじゃないですか」

体力のありそうなハビでもさすがに大変だろう。何時間もぶつ通しで集中力を要する手術をやったあとなのだ。しかしハビは首を横に振り、クライドが持っていた折りたたみ式のテーブルを開いてベッドの隣に置いた。そうして、今頃になってやっと手術服を脱いで丸めて適当に床に放置した。手術服の下は実験の前と違って、半袖で白と黒のストライプのポロシャツだった。

「まだ頑張るよ。カフェは三日間休めるから、なんとかなる」

言いながら、彼はアンソニーが運んできた機材の電源を壁に繋ぎ始める。電源が壁のコンセントに入っていないなくても、予備電源のよくなものがあるのか、機材はちゃんと動いていた。しゃがんだハビの背中に、血がにじんでいるのが解ってクライドは低く呻く。

アンソニーは機材をここまで運び込んだ後、すぐにまたグレンを手伝いに戻っていった。

「手伝います、ハビ」

声のするほうを振り返ると、レンティーノがノエルを支えながら白い壁を抜けてくるところだった。ハビは壁のくぼみに指を引っかけ、そのままベッドを引き出す。

「それじゃあ、マーティンのベッドの周りを整備して。終わったら

ノエルとクライドはここに座ってて。君はシャワー」

「ノエル、貴方は休んでいて下さい」

レンティーノはノエルをベッドに座らせ、ミンイエンのベッドの隣にスペースを空けて壁際で作業を始めた。テーパーが必要だろうから、クライドはハビが先ほどテーパーを出してきた壁を探す。触っていると、ひやりと鉄パイプが手に触れた。引つ張り下ろし、小脇に抱えてレンティーノの隣にそれを開いておいた。

「ありがとうございます」

「あと何が必要？」

「特に何も要りませんよ。休んでいてください、クライド」

頷いてノエルの傍に行こうとすると、丁度グレンとアンソニーがマーティンのベッドをここに運びこむところが見えた。手術開始からずっと動き回っていたアンソニーは疲れているだろうから、クライドは彼に代わってマーティンのベッドを押し。

「ごめんねクライド」

「いいって。トニーは休んどけ」

白いベッドに身を横たえたマーティンは、脚の怪我と少し顔色が悪いところを除けばまったくいつもどおりだった。グレンと二人がかりで壁にベッドを固定すると、レンティーノがベッドの脚についていたキャスターにロックをかける。

彼はしばらく不安そうにマーティンとミンイエンを交互に見ていた。それに気づいたハビが苦笑し、レンティーノの背中をぽんと叩いた。

「ほら、早く行っておいで。君の怪我は特にひどいから、放っておいたら化膿してひどいことになるよ。目を覚ましたミンイエンに泣かれることになるなんて、嫌でしょ？」

「……すみません。すぐに戻ってきます」

名残惜しそうに部屋を出て行くレンティーノの後姿を、グレンとアンソニーが無言でじっと見送っていた。ノエルは小さく息をついて、まだ少しだるそうにしている。

「見せて」

ハビはノエルの長袖のシャツをめくり、腕に貼ってあったガーゼをはがす。

「ガーゼを貼っておくと膿むから、なるべくとるようにするよ。それから…… 後で傷薬を持ってくるから、その時には起きて」

「ありがとう」

ノエルはそのまま、ベッドに横になる。ミンイエンの足元という微妙な位置だったが、動かすのは面倒だからこのままでいいとハビは言った。

「君達は…… それじゃあ、隣にベッド出しよう」

「俺平気だから。傷とか処置してくれなくても」

言いながらグレンは腕に巻いていた布を剥がして傷の具合を見た。右の上腕と左の肘辺りの二箇所が特に大きかった。もう大分血は止まってきたているが、縦長の傷跡である。

「傷が残ったらシェリーが泣くよ。君のは特に徹底的に治すから」
「う、そうだあいつ絶対何か言う」

ハビとグレンのやりとりをきいて、何だかほほえましい気持ちになった。そうだ、シェリーのためにもなるべく無事でいなければ。この貧血がどうにかなったら、ミンイエンやマーティンを想像でなんとかしてやろう。

「大丈夫だ、傷跡残ったら俺が何とか想像で消してやる」

「お前、自分の傷はどうするんだよ？」

「何とかなる。皆に比べたら浅いと思うしすぐ治るって」

「駄目だ。お前の手は絶対借りない」

「いいのかよシェリーに泣かれても。もし傷残ったら、見るたび哀しそうな顔するぞ」

にやりと笑いながら言っただけで、これまでの流れるような反論がぴたりと止まった。グレンは視線を彷徨わせ、長いこと黙り込む。ハビはグレンをちらりと見ながら、ノエルのベッドの隣に新しくベッドを引き出した。アンソニーは先ほどから何も声を発しなかった

が、見ると壁際によりかかってじつと一点を見つめていた。

隣でハビがせわしなく動いているし、そろそろ次の言葉をかけようかと思ったとき、グレンは斜め下を見てぼつりと呟いた。

「……やだ」

彼は形の良い指で後頭部をくしゃくしゃとなでながら、困ったように眉根を寄せている。思わず、少しだけ笑ってしまった。

これで断固として拒否されたらどうしようかとひやひやしていたから、クライドは軽く安堵の息をつく。

「絶対無理するなよ」

「解ってる。お前こそ傷残すなよ、テレビ出たとたんに傷についてメールで問い合わせが殺到したら嫌だろ」

「いや、それはないだろ」

少しだけ笑い合う。けれどすぐにミンイエンの方に目がいつてしまった。グレンもマーティンとミンイエンを交互に見て、小さくため息をついている。

背後に引きだれたベッドにアンソニーがすわり、肌に刺さったガラスをハビに抜かれて小さく呻いていた。そんな様子を一瞥し、グレンはまたミンイエンの方を見てノエルのベッドに浅く腰掛ける。

「あいつ、起きた時『ここは何処？ 僕は誰？』とかいわねえよな」

「それはないだろ。頭打ったわけじゃないし」

グレンがしたミンイエンの口真似に笑いながら、クライドはきっぱり否定した。ミンイエンが倒れる時には必ずレンティーノが駆け寄って抱きとめていたから、頭を打って記憶喪失というのはなさそうだと思うのだ。

しかし、血液が長いこと脳にいかないとそれが原因で記憶喪失になるというのは聞いたことがある。一度は否定したけれど、起き上がったミンイエンがとんちんかなことを言いだす可能性はぬぐえない。

「ほら、いつまで駄弁ってるの。グレン、座って」

アンソニーは処置を終えたらしく、額に貼った絆創膏を軽くなで

ながら立ち上がっていた。グレンは渋々そこに座り、ハビの方に手を伸ばす。

クライドは先ほどまでグレンが座っていた場所に腰掛けてノエルを見下ろした。アンソニーがふらふらと壁際からはなれ、クライドの隣に座る。

「何だか疲れちゃった」

「寝れば？ 部屋戻って」

話しながらノエルの方を見ると、彼は目を閉じて寝息を立てていた。眼鏡を外して枕元においてやっても気づかない。深く深く眠りの底に落ちているようだ。こんなノエルを見るのなんて初めてだと思いつながら、返事をしないアンソニーに視線をやる。アンソニーはクライドをじっと見つめ、泣きそうな顔で首を横に振っていた。

「やだ。僕、ミンイエンの近くにいたいんだ」

「そっかそっか。心配なのか？」

彼は頷き、その姿勢のまま顔を上げなかった。

「折角仲良くなったのに。ミンイエンは元々僕らのこと利用するつもりでしかなかったのかもしれないけど…… 明日もおいでって、また遊ぼうって、部屋出るたびに言うんだ。お昼も一緒に食べようって、今日は僕の部屋においでって、まるでずっとずっと前から友達だったみたいに。学校を卒業したら遊びに行くよって、約束したの昨日だよ？」

クライドは、胸が詰まったようになってしばらく何もいえなかった。

騙されるとか利用されるとか、そんな形で道具のような扱われ方だっただけ。一時は憎たらしいくらい嫌いだった。けれど、彼の色々な姿をクライドは見てきた。

弱い面や子供っぽさ、純粹さ。捻じ曲がっているくせに真っ直ぐな、難解な性格。どこまでも兄を慕う健気さ。頭の回転は速く、知識は豊富で、社長としてのカリスマ性をも兼ね備えた彼。

まるで、餌付けしたら懐いてしまった子犬のようだ。年上の癖に

まるで弟のようなその存在を、クライドはいつのまにか居て当たり前だと思っていた。

彼だけではない。一度は絶対に心を許すわけにはいかないと思っただセルジやレンティーノも、長く一緒にいてお互いの価値観や考え方を少しずつ知っていくことで、傍に居たら排除したくなる敵だとは思えなくなっていた。まあ、マーティンは別なのだが。

「ミンイエン、死んじゃだめ」

そう言ったアンソニーの空色の目は潤み、とめどなく涙を溢れ出させていた。

「そうだよ、早く戻ってこい。まだ兄貴のそこ、行くような歳じゃないだろ？」

声をかけてもミンイエンが起きる気配はしなかった。やるせない気持ちになった。

グレンが戻ってきて、代わりにクライドはハビの前に座った。ハビは神妙な面持ちで、何か傷薬らしいものを平たい銀のトレーに流し込み、ガーゼにしみこませている。

ガーゼにしみこむ水色の液体を見て、何だか身体に悪そうな色だと思う。じつと見ていると、ハビはそのいくつかあるガーゼのうち一枚をピンセットで拾い上げた。

「痛いでしょ」

「いえ。傷、もう麻痺してますから」

「沁みると思うから、ちよっと我慢して」

右目の上に貼った絆創膏をはがされ、ひやりとしたガーゼを当てられる。途端に鋭い痛みが走り、思わず目をぎゅっと閉じるとハビがくすりと笑った。

「駄目だよ、絆創膏を貼る前にちゃんとガラスの破片を抜いておかないと」

ピンセットでつまみ出されたガラスの破片は、ごく小さい物だった。それでもそんな異物が自分の身体に埋まっていたと思うと、何だか気持ちが悪くなる。

「あーあ、こころも」

腕や首筋など、荒く処置しておいた部分は全て絆創膏をはがされて沁みる薬を塗られた。少し涙目になったことを自覚する。

傷のひとつひとつがずきずきと痛んだが、自分だけ痛いなど言っていないのは解っているのであえて何も言わなかった。

「はい、終り。……痛かったでしょ」

「ミンイエンに比べれば、全然」

「そう。ものは相談だけどクライド、背中には手が届かないからお願いできる？」

言いながらハビは、ストライプのポロシャツの背中を指差した。

クライドは頷いて、ハビと位置を入れ替わる。ハビはクライドに背中を向けてポロシャツを脱ぎ、肩の辺りにある傷を気にしていた。

それなりに筋肉質なその体型は、研究員らしくはないと思う。

ちらりと見えた彼の腹部に斜めに薄い傷跡が残っているのをみて、クライドは胸の奥が疼くのを感じた。

あれは、レイチェルがつけた傷だ。ワインボトルで殴られる前に彼女がハビのベストを切り裂いた時の……

「ガーゼ、貰いますね」

無理矢理思考をねじ切って、クライドは銀のトレーにガーゼを浸してピンセットを構える。しかし、彼の広い背中についている傷があまりに多すぎて少し困った。

「……あの、結構刺さってますけど」

「抜いちやって。三日後に復帰だから徹底的にお願い」

「解りました」

ピンセットでガラスの破片をつまんで、空のトレーに出すという作業をクライドは黙々とやった。あまり気が進まなかったが、後々化膿したら大変だと思うのでガラスの破片は徹底的に取った。ハビはその間、全く痛そうな反応を見せなかった。

レイチェルに切られたあの傷を、ハビは毎日どんな思いで見ているのだろう。そう考えると、気が重くなる。こんな風に痛みなんて

気にしていないように見えて、ハビはきつと心のそこで色々なことを思っているだろう。

ガーゼにしみこませた傷薬をつけると、ハビはほんの少しだけぴくりと反応した。冷たくて反応したのか、沁みて反応したのか解らない位の微妙な反応だった。

「血が止まっただけの傷があったら、これで止めて」

ハビは背を向けたまま、箱に入った市販の絆創膏をクライドに差し出す。クライドはそれを受け取って、箱を開けて絆創膏を出した。「はい、終わりました」

「ありがとうございます」

ハビは立ち上がり、血の染みがついたポロシャツを見て眉根を寄せる。そういえば先ほど処置している時に気づいたが、彼の左耳につけられた三つのピアスのうち、真ん中のものがなくなっていた。飛んできたガラスが当たって破損してしまったのだろう。

「ちょっと着替えてくるよ。レントイーノが戻ってきたら、そこで待ってるように言っておいて。眠ったら適当にベッドを引き出して寝ていてくれて構わないから」

「あ、はい」

ハビは出て行き、部屋は静かになった。マーティンは眠っていたし、ミンイェンは依然として目を覚まさない。そんなミンイェンを見つめるグレンとアンソニーも何も言わなかった。そして、彼らが座るベッドでノエルも熟睡している。

「トニー、こっち来い。お前ここで寝てる」

ベッドをひとつ引き出し、クライドはアンソニーを手招く。アンソニーは立ち上がり、ふらついてグレンの手を借りた。グレンはアンソニーの腕を自分の肩に回して、無言でこちらに歩いてくる。

「グレンは？」

「まだ寝ない。お前は」

「起きてるよ、まだ」

それきり会話が続き、黙ったままアンソニーをベッドに寝かせ

てグレンはノエルのベッドに座る。寝付いていないアンソニーへの配慮だろうか。枕元に人がいると、アンソニーはあまり良く寝付けないのだ。隣に寝るなどして目線が同じならば良いが、近くに立たれるか座られるかして自分の上に影ができるかどうかどうもいけないらしい。

「学校、戻る気あるか」

「それはあるけど。でも、ミンイエンがいつまでもさっきの状態だったら……」

「帰れないよな」

無言で頷く。背後でノエルが寝返りを打った。何語かわからない寝言がかすかに聞こえ、それからまたノエルは深く長い呼吸を繰り返す。

こつん、と足音が聞こえた。革靴を履いた足音だったから、振り返らなくても入ってきたのがレンティーノだと解った。足音は徐々に近づき、クライドを追い越し、顔を上げて見るといつもどおり茶系のスーツで固めた背中が前の方にあつた。白だけの部屋だと、遠近感が上手くつかめなくて困ることがある。レンティーノの背中がどの辺りにあるのか、一瞬見ただけでは解らなくて思わず目を細めてしまう。

「ミンイエン、気分はどうですか」

彼はミンイエンのベッドを見下ろし、眠るミンイエンの髪をなでながらガラスの欠片を指で床に落としていた。そうしながらミンイエンの隣のベッドを見て、レンティーノはくすくす笑う。

「おや。貴方は心配なさそうですね。安心しました」

眠っていたかと思っていたマーティンは、低く「ああ」と呟いた。いつから起きていたのだろうか。

「……眠い」

「失血のしすぎです。危険なのではないですか」

「平気だ。俺はぎりぎり大丈夫だからミンイエンの方に輸血を使つて、あのチビが言ってるのを聞いた」

あのチビというのは、この場合ノエルを指すのだろうか。

「そういえば、二人とも同じ血液型でしたね。どうですか、マーティン。脚は動きますか」

「はっ、ふざけんな。動かせるわけがねえ」

「それだけ口が動くのでしたら、脚もすぐに動くようになりませよ」
レンティーノは軽く笑い、マーティンは鼻で笑い、それきり二人は黙り込む。何となく沈黙が重い。クライドはグレンと顔を見合わせる。会話を始めて良いものか、少し迷う。

「ミンイエンは」

「まだ目を覚ましません」

たった二言。また沈黙だ。今度はこの沈黙にマーティンが耐え切れなくなったらしく、彼は大きくため息をついて枕に頭を打ち付ける。

「チツ、情けねえ」

「貴方は仕方ありませんよ。それに私は、貴方を護ることができなかった」

深く俯くレンティーノ。マーティンはそんなレンティーノの方に顔を向け、おそらくいつものどおりの嫌味な笑みを浮かべた。

何せベッドに座った姿勢だと、少し離れたところにいるマーティンの顔は良く見えないのだ。顔の動きは何となくわかって、微妙な表情の変化はわからない。

「ふん、てめえみたいないひよるひよるのガキになんざ、護られたくないね」

「あ。マーティン、今初めて私を年下扱いしましたね」

「はぐらかすな」

くすくす笑って、レンティーノは眼鏡を手でずり上げる。今になって初めて、クライドはレンティーノの真円を描いた丸眼鏡が変わっていたことに気づいた。今しているのは、ごく普通の角のとれた長方形に近い形のレンズだ。着替えをして戻ってきたレンティーノの後姿を見ることはあっても、正面からはあまり見ていなかったか

らだろう。それで気づくのが遅れたのだ。

「クライド。ハビは何処へ行きましたか」

いきなり話を振られて一瞬反応に困った。

「着替えるって言ってた。帰ってきたら処置するからそこ座ってるって言ってたけど」

「解りました。ですが、もう少しここにいますね」

レンティーノが言うと、マーティンが迷惑そうにした。相変わらず微笑したまま、レンティーノはマーティンのベッドに浅く腰掛けてマーティンを見下ろしている。

「とつとと離れな。てめえに病人扱いされると、すぐにもここから這い出して健康体に戻りたくなる」

「それは、良いことだと思いますが？」

「はっ。てめえの看護が嫌だっつってんだ」

「そうでしたか、失礼致しました。それでは…… 趣向を変えて治療、した方が良いですか？」

何故だかスーツの袖を捲るレンティーノを見て、マーティンはまだあまり動いてはいけないうちに、激しく首を横に振った。

「うわ。やめな」

「うわ、とは何ですか」

心外だとも言いたげなレンティーノ。まったくいつもどおり嫌味な表情を崩さない、脚以外は健康体であるマーティン。会話が滞ることなく始まった二人を見ていると、重苦しくて痛い沈黙が嘘のようだった。

ベッドを適当に引き出してきて、そこに寝る。背中から疲れが抜けていくような感覚に全身を預け、目を閉じた。

「クライド、寝るのか」

「疲れたから横になる。お前もどつか適当に寝とけよ、疲れただろ」

「……起きててもやることないしな」

彼がベッドを引き出す音を聴きながら、ベッドに寝た姿勢で部屋を見渡してみる。真っ白い清潔感にあふれた部屋はいくつものベッ

ドが若干ななめに並んでいるせいで散らかって見えた。あとで動かせば良いと思い、小さく欠伸する。

「真っ白だな……」

天井を見ながら呟いた言葉に、グレンは気づいてくれなかったようだった。そのまま、真っ白な世界が徐々に真っ黒に変わっていく。

第四十六話 月光と夜想曲

目を覚ました時には、真っ白い部屋は薄暗いグレーの部屋に見えた。窓があるわけではないのに、どこか一方から青白い月光のような光が差しているのに気づく。身体を起こしてみると、部屋の隅に机があり、そこに青みがかった白の蛍光灯が灯してあるのを見つけた。机に突っ伏しているのは、あの体の大きさからしてハビだろう。携帯を取り出して時刻を確認する。昼の三時という表示に一瞬驚くが、時差があるので今は真夜中の三時ごろだということに思い至って暗い理由に納得した。このフロアに窓は無いから外の明かりは関係ないが、夜中には自動的に消灯されるシステムらしいと生活しているうちに気づいていたのだ。

部屋は少し肌寒い。冷房が効きすぎている気がする。タオルケットを胸元まで引き寄せ、クライドは小さく欠伸をした。

「誰もおきてないのかな」

「起きてる」

そうか、お前も眠れないんだな、と言いかけてクライドは言葉を失った。

「……ミンイエ恩？」

思わず飛び起きてベッドから降りる。あまり大きな音は立てないように気をつけた。ミンイエ恩のベッドがもぞりと動くのが、淡く青白い光が差し込む闇の中で辛うじて解る。

「クライド、お、はよ」

「お前、怪我大丈夫なのかよ」

ベッドに歩み寄ってみると、ミンイエ恩は少ない明かりの中で辛うじて解る程度の笑みを浮かべる。

「すっ、ごく、痛い。眠れ、ない。声、出すのも痛いっ」

それは確かにそうだろう、よく開腹手術をすると腹筋を切ってしまうから暫く喋ることが困難になるときく。ミンイエ恩の場合は開

腹どころか腹にガラスを刺したのだから、余計にそうだろう。

「じゃあ喋るなよ……」

「僕、ど、して、生きてるの」

強がりにも似た笑みは崩れ、ミンイエンは眉根を寄せて唇を引き結ぶ。必死に涙を堪えるその表情に、クライドはどうして良いか解らなくなった。何を言えいいのか、どうしてやればいいのか、解らない。

「痛いし、苦し、し。皆に、迷惑かけて、こんな、はずじゃなかった」

「死んでなくてよかったって、みんなそう思ってるから」

「そ、だと、してもっ…… 僕に、何、が残っ、てるって、いうのっ?」

彼が途切れ途切れにつむぐ言葉に、クライドは俯きたくなる。

「仲間がいるって、お前自分でそういったんだろ。信じてやらないのか? ハビさんもレンティーノもマーティンも、皆お前のこと全力で助けるつもりだ」

「でも、こ、なこと、した、らっ…… 皆っ、僕、嫌い、にっ」

ミンイエンは両目からとめどなく涙を流し、鼻をすすり上げるたびに痛そうに顔をゆがめた。見ていて痛々しくて、クライドは思わず声をかける。

「そんな泣くなよ、痛むから」

「だめ、とま、ないっ」

震える泣き声を聞いて、ほぼ無意識にクライドはミンイエンの腹部に布団越しに触れていた。さすってやってどうにかなるわけではない、そう思ったが、自分には他の人には出来ない方法で彼の痛みを楽にしてやる方法があることを瞬時に思い出す。

目を閉じて神経を統一して、想像してみる。この手の下のミンイエンの腹が、傷一つない状態に戻っていることを想像する。

「……っ!」

激しく目の前が揺れた。ミンイエンが何か言ったのを聴覚の隅で

聞いた。硬い床に倒れこむ。痛みが遅れて肩に来た。自分は肩から床に落ちたらしい。

「クライドっ」

「ああ、喋れるように、なっただか」

とりあえず腹筋の部分を繋ぐくらいのことではできたのだと思う。しかし、そこより浅いところか深いところはわからないが、おそらくまだ傷は残っているはずだ。あれだけの傷を治してやるほどの魔力はクライドにはまだ戻ってきていない。完治はしていないだろう。

「やっぱり、痛くて眠れないよっ……でも、泣いたらハビにばれるから、泣かない」

「ん、頑張れ」

うん、とミンイエンは頷く。良かったと返せば、細い傷だらけの腕が差し伸べられた。床に寝たままのクライドは、その手を借りて起き上がる。

「ごめんね、クライド」

「何が」

「色々。君を探し出せずに終わっていればなっつて、リイが死んじやっつたことを、君のせいにしてる僕がいる」

クライドは小さく笑って目を閉じた。貧血でふらつく頭で、また新たに想像をする。少しくらいなら無茶をして、倒れてもいいと思っただ。

「見えてるか、星」

言いながら目を開けて上を見れば、くらりと歪む天井に夏の夜空が広がっている。最上階のこの部屋だから、屋上を透けさせる想像をして空が見えるようにしたのだ。座り込んでミンイエンのベッドの脚に背中を預け、上を見る。

「すごい…… クライド、ありがと」

ミンイエンはちよっとだけ嬉しそうな顔で、星を眺めた。月が明るい夜だから、グレートーンだった影たちが月光で紺に近くなる。

眺めていれば流れ星のひとつやふたつ、当たり前のように流れてきそうな空だ。

「あんまり気に病むなよ。って言っても、無理かもしれないけど」
アンシエントタウンで見るほど明瞭な星空ではないし、見える星座も知らないものだ。ここが異国であることを再認識しながら、クライドは深く息を吐く。ミンイエンはしばらく黙っていたが、やがて乾いた声で小さく笑う。

「……まだ実感が湧かないんだ。リイが僕に話してくれたのも、目を開けてくれたのも、全部幻だったんじゃないかって気がする」

「魔法で蘇生したんだ、幻かもしれない。お前言っただろ、蘇生できる方がおかしいぐらいぼろぼろだったって」

そうならいいと思った。幻だったんだよ、不可能なんだよ、だからもういいだろうと、そう説得できるから。

「そんな風には思いたくない……でも、幻じゃなかったら、リイはまた死んじゃったんだ。僕のせいで。僕が要らないことしたから」
小さく息をつく。きつと今までのことは、ミンイエンにはどうしようもなかったのだ。リイを蘇生させると意気込み、巨大な製薬会社を背負って日々研究に明け暮れたミンイエンは、自分の半身とでもいっべき存在を取り戻すために必死だった。

けれど、これからはどうするのだろう。とりもどすべき半身は永久に失われた。ミンイエンは、抜け殻のように暮らしていくのだろうか。それも空しいことだと思う。ふらつく頭に手を添えながら、クライドは小さく息を吐き出す。

「なあ、ミンイエン。まだ兄貴を蘇生させる気か？」

ミンイエンはしばらく何も答えず、上だけを見ていた。建物の中だから風は全く感じられないが、それなのに星空が見えているのは奇妙で幻想的だった。

「そろそろ眠らせてやったらどうだ？ たった一回でも、また会えただけでよかったと思えよ」

これ以上また空しい実験を繰り返して、ひとときの夢をみて、ま

た絶望に沈むようなことは絶対にしてほしくなかった。そんなことがもう一度起きたら、今度はもう無事に生き延びることなどないだろうから。

「……諦めるの？ リイが笑顔で暮らせる環境、僕は一度だって作れたことなんてなかったんだ。いつもわがままで、迷惑ばかりかけて。だから今度こそ、リイに毎日笑っててほしくて」

多分ミンイエンはこちらをみていないだろうが、頷く。ミンイエンは小さく鼻をすすり上げる。

「リイがいないなんて、考えられないんだ。いつだって隣で僕のこと見てくれたのに、おかしいよそんなの」

「いい歳してまだそんなこと言ってるのかよ。兄貴泣くぞ」

「解ってるよ。僕、わがままで。リイが死んでからも、僕はリイのこと振り回してる。解ってるけど、でも、じゃあ僕はどうすればいいの？ ガラス刺して死んだら、天国でリイに会えるかなって。そう思ったんだ。そうしたらそれでいいかもしれないって、僕」

おい、と声を発してミンイエンの言葉をさえぎる。彼にこれ以上そんな哀しいことを言わせたくなかった。自分がちゃんと生きていただけでいいと思ってほしい。もともと兄は死んでいたのだ、たった一時でも目を覚ましただけで、それは奇跡なのに。

「どうすんだよ。レンティーノとかハビさんはさ」

「皆は僕がいなくなっても、きつと上手くやっていけるはずだと思ってたんだ。でも、もうそんなことも思えないよ…… 覚えてるんだ、レンティーノがずっと僕の手を握ってたこと。行っちゃ駄目だっって言われてる気がずっとしてた」

必死にミンイエンを呼び、色が変わるくらい強く手を握っていたレンティーノの姿が頭に浮かぶ。彼の頑張り、ちゃんとミンイエンに届いていたのだ。それは良いことだと思う。しかし。

「どうしたらいいのか解んない」

あんなに一生懸命だったレンティーノのことも、ミンイエンの考えを変える決定的な何かに結びつくことはなかったようだった。ク

ライドは俯く。これで明日、ミンイエンがまた自殺未遂なんてししたら困る。

「あのとき死んじゃえば、こんなこと思わずにすんだのに」

「死にたかったのかよ。本当に？ 死んだ後レンティーンが狂っても、お前は知らん顔できたのか？」

立ち上がってミンイエンを見下ろし、答えを求める。思わずふらついて彼の肩口辺りに手をついてしまった。

それが余計に問い詰める仕草に結びついてしまったらしい。ミンイエンは顔をゆがめて首を横に振り、右手で髪をぎゅっと掴んだ。

「できないよつ。だからどうしたらいいか解らないんだっ！ 死んじゃえば何も考えなくて良いんだ。だから楽になれるんだっ」

「それは違う。また痛い思いしたいのか？」

死んだら楽になるなんてことはない。去年の帝王との戦いで死んだジャスパーは、全く楽そうには見えなかった。死んだという表現は少し間違っているかもしれないが、帝王の断末魔だってどう考えても楽になった歓喜の叫びにはきこえなかった。

痛い思いをして、苦しい思いをして、血をたくさん流して、楽になるということは絶対がない。そうしてかなりの苦痛を伴った後には、もう自分が存在していないのだから楽になるも何もないではないか。

「もう絶対やだ。だから今度は薬にする。試したことは勿論ないけど、薬に死ねると思う薬がいくつかあるんだ」

何を言っているんだこいつは。これでは全く学習していない。少しの呆れと苛立ちを覚え、クライドは少しきつい口調でミンイエンを諭す。

「馬鹿。そういう問題じゃないだろ。じゃあ、例えばお前が死んだあとレンティーンが後を追ったらどうするんだ」

身体を起こして部屋の中を見渡すと、レンティーンのベッドはミンイエンのすぐ近くにあった。隣に寝ているのはマーティンだが、マーティンの隣で彼は寝ているのだ。

レンティーノはミンイエンの方を見るようにして、眼鏡をかけたまま寝入っていた。よくみると服装もスーツのままである。

「っ、それは…… そんなの、嫌だ。だからクライドが説得してよ。死んじゃだめだよって」

「ふざけたこと言うな」

マーティン越しにレンティーノを見て、ミンイエンは弱弱しい声で言う。クライドはそれを一喝し、ミンイエンを軽く睨んだ。

「何で？ どうして僕は楽になっちゃいけないの？」

「楽になるとか、本気で思ってるのか？ レンティーノだって父親が死んだんだろ？ それであの人は、楽になりたいって言って後を追ったか？ 死んだって楽にならないし、レンティーノは死んでないだろ」

「……うん。生きてる。生きててくれる」

前髪の下に指を差し入れ、ミンイエンは涙を拭う仕草をした。静かな部屋に、彼が鼻をすする音だけが響く。

まだ誰も起きてくる気配はない。魔されている様子もない。話がややこしくなるから、このまま誰も起きてこなければいいなと思いつながら、クライドはミンイエンに微笑みかける。

「あの人は、お前がいたから生きてたんだろ。お前に心配かけるわけにいかないから。お前が悲しんで後を追ってきたら、きつと苦しい思いをして死ぬことになるからって。きつとそうだと思うんだ」

「でもっ」

「でももだつてもあるか？ 誰かが死んだら自分も死ぬ、なんてことを全人類でやってみろ。明日には世界が滅亡してるぞ」

馬鹿馬鹿しい、こんな哀しい説得なんてしたくない。だからミンイエンには、早く心を入れ替えてほしい。大好きな仲間がいるのなら、彼らのために生きようとして思えないのか。

「誰にだって、殺されそうになったら体を張って護ってくれるような人が必ずいる。自殺したら後を追って死のうと思う奴が絶対にいるんだ」

ミンイエンは小さく頷いた。彼が涙を拭うタイミングがまた少しずつ早まってくる。彼はやがて布団を頭まで被って、目の辺りを布団で押さえ始めた。

「そういう人たちに辛い思いはさせたくないって、思わないか」

彼は、涙声でうんと呟いた。少し安心して、クライドは彼のベッドに軽く腰掛ける。

「お前は生きてるだけでいいんだよ。ただそれだけなんだ。わざわざ苦しい思いして、死ぬことなんかはない。だからさ、もう死ぬとか絶対言わないでくれ。誰もお前が死ぬことなんか、望んでないんだ」

「っ、ぐす、クライドッ…… 僕、生きてて、っ、いいの？」

布団から顔を出し、ミンイエンは問う。前髪がぐしゃぐしゃになつてめくれているおかげで、彼の澄んだ茶色い目がクライドをじつと見ているのが解る。クライドは苦笑して、彼の前髪を整えてやりながら答える。

「生きてる許可なんか貰う必要、ないだろ。お前は生きていい。でも、死んだらだめだ」

「僕、誰かのために、なれる？」

「なれるよ。お前が会社で作った薬が、今もこの国の人を楽にしているんだろ」

「うん。僕の会社はすごいから」

頷き、涙声で会社の自慢をするミンイエン。これで、もう大丈夫だと思ふ。彼の髪を撫で付けてやりながら、何だか歳の離れた弟を寝かしつけているような気になる。別に弟がいるわけではないが、いるとしたらこういう感じなのかと妙に納得してしまう。

「じゃあ大丈夫だ。お前は存在だけで既にレンティーノやマーティンを助けてると思うし、ハビさんだってきっとそう思ってる。お前がいなかったら、この会社の研究員だって困るだろ？ トニーと遊ぶ約束だつてしてるんだろ」

「うん。ありがと、クライド。僕は大事なこと、ちゃんと思い出した」

ミンイエンは、久しぶりに笑った。まだぎこちない笑みではあつたけれど、彼は徐々に元に戻りつつあるのだと思う。彼はちゃんとリーの死を受け止めて、生活していくことができると思う。

「リーね、ミンの隣に寝かせてあげることにする。ミンに紹介してあげるんだ。僕のお兄ちゃんだよって。本当は、生きてるうちにあつてほしかったけど」

「ミン？」

聞きなれない単語に首を捻ると、ミンイエンはあつと思ひ出したように説明してくれる。

「レンティーノのお父さんだよ。僕にすつごく良くしてくれた」

「そうなのか……」

父親を殺したというミンイエンにとって、きっとその人はミンイエンにとつても父親のようだったに違いない。

「ミンはね。僕が初めてここに来た時、初めてあつた人なんだ」

「うん」

「ミンがいたからレンティーノと知り合つたんだよ。僕ら、お互い十歳だった」

十歳というと、クライドがノエルに出逢つた年齢よりも幼い頃だ。ノエルとは十三歳の頃だから、思えばたつた四年前だ。

「結構小さい頃から一緒なんだな。俺もグレンと知り合つたのが六歳とかそれくらいだった」

「知ってるよ！ 君のデータは全部持つてるもん」

「だから、気持ち悪いつてそういうの」

ミンイエンはくすくす笑った。そして、痛そうに顔をしかめる。大丈夫かと声をかけると、彼は平気だと微笑んだ。けれど、その頬や首筋に脂汗が浮かんでいるのは見間違ひではないだろう。

「ミンは僕にとつてもお父さんだったんだ。いけないことはいけないつて、ちゃんとやってくれる人だった。でも優しいんだよ。優しくて、正義感が強くて、ユーモアもあつて。年齢的にはおじさんなのに、蘇生したせいで二十代のまま容姿が変わらない人だった。レ

ンティーノはね、ミンが蘇生してから生まれただよ」

ふうん、と頷いてからぴたりと動きを止める。今、ミンイェンは蘇生と言った。

「蘇生って、一度成功してるのか」

「そうなんだ。僕がトップになる前。名前も知らない最高権力者が、僕より先にその方法を作り出してたんだ。だから僕、ミンみたいにリイも生き返るんだって信じてた。でも最高権力者は最後まで協力を拒んで死んじゃったから、僕は結局ミンがどうやって生き返ったのか知らないままでいる」

「そういうことだったのか」

なるほど、一度でも成功した例があるのなら蘇生が不可能ではないと思ってしまうても仕方が無い。人間が死体の状態から復活できるということが可能である証拠に、今この世にレンティーノがいるということなのだから。

何だか吐き気がするような話だと思う。一度は死ぬほどの苦痛を与えられても、蘇生されればその痛みや苦しみをすっかり思い出すことになるだろう。そんな蘇生の力を帝王が持っていたらどうだろう。彼はきつと、自分の部下を何度も繰り返し殺して蘇生させて遊んでいたに違いなかった。

「ミンがもともとどういう状態で死んでいて、そこからどうやって生き返ったのか知ってれば、リイだってすぐに生き返ったに違いないんだ。でも今更悔やんだって仕方ないし、どうやってでも最高権力者から情報を貰うなんて無理な話だったんだ。あのおじさん、独占欲の塊みたいな人だったから」

「仲悪かったんだな」

「うん、最っ悪だった」

暫く、静かな声で笑い合う。笑い声が消えると、部屋は妙に静かになる。誰かが布団の上をかすかに動く、小さな衣擦れの音がはっきり聞こえた。

「ねえ」

返事はせずに彼の顔を見下ろす。ミンイエンは前髪越しにこちらをじつと見ていた。微妙に分かれた前髪の間から、泣き腫らした目がクライドを捉えている。沈黙が少し苦しくて、声を上げようとした時にミンイエンの方から本題に入ってくれた。

「……クライドはさ、これからアンシエントタウンに行くでしょ」「ああ」

「そしたら、また遊びに来てくれる？」

何だ、そんなことか。クライドは笑って頷いた。かなり言い出しにくそうに切り出すから、一体何を言われるのかと身構えてしまった。

「まあ、そのつもりだけど。海外旅行なんかしょっちゅうできるほど裕福じゃないけどさ」

「迎えに行くよ、アンシエントタウンなら何度か行ったことあるんだ」

「じゃあそれまでに、ちゃんと全部の傷を治しておけよ？」

「もちろん！」

嬉しそうにミンイエンを見て、安堵の笑みがこぼれる。クライドは軽く目を閉じて、いつもどおりの天井を想像した。元の状態に戻すのであればそれほど魔力は使わないから、クライドは倒れずにすんだ。目を開けてみると、先ほどより暗い部屋に一瞬慣れずに戸惑った。

「じゃ、そろそろ寝ろよ」

ミンイエンに言い残して、クライドは彼のベッドから離れる。

「うん。おやすみ、クライド」

彼の声を背中で聞いて、クライドは再びベッドに身を横たえた。静かすぎる暗闇はあまり居心地が良くなり、そのせいで目を閉じてからもすぐには寝付けなかった。

第四十七話 癒えぬ傷

目を覚ますと、白い空間が目の前に広がっていた。朝になって照明が灯ったのだらうと思ひ、クライドはゆっくり上体を起こした。しかし。

「……あれ」

起き上がった世界にミンイエンの姿がなかった。ベッドごと、ミンイエンがいなくなっている。レンティーノの姿も無い。彼が寝ていたはずのベッドはきちんと整えられ、何もなかったかのようにそこに鎮座していた。

部屋の隅の机にも、誰もいなかった。昨夜はそこにハビがいたはずだった。ベッドから降りて歩み寄ってみると、なにやら難しい言葉で記された書類がたくさん置いてあった。たぶん、昨夜ハビが書いたものだろう。

「報告書に、明細書に、なんだこれ」

「蘇生実験のまとめだ。ミンイエンがやれる状態じゃなかったからな」

はじめられたように振り向くと、マーティンがベッドに上体を起こしてこちらを見ていた。そんなに眠そうな顔をしていないし、声もいつもどおりだった。今起きたばかりという風体ではないから、たぶん彼は誰かが起きるまで退屈をこらえていたのだろう。

「ミンイエンは部屋に戻った」

「そうなのか。じゃあレンティーノとハビさんもか？」

「チツ、ハビは実験の処理だ。レンティーノはずっとあいつの傍を離れようとしねえ」

不機嫌そうなマーティンの声に自分まで不機嫌になりかけるが、クライドは真っ直ぐ自分のベッドに戻った。しっかり寝たはずなのに、未だに体が重いし頭がふらつく。貧血の薬を貰いたいが、ミン

イエンの携帯は無事なのだろうか。かけてみよう。

「おいてめえ、何の真似だ。二度寝か？ ああ？」

「煩い、頭に響くんだよお前の声」

マーティンは忌々しげに舌打ちをしてくる。クライドはマーティンの方に背中を向けて、部屋の入り口を向いて横になった。

「二度寝とかじゃなくて動けない。昨日ミンイエンの傷を塞ぐ魔法をかけたら、未だに貧血が続いてて」

人が怪我をして寝ているのにこのうとうと二度寝をするような輩だとマーティンに誤解されておくのは癪なので、クライドは歪む視界に吐き気を覚えながらそう説明していた。

「ふん、てめえはそれぐらいして当たり前だ。柔だな」

口が悪いのはいつものことだが、この説明で彼はまあまあ納得したようだった。色々と言い返したいことはあったが、この男とはあまり会話をしたくないので、これ以上は何も言わないことにする。

しかし一つだけ気になって、彼に背中を向けたまま訊ねてみる。

「何か話したか、ミンイエンと」

「いや、まだだ」

そうなのか。だから彼の機嫌が悪いのかもしれない。まあ、彼の不機嫌はいつものことなのだが。

ポケットの携帯に手を入れ、寝た姿勢のままミンイエンに電話してみる。長らく呼び出し音が鳴り続いたので、おそらく電話に出られない状態なのだろうと思う。切るうかと思ったとき、電話の向こうで声がした。

「もしもし、クライドですね」

「ああ、レンティーノ。ミンイエンは？」

「少し疲れているようですよ。ですが、ちゃんと目を覚ましてくれました」

最初に聞いた声のトーンでミンイエンが目を覚ましていることは判った。レンティーノの声は、いつにも増して嬉しそうだったから。「良かった。傷、どうだった？」

「貴方に治していただいたおかげで、大分良くなったと言っていますよ。ですが、酷く傷むそうです。鎮痛剤を打っておきました」

そうか、想像のことはレントイノに言ったのか。その時、ミンイエンは自殺を止められた話もしたのだろうか？ 別にしてもしていかなくても良いが、ミンイエン本人があの話をおぼれていなければいいと思う。

「ミンイエンに代わってもらえるか」

「少々お待ち下さい」

それきり、電話の向こうが沈黙する。しばらく待つと、レントイノと話しているらしいミンイエンの声が途切れ途切れに聞こえ出した。

「お電話代わりました、僕だよ」

電話の向こうで、レントイノと二人でミンイエンは笑っているようだった。声だけ聞けば元気そうだ。ほっとする。

「変な言葉遣い。どうだよ、調子は」

くすくす笑いながら言うと、ミンイエンはか細い声で良くないよと呟く。

「痛いんだよ、すつごく痛い。痛み止め打って貰ったおかげでなんとか生きてる感じ。もう切れかけてるよ絶対」

いいえ大丈夫ですよとレントイノが言う声が聞こえた。ミンイエンの泣きそうな声はどうやら演技ではなさそうで、大丈夫ですよとまた繰り返すレントイノの声が少し聞こえた。電話の向こうで、ミンイエンはうつと小さく呻く。

「おいおい、大丈夫かよ」

呆れながらも自然と口許が緩む。とりあえず、良かった。彼は今、痛すぎるから死にたいだなんて言いださなかった。

「クライドは平気？」

ミンイエンの方からそう訊ねられて、クライドは本題を切り出すことにした。ベッドの上で少し身体を動かすと、シーツに傷がこすれて思わず呻いてしまう。

「傷はちよつと痛むけど大体平気。けど、貧血の薬ない？」

「あるよ！　じゃあ、どうしよつか。僕も君もここから動けないから、お使いが必要でしょ？　レントイノー、行つてくれるかな」

ミンイエンの後ろの方で、いいえと声がした。彼はあくまでミンイエンの傍から離れたくないらしい。自分がいない間にまた自傷行為をしたら困ると考えているのだろうか。その危険性はゼロではないから、レントイノーの言動は極めて賢明だといえた。

「怪我が軽そうな誰かが起きたら頼むよ。ハビさんは？」

「ハビね、寝てるんだよ。珍しいでしょ、いつもすつごく早起きなのに」

不思議そうな声を上げるミンイエンに、クライドは笑い声を返した。何を不思議がることがあるのだろうか。彼は何時間も立ちっぱなしで、なおかつその後は机に向かって書類を処理し、ずっと集中力を使いつぱなしたのだ。きっとクライドが寝ている間だって、たくさん働いていたに違いない。

「疲れたんだろ、お前の手術とかでさ」

「う、ごめんなさい。本当ごめんなさい。もうしないよ。絶対しないから」

悪戯をした子供に許しを請われているようで、思わず苦笑がもれる。実際にはそんなに生易しいものではなく、ミンイエンがしたことは自殺未遂だ。悪戯と呼ぶには重過ぎる問題である。

「口先だけじゃないだろうな？　俺が昨日言ったこと、ちゃんと覚えとけよ」

そうしてもらわないと、安心して帰ることができない。もう知らない間柄ではないのだ。どうなっても知ったことではないだなんて、非情で無責任なことは思えない。

「わかつてるよ」

ミンイエンは静かに言った。

「ただのエゴだし自己満足だけど、僕は皆の言葉を信じるよ。僕が生きててよかつたって、ハビもレントイノーもそう言った」

「……そっか」

「嘘でも信じ続けるよ。皆が僕のこと本当は嫌いでも、もう嫌いだから目の前から消えてって言われるまでここにいる」

自嘲めいた響きでそういうミンイエンに、クライドはわざとため息をつく。彼はどうしてそうやって、ネガティブな方向に物事を考えるのだろう。ただ真っ直ぐに、信じ続けていればいいだけの話ではないか。レンティーノたちの様子を見て、どこが嘘だと思えるのだろう。偽りの感情で、あそこまで身体を張ってミンイエンを護ったりできるだろうか？ ミンイエンを騙そうと思うような人たちが、ミンイエンを助けようと必死になるだろうか。

「馬鹿。そんなこと誰が言うかよ」

もう少し仲間を信じてやってほしい。孤独感と絶望感は、大変なものだろう。けれど、だからといって、たった一つ残った希望すらも自ら打ち砕くようなことはしてほしくない。

「ありがとね。クライド、僕の実験に協力してくれて本当にありがとう」

「そういうことは、魔力が足りなくなっただけで倒れたノエルとか、血を吐くまで魔力搾り取られたグレンとか、一番最後まで働きづめだったトニーに言っただけだ」

これから誰が起きても、薬を取りに行つて欲しいなんて頼める状況ではなさそうだとクライドは思い始めていた。実験中の彼らは誰が見てもわかるほど疲弊していたし、実験後の彼らは傷だらけなのだ。

「それじゃ、誰か起きたらまた電話してね」

「ああ。それじゃ」

どうしようか。考えながら電源ボタンを押そうとしたとき、不機嫌そうな声に阻まれる。

「おい、待ちな」

「……俺に言った？」

「てめえ以外に誰がいる」

何故、いま絡まねなければならぬのか。考え事に集中させて欲しい。そう思いながらも、電話を切らずに次の言葉を待つ。

「どうしたの？ 誰？ もしかして研究員の人かな」

ミンイエンは不安そうに訊ねてくる。ちよつと待っていると置いて、クライドは寝返りを打ってマーティンのベッドの方を見る。

「何？ かわりたいのか？」

予想はしていたけれど、不機嫌そのものの声で返された。

「チツ。あいつも俺も動けないんじゃないじゃ、電話でもする以外に無事を確かめる方法がねえ」

それもそうか。嫌いなマーティンのためにわざわざ貧血の身体を起こして歩くのは気が進まなかったが、ミンイエンもマーティンと話をしたいだろう。

「ほら」

ふらつく身体を壁に沿わせるようにして歩き、ようやく携帯を屈けることができた。マーティンは無言で携帯を受け取って、適当に髪をどけてから耳に当てる。

「俺だ」

うわあ、と電話の向こうのミンイエンが叫ぶのが聞こえた。マーティンと話ができるのが、かなり嬉しいらしい。

一旦ベッドに戻っても良かったが、そうすると通話終了後の携帯を回収しにまた歩いてこなければならぬのが辛いので、二度手間を避けるために壁に寄りかかった。

ミンイエンは嬉しそうに喋る。受話音量は最大に設定してあるので、結構音がもれて聞こえてきた。

「良かったっ、声聞くの久しぶりだよ！ 大丈夫？ 痛くない？」

対するマーティンは、少し不機嫌そうにわざとらしいため息をつく。

「てめえ、ふざけるな。何故そうやって自分を傷つける？ 俺がどんな思いでてめえを見ていたと思ってる」

短気なマーティンも、ただ単純にミンイエンの行動にいらだった

から怒っているわけではないだろう。物凄くミンイエンのことを心配している様子が、実験中からかなり窺えていた。

「ごめんなさい……」

しよげたように謝るミンイエンの声で、マーティンの怒りはひとまず軽減されたようだった。マーティンは携帯を持っていない方の手で青い髪をさらさらと掻き乱し、声を少しだけ和らげて問う。

「傷は痛むか」

「うん、すつこく」

「レントイノの怪我は」

「腕とかすつこく痛そう」

「しばらくは商談も無理か…… 本当に無茶しやがって」

チツ、と小さな舌打ちが聞こえた。電話の向こうでミンイエンがおろおろしている。

「させたのは僕だよ」

「いや、今のはお前に言った」

「ごめんなさい」

「俺に謝ってどうする」

皮肉っぽい声で笑いながら、マーティンは脚を押さえた。どうやら、傷が痛むらしい。それでも声だけは平静を保っているのは、ミンイエンに心配をかけたくないという一心でいるからだろう。

「マーティン、今度会えるのいつかなあ。僕、意識が戻ってから一回もマーティンと会ってないよ」

「チツ、すぐだ。車椅子でも松葉杖でも何でも良い、部下に用意させな。今日中に行ってやる」

無茶なことを言い出す奴だ。怪我をしている方の脚はきつと殆ど動かすこともできないだろうし、体重を支えきれぬほどに回復してはいないのだ。あんな傷の状態で立ったりしたら、激痛で悶え打つに違いない。

「そんな、まだ傷が痛むでしょ？ 駄目だよ」

「てめえに来させる訳にはいかねえ。ハビが起きたら手配させる」

「マーティンには会いたいけど、マーティンの脚が治らなかつたら僕は嫌だよ」

「俺はそんなに柔じゃねえ。なんなら、てめえの部屋まで今から行く」

嘘だ。本当は痛みをずっと堪えているくせに。顔色だつて青ざめているくせに。どこまで彼はミンイエンのことを考えているのだろう。明らかに無茶をしすぎだ。

「じゃあ僕が行く！ これ以上マーティンに辛い思いさせたくない」「チツ、アホが。てめえが無理だから俺が行くって言ってんだ。脚以外はほぼ健康体だ、問題ない」

「レンティーノっ、説得してきてよ！ お願いっ」

「仕方ありませんね……」

そこから先はよく聞こえなかった。レンティーノはマーティンが今すぐにでもベッドを這い出す危険性を考えて、ミンイエンは置いてこちらにくるつもりらしい。ミンイエンが彼の離れた隙に自傷を再開しないとも限らないのだ、あまり彼を一人にはいけないと思う。

「おいミンイエン、切るな」

「え？」

「電話切るな。まだ話してる」

「なんでっ」

「電話切ったとたんにてめえがこっちにこようと無理し出す可能性もあるからな」

言いながらマーティンはちらりとこちらを一瞥した。クライドは軽く頷いた。おそらくこれは、同意を求められていたのだろうと思つた。通話料はクライド持ちだから。

マーティンがこんな提案したのは、きっとクライドがミンイエンを心配する気持が顔に出ていることに気づいたからだ。クライドの表情が意味するところを、マーティンは解っていたに違いない。

こんな奴と以心伝心なんて嫌だと思つたが、人の命がかかってい

るのだ。クライドはマーティンを見下ろしたまま、壁に頭をこつんとぶつける。

「し、しないよ」

「フン、嘘言うな。しようとしてた」

「解ったよもう、僕の負け」

その調子で、マーティンとミンイエンは喋り続けた。レンティーノが貧血の薬を持ってここに来て、マーティンをしかりつけるのまではそんなに長い時間がかからなかったから、二人は話すことがなくなつて沈黙したりはしなかった。相変わらずシツクな茶系のスーツを着て現れたレンティーノだが、その頬や首筋や手の甲には傷がたくさんあつた。たったそれだけのことで、いつもの彼とは大きく異なつて見える。

「全く、貴方という人は。あれほどミンイエンに心配をかけるなど釘をさしておいたのに。大丈夫だと答えた舌の根も乾かないうちにそれですか」

「少しは黙りな。俺は重傷だ」

「そういう時だけ怪我人ぶらないで下さい」

呆れたようにレンティーノは言い、持っていた薬をクライドに手渡してくれる。

「ミンイエンから預かりましたよ。これを飲んで寝ていて下さい、クライド。半日も安静にしていれば、楽になるはずです」

頷き、クライドは無色透明で無味な液体を飲み干した。空の瓶を受け取り、レンティーノは去ろうとする。

「……そうだ、ちょっと待って」

呼び止めて、レンティーノを手招く。彼は肩越しに振り返り、それから体の方もクライドに向ける。

「どうかなさいましたか」

「エルフの薬を調合したいんだけど。屋上のハーブ園にリヤナと月光草とシェイデユの花はあるか？ 緋冠の花と乾燥させたアルルザイツも必要だけど、とりあえず入れなくても若干効き目はあるらし

くて」

「薬草でしたら、全部ありますよ。アルルザイツのドライフラワーもあります。材料を全てここに持ってきましようか？ もし煎じるのでしたら、鍋も必要でしょうか」

「出来れば頼みたい」

薬の作り方は、去年のうちに覚えておいた。祖母にみてもらい、ちゃんと効き目のある薬を一応は煎じることができるようになったのだ。けれど、シエリーに貰った薬よりも少し効果が薄い気がした。多分、彼女はまた違う薬草をそこに混ぜているのだろう。

「解りました。まず、ミンイエンのところに寄ってからにします」

「そうしてくれ。っていうか、それ全部他の研究員に頼んでくれて構わないから。ミンイエンの傍にいてやって」

「ええ。ありがとうございます」

レンティーノは部屋を出ていった。マーティンはその背中を見送り、ミンイエンにそれを伝えようと声を上げる。

「おいミンイエン、レンティーノが今」

そこまで言って、マーティンは異変に気づいたらしかった。

「……おい」

言いながら携帯を耳からはなし、マーティンは苛立たしげに枕を殴り付ける。どうしたんだと言いかけたところでマーティンは舌打ちを立て続けに二度もした。

「ミンイエン、切るなど言っただろ！」

マーティンは忌々しげに何度も舌打ちし、畳んだ携帯を投げてくる。危うく携帯を抱き止め、クライドはたたらを踏んで壁に背中を打った。

「行きな。ミンイエンを止めに！」

お前に指図されたくはないとは、流石に言える状況ではなかった。クライドは言われるまま走った。走ると視界が酷く揺れて吐き気がした。

「っ、」

吐き気を堪えながら走り、白い壁に突っ込む。転がり込んだ部屋にレンティーノはいなかった。ベッドの上に上半身を起こして座ったミンイエンが、何か銀色の物を持っているのを見つける。

「ミンイエン！」

また死ぬつもりなのか。反省したように見えたのは、演技だったのか。

けれど、良く見るとミンイエンが持っているのは刃物ではなく箱だった。銀色の小さな箱だ。その先に、先端に絆創膏のようなシールが貼られたコードがついている。あれは何なのだろう？ 自殺を助長するような道具ではない気がする。

「お前、それ何？」

駆け寄ってミンイエンの手元を覗き込む。ミンイエンは笑顔でクライドにそれを見せてくれる。ステンレス製だろうか。つやつやした表面に、少しだけミンイエンの指紋がついているのを確認できた。

「脳内すつきりリフレッシュメカだよ！ いいでしょ」

「何それ。具体的には？」

彼のいうことがいまいち良く解らず、クライドは訊ね返す。ミンイエンは箱についたコードを指先に絡めながら、楽しそうにクライドを見上げる。

「んーとね、せんのうちそうち」

「……は？」

コードの先に着いた絆創膏を左手首に貼り付けながら、ミンイエンは相変わらず楽しそうにしていた。とっさに理解できなかったその言葉を、クライドは頭の中で何度も反芻する。

せんのうち、そうち？ つまりそれは、洗脳装置だということになるのだろうか？

「クライドは止めないよね。僕が記憶を塗り替えても、君は死ぬよ。いいって言うてくれるよね」

確かにそういうだろうとは思った。けれど、そんなことを目の前でされてはこまる。大体、記憶を塗り替えるだなんて。

「待て。とりあえずレンティーノに話を聞く」

「だめだよ！ 絶対レンティーノはだめっていう。ハビもマーティンもセルジもノーチェもだめっていう。リイもきつとだめっていう。だから、君だけは僕を止めないで」

必死にそういつて首を横に振るミンイエンに、クライドはたじろいだ。けれど、その銀色の箱を取り上げてしまわなければまずいと思ひ、咄嗟にそれに手を伸ばす。

「やだ！ クライドやめてっ」

「お前もやめろよそんなこと！ とにかくそれを離せっ」

相手が怪我人だということなんて、今は関係なかった。大体、ミンイエンは怪我人の癖にかなり激しく抵抗してきたのだ。クライドも本気で奪おうとしなければ、すぐに押しつけられてしまっただろう。

「クライド！ 何をしているのですかっ」

その声に反応し、一瞬の隙が出来てしまった。ミンイエンはその一瞬を見逃さず、洗脳装置を抱き締めてクライドに背を向ける。

「どうということなのですか」

柄になく怒った様子のレンティーノに詰め寄られ、クライドは小さくため息をついてミンイエンから離れた。壁にもたれると視界が一瞬ブラックアウトし、直後に全てが歪んで見えた。

座り込んで深いため息をつき、クライドは膝頭に額を押し付けて眉根を寄せた。

気分は色々和最悪だった。

第四十八話 最低同士

ミンイエンは息を荒げながら、乱れた布団の上で丸くなっていた。その腹部に赤い色が染みているのをクライドは見逃さなかった。あんなに無理して動いたのだ、きつと折角繋いだ傷がまた開いてしまったに違いない。悪いことをしたと感じた。

「ミンイエンが、洗脳装置を持って」

「嘘だよレントイノ、クライドは嘘ついてるっ」

愕然としてミンイエンの方を向く。ミンイエンは洗脳装置をきつく抱きしめながら、涙目でレントイノの方を見ていた。傷が痛むのだろう。

「続けてください、クライド」

静かにそう言われ、クライドは頷いてその通りにする。

「だから、こいつ自分を洗脳するとか言いだして。で、それはさせちゃいけないと思って止めてた」

「だとしてもクライド、ミンイエンは大怪我をして寝ているのですよ？ それを、あんな……」

どう考えてもレントイノの怒りの原因はクライドにあった。確かに自分がしたことはいけないことだと思うし、レントイノが怒るのも無理ないことだと思う。

「それについては謝る。ごめんな、ミンイエン」

素直に謝ったが、ミンイエンの対応は冷ややかだった。

「だから、クライドは嘘ついてるんだよ？ 僕は洗脳装置なんて持ってない」

先ほどからクライドを嘘つき呼ばわりし、ミンイエンは丸めた身を余計にちぢ込めている。そんな無理をしても、洗脳装置から伸びるコードが微妙に指の間に見えるから意味がないと思うのだが。

レントイノはクライドを叱りこそしたが、嘘つきがどちらかはちゃんと解っているようだった。彼は小さくため息をつき、ミンイ

エンのベッドに歩み寄っていく。おずおずと顔を上げるミンイエンの頭をなでながら、レントイノーは哀しそうな目をしていた。

「自分を洗脳したいと思うほど、思いつめていたのですね」

「違っつてば」

「そういう時、どうして私に相談してくださらないのですか」

「……ごめん」

しょげたように腕を緩め、洗脳装置をきつく抱きしめるのをやめたミンイエンを見て、レントイノーはいつもどおりの微笑を浮かべた。

「やっと認めましたね？ 人を嘘つきだなんて軽々しく言うてはいけませんよミンイエン」

「うっ、レントイノーの馬鹿っ！」

「馬鹿はどちらですか。貴方は洗脳装置の恐ろしさを良く知っているはずですよ」

やはり、ミンイエンにはレントイノーがいないといけないと思う。そして、レントイノーにはミンイエンがいないといけないのだ。この相互関係があるからこそ二人は現在こうしてちゃんと生きていて、悲しみに暮れても何度も立ち直ってきたのだろう。

だから今回も、立ち直って前向きに生きて欲しい。身勝手なことを思っているのは解っているけれど、それがクライドの望みだった。レントイノーはミンイエンの手首からコードをはがしながら、小さくため息をつく。洗脳装置のステンレス製ボディにコードを巻きつけながら、彼は呆れたように微笑んだ。

「もうやめましょう、ミンイエン？」

「じゃあレントイノー、僕を殺してくれる？」

まっすぐにレントイノーを見上げ、ミンイエンはよどみなく言った。一瞬レントイノーは目を見開いて言葉をなくしたが、すぐにミンイエンの肩を掴んで声を荒げる。

「何をふざけたことを言っているのですか！」

「そうしてよ…… 僕嫌なんだよ。もう君やハビたちが疲れてく姿

を見たくない。僕のせいでみんないなくなっちゃうのが、怖いんだ。マーティンだって絶対無理する。僕の傍に来ようとす。やだ。嫌われたくない、嫌われてるってことを知りたくない、そんなことに気づきたくないっ」

レンティーノの手を振り払って、彼に枕を投げつけながらミンイエンは喚く。枕はレンティーノの胸辺りに軽く音を立てて当たった。そんなに飛ばなかったうえに、ミンイエンの力が弱く、レンティーノは痛そうにはしていなかった。けれど、固まったままミンイエンを凝視してまばたきもしない。

「だから記憶を塗り替えたんだ。そしたら皆が本音を隠して笑う顔、全部忘れちゃえるから！」

蜂蜜色の瞳がようやくまばたきをした。けれど依然として動かぬまま、彼はミンイエンを見下ろして固まっている。驚いているのか、悲しんでいるのか、とにかく彼の発言がそれだけ衝撃的だったらしい。

「僕のために我慢なんかしないで！ そんなの皆辛いだけなんだ…」

ついに泣き始めるミンイエンを見て、クライドはふらつく身体を支えながら枕を拾い上げる。軽く埃をはたいてミンイエンに渡してやると、彼は奪い取るようにそれをぎゅっと抱きしめて、そのまま涙を拭いた。

「ミンイエン」

思いつめたようにレンティーノが呟いた。一体彼は何を言おうとしているのだろう。ミンイエンの名前を呼んだきり黙り込んでしまった彼に、声をかけるべきかやめておくべきか迷う。そうしていると、ミンイエンの泣き声だけが響く静かな部屋に軽く笑う声が響く。「チツ、進歩のないガキどもだ」

するはずのない声にはつとふりかえると、マーティンが部屋の入りに立ってにやにや笑っていた。

顔面は蒼白でこめかみに脂汗が浮いていたが、それでもマーティ

ンは一歩ずつこちらに歩み寄ってきている。怪我をした両脚の、辛うじて傷が浅い方の左足を軸にして、一歩ずつ顔をしかめながら彼は歩いてくるのだ。嘘だと思った。けれど彼の存在は本物で、相変わらず嫌味に笑っている。

「……へ」

ミンイエンからは気の抜けた声が漏れ、すぐ近くにいたレントイノは息をのんでいた。クライドも信じられない思いでマーティンをじっと見つめた。

彼はゆっくり一歩ずつ確実に近寄ってきて、クライドを押しつけてミンイエンのベッドの足元に腰掛ける。押されてよろけて近くの芸術品に手をついてしまい、クライドは忘れようとしていた存在を再確認してしまつて吐き気を堪えた。すぐに芸術品から離れ、クライドは壁によりかかる。

「てめえ、何勝手抜かしてやがる。誰がてめえのためになんざ動く」「え？」

「俺はてめえのためじゃねえ、自分のために動いてる。ここにきたのだから自己満足だ。それでいいじゃねえか」

あまりに当たり前にそう言うマーティンに、クライドは驚くと同じ時に素直に感心した。自分の大事な人に「お前のためなんかじゃない」と、堂々とそう言えるマーティンが少しだけ凄いと思った。嫌いな奴なのに。

どう言つたら傷つけずにすむかとか、どうすれば相手が哀しい顔をしなくてすむのかなんて、おそらくマーティンは考えていない。

そうやって常に本音で相手と向き合うから、きつとミンイエンとの間にも深い信頼関係が生まれるのだろう。

「よくなつ、だって、マーティン脚、血が、折角手術したのにつ」

「ああ？ だからなんだ、全部自己満足だ。てめえが相変わらず煩く喚いてるのは俺らのためだと言いたいのか？ 馬鹿言え。そこそ全部てめえの自己満足だろうが。お互い様だ」

蒼白な割りに堂々と説教をたれるマーティンだが、ミンイエンが

慌てるのも無理ないくらいにその濃紺のズボンには濃い色の染みができる。マーティンは右手で腿の辺りをさわり、掌についた血を見て顔をしかめる。

「大丈夫なのですか」

「解りきつたこと訊くな」

大丈夫であるはずがない。クライドはそう思ったし、きっとレンティーノもそう思っているだろう。

後に障害が残ったとしてもおかしくはない酷使のしようだ、彼はどうしてもミンイエンが心配だったに違いない。どうしても、ミンイエンに死んでほしくなかったから。

「ためえ、俺の記憶を消そうとはな。いい度胸してやがる」

マーティンはミンイエンの頬をつねり、相変わらず嫌味に笑う。

「う、いひゃい」

「いいかミンイエン。俺の記憶は一分一秒たりとも消させねえ。そんなことしやがったら辞職してやる。ここには二度とこない」

辞職してやる？ はたから聞いたら吹きだしそうな言葉だ。けれどもこれは、ミンイエンにとっては笑い事ではない。研究所から離れられないミンイエンだから、辞職なんてされてしまったらマーティンにはきつと会えなくなるのだから。

「やだ」

一時的に泣き止んだミンイエンは、また目を潤ませ始めた。

「では私もそうしますよ。記憶を消したいということは、私たちの存在にストレスを感じているということでしょうからね」

「やだっ！」

駄々をこねるように『やだ』を繰り返すミンイエンに、レンティーノがようやくわずかだけ微笑を見せた。しかし反対に、マーティンの顔色はますます青ざめている。早く安静にさせないと危ないのではないだろうか。

「おいクライド〓カルヴァート」

「何だよ」

「ベッド運んできな」

「はあ？」

彼を安静にしてやらなければいけないと、確かに思った。しかし、クライドだって貧血で苦しんでいる身だ。ようやく少し研究所の薬のおかげで持ち直してきたのに、動いたら悪化する気がする。

「ただでとは言わない。てめえに借りを作るなんざ御免だからな」

「ああ。で、俺に何してくれるわけ？」

「銃一発ぶつ放す権利を与えてやる。ただし俺以外の奴にだ」

……何だそれは。

「いらねえそんな権利」

他に何も考えられないのか。たとえば昼食をおごるとか、そういう簡単なことを提案するのならまだしも、いきなり人殺しの権利だなんて。マーティンはやっぱり変わった男で、ついていけない次元を生きている人間だ。

「じゃあ何が欲しい」

先ほどの無茶苦茶な権利は、彼なりに本気で提案してきたらしい。マーティンは小首を傾げるように、少しいらだった声で訊ねてきた。

「そうだな……貧血の薬と帰りの渡航費」

適当に頭に浮かんだものを、特に考えもせずそう言っていた。マーティンにそんなものを望んでも得られないだろうが、欲しいものなんて今のところこれぐらいだ。しかし。

「解った両方やる」

「じゃ、それでチャラ」

別にこんな口約束はすっぱかされても良かった。帰りの渡航費はミンイエン本人が何とかしてくれると前に言っていたし、貧血の薬だって頼めば研究員がくれるだろう。ベッドを運んでくるという、ただそれだけの動作にこんなにたくさん代価はいららないと思う。

けれど、とりあえずそう約束しておけば、お互い貸し借り無しで気分が良かった。

「ではお願いしますね、クライド」

「ああ」

レントイノはミンイエンとマーティンの両方から離れたくないのだろう、クライドの代わりにベッドを持ってくるとは言わなかった。別にそう言われる期待もしていなかったし、クライドはミンイエンの傍を離れて気だるい頭痛に苛立ちを感じながらも部屋を出た。壁伝いに歩いて部屋に戻ると、部屋はしんとしていた。あまり音を立てないように気をつけて歩きながら、マーティンが寝ていたベッドを軽く整えてストツパーを外す。しかしその時に少し大きな物音を立ててしまったせいで、誰かが眠そうな声を上げる。

「クライド、手伝うおうかい？」

どうやら、クライドが起こしてしまったのはノエルだったようだ。クライドは彼の寝ているほうを振り返らずに、マーティンのベッドのストツパーを外してキャスターを動かす作業を再開する。

「いや、いいよ。ノエルは昨日かなり無茶してたから」

「マーティンはどこに行ったんだ？」

今の声は明らかにノエルではなかった。振り返ると、不機嫌そうにベッドに長座したグレンが目に入る。

「お前も起きてるのかよ」

「皆起きてるよ、クライドが行っちゃったあとから。マーティンの声で起きたんだ」

ベッドの上を転がりながら、まだ眠そうな声で答えたのはアンソニーだ。クライドは小さくため息をついて、ストツパーを外して動くようになったマーティンのベッドに軽く腰掛けた。何だか眩暈が酷い。

「僕は止めたんだけどね。医師を志す者としては、怪我人の無理な行動を見過ごすわけにはいかないから」

「そしたらあいつノエルに掴みかかろうとしゃがって。止めようとして転ばしちまった」

グレンは髪をいじりながら決まり悪そうに言う。確かに、怪我人を転ばせてしまったら良心の呵責を感じるだろう。けれど、相手が

マーティンなら別だと思う。彼はたとえ転ばせてしまったとしても、すぐ仕返しをしてくるタイプだ。

「あいつを？」

「マーティン反撃しなかったんだよ。珍しいよね。脚痛そうなのに無理矢理走っていつちやっただよ。」

彼らの言葉に納得できた。やはりミンイエンが心配だというその一心で、マーティンは駆けつけて来たのだろう。他の人間になんて構うこともせず無理をして、傷ついた体を更に傷めてまで。

「あいつ、そこまでミンイエンのこと思ってるのか」

思わず呟くと、グレンは軽く笑う。

「もし俺とあいつが同じ立場で、ミンイエンがお前だったらさ」

視線を動かしてグレンを見る。彼もクライドを見た。澄んだ青空のような色をした目が、いたずらっぽく笑いながらクライドを捉えている。いたずらっぽくいけれど、決して冗談をいう時のそれではないその瞳。

「俺もあいつと同じことするよ？」

脚を壊してまで傍に駆けつけると、彼はそう言うのだろうか。ク

ライドは首を横に振る。

「するなよ」

「お前もするだろ、きっと。性格的に」

即座に切り返されて一瞬返事に詰まる。確かに、黙って数ヶ月もベッドに寝ていようとは思えない。きっとすぐにでもベッドを抜け出して、グレンの元へ向かうだろう。相手がグレンでなくても、アンソニーやノエルでもそうすることは目に見えていた。

「……する」

「そういうもんだろ、多分」

自然に頷くことができた。クライドがグレンたちを思うのと同じように、マーティンもミンイエンのことを気遣っている。捻じ曲がった性格の歪んだ男だと思っていたマーティンにも、意外に普通に誰かを思う気持ちがあるということがクライドには今まで上手く実

感できていなかった。

「これ、マーティンのところ持つてく」

そろそろ戻らないとマーティンが文句を言いそうだ。交換条件になっっている以上は、なるべく早く戻らなければいけないだろう。遅かったから渡航費はなし、なんて言われても別に困りはしないが。

「ベッド？　じゃあ僕一緒に行く」

ころころ転がっていたアンソニーが、ベッドから飛び降りてクライドのところへ駆け寄ってくる。

「おいおい、お前もまだ寝てた方が」

「だってクライド一人じゃ大変でしょ？　それに、ミンイエンのお見舞いしたいし」

更にもう一度断ろうとしたが、貧血で身体がふらついたので素直に甘えておくことにする。

ベッドを動かすだけなのだ、アンソニーが倒れて息をしなくなることもなんてないだろう。そうしたら貧血をさらに酷くしても想像で何とかするから良いが。

「わかった、じゃあ頼む」

「無理しないで、クライド。アンソニー、あまり走らないようにね」

「はい、ノエル先生！」

苦笑気味のノエルと眠そうなグレンに見送られ、クライドとアンソニーは早足で部屋を出る。ミンイエンの部屋に行くと、マーティンがだるそうに俯いているのがみえた。

「おい、持って来たぞマーティン」

「ああ」

声をかけながら、ミンイエンのベッドの隣にマーティンのベッドを固定してやった。ミンイエンはアンソニーの来訪を喜んでいたが、やはりあまり元気そうではなかった。

「マーティン大丈夫？」

「はっ、こんなもんでくたばるか」

アンソニーの問いにはいつもの皮肉たっぷりな声を返しているが、

マーティンの顔色はまるで紙のようだった。レントイノーは彼を横目で見て呆れたように首を振りつつ、透明なグラスに入った水を飲んでる。おそらく薬を飲んでいたのだろう、そばにあるテーブルの上にカプセル錠や糖衣錠のシートが数種類ずつあった。

「ミンイエンを起きたんだね、よかった」

「元気そうだね」

「だって、歩いてミンイエンに会いにこれるくらいに回復したから」
アンソニーはベッドに寝るミンイエンを見下ろし、満面の笑みで喋る。喋っているうちに元気がでてきたのか、ミンイエンは徐々にいつもの調子を取り戻し始めた。レントイノーがほっとしたように微笑み、マーティンのベッドに浅く腰掛ける。

しばらく楽しそうに話していたが、アンソニーは何か決意したようにミンイエンを注視し、それから優しく話を切り出した。ミンイエンは腹部の傷が痛むのか、両手で傷を押さえながらアンソニーを見ている。

「ねえミンイエン。リイ、嬉しそうだったよ？ ミンイエンに会えて、もう一度顔を見て、たぶんリイにとってはもうそれだけでよかったんじゃないのかな」

「そんなの嘘だよ、きつとリイ怒ってるよ。悲しんでるよ。失望してるよ、なんでこんな弟を持ったんだらうって」

「そんなこと絶対思わないよ！ 僕がミンイエンのお兄ちゃんだったら喜ぶよ？ もう一回会いたいって思ってくれて、そのために長い時間をかけて自分を呼び戻してくれようとするなんて」

見守るレントイノーの目は不安げだった。マーティンは二人の方を向かず、真上を向いて深い呼吸を繰り返している。けれど二人とも、アンソニーの言葉でミンイエンの何かが変わることを望んでいるのだ。無駄だと思うならマーティンがアンソニーを黙らせるだろうし、レントイノーは強制的に話を曲げるだろうから。

「ほんとに？」

「うん。でも、その後でミンイエンがやっぱり実験しなきゃよかった」

たつて思ったり、その末に死んじゃったりしたらそれはただの自分勝手だ」

慎重に言葉を選び、何か言つたたびに辛そうにしながらも、アンソニーは言い切つた。

「もう友達に心配かけるようなこと絶対しないで、ミンイエーン。みんなミンイエーンのこと、大好きなんだよ。ミンイエーンがいなくなつたら、辛くて死んじゃいそうになる人ばかりなんだよ?」

一体何度説得されればミンイエーンは自分を追い込まなくなるのだろうか、クライドはずつと考えていた。アンソニーの必死の説得に、ミンイエーンはただ静かに頷いていた。どうやらまた泣いているらしい。レンティーノが仕方なさそうに苦笑しながら、よしよしとミンイエーンの頭をなでる。

「でも僕、辛いんだ」

「では、皆でその辛い記憶を共有しましょう。ですが、間違つても消そうだなんて思わないで下さいね。寂しいじゃないですか、そんなの」

直後、ミンイエーンは声を上げて泣きじゃくる。レンティーノの手に縋るようにして、彼は子供ののように泣きじゃくつた。そんなミンイエーンの頭を、ベッドから身を乗り出したマーティンが軽く叩いた。「つた、痛いよマーティンっ」

「いつまでもうじうじしてんじゃねえ。もう全部良いつて言つてんだ、素直に全部認める。てめえの弱いところもウザイところも最低なところも、俺に比べたら大したことねえからな」

「そんなことないっ、ないから」

「いえ、ミンイエーン。彼の言うとおりですよ? 私たちは最低同士の集まりではないですか。今更ですが」

くすつと悪戯つぽく笑い、レンティーノは黒い無地のハンカチでミンイエーンの頬に流れる涙を拭う。ミンイエーンはぼかんとして、長い前髪の間からマーティンとレンティーノを交互に見ている。

「え?」

「今更なんだ。てめえの兄貴以外の実験台は何百と殺してきただろ。ネズミも含めりゃ軽く千は越える」

「うっ」

「目的が達成できなかったことなんて、今までに何度あったと思っているのですか。数え切れませんよ」

白いベッドに寝たミンイエンは、両サイドからそんなことを言われて困っているようだった。開き直ったかのような二人の発言に、彼は縮こまるばかりである。

レントイノは相変わらず悪戯っぽく笑ってはいたが、ミンイエンの困った顔に少し気まずさも覚えているように見えた。それもそうだ、レントイノはマーティンとは逆で、いかにして相手を傷つけないように接するかを常に考えている人間だ。

「一本の試験管さえありゃ人生は発見の連続だって、てめえの格言じゃねえのか」

「それ、雑誌載ったときの……」

少し頬を染め、ミンイエンはマーティンをちらりと見やる。そうだ、確かに『十八歳若社長』のページにあった二番目くらいに大きい見出しに、そんな言葉が載っていた。あれはミンイエンの言葉だったのか。

「あのと、私は本当に嬉しかったですよ。貴方が国中から大注目されて、認められて。貴方の努力が実を結んだということを、私は誇りに思いました」

優しくそう言いながら、レントイノは細い傷だらけの指でミンイエンの前髪をそつと分ける。目に入りそうだった前髪を額のやや左側で分け、レントイノはミンイエンのこげ茶色の瞳を見つめながら続ける。

「ミンイエンは頑張り屋さんですから…… きっと、少し疲れてしまったのですね。いいですよ、休んでも。ですが、休むことと絶つことは違います」

こげ茶の目を伏せて、ミンイエンは小さく眉根を寄せた。クライ

ドはミンイエンの肩をぽんと叩き、心配するなど笑ってみせる。

「そろそろ俺は戻るよ。何かあったら電話しろよ？ レンティーンも」

「……うん」

ミンイエンはあまり気乗りしない様子で頷いた。今は混乱していてもうまく返事が出来ないのかもしれない。けれど彼が落ち着くまでの間、この部屋で倒れずに待っていられる自身はなかった。早く部屋に戻って休みたい。

アンソニーをちらりと見ると、彼はまだミンイエンのそばにいた。いよつでクライドに先に帰るように言った。頷いて部屋を出る。

この先どうなるのか、クライドには予測がつかない。何を想像すれば効果的に未来を変えられるのか、何を創造できれば一番穏やかに済むのか、そればかりを考える。

第四十九話 未来を創る魔法

白いベッドに飛び込んで意味も無い声を上げると、ノエルに覗き込まれた。

「どうしたんだい？」

「聞いてくれよ…… ミンイエンがさ。あいつ、自殺の次は自分を洗脳するとか言い出して」

全部言い終わる前に、ノエルは悲しげに目を伏せた。彼が何か言う前にグレンが小さく笑い、クライドの傍まで歩いてきて顔を覗き込んでくる。

「そりゃあ目が離せないな、レンティーノもマーティンも」

「トニーも心配みたいであっちにいる」

納得したようにノエルは頷いて、小さくため息をついた。そしてノエルは軽くクライドのベッドに腰かける。まだ本調子ではないらしい。

「何とかならないものかな、この状況」

全く同じことをクライドも考えていた。というか、この空間でこれを考えない人間はいないだろう。グレンだってそれを考えているだろうし、たぶんこの研究所ではミンイエン以外の誰もがこう思っているに違いない。

「あいつの兄貴が全部赦すって言えば済むことだろ？」

「そんな簡単なことじゃないよ、グレン。リイシユイは死んでいるんだから」

「でも実際、あの兄貴は最期にそんなこと言ったんじゃないか？」

それはクライドも同感だった。別に、リイと深い関わりがあるわけではないし（あつたら困る）、会話も交わしたことがない（相手は死体だし、生き返った彼はミンイエン以外の人間とほとんど口をきかなかった）。しかし彼は雰囲気的には優しそうなお兄さんという感じがしたし、ミンイエンのことは誰よりも深く思っているだろ

うという感じをクライドは受けていた。

「でも、想像じゃリイを生き返らせることなんかできないしな」

だからクライドにできることはないのだ、多分。そう思ったが、ノエルがクライドを見下ろしてふと呟く。

「幻覚ならどうだい？」

「ああ！ そういう手があった」

ぱっと思いつかんたのは、全ての始まりだったあの日にジャスパーが出した幻像だった。目を焼いた犯人は誰だと言うジェイコブの問いに、ジャスパーが出した幻のクライドだ。写し取ったように同じで、鏡に写すより妙にリアルな感じがして怖かったことを覚えている。左右が反転された自分に見慣れていたせいで、髪の流れる向きが妙に変に見えたものだ。

「でも長時間やるとなるときつい。それに」

「それに、なんだよ」

「音声つきは厳しい」

リイの声をまねしながら想像をするわけにもいかないし、クライドがミンイエンとリイ（幻像）のいる場所に出現したらまずいだろう。ジャスパーが出したのと同じくらいリアルな幻像は問題なく出せるだろうが、声までつけて想像するのは大変だ。

「どっちにしろ、お前は今貧血なんだろ。やめとけよ」

「そうだな」

しかし、あっさり引き下がることなんてできるわけがなかった。

一度思いついた名案を易々と捨てようとは思えない。後でアンソニーを迎えにいくとかいいつつ、ミンイエンの部屋の入り口辺りで想像をすればいい。その前に、貧血の薬を作っておく必要があるだろう。丁度良かった、今から煎じれば良いのだから。頼んでおいた薬草が、そろそろ来る頃だろう。

「お、きたきた」

グレンの声に身を起こすと、小柄な白衣の男が二人で銀色のワゴンを運んできた。手術器具を運ぶワゴンに見えたが、気のせいとい

うことにしておく。

昼食も用意してくれていたらしい。空腹なんて忘れていたが、料理を見た途端に思い出した。

ワゴン上段には三人分の料理が、下段には鍋が置いてあり、中には薬草がこれでもかというほど入っていた。テレビで見た動物園の飼育係が頭をよぎった。スケールは違うけれど、ゾウの餌を運ぶ台車とワゴン下段のあふれ方がそっくりにみえた。さすがに多すぎだと思ったけれど、多ければ多いほど沢山の薬ができるのだから良いとする。

研究員に礼を言うと、二人とも生真面目にお辞儀をして帰っていた。グレンは早速食事に手をつけ始めていて、ノエルはクライドが手をつけるまで待っている。クライドは自分の分の皿を取り、陶製の蓋をはずしてみる。中身はシチューだった。

食事を終えてすぐにワゴンの薬草を手順どおり鍋に入れた。薬草に埋もれるようにアルコールランプが二つあったので、想像で両方に火をつけてみると予想外に火力が少なくてがっかりする。

「気を落とさないで。僕の魔法はこういうときに便利だから」

ノエルがそういいながら、火に手をかざす。凄いい勢いで燃え始めたので一瞬驚いたが、ノエルは安心しろと言う。アルコールはたっぷり入っていたし、継ぎ足すための瓶がワゴンの隅の方にちゃんと乗っていたので、燃料の心配もなさそうだ。

三脚の上に鍋を載せ、グレンに頼んで水を汲んできてもらった。水は歯磨き用のコップで二杯分ほどあればよかった。けれど、同じ手順であと三回は薬を煮出すことができるだろうと思うほどワゴンの下段には薬草がたくさん載っている。

「ちょっと潰すものほしいかなこれ」

「そうだな、ちょっと近くの研究室当たってくる」

「悪いなグレン」

「気にすんな、飯食ったし身体動かしとかないと鈍るから」

相変わらず快活な笑みを浮かべて、楽しそうにグレンは去ってい

った。食事の前とはかなり元気の度合いが違う。

彼の背中を見送って、クライドは床にあぐらをかいた。流石に布団の上で監視を続けるわけにはいかない。研究所の床は掃除が行き届いていて綺麗だから座るのにあまり抵抗はなかった。

薬を煎じながら鍋の中をじっと見ていると、ノエルにぼんぼんと肩を叩かれる。

「その薬、できたら僕にも少しくれるかい」

「お前貧血か？」

「少しね」

苦いぞ、と言おうとしてやめておいた。そうだ、ノエルはかなりの苦い物好きなのだ。アンソニーやグレンならすぐ吹き出して洗面所に直行するような苦い飲み物でも、彼なら美味しいと味わって飲む。凝縮されたコーヒーが日常の飲み物なのだから、たぶんエルフの薬だつて彼なら美味しいといつて飲むだろうとクライドは思った。「このまま潰しながら煎じて、水が濁ってなべ底が見えなくなるくらいになったら次のステップ」

「まだかかるんじゃないのかい？」

「ああ、結構かかる」

ぐつぐつ音をたてながら目に悪い蒸気を上げ、鍋の中の黄緑色の液体を見つめ続ける。液体はノエルの瞳の色に近い若草色になってきた。ノエルはクライドの隣でアルコールランプに魔法をかけながら、薬草が煮立っている様子を楽しげに眺めていた。グレンはまだ戻ってこない。

「う…… 沁みる」

先ほどから瞬きの回数が増えている自分に気づいていた。肩口で目をこすり、目をしばたきながらそれでもまだ薬を見つめる。

「僕が代わりに見ていようか？」

「ああ、平気。早くできないかな」

早く薬ができればいい。そうしたら、こんなもの早く飲み干してミンイエンに幻影を見せてやれる。それで彼が思い悩んで記憶を消

すなんて愚行に走らなくなるのなら、これ以上のことはないと思っ
た。

やがて、グレンが部屋に戻ってきた。手には調理器具らしい木製
のへらを持っている。

「これ、コックに頼んで借りてきた。いいか？　こんなので」

「十分。ありがとな、グレン」

受け取ったへらで鍋の中身をかき混ぜれば、目に悪い蒸気がさら
にたくさん出てきた。少しむせながら鍋の中身をかき混ぜ続けた。
そのうちノエルが疲れてきたのに気づいたのか、グレンが彼に魔力
を分け与えたりした。

三十分も煮込めば、ようやく薬草の成分がよく染み出たペースト
状の液体ができた。緑がかかった黒のような気持が悪くなる色合い
だが、沁みる蒸気はもう吹き上げなくなっていた。

薬草の中から、後入れ用の物を探してきてむしりながら鍋に放り
込む。この薬草を入れるときから、鍋の中で劇的な変化が始まるの
だ。

「お？　何これ、また黄緑に戻ったな」

グレンがクライドの肩に手をかけ、鍋を覗き込む。鍋の中では、
あの気持ちの悪い色をした液体が黄緑色に変色していた。芽吹いた
ばかりの若葉のような、清々しいほどの黄緑である。薬草の中に埋
もれていた花を取り出して、花弁を一枚ずつちぎって入れていく。
花粉も重要なので、指先につけたりして減らしてしまうことのない
ように気をつけておしべをむしっていった。葯の中に詰まった花粉
が液体に触れると、またそこから変化が始まる。

「今度は透き通ってきたよ、一体どんな変化が起きているんだろう
ね。これも君の魔法かい？」

ノエルは本当に楽しそうだった。彼の楽しそうな横顔を見ている
と、小学校の理科の授業で、初めて実験をしたときのことを思い出
した。

「お前、貧血だから薬作ってるんじゃないか……」

確かに、とグレンに同調して笑いながら、へらで薬草をかき混ぜる。透き通った黄緑色の液体は一気に無色透明に近くなり、その後にもまた透明度を保ったまま緑色に戻っていく。今度は若草色というよりは深緑色で、どんどん色が濃くなっていった。もう黒に近くなつた。ここでまた、あの花をくわえる。そうすれば色は再び透明に近くなり、こんどはだんだん赤みを帯びる。オレンジ色になったら一旦火を弱めて、表面に薬草の残骸が浮いてこなくなるまでじっくり煎じる。それがエルフの薬を煎じる手順で、このタイミングがとても重要だつた。

「ノエル、火を弱めて」

「わかつたよ。これでいいかい？」

ノエルはただ酸素を送るのをやめるだけでなく、微妙な加減で火の大きさを調整してくれていた。細かいところにもまで気が回るノエルの観察眼は、時として負担になることもあるだろう。責任感が強くて繊細なノエルだから、何でも背負い込んでしまうのだ。

間違つてもミンイエンのようにはなつてほしくないなどと、ちらりとも思ってしまった自分に腹が立つたし呆れた。

ノエルたちだけがよければいいのではない。ミンイエンは毒見役でもない。自分の中にこんなに不謹慎でわがままな部分があったことを、クライドは情けなく思った。

「これ、煮てるとあの青い色になるのか？」

察したようなタイミングでグレンが話しかけてきた。クライドは考えるのをやめて笑顔を返し、まだ少し沁みていた余韻が残っている目を肩口でこする。

「いや、ドライフラワーを入れて十分で色が変わる。そしたら、火から外して飲む。作りたてのものか、一週間たったあとのものが一番効果が強いんだって」

「微妙な周期だな」

三人で雑談しながら鍋をかき混ぜていると、オレンジ色だった薬草がどんどん赤くなっていった。このタイミングでドライフラワー

を入れる。見ている二人から感心したような声があがった。

「すげ、いきなり青くなった」

「あと十分かい？」

「そう。もう少し色が薄くなるまで加熱して完成」

十分なんて目安でしかないので、正確に測る必要はなかった。携帯の時計をちらちら見ながら、ある程度の時間がたったところで火を止めてもらう。

「コップある？」

「これでいいか？」

グレンが洗面台のコップを持ってくる。ノエルの分も必要だと言
うと、グレンは洗面台の戸棚から紙コップを出してきた。

「ありがとう」

「気にすんな」

鍋の中身をコップに注ぐ。二杯ほどありそうだった。ノエルは
カップを手に持ち、中の水色をじっと眺めていた。

「熱いから気をつける」

「ありがとう。じゃあ、頂くよ」

クライドは息を止め、良く吹いて冷ました液体を口に含んだ。一
気に嚥下してもう一口飲む。カップの半分を飲みきった所で息が持
たなくなった。

「っ、げほっ」

止めていた息を吸ったとたん、独特の風味に襲われた。隣でノエ
ルは少しずつ薬を飲んでいたのだが、むせはじめたクライドを見て
ぎよっとしている。慌てて背後に回ったグレンが背中を叩いてくれ
て、楽になったようになっっていないような微妙な感覚を味わいなが
らまた咳き込む。

「大丈夫か？」

「へ、きっ」

やはり、何度飲んでも慣れない。咳き込みながら残りを一気に喉
へと流し込むと、今度は熱さに涙が出る。咳のし過ぎで頭が痛くな

ってくる。

「あーあ。本当、劇薬だなこれ」

呆れたようにグレンは笑った。彼は貧血になどなりそうにないとクライドは思う。思いながらもまた咳き込む。見かねたのか、ノエルもクライドの背中を叩いてくれた。

「でもつ、も、効いてきた……」

「クライド、あと半分あるよ。どうするんだい」

「飲ま、ないとっ」

激しく咳き込んでもう何も喋れなくなった。効き目は確かだが、味も風味もきつい。咳き込みながら立てた膝に頬骨を押し付ける。

やがて咳は止まったが、鍋の中にはまだ薬が残っている。肩口で涙を拭い、クライドはノエルを見た。彼はどうして咳き込まないのか。

「大丈夫かい？」

「お前、よく平気だな」

彼は味覚が変になるかと思うくらいの薬だつて、普通に飲めてしまふのだ。そうでなければ、薬を口に含んだ瞬間から成分を分解する魔法でも使っていたに違いない。真相はわからないが。

相変わらず穏やかな笑みを浮かべたまま、ノエルは紙コップをちらりと見やる。中身はすっかり空になっていた。

「僕はこの味、好きだよ。苦味が強くて、ほのかに花の香りがする」「するの？花の香りなんて？ 苦いとしか言いようがないんだけど」

鍋の中に残ったコップ半分ほどの綺麗な水色を見て、クライドはげんなりした。どう考えても花の香りなんてしないし、吸い込んだ蒸気の臭いで味が蘇ってきて吐き気がする。苦い臭いなんて今まであまり数を知らなかったが、この薬は臭いからして苦い。

「グレンも飲んでみるかい？ 身体のだるさが消えるよ」

クライドの様子を見て、ノエルがグレンにそう言った。グレンは鍋の中身をのぞきこんで、それからダウンしているクライドを見て、感心したように唸る。

「んー、これ貧血以外にも効果はあるんだな」

「微妙に。疲れ目とかにも効果あるってばあちゃんが言ってた」

「でも俺は飲まない、絶対」

「だろうな」

全部飲むしかない。全部飲めばそれだけ体調不良から回復できるのだから、飲むに越したことはない。クライドはコップに付いた最後の薬を、気合で飲み干した。身体は激しく拒否反応を示したが、堪えてコップを洗いに行く。

ミンイエンはどうしているだろうか。アンソニーがいい話し相手になっていればいい。アンソニーは落ち込んだ人を励ますのが上手いとクライドは思うから、元気になっていればそれに越したことはない。

「じゃ、ちょっとあいつらの様子みてくる」

「待って」

ぐるりと背中を向けた途端、ノエルの鋭い声に静止させられた。一瞬ぎくりとしてしまい、その瞬間しまったと思う。

駄目だ。こんな解りやすい反応をってしまったら、やましいことがあると丸解りではないか。

「ん？ 何だよ」

無駄だと解つていても平静を装って、そう言いながら振り返るとノエルはワゴンに残った薬草を鍋に放り込みながらクライドを横目で見ていた。完全にばれているとクライドは悟る。

「無茶しないでよ。君、今絶対何かたくらんでるから」

「何言ってるんだよ、別に何も」

嘘なんて通じない。解つていながらごまかしてみれば、今度はグレンに笑われた。

「バレバレ」

「……ただのハツタリだろ？」

二人は顔を見合わせ、くすくす笑い出す。もっと上手に嘘をついて、もっと上手にごまかしていたとしても、きっと二人には見破ら

れていたに違いなかった。

ノエルは片手でずれた眼鏡を上げながら、アルコールランプに魔法で火を灯した。小さなふたつの揺らめきが、いたずらっぽく笑っているように見える。

「僕が君とどれほど長い間一緒にいたと思ってるんだい。同じ町の中で、ほぼ毎日顔をあわせて、僕は少なくとも君の表情の変化くらいはすぐ解るようになったよ」

「そうそう。大体さ、出てこうとしたときだって声に出てたし」

もう隠そうにも隠せないところまでできてしまった。何をしても無駄だし、この状況でまだ嘘をつこうというような気にはならない。

それに、きつと二人なら理解してくれると、どこかでそう思っていた。

「はあー、何だお前ら目ざとすぎ」

「倒れたら薬飲ませてあげるよ。煎じ方は今君がやったのを再現するから問題はないと思う。途中で解らなくなったら本で調べるよ」

当然のようにノエルが言った。一瞬拍子抜けしたが、止められなかったことにほっとした。

「止めないのか」

「止めたって無駄でしょ。解ってるよ、去年の春からもう」

ノエルは静かに言った。

そうだった。あのときから、終始仏頂面だったノエルが少しずつ変わり始めたのだ。旅に出るなら自分達を連れて行けと、半ば強引に話を進めたのはノエルだった。

懐かしい気持ちになる。ノエルはまだ、忘れていないのだ。いや、忘れようのない記憶だが。嬉しくもなったが、心配をかけているのはわかっていたから胸が痛んだ。

「俺はついてくけどな」

ベッドに腰掛けて長い脚を組んだ姿勢で、グレンはにやりと笑う。当然ついてくる気のようにだったが、クライドは首を横に振った。

今回ばかりは、たとえグレンでも連れて行くわけにはいかない。

途中でグレンに止められたりしたら折角の努力が水の泡だし、ミンイエンにも気づかれてしまいそうなのだ。それは避けたい。

「駄目だ。グレン、今回は残って」

「何でだよ」

「人がいたらいけないんだ、あの部屋に隠れるところなんか殆どないだろ？」

「でも」

まだ食い下がるグレンに、クライドは胸の痛みを感じていた。こんなに心配させているのに、自分はいまからまた馬鹿なことをしようとしている。

馬鹿なことだと解っていた。けれど、それで少しでもミンイエンが前向きになるのなら、クライドは馬鹿でも構わなかった。

「ごめん、今回だけは本当にごめん」

しばらくグレンは何も言い返してこなかった。

「……一時間。一時間だけだからな。一秒でも過ぎたら、ノエル連れて迎えに行く」

「ありがと」

グレンは立ち上がり、クライドの背中をぽんぽんと叩いた。頷いて、深呼吸して部屋を出る。部屋を出るその間に、ノエルとグレンから絶対戻って来いと言われた。苦笑しながら廊下を歩く。あの声には、答えられなかった。何を答えても嘘になる気がした。

第五十話 大事なものはすぐ傍に

誰もいない静かな廊下を、貧血から解放されて軽くなった気がする身体で歩く。ミンイエンの部屋に近づくと、向かいからレントイノが小走りで行ってくるのが見えた。

「どうしたんだ？」

声をかけると、レントイノは止まって笑顔を作る。あまり引き止めていてはかわいそうだ。すぐにでもどこかに行きたそうにしているのが、彼の行動を見てよく解った。

「ミンイエンにリングを頼まれたのですよ。術後の食事は初めてですから、擦り下ろしたいと思ってます。時間がかかるでしょうから早く食堂へ行かなければなりません」

「そっか。あ、じゃあさ、一時間くらい戻ってこないでくれるか」

こんな軽い言葉でレントイノがすぐに頷くはずがないことは百も承知だった。案の定、レントイノは早く離れたそうだった雰囲気すら崩してクライドをじっと見下ろしてくる。

「……どういう、意味ですか？」

「ミンイエンには俺から時間かかるって言っておくよ。一時間ジャストで戻ってきて。それ以上ならいいけど、以下はだめだから」

時間がない。グレンに言われた時間から、ぴったり一時間でミンイエンに幻を見せられるかどうかは微妙なところなのだ。

まだ障害物はたくさんある。ミンイエンの傍から離れようとしないうれんたいノが、こうして廊下に出ているのは好都合だ。しかし、動けないマーティンや、まだミンイエンを説得中かもしれないアンソニーがどう出るかによって、幻像にかけることができる時間が変わってくる。

十分やそこらで終わらせるようなことはきつとできない。最悪の場合、ミンイエンを余計混乱させて終わることにだってなる場合がある。そこは、クライドも承知していた。だから早く障害物を抜け、

ミンイエンのいる空間にたどりついたかった。

「何をするつもりですか。はっきり教えてください」

「イリユージョン・シアター。今はそれしか言えない」

「そこに私がいてはいけないのですか」

頷く。レンティーノは少し俯いた。けれど、ポケットに手を突っ込んで彼は小さくため息をつく。顔を上げた彼の眼鏡のふちに、廊下の抑えた照明が反射した。

「一時間、ですね。解りました。貴方との約束は果たします。ですが、貴方も私と約束をして下さい」

「何だよ」

「後ほどお茶に付き合ってください。詳細を一对一でお聞きします」
「わかった。必ず話すから」

レンティーノは目を伏せてくるりと背を向けると、それきりクライドの方など一度も見ずに去っていった。クライドも早足でミンイエンの部屋に向かう。クライドの足音以外の物音は相変わらずしないが、少なくともマーティンとアンソニーはそこにいるだろう。

確認もせずに白い壁に突っ込む。運良くドアは開いたままだった。ミンイエンが顔を上げ、嬉しそうに笑った。マーティンはミンイエンに背を向け、眠ったように動かない。

ミンイエンの荒れた様子が目に入らなくてとりあえずほっとしていると、部屋の奥にあるデスクから薄いラップトップ（ミンイエンの仕事用だ）を抱え、アンソニーが小走りでやってきた。

「クライド！ ミンイエンがね、りんご食べたいって」

食欲がでるほどに回復したミンイエンのことが、よほど嬉しいのだろう。アンソニーはラップトップを抱えたまま飛び跳ねる勢いで笑顔になる。

「ああ、レンティーノにそこで会って聞いた。遅くなるって言うってたぞ」

「ええっ、嘘。お腹減ったよ」

ベッドの上からかなり残念そうに反応してくるミンイエンに思わ

ず苦笑する。まだ本調子ではないのが声で解った。

「腹減ったらりんごなのかよ」

純粹に疑問を感じて笑いながら言えば、ミンイエンは大真面目に頷く。アンソニーはミンイエンのベッドに小さなテーブルを置き、その上にラップトップを置いて電源を繋ぎ始めた。まだ安静にしているべきだと思つが、ミンイエンはここで仕事をしたいらしい。

「前にもレンティーノにりんご剥いてもらったんだ。レンティーノ、りんご剥くの上手いんだよ。皮一本につながるんだ」

「ふうん。飯は食わないのか」

「ちゃんと食べるけど、りんごが先」

そんな会話をしながら、何気なくアンソニーを手招く。

「飲み物貰ってきてやるよ。何がいい？」

言いながら、アンソニーにちらりと目配せする。話したいことがあるとき、こうして視線をやるだけでアンソニーは大体察してくれる。軽く頷いて、アンソニーは先に部屋を出て行った。

「本当に？　じゃあね、はちみつレモンドリンク。自販にあると思うから」

「わかった」

笑みを浮かべて手を振りながら、クライドは部屋の出口に向かった。肩越しにちらりと振り返れば、マーティンはまだ起きる気配を見せなかった。眠っているのだろう。痛みで気を失っているということなら、ミンイエンがもっとおろおろしているはずだ。

白い壁を抜け、待っていたアンソニーにごめんと声をかける。彼はぱつと顔をあげ、クライドについてくる。

「どうしたの？　クライド」

「ミンイエンに魔法をかけるから、先帰ってて」

「……クライド」

ぴたりと足を止め、アンソニーは非難がましい目でクライドを見上げた。

「グレンとノエルには許可とってあるから」

数歩先で立ち止まってそう言ってやれば、アンソニーは『じゃあ安心だね』と笑ってくれるのだと思った。けれど、その表情は一層険しくなる。

「じゃあ尚更悪いことだ。何するつもりなの？」

「詳しいことは秘密。グレンとノエルに聞いて」

まだ納得した様子のないアンソニーに、ほんの少し焦りが芽生える。このままアンソニーが納得してくれなかったらどうしよう。このままでは、折角グレンやレンティーノたちから了承を得た時間が無駄になる。

「一時間以内に終わるから」

「でも」

「お願いだトニー、ミンイエンのためなんだ」

空色の瞳を真っ白な廊下へ向け、アンソニーはしばらく困ったように考え込んでいた。しかし、少しして彼は顔を上げる。クライドはその顔をじっと見つめた。

「無事に戻ってくるよね？ 絶対一時間以内に終わるんだよね？」

「絶対とは言い切れないかも。でも、ちゃんと皆で帰るよ」

「うそついたら怒るよ」

「大丈夫、なんとかなる」

アンソニーは渋々頷いた。そして、一人でクライドを追い抜いてすたすた歩き始めた。大またで歩き、それからふと思いついたように足を止めてアンソニーは数十メートル先で振り返る。

「はちみつレモンドリンク探してくるから。一時間したらすぐ行く」「ごめん」

不機嫌そうな顔だったアンソニーは、クライドのしよげた様子を見てようやく軽く笑みを浮かべた。クライドはほっとして、微笑みかえず。

「頼んだよ、ミンイエンのこと。クライドならきつとつまくやってくれるって僕は信じてる」

何を言ったらいいのかわからない。色々な感情がクライドの中で

渦巻き、ひしめきあつて胸を締め付けていた。ただ無言で頷くと、アンスニーは手を振って駆けていった。あとは、マーティンが寝ているのを確認してから本番に移ればいい。

廊下を歩き、足音を忍ばせてミンイエンの部屋に入る。ラップトップを覗き込み、ミンイエンは必死に何か作業をしているようだった。マーティンは横になつたまま動かない。

「ミンイエン」

「あ、クライドか」

声をかけると、ミンイエンはびくりとはねてクライドを即座に見た。かなり集中していたらしい。

クライドはミンイエンのベッドにゆっくり歩み寄る。スニーカーの底がキュツと床をこすり、耳障りな音を立てた。ミンイエンは仕事を再開しながら、クライドをちらちら覗く。

「ジューズはトニーが代わりに行ってくれた。心配だからやつぱり戻れって言われて戻ってきたところ。何だよ、お前パソコンなんかできるほど回復したのか？」

「実はまだ色んなところが痛い」

「馬鹿。寝てる」

やはりというか、ミンイエンはパソコンをやめようとしなかった。キーボードを打つ手を止めたものの、止めただけでその手をどこそつとしない。

「レンティーノが帰ってきたら起こしてやるから」

「……っ」

そつと肩に触れてみれば、ミンイエンはびくりと肩をすくめた。驚いて手を引つ込めると、ミンイエンは口許をゆがめてまた小さくうめき声を漏らす。

「痛、もうやだ」

「ごめん、俺のせい？」

「違う、そうじゃないんだ……腕とか胸とか。肩も確かにそうなんだけど、ちょっとキーボード触りすぎちゃったかな」

「寝ろ、問答無用」

強い口調で言ってみると、ミンイエンはしぶしぶパソコンを閉じた。画面に開いたウィンドウを閉じた様子はなかったが、ミンイエンは身体を気遣いながらゆっくりと枕に頬を沈めていった。

「寝てたつて起きてたつて痛いことに変わりは無いんだ」

「起きてて傷口動かすほうが馬鹿げてると思うぞ」

「……でも」

「言つたら、問答無用」

不服そうなミンイエンの肩まで薄いタオルケットを引っ張つてきてやり、マーティンが寝ていることをさりげなく確認して、クライドは部屋の出入り口のそばにある大きな芸術品の水槽の後ろに隠れた。

クライドの身長を越すような大きさの円筒形の水槽には、小型のイトマキエイのような魚（正確には何なのか不明だ）が入っていた。おそらくこれが目隠しになって、水槽のむこうからクライドが透けて見えることはないはずだ。グロテスクな赤黒い豹柄の魚を見つめながら、クライドはこれが解体途中のマグロだから赤黒いのだと、豹柄に見えるのはきつと目の錯覚だと、そう思うことにした。

「マーティン寝てるよね」

ミンイエンが小さくため息をつく声が聞こえた。キーボードを打つ音が再開しないのは、たぶん彼が本当にだるくて起き上がれないからだろう。

クライドは目を閉じた。芸術品の円筒形をした水槽に顔をくつつけ、肩の力を抜きながら想像した。細い身体にシンプルな白いシャツと黒のズボンを纏い、優しく微笑んだリーの姿を。

ミンイエンの傍へ、リーが歩いていくところを想像する。足音をたててみよう。クライドが想像したリーは裸足だから、静かにひたひた鳴る足音を想像してみる。

「……リー？」

ミンイエンが振り返ったのは声で解った。クライドは微笑んでみ

る。リイの幻像も、同じ動きをすることを想像する。

「あ…… 嘘、どうして？ 今まで、君」

「もついいよ」

リイの声を想像した。ミンイエンはびくりとする。

「僕の妄想？ ずっとリイに会いたかったから、だからこんな」

「ちがう。ミンイエンに会いにきたかったんだ」

白いシャツに包まれた腕をミンイエンに差し出す。わなわな震えているミンイエンの頬を、優しく撫でてみる。

「や、そんな、何で？ 何でっ、どうして来たの？ 僕、リイのと殺しちゃったんだよ？ 世界でいちばん大事な君のこと……二度も」

ミンイエンはリイの幻像の手をぎゅっと握り締めた。実体を持たせるほど強い魔法は使えなかったので、ミンイエンの手は幻像をすりぬけて宙を掴んだだけだった。

「あのとときだって、僕が動かさなければリイは助かったかもしれない。こんなことなら、あの時酒場で一緒に死んでれば」

「馬鹿なこと言わないで！」

ぴしゃりと言ってやれば、ミンイエンはこちらを見上げて泣きそうな目をする。その前髪の間から見える茶色い瞳を、幻像の目を通して覗く。

「ミンイエンはすぐマイナス思考になるね。楽しい？」

何かいいかけたミンイエンはぴたりと動きを止め、涙を溜めた目をしばたかせませずにこちらを凝視してくる。

「僕がいなくなっても、君には幸せでいてほしかったのに」

「勝手だよリイはっ」

「どっちが」

何故、兄弟喧嘩なんて始めてしまったのだろうか。しかも、別に自分はミンイエンの兄ではないのに。いつ幻像がばれるか、クライドは気が気でなかった。ミンイエンのことなんて、ずっと一緒だったリイに比べたら、きつと殆ど知らないに近いに違いないのだ。

「どうして殺されてまで僕に会いに来るの？ そんな顔で笑わないでよ、僕はどうしてもいいか解らない」

「最後の言葉、聞いてなかったの？」

「くらりと眩暈がした。しかし、冷たい水槽にこめかみや頬骨をつけて、その冷たさで意識を保った。」

「……え」

呆けた声を上げるミンイエンを見下ろして笑う。現像のリイは貧血で脂汗をかいていては困るから、優しく微笑んでいる顔だけを想像する。

「僕が最後に君に残した言葉。『君を恨んでる』なんて、言うわけ無いでしょ。『来世で絞め殺す』なんて僕は言った？」

「……わかんない。よく聞こえなかった」

「言わないよそんなこと、ミンイエンのことが好きだから」

「嘘言わないでよ。九年もまたせて、ぼろぼろにして、ずっと冷たい水の中につけていて、生き返らせたなら辛い思いさせて、それで、結局……僕はリイのこと、焼こうとしてる」

「嘘なんかじゃないよ。ミンイエンは、信じてくれないの？」

「だって、許されるはず」

「君のせいだなんて思ってない。もとはといえば、僕を殺したのは父さんだよ？」

「だとしても、二度目は」

「死んでから九年、毎晩君の話聞いていたよ。時にはイラついてることもあったでしょ。全部見てた。聞いてた」

「本当に？」

「本当だよ。一緒に月を見ようねって、約束でしょ」

「うんっ…… うん！ ねえ、今から行こうよ」

「馬鹿だなあミンイエンは。その身体で動いちゃ駄目だよ」

ミンイエンは悔しそうにシートを握り締めた。そんな彼の手に幻像の手を添えながら、クライドも幻像と同調して微笑む。

「大丈夫。ちゃんと君の望み、叶えてあげるからね。一緒に月を見

よう。そうしたら、もう、僕に思い残すことはないんだ」

自分でも怖いくらいにすらすらと言葉が出てくる。ひよっとしたら隣にリイの亡霊がいて、そっと耳打ちしているのかもしれないと思っただけだった。

不思議なほどに記憶力が冴え渡り、ミンイエンがした昔の話をクライドは一字一句忘れずに思い出すことができた。ただ、代わりに眩暈はひどくなるし、吐き気も大変なものだった。

「君の一生懸命な姿も、泣いてる顔も、嬉しそうに笑ってる声も、全部わすれない。血が半分しかつながつてないとか、そんなことは関係ない。だって君は、たった一人の弟だから」

そっと目を開ける。幻像のリイが一瞬ぶれたが、周りの様子を脳内で勝手に書き換えないようにするには仕方なかった。ミンイエンは着ていたボードーシャツのぶかぶかの袖で涙を拭っているから、不安定な幻像には気づいていないようだ。

よしよしと言いながら、幻像の手で頭をなでる想像をする。ミンイエンは声を上げて泣き出した。そうしながら、また目を閉じる。

「泣いちや駄目、ほら」

きつと空疎な感覚で、ミンイエンは触れられていることに気づいていないだろうと思う。それでも、その肩をとんとんと叩き、上を指差した。ミンイエンは幻像のリイの手に合わせ、ゆっくり顔を上げる。

満月だった。

外の景色は、ありえるとしても曇天か雨天くらいなもの、最近の天気を見る限りでは快晴のはずだ。第一、時間帯からして月が見えることなどありえない。それでも、天井を透けさせる想像をして、満月が見えたのだ。

神々しいばかりの青白い光が、ミンイエンの瞳に潤むような光を映す。しばらく、何も言えなかった。

今のこの夜空は、想像の魔法を使って創りだしてしまったのだろう。限界突破はそろそろだと思う。閉じたままの目で辺りの様子を

考えるのがだんだん苦しくなってきた。それでも、もう少し、頑張らなければ。

「リイ…… リイツ、リイ」

空疎な幻像に抱きつこうとして空気を抱きしめ、ミンイエンは大声を上げて泣き叫ぶ。何度も何度も亡くした兄の名を叫んで、クライドが創った偽物の兄に縋り、ミンイエンはただ泣き続けた。

「ごめんね。僕のせいだね」

なんて、他人のクライドが言ったところでどうにもならない。けれど、ミンイエンの目に映っているのは、きつと幻像などではなく本物のリイなのだ。というか、そうでなくてはいけない。

「そんなこと…… 僕いま幸せだよ。ずっとずっと、僕、リイに会いたくて、会いたくて、一緒に笑いたくて、またいつもみたい」
その後はもう言葉になっっていなかった。しゃくりあげながら、ミンイエンは前髪をくしゃりと掴む。

「もうこれきりなの？」

「会えるのはね。僕はもう死んじゃったから。それは当たり前前に、誰にでも訪れる別れだから。死なない人間なんかいないんだよ、ミンイエン」

別れは早すぎたかもしれない。受け入れることができないくらいに衝撃が大きかったことは間違いない。それでも、死という終焉があるからこそ、人間は何かを生み出し何かを削る。そうやって続いていくのが人間だ。誰もその道理を変えることは出来ないし、変えてしまったら人間は人間ではなくなる。

「じゃあ、リイはいなくなっちゃうの？」

「そんなことないよ、ミンイエンが望めばいつだって傍にいられる。大好きな人の死は、『どう免れるか』ではない。『どう乗り越えるのか』が重要なのだ。それに実際に訪れるのは、免れる方法を考えられる死よりも、免れようも無い突然の死であることのほうが多い気さえする。」

そこまで考えるとまた吐き気がこみあげてきて、クライドは水槽

に両腕をべったりつけてぎゅっと目を閉じた。冷たい感触で吐き気を紛らそうとしたが、無駄に終わる。吐きたいが寸でのところで吐き気は止まったままで、最大級に膨れ上がったままやまない。

「本当に？ 僕のとりにいてくれるの？」

「そうだよ。見えなくなっただって、僕はそこにいる」

「わあ…… 嬉しい、だったら僕、ちゃんとリイと一緒に暮らせるんだね？ リイはいなくなったり、しないんだから」

何度目かに目を開ければ、ミンイエンが涙でぐしゃぐしゃになった顔で笑うのが見えた。健気な兄弟愛に胸の奥がじんとする。

そばにいる、ただそれだけのことが無上の喜びに変わる。何という素晴らしいことだろうか。何気ない日常がどれほど大切なものなのか、それが無くなったらどうなるのか、幸せな間は誰もそんなことなど気にしない。

感動したが、これは思ったほど楽ではない作業だった。音も、幻像も、すべてを同時にコントロールしなければいけないのだ。そろそろ限界が近づいている。このままでは、リイが消えてしまう。

「ミンイエン、いままでありがとう。もういいんだよ。君は、君のための人生を歩んでいって。それが僕の願い。聞いてくれるよね。ミンイエンは、利口な子だから」

ミンイエンの髪をなでる幻像が、時々透き通る。クライドはもう、目を開けたまま想像していた。あの幻像をまだ留める想像をしていなければ。あと少し、少しだけでいい。

言葉は考えなくても無意識的に出ていた。たぶん、こうしたらいいという強い願いがそのまま幻像が発する言葉になっているのだろう。

ミンイエンは枕に顔をうずめて涙を拭い、リイの手を握る。握った手は空気を掴むが、ミンイエンはそんなことなど気にしていないようだった。

「うん。うんっ。絶対、僕ら、いつも一緒だよ。絶対、リイがいたこと無駄にしない」

「その言葉が聞けてよかった。でもミンイエン、僕はもう行かないや」
行かなくてはクライドがもたない。それもあつたが、これ以上長く幻像を留まらせたら、ミンイエンがまた喪失感に泣きじゃくることもありそうだと思つたのだ。

幻像に背を向けさせる。すると、ミンイエンが布団から手を伸ばして幻像の服を掴んだ。やはり例によつて、ミンイエンの手は何も掴まなかつた。

「待つて、リイ、ちよつとだけ…… 最後にお問い合わせしてくれる？」
「どうしたの？」

「僕が寝れるまで、ここで見てて。そしたら、安心して寝れるから」
「うん」

それくらいなら容易いことだとクライドは思つた。頭痛が激しいし、目の前が眩む。それでも、クライドは背後の壁にもたれながら想像を続けた。足を止めた幻像をミンイエンの方へ振り向かせ、その前髪をかきわけてやる。

失敗すると思つた想像が成功した。

幻像の手は、本当にミンイエンの前髪をかきわけた。急激な吐き気で思わず咳き込みそうになるが、堪えて水槽に額を押し付ける。

「もう、これでお別れなんだよね。…… おやすみ、リイ」

ミンイエンは涙でぬれた頬に柔らかな微笑を浮かべた。現在のクライドは果てしなく壊滅的な状態だが、創りだす幻像はあくまで優しい兄でなければならなかつた。優しく笑む少年を想像したまま、クライドは目を閉じる。

「おやすみ、ミンイエン」

最後まで優しい兄だつた、リイのことを思い出しながら幻像に言わせた。これでもう、次の言葉はつむげないとクライドは思う。かなり血を使った。

息が上がる。けれど、この激しい呼吸で存在を悟られてはいけない。クライドは両手で口を押さえて呼吸を殺した。

頭が痛い。吐き気が酷い。涙が出てくる。苦しくて仕方なかった。口を押さえていた手を滑らせて髪をかきむしり、歯を食いしばるようにして全てを堪えた。ズボンの膝に涙が滲んだ。

もう少し、そう思った。もう少しだけ堪えたい。

ミンイエンは静かに目を閉じていたけれど、幻像の手をしっかりと握っているのだ。クライドは激しく肩で息をしながら、呼吸の音を殺す想像を試みる。上手くいった。この想像だけなら簡単だが、幻像を出したままやるのはかなりの労力を要した。一瞬、本気で死ぬかもしれないと思った。

携帯を覗く。あと二分で一時間経つ。どうしよう。ミンイエンはもう寝たのだろうか。調べたいが声を出すわけにもいかない。

と、そこに

「おい、ミンイエン。起きてるか」

嫌味っぽい声が静かに響いた。驚いてミンイエンのベッドの隣を見る。マーティンがミンイエンに背を向けたまま、頭を掻いているのが目に入った。表情は見えないが、きつと、クライドがここにいるのをどの時点から気づいていたのだろうか。だからわざと、クライドの意を汲んだに違いない。

ミンイエンの返答はなかった。これでようやく、クライドは幻像を消せる。

目を閉じて想像すると、幻像は消えた。呼吸の音を殺す魔法も同時に解けた。クライドはその場に倒れこむ。

頭の中が真っ白になった。何を考えているのか、何を考えたいのかが自分の考えなのに解らない。唇が細かく震えている感じがしたが、それ以上はもう解らなくなる。

遠のいていく意識の中で、クライドは何も考えることができず、ただ呼吸が速く浅くなっていくのを感じていた。

第五十一話 チェンジ・ザ・ワールド

しばらくして、クライドは目を覚ました。白い天井が見えるが、辺りに人はいなかった。もしかしたら、あのまま誰にも拾われずにミンイエンの部屋にいるのかと思ったが、違うようだ。何も無い真っ白な部屋に、クライドは一人でいた。

「……おい」

声を上げてみても、自分の声が四方の壁に反響するばかりで、誰か別の人の声など返ってこない。

クライドは起き上がり、ポケットの携帯を見た。時刻表示が壊れているようで、時計だけ読み取れなかった。

それを確認した途端、焦りが湧いた。一体自分は何をしたのか。魔力で携帯が壊れるなんて、説明書には書いていなかったはずだ。強力な電磁波に注意しろとか、そういう類のことはあったかもしれないが。開いたり閉じたり電源を入れ直したりしてみたが、時計は表示されないままだ。まさか、こんなところで壊れるなんて。

そうだ、電話をかけてみよう。時計は壊れても電話なら使えるかもしれない。

メモリーを開き、とりあえず目に付いたミンイエンの携帯に電話してみる。しかし、呼び出し音が鳴りっぱなしになるばかりで、ミンイエンが出る気配が無い。他の知り合いや実家にも片っ端から電話をしたが、同じ結果に終わった。ために救急車を呼んでみるが、それも未遂に終わる。

クライドは途方にくれた。この真っ白な部屋は、たぶん研究所のどこかの部屋だと思うが、壁を触っても開閉操作のパネルが見つからない。さらに困ったことに、初めてここに来た時と同じように壁の厚さを調べてみると、均一らしいということが解ってしまった。これでは体当たり方式も通用しないではないか。

「ここどこだよ？ おい、誰か」

「誰もいないよ」

ふと後ろで声がした。弾かれるように振り返るが、誰もいない。

「お前、何？」

もしかすると、幽霊か何かだろうか。最初はリイに怒られるのかと思ったが、この声はリイと声質が全く違った。リイよりもっと大人で、発音の仕方もちらかといえは西洋的なのだ。

「初めまして、かな。でも、実はそうじゃない。俺はお前のよく知ってる、でも一番知らない奴だよ」

声は後ろから聞こえる。クライドが上を向いたり、前後左右を見回したりしても、声は必ず後ろからした。

「意味わかんねえよ。ここから出してくれ、皆に迷惑かける」

とはいったものの、クライドが閉じ込められているとしたら真っ先に助けに来るはずのグレンが壁の向こうから体当たりを繰り返している様子はない。耳が痛くなるほどの静寂に、どことなく恐怖すら感じ始めた。

「それはできない。君には、なぞかけをしなくちゃならないからね」
「だから、意味わかんねえ」

「ミンイエンのクロスワードが解けるなら、きっと問題ないよ。君は、ここから出る方法を考えなくちゃならない。仲間達には頼らずに、自分の力でね」

相手の声はからかうように、後方で大きくなったり小さくなったりを繰り返している。聞いていて不快だった。

聞いた限りでは、これは年は十代後半くらい、歯切れの良い発声をする男だった。実体は見えないから、男なのか女なのかは解らない。思念を持ったゴーストなのか、はたまたマーティンのように外側はどうにでも変えられる魔道士なのか。クライドはあらゆる可能性を考えながら、もう背後を向かず正面を向いて喋ることにした。どうせ後ろを向いても、声はいつだって後ろから聞こえるのだ。

「お前、馬鹿にしてんのか」

「別に。馬鹿げてると思うなら考えなくて良いけど」

「そういうことじゃなくて、こういうところに閉じ込められたら出る方法を考えるのは当たり前だっていうのを俺は言いたいんだ」

相手の声はしばらく黙る。クライドがだんだん苛立ちを感じてきた頃に、『それ』は思い出したようにまた話しかけてきた。

「あ。ちなみに今の君は、魔法を使えないんだ。やってごらん？死ぬから」

「……十分解ってる。さっきあれほど使ったんだから、もうこれ以上は無理」

クライドはもうこの状況が嫌になってきて、部屋の真ん中にどっかりと腰を下ろして天井を見上げた。天井は高く、上の方から満遍なく光が降り注いでくるように、天井全体が照明になる工夫がしてある。

「あれれ、もう諦めちゃった？」

「うるさい」

からかうようなその声に、神経を逆撫でされるように感じる。

「なあんだ、結構骨のある奴だと思って連れてきたのに。これだったら、最初からなぞかけなんてする意味なかったな」

「うるさいって言ってんだよ、今考えてんだから邪魔すんな」

脱出の方法より先にこの耳障りな声を黙らせる方法を考えたいと本気で思い始めた頃、声は背後で陰鬱に笑う。

「俺ね、仲間に頼りつきりで自分じゃ何も出来ない奴が一番嫌いなんだ」

耳を貸すつもりはなかったのに、胸の奥が締め上げられるように苦しくなった。

今のは完璧に不意をつかれた。何もできない奴、その一言が一番言われたくない言葉だった。

「君って、仲間に頼らずに何かできる？」

「想像」

即答できるのはそれくらいだった。仲間の手を借りずにできることは何かなんて、そんなことはじっくり考えたことがなかった。

「……え。そんなこと、当たり前にできることじゃないか。君にしかできないことって、何があるの？」

「想像…… それから」

運動神経のよさ？ それは『できること』とは少し違う気がする。洗濯や掃除はあたりまえにできるし、料理本を見れば大体の料理を作れるが、それを言ったところで全て『あたりまえ』だ。

「え、何それ。想像するだけ？ つまんない人。人として価値がないよ」

あからさまに馬鹿にされ、苛立ちを抑えられなくなる。

「人じゃないから」

この際相手にどう思われてもいいと思い、半ば自棄でそう言っていた。

「知ってるよそんなこと」

さらりとそう言われ、クライドは黙り込んだ。当たり前のように答えられたが、クライドがエルフの混血だと知っているのはごく限られた友人たちと、この研究所の研究者たちだけだ。何故、『これはクライドのことを知っているのだろう。やはりここは、研究所なのか。』

けれど、半分そんな気がするし、半分はそうでない気がしている。研究所にいるのなら、仲間がいる。それに、全ての部屋にミンイェンの声が届く仕組みになっている。壁のどこかに、ちゃんとカードリーダーもあるはずだ。その全てがないということは、ここはまた別の閉鎖された空間なのだろう。

「ここどこだろう」

思わず呟くと、背後の声がかすかす笑いながら近づいてくる。

「やだな、子供みたい。誰かに依存しないと生きられないなんて。自分で何かの答えを見つくれる力、ないんだね」

「一般的な生活くらい仲間がいなくてもできる。答えだってそのうち見つかる。そりゃあ、仲間の手を借りれば早いけど」

むっとしながら言うと、後ろの声はけらけらと耳障りな笑い声を

立てた。

「ふうん。じゃあ仲間って、一般的な生活をしていく上では要らないだね」

「そういうわけじゃない」

「矛盾してるよー」

いちいち癩にさわる声で後ろからかわれ、クライドは触れないことを解つていながら背後の空間を勢いよく殴り付けて八つ当たりする。

「……仲間がいなくても一応は生きていけるけど、そのうち孤独とストレスに負ける」

答えてみれば、相手は感心したようにへえと呟いた。

「じゃあ、仲間は孤独を埋めてストレスを消すための道具なんだ！よくわかった、そういうことね」

「違う、道具なんかじゃない」

「だってそうでしょ？ 孤独やストレスは仲間を使えば消えるって言ってるんだから」

それは突飛な、クライドにしてみればかなり突飛な言葉だった。

相手にとってはこれが当たり前前の考えなのだろうが、クライドには理解できない。

自分は使っているつもりもないし、使われているつもりもない。

そんな、モノのような扱いなんてお互いにしていないはずだ。この声の主は、根本的にどこかおかしい。

「確かにそうだけど、使うって言い方は間違ってる。お前友達いないだろ」

「いないよ。必要も無い」

「そういう奴にはいくら話したって無駄だ」

ここへきてようやく、彼（と呼ぶべきかどうかは不明だが）の人を苛立たせる態度の原因を突き止めた気がした。

きつと彼には、人間の内側を構成する何か大切なもののいくつかが欠けてしまっているに違いない。これでは人付き合いなんてでき

ないだろうし、する気がないのもうなずける。だから彼は、ここで一人で人をからかうのを楽しんでいるのだろうか。

「ざあんねん、連れないなあ」

「いいから黙ってる」

彼と話していたら出られるものも出られない気がしてきた。とりあえず立ち上がったって、四方の壁に一度ずつ体当たりしてみるが、壁はどう足掻いても壁だった。それもそうだ、壁が扉になっているなんて、ミンイエンの研究所くらいなものであるう。

勢いが良すぎて壁にぶつかった反動ではね飛ばされた。床にしたたかに腰を打ちつけ、肺の空気が一気に全て外に出た。咽ていると、背後の声が凄い勢いで笑い出した。どうしようもなく苛々する。

「黙れよ」

人（かどつかは解らないが）に見られていると思うと、あまり大胆な行動に移れない。もつと激しく体当たりしてみたが、この調子だときつと背後の彼はまた笑う。そうなれば自分の苛立ちが最高潮に達することは目に見えていたし、もうこれ以上ストレスを与えて欲しくないというクライドは感じていた。

「ねえねえ、ヒントだけ教えてあげようか。このままじゃ君、一生ここからでられないからね。まあ俺はそれでいいけど」

「ふざけんな」

こいつの手なんか絶対に借りないと、クライドは強く思う。見えもしない相手を肩越しに睨みつけ、立ち上がって床を軽く蹴りつける。床も厚さが均一らしい。天井は高すぎて手が届かない上に、投げられそうな大きさのものは携帯しか持っていないので断念した。

「……早く戻らないと」

「何のために？」

「一時間で戻るって約束したんだ。誰のしわざか解らないけど、閉じ込められてる場合じゃないんだ」

「急がなくなつていいのに。ねえ、君はどれくらいここにいたか知らないでしょ」

そういえば、言われてみるまで気づかなかった。起きてからはまだ一時間もたっていないだろうが、起きる前までは何分寝ていたのだろう。何にしても、最後に時計を見たのは約束の時間の二分前だった。たとえ意識がなかった時間がたった一瞬だったと考えても、グレンたちがもうミンイエンの研究室に到着しているということは明らかだった。

そう考えると、恐ろしくなってくる。自分は時間までのたった二分の間にどこへ連れ去られたのだろう。二分以上が経過したあとなら、グレンたちが傍にいてくれるはずだから誰かに誘拐されるなんてことはまず考えられない。しかし、状況的に考えればクライドは明らかにどこかに閉じ込められていた。空白の二分間に何かがあったとしたら、言いようがないではないか。

「……どれくらいだよ、俺がここにきてから今まで」
「一ヶ月」

忘れていた。ここにいるのは自分と、常識知らずの苛立たしい“物体”なのだ。彼に何か尋ねたところで、まともな返答が返ってこないことは必至だった。

「お前に答えを求めた俺が悪かった。更に質問するのももう馬鹿らしいからやめとく」

「いいじゃん、してみなよ。本当のこと答えてあげるかもよ？」

「お前と遊んでる暇はないの」

「言ってみてよクライド」

だんだん暇になつてきたのか、彼はしきりに絡んでくるようになった。彼と話している暇があったらここから出る方法を考えたい。

「ねえクライド」

そうは思ったものの、この声が邪魔で考えが何度もぶつ切りになつて消えていく。もう隣で喋らせておくのが嫌になり、クライドは渋々切り出した。

「俺が聞きたいのは、ここに俺を連れてきたのは誰で、ここはどこで、何の目的があつて俺がここにいいのかつてこと。一番根本的な

ことだ」

「ふうん。じゃあ一個だけ真摯に答えてあげるよ。信じるかどうかは君次第」

クライドは黙り、彼が続けるのを待った。彼はもったいぶるようになかなか話を始めなかった。しかし、どうせ彼が喋り出すのはまたとんでもない大嘘だろう。クライドはもう待つことなどやめて、脱出の計画を練り始める。

「君がここに連れてこられたのは試練を受けるためなんだ」

唐突なタイミングでそういわれ、思考が飛ぶ。

「は？」

「無事に出られたら、試練は乗り越えたことになる」

「じゃあ出られなかったら」

「そのままここで死ぬ」

それは、今までの楽しそうな声色ではなかった。束の間、空気がぴんとはりつめたように感じる。彼の言葉を無意識に信用している自分がいた。

しかし、次の瞬間に再び彼は先ほどまでのペースを取り戻した。

「つてか、そしたら俺も消えちゃうんだよねー。だからちゃんと出てよ？」

「ふざけんな、出せ」

たぶん、本当にここから出られなかったら死ぬだろうと思う。それは確信できる。いつまで待っても助けがくる気配はないし、四方は分厚い壁に覆われている。この部屋はどういう構造か知らないが、ただいえることは安易な人の出入りを絶対に許さないということだ。設計者はミニイェン並みか、それ以上のひねくれ者らしい。

「俺、別にふざけてなんてないよ。ちょこちょこつとクライドを手助けすることはできても、入り口をひらくことはできないし。だって実体がないからね」

残念そうなのか楽しそうなのか解らない微妙な声で言われた。顔を見ることができたら、きっと彼は今にやけているに違いない。な

どと考えながら、クライドは四方の壁をにらむように見つめた。変わったところは何も無いが、ひらめいたことは一つだけあった。

「お前が『実体が無い』ってことを理由に俺をここから出せないとなると……この部屋の出入り口は物理的な攻撃で開くってことか」「そうとつてくれるなら、俺のいいたかったことは全部伝わったかも」

背後の声を聞き流しながら、クライドは再び壁を蹴りつける。どこの壁も均一の厚さで、しかも蹴破れるほど脆くは無かった。けれど、物理的なダメージを与えてこの部屋から出られるということは、出口があるのは壁か床か天井のどれかだということになる。この立方体をした部屋の、全部で六面ある等面積の壁や床や天井のどこか

に出口があるのだ。

「あー、天井とどかねえや」

「残念だね。諦めてこの部屋で暮らせば？」

「お前、少しでいいから黙ってる」

後ろの気楽過ぎる声を黙らせながら、クライドは壁をけりつける。何度蹴りつけても崩れる気配はなかった。少しでも崩れれば、そこに足をかけて天井を調べたりできるはずだとクライドは踏んでいたのだが、壁がどうにもならないのではなす術も無い。

何度も壁を蹴りつけ、体当たりをして、だんだん息が切れてくる。よろける身体で辛うじてたっている、自分の呼吸と心音がいやに大きく聞こえた。

「ヒントあげようか？ 今度こそ俺のこと信じてみてよ。そしたら、ヒントあげるよ？」

「どういうヒント？」

「こういうの」

そう言われて思わず肩越しに振り返った。背後の声に実体はなく、振り返っても白い壁があるのだと解っていたのに。

しかし、振り返った先にあったのは白い壁などではなかった。そこにあったのは、鷲色の髪。一瞬これはノエルではないかと思った。

「え、お前……」

どう考えても、どう見てもこれはノエルだった。けれど、何か様子が変だ。まず、見える向きが可笑しい。

クライドは正面を向きなおり、その理由に納得する。自分はベッドに寝ていて、ベッドサイドにノエルがいたのだ。これが、あの声だけの彼がいうヒントらしい。

「ノエル、おはよ」

微笑みかけてみるが、ノエルはクライドの方を見ようとしなない。衝撃を覚え、胸の奥が疼く。

「ノエル、どうし」

「お前何とかできないのかよ？ 医者なんだから」

「はあ？」

た、まて言えずにノエルをまくしたてたのはグレンだった。隣のベッドに腰掛けて、ノエルを睨みつけている彼の目元にはくつきりとくまが見える。どうして彼はこんなにやつれているのだろう。

クライドがもう一度口を挟もうとしたとき、ノエルが顔を上げる。「今できる精一杯がこれなんだ、僕にこれ以上何を求めるんだい？ 僕だつてもつともつと力になりたいよ、でもこれしか出来ないんだからどうしようもないんだ」

「言い訳ばっかしてんじゃねえよ、そんな落ち着いていられるんだつたらもつと別の方法だつて考え出せるだろ」

ノエルが視線を下に降ろして深いため息をつく。もう言い返す気力も無いらしい。ノエルもだいぶやつれていて、気のせいかもしれない。よりももつと痩せて見えた。

「ねえ、もうやめてグレン、さっきから…… ノエルは何も悪くないんだから」

後ろからグレンに抱きつくようにしてそう言ったのはシェリーだった。グレンは胸に回されたシェリーの手を軽く撫で、小さくため息をついている。グレンにも、これ以上議論を続ける気はないらしい。

ここまで状況がわかったところで、あれ、とクライドは思う。どうしてシェリーがいるのだろう。彼女はまだ旅行から帰ってきていないはずだ。確か、あと一日か二日くらいは旅行に行っていないとおかしいはずなのに。

それに、ノエルの言葉も気になる。力になりたいとは、一体何について言っているのか。

「クライド、起きないね」

「いや、起きてるけど」

クライドを見下ろすアンソニーは、泣き腫らした赤い目をしていた。クライドの声は仲間達に聞こえていないようで、この分では起きている姿もきつと見えていない。

恐ろしくなった。では、自分がここから起きてベッドの足元辺りから今いる場所を眺めてみたらどうなるのだろうか？

実際にやってみた。恐る恐る起き上がり、ゆっくりベッドから起きて背後を振り返る。

自分がいた。

「……え」

ベッドに寝ているのは紛れも無く自分だった。血色は悪く、両腕に点滴を刺され、手術中のミンイエンと大差ないくらいの機材類が近くに寄せ集められている。心電図が規則正しく、一応は脈を刻んでいるのが確認できたが、ベッドに寝ているクライドの顔は蒼白でかなり死人に近いように見えた。

いいようもない恐怖で足が震えた。膝に力が入らなくなって後ろに転ぶが、自分が床に転がった音がしなかった。今は自分にも、実体が無い。

「状況理解できた？」

床に崩れ落ちた姿勢のまま自分の両手を見下ろして固まっていると、背後から声がした。

「お前、これ」

「ヒントだよ。俺があげるヒントは、現実世界の状況のこと。君が

これを見て何か気づくことがあれば、大丈夫。もう少しだけここにいられるけど、残り時間は僅かだから気をつけて」

「そんな」

気づくって一体何に？ 喉元まででかかった言葉を飲み込み、クライドは口をつぐむ。言いたいことが多すぎて何から言ったらいいのかわからなかった。これは本当に現実なのか、現実では今何が起きているのか。ここで寝ているクライドと、今ここにいる自分は同一人物であるのかそうではないのか。頭が混乱しすぎて状況が理解できない。

「クライドに残された時間はあと三日。三日したら、もう戻れない」
「嘘、だろ？」

いきなりそんなことを言われても、クライドは混乱するより他になかった。声はそれきりしなくなった。代わりに、また仲間の声が聞こえ始める。

「このままクライドが起きなかつたら、どうなるんだ」
グレンの低い呟きだった。暫く誰も何も答えなかった。

「日常の何もかもが空っぽになる。クライドがいない生活なんか、俺は知らない」

狭い街の中で、幼い頃から一緒に育つたのだ。グレンにそう言ってもらえるのは嬉しかったが、ちょっと複雑だった。

まだ自分は死なないのだから、そんな話は勘弁して欲しい。

「何が何でも死なせないよ。僕がずっと近くにいれば、きっとクライドはしょうがないなって戻ってきてくれるから」

「ちゃんとここにいろよ。戻ってきたってば」
言っても聞こえないことは解っていた。それでも、声に出して伝えたい言葉だった。

「そうだね、アンソニー。何が何でも死なせない。クライドはきっと僕を信じてくれるから、僕はそれに応えなきゃ。意識を取り戻させるには、話しかけるのが一番効果的なんだよ。ねえクライド。僕の声、聞こえるかい」

「勿論」

ノエルの骨ばった細い手が、白いシャツに横たわる現実世界のクライドの髪をなでる。目に入りそうだった前髪を分けながら、ノエルは穏やかに笑った。

すると今度はシェリーが真摯な目でクライドを見て、それから覗き込んで微笑む。クライドはその様子を、ベッドに横たわる自分の足の方から見ていた。

「クライド、あたしだよ。戻ってきたらクライドが倒れてるんだもん、びっくりした。薬はあたしとノエルで煎じたの。効き目は抜群だから、そろそろおきてくれても良いんじゃない？」

「そうだな。もうちょっと待ってて」

やはり聞こえている様子はなかったが、クライドはそれでも声を返し続けた。

「どうしようか迷ったけど、サラにもクライドの容体は伝えることにしたんだ。勝手に携帯使ってごめんね」

「別に、そんなの気にしてないから」

「それから、ミンイエンが心配してた」

「へえ、あいつはもう平気なのか？ 色々」と

シェリーは下唇を噛んで俯く。何を言っても反応しないクライドを見て、死ぬかもしれないと本気で思っているのだと思う。そんなシェリーの肩にグレンが手を回し、言葉を失ったままのシェリーは静かに涙を流す。

「あ、大丈夫。クライドがミンイエンに魔法をかけたせいで倒れたってことは言っていないからね。心配ないよ、何も心配ない。ほらシェリーも、何も心配ないから……」

シェリーに代わり、焦ったようなアンソニーが言葉を引き継いだ。「まあ、それを言われたら俺、ここで寝てる意味ないからな」

言葉を返しながら、両手で顔を覆って泣いているシェリーを何度も見る。声が届けば良い。それならきつとシェリーは驚いて泣き止む。けれど、願っても願ってもクライドの声は誰にも届かなかった。

「心配ないよクライド、僕らはずっとここにいるからね」

「ありがと。でもそろそろ寝たらどうだ？」

「そうだよ、ミンイエンが派遣してきた医療チームの処置だから安心できる。ミンイエンもマーティンも無事に生きているんだから、クライドだってすぐ目を開けてくれるよね」

「ああ、それなら安心だ。だから俺、こうして意識なくしてはいるけど、ちゃんと生きてるんだろ？」

だんだん空しくなってきた。誰もクライドの存在に気づかない。

四人で焦り、悲嘆に暮れ、無理に笑顔を繕ってここにいる姿なんて、見ている方が苦しかった。

「やだよ。何だこれ？」

思わず呟いた声は乾いてかすれ、重い空気にむなしく響いた。アソニーが泣き出す。ノエルが彼の頭をなでながら、何故かクライドに何度も謝ってきた。それを、グレンがまたきつい言葉で止めようとす。喧嘩しないでとアソニーが叫ぶ。一気に誰もが黙り込み、まるで葬式のような雰囲気で俯く。

「やめろよ、こんなの俺が望んだ終りじゃない！ 誰もこんな風になれなんて、思っていないだろ？」

本当なら、この旅の終りは全員で明るく笑顔で迎えるはずだった。なのにどうして、自分は起き上がることが出来ないのだろう。どうして声は届かないのだろう。どうして皆、喧嘩ばかりしているのだろう。

「時間切れ」

「え？」

振り返るとその瞬間、部屋は白一色の何も無い立方体に戻っていた。がくりと膝をつき、クライドは八つ当たり気味に壁へと勢い良く頭を打ち付ける。くらりと意識が一瞬遠のいたほど、壁は硬かった。ぶつかったとき、ちゃんと音もした。

この身体が、どうして外に出た途端実体を失うのだろう。結局何もできずに戻ってきてしまった自分が情けない。

「ねえクライド、ちゃんと気づいて。いつだって君は自分で、あるいは仲間の力で、何かに気づいて歩いてきたはずだよ」

「黙ってて…… 頼む」

「気づいて。自分ができることに」

名残惜しげに声は消えた。クライドは部屋の真ん中に寝転がり、四方の壁を軽く確認した後目を閉じた。どうしたらいいのか解らない。自分に出来ることなんて、何も無い。

この白い空間は天国なのだろうか。この根本的にずれた男は、天国の入り口を見張る門番か何かだろうか。そうである可能性が高いような気もするし、そんな馬鹿馬鹿しいことなどありえないという気もする。

「だいたい、俺が天国を造るなら、こんな殺風景な場所にはしないからな……」

ウォルの言う『天国』は、行く人によって異なると言っていた。

深層心理で天国の風景が創られていくのなら、クライドはもっとましなものを創ると思う。どちらかといえば、クライドにとってこの空間は地獄に近い。

「壁を蹴破る想像。天井が崩れる想像。床に穴あける想像。全部だめだろうな、俺には魔法が使えない」

ため息をひとつついて、小さく目を閉じる。

「……魔法は使えないけど、想像くらいならできるかな。ただ想像するだけなら、魔法を使わなくてもいいわけだ」

だとしても、想像して何が変わるのだろう。クライドの特技の想像はあくまで『魔法としての』想像であって、単に考え事をするときの想像ではない。だいたい、そんなものは特技などといえないではないか。

けれど、子供の頃から想像力が豊かな子供だと言われて育ってきた。表現力はそれに追いついてこなかったが、クライドは気づけば色々な未来の出来事を想像していた。

今の自分がどこか天国のような場所にいるのではないとするなら、

自分は確かに地上にいるはずだ。今のクライドには実体があるし、痛みを感じる。そうすると、この身体は研究所になくてはいけない。クライドはそう考えた。

「なあ、聞いていい？　ここって、俺が造った空間なのか？」

上半身を起こしながら問う。背後の声はくすりと笑った。

天国を創る際に元になるのが深層心理なら、クライドの意識は今そこにあるのかもしれない。いつもは意識しない、けれど、クライドという人格を構成する上での基礎となっている部分の、心理であり真理。

「さあ、どうだろう。じゃあ、俺は何なんだと思う？」

「俺の深層心理が作り出した幻影。無意識に手助けしてくれる仲間を作ってたんだ、俺はきつと。だからお前の力を借りて、どういう状況かわからないけど皆の様子を確認しに行けたりした」

「へえ、俺、クライドの仲間なんだ？」

いたずらっぽく笑う声が後ろでする。相変わらず耳障りだと思つ反面、クライドは少しこの捻くれた男に愛着を持ち始めていた。確証は無いが、恐らく彼はきつと、クライドにとって大切なものだ。

「仲間とはちよつと違う。だってお前は俺が作り出した、多分……」
言いながら振り返る。今なら彼の実体のない体が、見える気がした。

「やっぱり、他の誰でもない俺なんだ」

若干表情が余裕そうなところをのぞけば、背後の彼もクライドだった。この事態に、現実世界を見に行ったときに気づかなくてよかったと思う。そんなことになったら、ベッドに寝ているクライドと今ここにいるクライドと、背後のクライドの三人が、同じ空間に出現することになってしまわないか。どうせ見えるのは自分だけだと考えても、薄気味悪いことである。

「やつと気づいた」

彼は笑った。服装は今の自分と同じ、ジーンズにラフなTシャツ姿。頬や腕に負った傷もそっくりそのままだ。

「最終的にちゃんと気づくってことを、お前は解ってた。だつてお前は俺がつくつたんだ」

「まあね。とりあえずおめでとー、俺の名前教えてあげる。イディルクっていうんだ」

ジーンズのポケットに指を引つ掛けて、イディルクと名乗るクライドの分身は楽しそうに笑った。名前がついていることに一瞬驚いたが、何だ、簡単すぎるアナグラムだ。EDYLC、逆さから読めばCLYDE、つまりクライドという言葉になる。

「なるほどね。正反対、ってことか？ お前のその遠まわしなお節介、あながち正反対ともいえないと思うけど」

「なるほど何も、俺を作り出したのはクライドだろ」

「まあな」

少しだけ笑い合う。自分と話をするなんて変な感じだった。けれど、彼の性格は自分とは違つと解つていたし、たぶんそういう風に自分の深層心理が彼を作り出したのだから、あまり深くは考えずにおく。

「俺はこの状況をどうにでもできる、そうだろ」

「うん。気持ちひとつで俺を消す事だつて、この部屋を吹っ飛ばすことだつてできる」

「じゃあどうしてさっきまでは出られなかったんだ？」

「クライドが心の奥の方で、どうせ出られないって諦めてたから。」

俺があげたヒントの『実体が無いから助けられない』って言うのは、俺は『俺自身に考えを持てる思考回路はなくて、クライドのように自分から何か想像して実行することができない』って意味で言ったんだ

「ふうん……」

いずれにしろ、出る方法がわかったのだから早く出て行くに越したことは無かつた。クライドは壁際まで下がり、反対側の壁を睨みつける。呼吸を整え、背後の壁に片足をつけて踏み出せるようにして、最後にイディルクの方をちらりと見る。

「じゃ、行くよ。ありがとう」

「感謝されてもな。たぶん俺もこの空間も、クライドがいなくなった途端に不要になって消滅するから」

「それでもだよ。じゃあな」

きつと消滅したとしても、クライドの記憶に彼のことは残り続けると思う。そう思いながら、背後の壁を勢い良く蹴ってクライドは壁に突っ込んだ。

最終話 平和ということ

白い壁にひびが入った。あっけなくらい簡単に壁は崩れ、クライドは壁の向こう側の世界へ勢いよく飛び出した。が、そこは何も無い空間だった。漆黒の闇が口をあけているばかりである。

白い壁の残骸が降り注ぐ中、身体を思いきり捻って後ろを見れば、闇の中にぼんやり浮かぶ崩れた白い立方体の中から、イディルクが手を振っているのが見えた。

クライドの身体は闇の中を加速していく。一緒に落ちてきているはずの壁の欠片は、いつのまにか一つも見当たらなくなっていた。

「……何処まで落ちるんだよ」

だんだん息が詰まってくる。目を開けているのもつらい。どうせ目を閉じていても開いていても、漆黒であることに変わりはない。クライドは目を閉じた。

その瞬間、視界が真っ白に塗りつぶされる。驚いて声を上げる。反射的に腰を起こした。……腰を起こした？

「あ、れ？」

恐る恐る目を開けてみると、ぎよつとした顔でこちらを見ている四人が視界に飛び込んでくる。安堵で肩の力が抜けた。そのままずるずるとベッドに身体を横たえ、クライドは大きいため息をついた。よかった、ちゃんと戻ってこられたではないか。

「ク、ライド？ どこか痛いのかい？」

最初に口を開いたのはノエルだった。グレンはぼかんと口をあけて固まっていたし、シェリーとアンソニーはそれぞれ微妙な位置から肩越しに振り返っていたり、中途半端に上げたままの手を下ろさずに固まっていたりした。

「あれじゃねえだろ！ な、何だよお前、いきなりっ！」

「心配させないでよ馬鹿クライド！ 一時間で戻ってくるって言ったくせに！」

二人に腕やら肩やらに掴みかかれ、クライドは二人の手の暖かさに安心する。謝り、笑い、クライドは泣きそうな気分でグレンとアンソニーにもみくちやにされていた。

「そうだよっ、帰ってきたらクライド、倒れて動かないっていうし。あたし、嫌だからね？ あんたはあたしの生まれて初めてできた友達なんだから！」

「そっついえばそうだったな…… ごめんな心配ばかりさせて」
泣きそうなシェリーに微笑みかけてやる。シェリーは大粒の涙をぼろぼろ流しながらクライドの腕に縋る。クライドの髪をぐしゃぐしゃにしなが、グレンは『馬鹿野郎』と繰り返した。心からほっとしたような声だった。アンソニーも同じようなことを喚きながら、彼の場合はクライドの髪でなく自分の顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。

「あー、もう…… 君って人は全く！」

ノエルは抜けかけていた点滴を直してくれながら、クライドの額をこつんと軽く叩いた。骨ばったその手に叩かれるとちょっと痛い。「った、何だよ？」

「さっきまで青白い顔してたのに。どうしてそんなに幸せそうな顔で笑えるんだい」

ノエルはまったくいつもどおりだった。いつもどおり、穏やかな微笑を絶やさずにクライドを見ている。

だが、そう思ったのも数秒のうちだけで、ノエルはクライドから視線を外して小さく鼻をすする。彼はまばたきが多くなった眼を、眼鏡を外して乱暴に服の袖で拭い始めた。

「え、おい」

「戻ってきてくれてありがとう、クライド」

ノエルは照れたように笑い、外した眼鏡をもう一度かけた。シェリーが泣きながら笑い、ノエルの背中をとんと叩いた。

「クライドっ、僕のこと解るよね？」

「当たり前だろトニー。っーか苦しいよ、胸の上に肘乗っけないで

くれ」

アンソニーは無自覚でクライドの胸の上に体重をかけていたらしい。慌ててどいて、謝ってくる。

「だから無茶するなって言っただろ？ 心配かけやがってこの馬鹿」「そうだよクライドっ、ほんとに死んじやったらどうするつもりだったのさ？」

グレンとアンソニーから責められるが、苦笑で流す。二人の声は責めるようでもあったが、やはり心から安心しているように聞こえた。

「君はね、一週間もここで寝たきりだったんだよ」

「い、一週間？」

「そう。色々あったよ、この一週間」

ノエルたちは代わる代わる、クライドがいなかった間に起こったことを教えてくれた。クライドの幻像のおかげで、ミンイエンが取り乱すことなくリイの火葬を行ったこと。あの実験の時に使えなくなったハビやレンティーノの白衣の隅の方を使って作った小さな白い巾着袋に、その白骨のかけらを入れて大切に持っていること。

そして、ハビがカフェの営業を再開し、レンティーノが通常の仕事に戻ったこと。セルジとノーチェがこの有様にひどくショックを受け、三日ほど部屋にこもりつきりになったあとミンイエンやレンティーノの手伝いをするようになったこと。無茶しようとしたマーティンはミンイエンに叱られ、大人しくデスクワークに徹しているらしい。

研究所は、またいつものように回り始めた。今度はもう、蘇生実験プロジェクトを解散し、人工魔力の制御法を研究し始めることになったという。マーティンの持つ人工魔力には副作用があるため、それを改善するために実験を繰り返すのだ。

「サラは毎晩君の容体を尋ねて電話をくれるよ。うっん、時差があるから晚じゃないね。彼女にしてみれば、朝起きてすぐだよ」

そうか、ではサラに電話をかけなければ。ポケットの携帯を取り

出してみても、クライドは戦慄した。

「……嘘」

あのとき、白い空間で見たままの状態だった。時計が表示されていないのだ。

「あ。表示がおかしいね。ちょっと貸してよ、直してみる」

アンソニーはクライドの手から携帯をすりりと抜き、電源を入れなおしてメニュー画面を開いた。日付と時刻の設定をやりなおしたら、ちゃんと時計は復活した。

クライドは心の中で安堵のため息をついた。良かった、まだあのおかしな空間に囚われているのかと思つて、驚いてしまった。

「ありがと、トニー」

メモリーを開いてサラの番号を発信すれば、ちゃんと電話はかかった。電話に出たのはサラの兄だった。

「もしもし、こちらドレーアー」

「クライド」カルヴァートです、こんにちは」
声を発したとたんに、サラの兄の雰囲気ガラリと変わった。明らかにクライドを敵対しているムードだ。

それもそうだ、彼女の兄は重度のシスコンだ。サラに男が近づこうものなら、容赦なくはがしにかかる。

「何だまたサラ目当てか。こんにちはじゃないだろ、今夜中だぞ貴様」

「すみません、何せ時差があるものですから。サラは起き」

「ちよつとお兄ちゃんつ、どいて！」

言い終わる前に電話の向こうでなにやら激しい物音がして、サラが急ぎ込んで電話に出た。

「もしもし、ノエルっ？」

どうやらサラは、ノエルが『クライドの容体が急変した』と告げに電話してきたと勘違いしたらしい。彼女はかなり焦っていた。

「残念、俺」

笑いながら言つてやれば、電話の向こうが沈黙した。サラの兄が

色々と説教を垂れているのが聞こえるが、サラはそれにも反応しなかった。

「おいサラ、聞こえてるか」

「……クライド？　クライドっ、起きたの？」

「うん、ついさっき」

答えると、電話の向こうの声が一気に高くなった。

「よかった！　大丈夫なの？　どこも痛くない？　頭はふらふらし
ない？」

「全然平気。ただ、まだ腕に点滴が刺さってるけど」

「早く帰ってきてね、無事な姿みたいから」

「勿論」

そんな会話をし、クライドはサラからどれだけ心配していたかを延々と聞かされた。やはりここでも、シエリーが『最初の友達』と言ったように、サラも『ウイフト語の通じる唯一の男友達』だと言った。サラにとっても、ちゃんとクライドが大切な人だと認識されているらしい。嬉しいことだ。

「一週間も目が覚めないなんて、そんなこと聞いたら心配になるに決まってるよ……」

「ごめんな。詳しい話はそっち帰ったらいっぱいする」

「楽しみにしてるよ」

サラは電話の向こうで少し泣いているようだった。どうしたのか訊ねると、サラは鼻をすすりながら嬉し泣きだと答えた。思わず笑顔になる。

「それじゃ、そろそろ切るよ」

「うん、解った、じゃあね。おやすみ、クライド」

携帯を耳から離して折りたたんだ。切った後でノエルがいつもの微笑でこちらを見ていることに気づき、クライドは携帯とノエルを何度か見比べた。

「……ごめん、代わりたかっただろ」

「いいんだよ。数日後に直接話せるんだから」

ノエルは楽しそうに、この一週間で変わったことをまだ色々と教えてくれた。クライドの点滴の主成分が、エルフの薬で最も貧血に効果がある成分を抽出して改良したものであるということも知った。長い間会っていなかった仲間達は、一週間分の話を長い間し続けていてくれた。時刻は昼過ぎだ。

会話を続けていたら空腹になってきた。けれど、アンソニーに水を汲んできてもらって飲むと、一気に吐き気が押し寄せてきた。「っ、う」

「だめだよ、いきなりそんなに飲んだら。君の胃には一週間も何も入っていなかったんだから、少しずつ慣らしていかないと」

ノエルに叱られ、クライドは肩をすくめる。何だか彼はすっかりクライドの主治医だ。

暫くコップを握り締めたまま固まっていたが、吐き気は治まらない。額に滲む脂汗を気にしながらコップをノエルに手渡すと、空気入れを上下させるような軽い音がした。ドアが開く音だ。

「クライドー！」

入ってきたのは、なんとミンイエンだった。新品らしい電動車椅子を、かなりのスピードで走らせて突っ込んでくる。ベッドの上で思わず身を硬くすると、ミンイエンは車椅子をそのままベッドにぶつけて止めた。勿論、ひどい音がした。

かなり乱暴な扱いだ、いいのだろうか？

「よかったあ、目を覚ましてくれて！ リイがいなくなった上に、迷惑かけっぱなしのままクライドまでいなくなったら僕はどうしようかと思ったよ！ 大丈夫？ 元氣？」

かなりの至近距離から覗き込まれて、クライドは心持ち身を引きながらミンイエンの変わりように驚く。変わったというか、実験前に戻ったようで少し安心した。よかった、クライドの幻像はちゃんと効果を成している。

「ありがとうね、リイの実験を手伝ってくれて。きつとそのせいで疲労が溜まってたんだよね。僕は自分のことばかりだった」

「いいんだ。なあ、俺っていつアンシエントタウンに帰れる？」

「あと二日寝ていつて。まだ食べ物にも慣れてないでしょ？ 実は僕もだけど」

「二日ね、了解」

クライドは頷き、他愛も無い世間話をしながらミンイエんと笑い合った。元はといえばこいつに巻き込まれたのが発端だったのに、今では悪意は感じない。

この研究所で、クライドは哀しいほど強い兄弟愛や、狂おしいくらいに友情を見た。ハビにも会えたり、自分の意思を伝えられた。更生とまではいかなかったし、更生なんて言葉を使うのはおかしいが、クライドはそれでも一歩進展できたことに純粋な喜びを感じていた。

ミンイエんに新開発の栄養剤の味見をさせられたり、レントイーンにリンゴをむいてもらったりして、二日間はあっという間に過ぎた。二日目にはもうベッドから起き上がったも差し支えないほどに回復していたし、食事も普通に取ることができるようになっていた。驚異的だとすらいえる回復力は、エルフの薬を基にした点滴による効果らしい。

「それじゃあ、世話になった」

旅立ちの朝、クライドは荷物を抱えてベッドを整え、エレベーターを使ってエントランスまで降りていた。あの後、マーティンは律儀にもクライドとした約束を覚えていて、ミンイエンのいないところでクライドに貧血の薬と帰りの渡航費を渡してくれた。ミンイエンがこんな風景を見ていたら、仲直りしていると勘違いされるだろうからだ。

「航空券はもった？ タクシー代もそつちの通貨で用意したから大丈夫だよ。研究所から空港までは今日休暇をとってる部下を休日出勤させたから、彼に頼むよ」

「ありがとな」

帰りの分の費用はミンイエンからも貰ってしまったから、返そう

としたがマーティンは『借りはきっちり返す』と頑として言い張った。なので、クライドの財布の中にはアンシエントタウンを出てきた頃よりも少し多い所持金が入っている。

エントランスには仕事を抜けて見送りにきてくれたレンティノーと、喫茶店が定休日で研究所の仕事をしているハビがいた。マーティンは一週間で足が治るはずもなく、それにどうせ見送りになど来るつもりもないだろうからいなかった。セルジとノーチェはそれぞれ仕事が入っているので、昨日のうちに別れを済ませておいた。

「気をつけて帰るのですよ」

「仕事頑張つてね、レンティノー」

ノエルとレンティノーが軽く言葉を交わしていた。その直後に、レンティノーはクライドに深く礼をした。いきなりそんなことをされ、クライドは当然驚いた。

「何だよ？」

「貴方のおかげですよ」

ミンイエンのこと、と小さく囁かれる。クライドは曖昧に微笑んで頷いた。グレンはレンティノーと二言、三言簡単に会話をし、シエリーは柔らかい笑顔で感謝を告げていた。

「時々遊びにおいで。研究所にくるのもいいし、僕のカフェにきてもいい。また会えるのを楽しみにしているよ」

肩に重たい手を寄せられ、振り返るとハビが微笑んでいた。何だか、去年ウエイターをやったときのことを思い出すしぐさだ。

「ありがとうございます。次に会うときには、もう少しハビさんと話したいです」

「嬉しいよ」

一階のエントランスは他の階と違ってちゃんと窓があるから、外を見ればもうミンイエンの部下が車を用意してくれていることがわかった。レンティノーは時計を確認し、窓の外をちらりとみてからクライドに目を向ける。

「準備ができたようですよ。では、私はそろそろ仕事に戻ります。」

クライド、ラジェルナ国に着いたら念のため私の新しい番号に電話を下さい」

頷くと、彼は白衣の裾を翻して歩いていった。アンソニーはレンティノーが見えなくなるまで手を振っていた。レンティノーも、エレベーターのドアが閉まるまで笑顔でこちらに手を振っている。

「じゃあ、僕も行くのかな。クライド、ありがとう。皆もだよ、色々迷惑かけてごめんね」

「ハビさんは謝らなくていいです」

「これも一つの大きな夏の思い出としてとっておいて。色々つらいこともたくさんあっただろうけど、とことん美化してくれて構わないから」

冗談交じりに言われ、思わず笑ってしまふ。ハビはクライドの背中をぽんとたたき、クライドたち全員に向けてあの爽やかな笑顔を向けて手を振った。手を振り返し、クライドはほっとするような寂しいような微妙な気分になっていた。ハビはエレベーターを使わず、階段で上っていった。その背中を、クライドは消えるまで見送っていた。

ハビがいなくなり、見送りはとうとうミンイエンだけになった。

「みんな携帯買ったら、まず最初にクライドから僕の番号聞いて電話してね？」

あまりに真面目にミンイエンがそういうので、グレンがぷつと吹き出した。ミンイエンは笑うなと怒りながらも、何だか楽しそうだった。

「だって僕、君達のこと気に入っちゃったんだ。また色々試作品試してもらいたいし、クロスワードも解いてもらいたいし。あ、ノエルの家には月一くらいの割合で送りつけるから。メールがいい？それとも手紙の方がいいかな」

「のぞむところだよ。メールで来ても手紙で来ても、毎月完璧に解いて送り返すから」

不敵に笑いながら、ノエルは電動車椅子のミンイエンを見下ろす。

二人の天才は、これからも定期的にバトルを繰り広げるらしい。

アンソニーがミンイエンの肩をぽんぽん叩いて注意を引いている。「ねえねえ、街に帰ってから電話していい？」

「勿論！ 僕の会社の番号つてすごいだよ。だってラジエルナとエナークの範囲だったら、どこからかけても通話料無料なんだ」

「すごーい！」

相変わらずの二人だと思う。アンソニーとミンイエンが二人でいると、何だか見ているこちらは凄く和む。雰囲気はやわらかくなつたところで、グレンが口火を切った。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

軽く頷くと、ミンイエンは少し寂しそうにした。シェリーはミンイエンの方を向いて、優しく笑う。

「ミンイエン、ありがとうね。今度は誘拐しないで、ちゃんと招待してよ？」

「ばいばいミンイエン、休暇とったら僕んち来てね」

「楽しみにしているよ、君のクロスワード」

ミンイエンはそれぞれに大きく頷いて、両手で手を振った。そんな子供じみた仕草がミンイエンらしくて良い。

「じゃあ、また会えたら」

「会えたらじゃなくて会うの！ 突然押しかけても追いつかないでね」

「どうかな」

「クライド酷い！」

本気にしてふくれつつらになるミンイエンが面白くて、クライドは思わず笑った。声を上げて笑った。笑いながら、自動ドアをくぐった。背後を振り返れば、ミンイエンはもうふくれつつらを消して満面の笑みになって手を振っていた。彼に背を向けたまま手を振り返し、研究員の車に乗った。

空港にはすぐについたような気がした。研究員に礼を言って車を降りると、彼はひ弱そうな顔に人好きのする笑みを浮かべて帰って

いった。時刻は朝方、この大都會では通勤や通学のラッシュアワーだ。ラジエルナにつくのが午前中になるように、ミンイエンがこの時間帯の便を手配してくれた。

搭乗手続きを済ませれば、スムーズに搭乗できた。アンソニーは乗り物が好きだから、飛行機に乗れることで楽しそうにはしゃいでいた。フライトが始まる。開始数分で、ノエルが眼鏡を外してポケットに入れた。

「どうした？」

「クライド、眠っていいかい」

「え？ ああ」

隣のノエルは疲れたらしく、客室乗務員が持ってきたブランケットを膝にかけてぐっすり寝入ってしまった。隣で寝ている人がいると、何だか自分も暇で眠くなってくる。目をつぶっていると自然に意識が遠のき、次に目を覚ましたのは機内アナウンスの声のせいだった。シートベルトを締めろという指示だ。そろそろ降りる時間らしい。

しかし、まだこれから乗り継ぎがある。首都のヴァル・セイナから、スウェントまで飛ばなければいけないのだ。ミンイエンはその分の搭乗券も用意しておいてくれた。

寝ているノエルを起こし、飛行機を乗り継ぎ、クライドは再び寝入った。今度はノエルのほうが起きていて、降りる頃に起こされた。ここからタクシーでリヴェリナタウンの港まで走れば、サラやブリジットたちに再会できる。乗り場に行けば空いているタクシーは何台もあったから、二対三で別々のタクシーに乗り込んだ。五人でひとつのタクシーに乗るのは少し狭かったのだ。

クライドは、ノエルとシェリーと一緒に乗るかは、コイントスで決まった。グレンとシェリーを二人で乗せれば良いと思ったが、最初にコイントスを提案したのはグレンだったのだ。

港までの道のりはかなり長く感じた。早く着いて欲しくて、クラ

イドはタクシーの窓からリヴェリナに続く道をじっと見ていた。車酔いをしかけたので少し休憩して前を見ていると、海が近づいているのが解った。

「運転手さん、あと何分くらいですか」

「もう少しだよ。急いでいるのかね？」

「楽しみなんです、港につくのが」

シェリーが楽しそうに運転手に話しかけていた。運転手もつられて楽しそうに笑っている。クライドは再び窓の外を眺めた。エアコンの効いた車内を出れば、もう潮の香りが待っているのだろう。どきどきする。

車内の時計を見れば、今はまだ十分に午前中だった。陽気なラジオは、夏休みの宿題に追われる学生からのメッセージを読み上げている。宿題が終わらないなら飛行機にして飛ばして、その飛距離についての自由研究をやったと言えればいいというパーソナリティに、思わず笑ってしまう。

「ついたよ」

「ありがとうございます」

あらかじめ計算してつり銭がないようにしておいた代金を、ノエルが運転手に渡した。クライドはドアが開くなり外に飛び出す。潮風の香りと地面からたちのぼる熱気が嬉しい。

「クライド！ シェリー、ノエルっ」

この暑い港ですつと待っていてくれたようで、遠くからサラが駆け寄ってきた。黒のレースをあしらったスカートから覗く白い足がまぶしい。

「おかえりっ」

ぎゅっと抱きつかれ、思わず後ろに転びそうになる。かと思えばサラはすぐにクライドを離し、笑顔を残して今度はシェリーに抱きつく。シェリーと少し会話をしたあと、サラはためらいがちにノエルの方を向いた。中途半端に上げかけた手を、どうすべきか迷っているらしい。いつもの笑顔を浮かべたノエルは、サラにそっと歩み

寄り、何の躊躇もない自然な動作で彼女を抱きしめた。クライドはシエリーと顔を見合わせ、肩をすくめて笑い合う。

「の、ノエル、そろそろ離して？」

「嫌だよ」

「もう……」

サラは小さくため息をつき、恥ずかしそうに、それでも嬉しそうにノエルの背中に手を回す。ひとつの終りと始まりの予感を感じながら、クライドは微笑んだ。

もう一台のタクシーは数分後に到着し、中からグレンとアンソニーが駆け出してくる。そのときようやくノエルはサラを離し、サラはグレンとアンソニーに駆け寄って数秒ずつくらい彼らをハグし、再会を喜んだ。

「僕たち、帰ってきたんだね」

アンソニーがしみじみと呟いた。クライドもしみじみとうなずいた。入道雲の広がる空とどこまでも続く真つ青な海に、大漁旗をかかげた漁船がちらほら浮いている。時々、漁師達の威勢の良い声があった。遠洋漁業に出向いていった漁師たちを送り出して、自分達は街に残った漁師たちの声だ。

見渡せば、民家の庭にひまわりが咲いていたりした。レイチエルの墓を思い出す。

「そうだな…… ラジエルナだな、この国は」

「もう夏休みも終わっちゃうね」

「ああ」

クライドが一週間寝ていたせいで、今日はもう八月の二十四日だった。三十一日に夏休みは終り、九月一日から新学年の新学期だ。そうすればクライドは、あと一年で卒業になる。卒業後はノエルの母校である国立アンシエント大学に進学し、そこで精神科医を目指すつもりだ。だんだん未来が見えてきた気がする。

しかし、そうすると、来年の今頃は大学生になる準備で忙しい。グレンは本格的に歌手を目指して街を出て行くだろうし、ノエルだ

つて年齢が十八に届くから街を出てリヴェリナあたりの病院で研修医になるかもしれない。そうしたら、全員一緒に海に過ごせるのなんて今年が最後なのだ。

「ブリジットにも無事を伝えなきゃ。そしたら皆、海行かないか」

あの優しい従姉に会って無事を伝え、できれば今晚も泊めてもらって、欲を言えば三日くらいは泊めてもらって、リヴェリナの夏を満喫してから街に帰ろう。海岸沿いに行けばビーチもある。夏休みの終りはそろそろだが、まだ夏は終わらない。

「よおし、いっぱい泳ぐ！」

「よしトニー競争だ、どっちが速いか」

「グレンに決まってるじゃん！」

アンソニーとグレンの会話に笑いながら、クライドも参戦を告げると、ノエルがくすくす笑った。クライドの予想では、水泳バトルに勝つのはノエルだろう。もしかしたら彼は、身体が薄っぺらく筋張っているから水の抵抗が少なくて早く泳げるのかもしれない。

「ねえねえ、海でビーチバレーとかやりたくない？」

「いいね！ チームどうしょっか、シエリーはグレンとね」

「サラは勿論ノエルとでしょ？」

女子二人がそんな会話を始めるので、クライドは歩きながらサラの肩をとんと叩いて注意を引いた。

「でもこういうのって、敵の方が相手をよく見るだろ？」

「そっか！ クライド頭良い、じゃあシエリーはグレンと別チーム」

「っ、それはやだ、あたしグレンと同じチームがいい！」

その衝撃的な発言のせいで隣のグレンが固まっているのを感じ、笑いを堪えながらクライドはノエルの背中をばしんと叩く。ノエルは小さくよろけ、クライドを驚いたように見る。

「聞いたか、ノエル。サラの水着見放題だったさ」

一拍の沈黙の後、アンソニーが一番最初に動きを見せた。

「あはははは！ よかったねノエルっ」

「っ、ひどい！ クライド、そんな」

笑い転げるアンソニーを止めようとしながら、サラは顔を赤くしてクライドをばしばし叩く。クライドはアンソニーと一緒に笑いながら、久しぶりに開放感を感じていた。

どこまでも透明な空気と、蝉の鳴き声と、目に映る鮮やかな色合い。全てがああ白すぎる空間にはなかったものだし、仲間達が全員揃って騒げる最後の夏休みに相応しいものだと思った。

きっとクライドは何年経っても、この夏の出来事を忘れはしないだろう。色鮮やかにきらめく幻想のような日々を、クライドはとても愛しく感じていた。

全てのものには必ず終りがくるのだから、それならば続いている今を思いっきり楽しもう。いずれくる終焉おわりのことなんて、今は考えなくて良い。今は仲間達の隣にいられることが最高で最上の幸せで、これ以上は何も要らないのだから。

この関係がいつまでも続けば良い。いや、続かせてみせる。というか、終わる気なんてしない。きっと青年になっても老人になっても、皆で一緒にいられる。

「ありがとう」

呟いた言葉に、誰が気づいただろうか。誰かが微笑みを返してくれただろうか。そんなことを考えながら、クライドは仲間達より一歩先を歩いた。

空は青くどこまでも高く広がり、街は鮮やかな色彩にあふれ、仲間達は笑顔に満ちていた。平和という概念に形をつけるとすれば、まさに今この状態になるのだとクライドは思っている。

クライドは大きく潮風を吸い込み、口許に笑みを浮かべた。どんな温度を増す炎天下だが、こんな中を友人達と走り回るのも悪くはない。ブリジットの店のある商店街まではあと少しだ。

よし、行ってしまえ。思いっきりはしゃいで、羽目を外してしまえ。終わりかけの青春の、今がきつとクライマックスだ。

漁師たちの声や煌く波を背に、クライドは走り出した。

完

最終話 平和ということ（後書き）

魔幻の鐘第二章、完結いたしました。

そして、魔幻の鐘は、この章をもって完結です。全話合計で一三九話の、生涯で一番長い小説がようやく今日完結しました。

本当は二年間で終わらせる予定だったのですが、なんと一年も延びてしまいました……。というか、書き始めた当初に友人へ送りつけたメールには『一年で完結させる』なんて恐ろしく無茶なことが書いてありました。途中にブランクがありすぎて、何だか作品が大変なことになっています。

思えば連載当初はまだ執筆暦が二年ほどで、長編小説なんて一作しかかき上げたことがなかった時代です。読み返して見ると文章が古すぎて本当に恥ずかしくなりますので、これから修正作業にうつりたいと思います……（笑）

お読みくださって本当にありがとうございました。三年間、応援してくださった方の声が本当に励みになってきました。次の作品でまたお会いできることを願っています。

二〇〇八年 四月二十四日

水島佳頼

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7662a/>

魔幻の鐘 第二章

2010年10月8日13時28分発行